岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　90

山陽自動車道建設に伴う発掘調査 9

三手遺跡
津寺遺跡

（本　文）

1994・3

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　90

山陽自動車道建設に伴う発掘調査 9

三手遺跡
津寺遺跡

（本　文）

1994・3

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

岡山県教育委員会

土筆山調査区全景

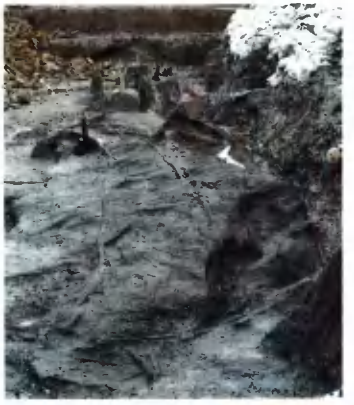
1. 丸田ⅣA区土壙墓－6（北から）

2. 丸田ⅣA区土壙墓－6鍛冶道具（南東から）

1. 丸田ⅣA区出土陶馬

2. 丸田ⅣA区包含層出土銙帯（蛇尾）

3. 丸田ⅣB区出土緡銭（宋銭M 55）



1. 野上田5区
護岸施設

2. 野上田6区
土器溜り

3. 墨書土器「倉」

4. 墨書土器「上厨」

序

山陽自動車道は、吹田を起点とし、瀬戸内海の沿岸の主要都市を結び、下関市に至る総延長約487kmの高速自動車国道であります。岡山県においては昭和63年３月１日笠岡インター～早島インターまでの供用開始に始まり、平成５年12月16日には県内全線の開通ができました。広島県内も平成５年10月に全線開通し、兵庫県の一部を残すだけとなりました。

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所は山陽自動車道の建設に伴い、その予定路線敷地内にある埋蔵文化財について、岡山県教育委員会と協議し、記録保存のため、発掘調査を実施してまいりました。

昭和63年度から平成元年度にかけては、特に遺構密度の高い岡山市所在の三手遺跡・津寺遺跡の発掘調査に取り組まれ、調査期間の短いなか大変なご苦労をおかけしました。

本書は、こうして成った三手遺跡・津寺遺跡の発掘調査の記録であり、これが埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるとともに、教育・学術のため広く活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は、岡山県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

平成６年３月

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

所長　佐伯博三

序

山陽自動車道は、瀬戸内圏域を結ぶ東西交通の大動脈であり、建設後の文化的・経済的波及効果については図り知れないほど大きいものがあると期待され、各方面から早期の建設が強く要望されていたところであります。

この県政の最重点施策である山陽自動車道の建設に先立ち、岡山県教育委員会では、昭和47年度に実施したルート周辺における埋蔵文化財包蔵地の分布調査をもとに、繰り返し協議・調整をはかってまいりましたが、現状のまま保存することが困難な遺跡もまた数多く存在しました。こうした遺跡についてはやむなく記録保存の措置を講じることとし、その成果についてはすでに8冊の報告書として刊行してまいりました。

このたび発刊いたします第9分冊には，岡山市に所存する三手遺跡・津寺遺跡の2遺跡を収載しました。三手遺跡では、古墳時代の竪穴住居や古代～中世の墓・水田跡を検出しています。また津寺遺跡については、この遺跡の北端で検出した古代～中世の集落・墓・水田跡を報告しています。津寺遺跡に関しては今後も引き続いて報告することにしていますが、本書でも学術的に貴重な成果を多数収載することができました。この報告書が今後の地方史解明の一資料として、また埋蔵文化財保護の一助として活用されることを希望してやみません。

発掘調査にあたっては、高速自動車国道山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員の各先生方から種々のご教示とご指導を得、また日本道路公団広島建設局、同岡山工事事務所をはじめ地元の関係各位からも、常に倍するご協力を賜りました。記して深甚の謝意を表する次第であります。

平成6年3月

岡山県教育委員会

教育長　森　崎　岩之助

例　言

1．本書は、岡山県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて実施した山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターが実施した。

3．本書収載の三手遺跡・津寺遺跡の調査は、昭和62年１～２月に第一次、昭和63年４月～平成２年２月に全面調査を実施した。

4．発掘調査ならびに報告書の作成にあたっては、下記の方々に「高速自動車国道山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱した。委員各位から終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

岡山理科大学教授	鎌木義昌	岡山県遺跡保護調査団	高見周夫
岡山県文化財保護審議会委員	水内昌康	岡山大学教授	稲田孝司
山陽女子高校教諭	西川　宏	岡山市教育委員会	根木　修
倉敷考古館	間壁葭子	岡山大学助手	土井基司

平成３年３月まで　岡山県遺跡保護調査団　西岡憲一郎
岡山大学助教授　新納　泉

5．発掘調査の担当は以下の通りである。

昭和61年１～２月	（井上　弘・浅倉秀昭・大智　浩）	三手遺跡・津寺遺跡
昭和63年４月～平成元年３月	（中野雅美・福田計治・後藤信義）	三手遺跡
	（二宮治夫・小田卓生・亀山行雄）	三手遺跡
	（山磨康平・吉田正士・大橋雅也）	三手遺跡
	（正岡睦夫・小柴充明・川崎　肇）	三手遺跡・津寺遺跡
	（松本和男・垣内一也・佐守　学）	津寺遺跡
	（岡田　博・井上　篤・弘田和司）	津寺遺跡
	（浅倉秀昭・栗尾昭和）	津寺遺跡
平成元年４月～平成２月１月	（二宮治夫・林　久夫・源　俊二）	津寺遺跡
	（岡田　博・井上　篤・波多野宏和）	津寺遺跡

6．各専門分野における鑑定・分析等については下記の方々および機関から寄稿および教示を得た。

人骨鑑定　京都大学名誉教授　池田次郎　　鉄滓鑑定　新日本製鉄　大澤正己

獣骨鑑定	早稲田大学	金子浩昌	年代測定　日本アイソトープ協会
石材鑑定	吉備国際大学	妹尾　護	樹種鑑定　岡山商科大学　畔柳　鎮
陶磁器鑑定	九州陶磁文化館	大橋康二	炭化穀物同定　東京大学　松谷暁子

本報告書掲載遺構名は、発掘調査中便宜的に使用した名称と多少異なっている。付載（鑑定・分析）の遺構各は、調査中の旧名称であり、（　）で後に付加したものが本報告書掲載遺構名である。なお、その表に使用しているものは旧名称のままである。

7．報告書の作成は、平成4年4月～平成5年3月津寺事務所において、正岡睦夫・浅倉秀昭・古谷野寿郎・中野雅美・澤山孝之・柴田英樹が担当した。文責は、文末に記した。

8．遺物の整理・実測・浄写・拓本・遺構の浄写は津寺事務所において、上記6名の指示で補助職員・整理作業員が行なったものが多い。

9．報告書で用いる高度値は海抜高であり、方位は原則的に真北である。

10．報告書に掲載の縮尺率は、それぞれに示した。土器は原則的に1/4である。

11．報告書で用いる時代区分は、一般的な政治区分に準拠し、それを補うため文化史区分と世紀を併用した。

12．報告書に掲載した第1章第1図は、建設省国土地理院のものを使用した。

13．報告書に関係する遺物・写真・実測原図・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

総　目　次

Ⅰ．序説…… 1
Ⅱ．環境…… 7
Ⅲ．発掘調査報告……11

1．三手遺跡

第1章　発掘調査の経緯……13
第1節　発掘調査の経緯と経過……13
第2節　調査の方法と日誌抄……15
第2章　発掘調査の概要……17
第1節　各調査区の概要……17
第2節　向原Ⅰ調査区……19
1．弥生・古墳時代の遺構・遺物…19
2．古代・中世の遺構・遺物……30
第3節　向原Ⅱ調査区……50
1．調査区の概要……50
2．弥生時代の遺構・遺物……52
3．古墳時代の遺構・遺物……52
4．古代・中世の遺構・遺物……54
第4節　向原Ⅲ・沼・丸川調査区……64
1．発掘調査の経過と方法……64
2．基本層準……64
3．中世・近世の遺構・遺物……66
第5節　砂田調査区……76
1．発掘調査の経過と方法……76
2．基本層準……76
3．近世の遺構・遺物……79
第3章　まとめ……81
第1節　微高地……81
第2節　水田……82

2．津寺遺跡

第1章　調査の経緯と経過……93
第2章　発掘調査の概要…… 95
第1節　土筆山調査区…… 95
1．土筆山調査区の概要…… 95
2．古代以前の遺構・遺物……102
3．中世・近世の遺構・遺物……106
4．小結……241
第2節　丸田調査区……245
1．発掘調査の概要……245
2．検出遺構・出土遺物の概要…246
3．各調査区の概要……255
4．小結……415
第3節　野上田調査区……430
1．野上田調査区の概要……430
2．弥生・古墳時代の遺構・遺物·432
3．古代の遺構・遺物……437
4．中世の遺構・遺物……455
5．近世の遺構・遺物……468
6．小結……469
第3章　調査のまとめ……475
第1節　三手・津寺遺跡の性格……475
第2節　旧河道右岸の構造……476

付　　編

1．山陽自動車道建設工事に伴う発掘調査による岡山工事区出土の人骨―平安時代人骨
……池田次郎
2．同―中世人骨……池田次郎
3．年代測定結果報告
……日本アイソトープ
4．津寺遺跡丸田調査区出土植物遺残
……松谷暁子

5．岡山県津寺遺跡（土筆山・丸田地区）
出土の動物遺体……金子浩昌

6．津寺遺跡丸田Ⅳ区・土筆山３・５区出土製鉄関連遺物の金属学的調査……大澤正己

Ⅰ・Ⅱ図目次

第１図　路線と周辺地形図（1/2.5万）…… 1
第２図　調査区分図（1/1万）…… 5
第３図　調査遺跡位置図（1/20万）…… 8
第４図　遺跡分布図（1/1.5万）…… 9

Ⅰ・Ⅱ表目次

発掘調査区一覧表…… 4

巻頭カラー目次

図版１　土筆山調査区全景
図版２　１．丸田ⅣＡ区土壙墓－６
　　２．同鍛冶道具
図版３　１．丸田ⅣＡ区出土陶馬
　　２．同包含層出土鉈尾
図版３　３．ⅣＢ区出土緡銭
図版４　１．野上田５区護岸施設
　　２．６区土器溜り
　　３．墨書土器「倉」
　　４．同「上厨」

Ⅲ・１．三手遺跡図目次

第１図　遺跡位置と周辺地形図（1/5000）……14
第２図　調査区位置図（1/3000）……18
第３図　弥生～古墳時代全体図（1/400・1/1500）……20
第４図　断面図(1)(1/80)(第3図A～A')…21
第５図　断面図(2)(1/80)(第3図B～B')…22
第６図　断面図(3)(1/100)(第3図C～C')…23
第７図　基盤層（礫層）出土遺物……24
第８図　竪穴住居－１（1/80）……25
第９図　竪穴住居－１出土遺物……26
第10図　溝－２（1/30）出土遺物……27
第11図　溝－３（1/30）……27
第12図　土器溜り（1/30）……28
第13図　土器溜り出土遺物……29
第14図　中世全体図（1/400）……31
第15図　建物－１（1/80）……32
第16図　建物－２（1/80）……33
第17図　建物－３（1/80）……34
第18図　土壙墓－１（1/30）・出土遺物…35
第19図　土壙墓－２（1/30）・出土遺物…35
第20図　土壙墓－３（1/30）・出土遺物…36
第21図　土壙墓－４（1/30）……36
第22図　土壙墓－５（1/30）……36
第23図　土壙墓－６（1/30）……37
第24図　土壙墓－７（1/30）……37
第25図　土壙墓－８（1/30）……37
第26図　土壙墓－９（1/30）……37

第27図　土壙墓－10（1/30）……38
第28図　土壙墓－11（1/30）……38
第29図　土壙墓－12（1/30）……38
第30図　土壙－1（1/30）……38
第31図　土壙－2（1/30）……39
第32図　土壙－3（1/30）……39
第33図　土壙－3出土遺物……40
第34図　土壙－4（1/30）……40
第35図　土壙－4出土遺物……41
第36図　土壙－5（1/40）・出土遺物……42
第37図　土壙－6（1/40）・出土遺物……42
第38図　土壙－7（1/40）・出土遺物……43
第39図　土壙－8（1/30）……44
第40図　落ち込み（1/30）・出土遺物……44
第41図　溝－4（1/30）・出土遺物……45
第42図　溝－5（1/30）・出土遺物……46
第43図　溝－6（1/30）・出土遺物……46
第44図　溝－7（1/30）……46
第45図　溝－8（1/30）……47
第46図　礫群（1/30）・出土遺物……47
第47図　包含層出土遺物（1）……48
第48図　包含層出土遺物（2）……49
第49図　砂礫層上面地形図（1/250）……50
第50図　砂層出土遺物……51
第51図　粘質砂層中出土遺物平・断面図（1/30）……52
第52図　粘質砂層中出土遺物……53
第53図　水田畦畔全体図（左…古代、右…中世）（1/1000）……54
第54図　古代・近世水田層・包含層出土遺物……55
第55図　中世建物・土壙等全体図（1/400）……56
第56図　建物－4（上）・5（下）平・断面図（1/80）……57
第57図　土壙－8・9・10・11・12・13 平・断面図（1/30）……58
第58図　土壙－14（上）・15（左下）・16（右下）平・断面図（1/30）……59
第59図　土壙－17平・断面図（1/30）……60
第60図　土壙－18平・断面図（1/30）……61
第61図　土壙－19・20・21平・断面図（1/30）……62
第62図　包含層出土遺物……63
第63図　向原Ⅲ・沼・丸川調査区基本層準柱状図……65
第64図　溝－9断面図（1/80）・出土遺物……66
第65図　中世水田1（1/800・1/1600）……67
第66図　中世水田2（1/800・1/1600）……69
第67図　近世水田（1/800・1/1600）……70
第68図　向原Ⅲ－3区　A－B断面（1/80）……71
第69図　向原Ⅲ・沼・丸川調査区出土遺物……72
第70図　出土古銭（1/2）……73
第71図　土錘（1/3）……73
第72図　砂田調査区基本層準模式図……77
第73図　近世水田（1/800）……78
第74図　出土遺物（1）……79
第75図　出土遺物（2）……79
第76図　三手遺跡水田の広がり（1/3000）……84

三手遺跡図版目次

図版１　１．向原Ⅰ区弥生・古墳時代全景（北西から）
　　２．竪穴住居－１（南東から）
図版２　１．溝－２・３（北西から）
　　２．土器溜り（南から）
図版３　１．向原Ⅰ区中世全景(北から)
　　２．建物－２・３周辺(西から)
図版４　１．溝－４周辺（北から）
　　２．建物－１（東から）
図版５　１．建物－２・３(西北西から)
　　２．土壙墓－１（北から）
図版６　１．土壙墓－３（西から）
　　２．土壙墓－４（東南東から）
図版７　１．土壙墓－９（東から）
　　２．土壙墓－11（東から）
図版８　１．土壙－３（南から）
　　２．土壙－６（南から）
図版９　１．溝－４遺物検出状況（西から）
　　２．礫群出土状況（南から）
図版10　竪穴住居－１出土遺物
図版11　竪穴住居－１・溝－１・土器溜り出土遺物
図版12　土器溜り出土遺物
図版13　土壙墓・土壙出土遺物
図版14　土壙・落ち込み出土遺物
図版15　溝・包含層出土遺物
図版16　１．土壙・柱穴等完掘（北東から）
　　２．土壙完掘（北々東から）
図版17　１．中世水田（１）
　　２．同上　　（２）
　　３．古代水田（１）
　　４．同上　　（２）
　　５．同上　　（３）および溝
　　６．同上　　（４）および溝
　　７．溝・土壙完掘（南東から）
　　８．粘質砂層中遺物出土状況（南東から）
図版18　１．粘質砂層中遺物出土状況（北東から）
　　２．同上（近影）（西から）
図版19　粘質砂層中出土遺物
図版20　古代・近世水田・包含層出土遺物
図版21　１．向原Ⅲ－２区中世水田(西から)
　　２．向原Ⅲ－２区中世水田(東から)
図版22　１．向原Ⅲ－２区溝－９(西から)
　　２．砂田区近世水田・畝状溝（南東から）

三手遺跡表目次

表－１　向原Ⅰ調査区銭貨一覧表……49
表－２　向原Ⅲ・沼・丸川調査区銭貨一覧表……73
表－３　向原Ⅲ・沼・丸川調査区土錘一覧表……74
表－４　砂田調査区銭貨一覧表……80
表－５　土器観察表……85

Ⅲ・2．津寺遺跡図目次

津寺遺跡発掘前地形図・調査区分図（1/5000）……94

津寺遺跡土筆山調査区図目次

第1図　調査区分図……95
第2図　5区土層断面図（1/40）……97
第3図　土筆山1・2区全体図(1/500)‥98
第4図　土筆山3・4区全体図(1/500)‥99
第5図　土筆山5・6区全体図(1/500)‥100
第6図　土筆山6～10区全体図(1/500)‥101
第7図　4区上層水田（1/400）……102
第8図　4区下層水田（1/400）……102
第9図　6・7・10区上層水田(1/500)‥104
第10図　10区下層水田（1/400）……104
第11図　包含層出土遺物……105
第12図　建物－1（1/80）……106
第13図　建物－2（1/80）・出土遺物‥‥107
第14図　建物－3（1/80）……107
第15図　建物－4（1/80）……108
第16図　建物－5（1/80）……108
第17図　5区建物配置図（1/400）……109
第18図　建物－6（1/80）・出土遺物‥‥110
第19図　建物－7（1/80）・出土遺物‥‥111
第20図　建物－8（1/80）・出土遺物‥‥112
第21図　建物－9（1/80）……113
第22図　建物－10（1/80）……113
第23図　建物－11（1/80）……114
第24図　建物－12（1/80）……114
第25図　建物－13（1/80）……115
第26図　建物－14（1/80）……115
第27図　建物－15（1/80）……116
第28図　建物－16（1/80）……116
第29図　建物－17（1/80）……116
第30図　建物－18（1/80）……117
第31図　建物－19（1/80）……117
第32図　建物－20（1/80）……118
第33図　建物－21（1/80）……118
第34図　建物－22（1/80）……118
第35図　建物－23（1/80）……119
第36図　建物－24（1/80）……120
第37図　建物－25（1/80）・出土遺物‥‥120
第38図　建物－26（1/80）……121
第39図　柵－1（1/80）……121
第40図　建物－27（1/80）……122
第41図　建物－28（1/80）……123
第42図　建物－29（1/80）……123
第43図　建物－30（1/30）・出土遺物‥‥124
第44図　建物－31（1/80）・出土遺物‥‥125
第45図　建物－32（1/80）……125
第46図　建物－33（1/80）……125
第47図　井戸－1（1/30）・出土遺物‥‥126
第48図　井戸－2（1/30）……126
第49図　井戸－3（1/30）・出土遺物‥‥127
第50図　土壙－1（1/30）・出土遺物‥‥128
第51図　土壙－2（1/30）……129
第52図　土壙－3（1/30）……129
第53図　土壙－4（1/30）……129
第54図　土壙－5（1/30）……130
第55図　土壙－6（1/30）・出土遺物‥‥131
第56図　土壙－7（1/30）・出土遺物‥‥131

第57図　土壙－８（1/30）・出土遺物……131
第58図　土壙－９（1/30）……132
第59図　土壙－10（1/30）……132
第60図　土壙－11（1/30）……133
第61図　土壙－12（1/30）・出土遺物……133
第62図　土壙－13（1/30）・出土遺物……134
第63図　土壙－14（1/30）・出土遺物……135
第64図　土壙－15（1/30）・出土遺物……135
第65図　土壙－16（1/30）・出土遺物……136
第66図　土壙－17（1/30）・出土遺物……136
第67図　土壙－18（1/30）・出土遺物……137
第68図　土壙－19（1/30）・出土遺物……137
第69図　土壙－20（1/30）・出土遺物……138
第70図　土壙－21（1/30）・出土遺物……138
第71図　土壙－22（1/30）・出土遺物……138
第72図　土壙－23（1/30）・出土遺物……139
第73図　土壙－24（1/30）・出土遺物……139
第74図　土壙－25（1/30）・出土遺物……140
第75図　土壙－26（1/30）・出土遺物……140
第76図　土壙－27（1/30）・出土遺物……141
第77図　土壙－28（1/30）……141
第78図　土壙－29（1/30）・出土遺物……142
第79図　土壙－30（1/30）・出土遺物……143
第80図　土壙－30・出土遺物（153～166、M8上層・167～182、S2下層）……144
第81図　土壙－31（1/30）・出土遺物……145
第82図　土壙－32（1/30）・出土遺物……146
第83図　土壙－33（1/30）・出土遺物……147
第84図　土壙－34（1/30）……147
第85図　土壙－35（1/30）・出土遺物……148
第86図　土壙－36（1/30）……149
第87図　土壙－36出土遺物……150
第88図　土壙－37（1/30）・出土遺物……151
第89図　土壙－38（1/30）・出土遺物……151
第90図　土壙－39（1/30）・出土遺物……152
第91図　土壙－40（1/30）・出土遺物……152
第92図　土壙－41（1/30）・出土遺物……152
第93図　土壙－42（1/30）・出土遺物……153
第94図　土壙－43（1/30）・出土遺物……154
第95図　土壙－44（1/30）・出土遺物……154
第96図　土壙－45（1/30）・出土遺物……155
第97図　土壙－46（1/30）……155
第98図　土壙－46出土遺物……156
第99図　土壙－47（1/30）・出土遺物……157
第100図　土壙－48（1/30）・出土遺物‥157
第101図　土壙－49（1/30）・出土遺物‥158
第102図　土壙－50（1/30）・出土遺物‥158
第103図　土壙－51（1/30）……159
第104図　土壙－52（1/30）……160
第105図　土壙－53（1/30）……160
第106図　土壙－54（1/30）・出土遺物‥160
第107図　土壙－55（1/30）……161
第108図　土壙－56（1/30）……161
第109図　土壙－57（1/30）……162
第110図　土壙－58（1/30）・出土遺物‥162
第111図　土壙－61（1/30）……162
第112図　土壙－60（1/30）……163
第113図　土壙－62（1/30）・出土遺物‥164
第114図　土壙－63（1/30）・出土遺物‥164
第115図　土壙－64（1/30）……165
第116図　土壙－65（1/30）……165
第117図　土壙－66（1/30）……165
第118図　炉跡－１（1/30）……165
第119図　中世墓－１（1/30）・出土遺物……166

第120図　中世墓－2 (1/30)・出土遺物……167
第121図　中世墓－3 (1/30)・出土遺物……168
第122図　中世墓－4 (1/30)・出土遺物……169
第123図　中世墓－5 (1/30) ……170
第124図　中世墓－5出土遺物……171
第125図　中世墓－6 (1/30)・出土遺物……172
第126図　中世墓－7 (1/30)・出土遺物……173
第127図　中世墓－8 (1/30) ……173
第128図　中世墓－9 (1/30)・出土遺物……174
第129図　中世墓－11(1/30)・出土遺物……175
第130図　中世墓－12 (1/30) ……175
第131図　中世墓－13 (1/30) ……176
第132図　中世墓－14(1/30)・出土遺物……176
第133図　中世墓－15 (1/30) ……177
第134図　中世墓－16 (1/30)・出土遺物・177
第135図　中世墓－17 (1/30) ……178
第136図　中世墓－18(1/30)・出土遺物……178
第137図　溝－1土層断面図 (1/40) ……179
第138図　溝－2土層断面図 (1/40) ……179
第139図　溝－3・9土層断面図(1/60)‥180
第140図　溝－1出土遺物……181
第141図　溝－3出土遺物……182
第142図　溝－3出土遺物……183
第143図　溝－3出土遺物……184
第144図　溝－3出土遺物……185
第145図　溝－3出土遺物……185
第146図　溝－4・5断面図 (1/30) ……186
第147図　溝－6断面図 (1/30) ……186
第148図　溝－7断面図 (1/30) ……186
第149図　溝－8断面図 (1/30) ……186
第150図　溝－9断面図 (1/30) ……186
第151図　溝－3出土遺物……187
第152図　溝－4出土遺物……187
第153図　溝－5出土遺物……187
第154図　溝－6出土遺物……188
第155図　溝－8出土遺物……188
第156図　溝－10 (1/30)・出土遺物……189
第157図　溝－9断面図 (1/30) ……190
第158図　溝－11断面図 (1/30) ……190
第159図　溝－11断面図 (1/30) ……190
第160図　溝－12断面図 (1/30) ……190
第161図　溝－12・9・13断面図(1/50) ……191
第162図　溝－9出土遺物……192
第163図　溝－9出土遺物……193
第164図　溝－11出土遺物……194
第165図　溝－11・12・14出土遺物……195
第166図　溝－12出土遺物(1)……196
第167図　溝－12出土遺物(2)……197
第168図　溝－13断面 (1/30) ……198
第169図　溝－13～16出土遺物……198
第170図　土器だまり－1 (1/30)・出土遺物
……199
第171図　土器だまり－2出土遺物(1)……200
第172図　土器だまり－2出土遺物(2)……201
第173図　土器だまり－2～4出土遺物
……202
第174図　土器だまり－5出土遺物(1)……203
第175図　土器だまり－5出土遺物(2)……204
第176図　土器だまり－5出土遺物(3)……205
第177図　土器だまり－5出土遺物(4)……206
第178図　絵画土器……207
第179図　1・2区包含層出土遺物……208
第180図　1・1A・2区包含層出土遺物……209
第181図　1・1A・2区包含層出土遺物……210

第182図　4a・4b区包含層出土遺物……211
第183図　4a・4b区東包含層出土遺物……212
第184図　4b区包含層出土遺物……213
第185図　3・4c区包含層出土遺物……214
第186図　5区柱穴内出土遺物……215
第187図　5区包含層出土遺物(1)……216
第188図　5区包含層出土遺物(2)……217
第189図　5区包含層出土遺物(3)……218
第190図　5区包含層出土遺物(4)……219
第191図　6～9区包含層出土遺物……220
第192図　1・2区出土遺物（瓦）……221
第193図　4・9区出土遺物（瓦）……222
第194図　5区出土遺物（土製品）……223
第195図　1・2・4・5・8・10区出土遺物（土製品）……224
第196図　1・2・4b東区出土遺物(石器)‥225
第197図　4a・4b・8・10区出土遺物（石製品）……226
第198図　5区出土遺物（石製品）……226
第199図　5区出土遺物（石製品）……227
第200図　1・2・4・5区出土遺物(鉄製品)‥‥228
第201図　1・2区出土遺物（銅銭）……229
第202図　4区出土遺物（銅銭）……229
第203図　5区出土遺物（銅銭）……230
第204図　遺構略図（1/1500）……231

津寺遺跡土筆山調査区図版目次

図版23　1．土筆山建物－4（東から）
2．建物－1（西から）
図版24　1．建物－5（北から）
2．4b東区全景（建物・柵・土器溜り）（北から）
図版25　1．建物－7・炉跡－1(南から)
2．4b東区炉跡－1（南から）
図版26　1．5区東部全景（南から）
2．5区西部全景（南から）
図版27　1．5区東部遺構全景（南東から）
2．5区東部遺構全景（北から）
図版28　1．溝－9・11・12付近(北東から)
2．溝－9・11・12付近(北東から)
図版29　1．建物－21（上）・20（下）（北東から）
2．建物－23（上）・24（下）（北東から）
図版30　1．建物－9～12・柵1（北東から）
2．建物－10～12（北東から）
図版31　1．建物－15（南東から）
2．建物－18（東から）
図版32　1．建物－6（南から）
2．建物－8（東から）
3．建物－14（北東から）
図版33　1．建物－21（南から）
2．建物－24（南東から）
3．建物－25（南西から）
図版34　1．建物－6（上）・8（下）（東から）
2．建物－15～18（北東から）
図版35　1．建物－6～8（東から）
2．建物－9（北東から）

図版36　1．建物－29(左)・28(右)(北から)
　　2．建物－30（北から）
図版37　1．建物－27（南から）
　　2．建物－34（左）・35（右)、中世墓－19（北西から）
図版38　1．土壙－14（南から）
　　2．土壙－14（南東から）
図版39　1．土壙－15（南から）
　　2．土壙－18（東から）
　　3．土壙－27（東から）
図版40　1．土壙－30（西から）
　　2．土壙－30土層断面（東から）
図版41　1．土壙－32土層断面（西から）
　　2．同上掘り上げ後(西から)
図版42　1．土壙－43（南西から）
　　2．土壙－48（北西から）
図版43　1．土壙－53（北から）
　　2．井戸－1（南西から）
図版44　1．中世墓－1（北から）
　　2．中世墓－2（東から）
図版45　1．中世墓－3（北西から）
　　2．中世墓－4（南西から）
図版46　1．中世墓－5（南西から）
　　2．中世墓－6（南西から）
図版47　1．中世墓－7（北東から）
　　2．同完掘（北東から）
図版48　1．中世墓－8（北から）
　　2．土壙－7（中世墓？）（西から）
図版49　1．中世墓－11（南西から）
　　2．中世墓－12（北から）
図版50　1．中世墓－14（東から）
　　2．同上下部（東から）
図版51　1．中世墓－15（南東から）
　　2．中世墓－16（西から）
図版52　1．中世墓－17（北西から）
　　2．中世墓－18(南東から)
図版53　1．溝－2（北から）
　　2．同上断面（北から）
図版54　1．4a区南東部全景(西から)
　　2．4a区堀状遺構土層断面（南から）
図版55　1．溝－3（手前）・9（向こう側）（北から）
　　2．溝－3土層断面（南西から）
図版56　1．溝－11（北から）
　　2．溝－11（北東から）
図版57　1．溝－12（南から）
　　2．溝－9（南西から）
図版58　1．溝－10（南西から）
　　2．溝－3（南東から）
図版59　1．溝－9断面（南から）
　　2．溝－9断面（南から）
　　3．溝－9断面（東から）
　　4．溝－11断面（北から）
　　5．溝－11断面（西から）
　　6．溝－12断面（東から）
　　7．溝－12断面（東から）
　　8．溝－12断面（東から）
図版60　1．土器だまり－5（北東から）
　　2．土器だまり－5（南西から）
図版61　1．炉壁(？)出土状況(東から)
　　2．5区土層断面(南西から)

図版62　1．4a区古代～中世水田畦畔(北から)
2．4b東区古代～中世水田畦畔(西から)
図版63　1．4a区古代水田畦畔（北から）
2．6・7区古代～中世水田畦畔（南から）
図版64　1．10区島状高まり（西から）
2．10区島状高まりから水田にかけての土層断面（東壁）（西から）
図版65　1．10区古代水田畦畔（南から）
2．10区同水田畦畔土層断面（東壁）（西から）
図版66　5区土壙・柱穴内遺物出土状況
図版67　中世墓－1・5出土遺物
図版68　出土遺物(1)
図版69　出土遺物(2)
図版70　出土遺物(3)
図版71　5区出土遺物(1)
図版72　5区出土遺物(2)
図版73　5区出土遺物(3)
図版74　土筆山調査区調査風景

津寺遺跡土筆山調査区表目次

表－1　副葬品一覧表……233
表－2　津寺遺跡土筆山調査区遺構番号新旧対照表……235
表－3　津寺遺跡土筆山調査区土製品一覧表……237
表－4　津寺遺跡土筆山調査区石製品一覧表……239
表－5　津寺遺跡土筆山調査区金属器一覧表……240
表－6　津寺遺跡土筆山調査区銅銭一覧表……242

津寺遺跡丸田調査区図目次

第1図　発掘調査区設定図(1/1500)……246
第2図　古代低位部・中世低位部（1/1000）……247
第3図　丸田調査区古代遺構配置図(1)（1/500）……248
第4図　丸田調査区古代遺構配置図(2)（1/500）～折り込み～……249
第5図　丸田調査区中世遺構配置図（1/500）～折り込み～……251
第6図　丸田調査区近世遺構配置図（1/500）……253
第7図　Ⅰ～Ⅲ区古代遺構配置図（1/300）……257
第8図　Ⅰ～Ⅲ区中世遺構配置図（1/300）……258
第9図　Ⅰ区土層断面図（1/60）……259
第10図　微高地出土遺物……260
第11図　溝－1土層断面図（1/60）・出土遺物……261

第12図　溝－1出土遺物(2)……262
第13図　建物－1（1/80）……262
第14図　土壙－1（1/30）……263
第15図　土壙－2（1/30）……263
第16図　Ⅰ区包含層出土遺物……264
第17図　Ⅰ区低位部水田断面図(1/80)…265
第18図　水田層出土遺物……265
第19図　柱穴（P34）出土遺物……266
第20図　建物－2（1/80）……267
第21図　柱穴（P-31、1/30）……267
第22図　包含層・柱穴出土遺物……267
第23図　柱穴出土遺物……267
第24図　ⅠE区検出柱穴（1/30）……268
第25図　ⅠE区柱穴出土遺物……268
第26図　ⅠE区包含層出土遺物……268
第27図　土壙－3（1/30）……269
第28図　土壙－4（1/30）・出土遺物…269
第29図　土壙－5（1/30）……269
第30図　土壙－6（1/30）・出土遺物…270
第31図　土壙－7（1/30）・出土遺物…270
第32図　土壙－8～11（1/30）……271
第33図　土壙墓－1(1/30)・出土遺物…272
第34図　土壙墓－2(1/30)・出土遺物…272
第35図　集石遺構－1（1/30）……273
第36図　集石遺構－1出土遺物……274
第37図　溝－2断面図(1/30)・出土遺物‥275
第38図　溝－3断面図（1/30）……275
第39図　溝－4断面図（1/30）……275
第40図　溝－5断面図（1/30）……275
第41図　低位部水田断面図（1/100）・出土遺物……276
第42図　丸田Ⅰ農区土層断面図(1/30)…277
第43図　建物－3（1/80）……278
第44図　丸田Ⅰ農区柱穴（1/30）・出土遺物……279
第45図　丸田Ⅰ農区柱穴出土遺物……280
第46図　土壙－12（1/60）・出土遺物…281
第47図　土壙－13（1/30）・出土遺物…282
第48図　土壙－13出土遺物……283
第49図　土壙－14（1/30）……284
第50図　土壙－15（1/30）・出土遺物…284
第51図　土壙－16（1/30）・出土遺物…284
第52図　土壙－17～21（1/30）……285
第53図　土壙－22（1/30）・出土遺物…286
第54図　土壙－23（1/30）・出土遺物…287
第55図　土壙－24～27（1/30）……287
第56図　土壙－28・29（1/30）……288
第57図　土壙－30（1/30）……289
第58図　土壙－31・32（1/30）……290
第59図　土壙－33（1/30）・出土遺物…291
第60図　集石遺構－2（1/30）……292
第61図　溝－6出土遺物……292
第62図　溝－6～10断面図（1/30）……292
第63図　溝－7出土遺物……293
第64図　溝－9出土遺物……293
第65図　Ⅰ農区柱穴・包含層出土遺物…294
第66図　丸田Ⅱ区北壁土層断面図（1/60）……295
第67図　丸田Ⅱ区古代遺構配置図（1/300）～折り込み～……297
第68図　丸田Ⅱ～Ⅳ区古代遺構図(2)（1/300）……296
第69図　Ⅱ区中世遺構配置図(1/500)……299
第70図　微高地肩土層断面図（1/60）…300

第71図　低位部水田出土遺物……300
第72図　低位部水田（溝）断面図（1/100）
……300
第73図　格子目状溝断面図1（1/100）‥300
第74図　格子目状溝断面図2（1/100）‥301
第75図　格子目状溝断面図3（1/100）‥301
第76図　格子目状溝出土遺物……301
第77図　溝－1（1/30）・出土遺物……302
第78図　微高地出土遺物……302
第79図　建物－5（1/80）・出土遺物‥‥303
第80図　土壙－34（1/30）・出土遺物‥‥304
第81図　土壙（溝状）－35（1/30）・出土遺
物……305
第82図　土壙－36（1/30）・出土遺物‥‥306
第83図　土壙－37断面図（1/60）……307
第84図　土壙－37出土遺物……307
第85図　土壙－37内集石遺構（1/30）‥‥308
第86図　P934鋤先出土状態（1/30）……308
第87図　P934出土鋤先……308
第88図　溝－11（1/30）……309
第89図　溝－11出土遺物……309
第90図　集石土壙－1（1/30）……310
第91図　土壙－38（1/30）……310
第92図　土壙－39（1/30）……310
第93図　集石土壙－2（1/30）……310
第94図　包含層出土遺物……311
第95図　Ⅱ区出土遺物……312
第96図　Ⅱ・Ⅲ区出土遺物……312
第97図　土壙－40（1/30）・出土遺物‥‥313
第98図　建物－6（1/80）……314
第99図　建物－7（1/80）……315
第100図　建物－8（1/80）……316
第101図　建物－9（1/80）……317
第102図　土壙墓－3（1/30）・出土遺物‥‥318
第103図　井戸－1（1/30）・出土遺物(1)‥‥319
第104図　井戸－1出土遺物(2)……320
第105図　井戸－2（1/30）・出土遺物‥321
第106図　井戸－3（1/30）・出土遺物‥322
第107図　井戸－4（1/30）……323
第108図　井戸－5（1/30）……323
第109図　井戸－4出土遺物……323
第110図　井戸－4井筒……324
第111図　Ⅱ区柱穴（1/30）……325
第112図　Ⅱ区集石土壙－3（1/30）‥‥325
第113図　Ⅱ区柱穴出土遺物……326
第114図　Ⅱ区包含層出土遺物……327
第115図　Ⅱ区出土土製品ほか……328
第116図　Ⅲ区土層断面図（1/60）……329
第117図　Ⅲ区格子目状溝断面図（1/60）
……330
第118図　Ⅲ区低位部水田上溝断面図（1/80）
……330
第119図　溝－1断面図（1/30）……330
第120図　Ⅱ・Ⅲ区中世遺構配置図（1/300）
……331
第121図　Ⅲ区検出溝断面図（1/30）‥‥332
第122図　建物－10（1/80）……333
第123図　建物－11（1/80）……334
第124図　建物－12（1/80）……334
第125図　土壙墓－4（1/30）・出土遺物
……335
第126図　土壙墓－5（1/30）……336
第127図　火葬墓（1/30）……336
第128図　土壙－41（1/30）……337

第129図　土壙－42（1/30）……337
第130図　土壙－43（1/30）……338
第131図　包含層出土須恵器……338
第132図　Ⅲ区柱穴出土遺物……339
第133図　Ⅲ区出土遺物……340
第134図　ⅣA区低位部南北トレンチ土層断面図（1/60）……341
第135図　ⅣA・B区古代遺構配置図(1/300)～折り込み～……343
第136図　ⅣA・B区中世遺構配置図(1/300)～折り込み～……345
第137図　ⅣA区西壁土層断面図１（1/60）……342
第138図　ⅣA区西壁断面図２（1/60）…342
第139図　低位部（南端）出土遺物(1)……347
第140図　低位部（南端）出土遺物(2)……347
第141図　陶馬……348
第142図　鉈尾……348
第143図　施釉陶器……348
第144図　土壙－44（1/60）……349
第145図　土壙－44土師器皿集中部分・集石部分（1/30）……349
第146図　土壙－44出土遺物(1)……350
第147図　〃　(2)……351
第148図　〃　(3)……352
第149図　〃　(4)……353
第150図　土壙－45（1/30）・出土遺物‥354
第151図　建物－13（1/80）……355
第152図　溝－19・20土層断面図（1/30）・出土遺物……356
第153図　溝－20出土遺物……357
第154図　溝－21断面図（1/30）……358
第155図　溝－22土層断面図（1/30）……358
第156図　溝－22出土遺物……358
第157図　溝－23土層断面図（1/30）……358
第158図　溝－24土層断面図（1/30）……358
第159図　溝－23出土遺物……358
第160図　土壙墓－６（1/30）……359
第161図　土壙墓－６副葬遺物配置図（1/20）……360
第162図　土壙墓－６出土遺物(1)……360
第163図　土壙墓－６出土遺物(2)……361
第164図　土壙－46（1/30）……363
第165図　土壙－47（1/30）……364
第166図　土壙－48（1/30）……364
第167図　土壙－49（1/30）……364
第168図　土壙－50（1/30）……364
第169図　土壙－51（1/30）……365
第170図　土壙－52（1/30）・出土遺物‥365
第171図　土壙－53（1/30）……365
第172図　土壙－54（1/30）……365
第173図　集石遺構－３（1/30）・出土遺物……366
第174図　土壙－55（1/30）……367
第175図　集石遺構－４・鍛冶炉－１（1/30）……367
第176図　鍛冶炉－２（1/30）……367
第177図　ⅣA区柱穴出土遺物……368
第178図　ⅣA・B区出土遺物……369
第179図　ⅣA区柱穴・包含層出土遺物…370
第180図　ⅣA・Ｂ区出土白磁……370
第181図　ⅣA区出土遺物……370
第182図　ⅣA・Ｂ区出土青磁……371
第183図　ⅣB区溝－１出土遺物(1)……373

第184図　溝－１出土遺物(2)……374
第185図　溝－１出土遺物(3)……375
第186図　窪地状遺構出土遺物(1)……376
第187図　窪地状遺構出土遺物(2)……377
第188図　ⅣB区溝－25土層断面図(1)（1/60）……378
第189図　ⅣB区溝－25土層断面図(2)（1/60）……378
第190図　東斜面出土遺物(1)……379
第191図　東斜面出土遺物(2)……380
第192図　東斜面出土遺物(3)……381
第193図　東斜面出土遺物(4)……382
第194図　東斜面出土遺物(5)……383
第195図　東斜面出土遺物(6)……384
第196図　東斜面出土遺物(7)……385
第197図　東斜面出土遺物(8)……385
第198図　東斜面出土遺物(9)……386
第199図　建物－14（1/80）・出土遺物‥387
第200図　建物－15（1/80）……388
第201図　建物－16（1/80）・出土遺物‥388
第202図　建物－17（1/80）……389
第203図　建物－18（1/80）……390
第204図　建物出土遺物……390
第205図　建物－19（1/80）……391
第206図　建物－20（1/80）……392
第207図　建物－21（1/80）……393
第208図　建物－22（1/80）・出土遺物‥394
第209図　建物－23（1/80）……395
第210図　建物－24（1/80）……396
第211図　土壙－56（1/30）・出土遺物‥397
第212図　土壙－57（1/30）……398
第213図　土壙－58（1/30）・出土遺物‥398
第214図　土壙－59（1/30）……398
第215図　土壙－60（1/30）……399
第216図　土壙－61（1/30）……399
第217図　土壙－61出土遺物……400
第218図　土壙－62（1/30）・出土遺物‥401
第219図　土壙－63（1/30）・出土遺物‥401
第220図　土壙－64（1/30）・出土遺物‥402
第221図　土壙－65（1/30）……402
第222図　土壙－66（1/30）……403
第223図　土壙－67（1/30）……403
第224図　土壙－68（1/30）……403
第225図　土壙－68出土遺物……404
第226図　土壙－69（1/30）・出土遺物‥404
第227図　土壙－70（1/60）……405
第228図　土壙－70出土遺物……406
第229図　土壙－71～75（1/30）……407
第230図　土壙－76（1/30）……408
第231図　土壙－77（1/30）……408
第232図　土壙－78（1/30）……408
第233図　土壙－79（1/30）……408
第234図　土壙－80（1/30）……409
第235図　土壙－81（1/30）……409
第236図　土壙－82（1/60）……409
第237図　土壙－83（1/30）・出土遺物‥410
第238図　土壙－84（1/30）・出土遺物‥410
第239図　土壙－85（1/30）・出土遺物‥411
第240図　土壙－86（1/30）……411
第241図　土壙－87（1/30）……411
第242図　土壙－88出土遺物……411
第243図　土壙－88・89（1/30）……412
第244図　土壙－90（1/30）・出土遺物‥413
第245図　土壙－91・93出土遺物……413

第246図　土壙－91・92（1/30）……414
第247図　土壙－93・94（1/30）……414
第248図　土壙－95（1/30）……415
第249図　土壙－96（1/60）・出土遺物‥415
第250図　集石遺構－4（1/30）・出土遺物
……416
第251図　小土器溜り出土遺物……416
第252図　溝－26断面図（1/30）……417
第253図　溝－26出土遺物……417
第254図　溝－27断面図（1/30）……418
第255図　溝－28南半断面図（1/30）・出土
遺物……418
第256図　溝－28北半断面図（1/30）……418
第257図　ⅣB区包含層出土遺物(1)……419
第258図　ⅣB区包含層出土遺物(2)……420
第259図　ⅣB区包含層出土遺物(3)……421
第260図　ⅣB区柱穴出土遺物……422
第261図　ⅣB区近世柱穴一括出土染付皿
……423
第262図　丸田調査区出土土錘……424
第263図　ⅣA・B区出土砥石・銭貨……425
第264図　緡銭出土状態……426
第265図　丸田調査区出土鉄器(1)……427
第266図　丸田調査区出土鉄器(2)……428

津寺遺跡丸田調査区図版目次

図版75－1　丸田Ⅰ区全景（南から）
－2　丸田Ⅰ区近世水田（南西から）
図版76－1　丸田Ⅰ区微高地部分（近世遺構群；北から）
－2　丸田Ⅰ区微高地上中世遺構検出状況（北から）
図版77－1　丸田Ⅰ区建物－1（南西から）
－2　丸田Ⅰ区南壁土層断面(北から)
図版78－1　丸田Ⅰ区土壙－1（南から）
－2　丸田Ⅰ区土壙－2（南から）
図版79－1　丸田Ⅰ区溝－1上面土器出土状態（西から）
－2　丸田Ⅰ区溝－1（北西から）
図版80－1　丸田ⅠE区全景（北から）
－2　丸田ⅠE区低位部近世水田（北から）
図版81－1　丸田ⅠE区微高地上中世遺構群（北から）
－2　丸田ⅠE区建物－2、溝－4・6、土壙－5～8付近(東から)
図版82－1　丸田ⅠE区溝－3・5(北から)
－2　丸田ⅠE区溝－2内硯出土状態（北から）
図版83－1　丸田ⅠE　集石遺構－1（北西から）
－2　丸田ⅠE区集石遺構－1遺物出土状態（西から）
図版84－1　丸田ⅠE区土壙墓－1（北西から）
－2　丸田ⅠE区土壙墓－6頭部付近（西から）
図版85－1　丸田ⅠE区土壙墓－2(南から)
－2　丸田ⅠE区土壙墓－2(東から)

図版86－1　丸田Ⅰ農区北半遺構群(北から)
－2　丸田Ⅰ農区建物－3、土壙－23など（南から）
図版87－1　丸田Ⅰ農区建物－3（南西から）
－2　丸田Ⅰ農区建物－3柱穴土層断面（西から）
図版88　丸田Ⅰ農区建物－3柱穴
図版89－1　丸田Ⅰ農区土壙－12(南から)
－2　丸田Ⅰ農区土壙－12(西から)
図版90－1　丸田Ⅰ農区集石遺構－2（南から）
－2　丸田Ⅰ農区柱穴内亀山焼捏鉢出土状態（西から）
図版91－1　丸田Ⅰ農区土壙－22(南から)
－2　丸田Ⅰ農区土壙－16(南から)
図版92－1　丸田Ⅰ農区南半遺構群(北から)
－2　丸田Ⅰ農区土壙－27(西から)
図版93－1　丸田Ⅰ農区土壙－29(南から)
－2　丸田Ⅰ農区土壙－30～32（東から）
図版94－1　丸田Ⅱ区全景（西から）
－2　丸田Ⅱ区低位部近世水田（東から）
図版95－1　丸田Ⅱ区微高地建物－6・7全景（北から）
－2　丸田Ⅱ区建物－6・7、土壙－40付近（北西から）
図版96－1　丸田Ⅱ区建物－8（北から）
－2　丸田Ⅱ区建物－4、井戸－5付近（西から）
図版97－1　丸田Ⅱ区井戸－1断面(南西から)
－2　丸田Ⅱ区井戸－1井底(南西から)
図版98－1　丸田Ⅱ区井戸－4断面(南から)
－2　丸田Ⅱ区井戸－4井筒(南から)
図版99－1　丸田Ⅱ区井戸－4井筒据え付け状態（南から）
－2　丸田Ⅱ区井戸－4井筒（曲物）
図版100－1　丸田Ⅱ区井戸－3断面(南から)
－2　丸田Ⅱ区井戸－3完掘状態(南から)
図版101－1　丸田Ⅱ区土壙墓－3（西から）
－2　丸田Ⅱ区土壙墓－3頭部付近遺物出土状態（東から）
図版102－1　丸田Ⅱ区建物－5、柱列付近(北から)
－2　丸田Ⅱ区土壙－35（北から）
図版103－1　丸田Ⅱ区土壙－37・集石部分(西から)
－2　丸田Ⅱ区土壙－36（西から）
図版104－1　丸田Ⅱ区柱穴内(P934)鋤先出土状態（西から）
－2　丸田Ⅱ区土壙－40（北から）
図版105－1　丸田Ⅱ区低位部と微高地境界部土層断面（南から）
－2　丸田Ⅱ区低位部溝群（南から）
図版106－1　丸田Ⅱ区溝－1（北から）
－2　丸田Ⅱ区北壁土層断面（南東から）

図版107－1　丸田Ⅱ区格子目状溝発掘風景（東から）
－2　丸田Ⅱ区格子目状溝検出状態（北から）
図版108－1　丸田Ⅱ区格子目状溝断面（西から）
－2　丸田Ⅱ区北半格子目状溝完掘状況（北から）
図版109－1　丸田Ⅲ区近世水田検出状況（北から）
－2　丸田Ⅲ区中世建物群（北から）
図版110－1　丸田Ⅲ区土壙墓－3・4検出状況（北西から）
－2　丸田Ⅲ区土壙墓－3（北から）
図版111－1　丸田Ⅲ区土壙墓－4（北から）
－2　丸田Ⅲ区土壙墓－4刀子副葬状態（北から）
図版112－1　丸田Ⅲ区火葬墓（西から）
－2　丸田Ⅲ区火葬墓人骨遺存状態（南東から）
図版113－1　丸田Ⅲ区土壙－41（集石土壙；北から）
－2　丸田Ⅲ区低位部水田遺構（西から）
図版114－1　丸田Ⅲ区微高地格子目状溝（東から）
－2　丸田Ⅲ区微高地格子目状溝と低位部（北から）
図版115－1　丸田ⅣA区全景と近世水田（北から）
－2　丸田ⅣA区南半中世遺構群（北から）
図版116－1　丸田ⅣA区南土層断面（南から）
－2　丸田ⅣA区柱穴内遺物出土状態（備前焼壺；西から）
図版117－1　丸田ⅣA区南端低位部陶馬出土状況（南から）
－2　丸田ⅣA区陶馬（西から）
図版118－1　丸田ⅣA区西壁土層断面（北から）
－2　丸田ⅣA区西壁土層断面（東から）
図版119－1　丸田ⅣA区溝－19・20（東から）
－2　丸田ⅣA区溝－19・20（北から）
図版120－1　丸田ⅣA区溝－19・20共通断面（西から）
－2　丸田ⅣA区溝－20断面（西から）
図版121－1　丸田ⅣA区土壙墓－6発掘状況（西から）
－2　丸田ⅣA区土壙墓－6完掘状況（北西から）
図版122－1　丸田ⅣA区土壙墓－6頭骨遺存状態（北西から）
－2　丸田ⅣA区土壙墓－6刀子出土状態（南東から）
図版123－1　丸田ⅣA区土壙墓－6副葬鍛冶道具一括出土状況（南東から）
－2　丸田ⅣA区土壙墓－6鍛冶道具（金鎚・金鉗など；南東から）
図版124－1　丸田ⅣA区土壙－47・48（西から）
－2　丸田ⅣA区土壙－49（西から）
図版125－1　丸田ⅣA区土壙－51（西から）
－2　丸田ⅣA区鍛冶炉－1（左）と集石遺構－4（西から）

図版126－1　丸田ⅣA区集石遺構－3(西から)
－2　丸田ⅣA区集石遺構－3遺物出土状態（南から）
図版127－1　丸田ⅣA区土壙－44（南から）
－2　丸田ⅣA区土壙－44遺物出土状態（黒色土器など；南西から）
図版128－1　丸田ⅣA区土壙－44遺物出土状態（北から）
－2　丸田ⅣA区土壙－44土師器皿一括出土状態（北西から）
図版129－1　丸田ⅣA区土壙－44全景と獣骨（矢印）（北から）
－2　丸田ⅣA区土壙－44獣骨出土状態（北から）
図版130－1　丸田ⅣA区土壙－44出土炭化穀物
－2　丸田ⅣA区土壙－44出土炭化穀物（約×2.3）
図版131－1　丸田ⅣA区土壙－44出土炭化物
－2　丸田ⅣA区土壙－44出土炭化物（約×2）
図版132－1　丸田ⅣA区柱穴からの平瓦出土状態（南から）
－2　丸田ⅣA区溝－28獣骨出土状態（ウマ；西から）
図版133－1　丸田ⅣB区全景（北から）
－2　丸田ⅣB区建物－20・23、溝－26（東から）
図版134－1　丸田ⅣB区北西辺調査風景（南東から）
－2　丸田ⅣB区建物－20、土壙－26周辺（東から）
図版135－1　丸田ⅣB区溝－25（西から）
－2　丸田ⅣB区溝－25（東から）
図版136－1　丸田ⅣB区溝－25土層断面（西から）
－2　丸田ⅣB区南端低位部土層断面（西から）
図版137－1　丸田ⅣB区建物－21・22（北から）
－2　丸田ⅣB区建物－16・17（北から）
図版138－1　丸田ⅣB区建物－18・19、溝－27周辺（北から）
－2　丸田ⅣB区土壙－88・89（北から）
図版139－1　丸田ⅣB区土壙－60（西から）
－2　丸田ⅣB区土壙－60土層断面（西から）
図版140－1　丸田ⅣB区集石遺構－4（西から）
－2　丸田ⅣB区集石遺構－4内石臼出土状態（西から）
図版141－1　丸田ⅣB区土壙－68・70（北東から）
－2　丸田ⅣB区土壙－82（北から）
図版142－1　丸田ⅣB区土壙－96（東から）
－2　丸田ⅣB区土壙－56（西から）
図版143－1　丸田ⅣB区溝－1上面遺物出土状態（西から）
－2　丸田ⅣB区溝－1(西から)
図版144－1　丸田ⅣB区窪地状遺構(東から)
－2　丸田ⅣB区窪地状遺構遺物出土状態（北から）

図版145－1　丸田ⅣB区微高地東斜面調査風景（南西から）
－2　丸田ⅣB区微高地東斜面遺物出土状態（西から）
図版146－1　丸田ⅣB区東斜面堆積土層断面（南西から）
－2　丸田ⅣB区東斜面堆積遺物出土状況（北から）
図版147－1　丸田ⅣB区東斜面堆積遺物集中部分（北から）
－2　丸田ⅣB区東斜面土師器・黒色土器など（東から）
図版148－1　丸田ⅣB区染付皿出土状態(976～984)
－2　丸田ⅣB区緡銭出土状態（M55）
図版149　丸田調査区柱穴内遺物出土状態・発掘風景
図版150　出土遺物(1)須恵器・土師器
図版151　出土遺物(2)土師器・陶器
図版152　出土遺物(3)土師器・黒色土器
図版153　出土遺物(4)土師器・黒色土器
図版154　出土遺物(5)土師器・瓦器・円筒埴輪など
図版155　出土遺物(6)須恵器・土師器・墨書土器
図版156　出土遺物(7)須恵器・備前焼・土師器
図版157　出土遺物(8)陶馬・黒色土器・須恵器
図版158　出土遺物(9)土師器・瓦
図版159　出土遺物(10)備前焼・黒色土器など
図版160　出土遺物(11)須恵器・土師器・黒色土器など
図版161　出土遺物(12)黒色土器
図版162　出土遺物(13)黒色土器・土師器
図版163　出土遺物(14)土師器・須恵器・転用硯
図版164　出土遺物(15)瓦
図版165　出土遺物(16)瓦・土師器・亀山焼
図版166　出土遺物(17)土師器・墨書土器など
図版167　出土遺物(18)須恵器・土師器など
図版168　出土遺物(19)陶磁器
図版169　出土遺物(20)陶磁器
図版170　出土遺物(21)陶磁器
図版171　出土遺物(22)染付陶器（Ⅲ）
図版172　出土遺物(23)石製品
図版173　出土遺物(24)土壙墓－6出土鉄器
図版174　出土遺物(25)石製品・金属製品

津寺遺跡丸田調査区表目次

表－1　発掘調査工程表……256
表－2　出土銭貨一覧表……426

津寺遺跡野上田調査区目次

第1図　野上田1～6区全体図（1/1,000）……431
第2図　土製品……432
第3図　弥生土器1……433
第4図　弥生土器2……434
第5図　土師器……435
第6図　須恵器……436

第７図　１区東西トレンチ土層断面図（1/80）……438
第８図　４区土手状遺構地形図（1/200）……438
第９図　４区土手状遺構土層断面図（1/100）……438
第10図　５区護岸施設下部全体図（1/200）……439
第11図　５区北杭列・中央土層断面図（1/80）……440
第12図　５区護岸施設南部すだれ図（1/80）……441
第13図　５区すだれ２～４面・断面図（1/80）……441
第14図　６区土器溜り（1/200）……442
第15図　６区南トレンチ断面図（1/80）……442
第16図　墨書土器・緑釉・灰釉・漆入り土器……443
第17図　６区土器溜り出土遺物１……444
第18図　６区土器溜り出土遺物２……445
第19図　かまど１……447
第20図　かまど２……448
第21図　土師器１……449
第22図　土師器２……450
第23図　土師器３・瓦……451
第24図　須恵器１……452
第25図　須恵器２……453
第26図　羽口……454
第27図　３・４・５区河道出土遺物……454
第28図　建物－１（1/80）……455
第29図　建物－２（1/80）……455
第30図　建物－３（1/80）……455
第31図　建物－４（1/80）……456
第32図　柱穴出土遺物……456
第33図　土壙－１（1/30）……457
第34図　土壙－２断面図（1/30）……457
第35図　土壙－３（1/30）・出土遺物……457
第36図　土壙－４（1/30）・出土遺物……458
第37図　土壙－５（1/30）・出土遺物……458
第38図　土壙－７出土遺物……459
第39図　墓－１（1/15）……459
第40図　墓－２（1/15）……459
第41図　溝－４断面図（1/30）・出土遺物……460
第42図　溝－５断面図（1/30）……460
第43図　溝－６断面図（1/30）……460
第44図　溝－６出土遺物……461
第45図　溝－７断面図（1/30）……461
第46図　溝－８・９断面図（1/60）……461
第47図　溝－８・10出土遺物……462
第48図　２区土器溜り出土遺物……462
第49図　４区土器溜り出土遺物……463
第50図　５区包含層出土遺物……463
第51図　白磁・青磁……464
第52図　須恵器……465
第53図　土製品……465
第54図　金属品……465
第55図　木器……466
第56図　石器……467
第57図　溝－１出土遺物……468
第58図　溝－１～３断面図（1/60）……468
第59図　国産陶磁器……468

津寺遺跡野上田調査区図版目次

図版175－1. 野上田5区古代土手下部護岸施設（北から）
2. 同断面（北から）
図版176－1. 野上田5区護岸施設遠景（北から）
2. 同杭としがらみ
図版177－1. 野上田5区古代河道と右岸土手（北から）
2. 4区河道と土手（北から）
図版178－1. 野上田6区河道斜面土器溜り（北から）
2. 同近接（東から）
図版179－1. 野上田5区建物－4（南から）
2. 同柱穴（東から）
3. 野上田5区南西部（南から）
4. 同柱穴（南から）
図版180－1. 野上田5区中世遺構（西から）
2. 6区中世河道（北から）
図版181－1. 野上田5区土壙－3（西から）
2. 土壙－4（西から）
3. 土壙－5（東から）
図版182－1. 野上田5区溝－4断面(西から)
2. 5区溝－6断面（東から）
3. 5区人骨出土状態
4. 5区短刀出土状態
5. 6区木舟出土状態
6. 6区ひしゃく出土状態
図版183 野上田6区出土古代遺物（浄瓶・緑釉陶器・黒色土器・土師器）
図版184 野上田6区土器溜り出土墨書土器
図版185－1. 野上田6区出土墨書曲物
2. 赤外線反射による撮影
図版186－1. 野上田1～6区出土白磁
2. 同青磁・国産陶磁器

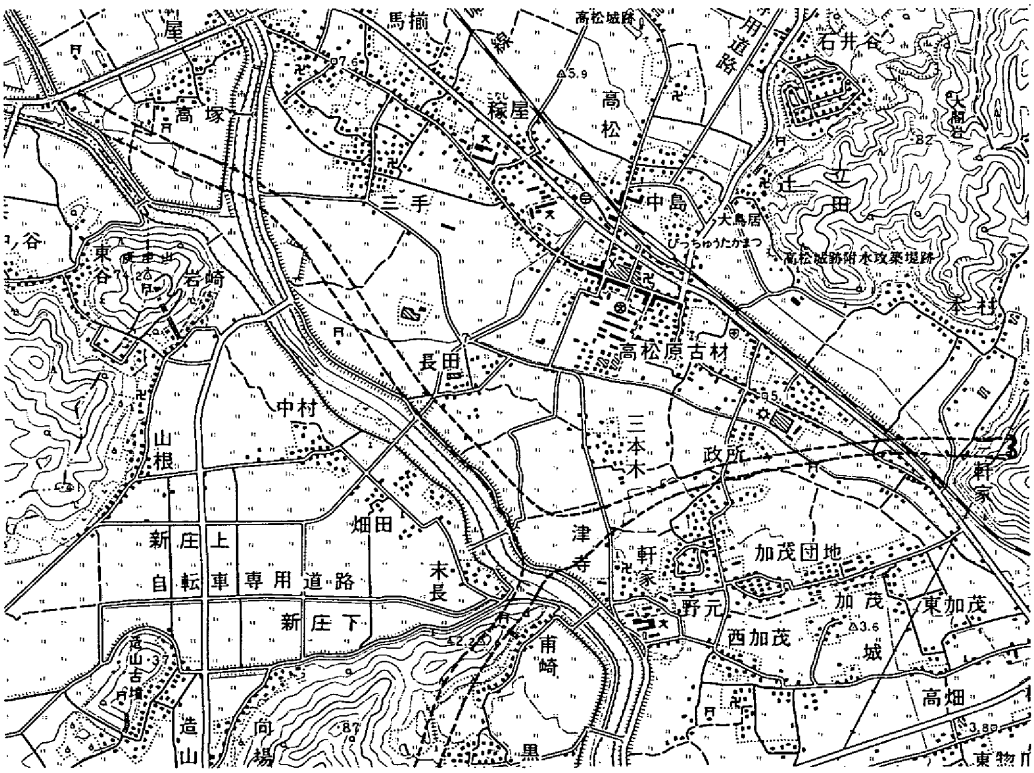
津寺遺跡野上田調査区表目次

表－1 主要遺構一覧表……430
表－2 建物一覧表……470
表－3 土壙一覧表……470
表－4 溝一覧表……470
表－5 木器一覧表……471
表－6 石器一覧表……471
表－7 金属器一覧表……471
表－8 土製品一覧表……472

Ⅰ．序　　説

1．発掘調査の経緯と日誌抄

昭和61（1986）年12月、日本道路公団広島建設局岡山工事事務所と岡山県古代吉備文化財センターとの職員が岡山市三手・津寺地内の山陽自動車道用地の地権者に対し買収契約調印前に埋蔵文化財の発掘承諾を求めて回り、三手・津寺地内の約15万㎡を調査対象地として、昭和62（1987）年１月、第一次調査を実施した。この結果にもとづいて、全面発掘が必要な調査対象範囲を絞り込むこととしたが、ここに報告するとおり三手遺跡の最終的な発掘面積は20,476㎡、その南の津寺野上田６区までの発掘面積は33,635㎡で、合計54,111㎡に及ぶ広大なものであった。三手遺跡は６箇所の調査区に分かれ４つの調査班が配置された。主な遺構は中世に属するもので、その他の遺物は弥生時代中期から近・現代までにわたるものの総じて遺構・遺物は少量であった。逆に、津寺遺跡では野上田６区までの調査区に５調査班を配置せざるを得なかったほどで、遺構は弥生時代後期から近・現代までに及び遺構数・遺物数ともに三手遺跡の11倍を数え、吉備南部の沖積遺跡の中にあってきわめて遺構密度の高い結果を得た。



第１図　路線と周辺地形図（1/2.5万）

発掘日誌抄

昭和61年度（1986年度）

12月　買収契約前に発掘の承諾を求め地権者宅を訪問

昭和62年

1月12日　三手地区一次調査開始

1月23日　津寺地区土筆山一次調査開始

1月30日　三手地区一次調査の埋め戻し完了

2月7日　津寺地区野上田埋め戻し完了

2月10日　津寺地区高田・中屋・西川など一次調査の埋め戻し完了

昭和62年度（1987年度）

昭和63年

3月　表土掘削

昭和63年度（1988年度）

4月11日　三手遺跡向原Ⅰ・Ⅱ区、砂田Ⅰ区調査着手、津寺遺跡土筆山1～3区、丸田Ⅰ・Ⅴ区調査着手

4月18日　野上田1区調査着手

4月23日　野上田1区調査完了

5月2日　野上田3区調査着手

5月25日　沼・丸川区調査着手

5月30日　土筆山5区調査着手

6月10日　土筆山3区調査完了

6月13日　砂田Ⅰ区調査完了

6月29日　丸田Ⅱ区調査着手

6月30日　野上田3区調査完了

7月1日　野上田2区調査着手

7月25日　向原Ⅲ区調査着手

7月30日　野上田2区調査完了

8月1日　砂田Ⅱ区・野上田4区調査着手

8月22日　丸田Ⅰ区調査完了

8月2日　沼・丸川区調査完了

9月12日　砂田Ⅱ区・土筆山1・2区調査完了

9月27日　丸田Ⅲ区調査着手

9月30日　野上田4区調査完了

10月3日　丸田Ⅱ区調査完了、野上田5区調査着手

10月13日　丸田ⅠE区調査着手

10月21日　向原Ⅰ区調査完了

12月1日　土筆山4a区着手

12月8日　向原Ⅱ・Ⅲ区調査完了

平成元年

1月17日　野上田6区調査着手

1月31日　丸田ⅠE区、野上田5区調査完了

2月1日　土筆山1a区調査着手

2月2日　丸田農機道区調査着手

2月4日　土筆山4区調査着手

2月10日　土筆山5b区調査着手

2月14日　土筆山4区調査完了

3月3日　土筆山5区調査完了

3月8日　土筆山1a区調査完了

3月31日　土筆山4a、5b区、丸田Ⅱ・Ⅲ区、農機道区・野上田6区完了

平成元年度（1989年度）

4月4日　土筆山4b区、丸田ⅣA区調査着手

7月3日　土筆山6・7区調査着手

7月8日　土筆山4b区調査完了

9月6日　丸田ⅣB区調査着手

10月5日　土筆山8区調査着手

12月2日　土筆山10区調査着手

12月23日　土筆山9区調査着手

12月23日　土筆山8・9区調査完了

平成２年

１月16日　丸田ⅣB区調査完了

１月26日　土筆山６・７区調査完了

２月19日　土筆山10区調査完了

２．調査の組織

昭和61年度（1986年度）

岡山県教育庁文化課

課長　高橋　誠記
課長代理　逸見　英邦
埋蔵文化財係長　正岡　睦夫
主任　仁宮　秀博

岡山県古代吉備文化財センター

所長　橋本　泰夫

総務課

課長　佐々木　清
主査　遠藤　勇次
主任　花本　静夫
　　片山　淳司

調査課

課長　河本　清
文化財保護主査　井上　弘
　　（津寺一次調査）
文化財保護主任　浅倉　秀昭
　　（三手・津寺一次調査）
文化財保護主事　中野　雅美
主事　亀山　行雄
主事　大智　浩
　　（三手・津寺一次調査）

昭和63年度（1988年度）

岡山県教育庁文化課

課長　吉尾　啓介
課長代理　河野　衛
課長補佐（埋文係長）　伊藤　晃
主査　藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所長　水田　稔
総務課長　佐々木　清
総務主幹　藤本　信康
主任　花本　静夫、岡田　祥司
　　片山　淳司

調査第一課

課長　河本　清

調査第二課

課長　葛原　克人
課長補佐（第一係長）　正岡　睦夫
文化財保護主幹　小柴　充明
第二係長　松本　和男
文化財保護主査　山磨　康平、岡田　博
　　二宮　治夫、浅倉　秀昭
　　吉田　正士
文化財保護主任　栗尾　昭和、垣内　一也
　　井上　篤、中野　雅美
　　川崎　肇
文化財保護主事　片山　泰輔、小田　卓生
　　福田　計治
主事　佐守　学、澤山　孝之
　　亀山　行雄、大橋　雅也
　　後藤　信義、柴田　英樹
　　弘田　和司

平成元年度（1989年度）

岡山県教育庁文化課

課　　長　吉尾　啓介
（11月30日まで）
鬼澤　佳弘
（12月１日以降）
課長代理　河野　衛
課長補佐（埋文係長）　伊藤　晃
主　　査　藤川　祥二

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　長瀬日出男
次　　長　河本　清
総務課長　竹原　成信
課長補佐（総務係長）　藤本　信康
主　　任　岡田　祥司、平松　郁男
片山　淳司

調査第二課

課　　長　葛原　克人
課長補佐（第一係長）　井上　弘
第三係長　岡田　博
文化財保護主査　二宮　治夫、林　久夫
文化財保護主任　井上　篤、源　俊二
主　　事　波多野宏和

平成４年度（1992年度）

岡山県教育庁文化課

課　　長　渡辺　淳平
課長代理　大橋　義則
課長補佐（埋文係長）　柳瀬　昭彦
主　　査　時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　横山　常實
次　　長　河本　清
文化財保護参事（調査第一課長）　葛原　克人

総務課

課　　長　北原　求

調査第二課

課　　長　正岡　睦夫
第二係長　浅倉　秀昭
文化財保護主査　古谷野寿郎、中野　雅美
文化財保護主事　澤山　孝之、柴田　英樹

なお昭和63年度には、総社市教育委員会から谷山雅彦・前角和夫両氏の応援があったことを付記しておく。

（葛原・浅倉）

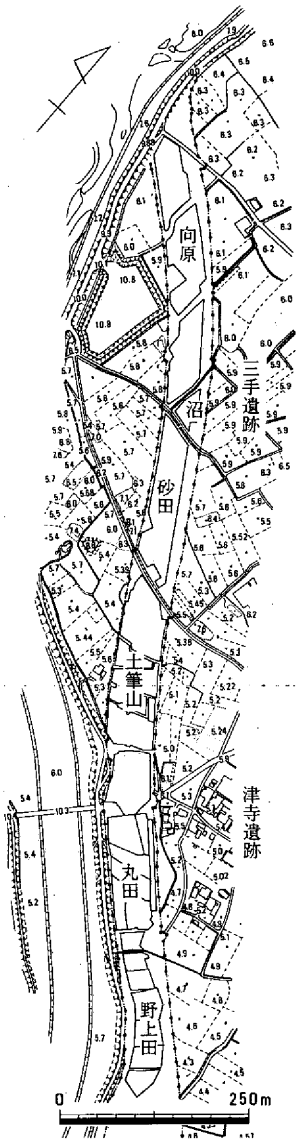
発掘調査区一覧表

番号	調査区名	所在地	調査期間	調査面積㎡	調査員名
1	三手向原Ⅰ区	岡山市三手	63.4～10	13,651	中野・後藤・福田計
2	三手向原Ⅱ区	岡山市三手	63.4～12		二宮・小田・亀山
3	三手向原Ⅲ区	岡山市三手	63.7～12		山磨・吉田・大橋
4	三手沼・丸田区	岡山市三手	63.4～8		
5	三手砂田区	岡山市三手	63.8～9	6,825	
6	津寺土篦山１～２区	岡山市津寺	63.4～9	18,195	正岡・小柴・川崎肇
7	津寺土篦山３～５区	岡山市津寺	63.4～1.3		松本・垣内・佐守
8	津寺土篦山６～10区	岡山市津寺	1.7～2.2		二宮・林・源
9	津寺土篦山4a・b区	岡山市津寺	1.4～1.7		
10	津寺丸田Ⅰ～Ⅳ区	岡山市津寺	63.4～2.1	8,090	岡田・井上篤・弘田・波多野
11	津寺丸田Ⅴ区	岡山市津寺	63.4	7,350	浅倉・栗尾
12	津寺野上田１～６区	岡山市津寺	63.5～1.3		

3．調査上の問題点

この報告書に収載された遺跡の発掘調査ならびに報告書の作成過程でいくつかの問題点が持ち上がったので、簡約にまとめておきたい。

まず、①河川法による発掘調査区の限定という、予期せぬ問題が生じた。備中南部平野の一角を走る山陽自動車道の一部は、ほぼ南流する足守川の堤防と近接する箇所があり、その付近については、当然のことながら堤防の決壊を防ぐために河川法によって堤防直下の掘削が規制されている。河川法によれば、堤防の法下から水田一枚とか何m距離を隔てなければならないといった具体的な規定があるわけではないが、要するに堤防外に一定の安全地帯を確保したうえではじめて掘削行為が容認される、というものである。この点に関して、土を「盛る」工法で進める日本道路公団広島建設局岡山工事事務所と、遺跡を「掘る」岡山県教育庁文化課ならびに岡山県古代吉備文化財センターなど関係機関の担当職員が相寄って数次にわたり協議を重ねたところである。むろんこの箇所は、道路建設に際しても盛土工法によるところであって、いっさい工事のために掘削するところはなく、堤防下に莫大な経費を投じて矢板を打ち込むことなど考えられない、公団の立場はこうである。ついに適当な結論を出すに至らず結局、文化課の裁量でもって堤防外幅5mを原則として安全地帯とみなし、重要な遺構・遺物が集中する箇所についてはこの限りでなく、板柵その他の設置などによって安全策を講じつつ堤防へ向かい掘り込むこととする、こうした方針でのぞむことに決した。したがって、北端の三手遺跡では向原Ⅰ区の約100mと、津寺遺跡における丸田調査区から野上田6区までのおよそ400mが発掘できない事態となったが、堤帯保全のためにはやむを得ない処置であったと思う。



第2図　調査区分図
(1/1万)

ついで、②本線敷の一部と、これに平行する側道敷部分について、後年次に対応せざるを得なくなった、という問題がある。本線敷は、一期工事として暫定二車線で建設される計画であるため、当面の発掘調査を、この建設部分に限定せざるを得なかったのである。岡山県教育委員会としては、膨大な調査面積を眼前にして、年々、調査員の増員をめざしてきたところであり、昭和63（1988）年度には県土木部から測量の速度を早めるため、土木部技師の出向をあお

ぎ、あるいは教職からの転入を図り、さらに調査補助員の制度を設けるなど、あらゆる努力を払ってきたにもかかわらず、全調査員の稼働能力とすべての調査面積とを照合させた場合、許される調査期間内で完掘できる見通しは必ずしも明るくない。このため、発掘調査は、当初の開通予定に入っている二車線の道路幅に限定し、本線の残存部と、将来においては一般道に移管される予定の側道敷を合わせた、ここでは南北に走る予定路線の東部約15m幅を、やむなく後年次対応とする方針をとった。ここでいう後年次とは、この山陽自動車道と、すでに山陰地方から南進をめざして建設工事の土音が高く聞こえる中国横断道とが結節する時期であって、そう遠い将来のことではない。

なお土筆山・丸田調査区においては、側道敷をそのまま農機道として使用しなければ、水田を切断された地権者が出入口を失い、田仕事に支障をきたすらしい。そうであるから特に上記の調査区では、懸命に、発掘調査に取り組んで、田植え前に側道工事をも終了させるよう努めたのであった。

さらに③として、用地内になお多数の障害物件が横たわり、これらの対応に苦慮した点を挙げなければならない。用地内には、下流の水田を養うのに欠かせない水路や畦畔が縦横に走っているばかりか、宅地跡さえ存在する。これら水路や畦畔の幅はせいぜい数mであるから、遺跡全体の中で占める割合はしれたもので、発掘対象地から除外しても、遺跡の性格を激変させるほどのことはなかろう、といった意見もあった。それでも全体としては、もらさず全面発掘すべきであるとの意見が圧倒的多数であったし、文化庁による指導も一貫してそうであった。したがって、原則としては、水路・畦畔を切り替えたのちその部分についても発掘調査を試みたところである。しかし、三手遺跡の用水路部や丸田地区の宅地跡では激しい湧水地帯に当たったことのほか遺構密度が希薄であったため、立ち会いで処置したところであって、終了してみれば、取り扱いに不均等を生じたこととなる。反省点の一つといえようか。

④点としては、排土・排水・騒音などの諸対策にことのほか腐心したことも忘れられない。この事業は、発掘調査側と建設工事側、双方ともに厳しい工程のなかで自らの業務を完遂しなければならないという状況のもとに開始された。終始、発掘調査がわずかに先行する程度の工程であったといえるので、各地点における発掘調査の終盤ちかくと建設工事の初発時点では、双方の排土置場や建設資材の仮置きをめぐって、まるで中世・戦国期の陣取り合戦のようなすさまじい様相を呈した。また排水問題についても苦労の連続であった。濁水がどうしても下流の水田に入るために、たとえば藺草の分けつを妨げるといって、その生産者から抗議をうけたこともしばしばであった。（葛原・浅倉）

Ⅱ. 環　　境

1. 地理的環境

本報告書に収載している遺跡は三手遺跡・津寺遺跡の2ヵ所である。いずれも岡山市北西部の高松地区に所在する。山陽自動車道は岡山市津寺の岡山ジャンクションから足守川左岸を北上し、岡山市高塚を経て岡山・総社インターに至る。この岡山ジャンクションの北端から足守川左岸部分を本報告書に収載している。総延長約1.2km・用地幅員約60mを測る。用地周辺はほとんど水田で、立ち退きする家屋が津寺地区で2軒しかない。その他用水・道路・温室・小社も若干あった。三手と津寺の境目には常時水が流れている幹線用水路がある。周辺の水田には条里制の跡らしきものは全く認められず、かなり新しそうな河道と考えられる幅約20mの一段低い水田が蛇行し、南北に連なっているのが地形図上あるいは航空写真でもはっきり認識出来る。発掘調査の概要と照合してみるとこの河道は比較的古い時代まで遡っていることが判明した。また三手と津寺の境目用水路を古代の郡境に当てる説もある。なお足守川右岸新庄地区についてはすでに圃場整備事業が完了している。

2. 歴史的環境

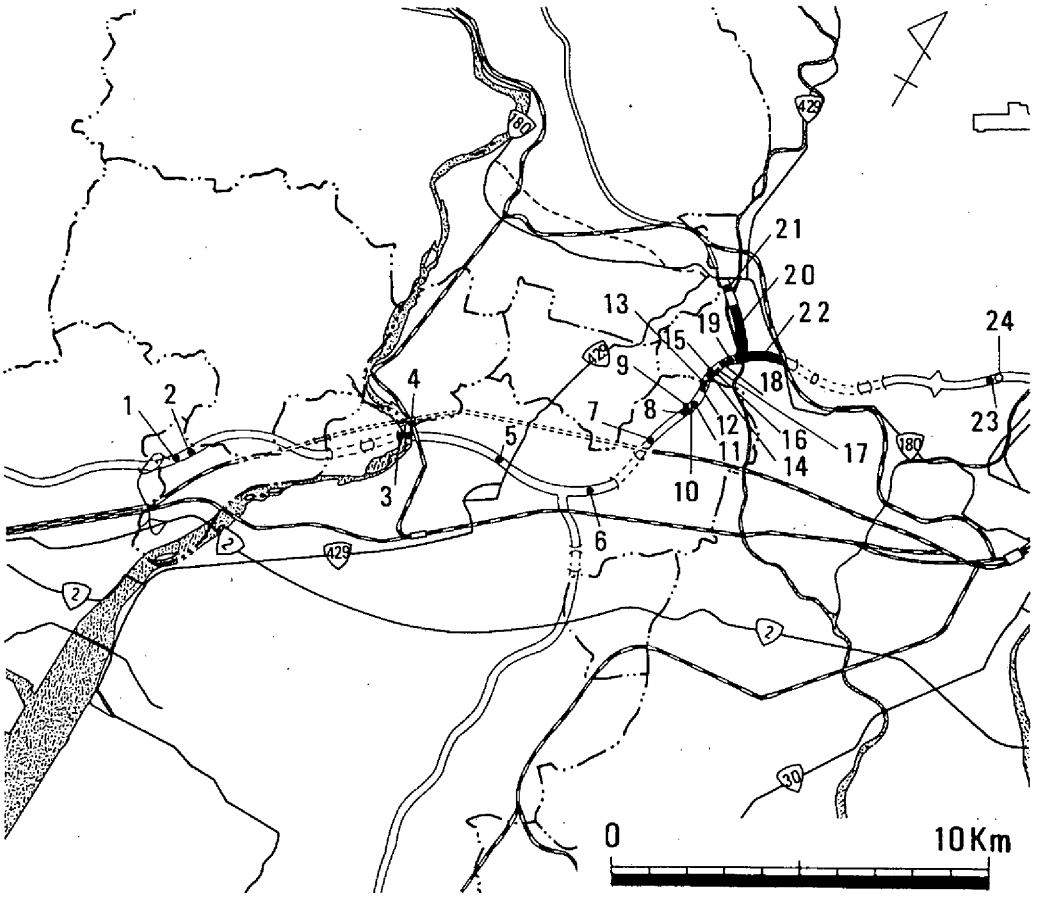
高松地区で最も古い遺物は旧石器時代のもので、山陽自動車道第8分冊収載の甫崎天神山遺跡・黒住遺跡の調査で出土している。

縄文時代では甫崎天神山遺跡・黒住遺跡で多数の土器片が出土。前者は北向きの緩斜面に整理箱2箱弱出土している。遺構は不明確ではあったが、獣骨を伴っていた。後者は中期～晩期のものがかなり多数出土している。石器も多数出土している。

弥生時代の遺跡としては南方に岡山市教委が調査した加茂小学校遺跡、岡山県教委が調査した足守川加茂遺跡などがある。西方の黒住遺跡では中期の遺構・遺物、甫崎天神山遺跡は後期の特殊器台・特殊壺が出土している。北方の高塚遺跡では銅鐸・貨泉も出ている。

古墳時代としては足守川右岸新庄地区に日本で第4位の大きさをもつ造山古墳がある。この時期の集落は津寺・加茂・高塚遺跡等に認められる。後半期の横穴式石室墳は黒住山古墳群・前池内古墳群がある。この時期の竈付き住居は特に津寺高田調査区に集中して検出できた。

古代～中世遺跡としては津寺高田調査区で飛鳥時代・高塚遺跡で奈良時代の軒丸瓦、中屋調査区で方形官衙遺構、野上田7区では7,000本余の護岸杭、丸田・野上田6区では平安時代の墨書土器、土筆山では建物・土壙墓・方形区画溝が多い。　　(浅倉)



第３図　調査遺跡位置図（1/20万）

1．中山３号貝塚	（第５分冊）	2．中山２号貝塚	（第５分冊）
3．酒津八幡山平谷遺跡	（第５分冊）	4．酒津・水江遺跡	（第５分冊）
5．菅生小学校裏山遺跡	（第５分冊）	6．三田散布地	（第５分冊）
7．二子14号墳	（第５分冊）	8．矢部古墳群Ａ	（第６分冊）
9．矢部古墳群Ｂ	（第６分冊）	10．矢部大坑遺跡	（第６分冊）
11．矢部奥田遺跡	（第６分冊）	12．矢部堀越遺跡	（第６分冊）
13．郷境墳墓群	（第８分冊）	14．前池内古墳群他	（第８分冊）
15．前池内３号墳	（第８分冊）	16．前池内４～７号墳	（第８分冊）
17．後池内古墳	（第８分冊）	18．黒住・雲山遺跡	（第８分冊）
19．甫崎天神山遺跡	（第８分冊）	20．三手・津寺遺跡	（第９分冊）
21．高塚遺跡		22．政所遺跡	
23．富原大池奥山遺跡		24．富原西奥古墳	（第７分冊）

9　加茂遺跡　12～16　甫崎古墳　38～61　向場古墳群　111～116　造山古墳付1～6号墳
10　津寺遺跡　17～36　黒住山古墳群　110　造山古墳　168　三手遺跡　169　庚申山東遺跡

第4図　遺跡分布図（1/1.5万）岡山市文化財分布図改変

Ⅲ. 発掘調査報告

1. 三手（みて）遺跡

第１章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査の経緯と経過

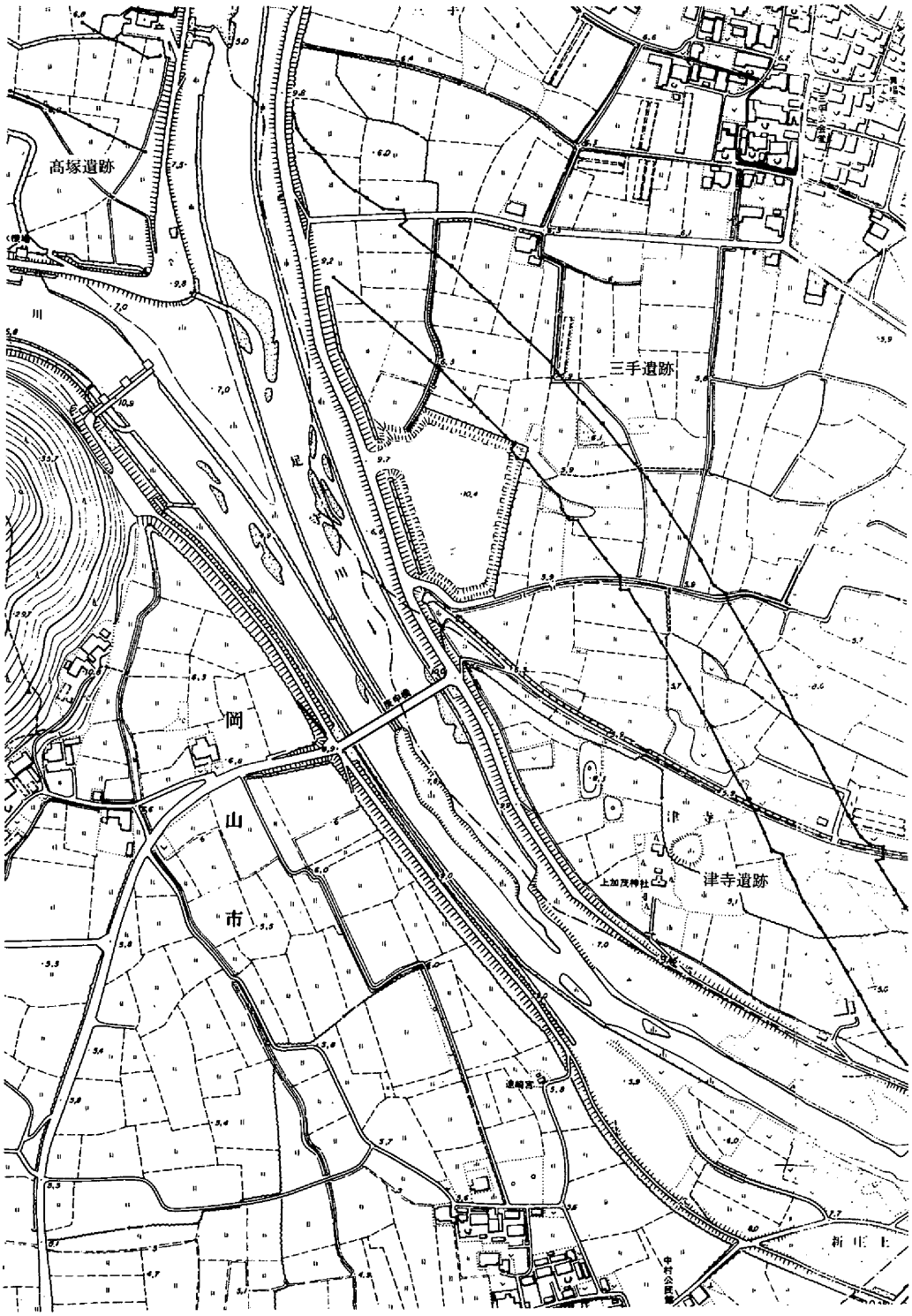
三手遺跡は、足守川東岸の岡山市三手に所在し、一帯は足守川により広範な沖積地となっている。路線内の北側には、岡山市の遺跡分布地図によると古墳時代～中世に至る集落址の存在が周知されていた。

岡山県教育委員会は、日本道路公団と協議を重ね当該遺跡にかかわる将来の発掘調査を立案するため、遺跡の範囲確認と性格の掌握を目的として、昭和61年度に第１次調査を実施した。調査対象地には、未買収地が多く含まれていたため困難を極めたが、地権者の埋蔵文化財への理解を説き調査への了承を求めた。調査は、農作業等の都合により予定個所が減少したが、昭和63年１月12日より調査に入った。調査対象地は、長さ約0.7kmで幅は約60ｍで27ヶ所に基本的には２×２ｍのグリッドを設け昭和63年１月30日まで実施した。調査は、三手地区の北から小字名が「中井手」「向原」「丸川」「沼」「砂田」と続き、各々２、15、２、１、７個所のグリッドを設定した。調査は、２×２ｍと狭小なグリッドだったため、水平堆積層が深くまで認められた現地では深くまで掘れず調査の実施に際して制約を受けた。また、作付の問題などもあり暗渠排水溝などが切断できなかった。さらに現地では著しい出水のため調査は困難を極めた。

調査の結果、三手遺跡の北側の「向原」地区では柱穴などが確認され、中世の集落址の存在が推定された。さらに下層には、古墳時代、弥生時代の包含層も検出され、安定した生活面も予想された。また、周辺域の上層には、中世の水田層が厚く広範囲に堆積している状況が確認された。

一方、「向原」地区の南側の「丸川」、「沼」、「砂田」地区では、表土層下は厚く水平堆積層が認められ中世～近世、近代の水田層が広がっているとされた。また、基盤層までは深く確認しがたい状況であった。

昭和63年４月からは、第１次調査の結果に基づいて調査を実施した。調査は、１班３名とする調査員の班編成で４組を投入し、各々の調査区を設定した。調査対象地は、公団との協議で交通量等の問題点から暫定的に２車線分を調査対象地とし、残りの分については後年次に対応するとした。



第1図　遺跡位置と周辺地形図（1/5000）

調査の結果、三手遺跡の北側の「向原」地区を中心に古墳時代の微高地を確認した。この微高地を構成している礫、砂の中には弥生時代の中、後期～古墳時代初頭の土器が多く含まれており、古墳時代初頭に形成された微高地であることが明らかとなった。また、上面には古代～中世の集落址も検出され、周辺部には中世以降の水田層が広範に認められた。また、遺跡の南側の「丸川」「沼」「砂田」地区でも中世の水田層が広範に堆積しており、一部では畦畔等の施設も確認された。

調査は、最終的には昭和63年12月まで行い完了した。

第２節　調査の方法と日誌抄

１．調査の方法

三手遺跡の調査対象地は全長約700ｍにおよぶため畦畔や水路の境で４分割し、４班編成で調査を実施した。北から向原Ⅰ、向原Ⅱ、向原Ⅲ、沼・丸川、砂田の各調査区を設定した。

調査は、第一次調査の結果に基づいて、重機による表土掘削ののち各調査区毎に対応した。今回の調査では、居住域は向原Ⅰ、Ⅱ区に限定され、その調査区の大半は水田域であったため、水田畦畔、水路などの確認に主眼が置かれた。そのため、各調査区間の時期毎に水田層の確認とその範囲の掌握に努めた。また、水田層の確認のためトレンチ調査を多用したが、湧水が著しく調査は困難を極めた。

２．日誌抄

昭和61年度

１月12日（月）　三手遺跡第１次調査着手

１月30日（金）　〃　完了

昭和63年度

４月１日（金）　調査準備

４月11日（月）　向原Ⅰ区調査着手

向原Ⅱ区調査着手

砂田地区調査着手（１次）

５月25日（水）　沼・丸川地区調査着手

６月13日（月）　砂田地区調査完了（１次）

７月25日（月）　向原Ⅲ区調査着手

三手遺跡

8月1日（月）　砂田地区調査着手（2次）

8月2日（火）　沼・丸川地区調査完了

9月12日（月）　砂田地区調査完了（2次）

10月21日（金）　向原Ⅰ区調査完了

12月8日（木）　向原Ⅱ区調査完了

向原Ⅲ区調査完了

第２章　発掘調査の概要

第１節　各調査区の概要

向原Ⅰ調査区

本調査区は、三手遺跡の最北端に位置する。調査区は、南北に分けⅠ－A、Ⅰ－Bとして調査を行った。調査の結果、北側のⅠ－A調査区は、中央部にトレンチを設け掘り下げたが、表土下約2.5ｍにおいても粘土の水平堆積層を認められ旧河道内の堆積と判断された。

Ⅰ－B調査区では、古墳時代初頭に形成された微高地を検出した。微高地上には、古墳時代前半期の竪穴住居・溝・古代～中世の掘立柱建物・土壙墓・溝などの多数の遺構・遺物が検出された。

向原Ⅱ調査区

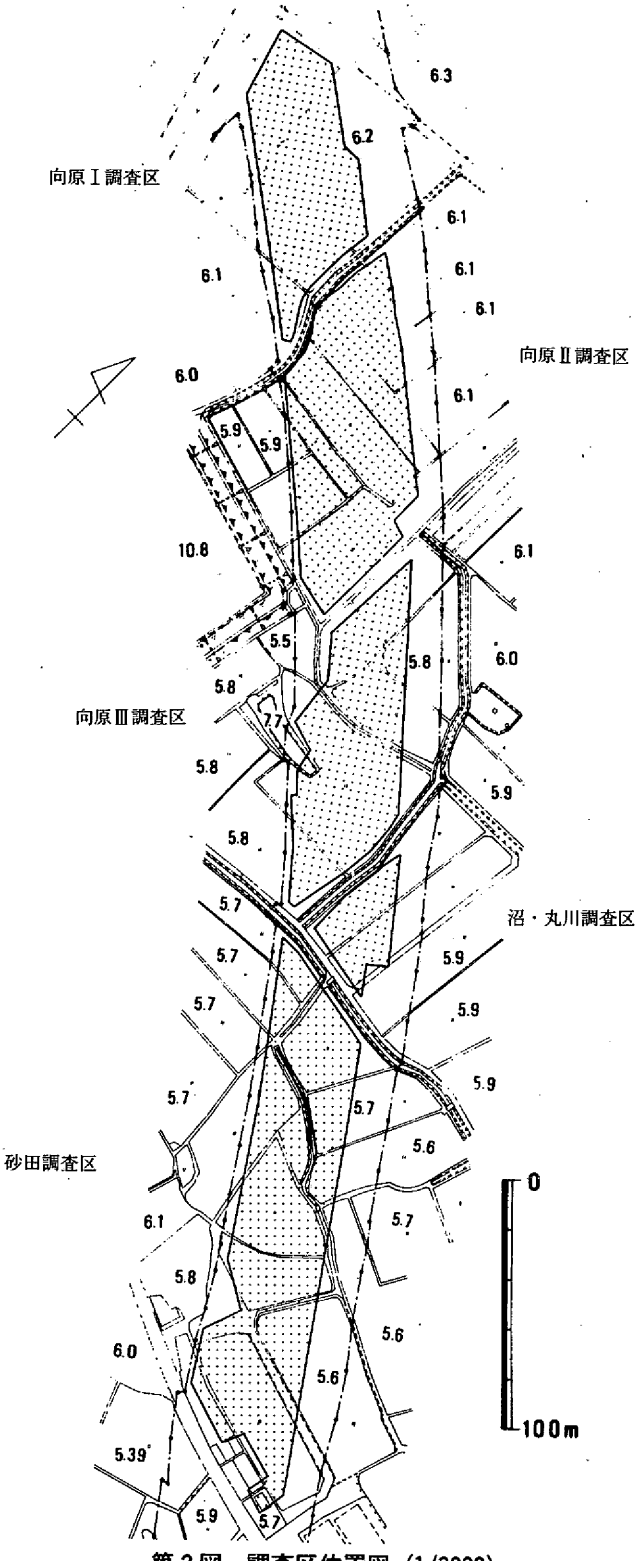
本調査区は確認調査（一次調査）において中世段階の微高地であることが確認されている区域であったが、本調査（全面発掘）になり、新たにトレンチ及び側溝を掘り下げた結果から、調査区内中央の北側と北東部以外では下層から遺構（水田・溝）を確認した。

調査区の基本的な層序は、現代水田の下に近世の洪水による粗砂・造成土が続き、さらに下に向かって中・近世から古代の遺構・遺物を伴う粘質微細砂層・水田層・古墳時代の遺物を含む粘質砂層、細粗砂層と続く。最下層で洪水によって堆積した砂礫層上面で弥生時代の遺物を検出した。微高地上の遺構はまばらであるが、水田は比較的整然とした区画を示している。

向原Ⅲ・沼・丸川・砂田調査区

小字名をとって調査区名を呼称し、さらに向原Ⅲ調査区と砂田調査区については、現有農道・水路を避けて各々５つの小調査区に分割して調査にあたった。実際の調査は２班が担当し、砂田３区を境として、それぞれ北と南側へと進行させた。

砂田調査区では南半は、トレンチ調査の結果、遺構が確認されず、旧河道の堆積状態を示すものとの判断から、土層断面の図化で調査を終了した。砂田調査区北半から沼・丸川調査区、向原Ⅲ調査区では、近代以降の水田層と洪水砂の互層の下から、近世の水田層を確認し、面的に調査を進め畦畔の検出に努めた。砂田、沼・丸川調査区では、この近世水田の下位には遺構が認められず調査を終了したが、向原Ⅲ調査区では、中世のものと考えられる水田層を複数枚確認し、面的に畦畔等の検出にあたった。



第２図　調査区位置図（1/3000）

第２節　向原Ⅰ調査区

この調査区は、三手遺跡の最北端部にあたる。昭和61年度に第一次調査が実施され、弥生、古墳時代および中世の生活面と中世を中心とする水田層の存在が予想されていた。

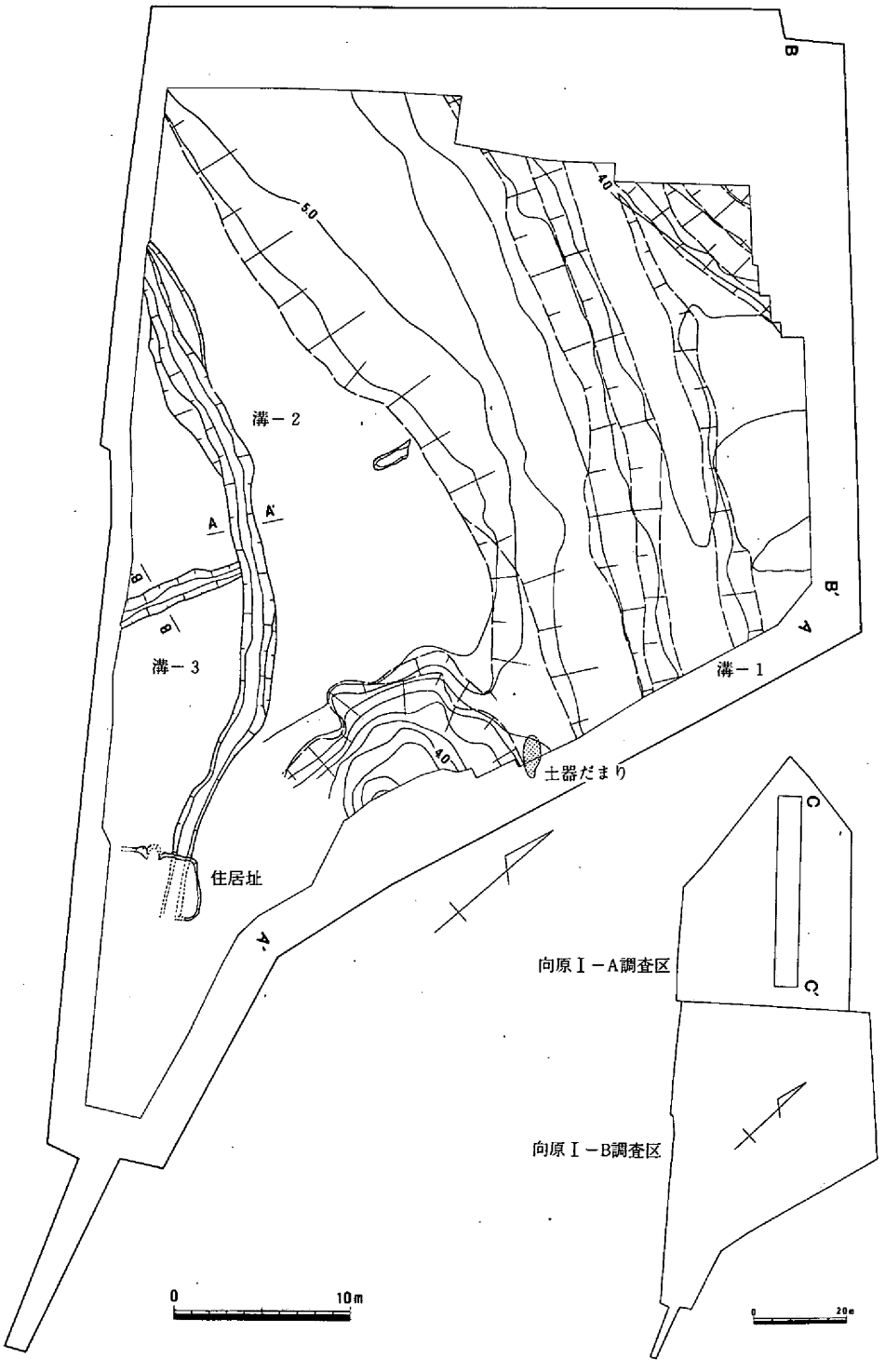
調査は、第一次調査の結果を補完するため、トレンチ状の調査区を基本に設定し調査を実施した。まず調査区を南北に分け、北側を向原Ⅰ－A区、南側を向原Ⅰ－B区（第３図）とし、さらに調査北側の足守川堤防までの三手・中井手地区にもトレンチを設定した。三手・中井手地区では、地表下約150cmにおいてもなお水平堆積層が認められ、旧河道の存在とその後の水田堆積であることを確認した。向原Ⅰ－B地区では、面的に掘り下げるとともに、「Ｔ」字状にトレンチを設定し下部の堆積状況の確認に努めた。その結果、調査区全体は旧河道内と判断でき、調査区南端部で除々に基盤層と考えられる礫層が上がっていく状況を掌握した。向原Ⅰ－B区では、後述するように南側で礫混じりの砂層を基盤層とする微高地を確認した。調査区北側は、北側に下がる低位部（旧河道）の状況を示していた。基盤層である礫層には、弥生後期の土器を中心に弥生中期末～古墳時代初頭の土器を包含していた。微高地上では鎌倉時代を中心に古墳時代中期～中世に至る遺構・遺物が存在した。

１．弥生・古墳時代の遺構・遺物

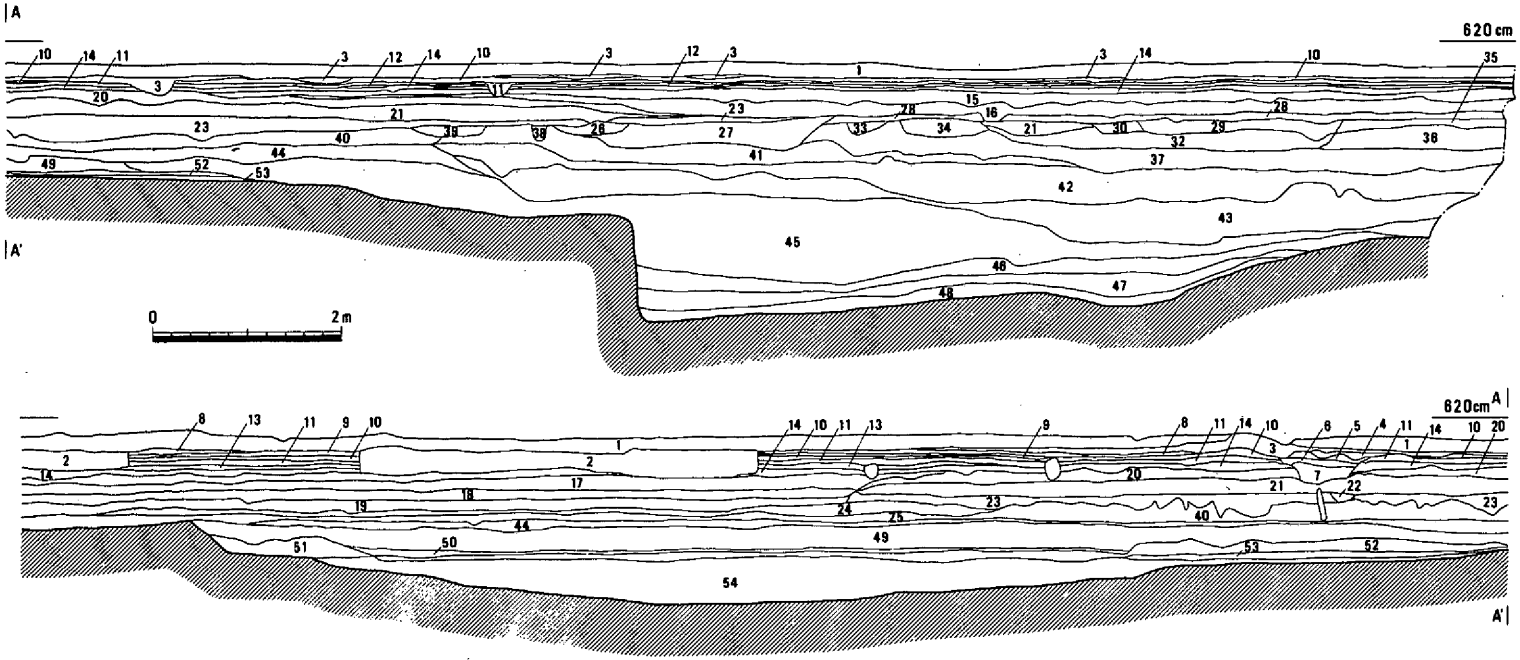
本調査区では、弥生時代の遺構は検出できなかった。しかし、弥生～古墳時代初頭の遺物（第７図）は相当量出土した。これらの遺物は、微高地上および北側の斜面の基盤層である礫層中に多く含まれていた。出土した土器は、大きな破片も含まれていたがいずれも摩滅しており、洪水時に上流から流れてきたものと考えられる。この調査区の足守川を隔てた北西約50ｍには、高塚遺跡が存在し、弥生～古墳時代を中心とする集落址が明らかになっている。北側に存在すると考えられる旧河道は、前述したように向原Ⅰ－B区北側から、向原Ⅰ－A区および三手・中井手地区をも含むもので、おおよそ約50ｍ以上のものと考えられ、旧足守川の流路とも思える規模である。

第一次調査で確認された弥生時代の包含層および生活面とはこの状況と考えられる。この礫層から出土した土器は、弥生中期末～古墳時代初頭のもので、古墳時代初頭以降の洪水により礫とともに上流から運ばれ、微高地形成時に混入したものである。

古墳時代の遺構としては、微高地上に竪穴住居、溝などが検出された。また、微高地から旧河道への落ち際にも約10ｍ幅の、溝が存在しており、この微高地は５世紀後半期頃から居住域として占地されていったものと考えられる。

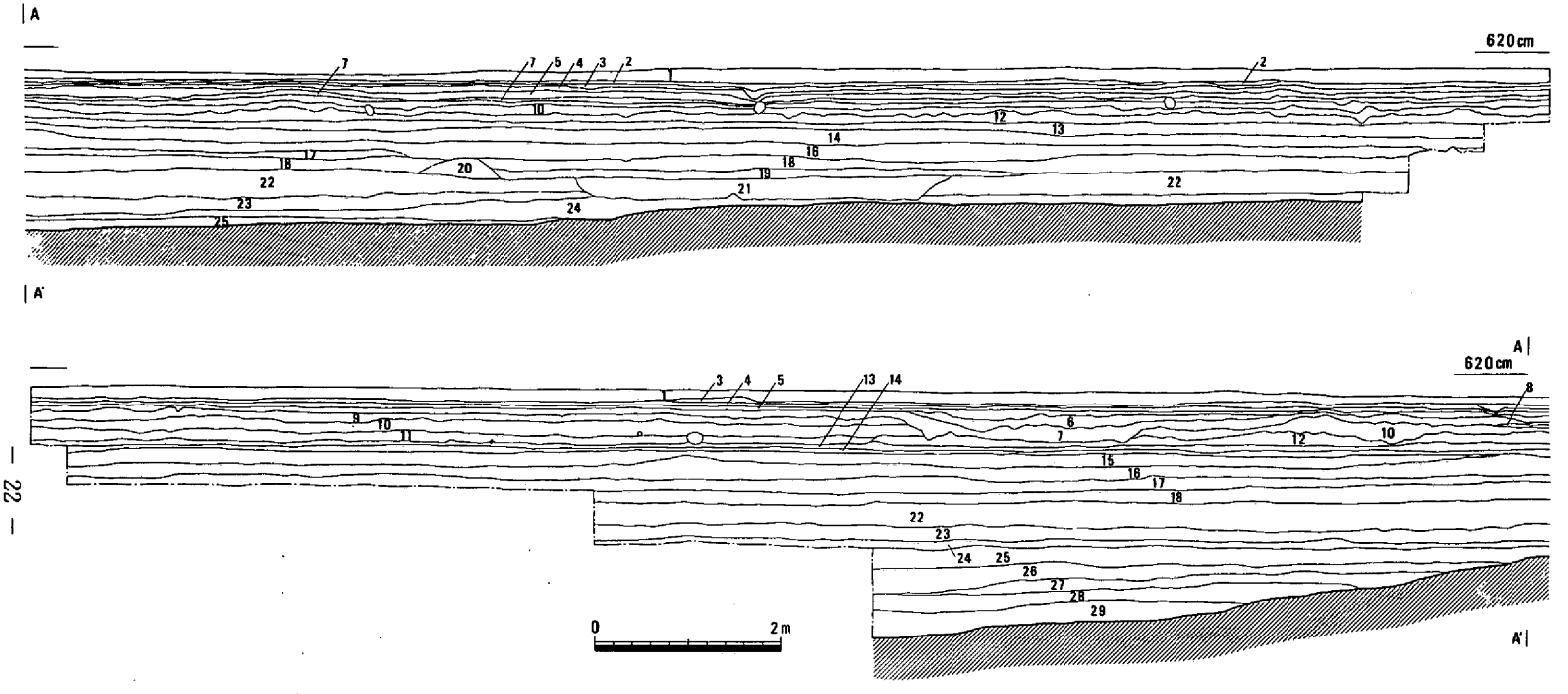


第3図　弥生～古墳時代全体図（1/400・1/1500）



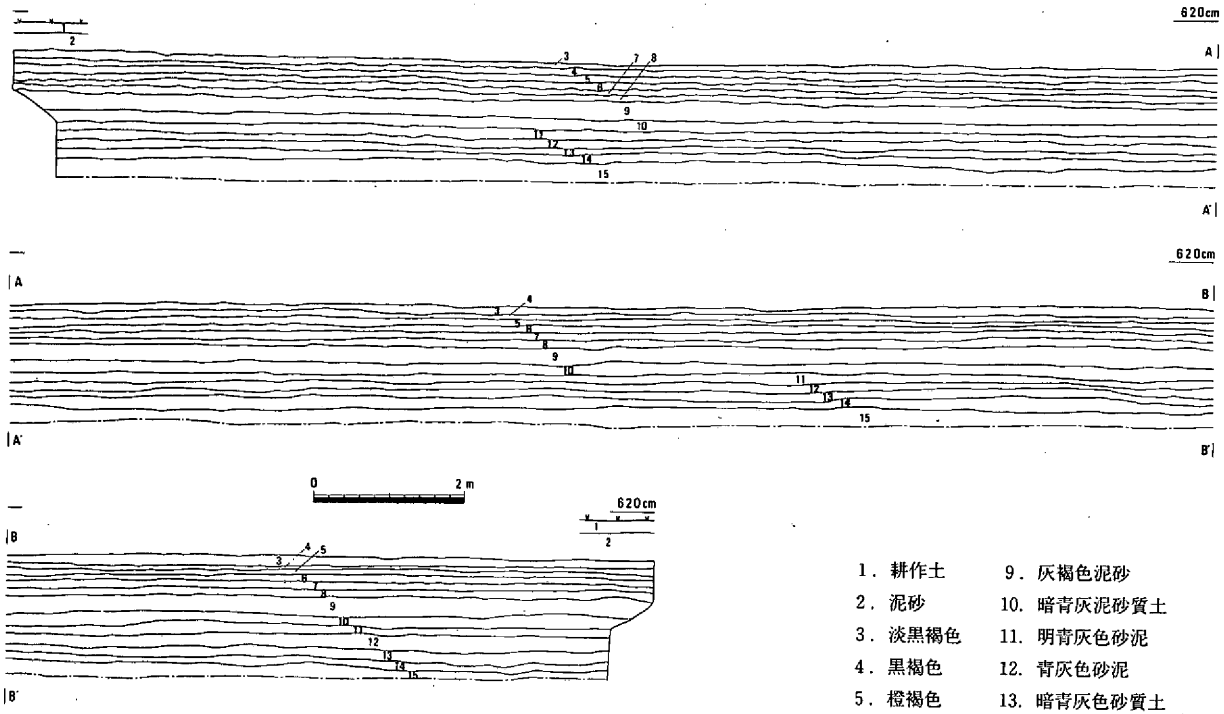
1．耕作土
2．撹乱
3．明灰色砂泥
4．明灰色泥砂
5．明灰橙色泥砂
6．黒灰色泥砂
7．橙灰色砂泥
8．橙灰褐色砂泥
9．灰褐色泥砂
10．灰茶褐色泥砂
11．暗灰黄色砂
12．灰茶褐色泥砂
13．濃灰茶褐色砂
14．淡灰茶褐色砂
15．濃灰茶褐色砂
16．淡濃灰茶褐色砂
17．灰茶褐色粘質土
18．灰黒褐色粘質土
19．濃橙灰褐色粘質土
20．暗橙黒灰色砂泥
21．暗灰色砂泥
22．暗灰褐色砂泥
23．暗灰褐色砂泥
24．明灰色粘質土
25．明灰褐色粘質土
26．暗灰黒褐色砂泥
27．淡黒灰褐色砂泥
28．橙褐色粘質土
29．淡黒灰褐色砂泥
30．黒灰褐色砂泥
31．黒灰色砂泥
32．灰黄褐色粘質土
33．淡黒灰褐色砂泥
34．淡黒灰褐色砂泥
35．淡灰黒色砂泥
36．黄茶褐色泥砂
37．明黄灰色砂
38．暗灰黒褐色砂泥
39．暗灰黒褐色砂泥
40．明灰褐色粘質土
41．黒灰色泥砂
42．暗灰茶褐色泥砂
43．暗灰茶褐色細砂
44．黒褐色砂泥
45．黄灰色砂
46．青灰色粘質泥砂
47．暗青灰色粘土
48．砂
49．明灰黄色泥砂
50．青灰色細砂
51．明灰茶褐色泥砂
52．青灰黄色砂
53．暗灰黄色泥砂
54．青灰色泥砂

第4図　断面図　(1)（1/80）（第3図A～A'）



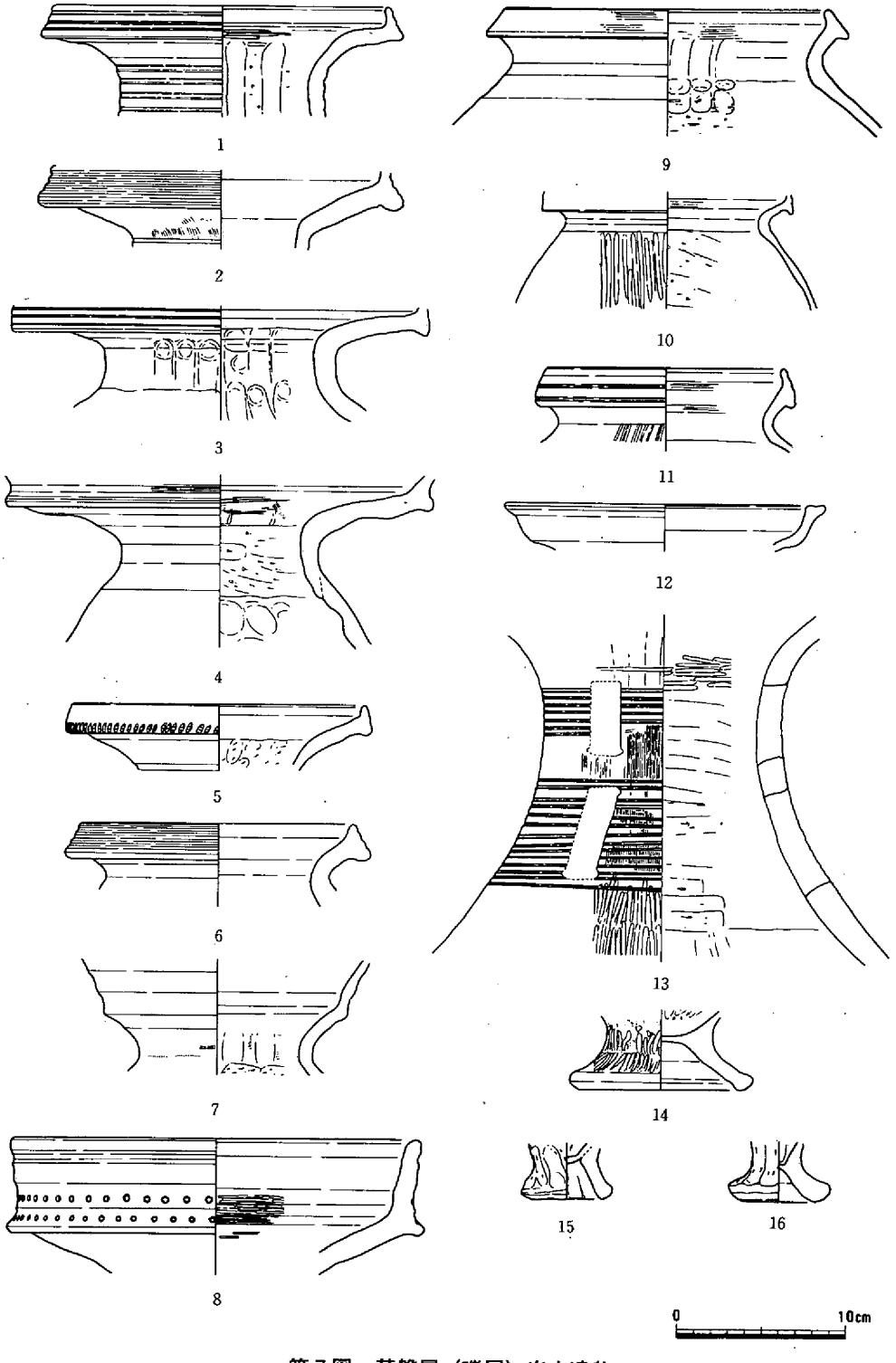
1	耕作土	7	暗灰黄色砂泥	13	灰黒褐色粘質土	19	暗灰褐色砂泥	25	明灰色泥砂
2	明灰色砂泥	8	濃灰茶褐色砂泥	14	濃橙灰褐色粘質土	20	明灰褐色砂泥（上面にFe）	26	暗青灰色砂泥
3	橙灰褐色砂泥	9	淡灰黄褐色砂泥	15	暗橙灰褐色粘質土	21	暗黒灰色砂泥	27	暗青灰色砂泥
4	黒灰色砂泥	10	淡灰茶褐色砂泥	16	明橙灰褐色粘質土	22	明灰茶褐色泥砂	28	青灰色砂泥
5	灰茶褐色砂泥	11	灰茶褐色粘質土	17	暗黄灰色砂泥	23	暗灰黄色泥砂	29	暗黒褐色粘質土
6	灰茶褐色泥砂	12	灰茶褐色粘質土	18	明灰褐色砂泥	24	青灰色泥砂		

第5図　断面図　(2) (1/80) (第3図B～B')



1．耕作土
2．泥砂
3．淡黒褐色
4．黒褐色
5．橙褐色
6．暗橙灰褐色
7．淡茶褐色
8．茶褐色
9．灰褐色泥砂
10．暗青灰泥砂質土
11．明青灰色砂泥
12．青灰色砂泥
13．暗青灰色砂質土
14．青灰色砂質土
15．青灰色粘質土

第6図　断面図　(3) (1/100) (第3図C～C')



第7図　基盤層（礫層）出土遺物

（１）竪穴住居

竪穴住居－１（第３・８・９図）

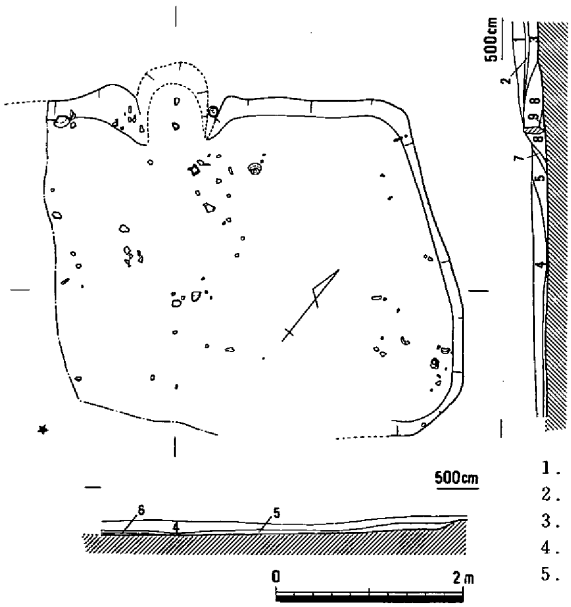
調査区の南側に溝－２を切って検出された。検出面は、中世包含層下層の淡黄褐色砂層で、この層が古墳時代の基盤層となっており微高地を形成している。竪穴住居は、微高地で南および東側にやや下がり気味の位置に検出された。平面形は、湧水のため検出しにくかったものの、不正な長方形ないし台形を呈すると考えられ、全体の約2/3が確認された。東西側および南側は、未発掘のため全体の規模は明らかでないが、推定では横約６ｍ弱、縦は約360㎝前後と考えられる。深さは約15㎝残存していた。柱穴および壁体溝は確認できなかった。北辺の中央部には、造り付けのカマドが存在した。カマドには石の支柱が残存しており、燃焼部および壁面は焼土化していた。さらに焚口部周辺には炭の堆積層が一部認められた。S1の紡錘車は、側溝を掘った際に出土したもので、レベル、位置などからみてこの竪穴住居に伴うものと考えられた。

須恵器（17～22）：17の杯蓋は、立ち上がり端面をもつものの、天井部と口縁部の境の稜線はやや短く鋭さに欠ける。18～20の杯身は、まだ口縁部端面はしっかりしているが、天井部はやや丸味をもち、さらにヘラケズリの範囲はせまくなってきている。21の有蓋高杯は、口縁部は古相を止めるものの底部は丸味をおびてきている。脚部透しは台形が三方にはいる。22の直口壺は、口縁部に２条突線を廻られ、その間に波状文を施している。

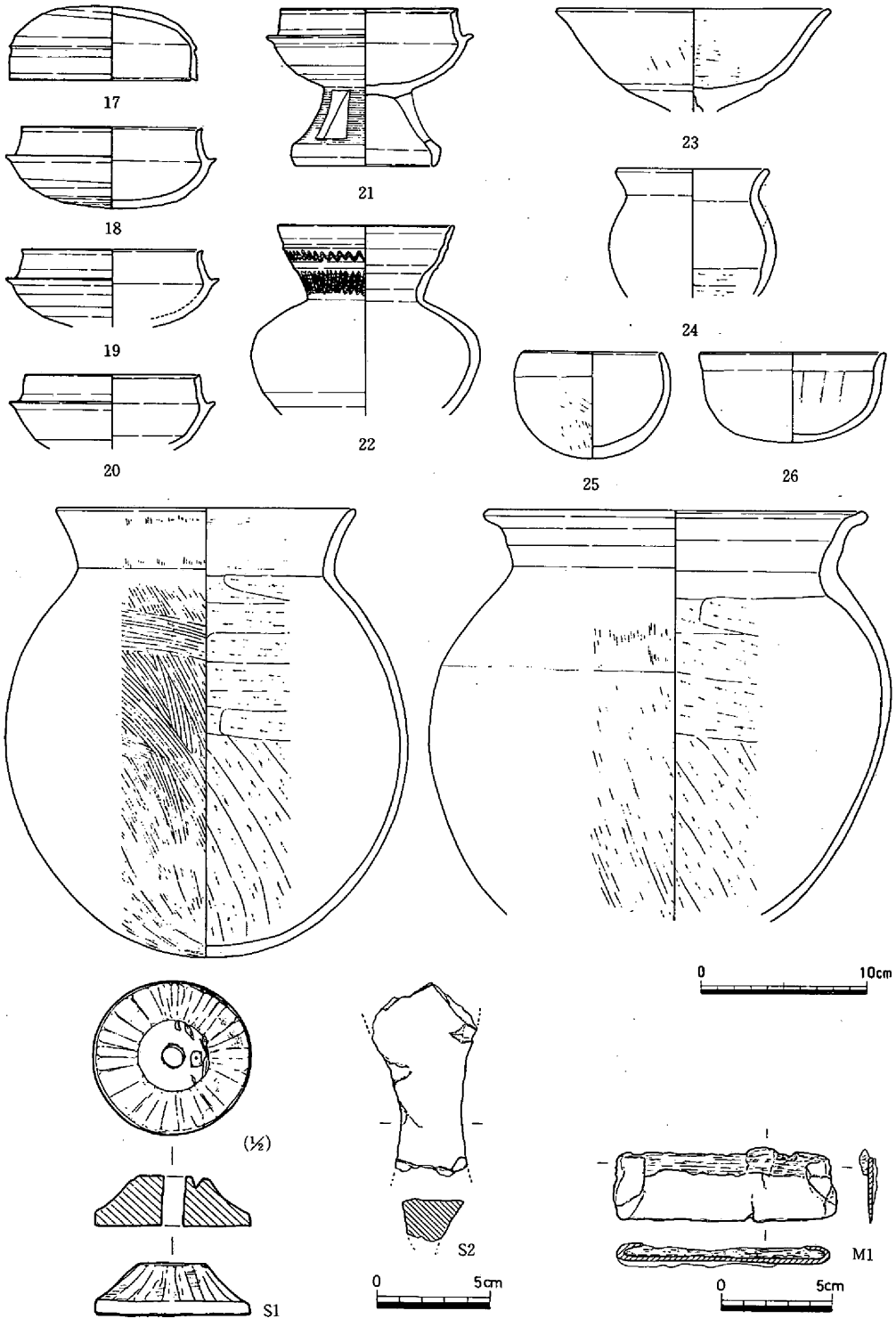
土師器（23～28）：23の高杯は、口縁部は開き気味で、やや浅くなってきている。甕は、「く」の字口縁をもつ27と、複合口縁の特徴を残す28があった。

他の石製紡錘車、砥石さらに摘鎌が出土した。

出土した須恵器はその特徴からＴＫ－23の新相と考えられ、土師器では高橋編年の13期の特徴を示す。



第８図　竪穴住居－１（1/80）



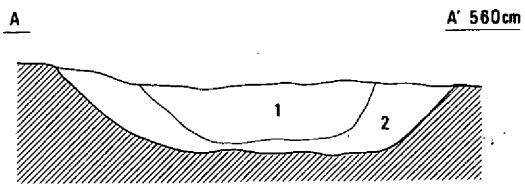
第9図　竪穴住居－1出土遺物

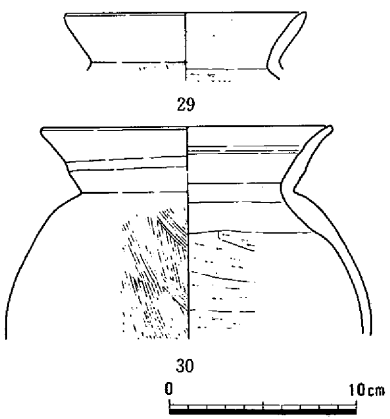
（２）溝

溝－１（第３図）

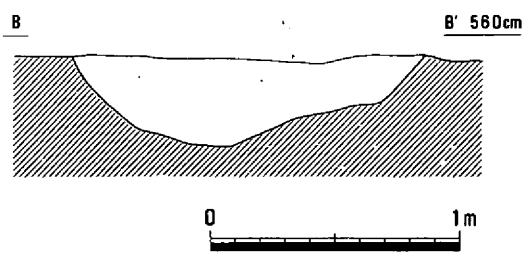
この溝は、Ⅰ－B区の北側に下がる微高地の斜面に位置する。溝は、微高地の下り（旧河道）とほぼ平行に、西から東へ流走する。規模は、幅約750cm前後で、深さは約50cmと測る。溝内は、青灰色泥砂層（第４図第54層）が堆積していた。

出土遺物は、土師器が少量検出されたが、図示できなかったものの溝－２と同様な時期と考えられる。





第10図　溝－２（1/30）出土遺物



第11図　溝－３（1/30）

溝－２（第３・10図）

溝は、微高地の縁部に位置し、微高地の下りとほぼ平行に北西～南東方向へやや弧状を描いて検出された。調査区の南部では、住居址に切られていた。規模は、幅が150～200cmで、深さは約30cmほど残存していた。

溝内は、上層に黄黒褐色泥砂、下層に黒褐色泥砂、堆積していた。出土遺物は、図示した**29・30**以外に土師器が少量検出された。

29・30は、いずれも「く」の字口縁をもつ甕で、外面をハケメ、内面をヘラケズリを施している。これらの土器は、住居址とさほど時期差はないものと考えられる。

溝－３（第３・11図）

この溝は、Ⅰ－B区の西側で礫層を切り込んで検出された。溝は、ほぼ南北方向に延び、溝－２と「T」字状に合流する。規模は、幅約140cm、深さ約35cmを測る。

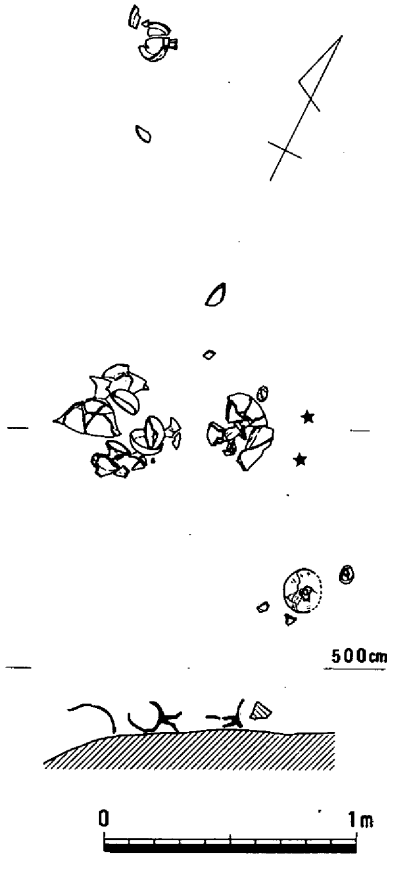
溝内には、黒褐色泥砂が堆積していた。出土遺物は、認められなかったものの溝－２と同時期のものと考えられる。

（3）土器溜り

土器溜り－1 （第3・12・13図）

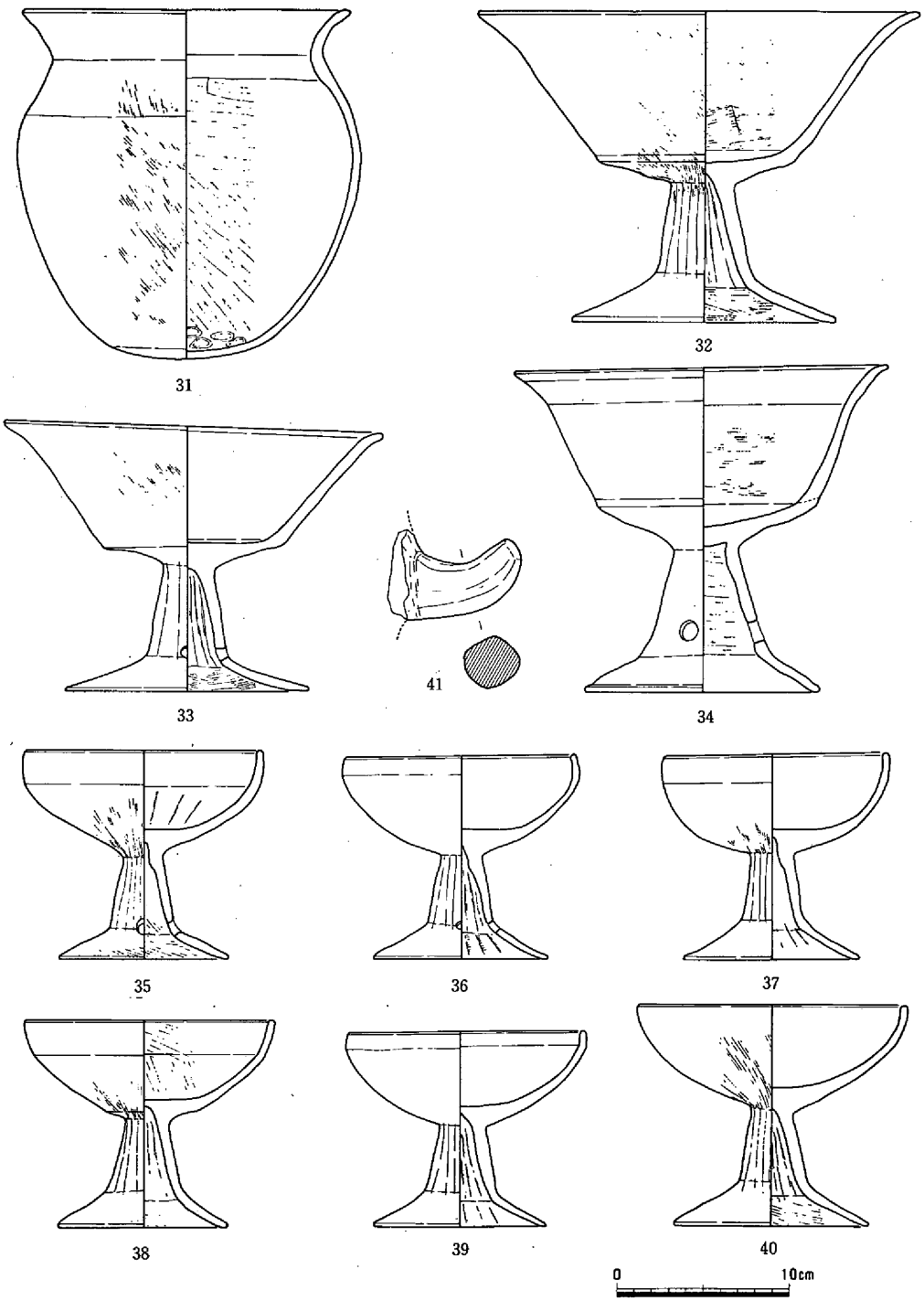
Ⅰ－B調査区の中央東端部に検出された。検出された地点は、微高地が北側に大きく下がり、さらに南側でも大きな落ち込み状のものが入り込んでできている。この落ち込み状は、低位部の入り込みと考えられるものである。この北側と南側の微高地下りの間の橋梁部状のものが約3－4mにわたって東方向にのびている。この微高地突出部の南端部に完形の高杯を主体とする土器溜りが検出された。検出された土器溜りは、微高地端部に沿うように約2.5mにわたって完形の土器が潰れた状態で出土した。特に中心部では、甕1・高杯7が集中して存在していた。土器の総数は全体で、甕1・高杯9ですべて完形品であり、さらに甑の把手部が周辺から出土した。

31の甕は、頸部から大きく外反する口縁部をもつ。外面体部は、ハケメのちナデ、内面はヘラケズリを施す。32～40の高杯には、杯部に底部と口縁部境と段を有する32～34と、椀状の杯部の35～40がある。32～34は、いずれも杯部が大きく、特に34は深い杯部を有する。脚部の円孔は、32はなく、33は脚柱部と裾部との境に1ヶ所、さらに34は脚柱部に3ヶ所に穿つされていた。一方35～40の椀状の杯部をもつ高杯は、39を除く杯部は類似した形態を示すが37は底部が丸味を帯びている。杯部外面は、ハケメのちナデを施すもの（35・37・38・40）があり、内面はハケメを残すもの（35・38）と、ていねいなナデで仕上げる（36・37・39・40）があった。脚裾部内外面は、ハケメののちヨコナデを施している。脚部の円孔は、37～40には認められず、35・36には1ヶ所に穿たれていた。



第12図　土器溜り（1/30）

このような微高地（河道）縁辺部に放置されたような土器（群）は、後述する向原Ⅱ区調査区および津寺遺跡野上田調査区でも認められる。向原Ⅱ区では、当土器溜りの高杯と酷似し、須恵器も混ざる。このような遺構に伴わない土器（群）は、完形の土器で高杯を主体としている。このような状況は意図的な放置と考えられ、河道縁辺部（微高地縁辺部）で行われた祭祀行為を想起できる。



第13図　土器溜り出土遺物

2．古代・中世の遺構・遺物

古墳時代に認められた微高地は、古代・中世においても地形的な大きな変化はなく、調査区東端に存在した落ち込み状の地形は堆積が進み微高地化した程度である。北側に存在した低位部（旧河道）は、第３図北隅の下層においても黒色土器が検出され平安時代にもなお低位部として存在した状況を示している。その後第５図のように水平堆積が進み除々に水田化したと考えられる。

微高地上では、古代の遺構としては、南端部で土壙墓１基を確認するのみで、古墳時代以降顕著な遺構・遺物は認められない。鎌倉時代に入ると第14図のような居住域として再び占地される状況を示している。微高地直ぐ南側に建物－１～３を中心に土壙墓、土壙などが集中している。さらに調査区南側にも建物は構成でもなかったものの柱穴が多数集中して検出され、その周辺に土壙墓、溝等が認められた。

（１）建物

建物－１（第14・15図）

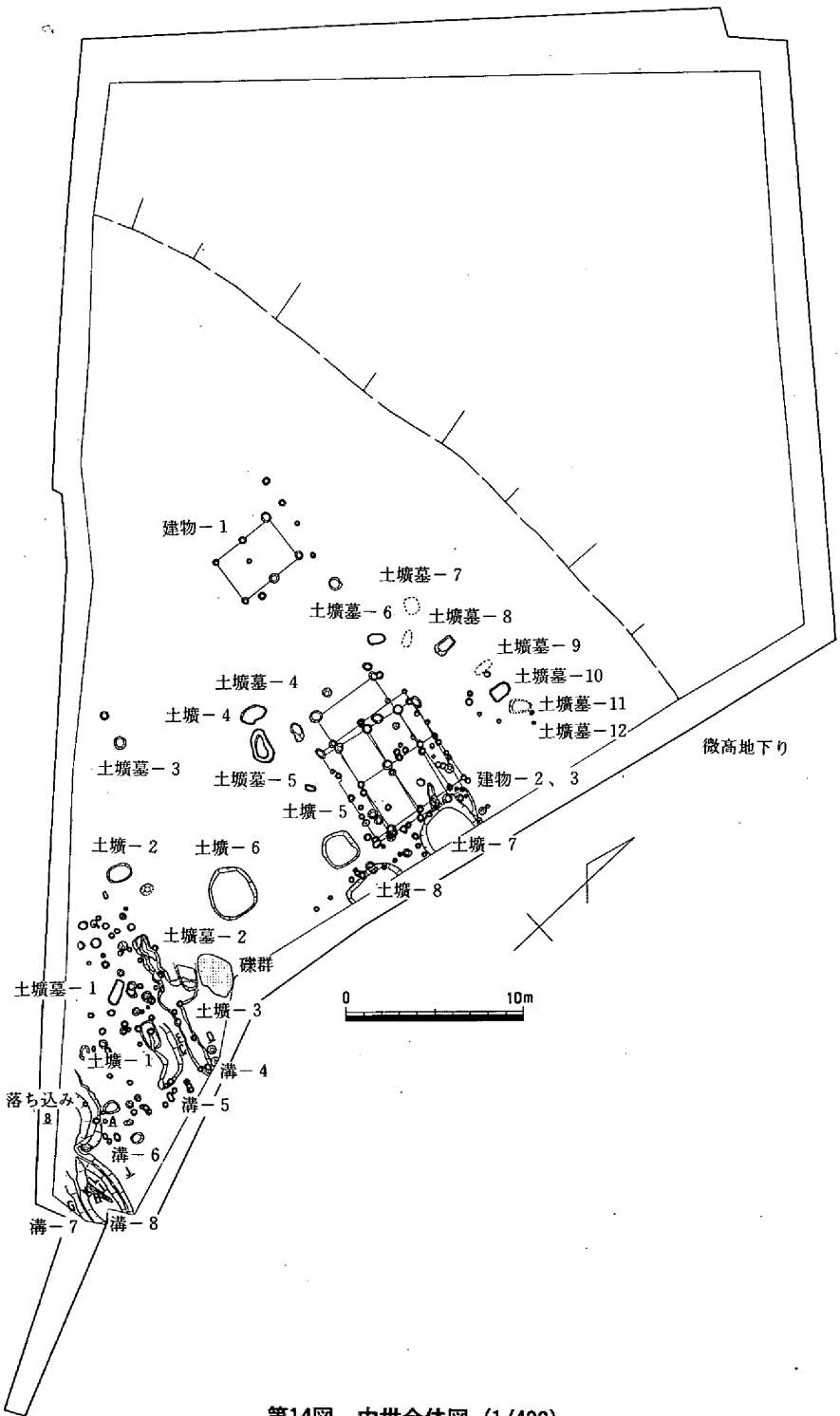
調査区Ⅰ－B区の中央に検出された東西棟の掘立柱建物である。桁行２間、梁間１間の構造をもち、規模は桁行372～398cm、梁間約276～285cmを測りやや歪んでいる。床面積は約10.5㎡を測る。桁間は180～198cm、梁間は276～285cmとかなり変化がある。柱穴は、いずれも円形で、直径は40～60cmで、深さは大きな差はない。柱穴の埋土は、暗灰褐土を基本としていた。建物の棟の方向はE－６°30′－Sで他の建物とあまり差は認められない。

出土遺物はなかったものの、諸状況からみて建物－２・３と同時期と考えられる。

建物－２（第14・16図）

建物－１の東約８mに検出された東西棟の掘立柱建物である。桁間２間、梁間２間で中央にも柱をもつ身舎に、南と北の２面に庇がつき、さらに西側に張り出しが付く。この西側への張り出しについては、この建物に付属するかはどうかは難しくここでは付属するとして報告する。身舎の桁行全長は約578cm、梁間全長が約400cmを測り、棟方向はE－14°30′－Sを示す。

柱間は、桁行が西側で285cm、東側で293cm、梁間は南側で197～199cm、北側で201cmと左右前後とやや差はあるものの一定の規格性が認められる。庇は、２間の間に柱が入り５本で構成されており、桁行全長577cm、梁間97－100cmはほぼ同規模である。柱間は、南側で西から169cm、141cm、116cm、151cmで、北側では西側から140cm、157cm、144cm、136cmと測る。また、西側の張り出し部については、桁行が172cmで、梁間は間に柱穴がなく１間で400cmと身舎とは直線的に延びる。柱穴は、身舎で25～50cm、庇では20～30cmとやや小さく、張り出し部は50～



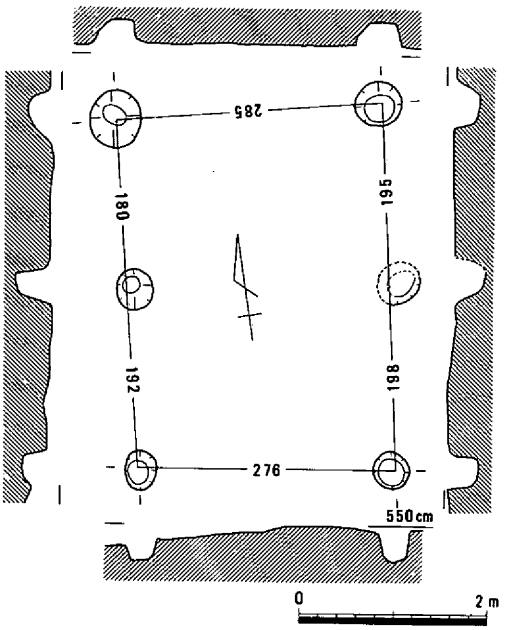
第14図　中世全体図（1/400）

60cmとやや大きい。柱穴の深さは、相対的に庇の柱穴は浅い。また、張り出し部を含む床面積は約41.3㎡となり、張り出し部を除くと約34.4㎡である。

出土遺物は、各柱穴より早島式土器の椀、小皿等の破片が出土し、時期の詳細は不明で鎌倉時代としておく。

建物－3（第14・17図）

建物－2とほぼ重複して検出された掘立柱建物である。建物－2との先後関係は明らかでないが、いずれにしろ建物－2・3は同一住居で建て替えられたものであると考えられる。

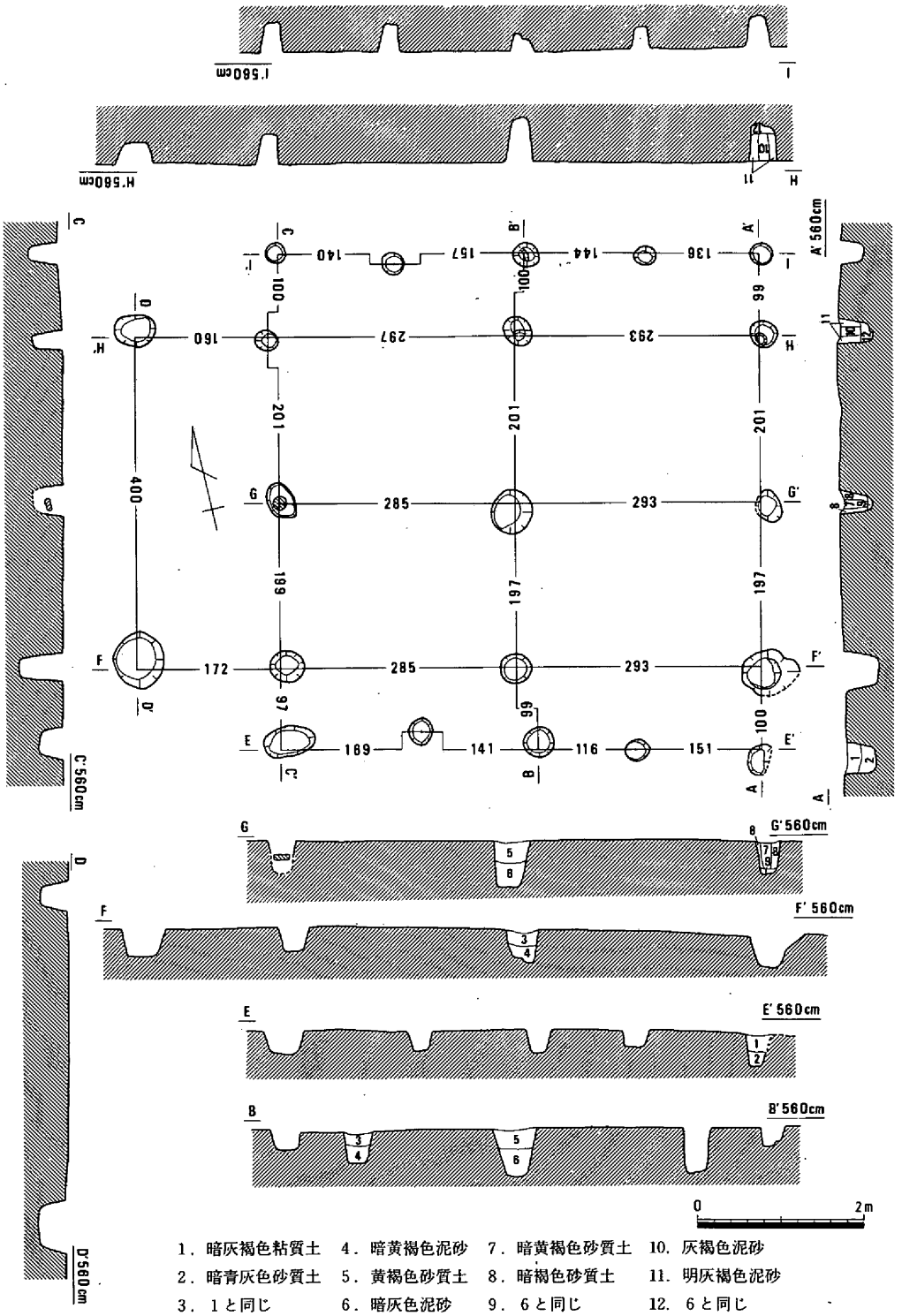


第15図　建物－1（1/80）

建物は、桁行が2間、梁間2間の身舎に南と北に庇が付き、構造的には建物－2と同様である。棟方向は、E－13°－Sで建物－2とは若干の差違をみせる。また、庇の柱穴については一部建物－2と重複している。身舎の桁行全長は569～571cm、梁間全長は397～399cmを測る。柱間は、桁行西側で約266cm、東側で304～305cmで、建物－2と同様に東側柱間がやや広い。梁間は、西側は南から197cm、200cmであるが、東側では柱の間にそれぞれ柱穴が存在しており南から85cm、115cm、104cm、95cmを測る。この間の柱穴については、建物－3に伴うかどうかの判断は難しい。庇については、南、北とも5本で構成されており、南側での柱間は西から138cm、131cm、158cm、133cmで、北側庇は西から139cm、127cm、148cm、144cmである。庇は、南側に比べて北側の方がやや規模は大きい。全体の床面積では約33.3㎡で、建物－2の張り出し部を除いた約34.4㎡とほぼ同規模である。

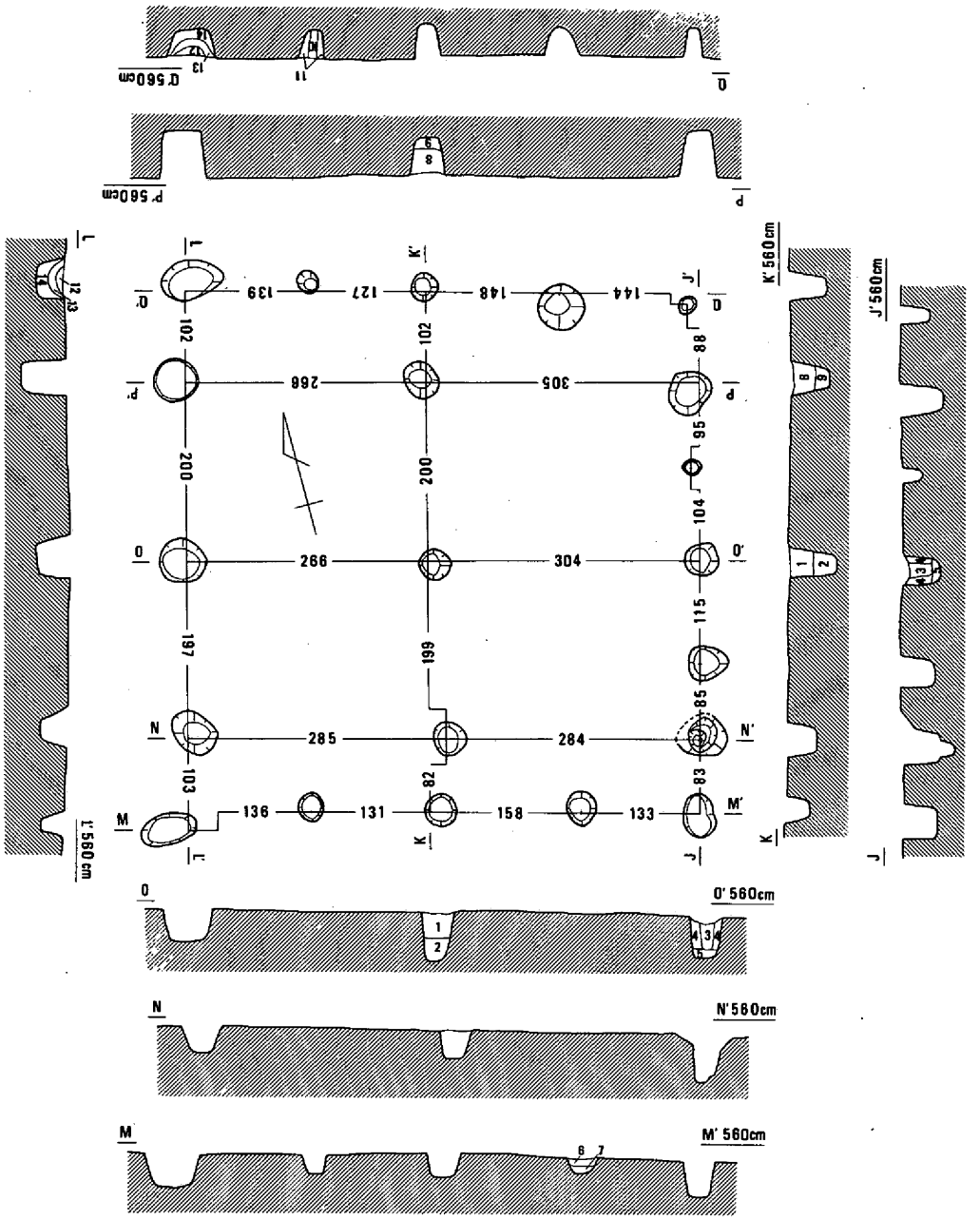
出土遺物は早島式土器の椀、小皿が少量出土した。時期は建物－2と同様である。

以上の建物－1～3は、出土遺物等からみて鎌倉時代の前半期と考えられる。建物－2、3は建て替えのもので、建物－1と建物－2・3が同時に存在した可能性が強い。また、建物－2・3の西辺および北辺には同時期と考えられる土壙墓が9基確認されている。建物－2・3が主要建物と考えられ、その周辺域に埋葬されており当時の風習について興味深い埋葬配置と考えられる。また、土壙墓は、西辺、北辺に限定され、土壙墓の人骨頭位もまた北方向を意識されていた。



1．暗灰褐色粘質土　4．暗黄褐色泥砂　7．暗黄褐色砂質土　10．灰褐色泥砂
2．暗青灰色砂質土　5．黄褐色砂質土　8．暗褐色砂質土　11．明灰褐色泥砂
3．１と同じ　6．暗灰色泥砂　9．６と同じ　12．６と同じ

第16図　建物－２（1/80）



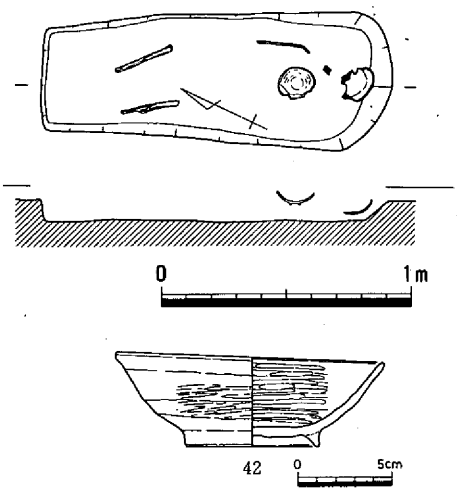
1．暗茶褐色砂質土　6．暗黄褐色粘質土
2．暗灰褐色砂質土　7．暗青灰色粘質土　11．暗灰褐色泥砂
3．暗褐色砂質土　8．暗灰褐色粘質土　12．10と同じ
4．暗黄褐色砂質土　9．7と同じ　13．黄灰褐色砂質土
5．暗灰色砂質土　10．灰褐色泥砂　14．2と同じ

第17図　建物－3 (1/80)

（２）土壙墓

この調査区では、13基余りの土壙墓が検出された。特に建物－２・３の北側および西側に集中して認められた。これらの建物－２・３の周辺の土壙墓は、建物－２・３の居住者と考えられ、住居と埋葬との関係を考える上で良好な状況を示すものと思われる。

土壙墓－１（第14、18図）

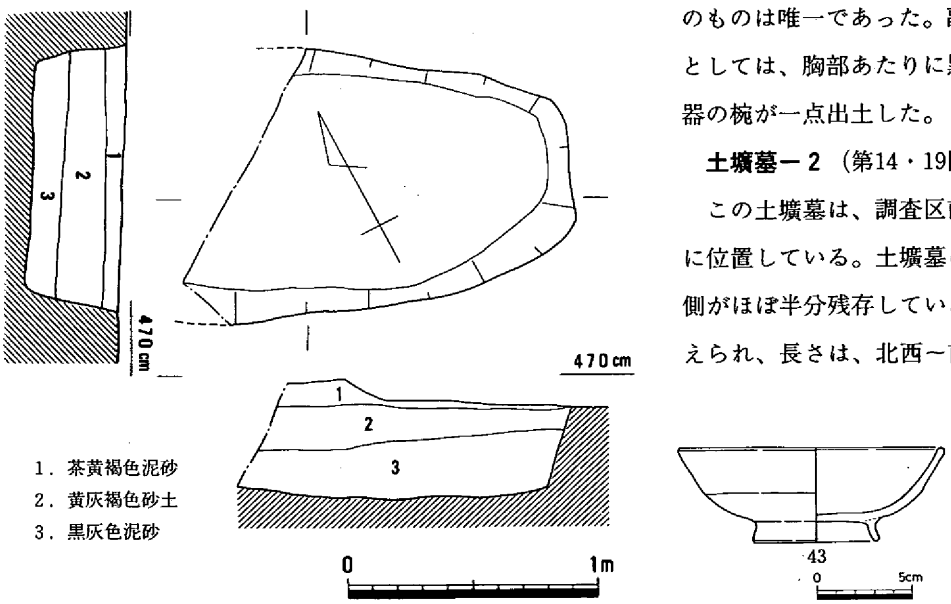


第18図　土壙墓－１（1/30）・出土遺物

この土壙墓は、調査区南端の土壙墓－２の北東約４ｍに位置する。土壙墓－１と同様に、溝、柱穴等が存在した下層に検出できた。土壙墓は、長さ約140ｍ、幅約50㎝を測り、平面形は隅丸長方形を呈する。墓壙の長軸は、北北西から南南東方向を示す。墓壙の深さは、約８㎝ほどした残存していなかったが、墓壙内には、頭部および手、足部の骨が部分的に検出できた。頭部は、ほぼ南東方向に位置していた。今回の調査で検出した土壙墓の中で頭部の方位が判断できるものは、建物－２・３の周辺を中心にほぼ北および北西方向を示すもので、この土壙墓－２のように南東方向のものは唯一であった。副葬品としては、胸部あたりに黒色土器の椀が一点出土した。

土壙墓－２（第14・19図）

この土壙墓は、調査区南端部に位置している。土壙墓は、東側がほぼ半分残存していると考えられ、長さは、北西～南東方



1．茶黄褐色泥砂
2．黄灰褐色砂土
3．黒灰色泥砂

第19図　土壙墓－２（1/30）・出土遺物

向で推定約200cm前後の規模と思われる。幅は、約105cmで、深さは約45cmを測る。土壙墓内は、3層がほぼ水平に堆積しており、第2・3層に人骨と思われるものが少量認められた。出土遺物は、43の早島式土器の椀が1点出土した。

土壙墓－3（第14・20図）

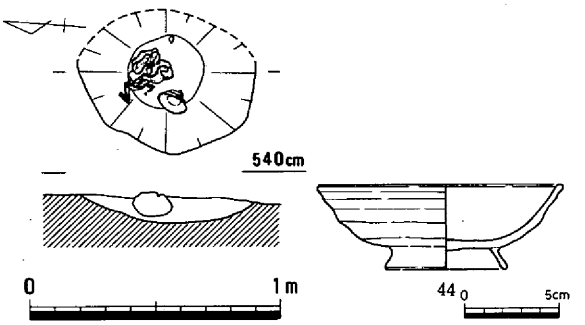
建物－2・3の南約12m、土壙－2の東に隣接して検出された。径65～70cmの円形を呈する墓壙が残存していた。墓壙内には、人骨頭部が検出でき、早島式土器の椀の完形品1点を伴っていた。頭部骨の方向などについては不明である。

土壙墓－4（第14・21図）

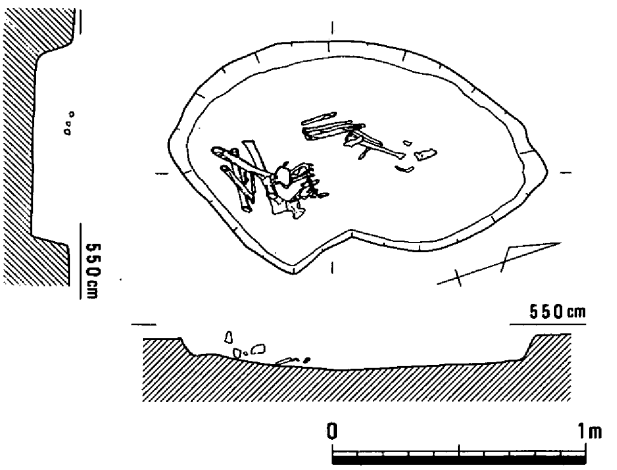
建物－3の南西隅より南西約4mに検出された。平面形は、ほぼ南北方向に長辺約150cm、短辺約90cmの不正楕円形を呈し、深さは約12cm残存していた。人骨は、頭部骨は残存せず、他の骨から成人の女性との鑑定を受けた。出土遺物は認められなかった。

土壙墓－5（第14・22図）

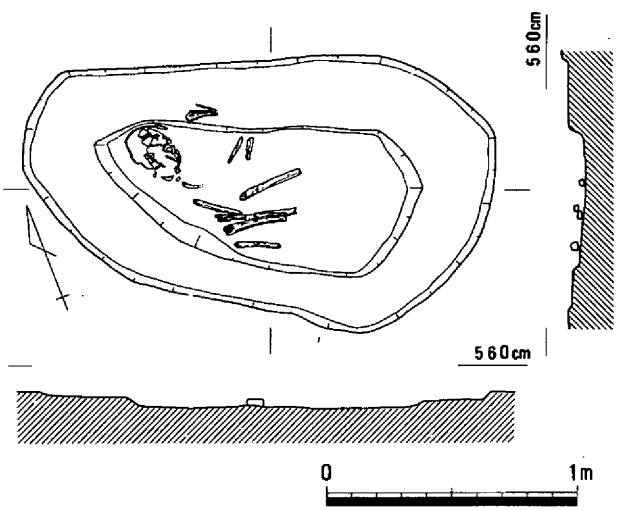
建物－3の南西、土壙－4の東に隣接して検出された。墓壙は、2段掘りなっており、平面形は、約190×110cmの長楕円形を呈する。墓壙の長軸はほぼ東西方向に向いている。鑑定では壮年男性と推定されている。出土遺物はない。



第20図　土壙墓－3（1/30）・出土遺物



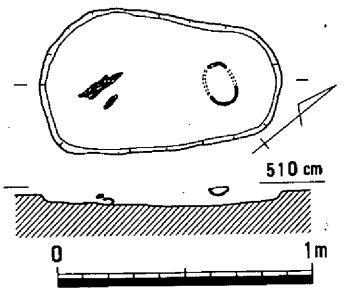
第21図　土壙墓－4（1/30）



第22図　土壙墓－5（1/30）

土壙墓－６（第14・23図）

建物－２より北西約２ｍに検出された。平面形は、95×55cmの楕円形を呈し、深さは約６cmと浅く、人骨の残存状態も悪かった。頭蓋骨、脛骨の一部が検出されたのが性、年齢等については不明である。墓壙の主軸は北東－南西方向で頭部は北側に位置していた。出土遺物はない。



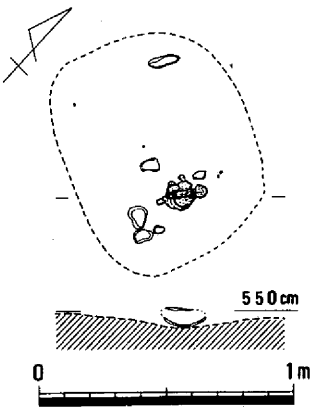
第23図　土壙墓－６（1/30）

土壙墓－７（第14・24図）

建物－２・３の北西、土壙－６の北約２ｍに検出された。掘り方については明らかではなく、頭蓋骨の一部と歯が６本検出された。頭部周辺には、礫が数点散在していた。鑑定では壮年の推定をされている。出土遺物は認められなかった。

土壙墓－８（第14・25図）

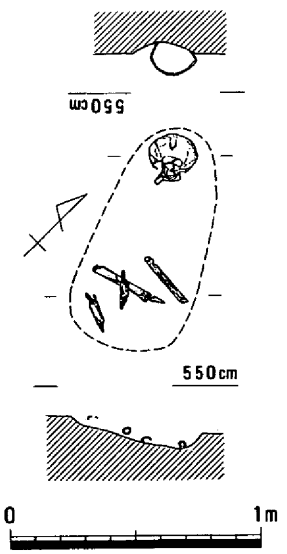
建物－３の北西、土壙－７の南東２ｍに検出された。この墓壙掘り方も不明瞭であった。骨の残存状態からみて主軸は北北西－南南東方向にとり、頭部も北側に位置している。人骨は、頭部および足部が検出されたが破損が著しかった。鑑定では、成人男性と推定された。



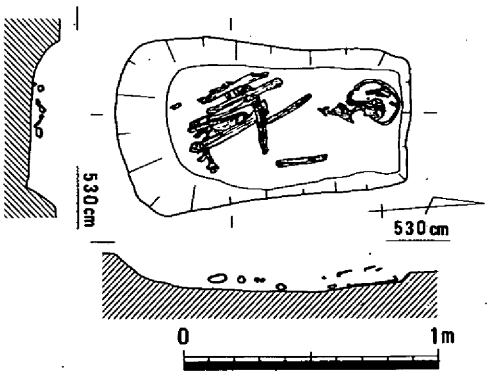
第24図　土壙墓－７（1/30）

土壙墓－９（第14・26図）

建物－２の北側、土壙－８の北東約1.5ｍに検出され



第25図　土壙墓－８（1/30）

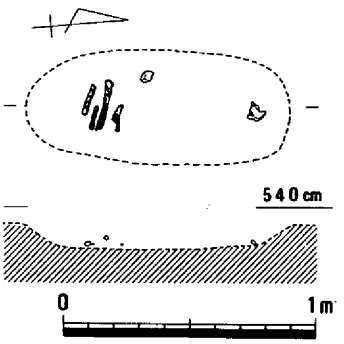


第26図　土壙墓－９（1/30）

た。平面形は、北側が方形気味で、南側は隅丸方形を呈し、長辺約115cm、短辺約65cmを測る。人骨は、今回検出した土壙墓の中では最も残存状態が良かった。鑑定では、壮年の男性と推定された。

土壙墓－10（第14・27図）

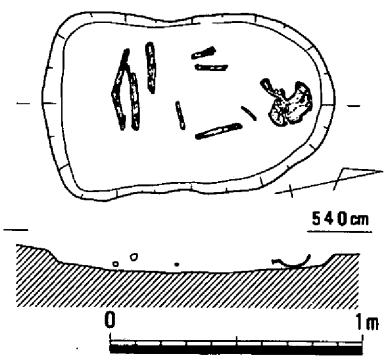
建物－2・3の北側、土壙－9の東約2mに検出された。掘り方等については明らかではない。しかし、人骨の位置関係からみて、墓壙は南北方向に主軸をとると考えられる。人骨は成人と判断されるものの性別は不明である。



第27図　土壙墓－10（1/30）

土壙墓－11（第14・28図）

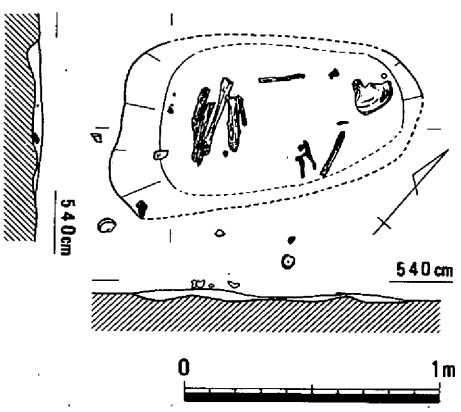
建物－2・3の北、土壙墓－10の東約1mに隣接して検出された。平面形は、115×75cmの楕円形を呈しており、深さは約10cm残存していた。墓壙は、ほぼ南北方向は主軸で、頭部も北側に位置している。鑑定では成人男性と推定された。



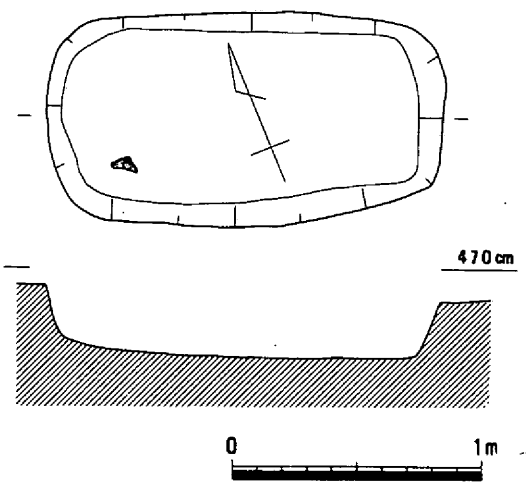
第28図　土壙墓－11（1/30）

土壙墓－12（第14・29図）

建物－2・3の北側、土壙墓－11の東50cmに検出された。平面形は、約120×70cmの不正楕円形を呈し、深さは約5cm残存していた。人骨は、頭部から足部まで残存状態は悪かったものの検出された。鑑定によれば壮年の男性と推定された。



第29図　土壙墓－12（1/30）



第30図　土壙－1（1/30）

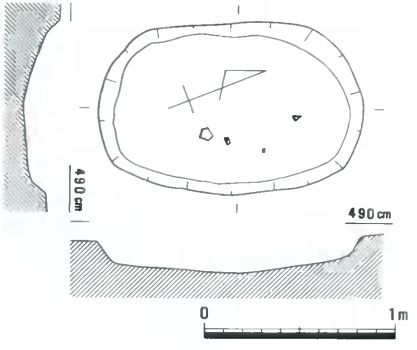
（３）土壙

土壙－１（第14・30図）

調査区南側の溝－５の下層に検出された。平面形は、160×85㎝の長楕円形を呈し、深さは約25㎝を測る。土壙はほぼ東西方向の主軸をとる。出土遺物、人骨等は認められなかったものの墓壙の可能性が考えられる。

土壙－２（第14・31図）

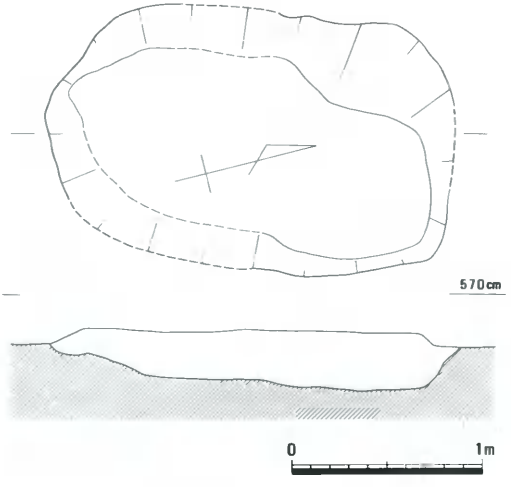
土壙墓－３の南西約１ｍに隣接して検出された。平面形は、約140×90㎝の楕円形を呈しており、深さは約18㎝残存していた。土壙の主軸は、ほぼ北北東～南南西方向にとる。墓壙としての可能性は考えられるものの人骨は認められなかった。出土遺物は、早島式土器の椀・小皿が少量検出された。



第31図　土壙－２（1/30）

土壙－３（第14・32図）

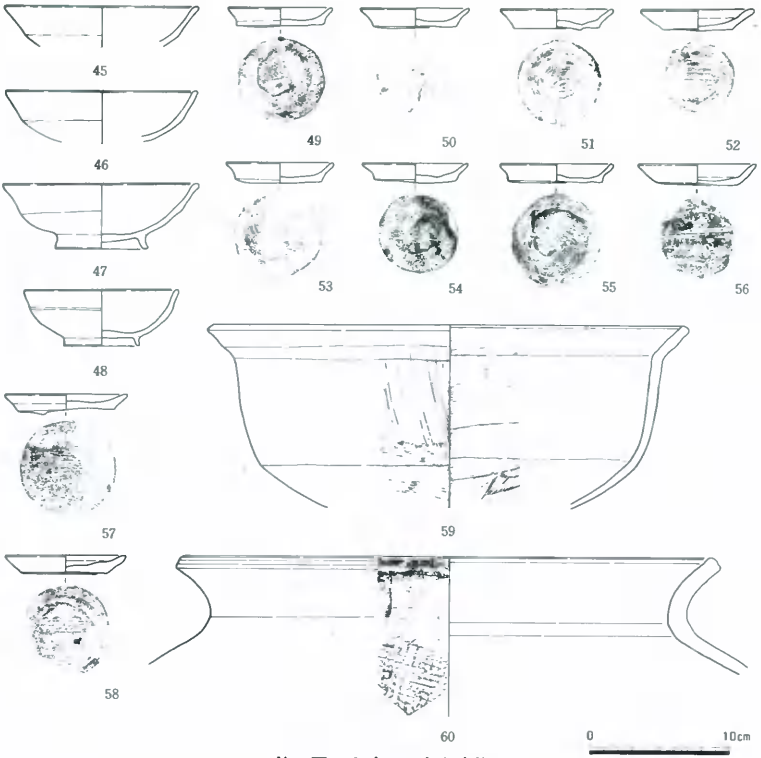
調査区南側の溝－４の中央部に重複して検出された。土壙は、溝－４を切っており、平面形は215×135㎝の不正楕円形を呈している。深さは、約25㎝残存しており、暗茶灰色土が堆積していた。土壙内からは、図示した早島式土器の椀・小皿などを中心に大量に検出された。また、その椀・小皿には完形品を多く含んでいた。さらに59の鍋、60の亀山焼まで認められた。



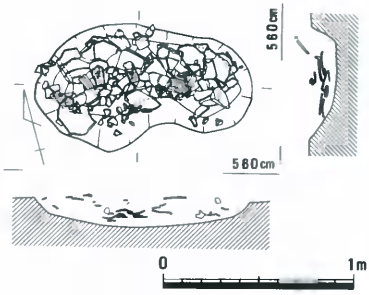
第32図　土壙－３（1/30）

土壙－４（第14・34・35図）

建物－２・３の南西隅部に隣接して検出された。土壙の平面形は長楕円形を呈



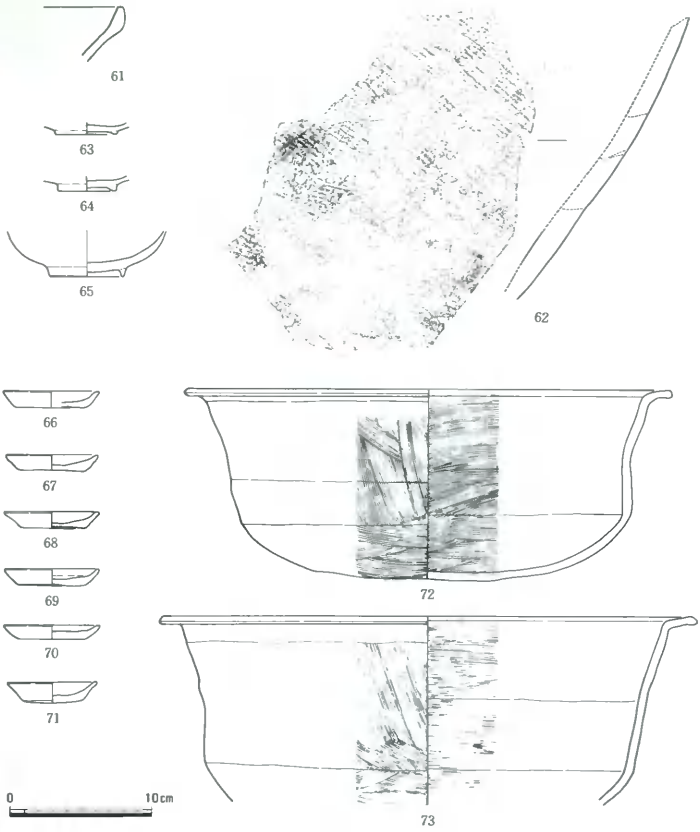
第33図　土壙－3出土遺物



第34図　土壙－4 (1/30)

し、ほぼ東西方向に長軸をとり約115×65cmを測る。深さは、約15cmと比較的浅かった。土壙内には、一面に土器が集積しており、完形品も含まれていた。

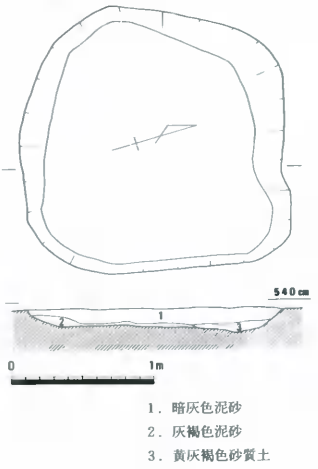
この土壙の性格は、前述した建物と土壙墓との位置関係からみても墓壙としての可能性も考えられる。この土壙からは人骨は認められず、さらに前述した土壙墓からは土器の集積を伴うものは検出されなかった



第35図　土壙－４出土遺物

点などからみて墓壙としての可能性は薄いと考えている。

61は、東播系のこね鉢で、**62**は亀山焼の大甕である。**63～65**は、いわゆる早島式土器の椀でやや小形になっている。高台部は、短かくて退化したものが付く。**66～71**は、早島式土器の小皿で、口径も小さく、口縁部は外反せず器壁はやや厚目であり新相の特徴を示している。**72・73**は大型の鍋で内外面ともハケメを施しているこれらの土器は、土壙－３の出土遺物よりも新相である。

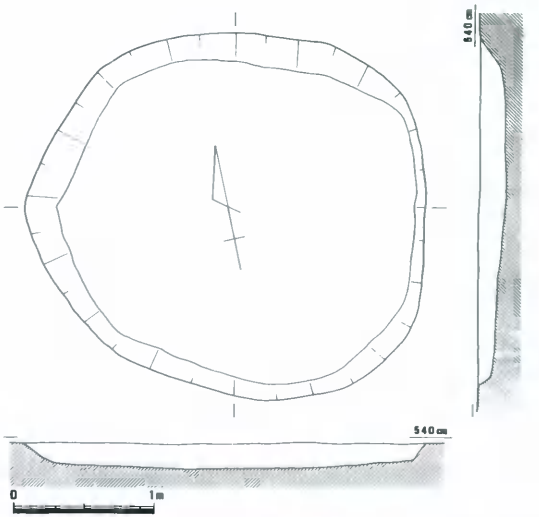


土壙－5（第14・36図）

建物－2・3の南側約1ｍに隣接して検出された。土壙は、185×190㎝の不正円形を呈している。深さは約15㎝残存しており第1～3の堆積層が認められた。周辺にも同様な土壙－5～8が存在し、その土壙の堆積土と類似している。性格については不明である。

出土遺物は、図示した早島式土器の椀・小皿が検出された。

第36図　土壙－5（1/40）・出土遺物



土壙－6（第14・37図）

建物－2・3を中心とする遺構群と調査区南端部の土壙墓－1・2などの遺構群のほぼ中間に検出された。土壙－5のほぼ南側約5ｍに位置している。

土壙の規墓は、285×260㎝でほぼ円形を呈している。深さは約15㎝残

第37図　土壙－6（1/40）・出土遺物

存しており、暗灰褐色土が堆積していた。出土遺物はあまり認められず、図示した早島式土器の椀のほか小皿片が若干出土した。

77・78の早島式土器の椀は、口径および高台径も小さくなっている。付高台は低くて三角形を呈しており新相のもので、土壙－４の時期と対応する。

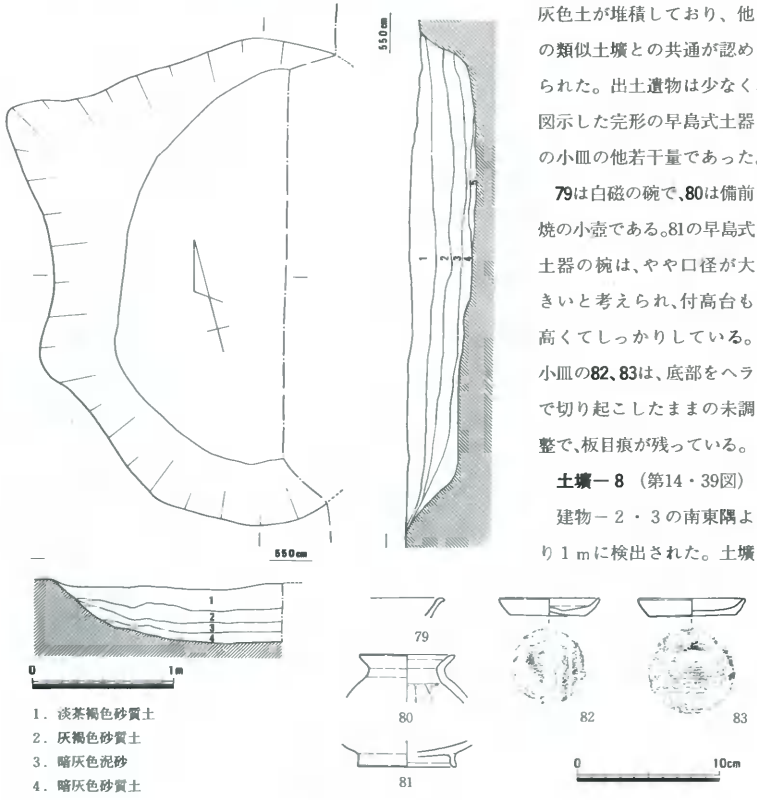
土壙－７（第14・38図）

建物－２・３の東側に接して検出された。土壙の東側は、未発掘のためほぼ西側半分が検出された。土壙は、部分的に突出部があるものの、径約350㎝前後のほぼ円形を呈すると考えられる。深さは約45㎝で、土壙内には第１～５層がレンズ状に堆積していた。土壙下部には、暗灰色土が堆積しており、他の類似土壙との共通が認められた。出土遺物は少なく、図示した完形の早島式土器の小皿の他若干量であった。

79は白磁の碗で、**80**は備前焼の小壺である。81の早島式土器の椀は、やや口径が大きいと考えられ、付高台も高くてしっかりしている。小皿の**82**、**83**は、底部をヘラで切り起こしたままの未調整で、板目痕が残っている。

土壙－８（第14・39図）

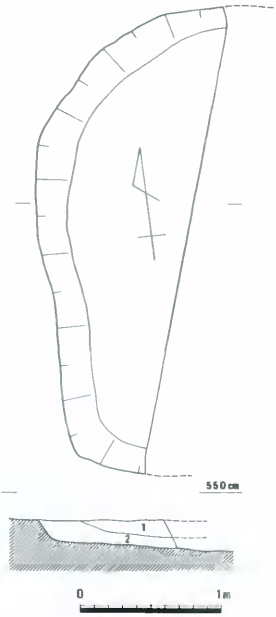
建物－２・３の南東隅より１ｍに検出された。土壙



第38図　土壙－７（1/40）・出土遺物

－７の南約２ｍ隔てた位置で、土壙－７と同様に壁際に検出された。土壙は、検出されたのが一部であるため平面形、規模については明らかではないものの、状況からみて土壙－７と同様の径約350㎝前後の円形を呈すると推定される。深さは約20㎝で、上下２層が堆積していた。出土遺物は少なく、早島式土器の椀、小皿片が少量出土した。時期は他の土壙－５～７と同様と考えられる。

これらの土壙－５～８は、その配置をみるとほぼ集中して存在し、平面形、規模も共通している。さらに堆積土においても類似しており、時期も同時期のものと考えられる。また、これらの土壙の性格については不明と言わざるを得ないが、土壙の深さ等から推定して、土壙下部に堆積していた粘質土層を採るためのものであった可能性が１つ考えられることを付記しておく。



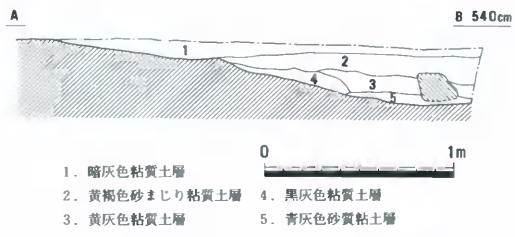
第39図　土壙－８（1/30）

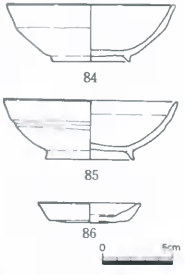
（４）落ち込み

調査区南端の西側壁際に検出された。検出が一部であったためここで落ち込みとして報告する。第40図の第２～５層に相当し、出土遺物として84～86など出土した。

（５）溝

今回の調査では、中世と考えられる溝は５本検出され





第40図　落ち込み（1/30）・出土遺物

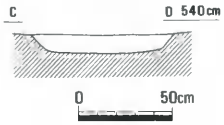
た。いずれも調査区の南端部に集中して認められた。

溝－４（第14・41図）

調査区の南端部に土壙－３と重複して位置している。溝は、ほぼ東西方向に約９ｍ検出された。溝の中央では、土壙－３に切られていた。規模は、幅約75㎝で、深さは約10㎝を測る。溝内は、暗灰色土が堆積しており、早島式土器の椀、小皿～中心に大量に検出された。

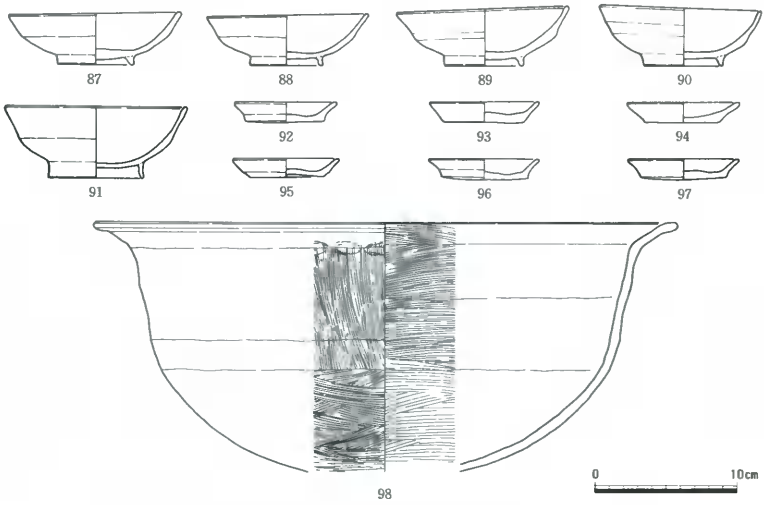
この溝－４から南側の溝６・７の間には、柱穴が集中して検出されており、建物としては構成できなかったもののこの地点を中心に居住域があったものと推察される。柱穴も建物－２・３の同様の方位に並らぶ状況を示している。また、溝－４も建物－２・３の同一方向を示すことから、溝－４の南側に存在したであろう建物に付随した施設であった可能性が考えられる。

87～91は、いわゆる早島式土器の椀で、**91**は他の椀に比べて口径が大きく、高台部も底径が大きくて高いところからやや古相を呈する。**92～97**の小皿は、法量が一定で規格性をもっている。その他**98**の鍋などが出土した。



溝－５（第14・42図）

調査区南端の溝－４の南１ｍに隣接して位置している。溝は、ほぼ溝－４と平行で東西方向に約3.5ｍ検出された。東端部は、ほぼ南に屈曲気味に突出している。溝内には、



第41図　溝－４（1/30）・出土遺物

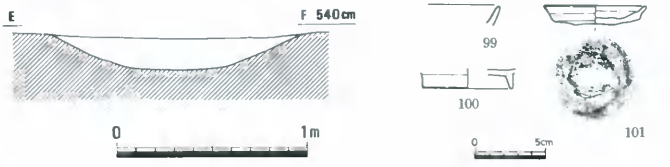
溝－4と同様の暗灰色土が堆積していた。出土遺物は少量の土器が検出された。

溝の性格については、溝－4と共通する可能性はあるものの、ここでは不明としておく。

99は青磁の碗で、100・101は、早島式土器の椀と小皿である。

溝－6（第14・43図）

調査区南端の溝－5の南約5mに検出された。溝は、ほぼ東西方向で南にやや弧状を描いて



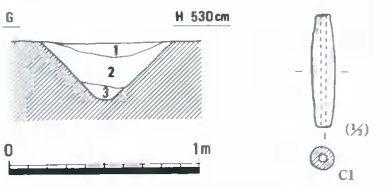
第42図　溝－5（1/30）・出土遺物

おり、全長約5m検出できた。西側では、溝－7と重なっているがその先後関係は明らかでない。規模は、幅約70cm、深さは約30cmを測る。溝の断面は「V」字形を呈しており、堆積土とも溝－7と共通している。

出土遺物は、早島式土器の椀、小皿片が若干量と土錘が1点出土した。

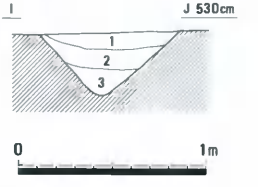
溝－7（第14・44図）

調査区の最南端の溝－6の南側に検出された。溝は、西側で溝－6、落ち込みと重複するが先後関係は不明である。全長約4m検出でき、ほぼ東西方向でやや溝－6とは逆に北側に弧と描いている。規模は、幅約75cm、深さ約35cmで、断面形は「V」字状を呈している。溝内は、溝－6と類似した堆積土で、第1～3層がレンズ状に堆積していた。出土遺物は早島式土器が少量出土した。



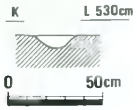
1．暗黄褐色砂質土　3．青灰色粘質土
2．暗褐色砂質土

第43図　溝－6（1/30）・出土遺物



1．暗褐色砂質土　3．青灰褐色砂質土
2．暗黄褐色砂質土

第44図　溝－7（1/30）



第45図　溝－８
(1/30)

溝－８（第14・45図）

調査区の南端、溝－６と７の間に検出された。溝は、西側で溝－７と重複しているが先後関係は明らかではない。規模は、幅約20㎝で深さは約６㎝を測る。溝は、全長約２ｍしか検出されておらず、その性格等については不明である。

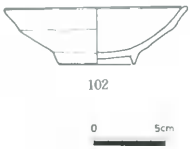
出土遺物は、早島式土器の椀、小皿の細片を少量出土したにとどまった。

（６）礫群（第14図）

調査区南側の溝－４の北側２ｍに位置している。今回検出された中世の大半の遺構検出面で確認された礫群である。礫群は、５～15㎝の河原石が東西約２ｍ、南北約2.5ｍの範囲に散在していた（第46図）。その礫群の中でも、ほぼ中央の東西約1.5ｍ、南北約0.7ｍに集積している状況が認められた。当初は、集石墓の可能性をもって調査を進めたが、集石下部から墓壙および人骨等の遺物は認められなかった。しかし、集石中央部の南側の約30㎝には早島式土器が完形で一個体出土した。

このような状況の中で墓壙としての判断はむずかしいものの、可能性については付記しておく。

出土した**102**はいわゆる早島式土器の椀で、鎌倉時代の特徴を示している。



第46図　礫群（1/30）・出土遺物

（7）包含層

今回の調査では、中世の遺構、遺物がその中心であった。微高地部では、土壙を中心に多数の遺構が検出された。微高地上には、遺構の存在する地点を中心に包含層が残存しており遺物も多数包含されていた。また、低位部の水田域でも包含層が堆積していたが、遺物の出土はあまり多くはなかった。

以下古代～中世の出土遺物について、代表的な遺物を図示し報告しておく。

須恵器：**103・104**は須恵器の杯身で、高台が付く。いずれも中世包含層の下層より出土したものである。**104**は、高台径が大きく、皿状になる可能性がある。

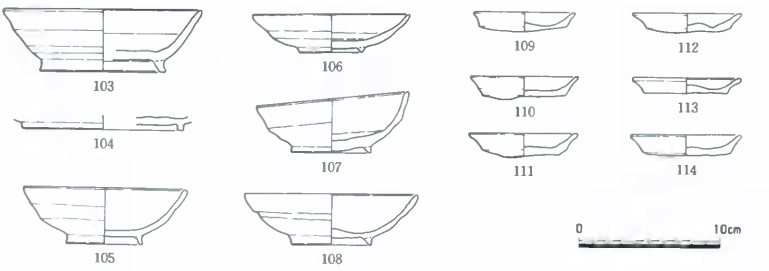
早島式土器：**105～114**は、いわゆる早島式土器の椀、小皿である。**105～108**の椀は、内面をていねいなナデを施し、外面は口縁部をヨコナデ、下半をナデ、オサエて仕上げている。**109～114**の小皿は、口縁部内外面をヨコナデ・底部はヘラで起こしたのち部分的にナデが加わる。さらに底部には板目痕が残っている。

白磁：**115**は玉縁口縁をもち、**116**は反り縁の口縁部をもつ。**117**は口縁端部でゆるやかに外反する。**118**の高台は**116・117**の口縁部に付くものである。**115～118**はいずれも12～13世紀の特徴を示している。

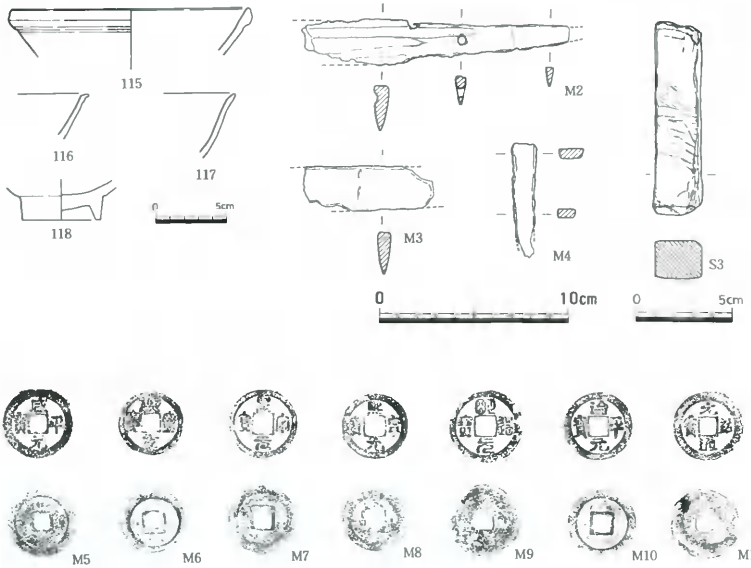
鉄器：**M2・M3**は、いずれも刀で柱穴および包含層から出土したものである。**M4**については不明鉄器である。

砥石：**S3**は包含層からの出土で、長さ約10ｍが、断面形は長方形を呈している。この砥石は４面とも使用痕が残っている。

古銭：**M5～M11**はいずれも宋の銭貨である。のこ古銭は、包含層からの出土であるが、その大半は建物－２・３の周辺から検出されたものである。その中には土壙墓周辺からのものもあり、かつて墓壙内に副葬されていた可能性も考えられる。（中野）



第47図　包含層出土遺物（1）



第48図　包含層出土遺物（2）

表１　向原Ⅰ調査区銭貨一覧表

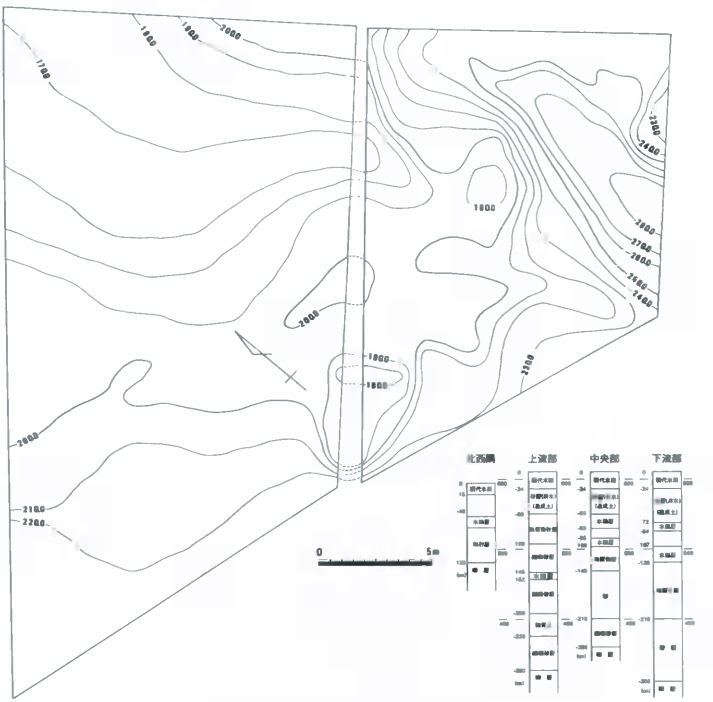
遺物番号	銭貨名	出土地	計測最大値(㎜)		重量	残存率	備　考
			直径	厚さ	(g)		
M５	咸平元寶	中世包含層	25.0	1.3	2.4	完　形	初鋳 999年
M６	熙寧元寶	柱　穴	23.0	1.4	2.5	〃	〃 1068年
M７	聖宋元寶	中世包含層	24.5	1.5	3.2	〃	〃 1101年
M８	熙寧元寶	〃	23.5	1.5	3.1	〃	〃 1068年
M９	明道元寶	〃	25.8	1.3	2.5	一部欠	〃 1023年
M10	治平元寶	〃	24.2	1.3	2.7	完　形	〃 1064年
M11	元祐通寶	〃	25.2	1.3	3.4	〃	〃 1093年

第３節　向原Ⅱ調査区

１．調査区の概要

本調査区は、北西側を農道と水路、南東側を農道で区切られた範囲内で、一部（約400㎡）を年度内に調査することができず、次年度に遺構の有無等の確認をした調査区である。

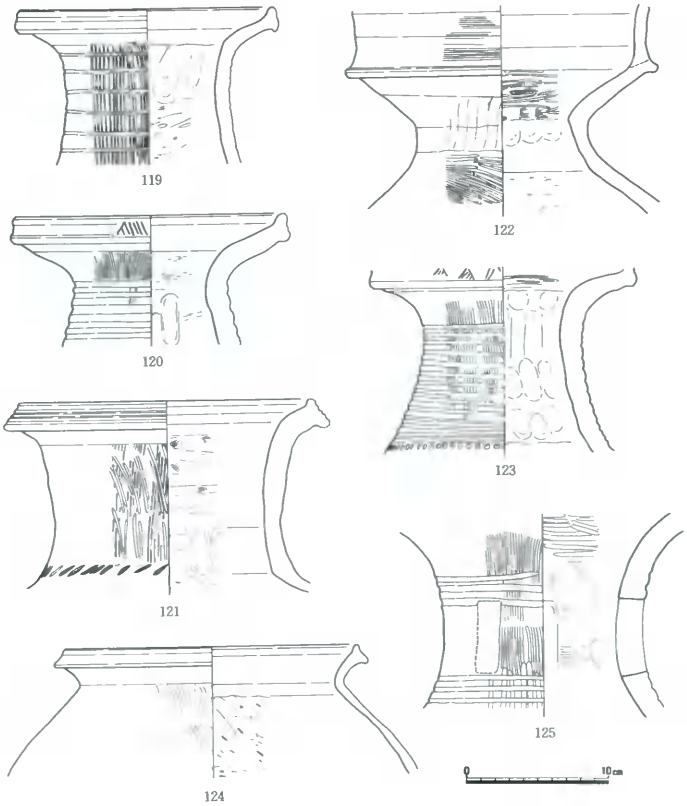
当初この調査区は、中世の微高地で、建物等の存在する居住域として調査に望んだが、調査を進めるにつれて、微高地の下層にも遺構が確認された。その遺構とは、青味をおびた黒灰色粘質土層（水田層）・畦畔・溝・くぼみであり、建物等は認められなかった。また、向原Ⅰ区



第49図　砂礫層上面地形図（1/250）

南東部で確認された古墳時代の遺構の続きは認められず、調査区境を礫層上面（第49図）まで下げ検出を行った結果、遺物（第50図）のみであった。

調査区内では奈良時代以降の遺構が検出された。まず奈良時代～平安時代にかけては、たわみを開田し、畦畔で区画する水田、平安時代末にはほぼ方格の地割（畦畔で区画）の水田へと変化する生産区域となる。さらに鎌倉時代～室町時代にかけては一部で水田が残り、微高地部分は居住域として活用された地区である。それ以後は幾度かの洪水によって砂の堆積がありながらも全体を水田として利用している。それが現代まで続いているものてある。



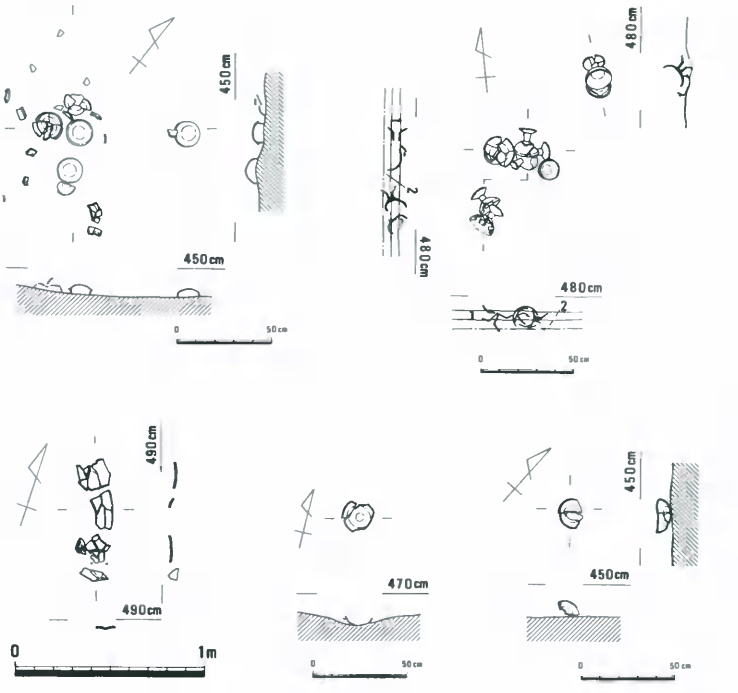
第50図　砂層出土遺物

2．弥生時代の遺構・遺物

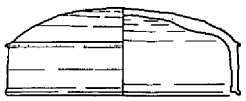
調査区北東部を基盤層（砂礫層）まで掘り下げ中の砂層中から第50図の遺物が出土したが、いずれも遺構に伴うものではない。遺物はかなりの磨滅していることから、洪水時に流入したものであろう。

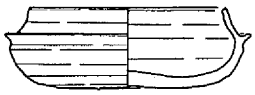
3．古墳時代の遺構・遺物

調査区内水田遺構の調査終了後、水田層下に堆積した砂混じりの粘質土層除去中において検出、確認できたものである。（第51・52図）これらの遺物は、自然堆積層中に投入されたかのような形であるため、遺構の検出をおこなったが、何ら遺構らしきものは確認されなかった。調査区周辺には出土遺物に伴う遺構が存在するものと思われる。

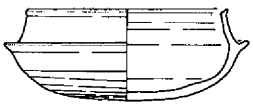


第51図　粘質砂層中出土遺物平・断面図（1/30）

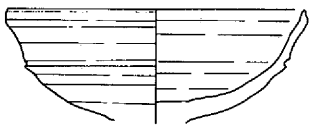

126

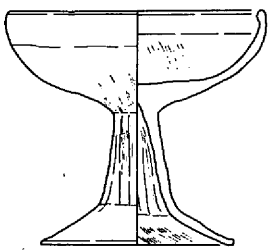

128

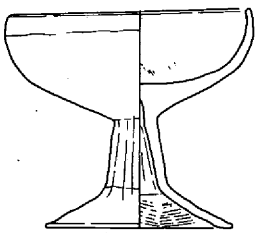
130

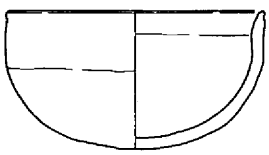

127

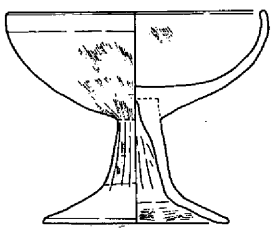
129

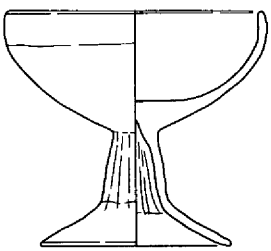

131

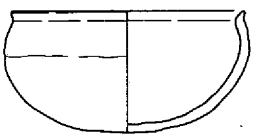

132

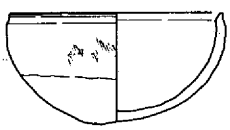

136

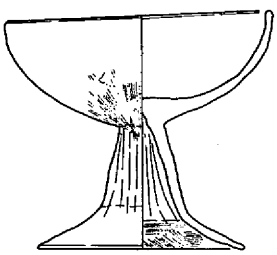

140

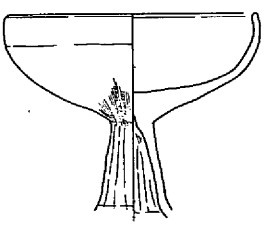

133

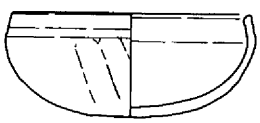

137

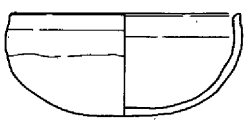

141

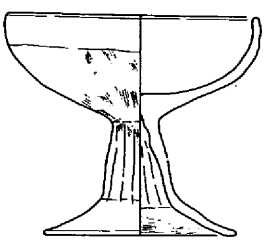

142

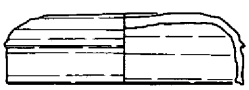

134

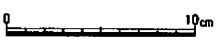

138


143


144


135


139



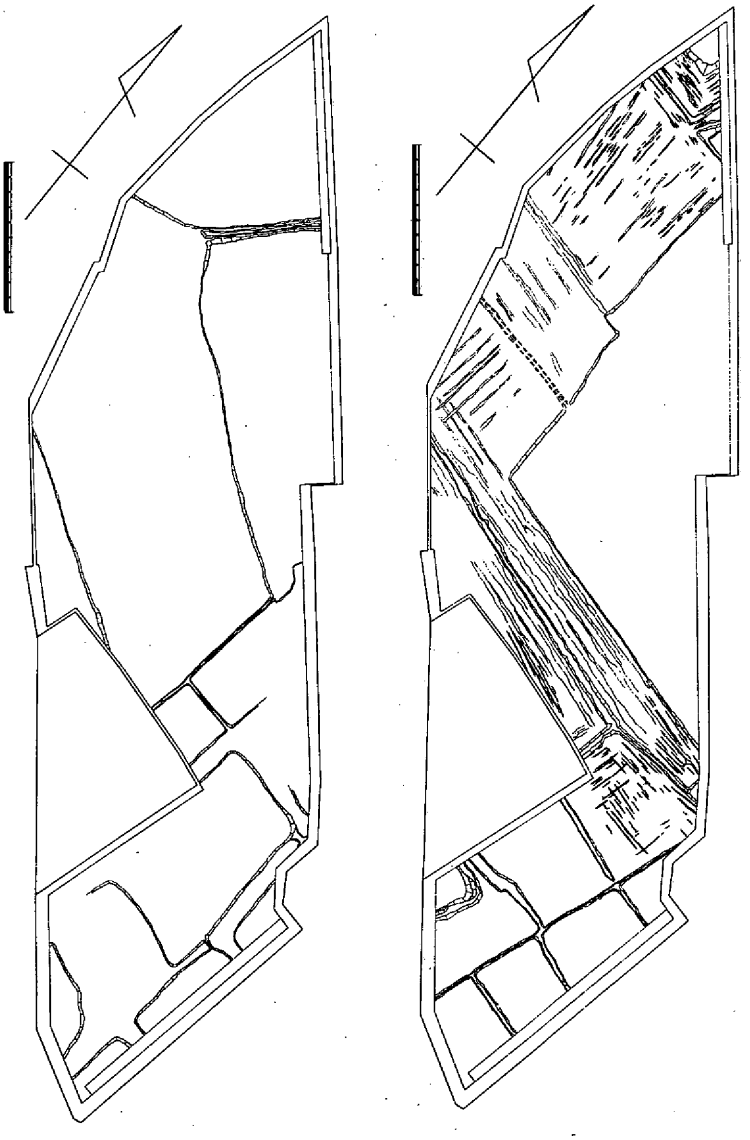
第52図　粘質砂層中出土遺物

4．古代・中世の遺物

（1）水田

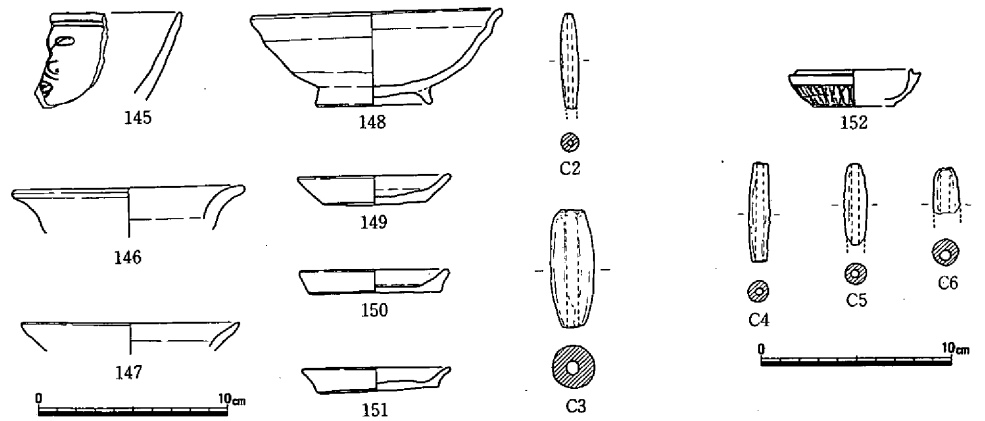
水田（古代）（第53図・図版17－３～６）

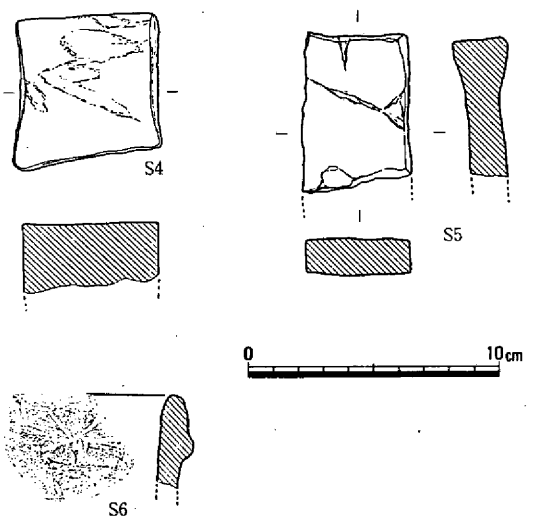
本調査区内の約半分が水田である。水田畦畔はほぼ東西、南北方向であり、不整形な大畦や、広場式な所も確認された。また、中程より西では、北東から流入する溝を２本検出し、この溝を挟んだ両側には微高地が広がっている。さらにこの地区での水田の規模はふぞろいであるが、南東側の水田は大畦と平行する形をとっている。さらにこの大畦には水口も１ヶ所に認められている。小畦は幅は35～70㎝、水田面からの高さも３～８㎝、大畦は130～260㎝、高さは17～21㎝であるが、水田面積は、全体が判明しなかったため不明瞭である。



第53図　水田畦畔全体図（左…古代・右…中世）（1/1000）

この水田への水の取り入れは、北東部に検出された溝からであろうが、検出された小畦には水口の存在はなく、北東から入った水は畦越しをしながら大畦の水口へと流したものと思われる。また、水田層中からは第54図の遺物が出土してい





第54図　古代・近世水田層・包含層出土遺物

る。この遺物から、奈良時代－平安時代に比定されると考える。

水田（中世）（第53図・図版17－1・2）

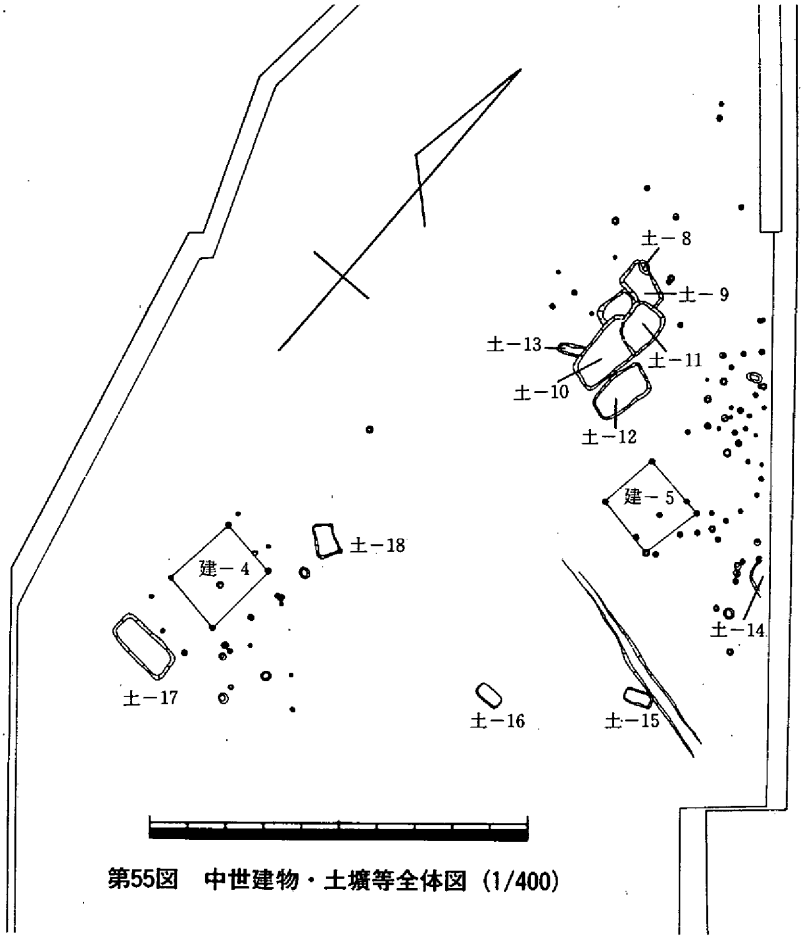
前述の水田の上層で検出された水田であり、調査区中央部分と北西隅には微高地を検出、水田区画はさまざまで、方形に近いものから、長方形、L字形といろいろである。畦畔にしてみれば、大畦と思われるものは存在せず、小畦もしくはすこし広めになったものである。畦の方向は下層水田に比べて、東西南北と整然としているが、畦畔には直交するもの、ズレるものも見られる。また水田は微高地を削り開田していると見られる個所も見られる。水田に一番大切な水の取り入れ口としての溝は、北隅の微高地東脇にある。水はここから流入し、調査区南東部にある水口に向けて畦越しをして流れていくものと想定される。

また、南東部の水田以外では、水田耕作時の痕跡が畦に直交あるいは並行した形で明瞭に残っている。わずかではあるが出土遺物から中世に比定されよう。

（2）建物

建物－4（第55図・56図）

調査区内中程より北側の南西部に位置し、主軸が南北1間×1間の掘立柱建物である。柱間

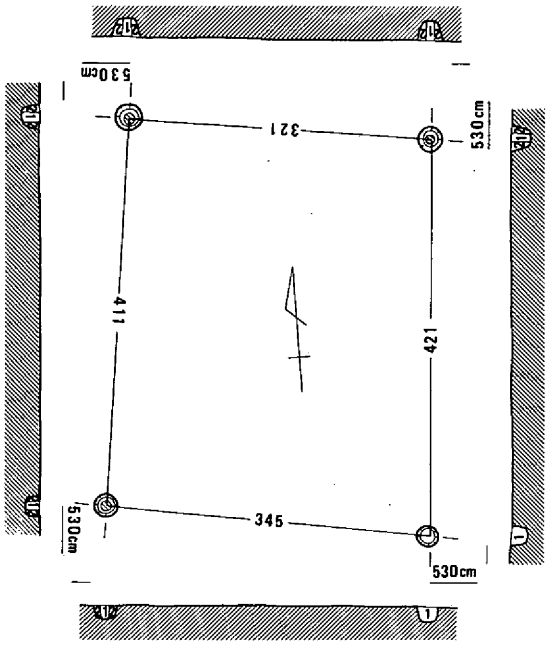


第55図　中世建物・土壙等全体図（1/400）

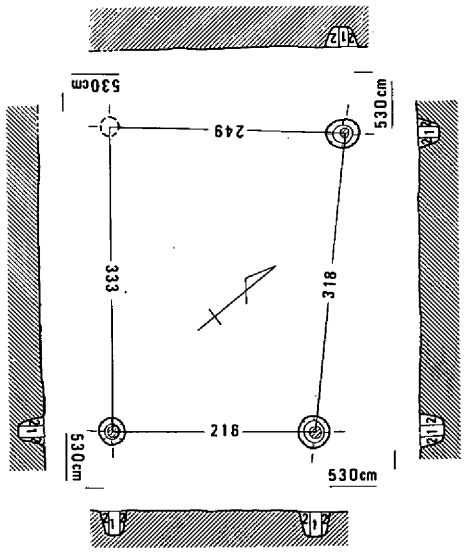
は南北で約20cm、東西で10cmの長短がある。柱穴は20～30cmの円形で、深さ15～20cmを測る。断面では10cm位の柱痕跡も確認された。柱穴の中心を線で結んだ平面形は正確な長方形とはならない。柱穴内からの遺物の出土は皆無であり、鮮明な時代は不明、検出面と周辺の遺構から中世に相当すると考えられる。

建物－5（第55図・56図）

建物の北東で検出された1間×1間の掘立柱建物である。建物の主軸は南東から北西方向である。柱間寸法は南東側が216cmであるのに対して北西側は249cmと約30cm広く、北側と南側では南側が24cm広くなっている。柱穴は30～35cm前後の円形、深さは25～30cmを測った。また断面において柱痕跡も確認されたが、柱穴の中心を結んだ平面形は歪な長方形となる。出土遺物皆無であるが、周辺に検出された遺構と考え合わせて中世に相当すると考えられる。



1．暗灰褐色粘質微砂
2．灰褐色細砂



1．暗灰褐色粘質微砂
2．灰褐色細砂

0　2m

第56図　建物－４（上）・５（下）平・断面図（1/80）

（３）土壙

土壙－８（第55・57図）

建物－５の北西で、長軸を北西－南東に向けた38×22cmのやや胴張りの長楕円形を呈し、深さ10cm程度を測る土壙である。出土遺物無し。

土壙－９（第55・57図）

この土壙は長軸をほぼ東西にした隅丸の不整長方形の平面形であり、土壙－８に北西部隅を切られているが、規模は長辺約130cm、短辺約75cm、深さは６～10cmを測るもので、断面からは２段掘りの計状を呈する土壙である。遺物の出土はわずかに小片を認めた。

土壙－10・11（第55・57図）

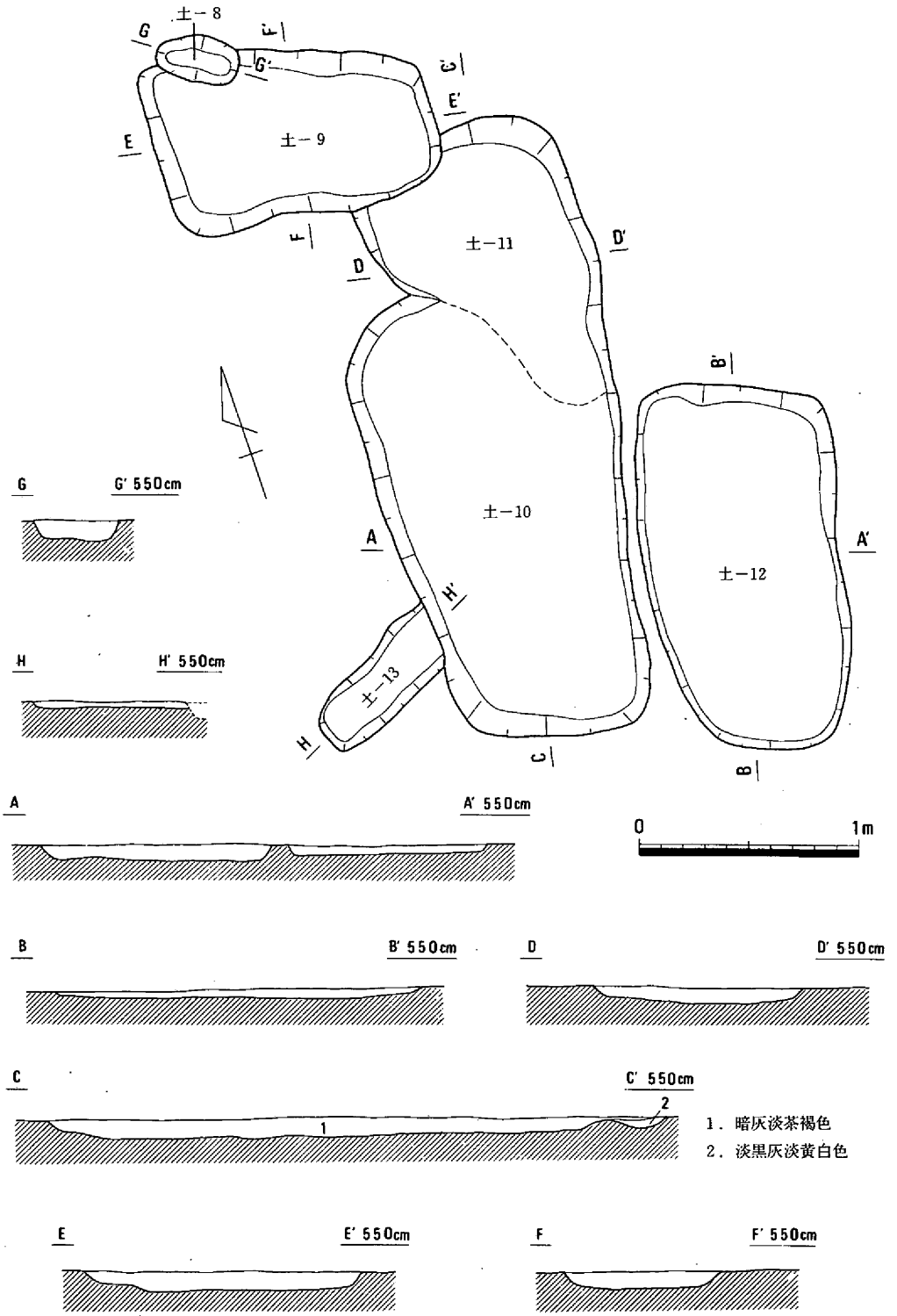
双方の土壙は長軸を南北に向けた隅丸不整長方形の平面形態を呈する土壙で、深さも10cm前後を測る。土壙－11は土壙１に切られているが、土壙－11と10では新旧関係は切り合いが明瞭に判断しえなかった。

土壙－12（第55・57図）

土壙－10に接して東に位置し、長軸を前壙と同じくし、西辺が胴張った隅丸不整長方形で、５～７cmの深さを測る非常に残存状態の悪い土壙である。前述の土壙－３と並んで掘られていた可能性もあるが、さだかではない。

土壙－13（第55・57図）

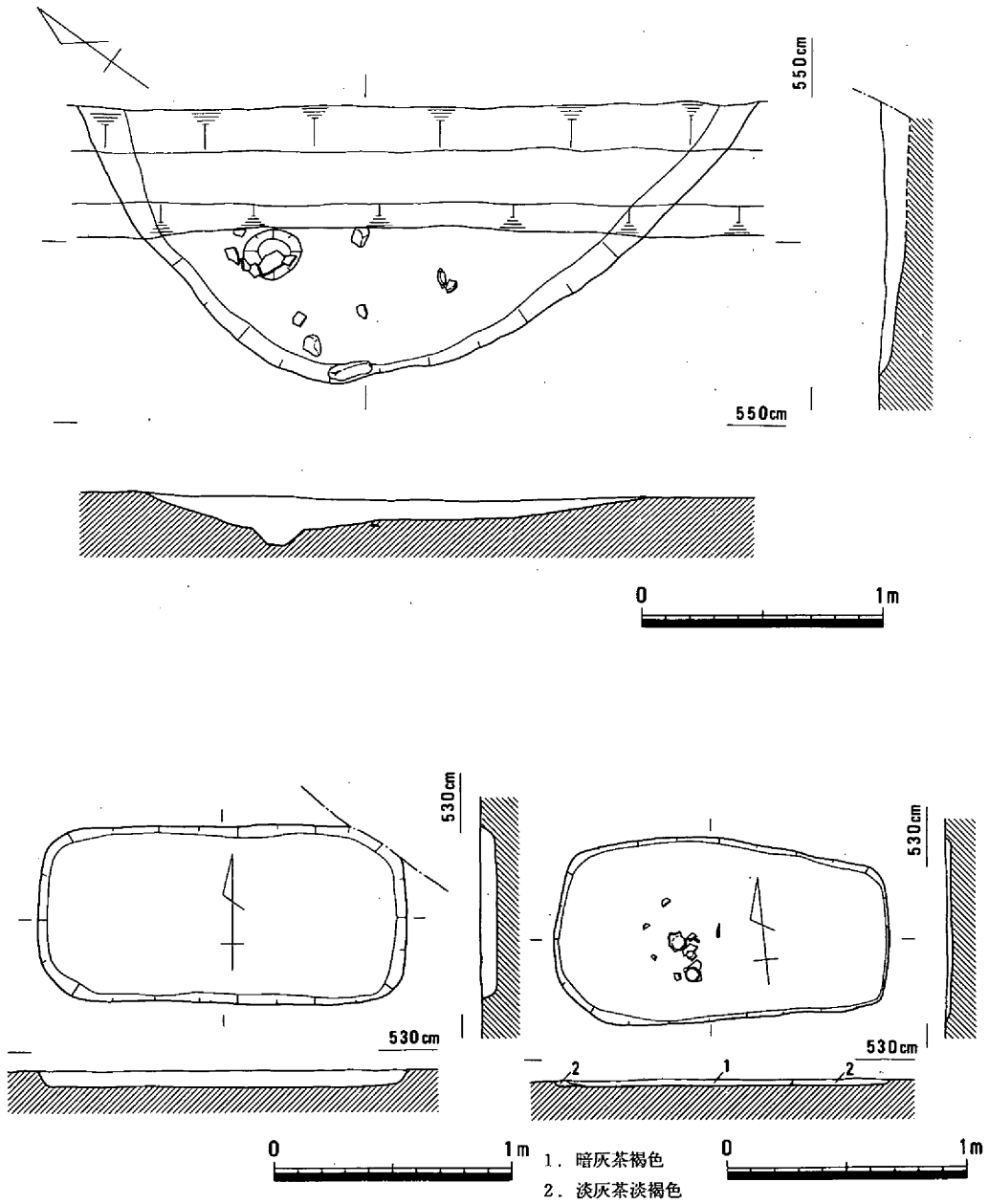
長軸を北東－南西にして東側を土壙－10に切り取られた幅25～30cmと狭い隅丸長方形と思われる平面形態の土壙



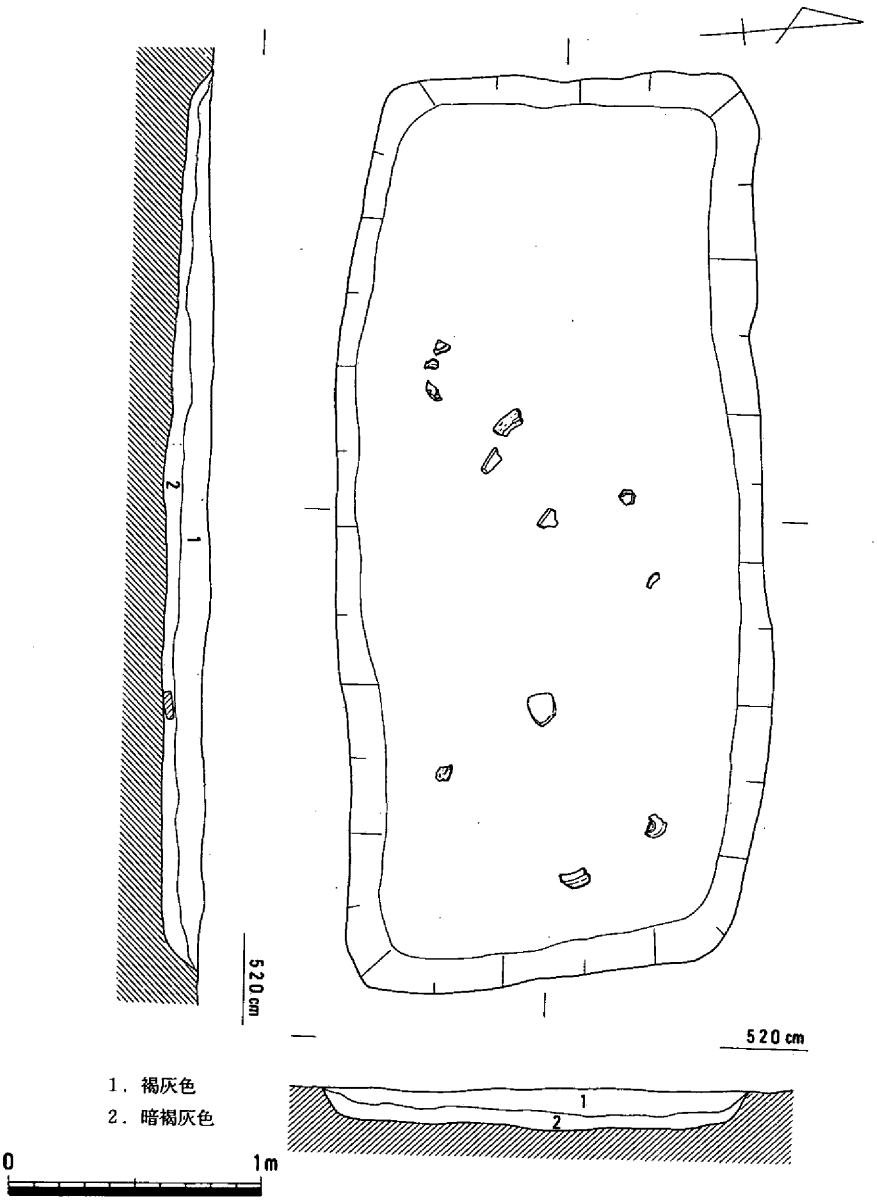
第57図　土壙－8・9・10・11・12・13平・断面図（1/30）

で、現存する深さは４～５㎝程度の残存の悪い土壙である。切り合い関係からは土壙－10より古いが、明瞭な時代は不明瞭である。

以上重複した６基の土壙であるが、壙内から出土した土器片、検出された周辺の遺構等から推察すれば、時代はいずれも中世に比定されよう。



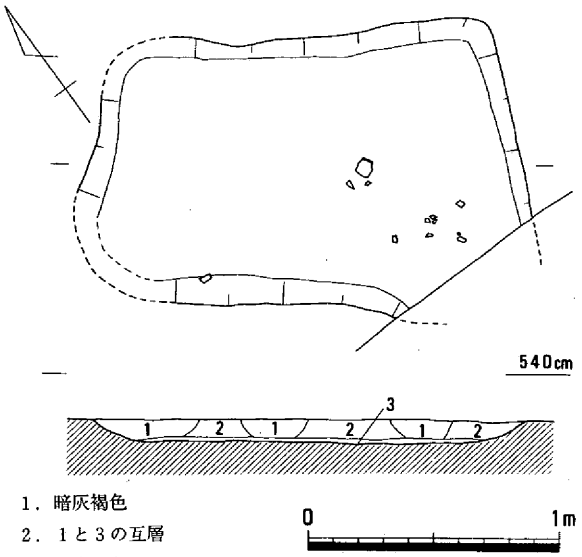
第58図　土壙－14（上）・15(左下)・16(右下)平・断面図（1/30）



第59図　土壙－17平・断面図（1/30）

土壙－14（第55・58図）

建物－５の東側で側溝に切られて検出された平面形態が楕円形と推測される土壙の一部であり、検出された土壙の掘り方は、中央に向かって徐々に下がっていくもので最深は15cm程度である。土壙内の北西部には20×25cmの楕円形で、深さ６cm程度を測る柱穴状のくぼみが確認されているが用途不明。埋土中には礫等も含まれている。壙内部から出土した遺物、周辺の遺構



第60図　土壙－18平・断面図（1/30）

から判断して中世と考えたい。

土壙－15（第55・58図）

建物－５の南東で、北東隅が溝に接した状態で検出された155×75cmの隅丸長方形で、検出面から深さは６cm前後を測る土壙である。形態的には土壙墓の可能性をひめているが決めてを欠く。伴出遺物等がなく時代は判断しにくい。しかし周辺の遺構等から考えて中世には存在していた遺構であろう。

土壙－16（第55・58図）

路線のほぼ中央付近で、やの南西に位置する140×75cmのやや胴張りを呈した隅丸長方形の平面を示し、検出面からの深さは４～５cmと非常に浅いものである。中ほどやや東には土器片が確認されている。この土壙も前述遺構と同様に土壙墓と思われる。時代は出土遺物から中世の遺構であろう。

土壙－17（第55・59図）

建物－４の南側で長軸をほぼ東西にした不整長方形の平面形を示した土壙で、規模は約360×170cm、底面は水平でなく検出面からの深さは15～18cmを測る。土壙の埋土中には礫・土器片等が含まれていた。出土した遺物から推察して中世の遺構であろう。

土壙－18（第55・60図）

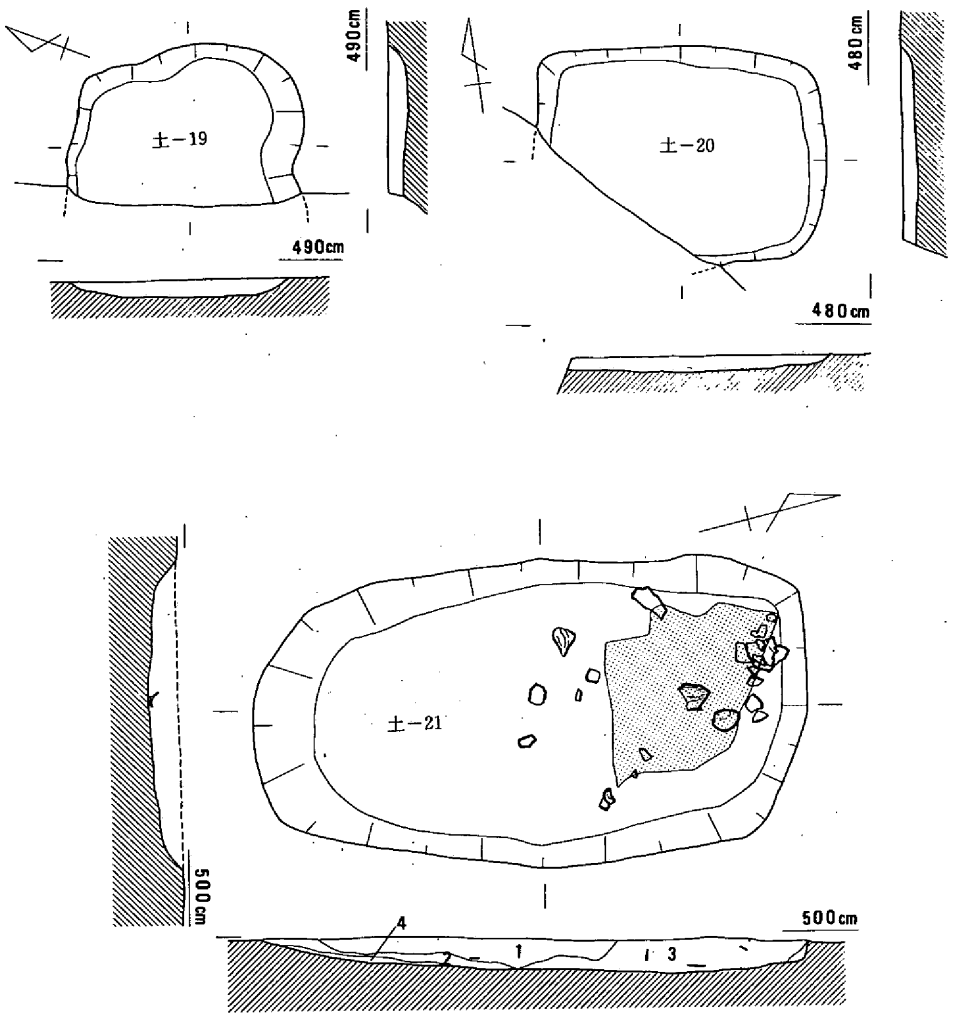
建物－４の北側に位置し、北西－南東に長軸があり、三方の隅はトレンチ・柱穴等により消滅していたが、平面形は180×105cm、検出面からの深さは10cm程度を測る隅丸長方形を呈している土壙である。時代は検出面・周辺の遺構等から推察して中世に比定されよう。

土壙－19（第61図）

西側が切られ消滅し、全体の平面形は不明であるがおそらく不整方形を呈し、掘り方は浅い擂鉢状の土壙である。埋土は青灰白微砂で埋没している。伴出遺物皆無、中世に比定できるものと思われる。

土壙－20（第61図）

土壙－12の南側に近接し、長軸が東西方向で南西隅を失っているが、平面形は115×90cmでやや胴張りの様相を示す平面形態で、検出面から６～７cmを測る非常に残りの悪い隅丸長方形



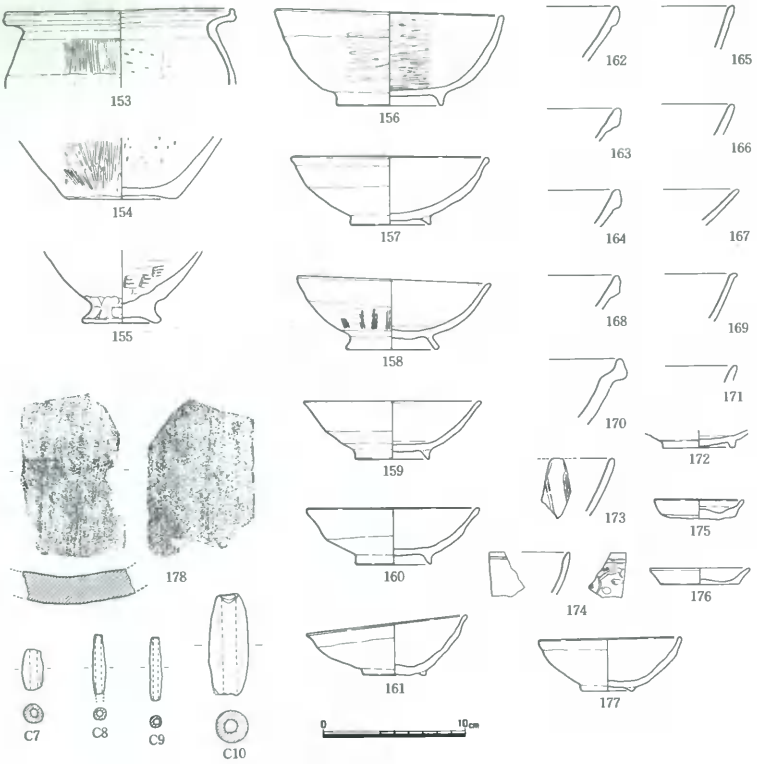
1．灰暗褐色、暗黄褐色土含む　微砂
2．灰暗褐色　微砂
3．暗灰色、茶褐色土混ざり
（焼土・炭化物・土器含む粘質微砂）
4．黒灰色、黒茶褐色土まざる　微砂

第61図　土壙－19・20・21平・断面図（1/30）

の土壙である。壙内は淡褐色微砂で埋まっている。伴出遺物は皆無であるが周辺の検出された遺構等から中世といえよう。

土壙－21（第61図）

南側小口が丸くやや胴張りを呈する不整長方形で、長軸はわずかに東に振っている土壙であ



第62図　包含層出土遺物

り検出面からの壙の掘り方は南からゆるやかに下がり、北が垂直によかる。土壙内には土器片が散在しているが中央部より北側には焼土・炭化物（網目部分）が検出された。土層断面で観察すると、壙内の下部半分が焼土・炭化物で埋没している。壁面は焼けていないが、焼土土壙の可能性もをる。出土遺物から時代は中世であろう。

５．包含層出土遺物

第54・62図に図示した遺物は向原Ⅱ区内で出土した遺物で、時代的には古墳時代のものから近世のものまでである。

これらの遺物は洪水のときに流入したもの、あるいは造成土として運びこまれてきたものとか種々雑多なものである。　（二宮）

第4節　向原Ⅲ・沼・丸川調査区

1．発掘調査の経過と方法

調査は、南側から着手し、沼・丸川・向原Ⅲ調査区と進行させた。向原Ⅲ調査区は、現農道を避けて、さらに5箇所の小調査区に分け、それぞれを南側から向原Ⅲ－1・Ⅲ－2・Ⅲ－3・Ⅲ－4・Ⅲ－5と呼称した。なお、Ⅲ－2とⅢ－3は、東側をⅢ－2とした。

砂田調査区の成果をもとに、近世水田層である青灰色粘土層直上まで重機によって掘削し、その後、調査を進めた。この近世水田層は、各調査区全面で確認された。さらに、この水田層の下位に2～3枚の水田層を確認し、面的に調査を行い、中世の水田層と判断した。これより下位については、トレンチ等の観察によって、遺構が確認されず、調査を終了した。

2．基本層準（第63図）

調査では、各小調査区ごとに複数のトレンチを設け、それぞれについて図化を行なったが、ここでは、第63図に示す位置についての土層柱状図を作成し、基本層準の説明を行なう。

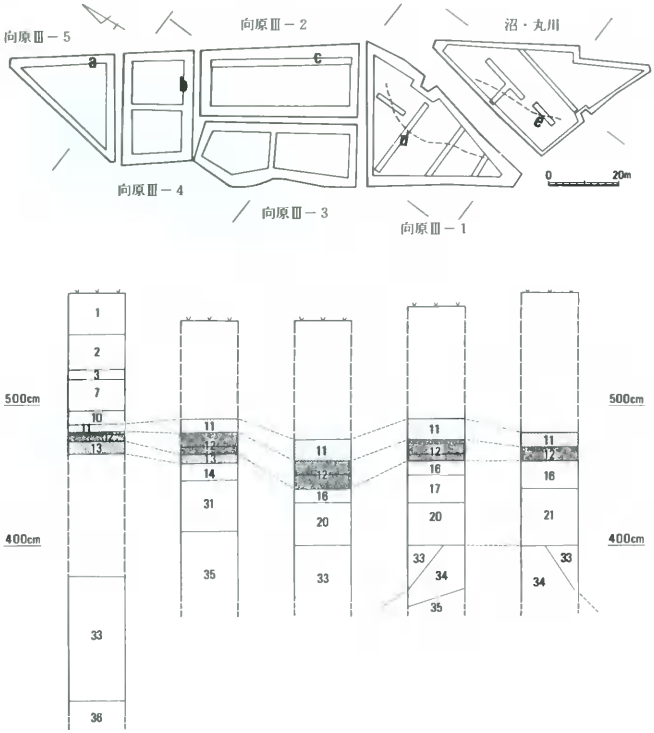
1層は現在の水田層である。これより下位、2～5層は、基本的に層位が乱れた砂礫層であり、明治段階以降の複数回の洪水によって形成されたと判断している。6～9層については、断面観察によって部分的に水田痕跡が確認されるものの時期を判断する遺物等は明らかではなく近世末以降であると判断している。

10層は、近世水田層である11層を覆う洪水砂的性格を示す。ほぼ、11層の広がりと同様に調査域全範にわたって確認された。10層からは寛永通寶が出土しており、これを遡らないことが確実である。11層は青灰色粘土層であり、下位の12層の境界には11層の床土と判断される鉄分層が部分的に観察されることから、近世の水田層と判断した。

12層は、暗褐色粘質微砂土であり、向原Ⅲ－1区以北では、層間中に鉄分層が観察され、2層に分層が可能であった。また、下位の13・16層との境界にも2～3㎜の鉄分層が存在し、遺物等から中世後半～末の水田層と判断した。

向原Ⅲ－2・3区中央部にはほぼ東西に流れる溝が貫流し、これより北側では12層の下位に、13層暗灰オリーブ色微砂土が広がり、これも、鉄分層の観察から水田層と判断した。

13層より下位の層位には、明瞭に鉄分層等を観察することはできず、遺物の出土も希有であり、大きな低位部、または広大な旧河道の自然堆積層と考えている。沼・丸川・向原Ⅲ－1区では、トレンチ調査の結果、海抜高4ｍ付近で南北方向に延びる中州状の高まり（34層）の存



1　淡黒褐色腐植土・・・現耕作土
2　淡灰茶色粗砂
3　灰茶色微砂
4　灰茶褐色粗砂
5　茶色粗砂
6　青灰色微砂
7　灰茶色粘質土
8　青灰色粘土混微砂
9　明茶色微砂
10　濃青灰色粘土混細砂
11　青灰色粘土・・・近世水田層
12　暗褐色粘質微砂・・・中世水田層２
13　暗灰オリーブ色微砂・・・中世水田層１
14　茶オリーブ色微砂
15　暗灰色粘土
16　茶褐色粘質微砂
17　灰オリーブ色微砂
18　淡茶褐色粘質微砂
19　黄灰オリーブ色微砂
20　灰オリーブ色粘質土
21　灰茶褐色粘質土
22　暗青灰色微砂混粘土
23　暗青灰色粘土混細砂
24　暗青灰色粘土混細砂
25　青灰色粗砂混細砂
26　青灰色粘土混粗砂
27　暗青灰色細砂混粘土
28　青灰色粗砂
29　暗青灰色粗砂混細砂
30　暗青灰色細砂混粘土
31　暗灰オリーブ色シルト
32　暗灰褐色シルト
33　黒灰色シルト
34　暗灰褐色微砂
35　灰色砂礫
36　礫層

第63図　向原Ⅲ・沼・丸川調査区基本層準柱状図

在が判明した。この中州状の高まりの両側は緩やかに下がり、シルト質状の土層が厚く堆積している。海抜高4ｍ以下については部分的なトレンチの観察に留まるため詳細は不明であるが、海抜高3ｍ以下で礫層が存在する。

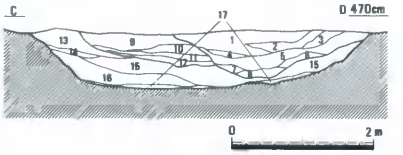
3．中世・近世の遺構と遺物

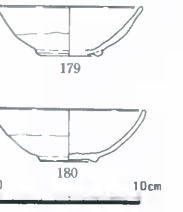
中世水田1（第63・65・68図）

東西方向に流れる溝－9以北に広がる暗灰オリーブ色微砂土の水田層（13層）である。海抜高465～475cmで水田面が検出され、北側のほうがやや高くなる。水田層の厚さは約10cmほどあり、下層との境には2～3mmほどの鉄分沈着層が認められる。畦畔は、真北方位に合うように、向原Ⅲ－5区では向原2区からつづく農道状に幅広のものが東西方向に2本、これに平行するものが向原Ⅲ－4区で2本、直交派生する2本が確認されている。畦畔と田面との比高は最大値で約10cmほどある。幅広のものは、削り出しによって作られており、北側が250cm、南側が375cmある。南側のものは、水口状に一端が丸く収束している。向原Ⅲ－4区で検出した畦畔は、幅約50cm程度である。東西方向の畦畔が比較的明瞭に検出されたのに対し、南北方向の畦畔はほとんど検出できなかったが、本来は、幅が狭いものが存在していたものと推測される。向原Ⅲ－3区北側、およびⅢ－4区西側では、後の攪乱と考えられる砂礫の堆積により、ほとんど水田面・畦畔は明らかにできなかった。この水田層を除去すると幅20cm以下、深さ2～3cmの多数の不連続な溝状のものが東西の畦畔と平行に検出され、鋤床状のものと判断した。

溝－9（第64・65・68図）

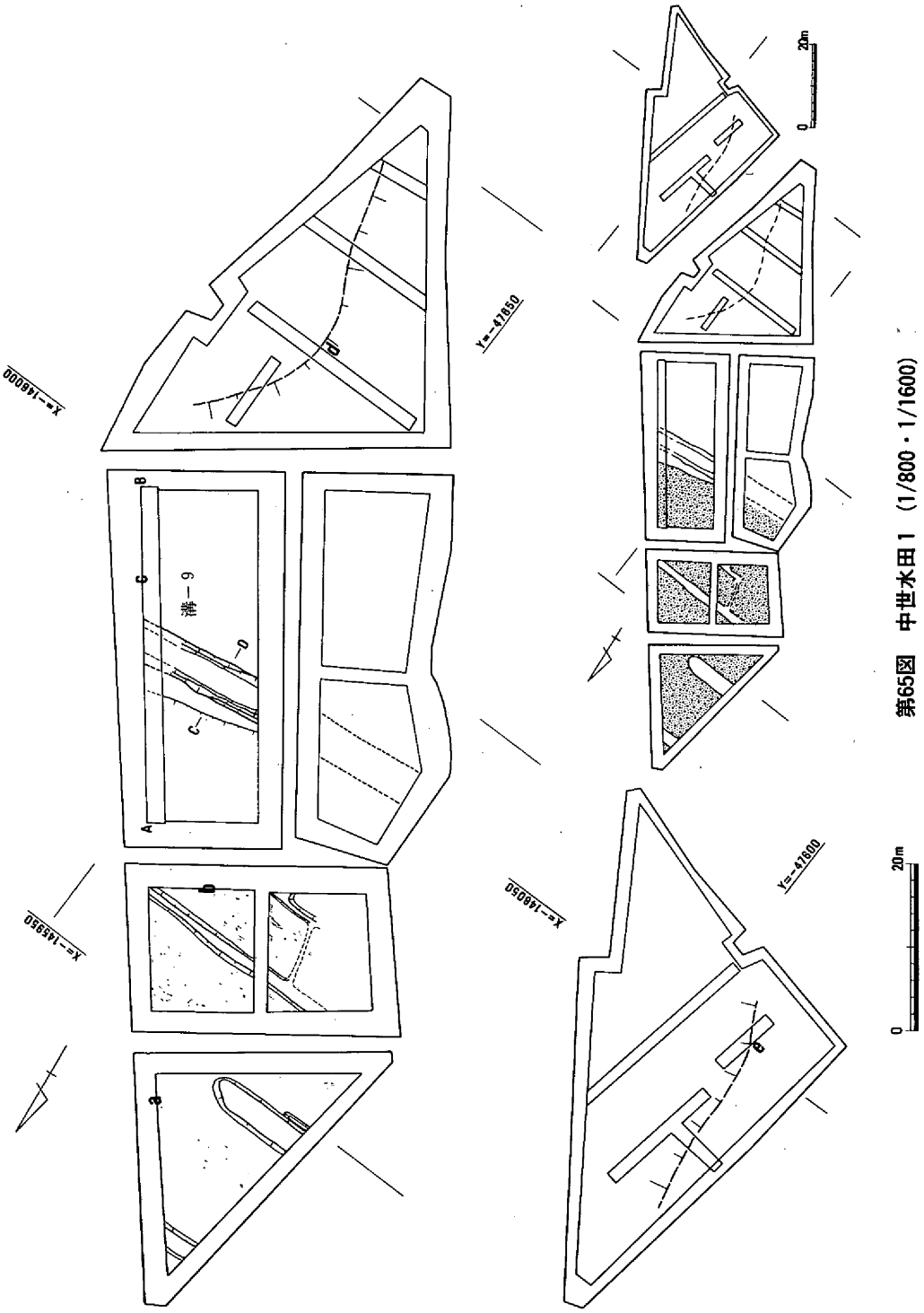
向原Ⅲ－2・3区をほぼ東西方向に直線的に流れる幅約450～460cm、深さ約80～90cmの溝で





1 青灰色細砂　7 灰色粗砂　13 青灰色粘土
2 青灰色粘土　8 明茶色砂礫　14 暗青灰色粘土
3 明茶色微砂　9 青灰色砂混粘土　15 暗灰褐色粘土（植物遺体多）
4 濃青灰色微砂　10 明茶色粗砂　16 暗灰褐色砂混粘土
5 暗青灰色粘土　11 青灰色粘土　17 灰色砂礫
6 灰色粗砂　12 灰白色砂礫

第64図　溝－9断面図（1/80）・出土遺物



第65図　中世水田1（1/800・1/1600）

ある。向原Ⅲ－２区では、そのほとんどが、後の攪乱によるため検出していない。土層断面の観察から、少なくとも３段階が認められ、その各々が砂礫と粘土の互層状の堆積を示す。一部樹木等、植物を多く含む層がある。層位関係から、中世水田１の段階に貫流し、用水路の機能を果たしていたと推測される。流路の方向は溝底のレベル差からは、ほとんど判別できなかった。

遺物はほとんど検出されなかったが、溝底から図示したいわゆる早島式土器と呼ばれる高台付きの椀が出土している。鎌倉時代後半から室町時代前半と考えられ、溝の掘削年代および、水田の開田時期がほぼそのころに比定される。

中世水田２（第63・66・68図）

調査域全体に確認された暗褐色粘質微砂土の水田層（12層）である。中世水田１の直上に形成されている。海抜高460～480cmで水田面が検出された。水田層は、層間に２～３mmの厚さの鉄分沈着層によって、２層に分層が可能であるが、図示したものは上層の水田である。また下層底部にも鉄分の沈着を認めた。水田層の厚さは各々５～10cmほどである。

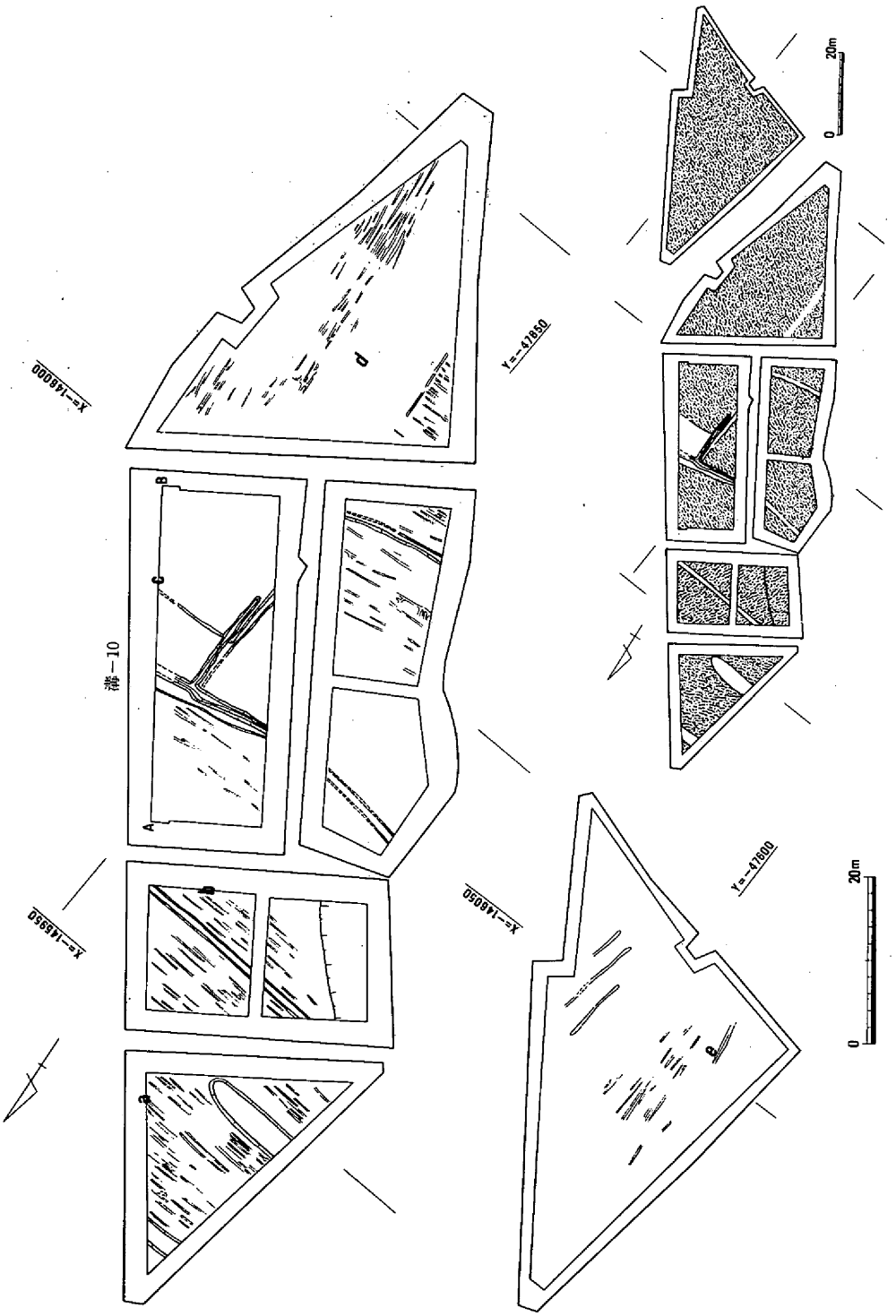
検出された畦畔は、東西方向のものが５本、南北方向のものが１本である。東西方向のもののうち、北側の３本は、位置的には中世水田１の畦畔をほぼ踏襲しており、若干の土の盛り上げをもって使用している。また、向原Ⅲ－３区で検出された東西方向の畦畔はわずかに湾曲して延びる。向原Ⅲ－２区東中央部では、溝－９埋没後、水田利用されていない８×10ｍ程の大きさの方形の高まり部分が確認された。この高まりの北辺と西辺に沿うように溝－10が流れ、さらに南西角から南北方向に幅約30cmほどの畦畔が延びる。南北方向の畦畔はこの１本のみが検出された。畦畔の幅は、農道状に幅広のもの以外は30－40cm程度である。東西方向の畦畔間は、狭いもので約10ｍ、広いもので約26ｍほどある。検出できた南北方向の畦畔が１本のため１枚の田面の区画の大きさは不明である。

中世水田１で確認された鋤床状の遺構は、この水田層除去後にも検出され、向原Ⅲ－１区では、その方向の違いから、向原Ⅲ－２区で検出された南北方向の畦畔が延びていたことが推測できる。

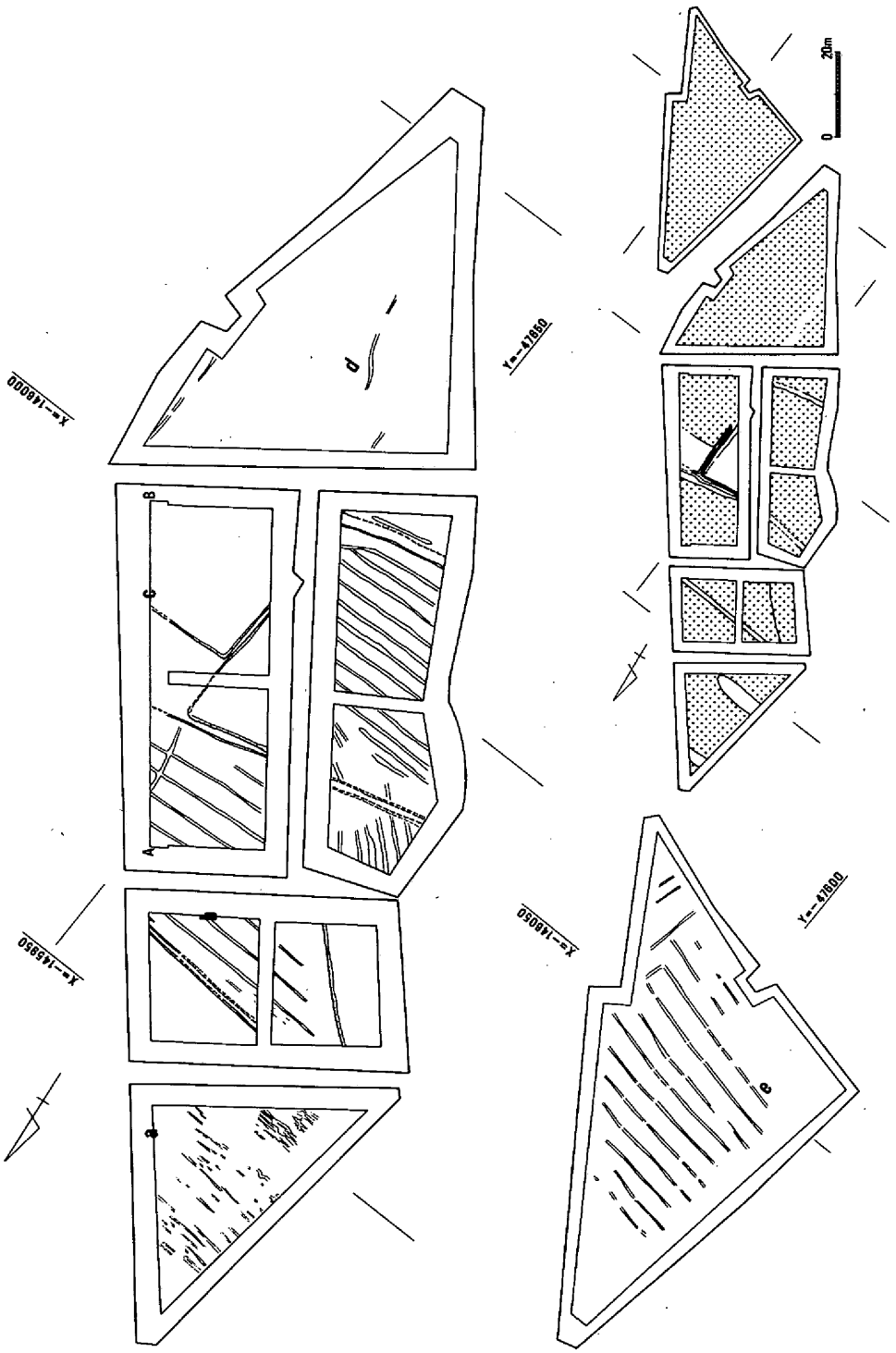
溝－10（第66・68図）

向原Ⅲ－２区で確認された幅約80～100cm、深さ約30cmほどの二股に分かれた溝である。溝をきっている。溝－９埋没後に形成された方向の高まり北辺と西辺に沿ってやや弧を描くように東西方向と南北方向に延びる。南北方向には、水田面におりて収束する。西方向については、向原Ⅲ－３区では、攪乱のためどこまで延びていたかは不明である。層位関係等から、中世水田２の段階の用水路と判断した。

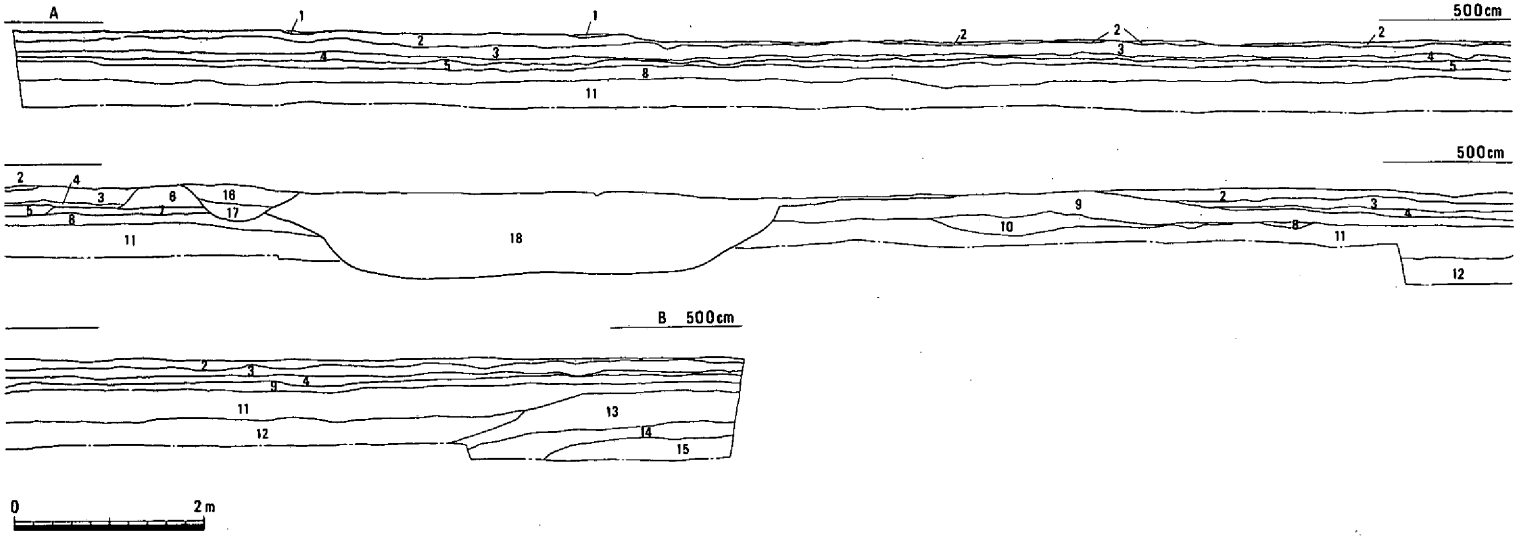
出土土器はほとんど無く細片のため図示していないが、古銭が１枚出土している。



第66図　中世水田2（1/800・1/1600）



第67図　近世水田（1/800・1/1600）



1 黄茶色粗砂
2 青灰色粘土・・・近世水田層
3 暗褐色粘質微砂・・・中世水田層２
4 暗褐色粘質微砂・・・中世水田層
5 暗灰オリーブ色微砂・・・中世水田層１
6 暗灰色粘質微砂・・・中世水田２の畦畔部分
7 灰オリーブ色粘質微砂
8 明灰オリーブ色細砂
9 青灰色～茶褐色粘質微砂
10 明灰オリーブ色細砂
11 暗青灰色粘質土
12 黒灰色シルト
13 暗灰褐色微砂
14 黒灰褐色粘質土
15 灰色砂礫
16 暗青灰色粘質微砂・・・溝－10埋土
17 青灰色粘質微砂・・・溝－10埋土
18 溝－９埋土

第68図　向原Ⅲ－３区　A－B断面（1/80）

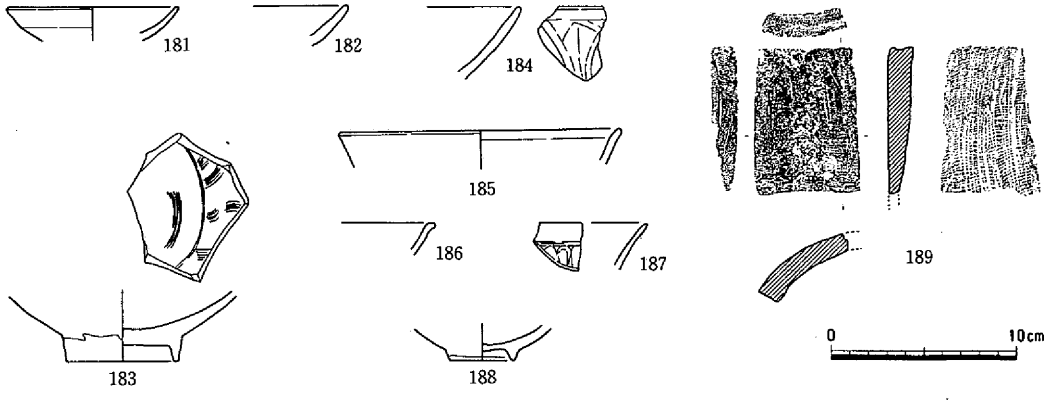
近世水田（第63・67・68図）

調査域全体に確認された青灰色粘土の水田層（11層）である。海抜高475～490cmで検出された。水田層の厚さは、10～15cmほどである。水田層下面には部分的に鉄分の沈着が認められた。この水田層の上位は、洪水砂と判断される粘土を混じえた細砂層（10層）が覆う。この細砂層を除去し、水田面の検出を行なう際、向原Ⅲ－２・３・４区では、水田面上に幅20～25cm程度、深さ５～10cm以下の砂が堆積した複数のほぼ平行に走る溝を検出し、畝状のものと判断した。

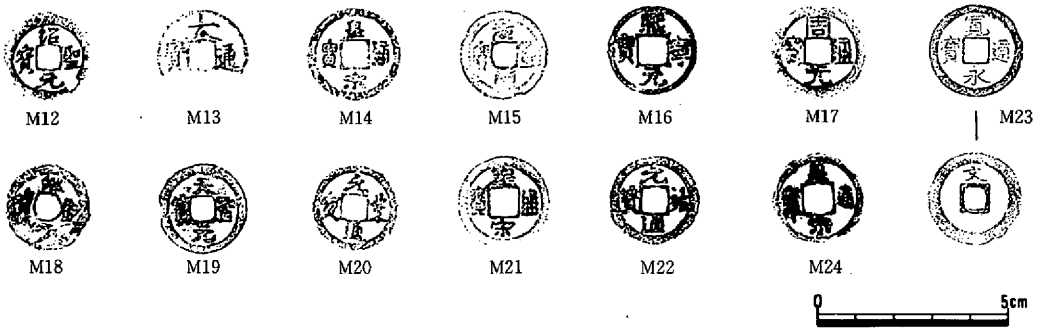
畦畔は、位置的にわずかにずれながらも中世水田２のものをほぼ踏襲しているが、向原Ⅲ－５区では、幅広の畦畔は、この段階では確認されなかった。畦畔の幅は20～30cmほどである。北側２本の東西方向の畦畔は、ハの字状に西側が広がり、畦畔間の幅は、東側では約20ｍ、西側で約28ｍほどを測る。

遺物（第69・70・71図）

出土遺物は全般的に細片であり、確実に遺構に伴うものは微量であり水田層の詳細な時期を判断することはできなかった。ここで図示したものは、おもに青白磁と土錘、古銭である。このほかに、亀山焼甕、備前焼甕などがある。**181～183・185～187**は白磁である。**183**は、内面に櫛描き文をもつ碗である。**187**は内面に陽刻文をもつ碗である。**184・188**は青磁であり、**184**は、外面に縞蓮弁文を施している。**188**は碗であり高台部下半に釉を施していない。**183・186**は12～13C、**182・184・187・188**は13～14C、**181**は15～16Cの年代が考えられる。**189**は丸瓦であり、凹部には布目が認められる。土錘は、12点図示しているが全部で59点出土している。すべてが、長軸方向に穴が貫通しているものである。うち、**C14**のみが短軸方向外面に溝が設けられている。古銭は、13枚出土している。そのほとんどが、宋銭であり、１枚寛永通寶が出土している。



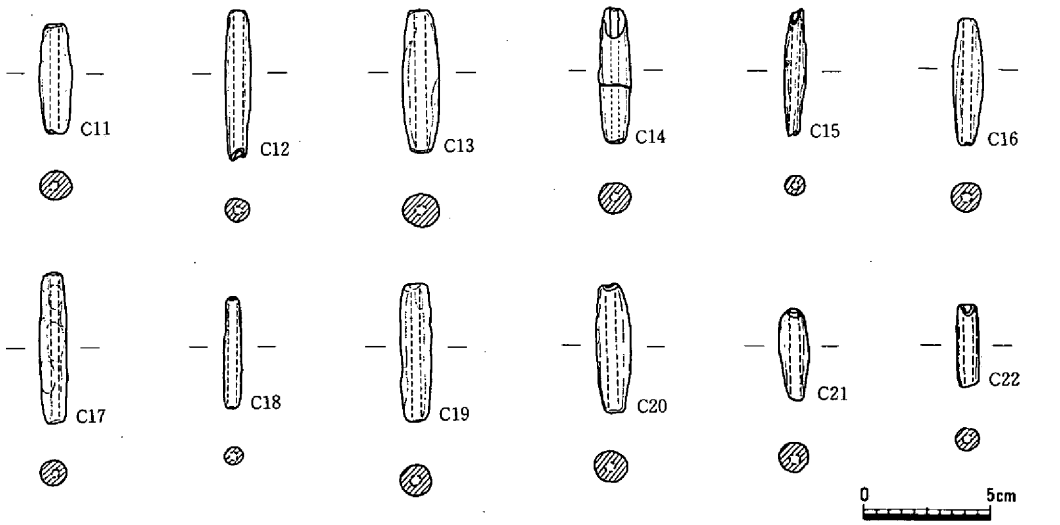
第69図　向原Ⅲ・沼・丸川調査区出土遺物



第70図　出土古銭（1/2）

表２　向原Ⅲ・沼・丸川調査区銭貨一覧表

遺物番号	銭貨名	出土地	遺物名・層位	最大計測値（㎜）		重量（g）	残存率	初鋳年代
				直径	厚さ			
M12	紹聖元寶	向原Ⅲ－３	中世水田２（12層）	24.8	1.1	2.4	完存	1094
M13	大□通寶	向原Ⅲ－５	中世水田２（12層）	23.9	1.4	1.4	1/2	
M14	皇宋通寶	向原Ⅲ－５	中世水田２（12層）	24.7	1.2	2.7	完存	1038
M15	元豊通寶	向原Ⅲ－３	溝10	23.8	1.1	2.2	完存	1078
M16	熙寧元寶	向原Ⅲ－１	近世水田（11層）	24.0	1.3	3.0	完存	1068
M17	周元通寶	向原Ⅲ－１	近世水田（11層）	25.3	1.2	2.8	完存	
M18	紹聖元寶	向原Ⅲ－１	近世水田（11層）	23.2	1.2	2.2	完存	1094
M19	天聖元寶	向原Ⅲ－２	近世水田（11層）	24.4	1.0	2.8	完存	1023
M20	元豊元寶	向原Ⅲ－４	近世水田（11層）	23.0	1.0	1.8	完存	1078
M21	皇宋通寶	向原Ⅲ－２	包含層（10層）	24.9	1.2	3.7	完存	1083
M22	元祐通寶	向原Ⅲ－４	包含層（10層）	24.4	1.2	2.8	完存	1086
M23	寛永通寶	向原Ⅲ－５	包含層（10層）	25.0	1.3	3.6	完存	1726
M24	皇宋通寶	向原Ⅲ－１	包含層	24.2	1.0	2.3	完存	1038



第71図　土　錘（1/3）

表3　向原Ⅲ・沼・丸川調査区土錘一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構名・層位	計測最大量(㎜)		重量	胎　土	色　調	残存率	備　考
				長さ	厚さ	(g)				
1		向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	27.0	12.0	3.2	細砂	淡黄色	1/2	
2		向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	38.0	9.0	2.4	ほとんど砂粒無し	橙色	2/3	
3	C11	向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	44.0	12.0	6.6	微砂（雲母）	鈍橙色	完形	
4		向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	47.0	9.0	3.2	微砂	灰白色	小欠	
5		向原Ⅲ－4	中世水田1（13層）	31.0	10.0	2.5	細砂	灰褐色	1/2	
6		向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	30.0	8.0	1.4	微砂	灰白色	2/3	
7		向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	25.0	11.0	2.3	微砂	灰白色	1/2	
8		向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	24.0	10.0	2.2	微砂	灰白色	1/2	
9	C12	向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	59.0	10.0	5.9	微砂	灰白色	少欠	
10		向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	33.0	11.0	3.8	微砂	淡黄色	少欠	
11		向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	35.0	12.0	4.4	微砂	灰黄色	少欠	
12		向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	34.0	7.0	1.6	微砂	浅黄橙色	少欠	
13		向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	22.0	10.0	1.6	微砂	灰白色	1/3	
14		向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	42.0	8.0	2.3	微砂	鈍赤橙色	少欠	
15		向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	25.0	8.0	1.4	微砂	灰黄橙色	2/3	
16	C18	向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	44.0	7.5	2.4	微砂	灰白色	完形	
17		向原Ⅲ－5	中世水田1（13層）	40.0	10.5	3.8	微砂	淡黄色	3/4	
18	C13	沼・丸川	中世水田2（12層）	57.0	14.0	11.4	微砂	灰白色	完形	
19		沼・丸川	中世水田2（12層）	50.0	11.0	5.7	微砂	鈍黄橙色	少欠	
20		向原Ⅲ－1	中世水田2（12層）	23.0	8.0	1.4	微砂	灰白色	1/3	
21		向原Ⅲ－1	中世水田2（12層）	44.0	13.0	6.0	細砂多、わずかに砂礫	鈍黄橙色	3/4	
22	C14	向原Ⅲ－3	中世水田2（12層）	54.0	12.5	8.4	細砂	灰白色	少欠	短軸に溝あり
23		向原Ⅲ－4	中世水田2（12層）	50.0	13.0	6.8	微砂	灰白色	少欠	
24		向原Ⅲ－4	中世水田2（12層）	47.0	10.0	4.2	微砂、ごくまれに砂礫	浅黄橙色	少欠	
25		向原Ⅲ－4	中世水田2（12層）	33.0	9.0	2.8	ほとんど砂粒なし	鈍橙色	3/4	
26		向原Ⅲ－4	中世水田2（12層）	29.5	12.0	3.3	微砂	灰白色	1/2	
27		向原Ⅲ－4	中世水田2（12層）	41.0	11.0	4.9	微砂	褐灰色	少欠	
28		向原Ⅲ－4	中世水田2（12層）	32.0	11.5	3.1	微砂	灰白色	1/2	
29		向原Ⅲ－4	中世水田2（12層）	36.0	10.0	3.0	ごくまれに砂礫	淡黄色	少欠	

番号	掲載番号	出土地区	遺構名・層位	計測最大量(mm)		重量	胎　土	色　調	残存率	備　考
				長さ	厚さ	(g)				
30		向原Ⅲ－4	中世水田2（12層）	53.0	11.0	6.0	微砂	灰黄色	少欠	
31		向原Ⅲ－4	中世水田2（12層）	32.0	10.0	3.1	微砂	灰黄色	2/3	
32		向原Ⅲ－4	中世水田2（12層）	60.0	13.0	7.2	微砂	灰白色	少欠	
33	C15	向原Ⅲ－4	中世水田2（12層）	51.0	8.0	2.6	微砂	淡赤橙色	少欠	
34		向原Ⅲ－4	中世水田2（12層）	47.0	9.0	3.6	微砂	灰白色	少欠	
35	C16	向原Ⅲ－5	中世水田2（12層）	50.0	12.0	6.9	微砂	鈍橙色	完形	
36	C17	向原Ⅲ－5	中世水田2（12層）	60.0	10.0	7.0	微砂	鈍赤褐色	完形	
37		向原Ⅲ－5	中世水田2（12層）	42.0	9.0	3.4	微砂	黄灰色	少欠	
38		向原Ⅲ－1	近世水田（11層）	54.0	11.0	6.7	細砂（雲母）	橙色	完形	
39	C19	向原Ⅲ－1	近世水田（11層）	55.0	12.0	9.1	微砂	灰色	完形	
40		向原Ⅲ－1	近世水田（11層）	18.0	8.0	0.9	細砂	浅黄橙色	1/4	
41		向原Ⅲ－1	近世水田（11層）	34.0	11.0	2.9	微砂	赤橙色	少欠	
42		向原Ⅲ－1	近世水田（11層）	37.0	12.0	2.4	微砂	鈍赤橙色	1/2	
43		向原Ⅲ－2	近世水田（11層）	42.0	12.0	5.4	砂礫	鈍橙色	3/4	
44		向原Ⅲ－2	近世水田（11層）	26.0	11.0	3.0	微砂	淡黄色	1/2	
45		向原Ⅲ－2	近世水田（11層）	53.0	12.0	7.7	微砂	鈍黄橙色	完形	
46		向原Ⅲ－3	近世水田（11層）	26.5	7.5	1.3	微砂	鈍橙色	1/2	
47		向原Ⅲ－4	近世水田（11層）	43.0	11.0	4.9	微砂	浅黄橙色	少欠	
48		向原Ⅲ－4	近世水田（11層）	52.0	13.0	7.7	細砂、わずかに砂礫	淡橙色	少欠	
49	C20	沼・丸川	近世水田（11層）	51.0	14.0	8.3	微砂	灰白色	完形	
50		向原Ⅲ－2	包含層（10層）	30.0	11.0	2.8	細砂	灰白色	1/2	
51	C21	向原Ⅲ－2	包含層（10層）	36.5	13.0	3.9	微砂	鈍赤橙色	少欠	
52		向原Ⅲ－2	包含層（10層）	24.0	7.0	1.1	微砂	鈍赤橙色	1/2	
53	C22	向原Ⅲ－2	包含層（10層）	33.0	9.0	2.7	細砂	鈍赤橙色	少欠	
54		向原Ⅲ－2	包含層（10層）	53.0	12.5	7.7	微砂	鈍黄橙色	少欠	
55		向原Ⅲ－2	包含層	42.0	11.0	4.4	微砂	灰白色	2/3	
56		向原Ⅲ－2	包含層	39.0	9.0	3.3	微砂	灰白色	少欠	
57		向原Ⅲ－2	包含層	52.0	12.5	5.6	微砂	灰白色	少欠	
58		沼・丸川	包含層	43.0	11.0	5.6	微砂	赤褐色	3/4	
59		沼・丸川	包含層	36.0	12.0	5.6	微砂	灰白色	2/3	

第5節　砂田調査区

1．発掘調査の経過と方法

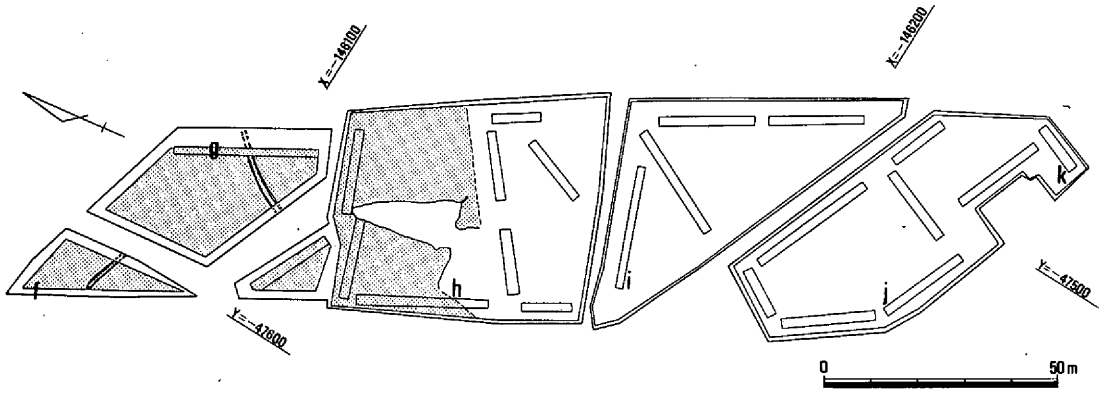
調査区は、三手遺跡の南端にあたる。調査は、現農道等の関係で5箇所の小調査区に分割し、2つの班が担当した。ここでは、南側から砂田1～5区と呼称して報告する。重機による現在の耕土と、明治以降の洪水砂の除去後、トレンチを設定し土層断面の観察を行ったが、砂田1～3区南半までは、遺構が確認されず、遺物の出土も希有の状況を示したため、トレンチの土層断面図を作成したのち調査を終了した。3区北半から北側では、水田層が確認され、近世の水田層と判断し、面的に調査を行ない、畦畔の検出に努めた。この水田層の下位は、遺構が検出されず、水田層の除去し、床土面の確認の後、トレンチの土層断面図を作成し、調査を終了した。

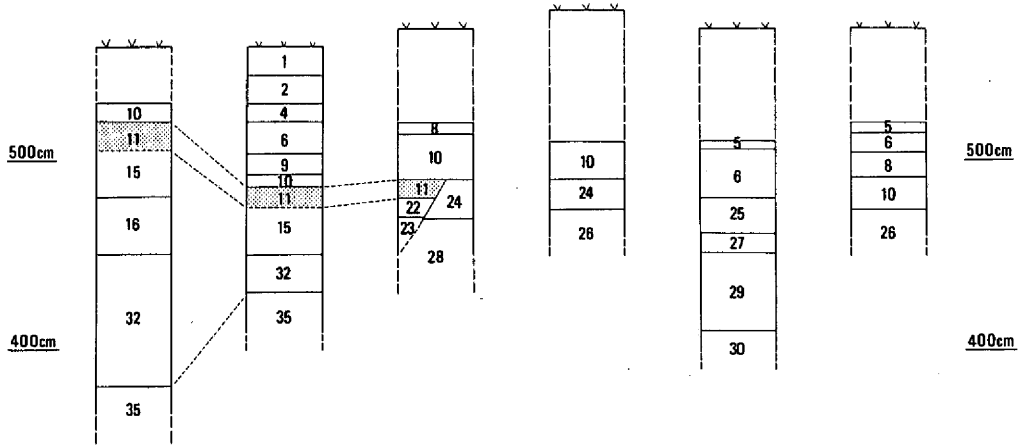
2．基本層準（第72図）

調査では、各小調査区ごとに複数のトレンチを設け、それぞれについて図化を行なったが、ここでは、第72図に示す位置についての土層柱状図を作成し基本層準の説明を行なう。なお、土層説明は、前述した向原Ⅲ・沼・丸川調査区と整合させるため、同一の層番号を用いている。

1層は、現在の水田層である。2～9層は、向原Ⅲ・沼・丸川調査区と同じく近世末以降の洪水砂と水田層の堆積である。10層が、近年水田層である青灰色粘土の11層を覆う洪水砂である。10層の広がりの範囲は、一部欠如している個所があるものの、ほぼ調査区全体にわたって確認されている。近世水田層11層は、3区北半より北側で観察され、向原調査区からつづくこの水田の範囲を知ることができた。5区ではこの水田層の下位に、茶褐色粘質微砂土16層が堆積している。この層位は水田層の可能性があるが、部分的な観察のため、確実にとらえることはできなかった。これより下位に、シルト質の堆積（32層）とさらに砂礫層（35層）を確認した。

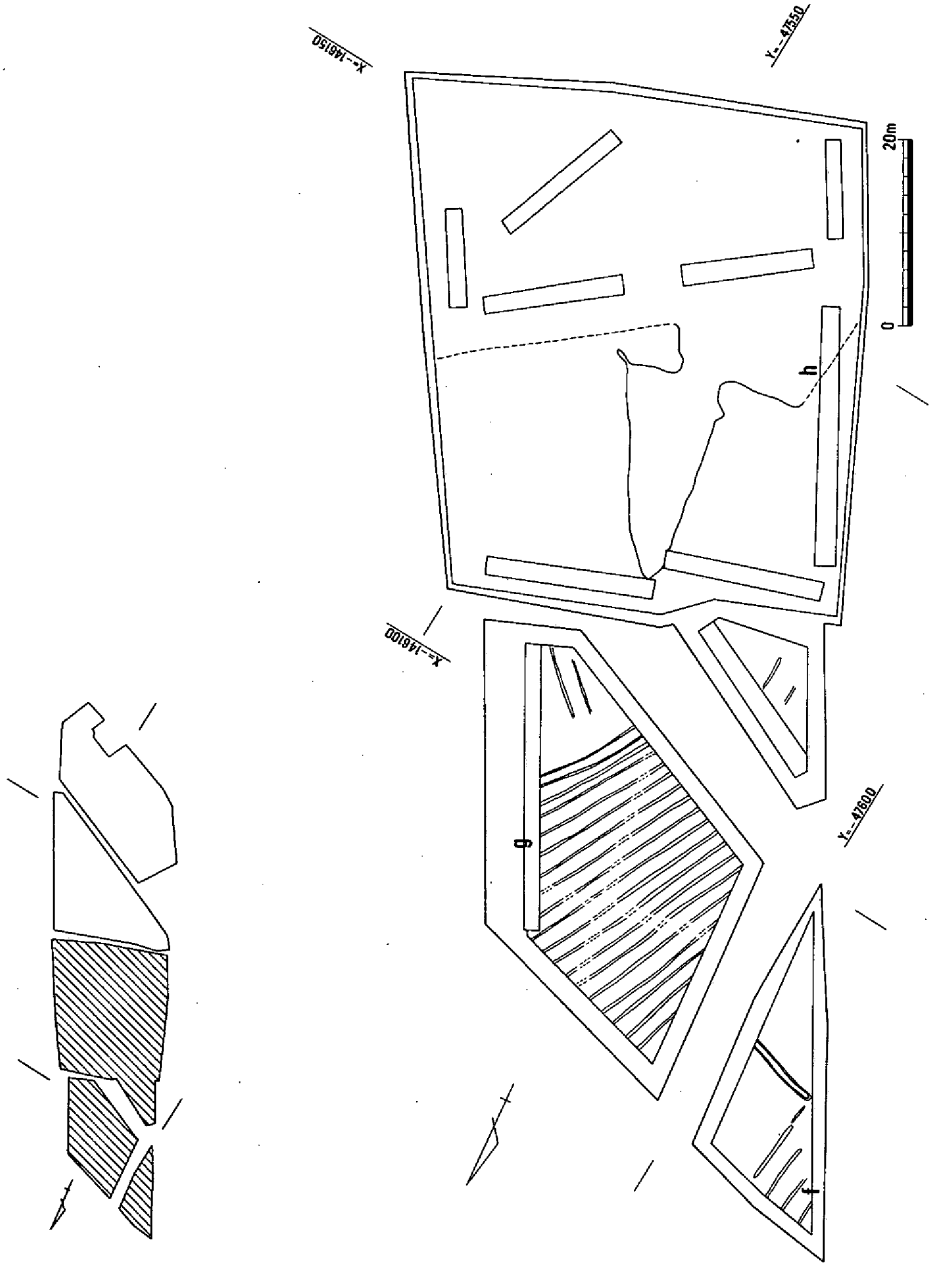
近世水田層が認められない1・2区では、粘土と微砂・細砂の混層（24～30層）が厚く堆積し自然堆積の状況を示す。基本的に南側から北側へむかって緩やかに堆積している状況が看取れる。これらのことから、土筆山調査区の微高地から北側へ下がり、向原1・2区の微高地までの間が広大な低湿地ないしは、旧河道であり、後にこの低位部に水田が営まれたと推測している。





1 淡黒褐色腐植土・・・現耕作土
2 淡灰茶色粗砂
4 灰茶褐色粗砂
5 茶色粗砂
6 青灰色微砂
8 青灰色粘土混微砂
9 明茶色微砂
10 濃青灰色粘土混細砂
11 青灰色粘土・・・近世水田層
15 暗灰色粘土
22 暗青灰色微砂混粘土
23 暗青灰色粘土混細砂
24 暗青灰色粘土混細砂
25 青灰色粗砂混細砂
26 青灰色粘土混粗砂
27 暗青灰色細砂混粘土
28 青灰色粗砂
29 暗青灰色粗砂混細砂
30 暗青灰色細砂混粘土
32 暗灰褐色シルト
35 灰色砂礫

第72図　砂田調査区基本層準模式図



第73図　近世水田（1/800）

３．近世の遺構と遺物

近世水田（第73図）

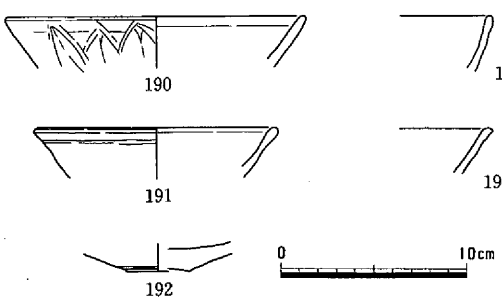
３区北半～５区にかけて検出された青灰色粘土の水田層である。向原・沼・丸川調査区で検出された近世水田層と同一のものである。海抜高は、３・４区では、485～490cmであるが、５区では520cmと段差が生じており、田面の高さが１段５区のほうが高い。水田層の厚さは10～15cmである。水田層は、洪水砂と考えられる11層によって覆われている。３区では、不規則な三角形状の高まりが水田端に検出された。

畦畔は、やや方位とずれ、北東から南西にのびるものが４区で検出された。畦畔の幅は、やや広く約100cmを測る。５区で検出した畦畔は、４区のものとほぼ直交する。幅約90～100cmを測る。それぞれ田面との比高は、上端が削平されており３～５cm程度である。４・５区では、洪水砂を除去すると、水田面に幅20～25cm、深さ５～10cmほどの溝21条をほぼ直線的に検出した。これらは150～160cmの間隔で南北方向に平行に走り、畝状のものと判断した。

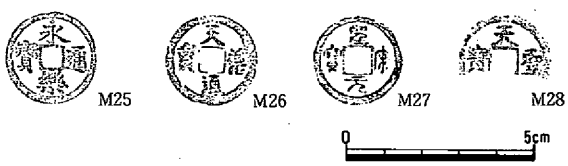
図示していないが、この水田層除去後に、向原調査区で検出された鋤床状の浅い多数の溝が確認されている。

遺物（第74・75図）

出土遺物は、細片で微量であり、近世水田の詳細な時期を確実に示すものはなかった。図示したものは、青白磁と古銭である。このほかに、いわゆる早島式の椀、小皿、亀山焼、備前焼等がある。**190～193**は青磁、**193**は、白磁である。**190**は、外面に縞蓮弁文を施す碗である。**192**は、内面に櫛描文をもつ。**190・191**は13～14C、**192・194**は12～13C、**193**は14～15Cの年代が考えられる。（大橋）



第74図　出土遺物(1)



第75図　出土遺物(2)

表4　砂田調査区銭貨一覧表

遺物番号	銭貨名	出土地	遺物名・層位	最大計測値（mm）		重量（g）	残存率	初鋳年代
				直経	厚さ			
M25	永楽通寶	砂田2	包含層	25.0	1.5	3.3	完存	1408
M26	天□通寶	砂田2	包含層	24.6	1.3	2.9	完存	
M27	□康元寶	砂田2	包含層	23.8	1.1	2.8	完存	
M28	天聖元寶	砂田5	近世水田（11層）	23.4	1.3	1.8	1/2	1023

第3章　ま　と　め

三手遺跡は、今回の調査では幅約40m、長さ約600mにも及ぶ大規模なものであった。調査の結果、北端部で微高地の存在が確認され古墳時代～中世の遺構、遺物が明らかとなった。また、微高地南側の大半は、堆積状況からみて旧河道および後背湿地の様相を呈していた。これらの旧河道、後背湿地の低位部は、古代末～中世に水田として土地利用が開始され、現在に至る間永々と広範に水田域として利用されてきた状況を示していた。

以下、微高地、水田の項を設けてそれぞれの状況を概見しまとめとする。

第1節　微　高　地

今回の調査では、三手遺跡北端の向原（Ⅰ－B）調査区で微高地を確認した。微高地は向原Ⅰ－B調査区の南側半分に検出され、北側はほぼ北方向に落ちる状況を示していた。微高地は砂と礫によって形成されており、北側斜面は礫が覆うような状態であった。この微高地を構成する砂と礫に混在して弥生時代中期～古墳時代初頭の土器が磨滅した状態で大量に検出された。このような状況からみて、古墳時代初頭以降の大規模な洪水により形成された微高地と推定された。微高地上には、5世紀後半期の竪穴住居・溝・土器溜りなどの遺構が検出されており、この新しく形成された微高地への占地もほぼ同時期であろうと考えられる。微高地の南西約200mには、高塚遺跡が存在しており、微高地内に混入していた弥生～古墳初頭の遺物もおそらく高塚遺跡などからのものと推察される。なお、高塚遺跡には5世紀前半期のカマド付竪穴住居や陶質土器（初期須恵器）、などが検出されており、渡来人との深い係わりの集落が存在している。今回検出された微高地上の遺構は、高塚遺跡よりもやや新相であるが、新たに形成された微高地への進出が高塚遺跡の集落を母村とする集団であった可能性が十分考えられる。また、砂と礫によって構成される条件的な負担にも、渡来人と密接な関係において高揚しつつあった鉄生産と土木技術などの潜在的裏付が存在したと考えられる。

また、微高地北側には、堆積状況からみて河道が流走していたと思われ、向原Ⅰ－A調査区でも北側肩部が確認されていないことから推定してもその規模は数十mにおよぶ規模の大きい河道であったと考えられる。その河道の規模、位置関係からみて、旧足守川の流路であった可能性が強い。調査では向原Ⅰ・Ⅱ調査区で、この河道（微高地）縁辺部から、須恵器、土師器の完形品が数個体～10数個体が掘り方を伴わずに検出された。須恵器は、杯類・高杯で、土師

器はその大半が高杯でその他甕・甑が若干認められた。このような状況は、後述する津寺遺跡野上田調査区でも確認されており、須恵器の杯類・高杯・土師器の高杯を利用した供献行為が行われたと考えられる。また、一部には甕・甑が伴っていることから供献行為とともに供膳行為も行われた可能性もある。このような状況は、その河道縁辺部の共通した位置に存在することから、河道＝水に対する祭祀と考えてよかろう。微高地上で検出された遺構は、5世紀後半期の後、やや間を置き次には平安時代の遺構が確認されている。しかし、検出された遺構は少ない。また、河道（この時期には湿地化している可能性もある）がなお存在していた状況も認められた。次に中世に入ると、数世帯の住居が検出されており、住居の周辺には埋葬施設を伴っている。向原Ⅰ－B調査区では、基本的には2×2間の住居が立て替えられ、長期間移住域として占地されていた状況を示している。住居の西～北側に隣接した埋葬施設が10基前後検出されており、その世帯の構成員が順次埋葬されたものと考えられる。その埋葬施設は、いずれも土壙墓で副葬品を伴っておらず、その住居の規模などからも下層階級層であったと判断される。土壙墓の残存状態は良くなかったものの、当時の農村の住居と埋葬の関係が掌握できる良好な遺構であった。また、河道(後背湿地)は、中世以降水平堆積層が認められ水田化していったものと推定される。

（中野）

第2節　水　　田

三手遺跡では、古代末から中・近世にかけての水田遺構が確認された。以下では、今回の調査結果にもとづき、古代・中世・近世の大きく3段階に分け、その変遷過程を述べ、まとめと変える。

1．古　代　末

三手遺跡において水田利用が確認されたもっとも古い段階である。水田層は、向原Ⅱ調査区において微高地に挟まれた範囲で検出された。微高地端部には、幅広い浅い溝がはしり、これに注ぐ微高地を貫流する用水路が存在する。微高地に挟まれたたわみを利用し、端部の整形を行い水田経営を開始したようである。この段階の明瞭な畦畔は確認されず、条里に基づくかどうか不明である。また、向原Ⅱ調査区以外では、この水田層は確認しておらず、その広がりも不明である。

2．中　　世

調査範囲のほぼ北西半分にわたって水田が広がる。向原Ⅲ調査区の中央には、ほぼ東西方向に貫流する幅約5mの大溝が掘削され水路として利用される。大溝は、堆積状況から複数回の掘り替え、底ざらえが想定され、ある程度の時間幅を考えうる。また砂礫と粘土の互層状況か

ら、水流が安定した時期と不安定な時期の繰り返しが看取される。この大溝を境とし北側のみ水田に利用されており、南半部は低湿地の状態であったろうと想定される。畦畔は、ほぼ南北・東西を向き、条里を想定される。また、幅が広い農道状の畦畔と狭い方形の高まりが確認されている。畦畔の一部は、削り出しによって作られていることが確認されている。

水田層は、暗灰オリーブ色を呈するわずかに粘性をもった微砂層であり、この層位の底面には、黄褐色の床土と考えられる鉄分の沈着層が明瞭に観察される。また、耕作の痕跡として鋤跡も比較的明瞭に検出され、それによって、立体的には検出できなかった畦畔の方向が推測される場合もあった。年代は、鎌倉時代後半から室町時代前半を考えている。

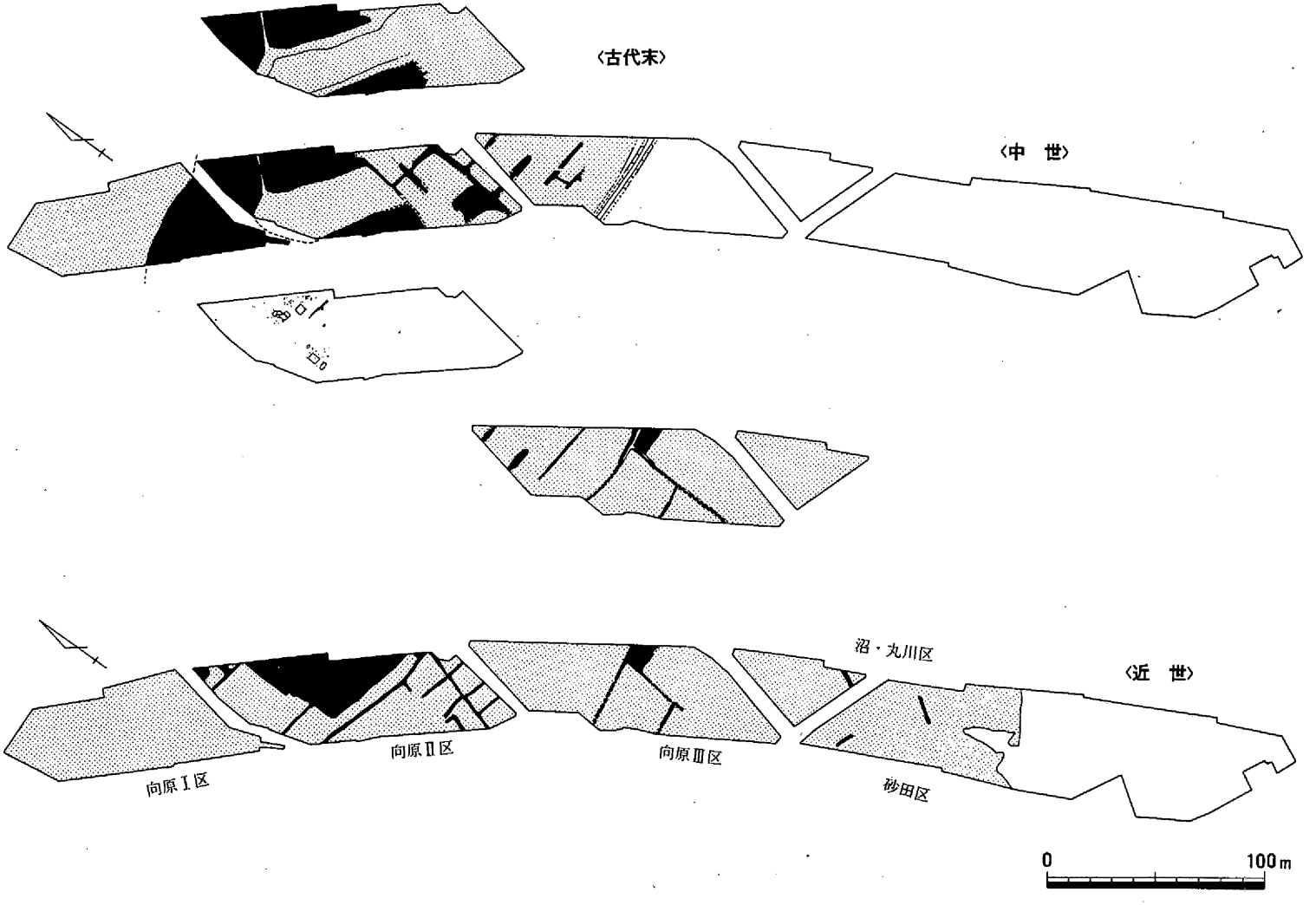
向原Ⅱ調査区では、どのような理由によるものかは明らかでないが、この水田層がいったん埋没した後、水田利用を行わず、微高地上と面的に連続すると考えられる小規模な掘立柱建物等が配置される段階が確認されている。この掘立柱建物等は、すぐにまた廃棄され再び同じ地に水田経営が再開される。

向原Ⅲ・沼・丸川調査区で、この上位の中世末段階の水田層が確認されている。この水田層は前段階に貫流した大溝が埋没した後のものであるが、畦畔は、ほぼ前段階の位置を踏襲しており、確実に条里の規制が成立していたものと推測される。

3．近　　世

調査範囲の北西側約2/3にわたって確認された灰色粘土を基調とする水田層である。水田層が確認されなかった砂田調査区の南東部分は、この段階においても水田利用されていない湿地の状態であると堆積状況から判断される。検出された畦畔は部分的であるが、南北東西の地割りに沿うようである。この水田層の上面では向原Ⅲ調査区から砂田調査区の北側にかけて、幅20cmほどの浅い溝が複数平行に延び、畝状のものの痕跡と判断されることから、単一的な水田耕作のみではなく、畑作も平行して行われていたと考えられる。また、この水田層は、粘土を混在した厚い洪水砂で覆われ、いったん破壊的な打撃を受けたことが想像される。この後、複数回の洪水を受けながら、現在の水田景観へと移り変わっていくようである。

全般的に、出土遺物が希少であり、水田層の詳細な時期を決定することはできなかった。さらに、調査は、各調査区を小調査区に分断して複数の調査担当者が進行させざるをえず、面的な連続性が得られにくい側面があったことも否めない。また、旧足守川の流路を想定する決定的な判断材料は今回の調査では得られなかった。しかしながら、調査範囲内では、津寺遺跡土筆山調査区の微高地までの間が、北端の一部の狭小な微高地を除き、河川の流路ないしは、その後背湿地であったことが判明し、その埋没過程における古代末から近世にかけての水田経営の在り方についての知見を得ることができた。　　（大橋）



第76図　三手遺跡水田の広がり（1/3000）

表5　土器観察表

土器番号	遺跡名	調査区	出土地	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
						口径	底径	器高					
1	三手	向原Ⅰ	礫層	弥生土器	壺	19.4			頸部に凹線	鈍橙色	0.5～1.5㎜多 雲母	良好	
2	〃	〃	礫層	〃	〃				口唇部に4本の凹線	橙色	0.5～1.5㎜多	〃	
3	〃	〃	〃	〃	〃				口唇部に3本の凹線	褐灰色	0.3～3.5㎜多	〃	
4	〃	〃	側溝南西端	〃	〃				口唇部に沈線1本	鈍黄橙色	0.5～1.5㎜の石 多	〃	
5	〃	〃	礫層	〃	〃	16.8			口唇部に刺突文	浅黄橙色	0.3～1.0㎜多	〃	
6	〃	〃	中世包含灰砂層			15.8			ヨコナデ、口唇部に浅い凹線	鈍黄橙色	0.5～1.5㎜多	〃	
7	〃	〃	礫層	土師器	〃					浅黄橙色	0.3～1.0㎜多	〃	
8	〃	〃	〃	弥生土器	〃	23.2			刺突文	鈍橙色	0.3～1.2㎜多	〃	
9	〃	〃	〃	〃	甕	18.7				浅黄橙色	0.3～2.0㎜多	〃	
10	〃	〃	中世包含層	〃	〃				ヨコナデ、ヘラミガキ	明褐灰色	0.5～1.5㎜中	〃	
11	〃	〃	礫層	〃	〃	13.8			口唇部に浅い凹線2本、沈線1本	鈍橙色	0.5～2.5㎜多	〃	
12	〃	〃	青灰色砂層	〃	高杯	18.8				橙色	0.3～1.0㎜多	〃	
13	〃	〃		〃	器台				透かし窓上下で1単位、3単位あったと思われる。ハケメの上から凹線	鈍橙色	0.5～2.0㎜多	〃	
14	〃	〃		〃	台付鉢		9.7		ヘラミガキ	浅黄橙色	0.3～1.5㎜少	〃	
15	〃	〃	側溝	〃	製塩土器		4.0		外面ヘラケズリ	褐灰色	0.5～2.0㎜多	〃	
16	〃	〃	中世包	〃	〃		4.1		〃	褐灰白色	0.3～2.5㎜多	〃	
17	〃	〃	住居址	須恵器	杯蓋	12.0		4.4	内面底部仕上げナデ	灰色	1.0㎜以下	〃	ロクロ右回り
18	〃	〃	〃	〃	杯身	10.6		4.8	〃	暗青灰色	〃	〃	〃
19	〃	〃	〃	〃	〃	10.6			〃	赤褐色	〃	〃	〃
20	〃	〃	〃	〃	〃	10.2			〃	オリーブ灰色	〃	〃	〃
21	〃	〃	〃	〃	高杯(有蓋)	10.4	10.2	9.4	透かし方	暗青灰色	1.5㎜以下	〃	〃
22	〃	〃	〃	〃	壺	10.4			口縁部波状文。外面下半平行タタキ。	暗緑灰色	1.0㎜以下	〃	
23	〃	〃	〃	土師器	高杯	16.2			杯部内外面ハケメのちヨコナデ。	橙色	3.0㎜以下	〃	
24	〃	〃	〃	〃	甕	9.0			内面下半ヘラケズリ	黒褐色	1.0㎜以下	〃	
25	〃	〃	〃	〃	鉢	8.2		6.5	外面ハケのちナデ	明青褐色	〃	〃	黒斑
26	〃	〃	〃	〃	〃	11.0		5.4	内面ハケ状工具のちナデ。	橙色	〃	〃	
27	〃	〃	〃	〃	壺	17.4		27.0	口縁部、外面ハケメ。胴部長胴気味。	浅黄橙色	3.0㎜以下	〃	黒斑2ヶ所
28	〃	〃		〃	〃	22.4			外面ハケ状工具。内面ヘラケズリ。	にぶい橙色	1.5㎜以下	〃	
29	〃	〃	溝－2	〃	〃	11.6			口縁部内面、頸部外面ハケメ。	にぶい黄橙色	1.0㎜以下	〃	
30	〃	〃	〃	〃	〃	15.2			外面ハケメ、底面ヘラケズリ。	淡橙色	2.0㎜以下	〃	
31	〃	〃	土器溜り	〃	〃	18.4		20.2	外面ハケメのちナデ。	〃	〃	〃	
32	〃	〃	〃	〃	高杯	25.3	15.2	18.0	杯部内外面ハケメのちナデ。	浅黄橙色	1.0㎜以下精良	〃	
33	〃	〃	〃	〃	〃	21.9	14.2	10.7	杯部外面ハケ状工具	〃	〃	〃	
34	〃	〃	〃	〃	〃	21.5	13.4	19.0	杯部は深い。脚部円孔透し3ヶ所	にぶい黄橙色	1.5㎜以下	〃	
35	〃	〃	〃	〃	〃	13.6	9.8	12.1	杯部内外面、脚裾部内外面ハケメ。内孔1ヶ所	にぶい橙色	0.5㎜以下少 精良	〃	
36	〃	〃	〃	〃	〃	13.3	10.2	11.9	脚裾部内面ハケメのちヨコナデ。円孔1ヶ所。	橙色	1.0㎜以下少 精良	〃	
37	〃	〃				12.8	10.2	12.0	杯部外面ハケメのちヘラ状工具、ナデ。	橙色	1.0㎜以下少		脚裾部ス ス付着。
38	〃	〃	〃	〃	〃	14.1	9.8	12.0	杯部内外面ハケメのちヨコナデ。	にぶい橙色	0.5㎜以下少 精良	良好	黒斑2ヶ所。杯部口縁ス ス付着。
39	〃	〃	〃	〃	〃	13.6	10.0	11.4	脚裾部内面ハケメのちヨコナデ。	〃	1.0㎜以下少	〃	
40	〃	〃	〃	〃	〃	15.4	11.2	12.8	杯部外面ハケメのちヨコナデ。	浅黄橙色	1.5㎜以下少	〃	

三手遺跡

土器番号	遺跡名	調査区	出土地	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
41	三手	向原1	土器溜り	土師器	こしき				外面ナデ。	にぶい黄褐色	3.0㎜以下	良好	
42	〃	〃	土壙墓－1	黒色土器	椀	14.0	6.9	5.0	内外面ヘラミガキ。	灰白色	1.0㎜以下少雲母	〃	
43	〃	〃	土壙墓－2	早島式土器	〃	13.8	6.4	5.1	内部ていねいなナデ。	灰白	1.0㎜以下	〃	
44	〃	〃	土壙墓－3	〃	〃	12.2	6.3	4.5	〃	白褐色	〃	〃	
45	〃	〃	土壙－3	〃	〃	13.4			〃	〃	0.5㎜以下	〃	
46	〃	〃	〃	〃	〃	13.2			〃	乳白色	〃	〃	
47	〃	〃	〃	〃	〃	13.5	6.2	4.7	〃	白褐色	1.0㎜以下	〃	
48	〃	〃	〃	〃	〃	10.6	5.2	4.0	〃	〃	〃	〃	
49	〃	〃	〃	〃	小皿	7.2	6.2	1.4	底部ヘラオコシ	〃	〃	〃	ロクロ右回り
50	〃	〃	〃	〃	〃	7.6	5.9	1.5	〃	〃	〃	〃	〃
51	〃	〃	〃	〃	〃	7.8	6.0	1.5	〃	〃	0.5㎜以下	〃	〃
52	〃	〃	〃	〃	〃	7.8	4.9	1.5	〃	淡橙8/3	1.0㎜以下	〃	〃
53	〃	〃	〃	〃	〃	7.4	6.0	1.5	〃	白褐色	〃	〃	〃
54	〃	〃	〃	〃	〃	7.3	5.8	1.4	〃	〃	0.5㎜以下	〃	〃
55	〃	〃	〃	〃	〃	7.8	6.7	1.4	〃	白褐色	1.0㎜以下	〃	〃
56	〃	〃	〃	〃	〃	8.2	5.8	1.5	〃	〃	1.5㎜以下	〃	〃
57	〃	〃	〃	〃	〃	8.4	6.8	1.5	〃	淡黄	0.5㎜以下	〃	〃
58	〃	〃	〃	〃	〃	8.2	6.1	1.3	〃	浅黄	〃	〃	〃
59	〃	〃	〃	土師器	鍋	33.2			内外面ハケメ。	灰黄	1.0㎜以下	〃	
60	〃	〃	〃	亀山焼	甕	37.4			外面格子タタキ。	灰	3.0㎜以下	〃	
61	〃	〃	土壙－4	東播系土器	鉢				内外面ヨコナデ。	淡灰色	0.5㎜以下	〃	
62	〃	〃	〃	亀山焼	カメ					灰	0.5㎜以下	〃	
63	〃	〃	〃	早島式土器	椀					浅黄橙	〃	〃	
64	〃	〃	〃	〃	〃					褐灰	〃	〃	
65	〃	〃	〃	〃	〃		5.0			白褐色	1.5㎜以下	〃	
66	〃	〃	〃	〃	小皿	6.6	4.8	1.2	口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	
67	〃	〃	〃	〃	〃	6.2	4.8	1.2	〃	〃	〃	〃	
68	〃	〃	〃	〃	〃	6.6	4.6	1.2	〃	浅黄橙	0.5㎜以下	〃	
69	〃	〃	〃	〃	〃	6.4	4.7	1.2	〃	浅黄橙	〃	〃	
70	〃	〃	〃	〃	〃	6.6	4.6	1.0	〃	白褐色	1.5㎜以下	〃	
71	〃	〃	〃	〃	〃	6.2	4.2	1.5	〃	浅黄橙	0.5㎜以下	〃	
72	〃	〃	〃	土師器	鍋	34.0		13.5	内外面ハケメ。	白灰褐色	1.0㎜以下	〃	
73	〃	〃	〃	〃	〃	37.2		13.3	〃	白褐色	〃	〃	
74	〃	〃	土壙－5	早島式土器	椀	13.2	6.0	5.0	内面ていねいなナデ。	〃	〃	〃	
75	〃	〃	〃	〃	椀	11.5	5.8	3.9	内面ていねいなナデ。	白褐色	1.0㎜以下	〃	
76	〃	〃	〃	〃	小皿	7.6	6.2	1.3		黒褐	〃	〃	
77	〃	〃	土壙－6	〃	椀	10.4				白褐色	0.5㎜以下	〃	
78	〃	〃	〃	〃	〃		3.8			〃	〃	〃	
79	〃	〃	土壙－7	白磁	〃					淡白褐色			
80	〃	〃	〃	備前焼	小壺	6.6			口縁部ヨコナデ。	灰	1.0㎜以下	良好	
81	〃	〃	〃	早島式土器	椀		6.8		内面ていねいなナデ。	乳白色	〃	〃	
82	〃	〃	〃	〃	小皿	7.0	5.3	1.3	口縁部ヨコナデ。	浅黄橙	〃	〃	
83	〃	〃	〃	〃	〃	7.4	6.1	1.3	〃	〃	〃	〃	
84	〃	〃	落ち込み	〃	椀	11.7	5.4	4.1	内面ていねいなナデ。	白褐色	1.5㎜以下	〃	
85	〃	〃	〃	〃	〃	12.2	6.3	4.2	〃	灰白褐色	0.5㎜以下	〃	
86	〃	〃	〃	〃	小皿	7.2	5.6	1.4		黒褐	〃	〃	
87	〃	〃	溝－4	〃	椀	12.0	5.3	3.8		白褐色	1.0㎜以下	〃	
88	〃	〃	〃	〃	〃	11.3	5.0	3.7		〃	〃	〃	
89	〃	〃	〃	〃	〃	12.0	5.4	4.2		〃	1.0㎜	〃	
90	〃	〃	〃	〃	〃	11.1	5.4	4.3		〃	1.5㎜以下	〃	
91	〃	〃	〃	〃	〃	12.6	6.6	5.0		〃	〃	〃	
92	〃	〃	〃	〃	小皿	7.2	5.6	1.5		淡黄	0.5㎜以下	〃	
93	〃	〃	〃	〃	〃	7.6	5.6	1.5		白褐色	1.0㎜以下	〃	
94	〃	〃	〃	〃	〃	7.8	5.3	1.5		淡白褐色	〃	〃	
95	〃	〃	〃	〃	〃	7.5	5.2	1.3		淡褐色	1.5㎜以下	〃	
96	〃	〃	〃	〃	〃	7.7	6.1	1.5		白褐色	1.0㎜以下	〃	

土器番号	遺跡名	調査区	出土地	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
						口径	底径	器高					
97	三手	向原Ⅰ	溝－4	早島式土器	小皿	7.6	6.0	1.5		灰褐色	1.0㎜前後雲母	良好	
98	〃	〃	〃	土師器	鍋	41.0			内外面ハケメ。				
99	〃	〃	溝－5	青磁	椀					淡青灰色			
100	〃	〃	〃	早島式土器	〃		6.2			浅黄橙	1.5㎜以下	良好	
101	〃	〃	〃	〃	小皿	7.1	6.1	1.4		〃	2.0㎜以下	〃	
102	〃	〃	礫群	〃	椀	12.7	5.2	4.1		白褐色	3.0㎜以下	〃	
103	〃	〃	中世下層	須恵器	杯身	13.7	内7.8外8.5	4.4		灰白色	1.0㎜以下雲母	〃	
104	〃	〃	中世包含層	須恵器	〃		内10.4外11.1			〃	精良	〃	
105	〃	〃	中世包含層	早島	椀	11.3	5.2	4.0		白褐色	1.0㎜以下	〃	
106	〃	〃	中世暗灰褐色シルト	〃	〃	13.7	内7.8外8.5	4.4		灰白色	1.0㎜以下雲母	〃	
107	〃	〃	中世包下層	〃	〃	10.6	5.5	4.3		〃	0.5～2.0㎜雲母	〃	
108	〃	〃	灰褐色シルトFe	〃	〃	12.1	5.5	4.6		〃	1.0㎜前後	〃	
109	〃	〃	中世包含層	早島式土器	小皿	7.0	6.2	1.4		白褐色	1.0㎜以下	〃	
110	〃	〃	〃	〃	〃	7.6	5.9	1.7		〃	〃	〃	
111	〃	〃	〃	〃	〃	7.6	5.5	1.7		〃	〃	〃	
112	〃	〃	〃	〃	〃	7.6	5.9	1.4		〃	〃	〃	
113	〃	〃	〃	〃	〃	7.6	5.8	1.1		〃	〃	〃	
114	〃	〃	〃	〃	〃	7.6	6.2	1.5		〃	〃	〃	
115	〃	〃	〃	白磁	椀	16.8				淡青白色			
116	〃	〃	〃	〃	〃					淡緑白色			
117	〃	〃	〃	〃	〃					灰褐色シルト層			
118	〃	〃	〃	〃	〃		5.6			白褐色	1.5㎜以下		
119	三手向原	Ⅱ	砂層	弥生	壺	17.6			内面　ヘラ削り、指ナデ、ヨコナデ 外面　縦のハケ目、後ち凹線を施す	淡橙色	0.5～2.0㎜の長石・石炭		
120		〃	〃	〃	〃	19.0			内面　ナデ 外面　ハケ目後ち、凹線、ヨコナデ	淡黄色橙色	〃		内面に粘土ひも貼り付け痕
121		〃	〃	〃	〃	20.3			内面　体部ヘラ削り、指ナデ、ナデ 外面　ハケ目後ちヘラミガキ、くびれ部に刺突文	橙色	0.3～2.0㎜長石・石炭		内面に部分的に布目
122		〃	〃	〃	〃				内面　体部ヘラ削り、指オサエ、ナデ、ヘラミガキ、ヨコナデ 外面　体部ヘラミガキ、ナデ	淡黄色	0.3～1.0㎜長石・石炭		
123		〃	〃	〃	〃				内面　体部ヘラ削り、指オサエ、ナデ、ヘラミガキ、ヨコナデ 外面　ヘラミガキ、13本の沈線、刺突文	明褐灰色	0.5～4.0㎜長石・石英		
124		〃	〃	〃	甕	20.8			内面　体部ヘラ削り 外面　ハケ目、口縁、内外ヨコナデ	鈍い黄橙色	0.5～1.5㎜長石・石英赤色土粒		
125		〃	〃	〃	器台				底面　下から、ヘラミガキ、ハケ目、ヨコナデ 外面　下方は、ハケ目、上方ヘラミガキ、透し穴の上下にらせん状の沈線	淡橙色	0.3～2.0㎜石英・長石		
126		〃		須恵器	杯蓋	12.3		4.7	外面　天上部ヘラ削り 他の内外ヨコナデ	灰色	0.5～2.0㎜砂粒少し含む（長石・石英）	良好	逆時計方向のロクロ
127		〃		〃	杯身	10.6		4.9	外面底部ヘラ削り 他の内外ヨコナデ	灰白色	0.5～4.0㎜砂粒少し含む	〃	〃
128		〃		〃	〃	10.4		4.3	〃	灰色	1.0㎜以下の砂粒少し含む	〃	
129		〃		〃	〃	11.0		5.0	〃	内にぶい橙外灰白色	0.5～2㎜の砂粒少し含む	焼があまい	
130		〃		〃	〃	12.2		4.9	〃	灰色	0.5～0.3㎜の砂粒少し含む	良好	

土器番号	遺跡名	調査区	出土地	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
131	三手	向原Ⅱ		須恵器	高杯	15.7			内外共ヨコナデ 外面 下部ヘラ削り	灰色	0.5~2.0㎜砂粒少し含む	良好	残高6.1cm
132		〃	T-2P-3	土師器	〃	13.6	10.2	12.5	内外面 ハケのちヨコナデ 脚内部 シボリ、ナデ	にぶい橙	0.5㎜以下の砂粒少し含む	〃	
133		〃	T-2	〃	〃	13.6	9.8	11.3	杯内外 ハケメのちナデ 脚外面 ハケのちヘラミガキ、ヨコナデ 内面 シボリ、ナデ、ハケメ	浅黄橙	〃	〃	
134		〃	T-2	〃	〃	13.9	11.0	12.7	杯内部 ヘラミガキ 外面 ハケのちナデ、ヨコナデ 脚内面 シボリ、ナデ、ハケメ	橙	〃	〃	杯脚外面に黒ハン
135		〃	T-2	〃	〃	13.1	10.2	11.8	杯内面 ヘラミガキ 外面 ハケメ、ヨコナデ 脚内面 シボリ、ナデ、ハケメ 外面 ヘラミガキ、ヨコナデ	橙	〃	〃	脚外面・面取り
136		〃	T-2	〃	〃	12.5	9.8	11.7	杯内面 ハケのちヘラミガキ 外面 ヨコナデ 脚内面 シボリ、ナデ、ハケメ 外面 ヘラミガキ、ヨコナデ	橙	〃	〃	〃
137		〃	T-2	〃	〃	13.4	10.2	12.5	杯内面 ヘラミガキ 外面 ナデ、ヨコナデ 脚内面 シボリ、ナデ 外面 ヘラミガキ、ヨコナデ	にぶい橙	〃	〃	〃
138		〃	T-2	〃	〃	13.1			杯内面 ヘラミガキ 外面 ハケのちナデ、上部ヘラミガキ 脚内面 シボリ、ナデ 外面 ヘラミガキ	〃	〃	〃	〃
139		〃	G-3P-2	須恵器	杯蓋	12.6		3.8	外面 天上部ヘラ削り 他はヨコナデ	紫灰色	1.0㎜以下の砂粒含む	〃	逆時計方向のロクロ
140		〃	G-3P-2	土師器	ワン	13.4		7.3	内面 ヘラミガキ 外面 下部はオサエ、ナデ、上部ヨコナデ	淡黄色	1.0㎜以下の砂粒を含む。	〃	
141		〃	G-5P-1	〃	〃	12.3		6.5	〃	淡黄橙色	1.5㎜以下の砂粒を含む	〃	
142		〃	T-2	〃	〃	11.1		5.9	内面 ていねいなヨコナデ 外面 下部はハケ状工具によるナデ 上部はハケ、ナデ、ヨコナデ	淡灰褐色	〃	〃	
143		〃	G-2P-1	土師器	ワン	12.4		5.5	内面 ナデ仕上げ 外面 オサエ、ナデ、ヨコナデ	橙色	2.0㎜以下の砂粒含む	〃	
144		〃	G-3P-6	〃	〃	12.0		5.5	内面 ナデ、ヨコナデ、仕上げ 外面 ナデ、オサエ、ヨコナデ	にぶい黄橙色	〃	〃	
145		〃	E9c4	青磁	椀								近世水田2層
146		〃	E9c	〃	〃	12.1				淡緑灰色			〃
147		〃	E9e2	〃	〃	11.4							近世水田下層
148		〃	E9d2d	土師器	高台付椀	13.8	6.0	5.0	内面 ていねいなナデ（ヘラミガキ？） 外面 ナデ、オサエ、ヨコナデ	白褐色	1.0㎜以下の砂粒う含む	良好	〃
149		〃	〃	〃	小皿	8.1	5.6	1.5	内外共にヨコナデ ヘラオコシ（板目）	〃	1.5㎜以下の砂を含む	〃	〃
150		〃	〃	〃	〃	7.8	7.0	1.2	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ、ヘラオコシ（板目）	〃	〃	〃	〃
151		〃	〃	〃	〃	7.8	6.5	1.3	〃	〃	〃	〃	〃
152		〃	E9b4c4	青白磁	合子	6.0	4.2	1.9	削り出し高台を有する	淡灰緑色			古代水田層
153		〃	F9C4 トレンチ	弥生	壺	16.0			内面 体部ヘラケズリ 外面 ハケメ 口縁 内外はヨコナデ	橙色	0.3~2.0㎜長石・石英		残存高5.5cm
154		〃	2Eトレンチ	〃	壺or壺		7.5		内面 ヘラケズリ 外面 上半はヘラミガキ 底部と下半はナデ仕上げ	にぶい橙色 ニブイ黄橙色	〃		残存高4.5cm
155		〃	F9C4 トレンチ	〃（?）	台付鉢		5.0		内面 工具によるナデ 外面 上半 指ナデ 下半 指オサエ	橙色	〃 長石・石英・雲母		残存高5.2cm
156		〃	E9e2b11層	土師器	高台付ワン	13.9	7.4	6.9	内外面共にヘラミガキのちヨコナデによる仕上げ 貼り付け高台、ナデ	外面は明赤褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	良好	内黒
157		〃	E9e2a	〃	〃	13.8	5.6	4.9	内面 ていねいなナデ 外面 オサエ、ナデ、ヨコナデ	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	〃	近世水田下層
158		〃	E9e2a	〃	〃	13.7	6.2	5.3	内面 ていねいなナデ仕上げ 外面 ヨコナデ、ハケ状工具による調整	黄灰色 灰白色	0.5~3.0㎜の砂粒を含む	〃	

土器番号	遺跡名	調査区	出土地	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
						口径	底径	器高					
159	三手	向原Ⅱ	E9e2a	〃	〃	12.4	5.2	4.1	内外面共にヨコナデ仕上げ	灰白色	0.5～4.0㎜砂粒を少し含む	〃	外面の口縁部に黒ハンあり
160		〃	E9e2a	〃	〃	12.0	5.2	4.0	内面　ていねいなナデ 外面　オサエ、ナデ、ヨコナデ	白褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	〃	
161		〃	〃	〃	〃	11.3	4.4	4.3	〃	〃	〃	〃	
162		〃	E9e3e4	白磁	椀					淡白灰褐色			
163		〃	E9d2c	青磁	椀					淡橙褐色			
164		〃		白磁	〃								
165		〃	E9e3e	青磁	〃								
166		〃	E9e3e4	白磁	〃					淡乳褐色			
167		〃	E9d2c	〃	〃								内面一本沈線
168		〃	南側溝	〃	〃					淡乳褐色			
169		〃		〃	〃								
170		〃	E9e2c	青磁	〃					淡青灰褐色			
171		〃	E9d1c	〃	〃					淡橙灰褐色			
172		〃	E9d3b 6層掘下げ	白磁	高台付椀								削り出し高台(?)
173		〃	E9e2b	青	椀								
174		〃		染付									
175		〃	E9d2b	土師器	小皿	6.2	5.2	1.4	内外面溝とヨコナデ、ヘラオコシ	浅黄橙色	0.5㎜以下の砂粒を含む	良好	
176		〃	E9d2a	〃	〃	7.0	5.4	1.2	〃	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む	〃	
177		〃	E9d2b	〃	小型高台付椀	10.0	3.4	3.8	内面　ていねいなナデ 外面　ナデ、ヨコナデ				貼り付け高台
178		〃											瓦（平）
179		向原Ⅲ		土師器	椀	10.4	高台4.0	3.5	内面ていねいなナデ、口縁部ヨコナデ	淡黄色	1.5㎜以下の砂粒少量含む		早島式土器
180		〃		土師器	椀	10.8	高台4.0	3.7	内面ていねいなナデ、口縁部ヨコナデ	灰黄色	0.5㎜以下の砂粒少量含む		早島式土器
181		〃		白磁	小皿	8.8			口縁部丸くおさめる	釉　透明 地　白色	緻密		15～16C
182		〃		白磁	Ⅲ				口ハゲ、外面沈線1条	釉　透明 地　白色	緻密		13～14C
183		〃		白磁	碗		高台5.9		見込み櫛描き文	釉　白色 地　白色	緻密		12～13C
184		〃		青磁	碗				鏑連弁文	釉　緑透明 地　灰白色	緻密		13～14C
185		〃		白磁	碗	14.7			口縁端部丸くおさめる	釉薄青色透明 地　灰白色	緻密		14～15C
186		〃		白磁	碗				口縁部反り縁	釉　透明 地　白色	緻密		12～13C
187		〃		白磁	碗				内面陽刻文様	釉　透明 地　白色	緻密		13～14C
188		〃		青磁	碗		高台3.5		高台畳付き無釉	釉白っぽい緑 地　灰白色	緻密		13～14C
189		〃		瓦	丸瓦				凹面布目				
190		砂田		青磁	碗	15.8			鏑連弁文	釉　緑透明 地　灰白色	緻密		13～14C
191		〃		青磁	碗？	12.4			玉縁	釉白っぽい青 地　白色	緻密		13～14C
192		〃		青磁	Ⅲ		3.4		見込み櫛描き文	釉　緑透明 地灰白色	緻密		12～13C
193		〃		青磁	碗					釉　薄青色 地　白色	緻密		14～15C
194		〃		白磁	碗					釉　灰色透明 地　白色	緻密		12～13C

2．津寺（つでら）遺跡

第１章　調査の経緯と経過

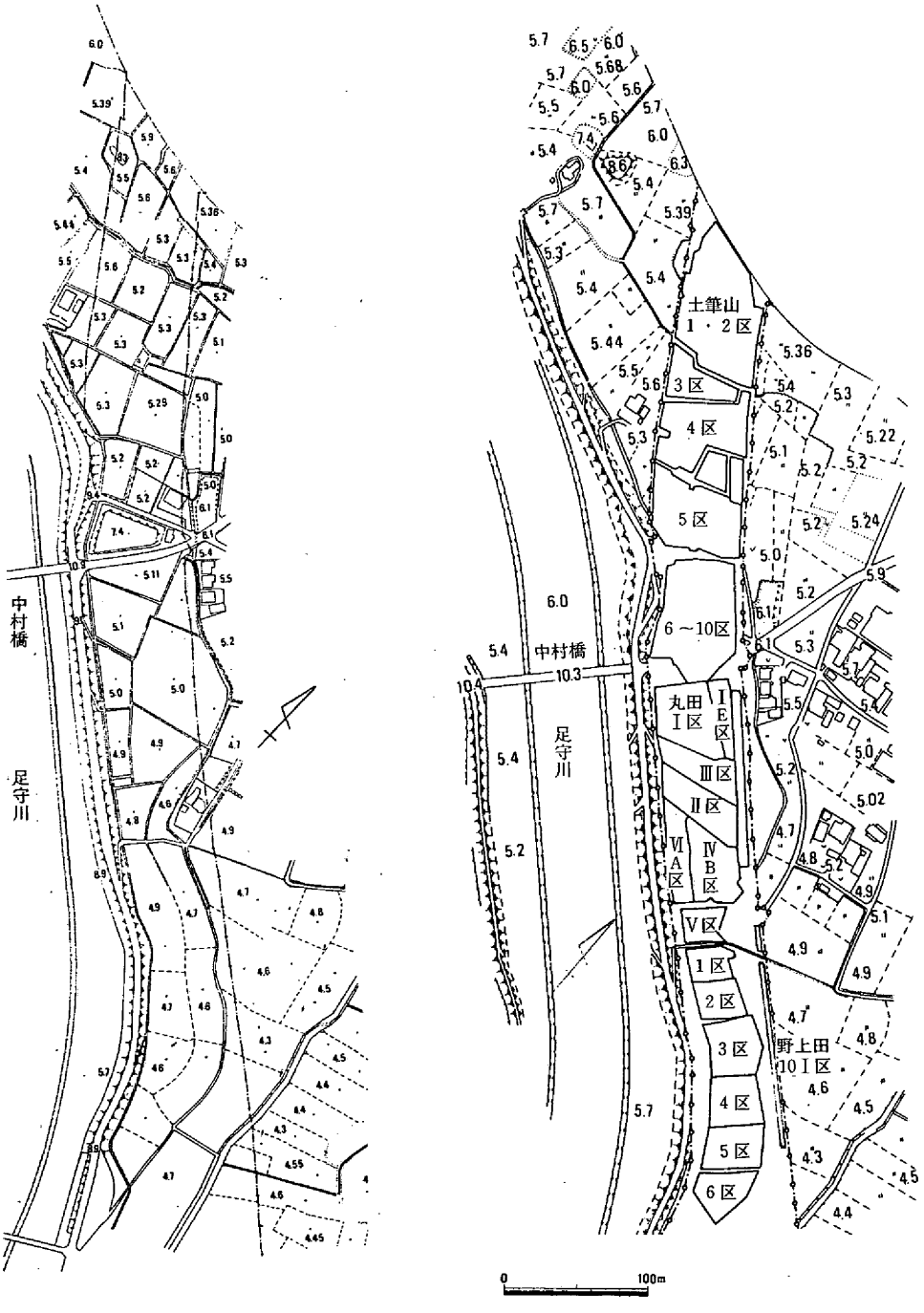
山陽自動車道建設に伴う津寺遺跡の調査は昭和62（1987）年の１月から始まった。三手遺跡の第一次調査に引き続いて用地買収前に地権者から埋蔵文化財発掘の承諾書を得て実施したところである。この調査は足守川に沿って、上流から下流に向かって順次２ｍ×２ｍの正方形の坪掘り調査を先行させ、本書に載せている土筆山１区から野上田６区の間で承諾書が得られた22箇所を掘り上げたが、８箇所は承諾を得られなかったので断念した。この結果については同年４月、岡山県教育委員会刊『三手・津寺遺跡一次調査概要』として公にした。土筆山地内の結果によれば、全体に中世・平安・古墳時代の各文化層が存在したほか、丸田地区では古墳時代から中世にかけての集落跡が、そして野上田地内では各種の包含層と古墳時代の畦畔を伴う水田跡および弥生時代ないし古墳時代の微高地に近接した旧河道などが予想された。

全面調査は昭和63年３月から始まる。４月から本格的に調査に入れるように、前もって第一次調査の結果を受け、表土から遺物包含層直上層までの土壌を、各調査区ごとに1,000㎡以上重機を使用して掘削・移動させつつ、調査員立ち会いの下で除去した。

年度が変わって昭和63年４月から大幅に人事異動があり班編成を整えた。原則として調査員３名をもって１班となし、ここには４班が配置された。これまでの山陽自動車道関係の発掘調査と比べて大きく変わったことは、各班ごとに電動ベルト・コンベヤーを配し、湧水対策のために24時間体制で電気排水できるように100V・200Vの電気配線が完備されたことである。しかし初めての経験で度々漏電やら電圧の低下によって発掘調査が停滞することもあったし、また汚泥排水で下流の藺草栽培に迷惑をかけるような出来事もあった。悪戦苦闘のすえ、どうにか調査が終了したのは平成元年３月末であった。

平成元年度には土筆山調査区の一部で民家の立ち退きが遅れていた部分と大規模であった農道部分および丸田調査区の調査遅延部分について引き続き調査を実施し、ともかく平成２年２月にやっと完掘した。終了してみれば土筆山１区から野上田６区までで合計５班が配置されたこととなる。

調査の結果は第２章以下で詳細に述べる。調査期間中に特に注目された遺構・遺物について触れるならば、土筆山調査区では和鏡・白磁椀・青白磁合子・刀子・土師器等を副葬した中世墓と用途不明の小型土師器、丸田調査区では巻頭カラー図版に載せた鍛冶道具を副葬した中世墓と陶馬、野上田調査区では古代河道の護岸施設と墨書土器などがあげられる。　（浅倉）



津寺遺跡発掘前地形図・調査区分図（1/5000）

第２章　発掘調査の概要

第１節　土筆山（ほうしやま）調査区

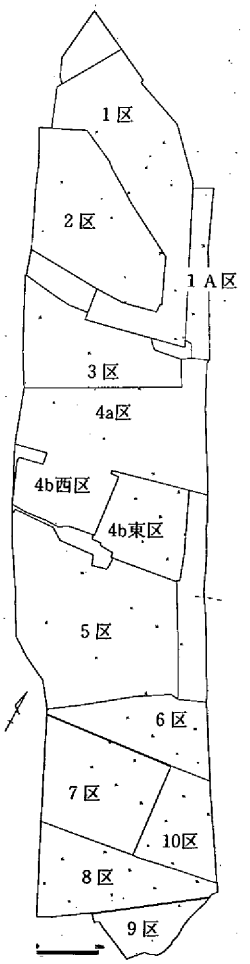
１．土筆山調査区の概要

新庄下から高松へ通じる道路の北側は津寺字土筆山（ほうしやま）と呼ばれている。調査前は水田がひろがり、明治時代の洪水砂を盛り上げた高まりも一部に見られた。一次調査の結果で中世の遺構のひろがりが確認されていたころから全面調査を行った。広い面積になることから、いくつかに区分し、排土をうって返しながらの調査となった。東側の用地境には、工事用道路が必要となったことから、やむをえず一部については調査の最終段階で対応した。調査区分については第１図に示している。調査区全域には国土座標に基づく基準杭を設置した。

全面調査は、昭和63年４月から２班が対応し、同年12月からは、さらに１班を追加して、１～５区をほぼ完了した。ひきつづいて、平成１年には１班で４区の一部と６～10区の調査を行い、平成２年２月にすべて完了した。

土筆山調査区の遺構の概要

土筆山１・２区は土筆山地区の北端に位置する。中世と近世の遺構が検出された。中世の遺構は柱穴群・土壙・墓である。いずれも微高地上に集中し、柱穴は150余を数えるが建物としてはまとめられなかった。墓は６基検出し、それぞれに人骨があり、副葬品を伴っていた。最も保存の良いものでは、集石を伴い、集石下20㎝から人骨１体、頭部に白磁椀１点、和鏡１点、早島式土器の椀２点、小皿５点、胸部に刀子１点、頭部直下から白磁



第１図　調査区分図

合子１点が出土した。近世遺構は水田と溝である。水田は調査区西側にひろがり、畦畔１条を検出した。溝は南北方向に畦畔と平行し、導水口を伴う。

３区では南東部分に微高地が存在するが、遺構は検出されなかった。３区の残り部分は近世水田である。近世水田は畦畔によって比較的大きく区画されている。畦畔は微高地の肩口に平行して、ほぼ南北に伸びている。さらに、幅35cm、深さ10cm程度の溝が畦畔に平行する形で多数検出された。

４区の南西部分は、近世の開田が行われ、水田面がひろがっている。残りの微高地部分では、中世の建物・土壙・土壙墓・溝等を検出した。土壙墓は３基あり、調査区北端で検出した長径80cmを測る楕円形を呈する土壙墓からは、屈葬した人骨１体、土師器椀が出土している。溝は調査区東端から始まり、中央部で南へ屈曲する。さらに、ほぼ東西方向の大溝も検出され、５区から延びる溝も確認される。微高地の下層には、古代～中世の水田がひろがっている。最下層の水田は東西および南北にのびる畦畔で区画され、特に、南北方向の畦畔には幅約1.5mと広いものがあり、農道と考えられる。下層水田の時期は平安時代と推定される。

５区では、東半に微高地が存在する。微高地上では中世の生活面を３面確認している。第１面では、柱穴・土壙・溝・土器溜り等を多数検出した。そのうち、土壙や柱穴の内部に炉壁の破片や土器を埋めたものを20例程確認している。第２面では、大溝によってコの字形に区画された地区が存在する。大溝は最大幅2.3m、最大深1.1mを測り、溝の断面はほぼＶ字形を呈する。大溝による区画の内外から柱穴が多数検出され、掘立柱建物も21棟まとめられている。その他、直径約５m、深さ55～70cmの大型土壙が数基検出された。大型土壙の１つからは、灰・炭などとともに早島式土器などが多量に出土している。なお、５区の西半部分では、中・近世の水田が検出された。

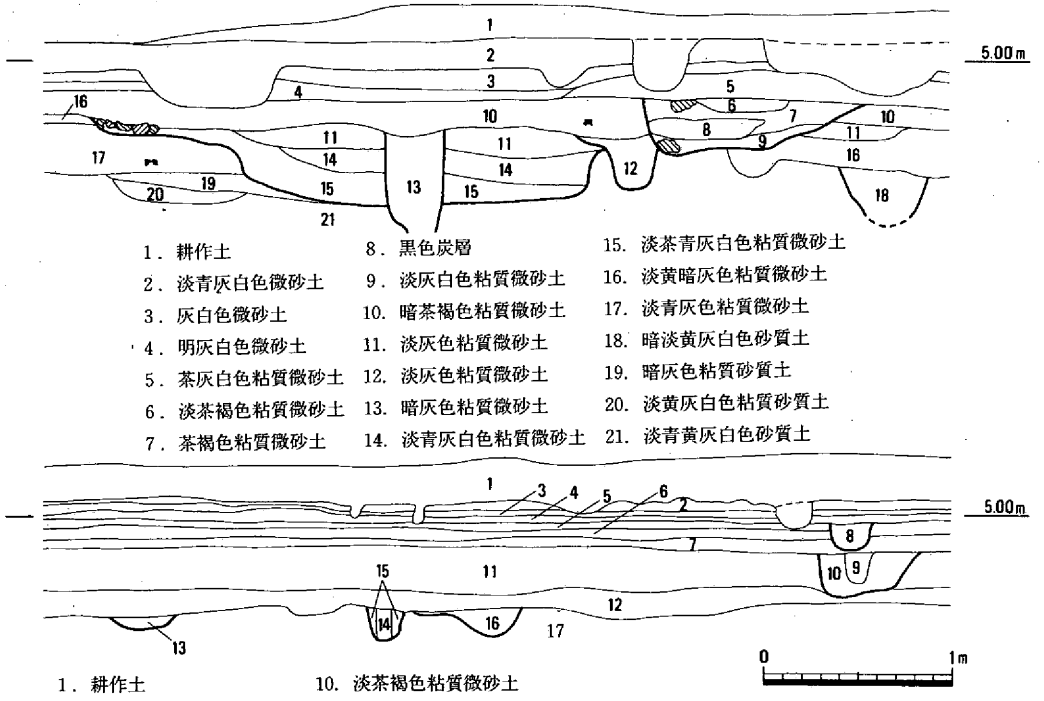
６区は、南半が中・近世の水田、東半は微高地である。微高地上では遺構が検出されるが、あまり密集していない。検出された遺構としては、建物・柵・井戸・炉・土壙・土壙墓等があり、いずれも室町時代、あるいはそれ以降である。井戸は３基確認され、径は１m前後、深さ２m前後を測る。土壙墓の残存状態は良くない。埋葬された人骨は頭を東ないし北東に向けている。さらに、下層では水田を検出した。

７～10区では、中世～近世にかけての水田を検出した。いずれの水田も微高地を開田して作られている。９区の南東部で少し変化しているが、東西にのびた舌状の微高地によって区切られている。下層にも水田が認められる。８区の東部の微高地では、建物・土壙墓等が確認されている。土壙墓の残存状態は極めて悪いが、頭を北西に向けている。８区では、東西方向にのびた畦状の高まりを検出しているが、これは水田の区画と考えられる。（正岡・松本・二宮）

層序（第２図）

土筆山調査区は、北西から南東に延びる調査区であり、したがって、各調査区によって基本層序は異なる。ここでは、最も遺構密度の高い、本遺跡の中心部である５区の土層断面を示し、遺跡の層序概略を述べることにする。

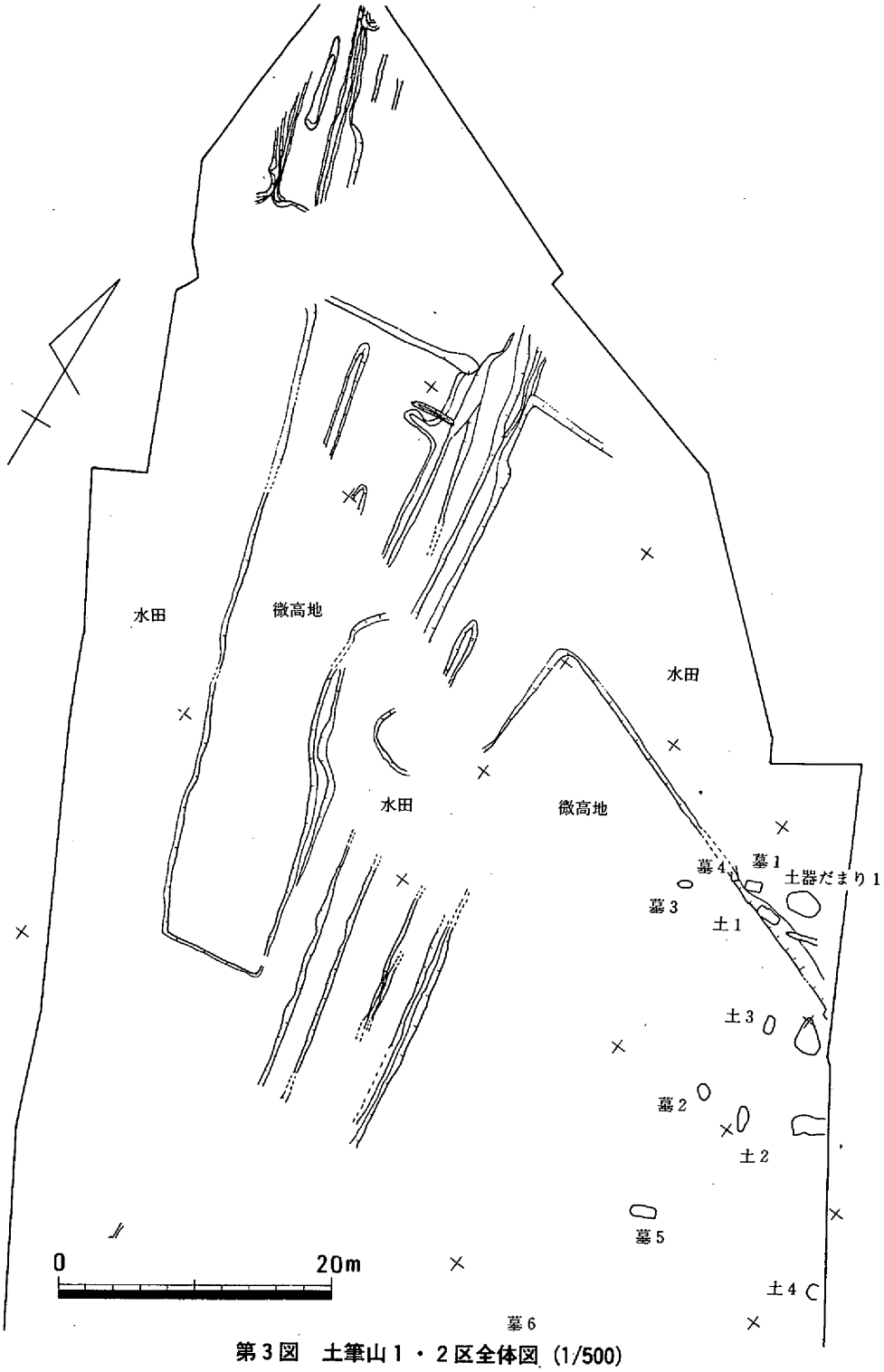
土層断面図を上、下２枚提示している。上図の第１層から５層までは近世のものである。上面が標高5.3ｍ前後である。10層は暗茶褐色粘質微砂土であり、この面が中世の遺構面である。ここでは、標高4.6ｍの高さであるが、平均して4.7～4.8ｍ前後を測る。本来の遺構面はまだ高かったが、近世にかなり削平が行われたようである。さらに、その下層の淡黄暗灰色粘質微砂土で遺構が認められる。この土層においては土壙・柱穴の切り合い関係が著しく、かなり長期にわたって生活が営まれていたことを示すものといえよう。下図の第１層から７層までは近世のものである。中世の遺構は11層の茶褐色粘質微砂土、17層の淡青黄灰白色砂質土で検出される。11層は上図の10層に対応するものである。



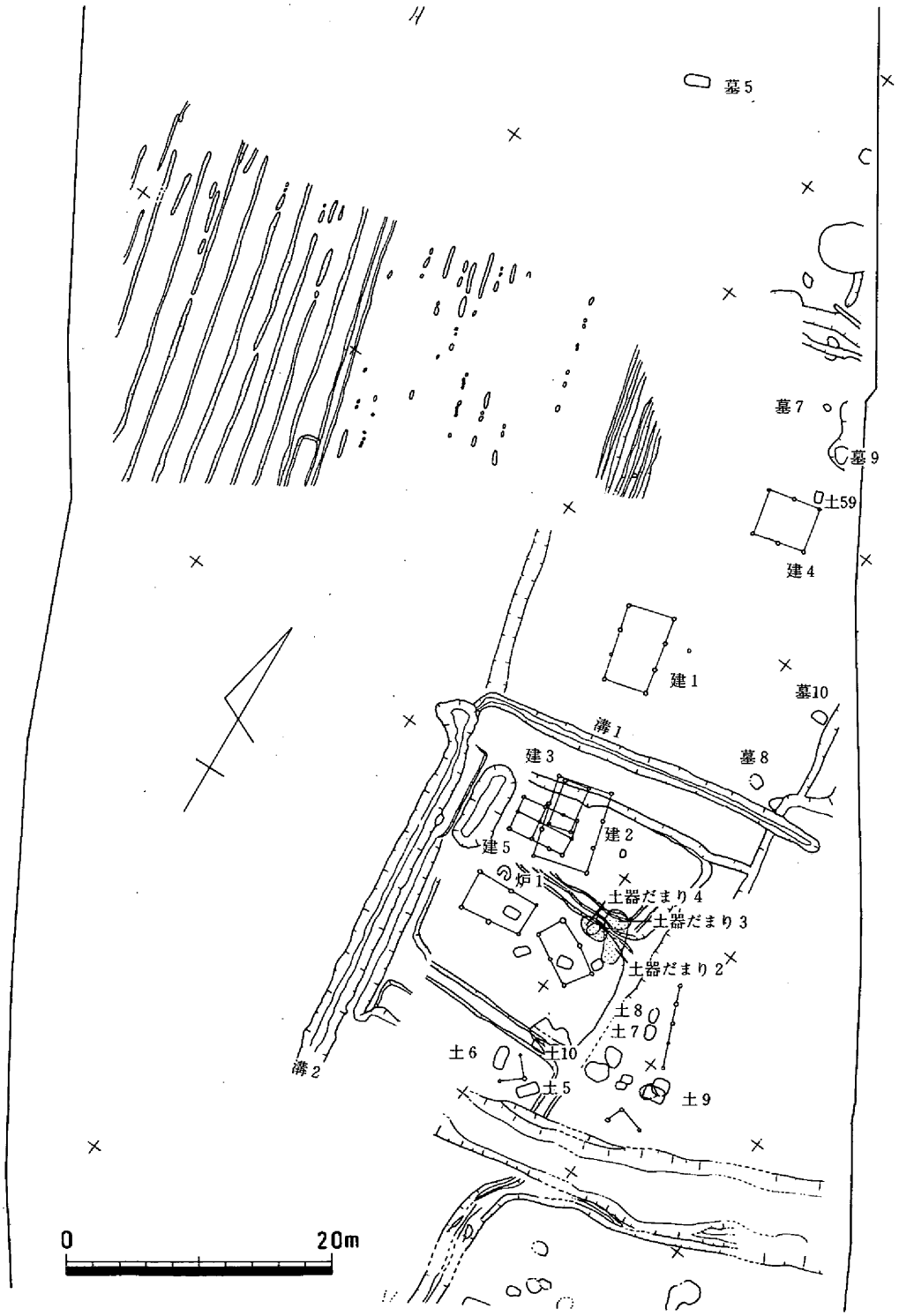
1．耕作土　2．淡青灰白色微砂土　3．灰白色微砂土　4．明灰白色微砂土　5．茶灰白色粘質微砂土　6．淡茶褐色粘質微砂土　7．茶褐色粘質微砂土　8．黒色炭層　9．淡灰白色粘質微砂土　10．暗茶褐色粘質微砂土　11．淡灰色粘質微砂土　12．淡灰色粘質微砂土　13．暗灰色粘質微砂土　14．淡青灰白色粘質微砂土　15．淡茶青灰白色粘質微砂土　16．淡黄暗灰色粘質微砂土　17．淡青灰色粘質微砂土　18．暗淡黄灰白色砂質土　19．暗灰色粘質砂質土　20．淡黄灰白色粘質砂質土　21．淡青黄灰白色砂質土

1．耕作土　2．明橙灰白色微砂土　3．淡灰白色微砂土　4．淡茶灰白色弱粘質微砂土　5．灰白色微砂土　6．淡茶灰白色微砂質土　7．茶灰白色粘質微砂土　8．淡橙灰白色微砂質土　9．茶褐灰色土　10．淡茶褐色粘質微砂土　11．茶褐色粘質微砂質土　12．淡茶灰褐色粘質微砂質土　13．暗褐色粘質微砂土　14．淡褐色土　15．淡黄褐茶色粘質微砂土　16．暗褐色粘質微砂土　17．淡青黄灰白色砂質土

第２図　５区土層断面図（1/40）

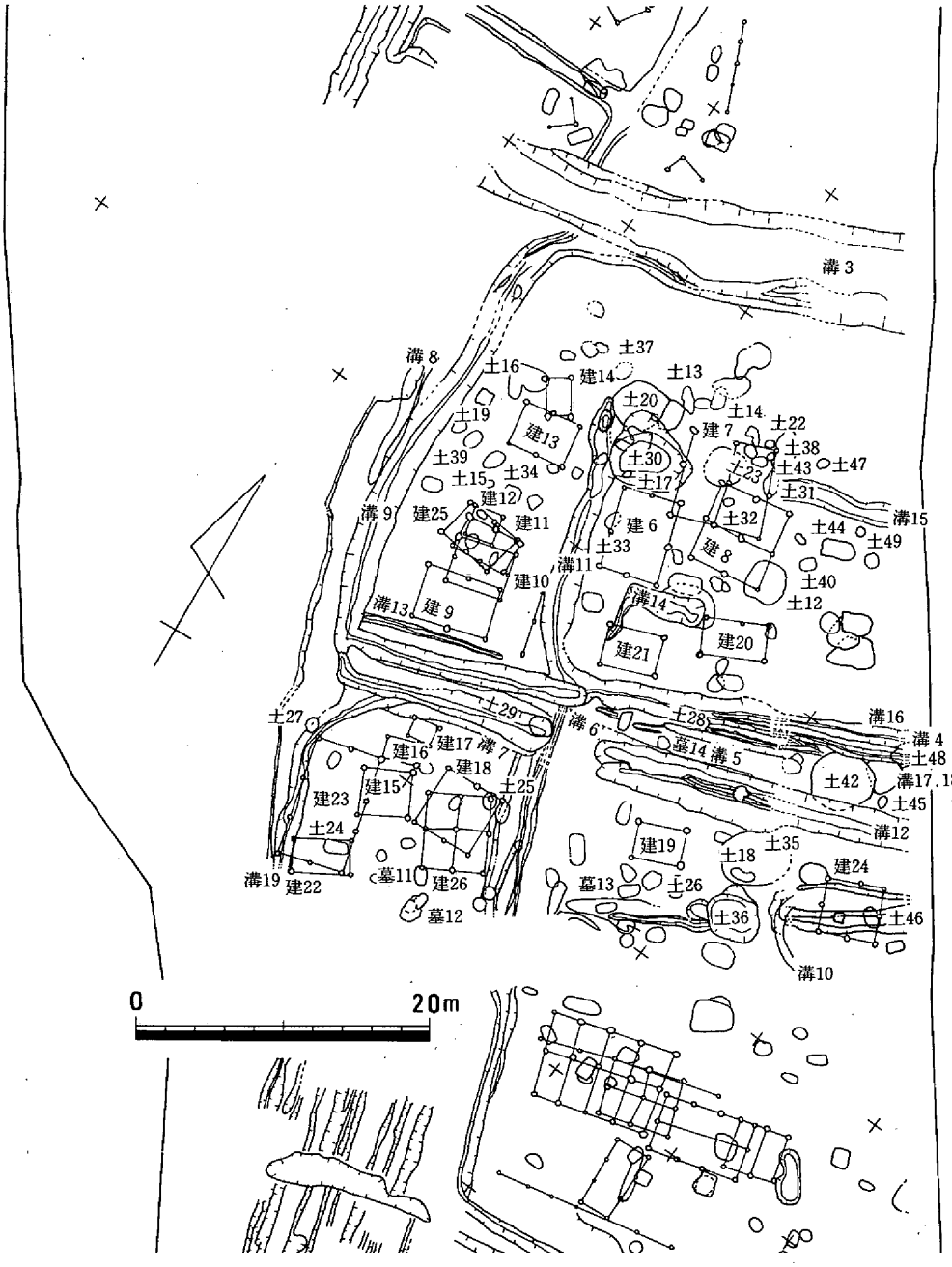


第3図　土筆山1・2区全体図 (1/500)

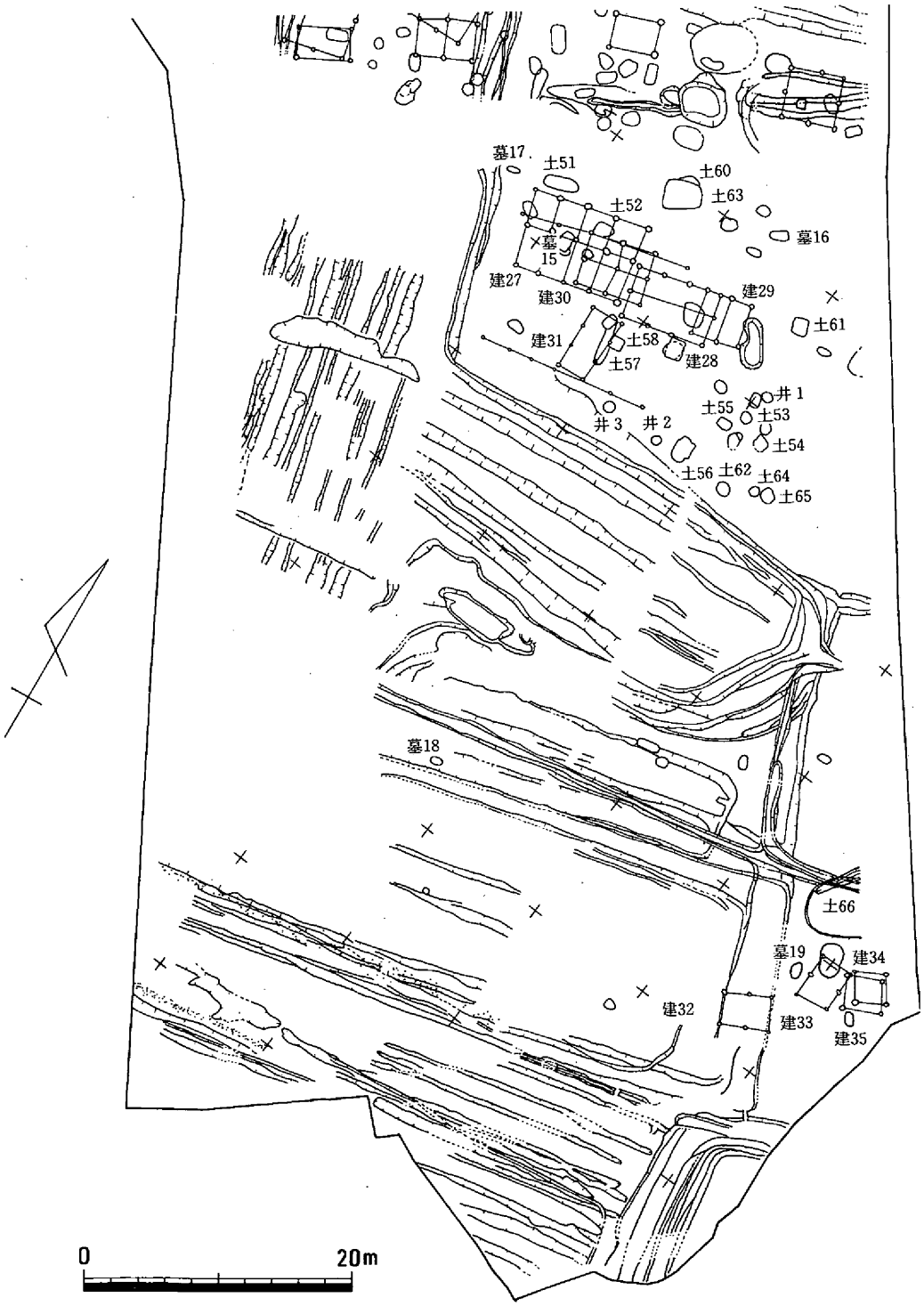


第４図　土筆山３・４区全体図（1/500）

時期は、上層では13世紀中葉～14世紀中葉の遺構が認められたが、下層は出土遺物がないため不明であるが、恐らく13世紀代のものと思われる。（松本）



第5図　土筆山5・6区全体図（1/500）



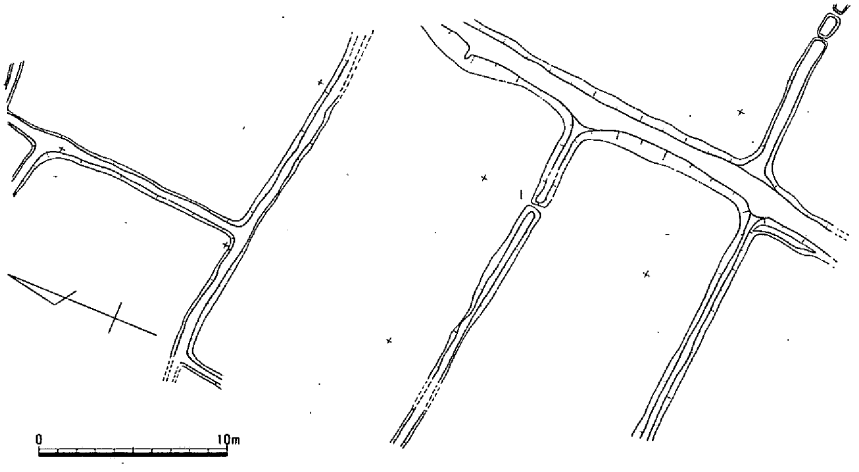
第６図　土筆山６～10区全体図（1/500）

2．古代以前の遺構・遺物

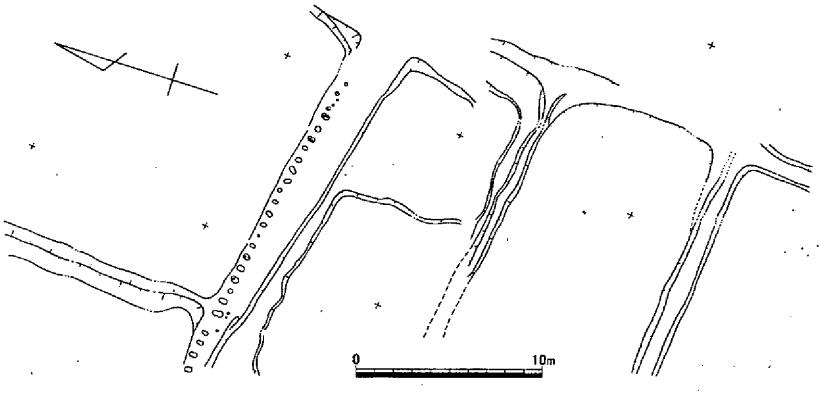
土筆山調査区においては、古代以前の住居跡や土壙は検出されなかった。北半部分は中世になって微高地が形成されたことがわかった。南半分についても下層において平安時代頃の水田を検出したことから、当時は少し低位部であったことがわかる。水田層をさらに掘り下げると砂礫層があり、この層位から少量の弥生土器が出土した。弥生時代には、微高地に近いところで、河原状を呈したところであったと推測される。（正岡）

(1) 古代の水田（第７～10図、図版62～65）

4a・4b東・６～10区において、水田が検出された。路線中央より西側は、洪水・攪乱等によって、近世以前の遺構の存在は認められていない。また10区以南では微高地上を水田化している。



第７図　４区上層水田（1/400）



第８図　４区下層水田（1/400）

4区では中世微高地を掘り下げたところで、水田遺構を検出した。水田畦畔は東西、南北方向を示し、東側には南北方向の大畦が検出された。大きさは、幅170～250cm、高さ20～30cmを測る。さらに、大畦から分枝する小畦も確認できた。これらの畦の大きさは、幅70～100cm、高さ5～10cmくらいである。大畦と小畦の接合点では、小畦の方が大畦より10cm前後低くなり、大畦から小畦へ徐々に下がっている。水田の畦畔は、基盤の土層の上に水田耕土を積み上げて作られている。しかし、大畦の上には水田耕土は上積みされていない。大畦は毎年作られるのではなく、定位置にあり、補修を受けながら機能していたものであろう。

また、一見畦は基盤目状に区画されているようであるが、交差部分でかなりズレが見立ち、水田区画もほぼ長方形を呈するのであろう。調査区域内において、小畦で水口が認められたが、水田の区画からして少ないように思われる。

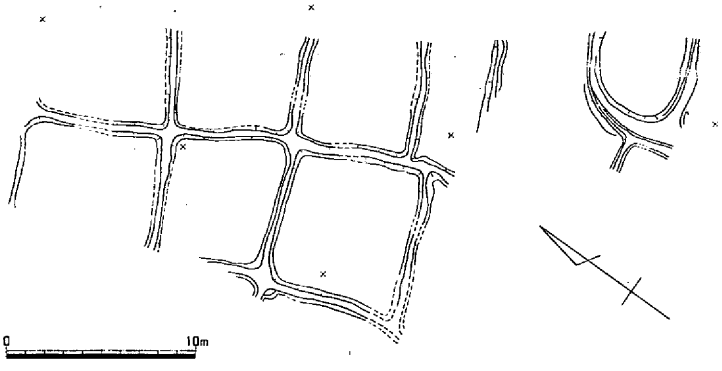
水田層からの遺物の出土はほとんどないため、詳細な時期比定は困難である。しかし、水田層を覆っている土層の上面から、中世の遺構が切り込まれていることから、奈良末～平安時代に相当すると考えられる。

4区においては、先の水田層の下にもう一面の水田を検出した。下層の水田は上層の水田とほぼ同じ位置・方向である。しかし、畦畔への水田耕土の積み上げが明瞭ではないが、その痕跡と思われる溝状の掘り込みが確認できた部分もあった。北寄りの東西方向の畦には柵状に杭を打ち込んだ痕跡が検出された。これは畦の補強のためのもので、杭の南側に木材を並べて沈下を防ぐ施設と考えられる。下層水田では、水口は検出されなかった。

6・7・10区においても、水田が検出された。6区東部は中世の微高地へと上がっていき、またその南西部からは、幅1－1.5mの大畦が西方向へのび、南方向へは小畦がのびている。南東部にも北東から南西へ続く大畦的な畦も見られる。水田の区画は歪な長方形を呈する。大畦より北側では、畦は検出されなかった。この面での水口は、大畦と小畦の接する所で1か所確認されただけである。比較的低い畦であるから、水は畦越しに流していたのであろう。時期は4区の上層水田と同じと思われる。

10区では先述の水田の下層で、洪水によって堆積した小礫混じりの砂層によって埋没した水田が検出された。畦畔の方向はほぼ東西・南北である。水田は水田耕土を盛り上げた畦によって、基盤目状に区画されている。交差部分ではわずかにズレている。上流部の水田に比べて、この地区の水田は小さい。方形に近い形状を呈し、南北が狭く、東西にやや長いものである。大畦と判断される畦は検出していないが、南東部で楕円形を呈する「島状高まり」遺構を確認した。畦の大きさは、幅60～90cm、高さ3～10cm前後のものがほとんどである。水田層の厚さは10cm程度を測る。田面は、「島状高まり」遺構付近が高く、北西へ行くにしたがって低くなっている。北東側の土層断面での観察によると、畦は数回の補修をうけていることが分った。

第9図　6・7・10区上層水田（1/500）



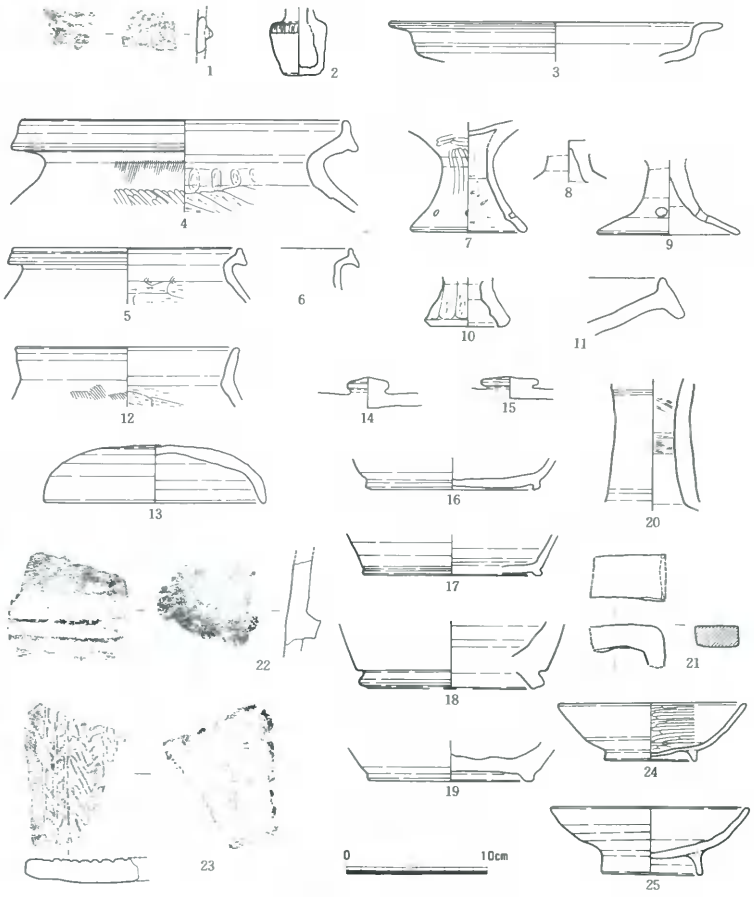
第10図　10区下層水田（1/400）

この畦では水口を確認していないが、部分的に低くなった畦を畦越しさせて配水する方法をとっていたものと推測される。水田層からの遺物の出土は少ないが、出土遺物から奈良時代～平安時代に比定されるのではなかろうか。（二宮）

(2) **包含層の出土遺物**（第11図）

中世の遺構や包含層中から少量ではあるが、古代以前の遺物が検出された。弥生土器は主に最下層の砂礫層から出土したものである。縄文時代晩期の甕1の破片が1点ある。キザミメを施した突帯が見られる。**2**は弥生土器のミニチュアの小壺で、肩部に施文がある。**3**は弥生時代後期の高杯、**4**・**5**は同後期の甕、**6**は同中期の甕、**7**は同中期の高杯、**8**・**9**は同後期の

高杯、10は同後期の台付鉢、11は同後期の壺口縁部、12は古墳時代の土師器甕、13は古墳時代の須恵器杯蓋、14・15は杯蓋、16・17は高台付杯、18・19は高台付壺、21は平瓶の把手である。14～21は奈良時代の須恵器である。22は円筒埴輪、23は盾形埴輪、24は土師器の内黒の高台付椀、25は土師器の高台付椀である。24・25は平安時代に比定される。　（正岡）



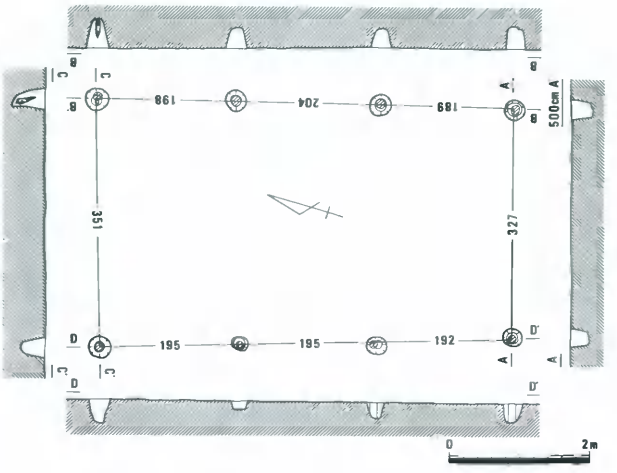
第11図　包含層出土遺物

3．中世・近世の遺構・遺物

(1) 建物

建物－1（第12図・図版23－2）

東西方向の溝－1の北側に位置し、溝に直交する形で検出された掘立柱建物である。3間×1間のほぼ主軸わずか西に向いた南北棟建物である。梁間は南側で327cm、北側で351cm、桁行東側は591cm、西側は582cmを測り、柱穴を結んだ平面形は長方形とならずやや北に広がっている。また桁行間は東はややまばらで、西でほぼ等しい間隔となっている。柱穴の直径は20～30cm、深さも10～50cmを測る。北東隅の柱穴では柱痕が残存していた。出土遺物も皆無に等し

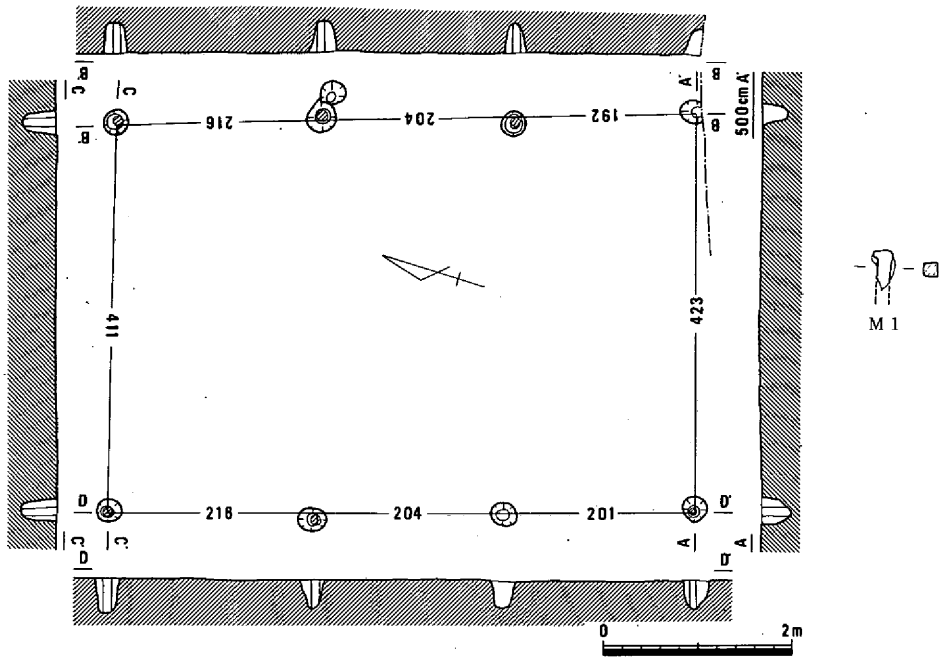


第12図　建物－1（1/80）

く、この建物の時代を確定することは困難であるが、埋土状態、層位的な関係から建物－4と同時期の可能性が高い。

建物－2（第13図）

溝－1を挟んで南側で、建物－1に対応して位置している。3間×1間で主軸がわずか西に向く南北棟の掘立柱建物である。梁間は南側で423cm、北側で411cmと少し狭い。桁行は東で612cm、西で621cmで西が長い。柱穴を結んだ平面形態はやや歪んではいるが長方形となっている。桁行は南側の左右のみの間隔が数センチずれているのみである。柱穴は径25～30cm、深さ

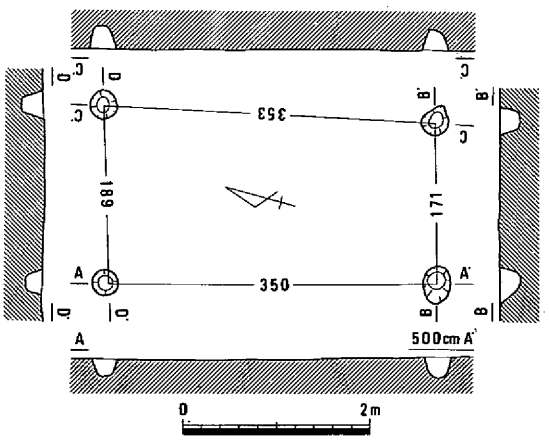


第13図　建物－２（1/80）・出土遺物

30～40cmを測る。また柱痕跡も認められ、10cm前後の柱穴が想定される。図示した鉄釘**M1**が柱穴内より出土している。建物－１と同一棟方向であり同時存在の可能性がある。

建物－３（第14図）

建物－２の北西部に主軸を同じくして重複した１間×１間の掘立柱建物である。柱穴間の梁間は北側、桁行は東側がわずかに長くなっている。柱穴径は30cmのほぼ円形と30×40cmの楕円形のものから出来ている。深さは20cm前後を測った。いずれの柱穴からも柱痕跡は認められなかった。建物－２と同時代可能性がある。

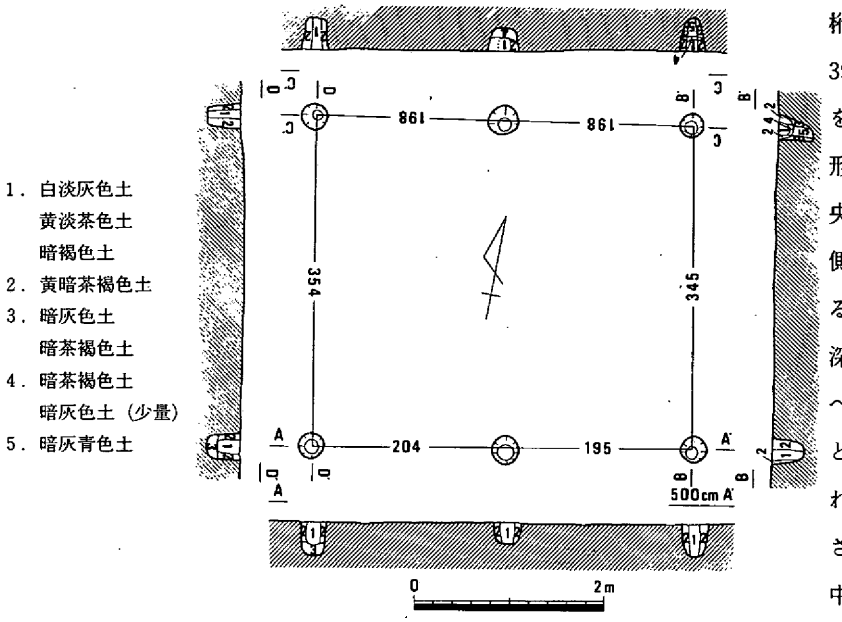


第14図　建物－３（1/80）

建物－４

（第15図・図版23－１）

調査区の北東に位置する。２間×１間で東西棟の掘立柱建物である。梁間は東で345cm、西は354cm、

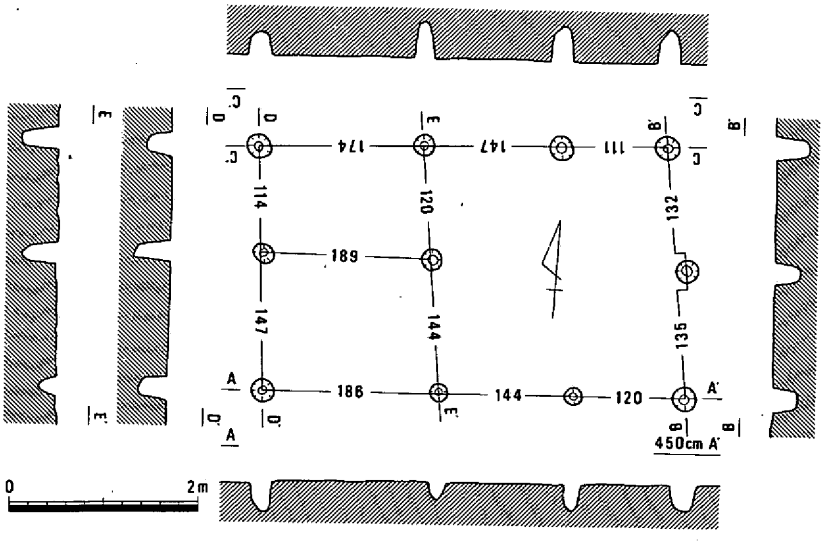


第15図　建物－4（1/80）

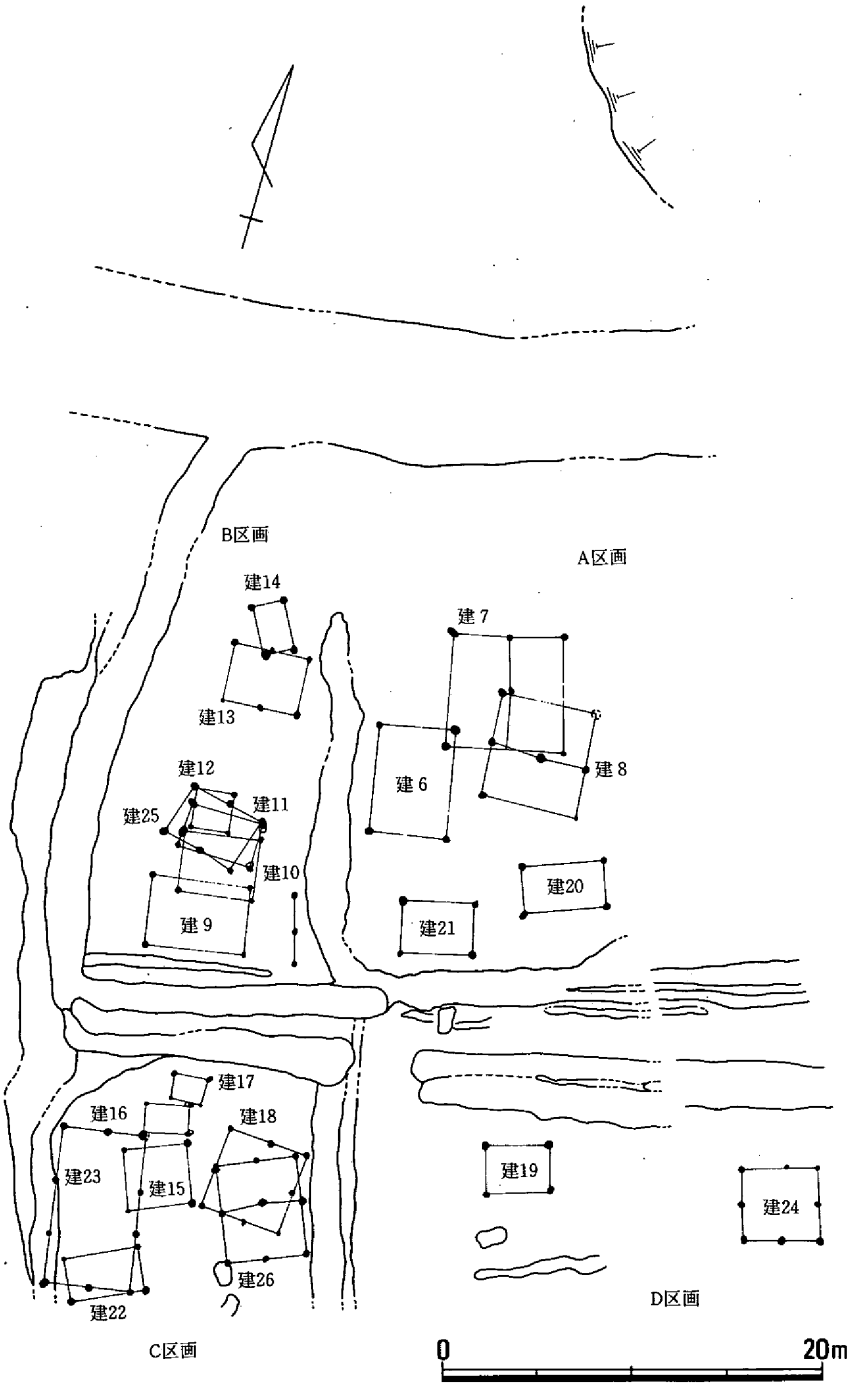
桁行南側は399cm、北側は396cmを測り、柱穴の中心を線で結んだ平面形は長方形とならず、北側桁行の中央柱穴は中心であるが、南側桁行はやや東にずれている。柱穴の直径は25～30cm、深さは25～40cmを測る。すべての柱穴の断面で柱痕跡とおもわれるものが確認された。建物としては、検出された面の他の遺構等から中世（平安時代）と考えられる。

建物－5（第16図・図版24－1）

溝－1・2の内側で、建物－2・3と重複している2間×3間の掘立柱建物で、西側に張り出し的な庇をもっている。柱穴はほぼ円形で20～30cm、深さは20～40cmを測る。建物の構造をみると柱穴を結んだ平面形態はやや歪んだ長方形となっている。また庇の柱間が長いことと、



第16図　建物－5（1/80）



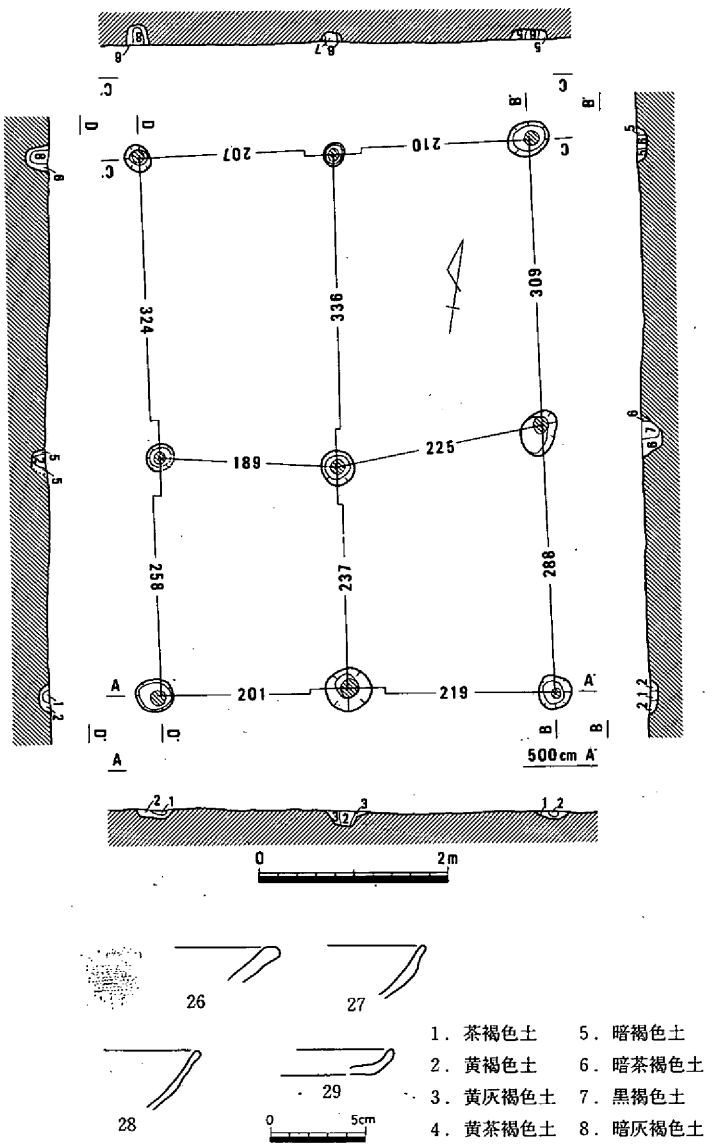
第17図　５区建物配置図（1/400）

中央の柱穴は中点からずれていることも気が付く。検出された状態から建物－２・３と同時代と思われる。（二宮）

５区の建物

５区は、土筆山調査区で最も遺構密度の高い調査区であり、遺跡のほぼ中心部であったと考えられる地区である。これらの遺構は、14世紀代を中心とする遺物が出土すること、土層的にも、中世遺構面であることからみて、確認できた掘立柱建物の時期は全て中世と考えられる。

大溝で４つに区画（A～D区画）された中に多数の柱穴が検出されたが、掘立柱建物としてまとめることは極めて困難であり、かろうじて建物21棟、柵列１をまとめることができたが、実際は多数の建物が建っていたと考えられる。



第18図　建物－６（1/80）・出土遺物

建物－６

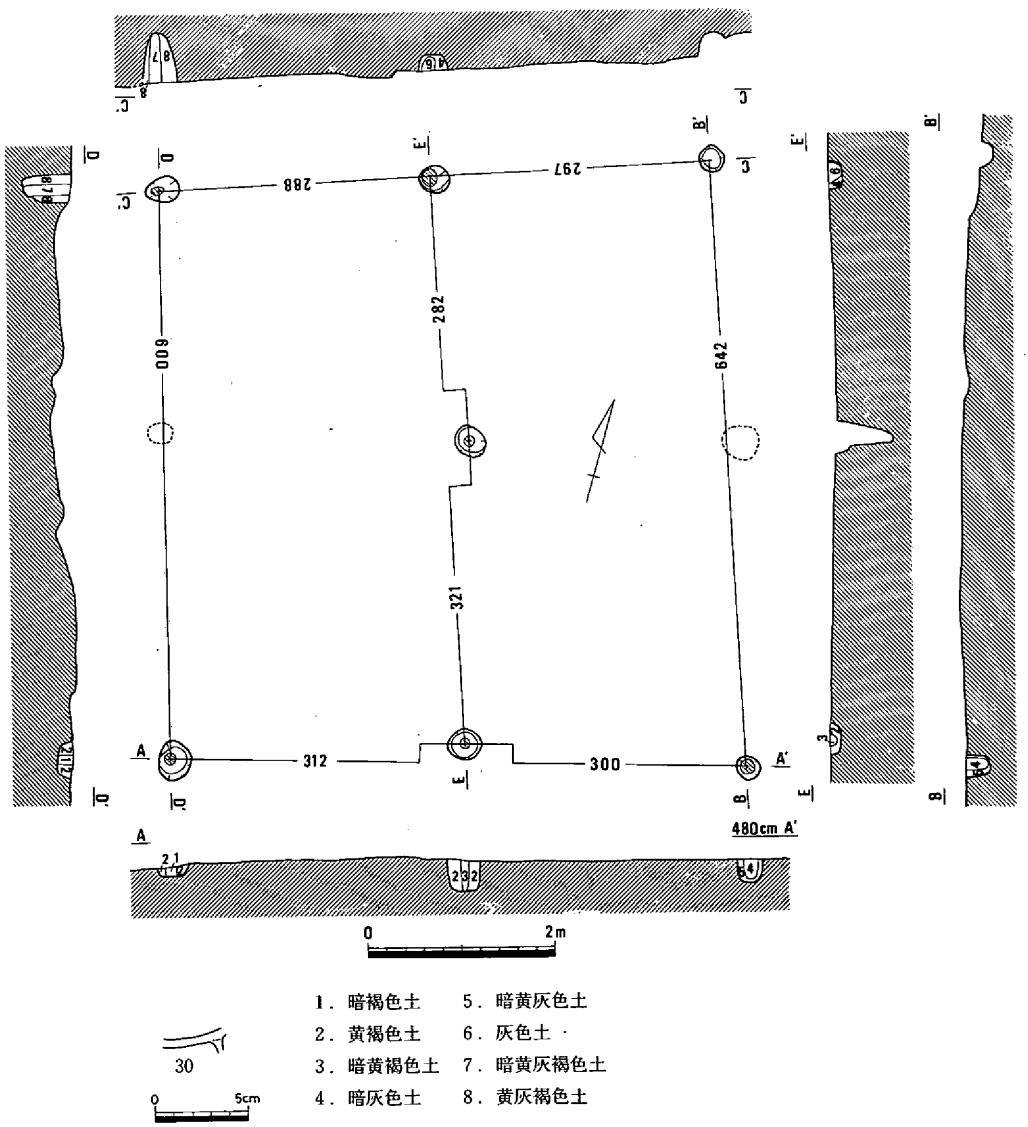
（第18図・図版32－１）

A区画の西で検出した２間×２間の掘立柱建物である。建物－２と重複する。棟方向はN20°Wで、桁行は582～597cm、梁行は417～420cm、床面積が25.07㎡である。柱穴掘方は円形で、柱痕跡が全てに認められた。遺物は、柱穴内から土鍋（26）、土師器の椀（27・28）、

皿（29）が出土している。

建物－７（第19図）

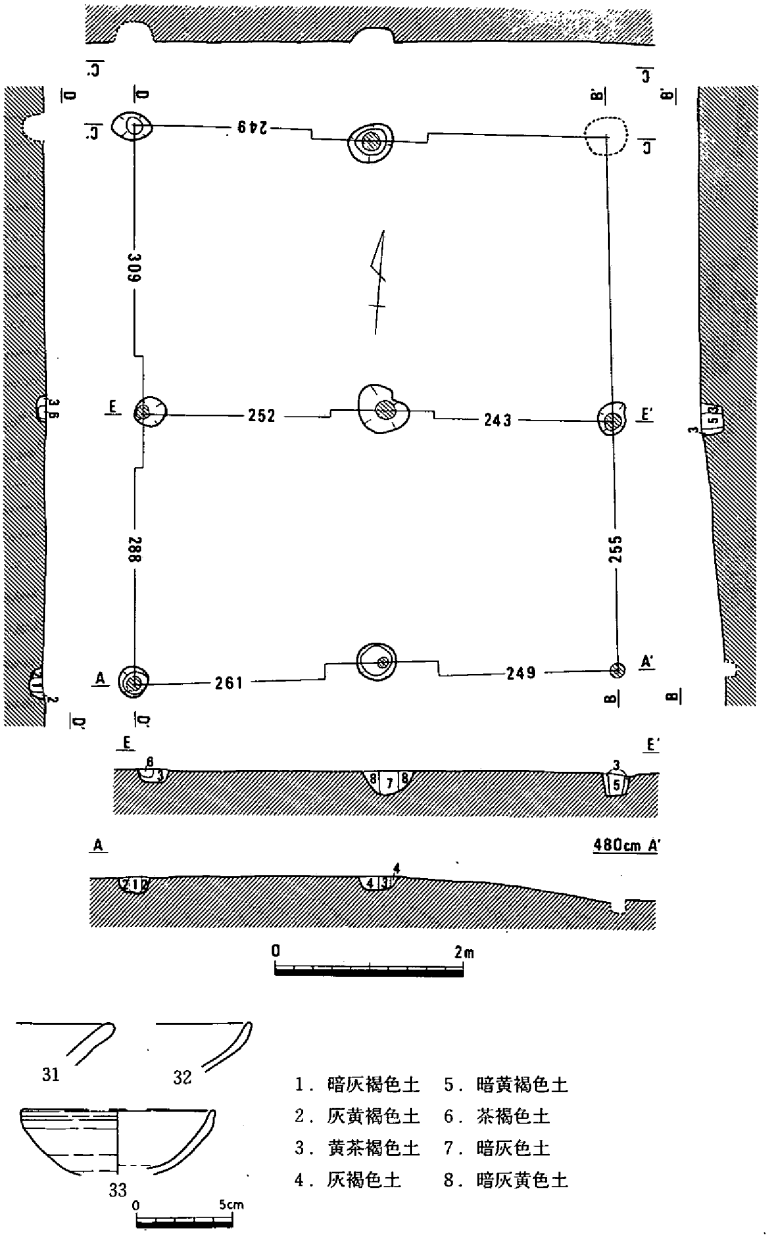
Ａ区画の北で検出した２間×２間の掘立柱建物である。建物６と重複するが、前後関係は不明である。棟方向はN19°Wで、桁行は600～642cm、梁行は585～612cm、床面積は36.28㎡である。柱穴掘方は円形で、柱痕跡は６ヶ所で認められた。遺物は、柱穴内から土師器の椀（30）が出土している。



第19図　建物－７（1/80）・出土遺物

建物－8（第20図・図版32－8）

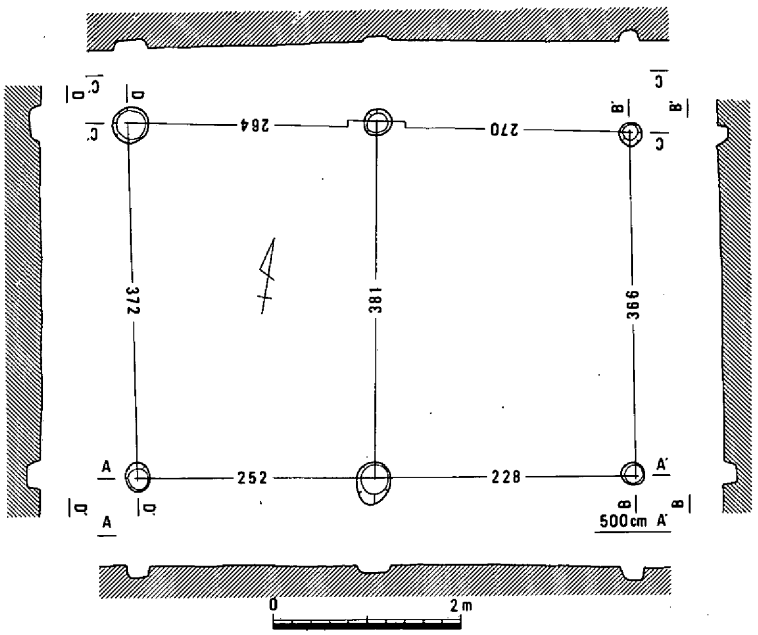
A区画で、建物－7の南に位置し、建物－7と重複する2間×2間の掘立柱建物である。棟方向はE11°Wで、桁行は597cm、梁行は510cm、床面積は29.70㎡である。柱穴掘方は円形で、柱痕跡は5ヶ所で認められた。遺物は、柱穴内から土鍋(31)、土師器の椀(32・33)が出土している。



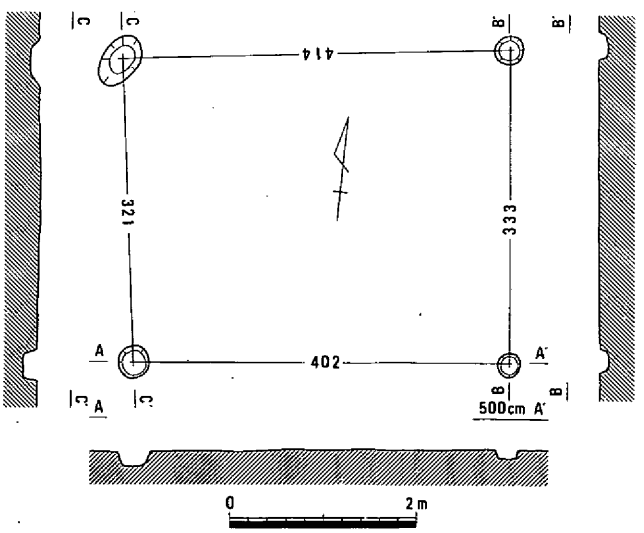
第20図　建物－8（1/80）・出土遺物

建物－９（第21図・図版35－２）

Ｂ区画の南に位置し、建物－10と重複する２間×１間の掘立柱建物である。棟方向はＥ９°Ｎで、桁行は480～534cm、梁行は366～372cm、床面積が18.98㎡である。柱穴掘方は円形である。遺物は出土してない。



第21図　建物－９（1/80）



第22図　建物－10（1/80）

建物－10（第22図）

B区画で、建物－9の北に位置する1間×1間の掘立柱建物である。建物－4と重複するが、前後関係は不明である。棟方向はE5°Nで、桁行は402～444cm、梁行は321～333cm、床面積が13.34㎡である。柱穴掘方は円形である。遺物は出土してない。

建物－11（第23図）

B区画のほぼ中央に位置し、建物－10・12・26と重複する1間×2間の掘立柱建物である。棟方向はE3°Sで、桁行は387～402cm、梁行は234～252cm、床面積は9.59㎡である。柱穴掘方は円形であるが、柱穴内に根石をもつものが2個と柱痕跡が2ヶ所で認められた。遺物は出土してない。

建物－12（第24図）

建物－11・26と重複する1間×1間の掘立柱建物である。棟方向はN5°Wで、桁行は213～215cm、梁行は210～213cm、床面積は4.54㎡である。柱穴掘方は円形である。遺物は出土してない。

建物－13（第25図）

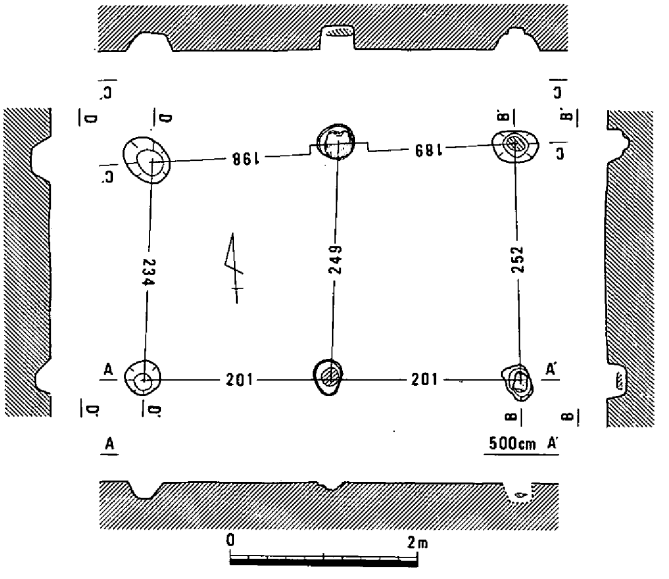
B区画の北端で検出された2間×1間の掘立柱建物である。棟方向はE3°Nで、桁行は、397～414cm、梁行は303～318cm、床面積は12.71㎡である。柱穴掘方は円形である。遺物は出土してない。

建物－14（第26図・図版32－3）

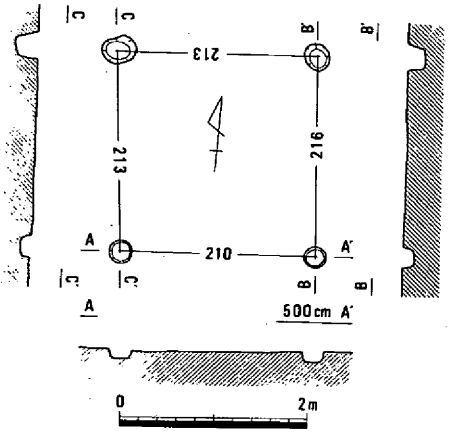
建物－13と重複する1間×1間の掘立柱建物である。棟方向はN30°Eで、桁行は218～225cm、梁行は159～183cm、床面積は3.80㎡である。柱穴掘方はほぼ円形である。遺物は出土してない。

建物－15（第27図・図版31－1）

C区画のほぼ中央部で検出された1間×1間の掘立柱建物である。建物－23と重複する。



第23図　建物－11（1/80）

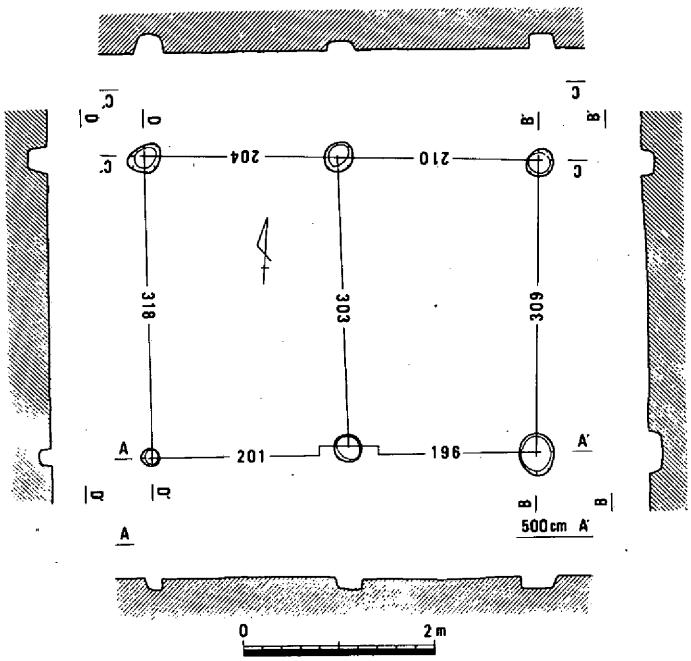


第24図　建物－12（1/80）

棟方向はE25°Nで、桁行は336～351cm、梁行は321～327cm、床面積は11.13㎡である。柱穴掘方は円形で、柱痕跡が１ヶ所認められた。遺物は出土してない。

建物－16（第28図）

建物－15の北に検出された１間×１間の掘立柱建物である。棟方向はE16°Nで、桁行は234～240cm、梁行は153～162cm、床面積は3.73㎡である。柱穴掘方は円形で、柱痕跡が１ヶ所認められた。遺物は出土してない。



第25図　建物－13（1/80）

建物－17（第29図）

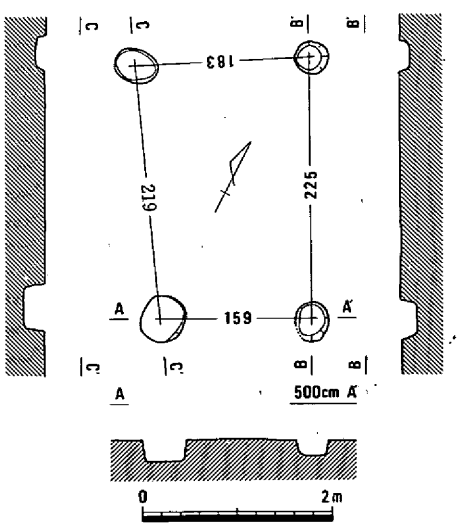
建物－16の北に検出された１間×１間の掘立柱建物である。棟方向はE３°Nで、桁行は171～192cm、梁行は138cm、床面積は2.50㎡である。柱穴掘方は円形で、柱痕跡が２ヶ所認められた。遺物は出土してない。

建物－18（第30図・図版31－２）

Ｃ区画の東端で検出された２間×２間の掘立柱建物である。棟方向はN１°Wで、桁行は438～447cm、梁行は441～447cm、床面積は19.80㎡である。柱穴掘方は円形で、柱痕跡が２ヶ所認められた。遺物は出土してない。

建物－19（第31図）

Ｄ区画の北西端で検出された１間×１間の掘立柱建物である。棟方向はE19°Nで、桁行は336～348cm、梁行は252～255cm、床面積は8.67㎡である。柱穴掘方はほぼ円形で、柱痕跡が１ヶ所認められた。遺物は出土してない。



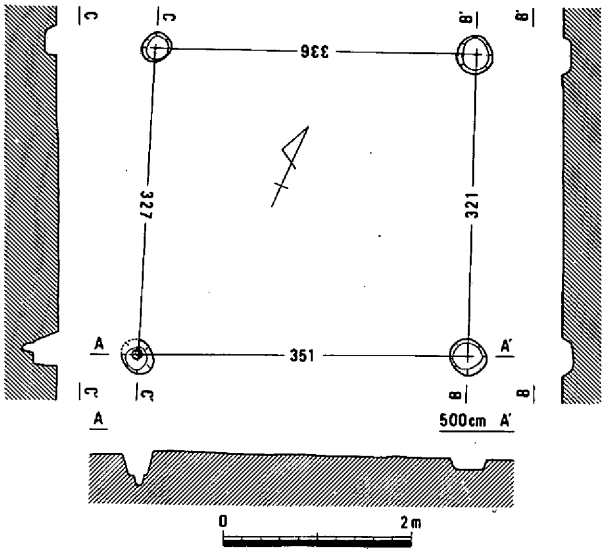
第26図　建物－14（1/80）

建物－20（第32図）

A区画の南東で検出された1間×1間の掘立柱建物である。棟方向はE22°Nで、桁行は441～444cm、梁行は243～255cm、床面積は11.02㎡である。柱穴掘方はほぼ円形である。遺物は出土してない。

建物－21（第33図・図版33－1）

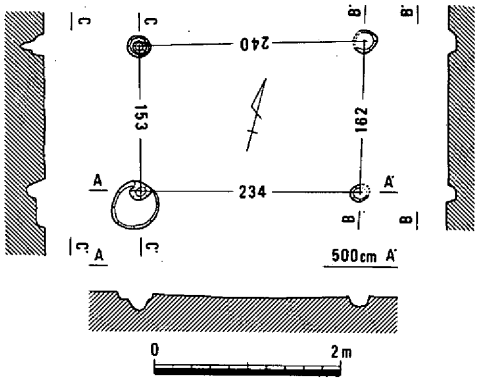
建物－20の西隣りで検出された1間×1間の掘立柱建物である。棟方向はE17°Nで、桁行は393～402cm、梁行は276～288cm、床面積は11.17㎡である。柱穴掘方はほぼ円形である。遺物は出土してない。



第27図　建物－15（1/80）

建物－22（第34図）

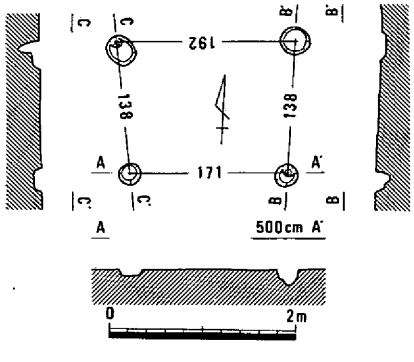
C区画の北西で、建物－23と重複する1間×1間の掘立柱建物である。棟方向はE26°Nで、桁行は393～405cm、梁行は222～228cm、床面積は8.98㎡である。柱穴掘方はほぼ円形である。遺物は出土してない。



第28図　建物－16（1/80）

建物－23（第35図）

建物－22と重複する2間×3間の掘立柱建物である。棟方向はN13°Wで、桁行は807～846cm、梁行は462cm、床面積は38.18㎡である。柱穴掘方はほぼ円形で、柱痕跡は9ヶ所認められた。遺物は出土してない。



第29図　建物－17（1/80）

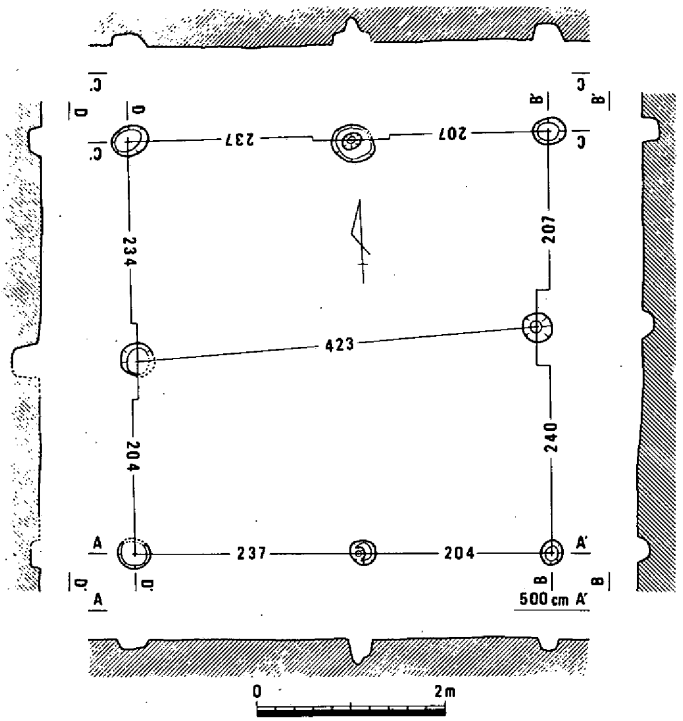
建物－24（第36図・図版33－2）

C区画の東で建物18と重複して検出された2間×2間の掘立柱建物である。棟方向はN22°Wで、桁行は516～537cm、梁行は426～432cm、床面積は22.59㎡である。柱穴掘方はほぼ円形で、柱痕跡

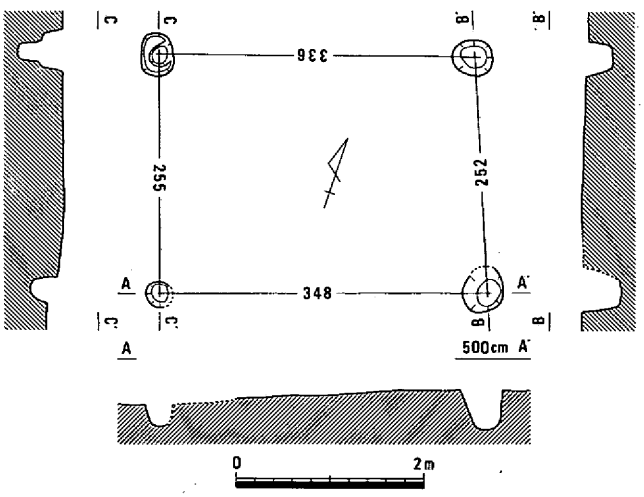
が全てに認められた。遺物は出土してない。

建物－25（第37図・図版33－３）

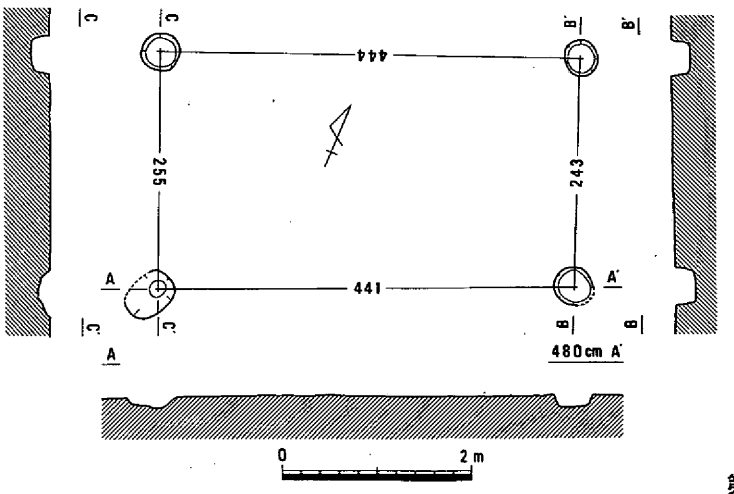
Ｄ区画の東で検出された２間×２間の掘立柱建物である。棟方向はE16°Nで、桁行は402～405cm、梁行は375～393cm、床面積は15.47㎡である。柱穴掘方は円形である。遺物は、柱穴内



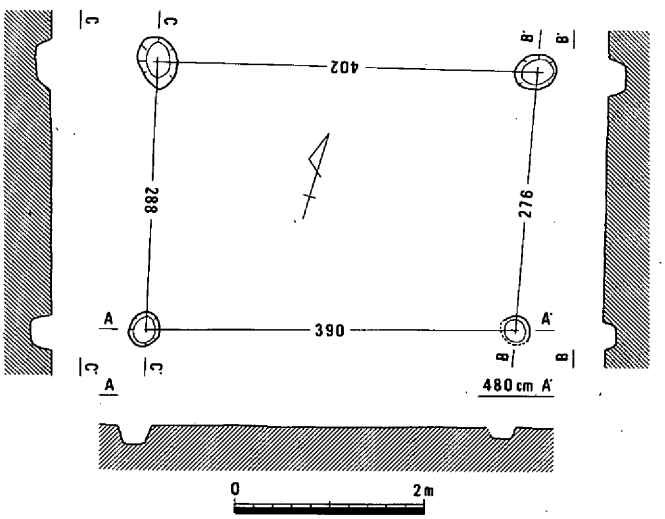
第30図　建物－18（1/80）



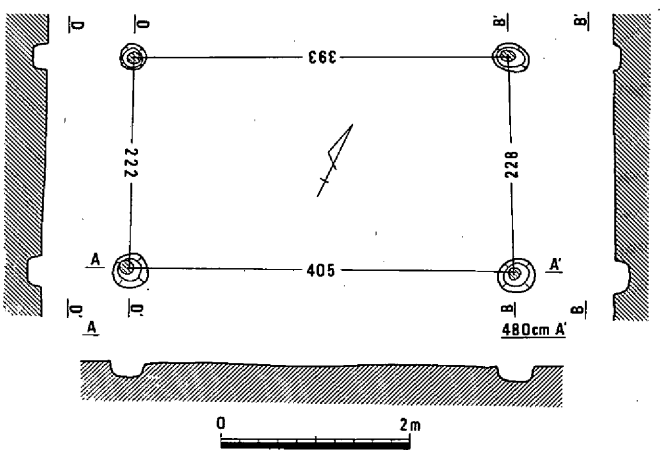
第31図　建物－19（1/80）



第32図　建物－20（1/80）



第33図　建物－21（1/80）

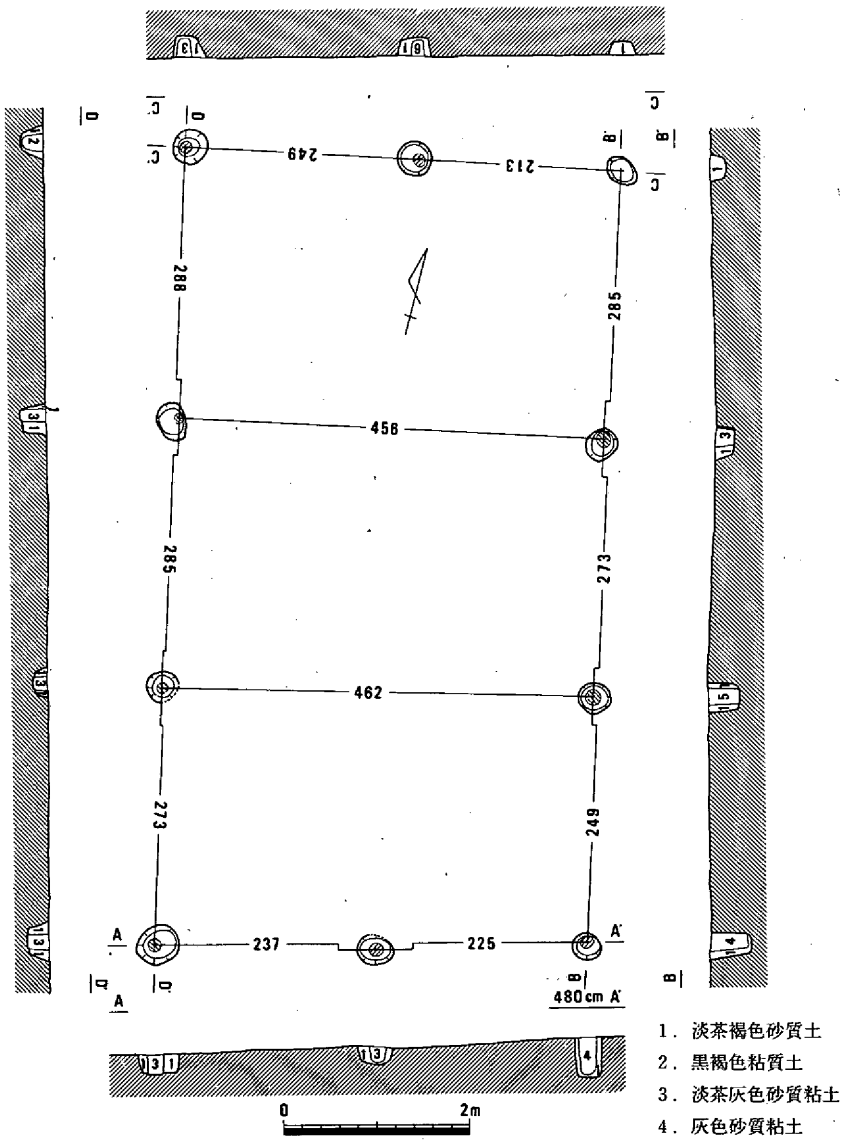


第34図　建物－22（1/80）

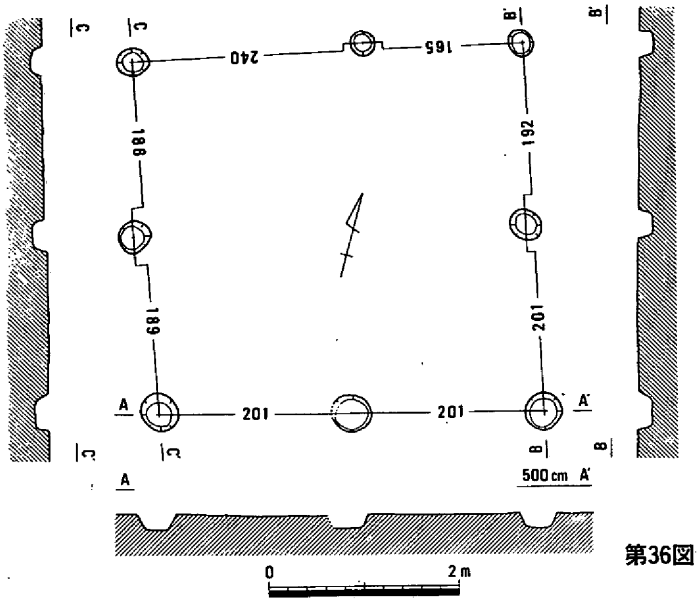
から土鍋（34、35）、土師器の椀（36）、皿（37、39）、脚台（40）、東播系須恵器の鉢（38）が出土している。

建物－26（第38図）

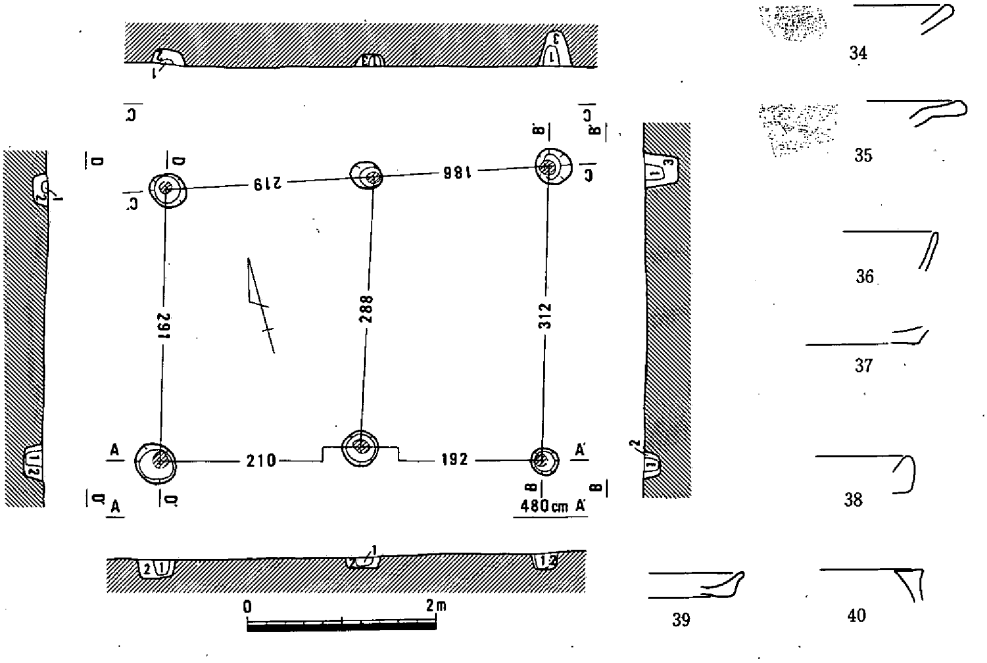
Ｂ区画のほぼ中央で検出された１間×２間の掘立柱建物である。棟方向はE14°Sで、桁行は288～312cm、床面積は12.17㎡である。柱穴はほぼ円形である。遺物は出土してない。



第35図　建物－23（1/80）



第36図　建物－24（1/80）

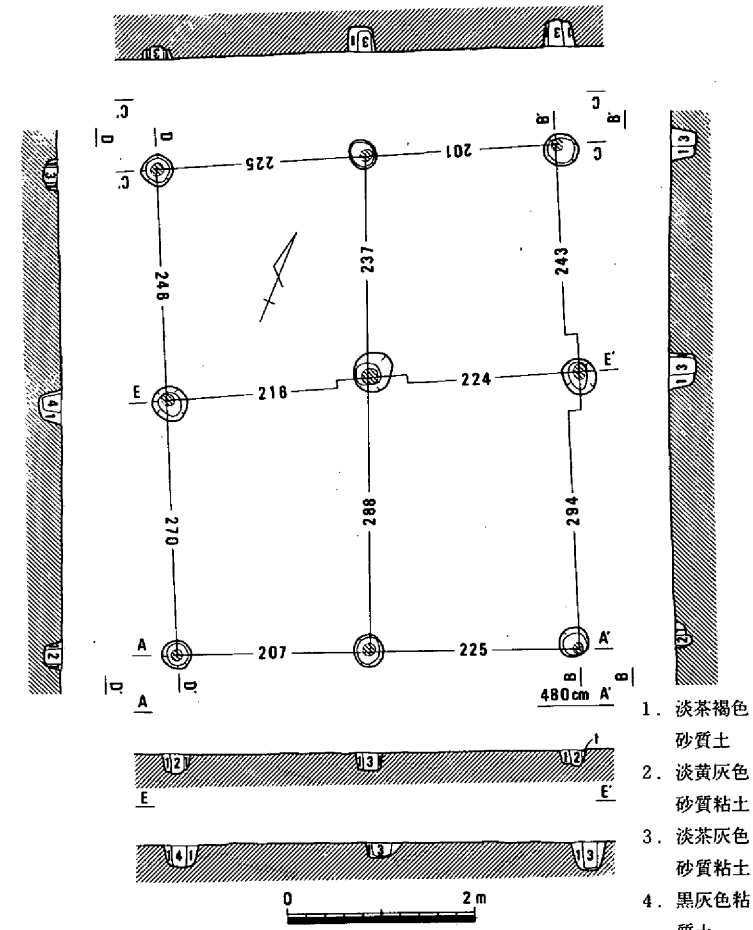


1．暗灰色粘質土
（焼土塊含む）
2．黄灰色砂質土
3．暗灰褐色粘質土
（黄灰色微砂含む）

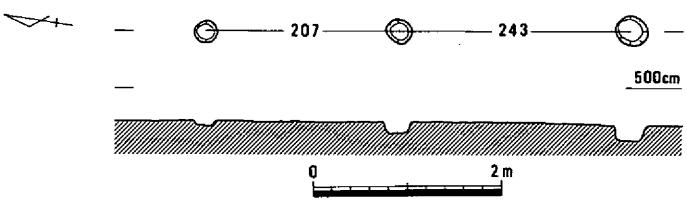
第37図　建物－25（1/80）・出土遺物

柵列－１（第39図）

Ｂ区画内の建物９の東側で検出された柱穴列である。柱間は207cm、243cmである。遺物は出土してない。　（松本）



第38図　建物－26（1/80）



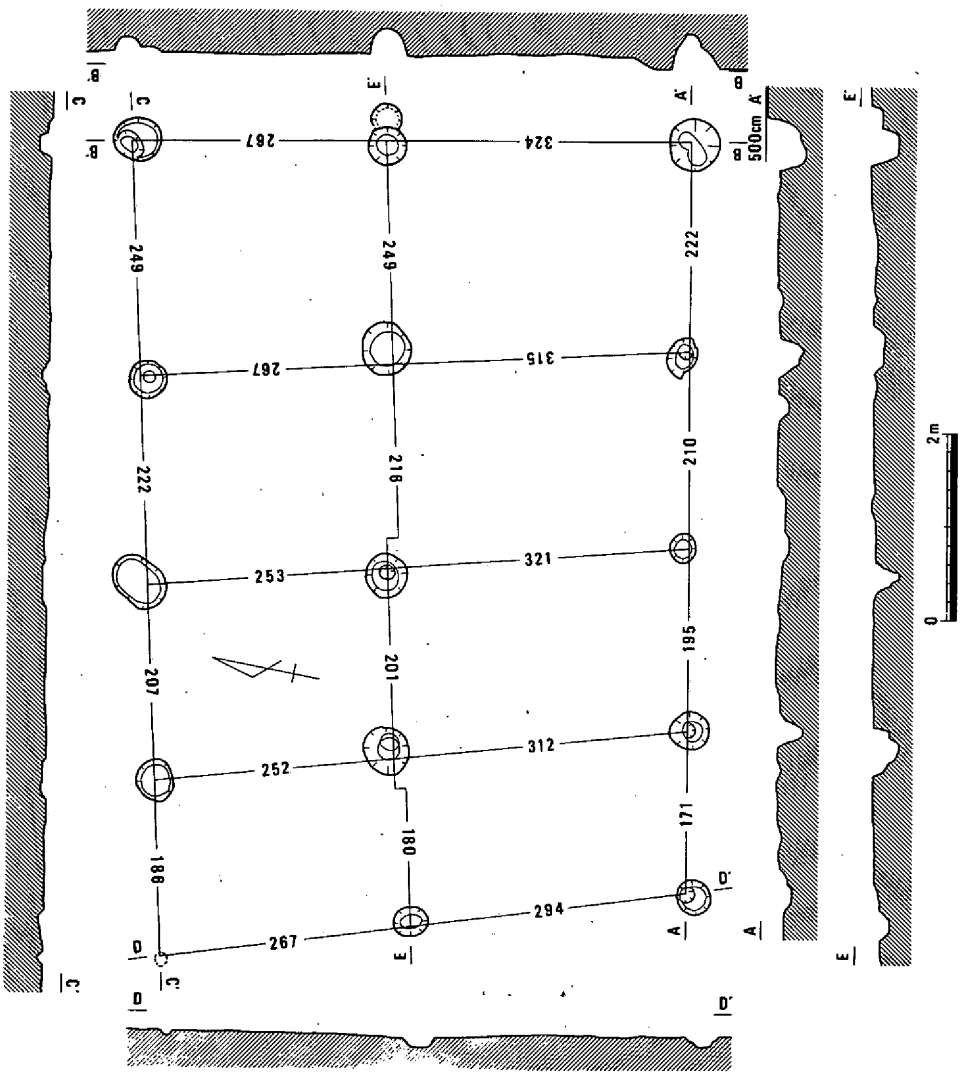
第39図　柵－１（1/80）

建物－27（第40図・図版37－１）

建物－31よりさらに1.5cm北にずれて、後述の３棟と長軸を同じくする２間×４間の掘立柱建物である。柱穴の掘方はほぼ円形で30～50cm、深さ50～40cmとかなりの差で計測し得た。柱痕跡がめり込んで確認されたものも数本ある。また、柱穴を線で結んだ平面形はかならずしも長方形とはならず、南側が短くてかなり歪んだ長方形となっている。出土遺物は皆無であり、明確な年代は不明であるが、検出された層序関係から建物－28などと同時代と考えられる。

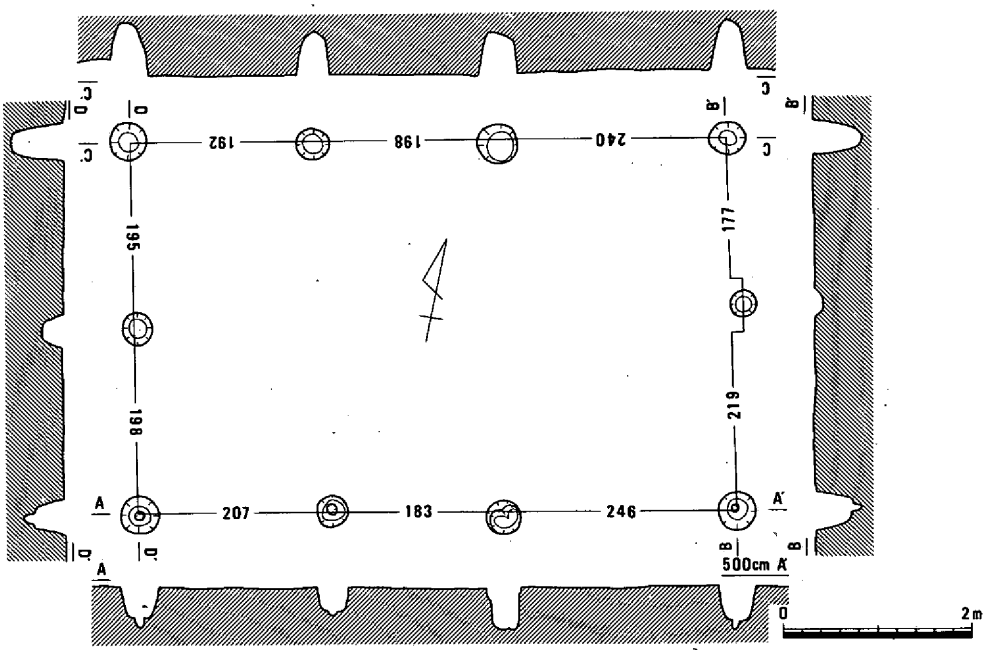
建物－28（第41図）

建物－29に重複する２間×３間の掘立柱建物である。長軸方向も東西と同じくする。柱穴は



第40図　建物－27（1/80）

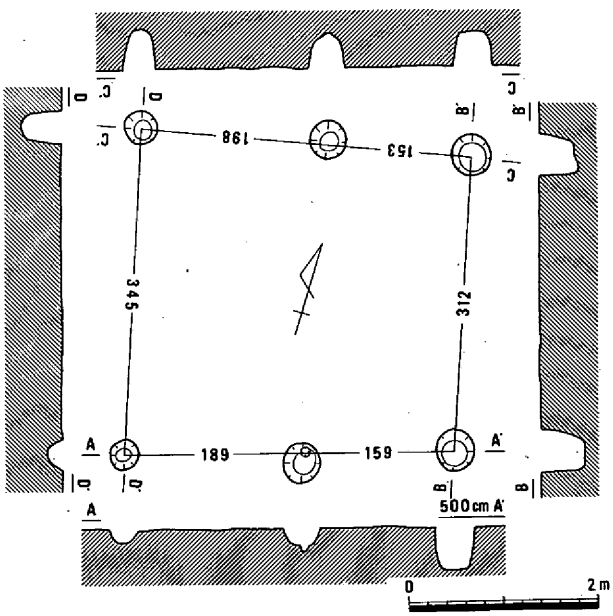
円形の掘方をもち30～40cm、深さは30－50cmを測る。また数本の柱穴では10cm前後のめり込みが認められた。柱穴の中心を線で結んだ平面形は、数センチメートルの誤差ではあるが、ほぼ長方形となっている。出土遺物は皆無であるが、時代は建物－29と相前後するものと思われる。



第41図　建物－28（1/80）

建物－29（第42図）

調査区中央やや東よりで長軸を東西にした２間×１間の掘立柱建物である。西側の柱穴が多少開いて存在するが、周辺に同種の柱穴がないため建物とした。柱穴は30～45cmの円形、深さ15～40cmを測る。出土遺物は無く、検出された層序関係から中世と考えられる。

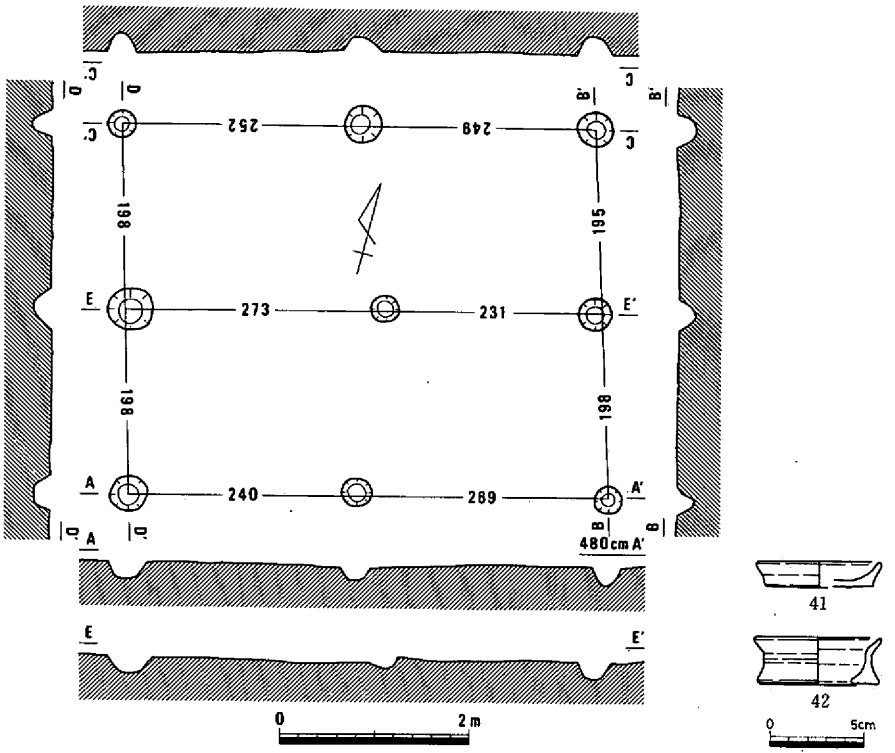


第42図　建物－29（1/80）

建物－30

（第43図・図版36－２）

約1.5m北にずれてはいるが、建物－28と長軸が同一の２間×



第43図　建物－30（1/80）・出土遺物

2間の掘立柱建物である。円形の掘方をもった柱穴で25～45cm、深さ10～20cmを測る。柱穴を結んだ平面形は数センチメートル違いではあるが、ほぼ長方形を呈している。柱穴内から出土した遺物から中世と考えられる。

建物－31（第44図）

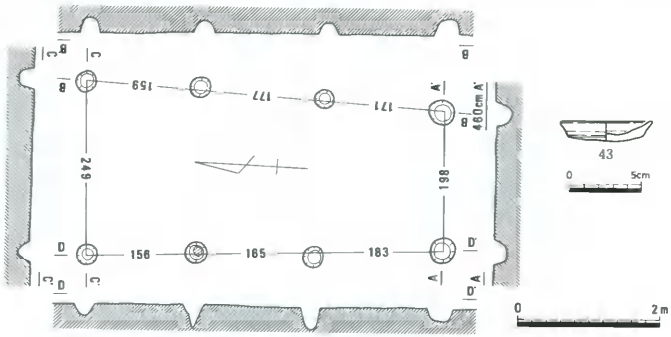
建物－30の南に隣接し、南北が長軸の1間×3間の掘立柱建物である。柱穴の掘方は円形で25～35cm、深さ15～30cmを測る。柱穴を結んだ平面形態は、北側梁間が南側にくらべて約50cm広くなった歪な長方形を示している。柱穴内の出土遺物から中世といえる。

建物－32（第45図）

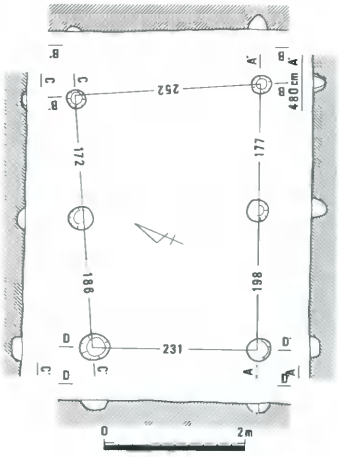
本調査区南東部（8区東）の微高地部分において検出、確認できた1間×2間の掘立柱建物である。主軸は北東－南西の方向を示し、柱間は17cmと21cmという差が出て柱穴を結んだ平面形は長方形とならずに台形状を呈している。柱穴は25～40cmとまばらで、確認できた深さも5～10cmと非常に浅いものであった。検出された面、周辺の遺構等から中世の遺構と思われる。

建物－33（第46図）

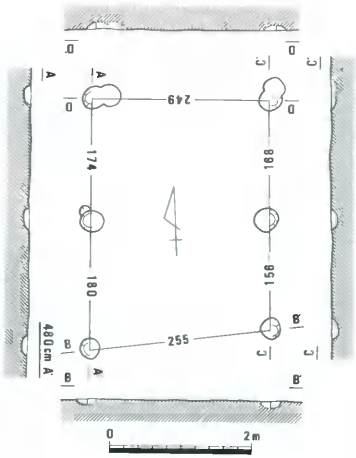
建物－32の北東に隣接して検出された1間×2間の掘立柱建物である。主軸は南北方向を示



第44図　建物－31（1/80）・出土遺物



第45図　建物－32（1/80）



第46図　建物－33（1/80）

し東が狭くなった合形状をした建物となっている。この建物は建て替えが行われている。

建物－34・35（図版37－２）

建物－33の東に接しており、柱穴も重複している。規模は１間×１間の建物であり正方形は呈していない。建物－32・33と同時代と思われる。　（二宮）

(2) 井戸

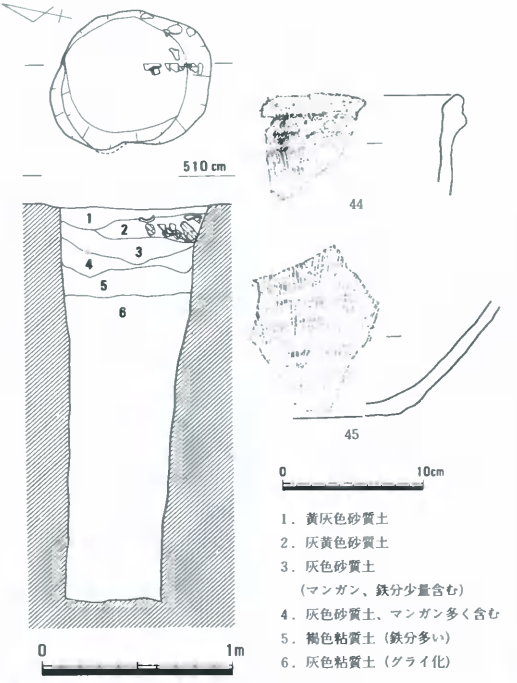
井戸－1（第47図・図版43－2）

調査区の南東よりで検出された歪な楕円形の平面形で、75×85cmを測る素掘りの井戸である。検出面からの深さは210cmを測ることができた。

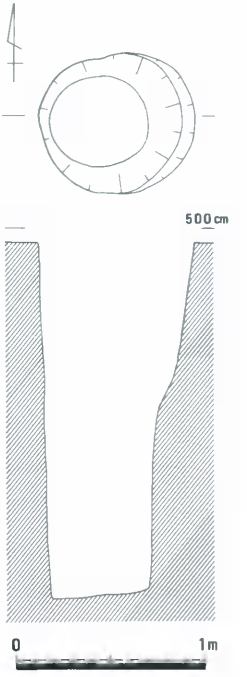
二段掘りの掘方であるが、北東側はほぼ垂直に掘られ、他はゆるやかな傾きを持たせている。井底はほぼ円形で平坦に掘り上げられている。井戸を廃棄し、自然埋没し、最後にできたくぼみには礫・備前焼の擂鉢等が含まれている。これらから近世には使用不能となり廃棄されたと考え、使用時期は近世初頭と考えるのが妥当と思われる。

井戸－2（第48図）

井戸－1から南西約9mの位置で検出された径約75cmの円形の平面形態を示す素掘りの井戸である。井戸の掘方は、西側はほぼ垂直、東側はゆるやかな傾斜で掘られ、中ほどからは垂直



第47図　井戸－1（1/30）・出土遺物

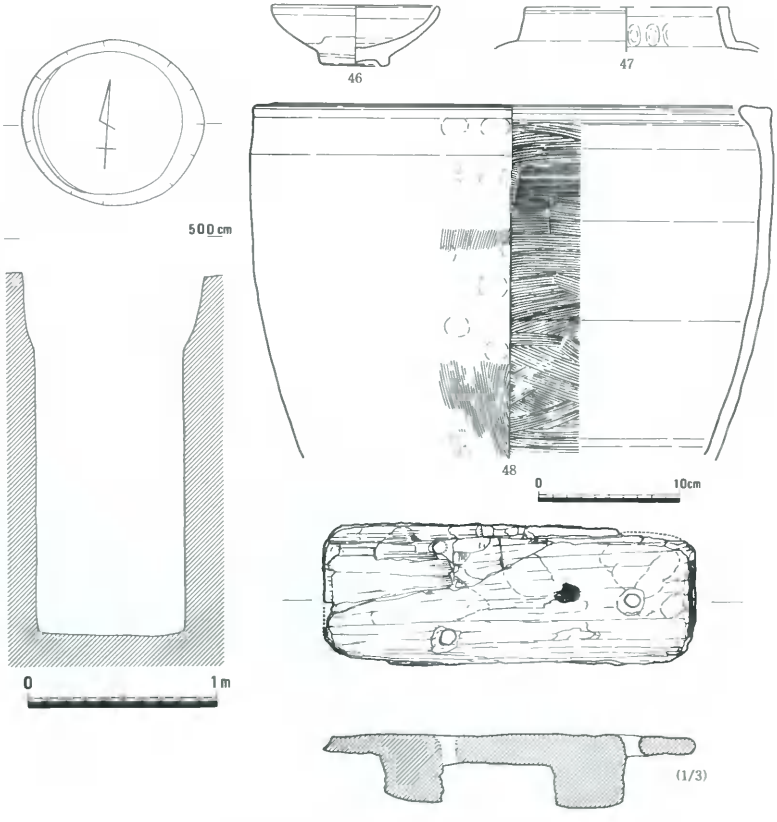


第48図　井戸－2（1/30）

に掘られている。遺構検出面から190㎝でほぼ平らな井戸底を確認することができた。埋土中からの遺物の出土は皆無であるが、井戸－１と同時代のものと推察される。

井戸－３（第49図）

井戸－２からさらに西に４ｍの位置で検出された90×95㎝のほぼ円形の平面形態を示す素掘りの井戸である。断面では上段の掘方は擂鉢状に掘りくぼめ、その下は垂直に掘り下げられている。検出面から約190㎝でほぼ水平の井戸底が確認できた。埋土中からは図示した土器・木製品（下駄）がある。時代は井戸２と同じと思われる。　（二宮）



第49図　井戸－３（1/30）・出土遺物

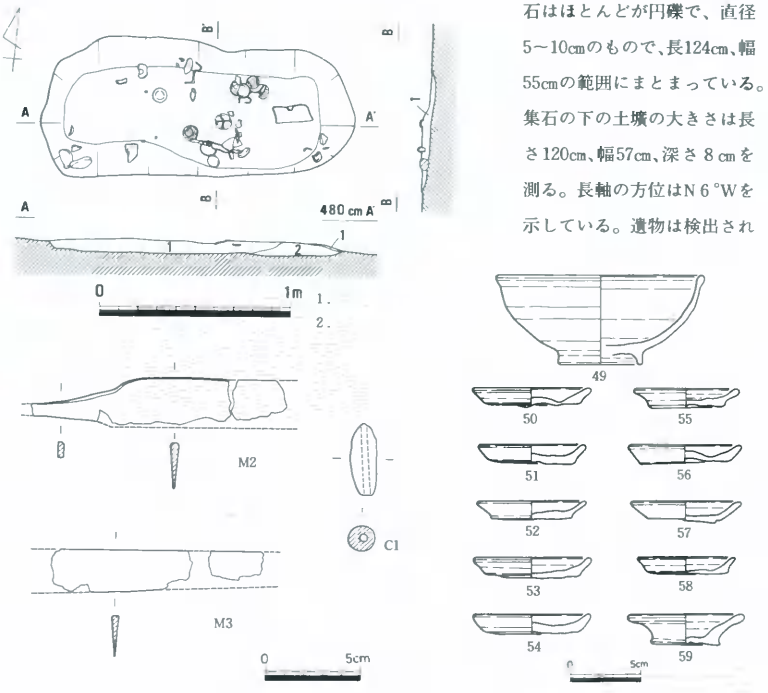
(3) 土壙

土壙－1 (第50図)

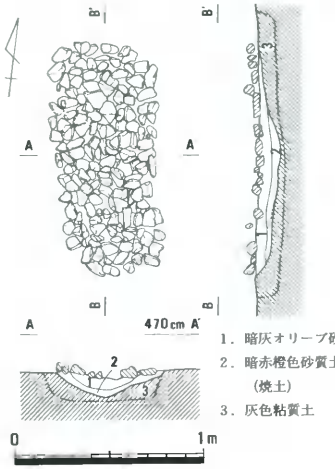
土筆山の北端部に近く、1A区に位置する。平面形はほぼ長方形を呈している。床面は平坦であるが、立ち上がりは少ししか確認できなかった。主軸はN85°Eを示す。遺物の出土状況は、床面から10cmくらい上層で、早島式土器の椀**49**、土師器の小皿**50～59**、鉄製の包丁・刀、土錘**C1**が検出された。土壙の大きさは、長径164cm、短径73cm、深さ10cmを測る。時期は鎌倉時代に比定される。残存状況がよくないため明確ではないが、土壙墓の可能性が考えられる。

土壙－2 (第51図)

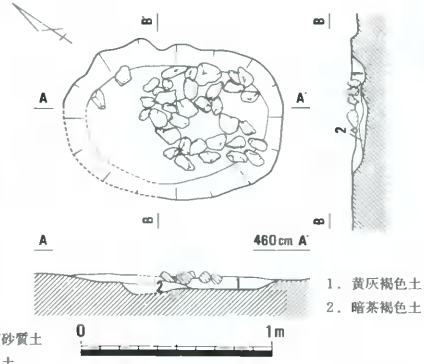
調査区の東部にあり、1A区に位置する。中世微高地の上面において、円礫がほぼ長方形にまとまって検出された。当初は中世墓の可能性を想定して、集石の実測の後、下部の土壙の検出に努めた。しかし、集石の下にはわずかな凹みが認められただけで、埋葬のあとはみられなかった。石はほとんどが円礫で、直径5～10cmのもので、長124cm、幅55cmの範囲にまとまっている。集石の下の土壙の大きさは長さ120cm、幅57cm、深さ8cmを測る。長軸の方位はN6°Wを示している。遺物は検出され



第50図　土壙－1 (1/30) ・出土遺物



第51図　土壙－２（1/30）



第52図　土壙－３（1/30）

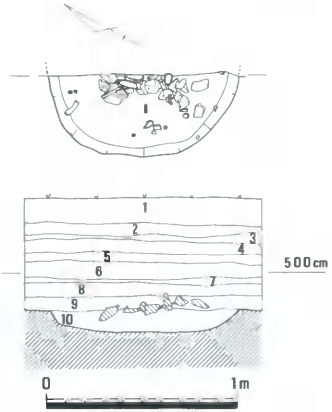
なかったが、周辺部の遺構の関連から中世のものと判断されるが、性格は明らかでない。

土壙－３（第52図）

中世微高地にあって、１A区に位置する。楕円形の浅い土壙内に円礫がまとまって検出された。土壙の大きさは、長径115cm、短径82cm、深さ９cmを測る。長軸の方位はN35°Wを示している。遺物は検出されなかったが、周辺の遺構との関係から中世のものと判断される。

土壙－４（第53図）

１A区にあって、東端の用地境に位置する。そのため、一部は用地外へのびているため、全容は分らない。当初は石材が検出されたことから、中世墓を想定して下部の検討を行ったが、埋葬のあとは認められなかった。土壙の全容は分らないが、調査範囲の最大径100cm、深さ12cmを測る。石材は角張ったものが多い。埋土中からは早島式土器の椀片や亀山焼の甕片が検出されているので中世のものと判断される。（正岡）



1．茶灰褐色微砂
2．灰褐色微砂
3．黄灰褐色細砂
4．灰褐色微砂
5．黄灰褐色粘土まじり微砂
6．黄灰褐色粘土まじり微砂
7．黄褐色粘土まじり微砂
8．黄褐色粘土まじり微砂（Ｍｎ含）
9．黄灰褐色粘土まじり微砂（細砂含）
10．黄灰褐色粘土まじり微砂

第53図　土壙－４（1/30）

土壙－5（第54図）

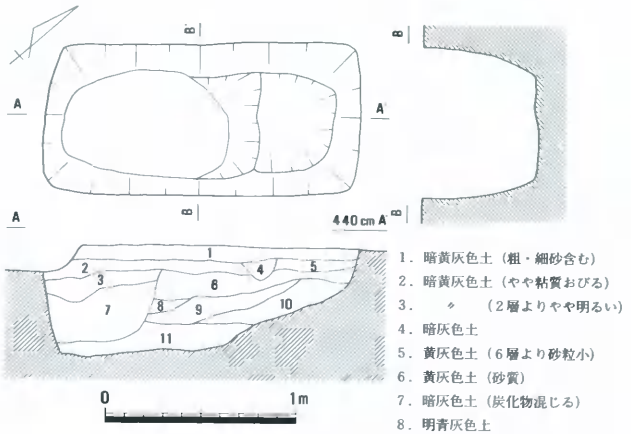
4b東調査区南端の溝－3に接する所に位置し、長軸は北東－南西方向のほぼ長方形の平面形態を示し、土壙掘方は北東側が段掘りを呈し、短辺の壁はやや胴張りをなしている。計測数値は、長辺約170㎝、短辺約80㎝、深さは30～60を測り得た。土壙埋土中からの出土遺物は皆無の状態であるが、壙の南西側が近世の遺構により削平されていることから推察すれば、中世には存在していたものと思われる。

土壙－6（第55図）

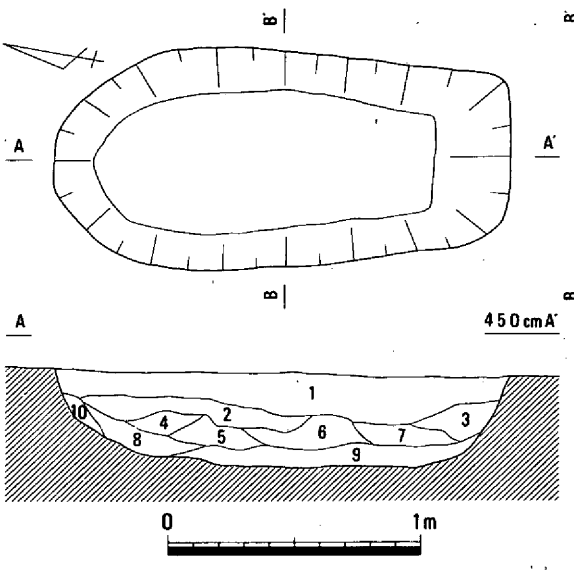
土壙－5の西側でおいて長軸がほぼ南北方向で検出された舟型の平面形態を示す遺構である。土壙の掘方は長辺短辺共にゆるやかな傾斜を持たせて掘り上げてある。計測値は、長辺180㎝、短辺70～90㎝、中央部で最大深長は38㎝を測り得た。形態的には墓壙であろうが決め手を欠く、検出された面等から推察して土壙－5と同時代の遺構と考えられる。

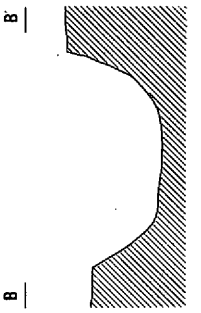
土壙－7（第56図・図版48－2）

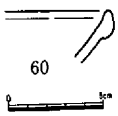
4b東調査区のほぼ中央付近で検出された隅丸の小判形の平面形態を示し、長辺106㎝、短辺65㎝、深さ30㎝の計測値を得た。土壙の底面はほぼ平坦に掘られている。また、埋土中の東壁に骨片とおぼしきものが確認されたが、残存状態は非常に悪いものであった。さらに南床部で土師器椀が検出されている。中世土壙墓の可能性がある。



第54図　土壙－5（1/30）

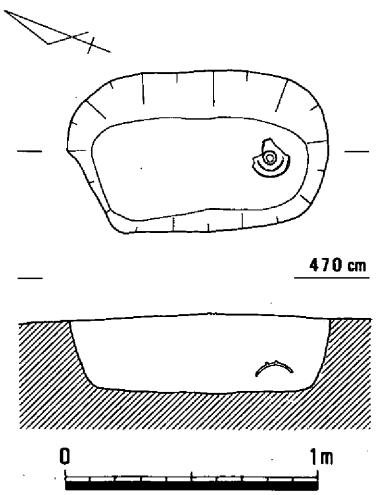


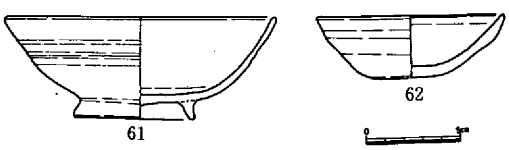




1．黒灰色土・黄淡茶色土（焼土・炭化物少量含む）
2．１層に緑系統が混合　炭化物ほとんど含まず
3．２層より黒灰色土少ない
4．３層より黒灰色土少なく緑多い色
5．４層より黒灰色土増す　黄色ほとんどなし
6．４層と似ているが黒灰色土多し
7．２層に緑が多くなっている色
8．７層に近いがさらに濃黒色
9．５層より黒灰色土含まれない色
10．３とほぼ同色

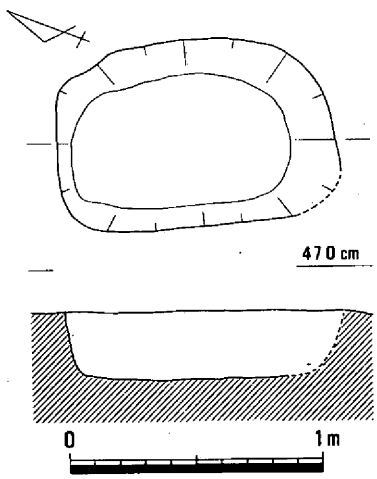
第55図　土壙－６（1/30）・出土遺物

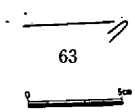




黄淡茶色土
暗灰色土　の互層
少量の焼土、多量の炭化物を含む

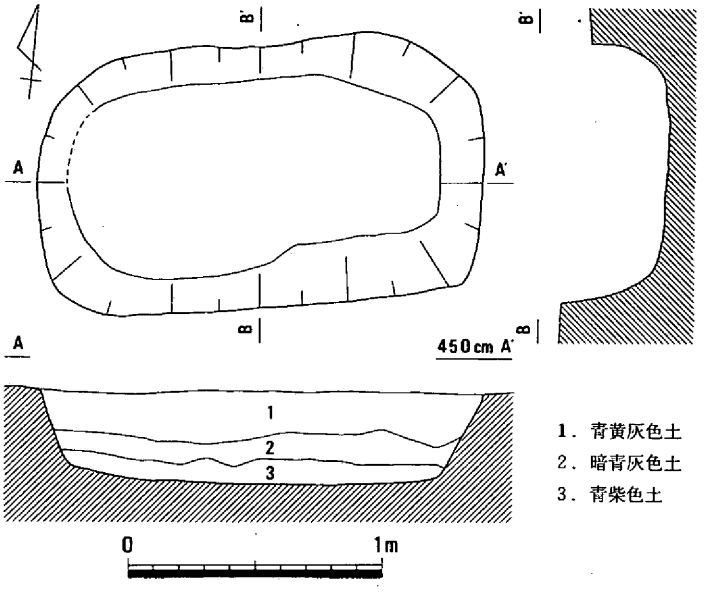
第56図　土壙－７（1/30）・出土遺物



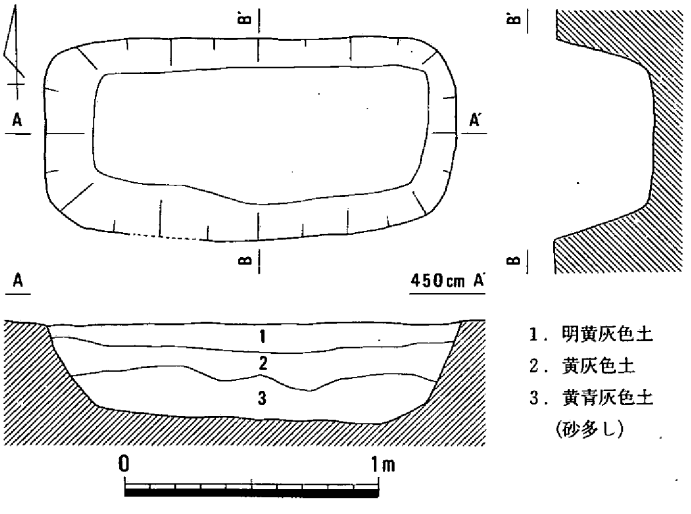


黄淡茶色土
暗灰色土
暗灰青色土　の互層
焼土…少量
炭化物…多量　含む

第57図　土壙－８（1/30）・出土遺物



第58図　土壙－9（1/30）



第59図　土壙－10（1/30）

土壙－8（第57図）

土壙－7の北に接するように検出されたやや歪な長楕円形の平面形を呈する土壙である。土壙の規模は、長辺約110cm、短辺75cm、深さ約28cmを測る。土壙－7と同様の規模、形態を示すものである。伴出遺物は無しであるが土壙墓の可能性の高い遺構であり、同時代のものと考えるのが妥当と思われる。

土壙－9（第58図）

土壙－7の南東で、長軸は東西方向で、検出時の平面形態はやや不整の隅丸長方形であり、壙底面は西側が丸く、東側に辺を持つ歪な長楕円形を示す土壙である。土壙は180×105cm、最深部で約40cmを測った。規模、形態的に土壙墓の可能性がある土壙である。遺物の出土は認められず、検出状況から中世の遺構と思われる。

土壙－10（第59図）

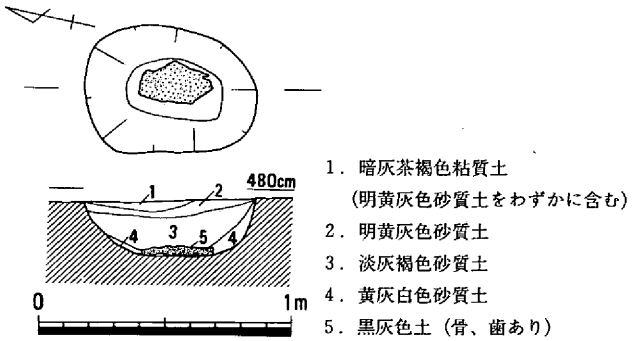
土壙－5の北で東西に長軸を持った165×80cm、深さは40cmを測る平面形は隅丸長方形の土壙である。土壙－9に形態的に類似する土壙である。中世と思われる。（二宮）

土壙－11（第60図）

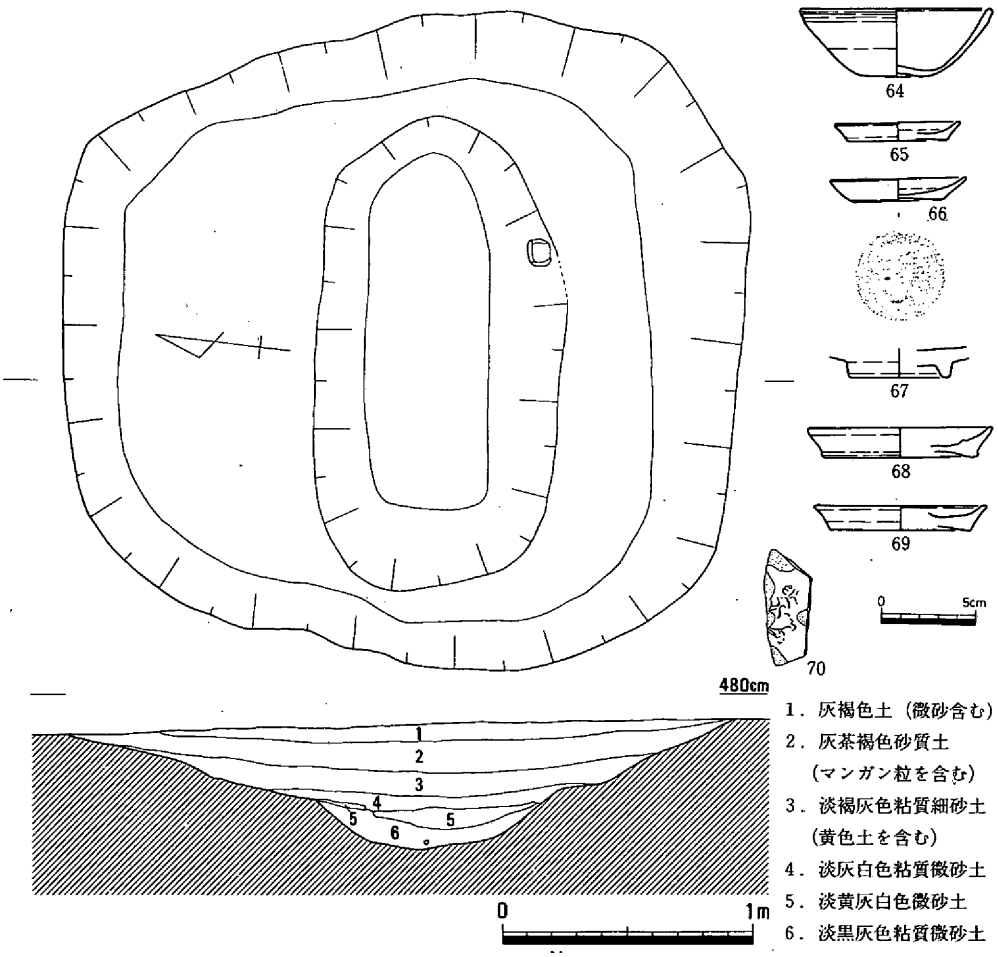
５区の南に位置する土壙。規模は70×50cmの楕円形を呈し、深さは約23cmを測る。底部には厚さ４cmの炭層の散布がみられ、この中から骨片、歯の一部が出土したが、周囲に焼けた痕跡は認められなかった。出土遺物は無い。

土壙－12（第61図）

５区の北東に位置する土壙。規模は270×260cmの方形を呈する。さらに、内に190×100cmの長



第60図　土壙－11（1/30）



第61図　土壙－12（1/30）・出土遺物

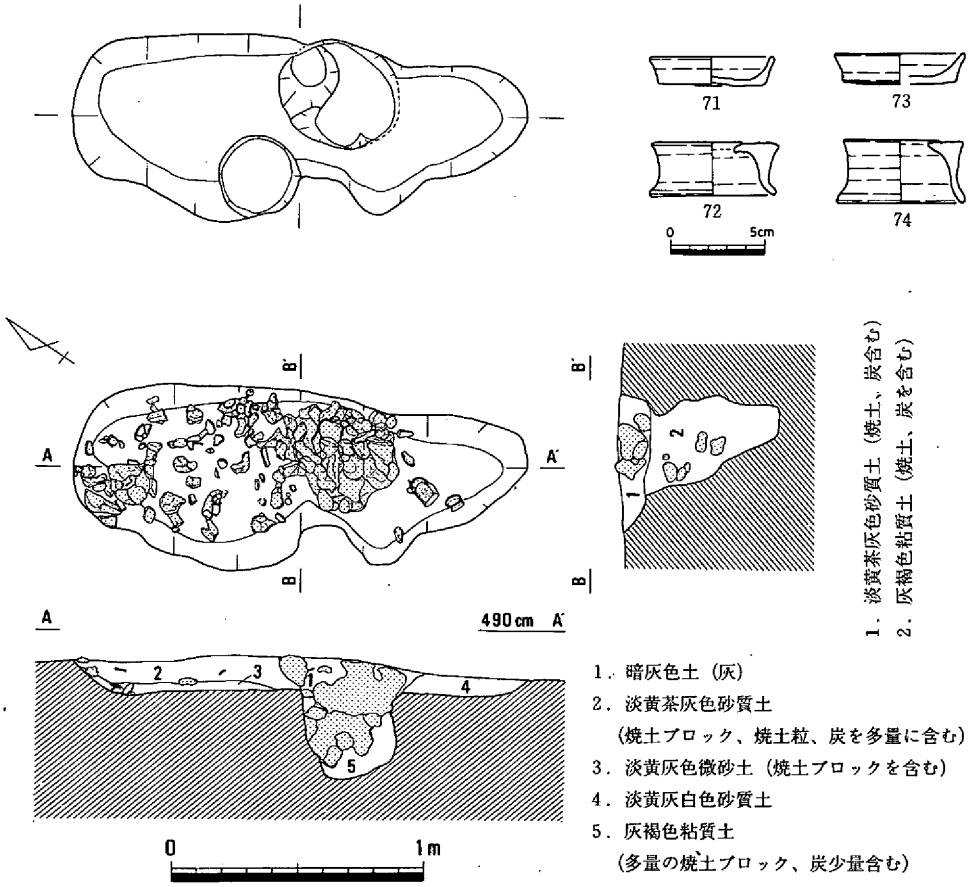
方形を呈する掘り方が認められ、いわゆる二段掘となっている。深さは一段目が約30cm、二段目がさらに20cm程深くなっている。遺物は、土師器の椀**64**、皿**65・66・68・69**、青磁の碗**67**が出土している。椀は無台、皿は２種類ある。青磁碗の見込みには印花文がみられる。

土壙－13（第62図）

５区の北端中央に位置する土壙。規模は180×70cmで中央部がややくびれる不整形な長楕円形を呈し、深さは約15cmであるが、中央部で50cmを測る。土壙内には、大量の炭と焼土塊が入っており、一部には炉壁片と思われるものが存在した。遺物は、土師器の皿**71・72**と上部が開孔する脚台**73・74**が出土している。

土壙－14（第63図・図版38－１、２）

土壙－13の東隣りに位置する。北側は未調査であるが、規模118×88cmの長楕円形を呈し、深さは15cmを測る。埋土には、大量の焼土塊と炭が認められ、なかには、炉壁片の一部と思わ

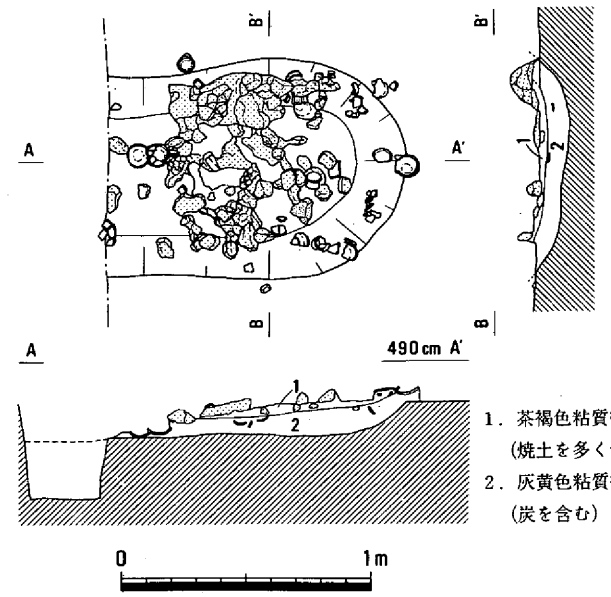


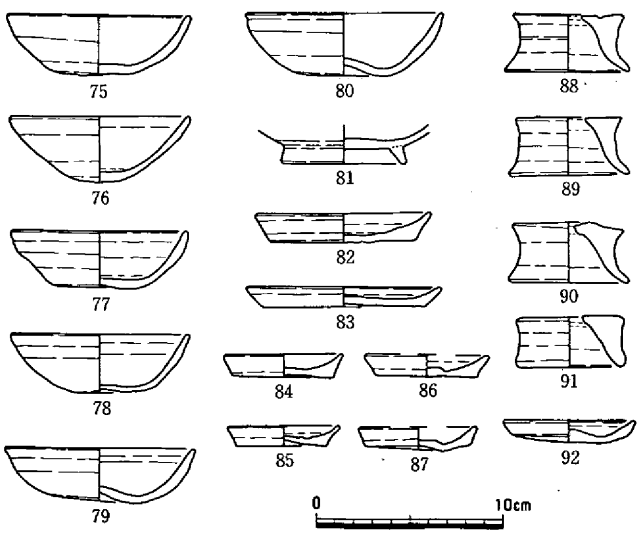
第62図　土壙－13（1/30）・出土遺物

れるものが出土している。遺物は、土師器の椀75～81、皿82～87、92、脚台88～91が出土している。特に椀には無台と付高台の二種類がある。無台は二種類に細分できる。

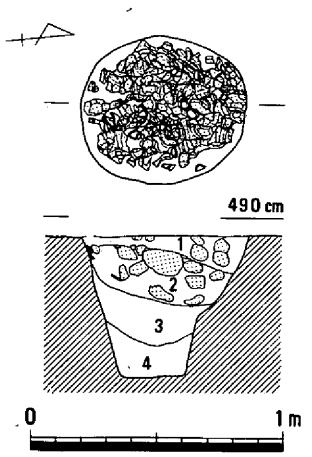
土壙－15（第64図・図版39－１）

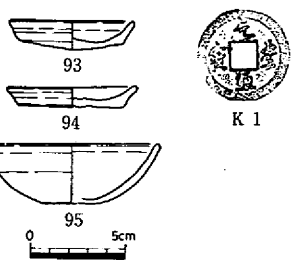
５区の北西に位置する土壙。規模は65×60cmの円形を呈し、深さは57cmを測る。土壙底は平坦である。土壙内には４層に区分される埋土が認められたが、特に１、２層には土壙13、14と同じ焼土が充填されていた。遺物は、土師器の皿93、94、椀95と銭貨（元豊通寶）K1が出土している。





第63図　土壙－14（1/30）・出土遺物





第64図　土壙－15（1/30）・出土遺物

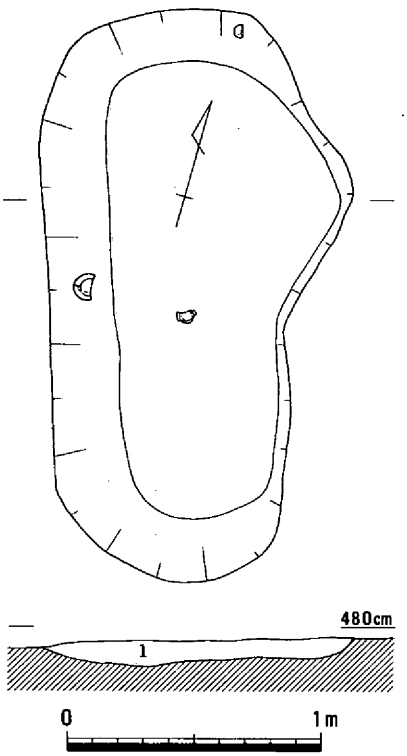
土壙－16（第65図）

土壙－13の北に位置する。規模は、218×121cmの隅丸長方形を呈し、深さは10cmを測る。遺物は、土師器の椀**96～100**、皿**101**、**101**、脚台**103**、亀山焼の甕104、105、備前焼の壺**106**が出土している。

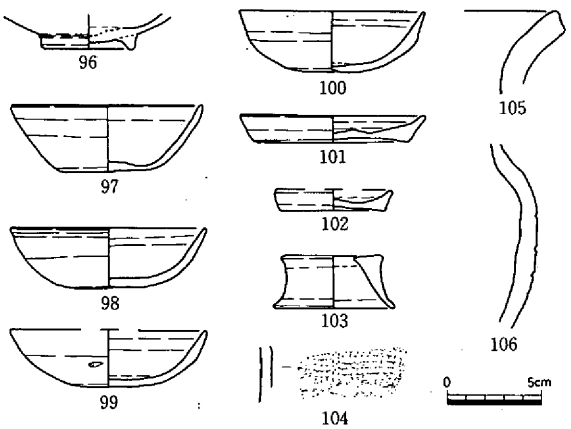
土師器の椀は高台付のもの**96**と無台**97～100**の２種類がみられる。**100**はヘソ椀と呼ばれるものである。

土壙－17（第66図）

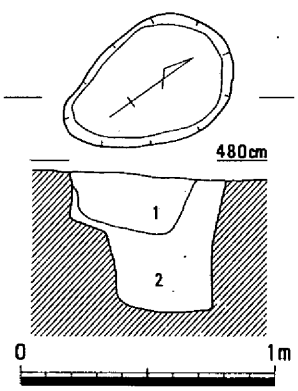
土壙－30を切る土壙である。規模は71×50cmの楕円形を呈し、深さは54cmを測る。底部は平坦である。遺物は土器では土師器の椀**107～109**、脚台**111**、備前焼の壺**110**がある。鉄器はいずれも鉄釘である。

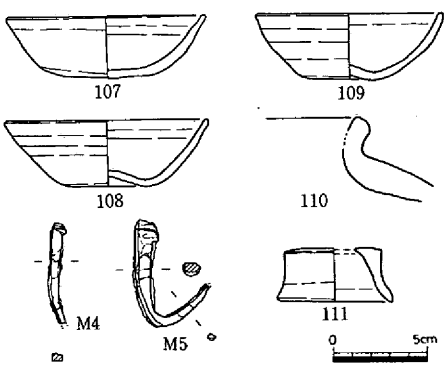


1．淡茶灰色粘質微砂土（マンガン粒子を含む）



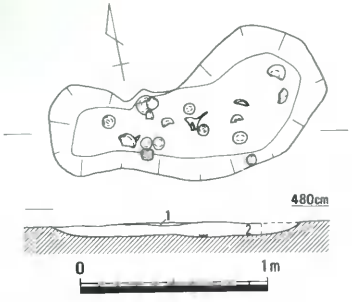
第65図　土壙－16（1/30）・出土遺物





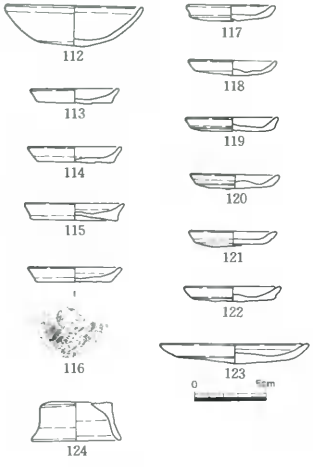
1．淡茶灰色粘質微砂土（焼土ブロック含む）
2．黒褐色砂質土

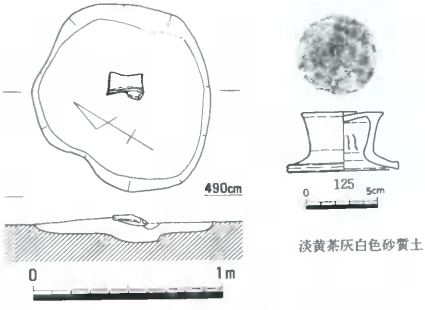
第66図土壙－17（1/30）・出土遺物



1．淡暗黄灰褐色粘質土
2．淡暗黄灰褐色粘質土（焼土、炭を含む）

第67図　土壙－18（1/30）・出土遺物





淡黄茶灰白色砂質土

第68図　土壙－19（1/30）・出土遺物

土壙－18（第67図・図版39－２）

５区の南東、土壙－35の上層にある土壙。規模は150×60cmの長楕円形を呈し、深さは８cmである。遺物は、土師器の椀**112**、皿**113～123**、脚台**124**がある。皿は小型**113～122**と中型123の２種類に細分が可能である。

土壙－19（第68図）

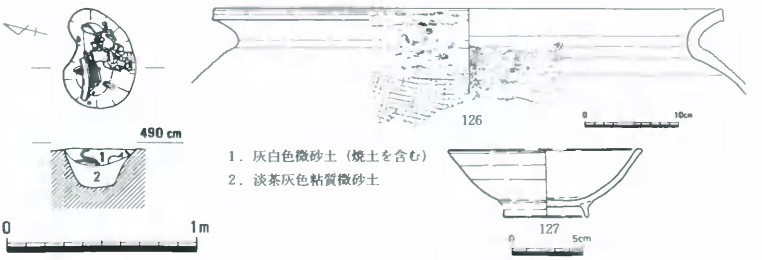
５区の北西に位置する土壙。規模は106×94cmのほぼ円形を呈し、深さは10cmを測る。遺物は１点出土している。**125**は鉢型もしくは脚台となるものである。口径は7.8cm、器高4.2cmを測る。底部には糸切り痕跡がみられる。

土壙－20（第69図）

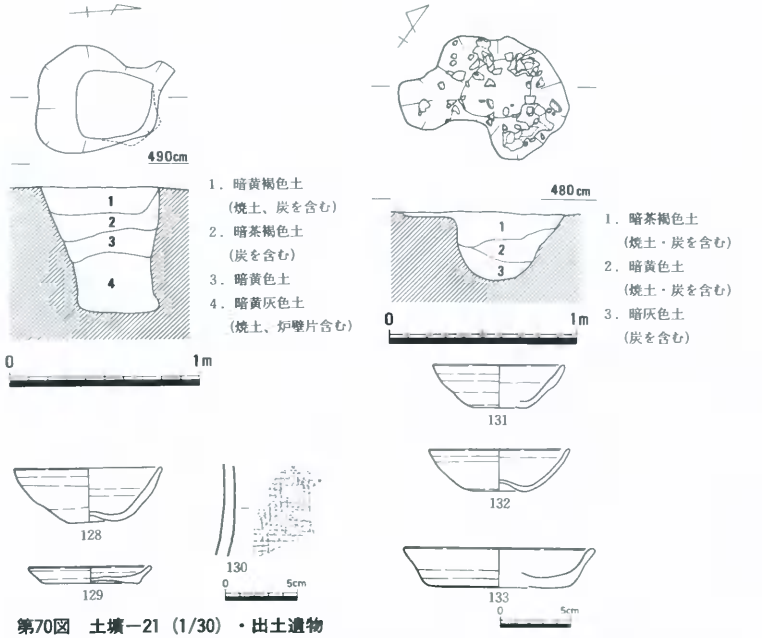
土壙－21の西に位置する土壙である。規模は54×38cmの楕円形を呈し、深さは21cmを測る。埋土は２層に大別されるが、上層に小円、角礫とともに遺物が出土している。**126**は亀山焼の大甕である。口径53.6cmを測り、外面には格子目タタキ、内面には青海波がみられる。**127**は土師器の椀である。口径13.25cm、高台径5.8cm、器高4.9cmを測る。高台は比較的にしっかりした方形に近いものである。

土壙－21（第70図）

土壙規模は65×58㎝の隅丸方形を呈し、深さは66㎝を測る。埋土は大きく４層に区分される。遺物は、土師器の椀128、皿129、亀山焼の甕胴部片が出土している。128はヘソ椀である。



第69図　土壙－20（1/30）・出土遺物



第70図　土壙－21（1/30）・出土遺物

第71図　土壙－22（1/30）・出土遺物

土壙－22（第71図）

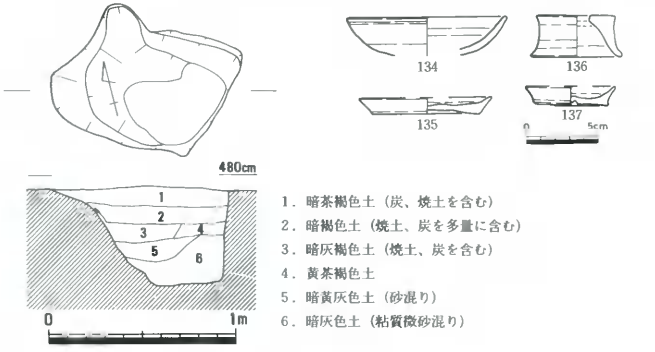
５区の北東に位置する。規模は89×66㎝の不整円形を呈し、深さは36㎝を測る。埋土は３層に区分されるが、１層では焼土塊、炭が出土した。遺物は、土師器の椀**134**、**135**、皿**136**がある。

土壙－23（第72図）

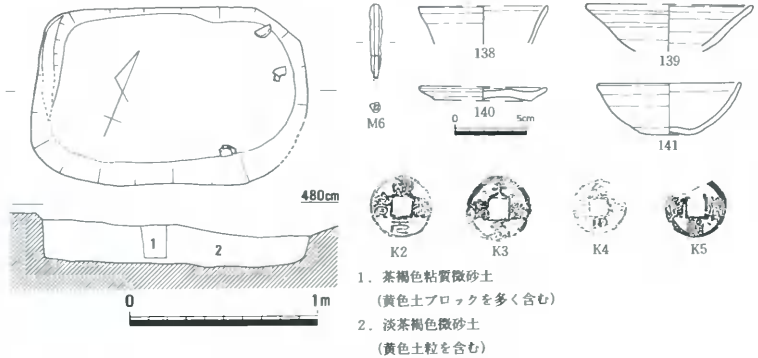
土壙－22の南に位置する。規模は80×76㎝の菱形を呈し、深さは52㎝を測る。遺物は、土師器の椀134、皿**135**、**137**、脚台**136**が出土している。

土壙－24（第73図）

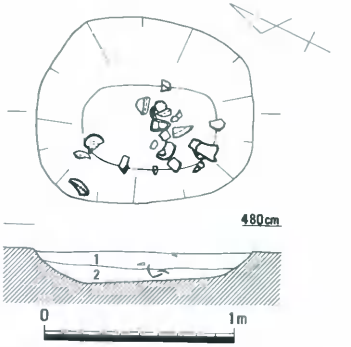
５区の南東端に位置する。規模は144×94㎝の長方形を呈し、深さは20㎝を測る。遺物は、白磁の皿**138**、土師器の椀139、141、皿140、鉄釘**M6**、銭貨**K2～５**が出土している。土壙墓か？

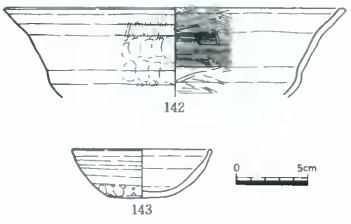


第72図　土壙－23（1/30）・出土遺物

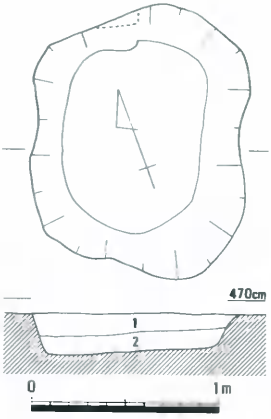


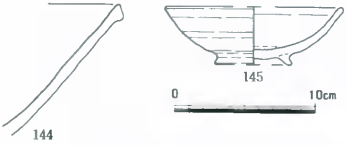
第73図　土壙－24（1/30）・出土遺物





第74図　土壙－25（1/30）・出土遺物





第75図　土壙－26（1/30）・出土遺物

土壙－25（第74図）

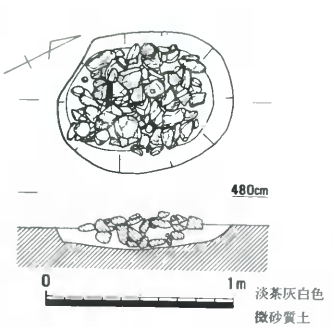
5区の南東に位置する。規模は114×100cmの隅丸方形を呈し、深さは16cmを測る。遺物は底面で出土している。154は土師器の鍋、155は椀である。底部付近には指頭圧痕がみられる。

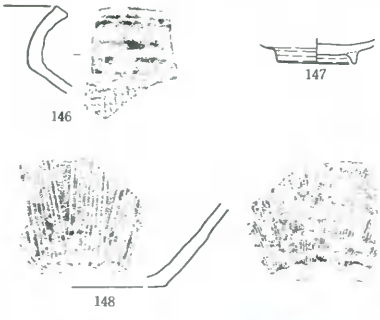
土壙－26（第75図）

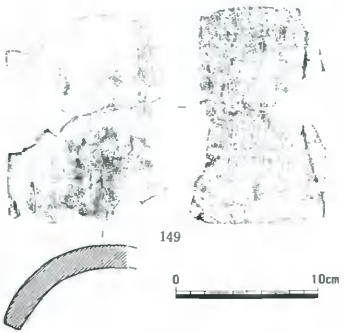
5区の南に位置する。規模は148×104cmの隅丸方形を呈し、深さは20cmを測る。遺物は、東播系の須恵器であるこね鉢**144**と土師器の椀**145**が出土している。**144**は口径が不明であるが、器高は9.4cmを測る。**145**は口径12.2cm、器高4.1cm、高台径5.2cmを測る。

土壙－27（第76図・図版39－3）

5区の南東、溝13の上層で検出された遺構である。規模は94×74cmの楕円形を呈し、深さは16cmを測る。土壙内には10cm前後の礫が積石のように認められた。遺物はこの礫とともに出土した。**146**は亀山焼の甕、**148**は擂鉢、**147**は土師器の椀、**149**は丸瓦である。



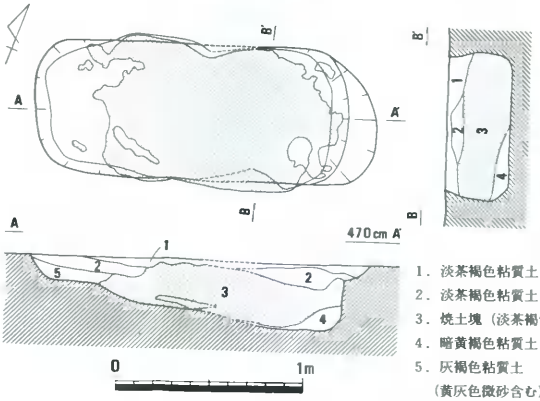




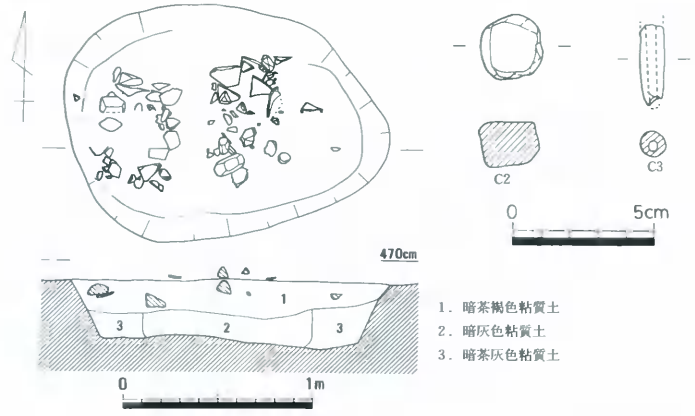
第76図　土壙－27（1/30）・出土遺物

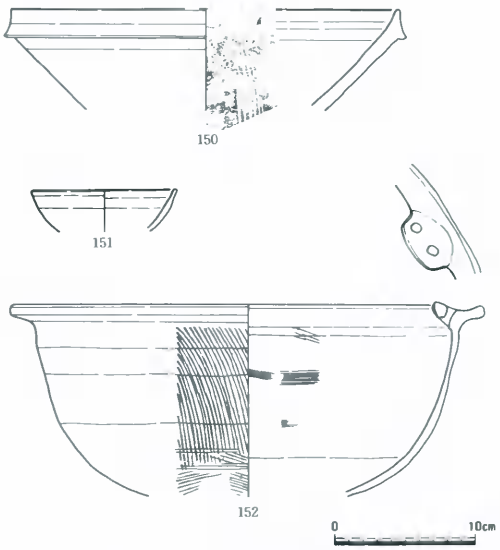
土壙－28（第77図）

５区のほぼ中央部に位置する。溝12の上層で検出された遺構である。規模は180×75cmの隅丸長方形を呈し、深さは33cmを測る。埋土は５層に区分される。特に３層に大量の焼土、炭がみられた。焼土、炭を廃棄した土壙と思われる。



第77図　土壙－28（1/30）





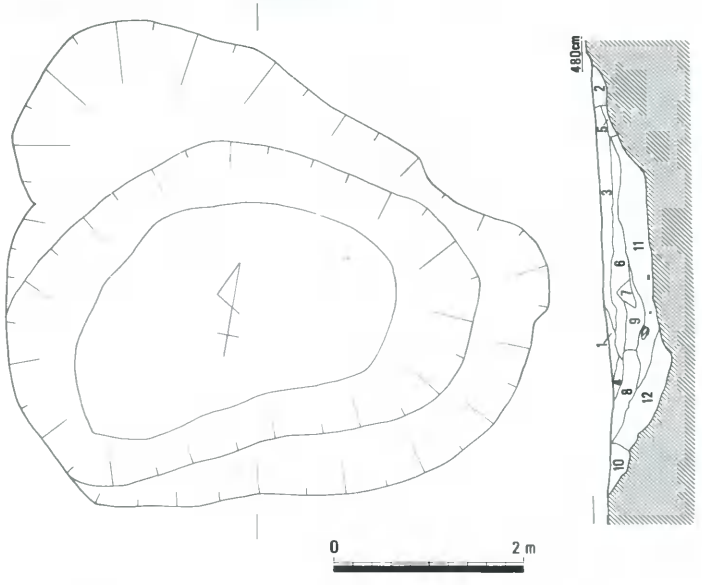
第78図　土壙－29（1/30）・出土遺物

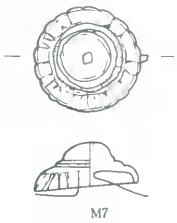
土壙－29（第78図）

5区のほぼ中央部に位置し、遺跡の西側をめぐる溝13の上層で検出された土壙。土壙の規模は174×112㎝の楕円形を呈し、深さは30㎝を測る。掘方は垂直に近く、底面は平坦である。埋土は3層に区分されるが、1層において小円、角礫の出土がみられた。遺物は各種出土している。**C2**は円板型土製品である。径2.2㎝、厚さ1.4㎝、重さ8.7ｇを測る。**C3**は土錘である。両端が欠損している。現存長は2.7㎝、幅0.9㎝、重さ2ｇを測る。**150**は備前焼の擂鉢である。内面には6条が1単位のカキメが認められる。**151**は土師器の椀、**152**は内耳のある鍋である。外面にはススが付着している。

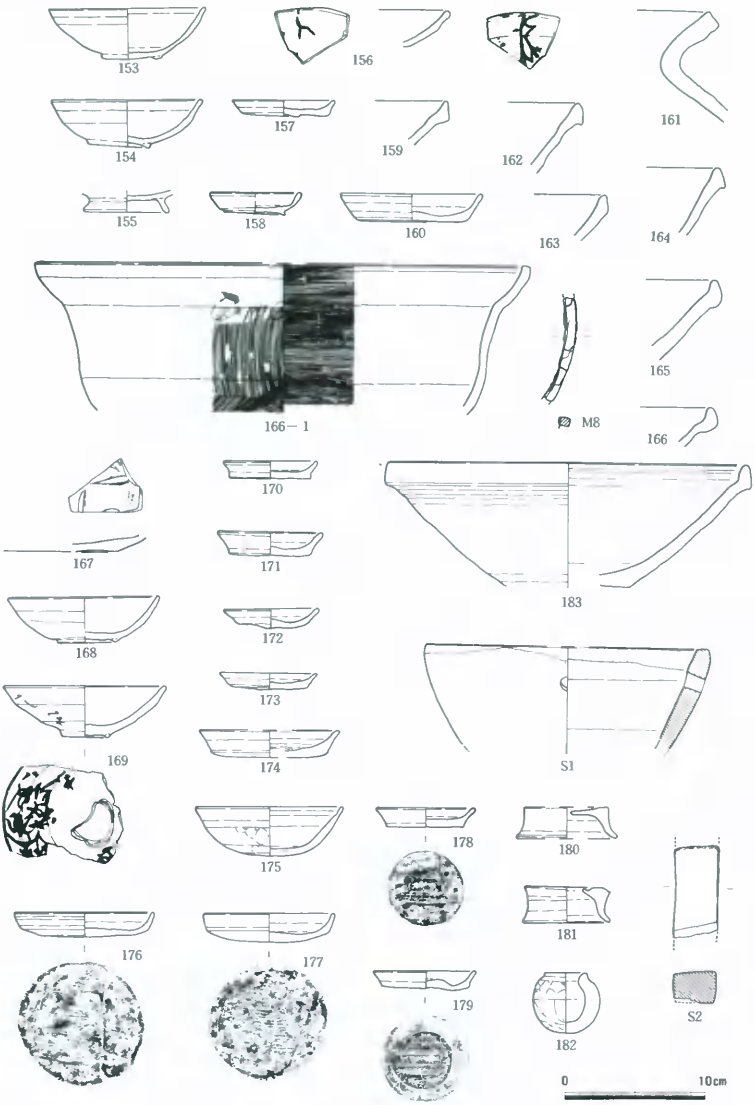
土壙－30（第79、80図・図版40－１、２）

５区の北側、ほぼ中央部に位置する。規模は580×570cmで不整形な楕円形を呈し、深さは65cmを測り、本調査区で最も大きな土壙である。埋土はレンズ状に堆積している。遺物は上、下層に大別して取り上げている。上層では、土師器の椀**153～156**、皿**158**、**160**、亀山焼の甕**161**、東播系のこね鉢**159**、**162～166**が出土している。**156**の内外面には意味不明の墨書がみられる。下層では、青磁の皿**167**、土師器の椀**168**、**169**、**172**、皿**170～174**、**176～179**、脚台**180**、





第79図　土壙－30（1/30）・出土遺物



第80図　土壙－30　出土遺物（153～166－1・M8　上層・167～182・S1・S2　下層）

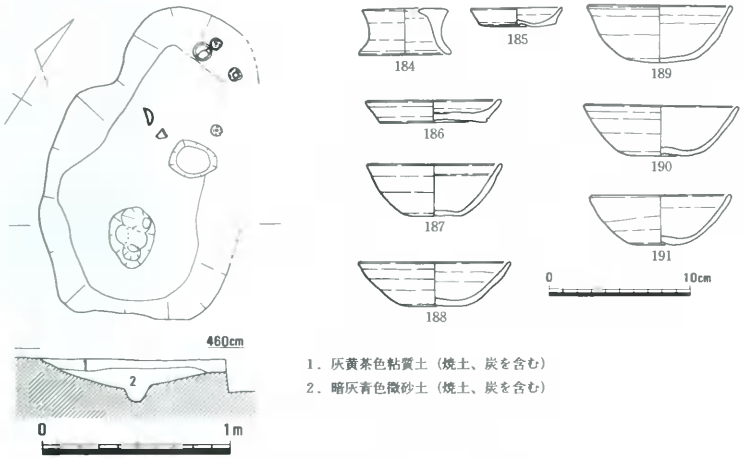
181、手づくね土器182、亀山焼の擂鉢183、滑石製の鍋S1、砥石S2、青銅製の飾り金具M7が出土している。169は口径11.2㎝、器高3.7㎝、高台径3.7㎝を測る、高台の断面はやや偏平となる。なお、体部外面には意味不明の墨書がみられる。滑石製の鍋は、口径20㎝、器高7.2㎝を測る。口縁直下には鍔が付かない桶状のものである。折損しているが、口縁端から2.2㎝下に直径１㎝の穿孔がみられることから、加工し、転用されたと思われる。なお、口縁の内外面には削痕が明瞭に観察できる。

土壙－31（第81図）

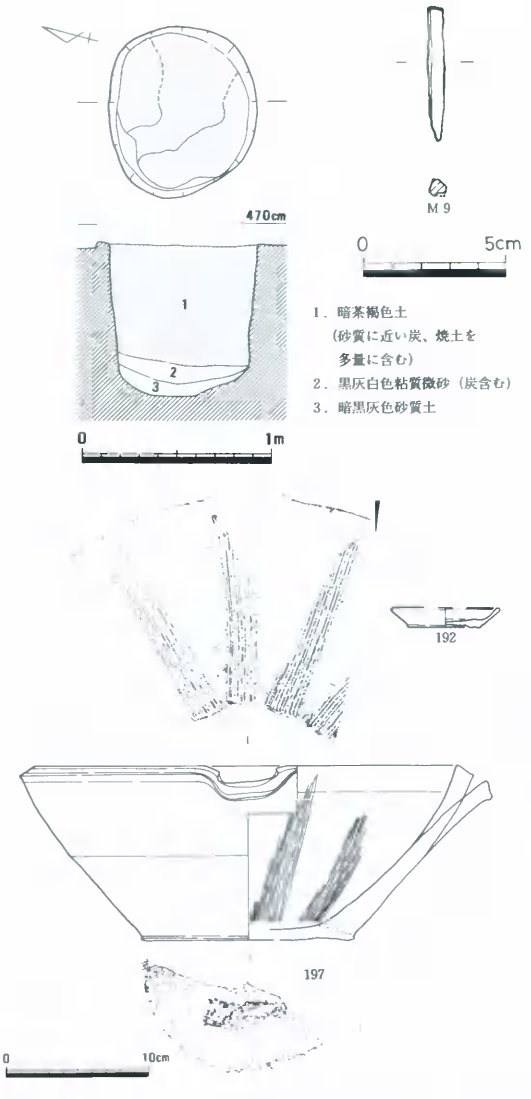
５区の北東に位置する土壙。規模は123×110㎝の隅丸長方形を呈し、深さは16㎝を測る。遺構はトレンチ、柱穴によって切られている。埋土は２層の堆積がみられた。遺物は土師器の脚台184、皿185、186、椀187～191が出土している。椀はいずれも無台であるが、一部にヘソ椀190、191となるものが含まれる。

土壙－32（第82図・図版41－１、２）

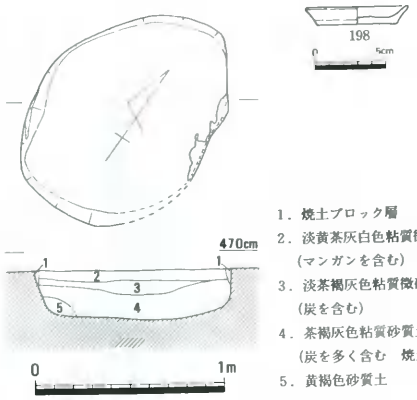
５区の北東に位置する土壙。規模は90×78㎝の円形を呈し、深さは80㎝を測る。掘方は垂直で、底面はほぼ平坦である。埋土は３層に区分されるが、とくに１層では炭がほとんどであり、その中に少量の焼土塊が含まれるという状況を呈していた。遺物は、鉄釘M9、備前焼の擂鉢197、瓦質の壺196、土師器の皿192、椀193、194、脚台195がある。197は口径29.6㎝、器高12.4㎝、



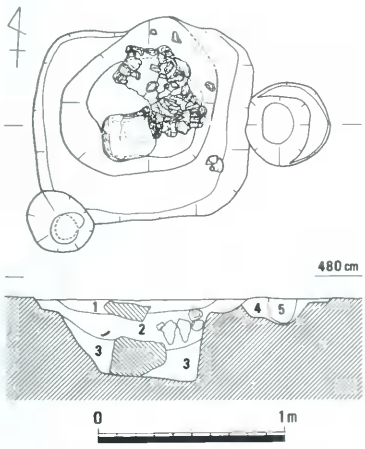
第81図　土壙－31（1/30）・出土遺物



第82図　土壙－32（1/30）・出土遺物



第83図　土壙－33（1/30）・出土遺物



第84図　土壙－34（1/30）

底径14.2cmを測り、内面には10条が一単位のカキメがみられる。土師器の椀には高台をもつもの**193**と無台のもの**194**の二種類が存在する。

土壙－33（第83図）

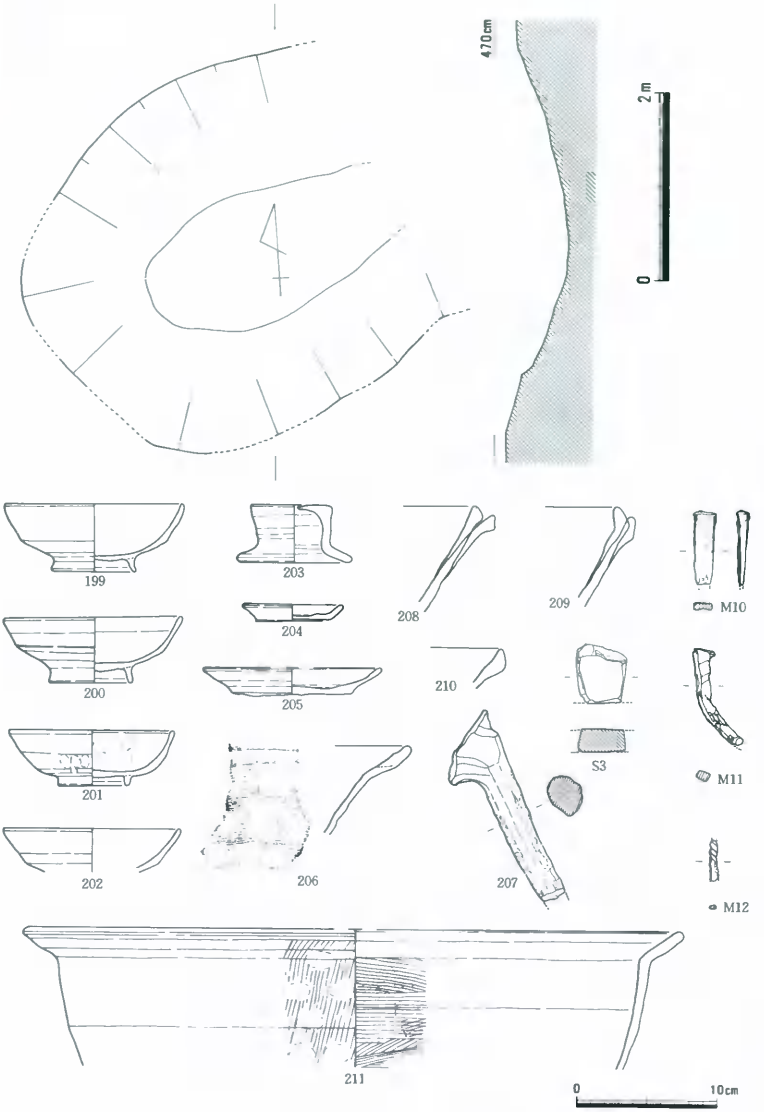
5区の中央部からやや北に位置する土壙である。規模は128×95cmの楕円形を呈し、深さは28cmを測る。土壙の東、西肩部は赤褐色を呈し、焼成を受けていることが認められた。遺物は、土師器の皿**198**が1点出土している。口径は7cm、底径5.5cm、器高1.25cmを測る。

土壙－34（第84図）

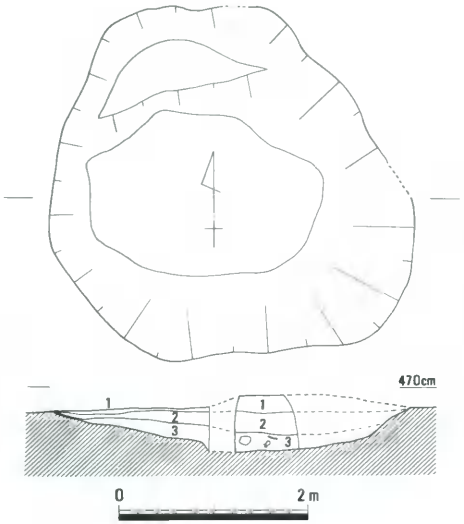
5区の西側に位置する土壙である。規模は114×100cmの方形を呈し、深さは43cmを測る。掘方は二段掘りになっている。埋土は3層に区分され、2層には焼土ブロックが多量に混入していた。また、角礫にも焼けた痕跡が一部にみられた。出土遺物はない。

土壙－35（第85図）

5区の南東に位置する土壙。規模は一部不明であるが、400×400cmで、隅丸方形を呈し、深さは60cmを測る。遺物は、土師器の椀**199～202**、脚台**203**、皿204、205、鍋**206**、**207**、**211**、東播系のこね鉢**208～210**、砥石**S3**、鉄製品**M10～12**がある。**M10**は楔、**M11**、**12**は釘である。椀は口径



第85図　土壙－35（1/30）・出土遺物



1．淡黄茶灰白色粘質微砂土（炭、焼土を含む）
2．淡青暗灰白色粘質微砂土（炭、土器を含む）
3．暗灰色粘質砂質土（淡青黄色砂をブロック状に含む）

第86図　土壙－36（1/30）

12cm前後、高台径5.6cm、器高4.5cm前後を測るものである。

土壙－36（第86、87図）

土壙－35の南に位置する。規模は370×385cmの不整円形を呈し、深さは57cmを測る。埋土は３層に区分される。遺物は、土師器の鍋**212～214**、**220**、椀**215**、**216**、脚台**218**、杯身**217**、**219**、亀山焼の甕**221**、擂鉢**222**が出土している。**215**は口径10.2cm、高台径3.4cm、器高3.6cmを測り、高台断面は三角形を呈する。**217**は高台を有する杯身である。高台断面は三角形を呈し、器壁は肉厚である。

土壙－37（第88図）

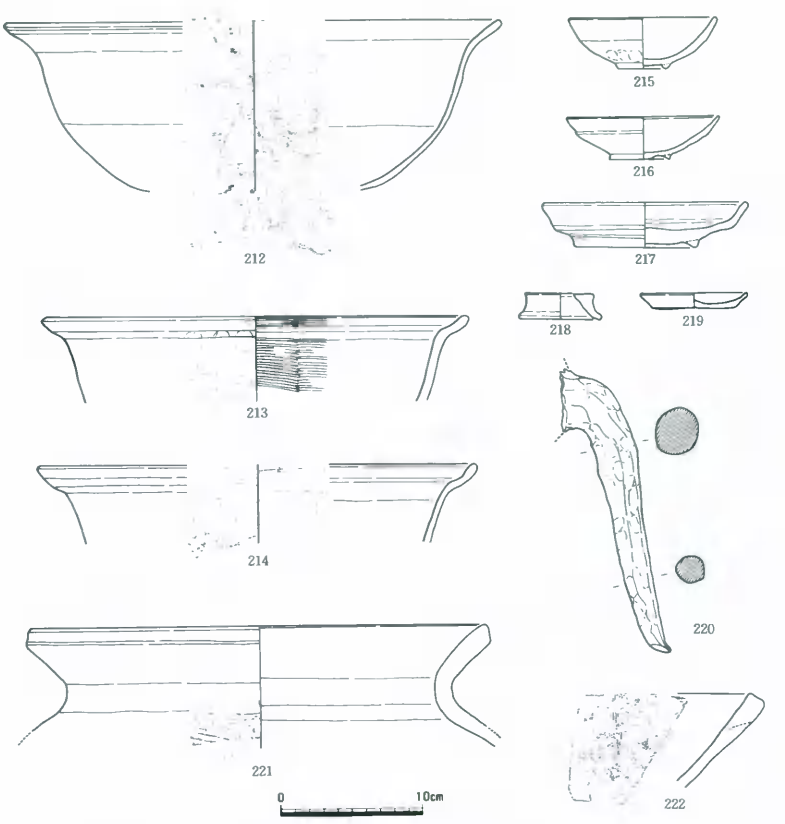
５区の北端中央部近くに位置する。他の遺構に切られているため、正確な規模は不明であるが、290×180cm程の長楕円形を呈し、深さは40cmを測る。遺物は、土師器の椀**224**、杯身**223**、皿226、東播系のこね鉢**225**が出土している。**223**は口径14.1cm、高台径8.4cm、器高3.6cmを測り、高台の断面は三角形を呈する。このタイプの土器出土量は少なく、土壙－36以外では出土していない。

土壙－38（第89図）

５区の北東端に近い位置で検出された遺構である。規模は86×90cmの円形を呈し、深さは76cmを測る。埋土は７層に区分され、３～７層は微砂、細砂層となっており、出水するため恐らく、井戸として機能した可能性がある。遺物は１層で、土師器の皿**227～229**が出土している。**227**は口径9.3cm、底径5.7cm、器高1.35cmを測り、底部には板目痕がみられる。

土壙－39（第90図）

５区の北西、土壙－19の東隣に位置する。規模は83×80cmの円形を呈し、深さは65cmを測る。埋土は５層に区分されるが、３層では焼土塊が多量に含まれていた。遺物は、土師器の椀**230**、皿**231**、脚台**232**が出土している。**230**は口径10.4cm、器高3.6cm、底径3.7cmを測る。いわゆるヘソ椀と呼ばれるものである。**231**の底部には、内から外に向けての穿孔がある。



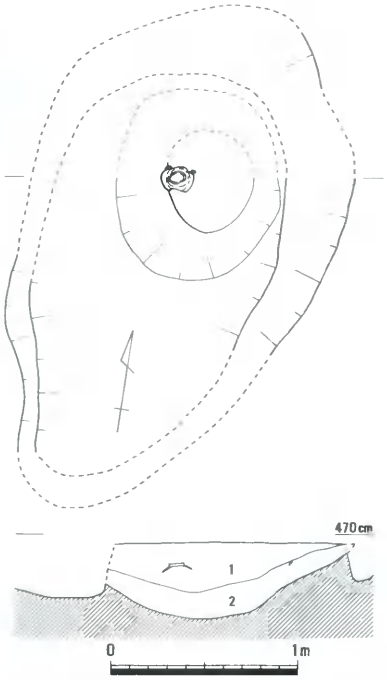
第87図　土壙－36　出土遺物

土壙－40（第91図）

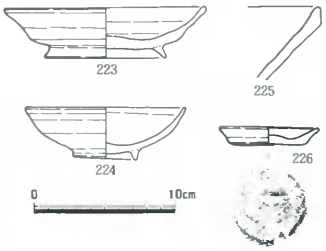
5区の北東に位置する。規模は110×92㎝の隅丸方形を呈し、深さは15㎝を測る。遺物は、亀山焼の甕**233**、東播系のこね鉢**234**、土師器の脚台**235**、皿**236**などが出土している。

土壙－41（第92図）

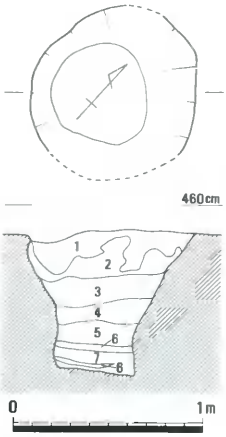
土壙－40の北に位置する。規模は95×54㎝の楕円形を呈し、深さは12㎝を測る。遺物は、土師器の脚台**237**、椀**238**、皿**239**が出土している。**238**は口径8.6㎝、底径2.5㎝、器高2.95㎝のヘソ椀である。**239**は口径6.2㎝、底径5.2㎝、器高1.4㎝を測り、底部には板目痕がある。



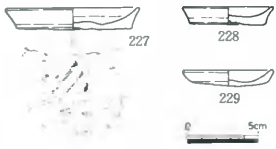
1．黄茶褐灰白色微砂質土（炭、焼土、マンガン粒子を含む）
2．暗灰色粘質微砂土（炭を含む　一部黄色土ブロックを含む）



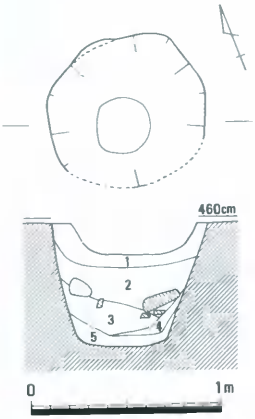
第88図　土壙－37（1/30）・出土遺物



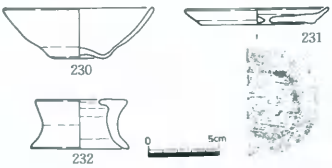
1．暗灰色粘質土（炭を含む）
2．黄褐色土（微砂混り土）（固い）
3．灰青色土（微砂）
4．淡青褐灰白色粘質微砂土
5．灰色土（細砂）
6．淡褐灰白色粗細砂土
（褐色土は粘質土を含む）
7．灰色土（細砂）



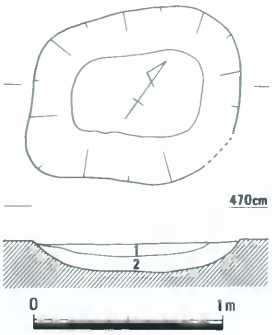
第89図　土壙－38（1/30）・出土遺物



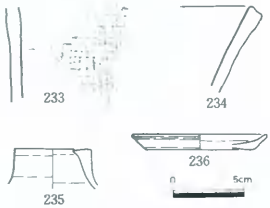
1．暗灰色粘質微砂土
（黄灰白色微砂を
わずかに含む）
2．暗灰色粘質土塊
3．暗茶褐色粘質微砂土
（焼土塊多数）
4．黒色土（灰）
5．黒灰白色微砂
（灰色粘土塊を含む）



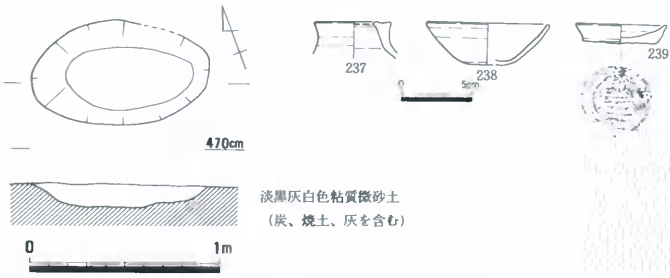
第90図　土壙－39（1/30）・出土遺物



1．淡黄茶灰白色粘質微砂土（炭を含む）
2．暗灰白色粘質砂質土

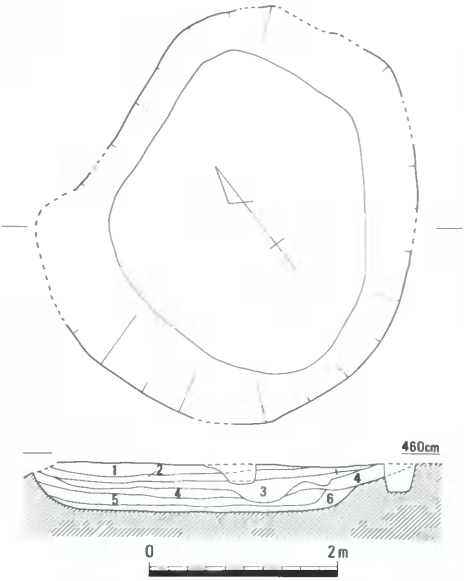


第91図　土壙－40（1/30）・出土遺物

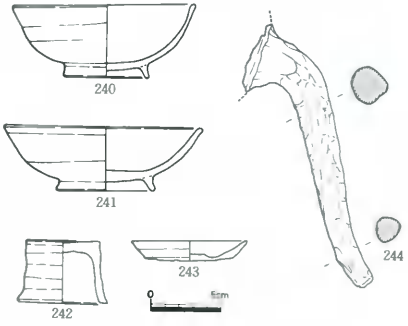


淡黒灰白色粘質微砂土
（炭、焼土、灰を含む）

第92図　土壙－41（1/30）・出土遺物



1．暗黒灰色粘質微砂土（炭、焼土を含む）
2．黒灰色粘質微砂土（炭を含む）
3．暗灰褐白色粘質微砂土（炭を含む）
4．暗灰白色粘質砂質土
5．灰白色粘質砂質土
6．淡黄灰褐色粘質微砂土



第93図　土壙－42（1/30）・出土遺物

土壙－42（第93図）

５区の西端に位置する。規模は溝等に切られているため正確ではないが、440×350㎝の楕円形を呈し、深さは50㎝を測る。埋土は６層に区分される。遺物は、土師器の椀**240～242**、脚台**242**、皿**243**、鍋**244**などが出土している。**242**は上部に開孔がみられず、器高も比較的に高い。

土壙－43（第94図・図版42－１）

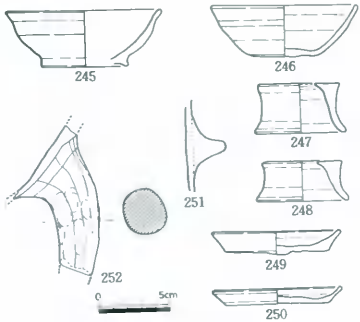
５区の北端、やや東側に位置する。規模は270×100㎝程の長楕円形を呈し、深さは30㎝を測る。遺物は底面とその周辺で出土している。器種は、土師器の椀**245**、**246**、脚台**247**、**248**、皿**249**、**250**、鍋**251**、**252**などがある。**245**は口径10.6㎝、高台径5.7㎝、器高４㎝を測り、内面に重ね焼痕がある。

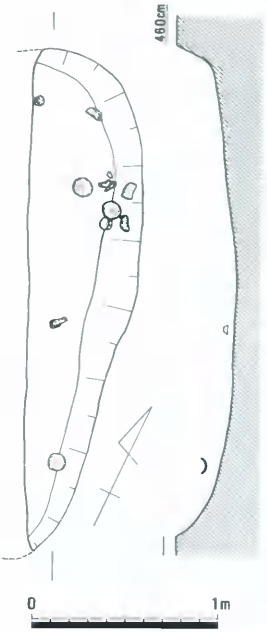
土壙－44（第95図）

土壙－41の東に位置する。規模は280×125㎝の長楕円形を呈し、深さは22㎝を測る。遺物は、底面において、亀山焼の甕**253**、備前焼の擂鉢**259**、土師器の椀**254**、**255**、皿**256**、**257**、脚台**258**が出土している。**259**は口径27.8㎝、現存器高8.9㎝を測る。内面には10条が１単位のカキメ痕がある。

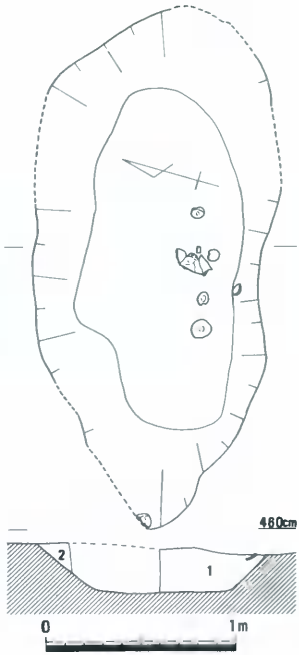
土壙－45（第96図）

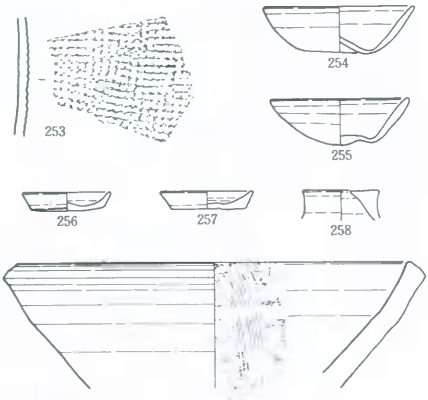
５区の東端、やや南に位置する。





第94図　土壙－43（1/30）・出土遺物





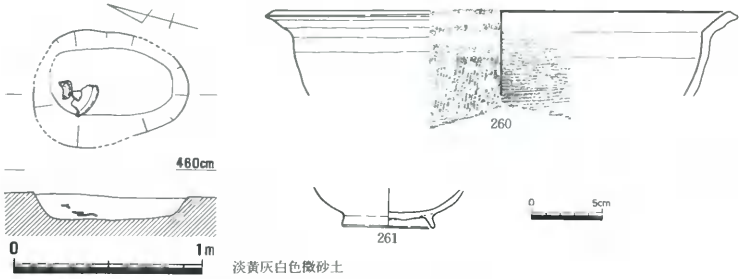
第95図　土壙－44（1/30）・出土遺物

1．黒灰色土
（焼土・灰・炭・土器含む）
2．黒灰色土

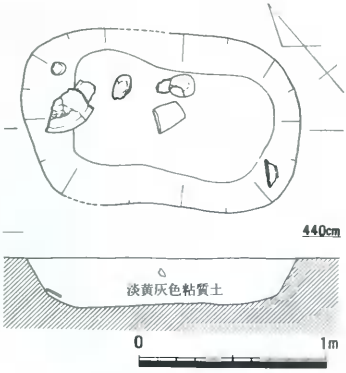
規模は82×62cmの楕円形を呈し、深さは12cmを測る。遺物は、土師器の鍋**260**、椀**261**などが出土している。

土壙－46（第97、98図）

5区の南東端に位置する。規模は150×92cmの長方形を呈し、深さは25cmを測る。遺物は、土師器の鍋**262**、椀**263～265**、皿**266**と丸瓦が出土している。椀の平均数値は、口径13.6cm、高台径5.6cm、器高4.7cmを測る。高台の断面はしっかりとしており、三角形になる前段階のもの



第96図　土壙－45（1/30）・出土遺物

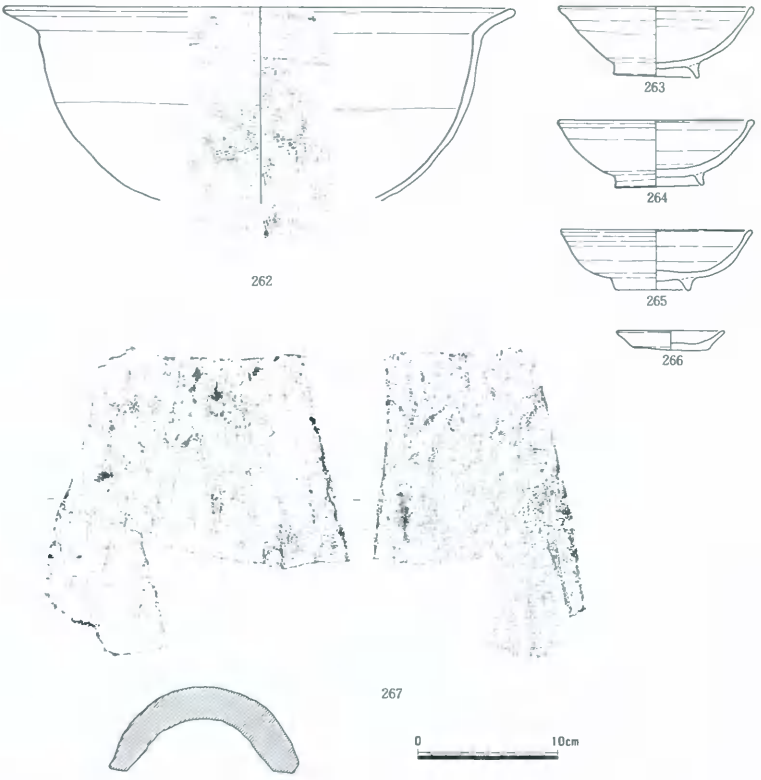


第97図　土壙－46（1/30）

である。色調は内外面とも灰白色を呈する。

土壙－47（第99図）

5の北東端近くに位置する。規模は85×80cmの円形を呈し、深さは13cmを測る。遺構は、他の土壙や柱穴によって切られ、残存状態は良好ではなかった。遺物は、土師器の椀**268～281**、皿**282～284**が出土している。特に椀は全て無台のヘソ椀と呼ばれるものである。椀の平均数値は、口径10.3cm、底径4.5cm、器高3.40cmを測るが、口径の最小は10cm、最大は10.8cmで、底径の最小は4.0cm、最大は4.8cmである。器高の最小は3.2cm、最大は3.6cmとなっている。なお、器壁の内外面には押さえによる指頭圧痕が認められる。皿の平均数値は、口径6.7cm、底径5.75cm、器高1.25cmである。底部は**282**、**283**がヘラ

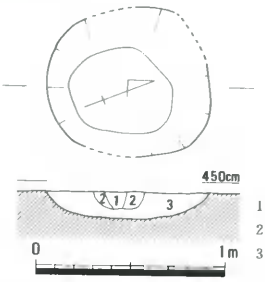


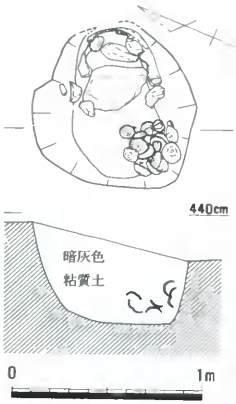
第98図　土壙－46出土遺物

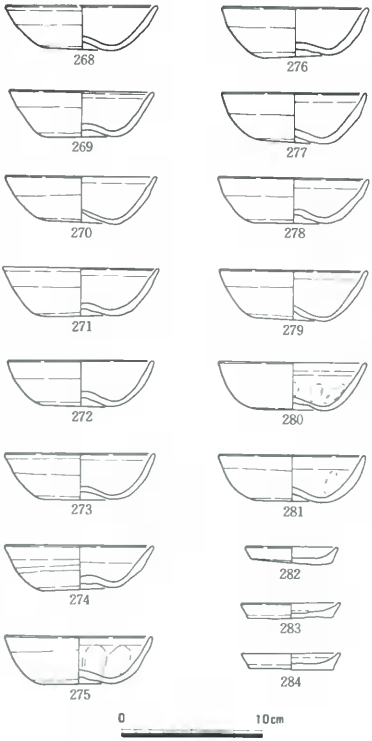
切り後の板目痕跡がみられるもので、**284**はヘラ切りのみである。内外面はヨコナデである。

土壙－48（第100図・図版42－２）

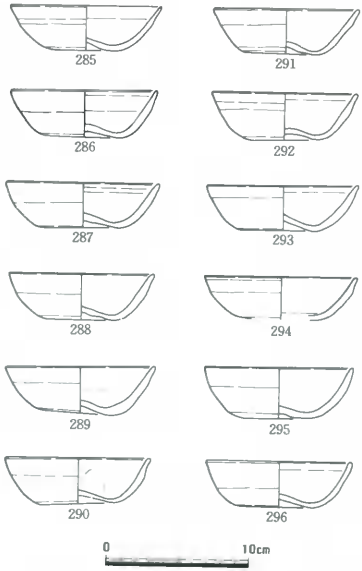
５区の東端に位置する土壙である。規模は90×85㎝の楕円形を呈し、深さは45㎝を測る。埋土は１層のみで、暗灰色粘質土が堆積していた。土壙底には、25×37×23㎝の角礫を中心に獣骨（牛の下顎骨、上腕骨）と小角礫を周囲に置き、南には土師器の椀15個体分を積み重ねるように置いていた。これらの出土状況からみて、第１に推察できることは、本遺構が屋敷地内に存在することから、建物地鎮の可能性を想定することができることである。もし、建物地鎮であるならば、角礫は根石として使用されていたであろう。第２に推察できることは、屋敷を区







第99図　土壙－47（1/30）・出土遺物

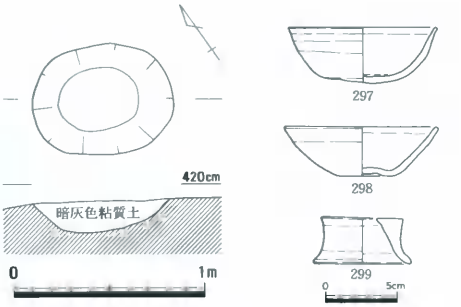


第100図　土壙－48（1/30）・出土遺物

画する溝の下層で検出されていることから、水利に関する祭祀遺構の可能性も想定できる。類例の増加が待たれる遺構である。遺物は、土師器の椀285～296がある。椀はいずれも無台で、ヘソ椀と呼ばれるものである。椀の口径は最大で10.6cm、最少は10.0cm、底径は最大で5.0cm、最少は4.1cm、器高は最大で3.6cm、最少は3.05cmである。その平均数値は、口径で10.23cm、底径4.64cm、器高3.33cmである。器壁の内面調節は、ハケ状工具によるヨコナデを行うものとヨコナデだけの2種類がある。色調は内外面とも黄橙色、灰黄色を呈する。

土壙－49（第101図）

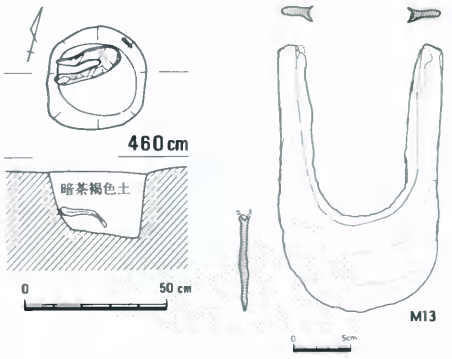
5区の北東に位置する。規模は75×60cmの円形を呈し、深さは17cmを測る。遺物は、土師器の椀297、298と脚台299が出土している。椀は無台であるが、ヘソ椀298になるものが存在する。脚台は上部に穿孔が認められる。この遺跡では一般的なものである。



第101図　土壙－49（1/30）・出土遺物

土壙－50（第102図）

5区のほぼ中央部、溝13の肩部において検出された遺構である。規模は36×35cmの円形を呈し、深さは22cmを測る。遺物は、鉄製の鋤先M13が出土している。この鋤先は、土壙底から約6cm程上の位置で、壁寄りにほぼ水平状態で出土した。この遺構は、他の柱穴掘方と同規模であるため、調査当時から柱穴内出土遺物との評価を与えてきたが、何らかの祭祀遺構の可能性も考えられるため、ここでは一応、土壙内出土ということにしておきたい。鋤先の全長は23.5cm、刃先幅13.3cm、耳幅14.0cmを測る。重量は443.58ｇである。刃先は丸先である。　（松本）



第102図　土壙－50（1/20）・出土遺物

土壙－51（第103図）

建物－27の北西部に位置する長辺260㎝、短辺100㎝の隅丸長方形の平面形で東が浅く、西に深い。二段堀りを呈し、深さは25㎝～45㎝と徐々に深くなっている土壙であり、土壙墓とは言い難い遺構である。

土壙－52（第104図）

調査区中央やや面よりに位置する歪な隅丸方形状の平面形態で長さ142㎝と幅105㎝で、深さは中央部が最も深く20㎝を測ることができた。

土壙－53（第105図・図版43－１）

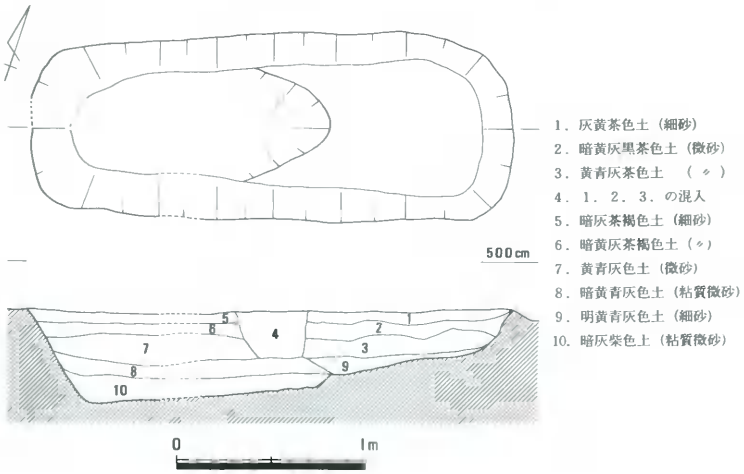
建物－28・29の南東に位置する円形の掘り方を持ち擂鉢状に掘りくぼめた土壙に、甕をいれ河原石をつめ込んだものである。墓とは言い難い。中世の遺構であろう。

土壙－54（第106図）

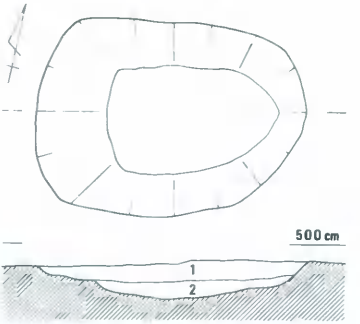
調査区東端に近くで南半分を側溝で切られてはいるが、ほぼ120㎝角の隅丸方形の平面形態で、検出面からの深さは20㎝を測り、中央部がやや低くなっているが本来は水平面を呈していたものであろう。遺物は小皿と北東隅床面直上において検出されている。近世の土壙墓と思われるものである。

土壙－55（第107図）

土壙－54の西に位置する歪な隅丸長方形（旧）と隅丸方形（新）との重複した土壙である。

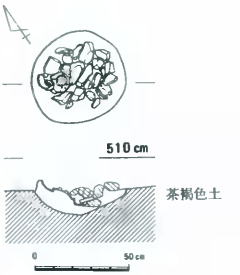


第103図　土壙－51（1/30）

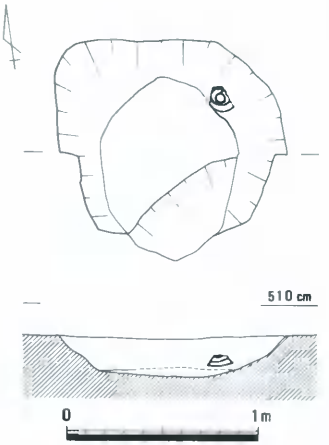


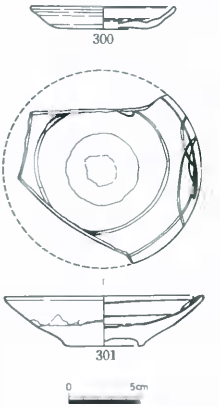
1．暗黄茶色土（粗砂）
2．黄黒茶色土（細砂）

第104図　土壙－52（1/30）



第105図　土壙－53（1/30）





第106図　土壙－54（1/30）・出土遺物

隅丸方形状の土壙内北西部分にのみ甕片がはいった形で検出されているが、他には破片すら発見されなかった。壙の形態から墓壙とも思われるがさだかではない。

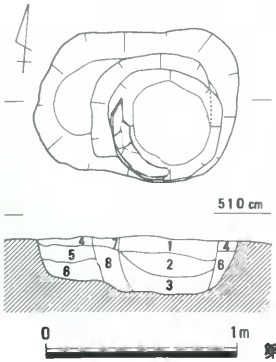
土壙－56（第108図）

土壙－55の南西で、微高地端部で歪な長楕円の重複した土壙であり、方向は南北の向きで墓

壙状の掘り方を呈し、床面は凸凹があり、丸く掘られている。中程より南で礫の埋没もあることから、この土壙は墓壙とも考えられる。（中世中～近世の時期であろう）

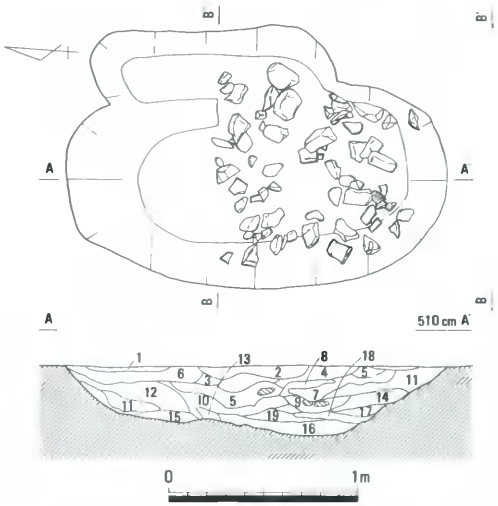
土壙－57（第109図）

建物－31の東辺、土壙－58の南東にあたり、約110㎝×90㎝、深さ40㎝を測る若干歪な隅丸方形を呈する土壙である。



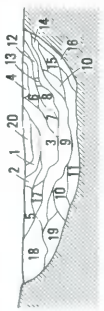
1．明灰色砂質土
2．灰黄色砂質土
3．黄灰褐色砂質土（微砂多い）
4．１よりやや暗い
5．４にマンガン分少し多く含む
6．黄灰色砂質土
7．灰褐色砂質土
8．暗灰黄色砂質土

第107図　土壙－55（1/30）

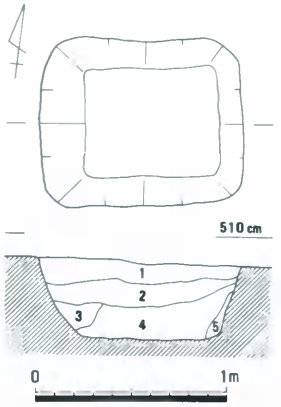


1．暗黄灰茶色土　（細砂）
2．黄灰茶色土　（〃）
3．黄灰色土　（〃）
4．暗青灰黄色土　（〃）
5．暗青灰黄茶色土（〃）
6．明黄灰色土　（〃）
7．暗青灰黄色土　（〃）
8．明黄灰色土　（粘砂）
9．暗黄灰色土　（〃）
10．灰茶色土（細砂）
11．暗黄灰褐色土（細砂）
12．明黄灰褐色土（粘質をおびた微砂）
13．明黄灰色土（細砂）
14．青灰色土　（〃）
15．青灰黄茶色土（粘質おびる）
16．黄灰色土　（細砂）
17．暗灰茶褐色土（〃）
18．暗灰色土　（〃）
19．黄灰色土（粗砂）

第108図　土壙－56（1/30）

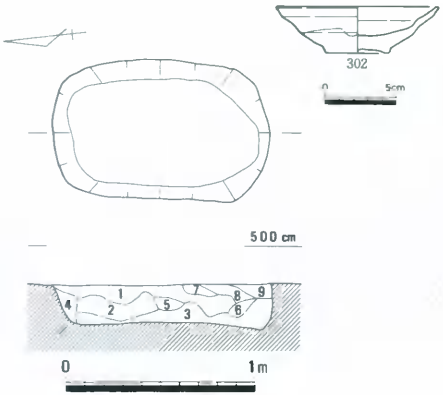


1．明黄灰茶色土（粒砂）
2．〃　（細砂）
3．暗黄灰茶色土（〃）
4．黄灰茶褐色土（〃）
5．明黄灰色土　（〃）
6．黄灰色土　（〃）
7．明黄色土　（〃）
8．暗灰褐色土　（細砂）
9．暗黄灰褐色土（〃）
10．明黄灰色土（〃）
11．暗青灰色土　（細砂）
12．黄灰茶褐色土（〃）
13．明灰柴色土　（微砂）
14．明黄灰柴色土（細砂）
15．暗黄青灰色土（〃）
16．暗青灰色土　（〃）
17．暗黄灰茶褐色土（〃）
18．黄灰茶褐色土（〃）
19．暗青灰褐色土（〃）
20．明黄茶色土　（〃）



1．暗黄灰茶褐色土
2．暗茶淡灰褐色土
3．淡黄灰暗茶色土
4．灰色土
5．暗灰色土

第109図　土壙－57（1/30）



1．灰色砂質土
2．淡褐色粘質土
3．褐色粘質土
4．黄褐色粘質土
5．1にマンガンを多く含む
6．黄色粘質土
7．6に灰色土を含む
8．1と同じで、マンガン分少ない
9．1に黄色土を含む

第110図　土壙－58（1/30）・出土遺物

土壙－58（第110図）

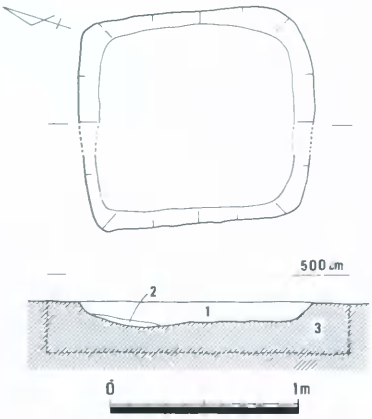
土壙－57の北西に接し南北方向の隅丸長方形を呈する土壙である。115㎝×75㎝、深さは約20㎝を測る形態的にみれば土壙墓と思われるものである。

土壙－59

4a区北東部中世墓－9の南に位置する隅丸長方形と思われる中世の浅い土壙である。

土壙－60（第112図）

建物27の北側で、隅丸長楕円と推定される土壙を切って南西に辺を持ち、北東が丸く終わっている歪な隅丸長方形の形態を示している土壙であり、埋



1．暗灰茶褐色土
2．暗黄茶褐色土
3．茶褐色土

第111図　土壙－61（1/30）

土内には焼土が埋没している。遺物の検出は皆無であるが、中世と思われる。

土壙－61（第111図）

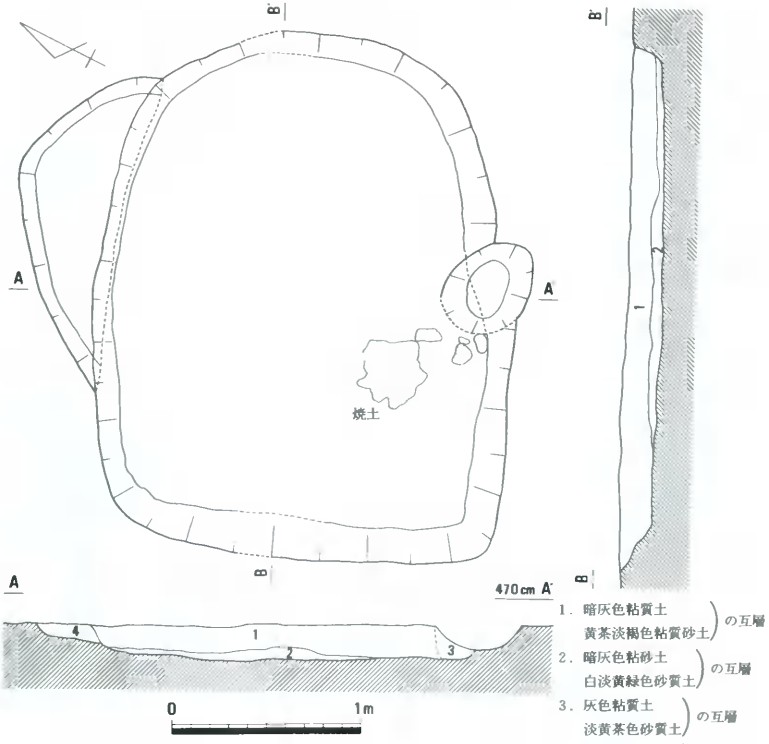
建物29の東にあたり、115㎝×130㎝の歪な隅丸方形の平面形態で、深さは10㎝前後と浅いものである。検出面、形態から近世のものであろう。

土壙－62（第113図）

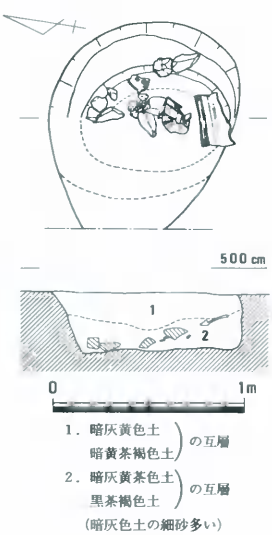
土壙－53の南西約２ｍに位置する径約１ｍと推定される円形で、深さ30㎝を測る土壙である。埋土中には甕片、擂鉢片、石臼片、人頭大の礫等の投入が認められた。出土遺物等から近世の遺構であろう。

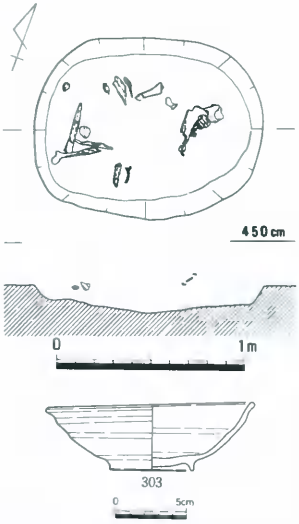
土壙－63（第114図）

建物－28・29の北において検出された動物（牛）の墓壙である。墓壙の形態は胴張りの長楕

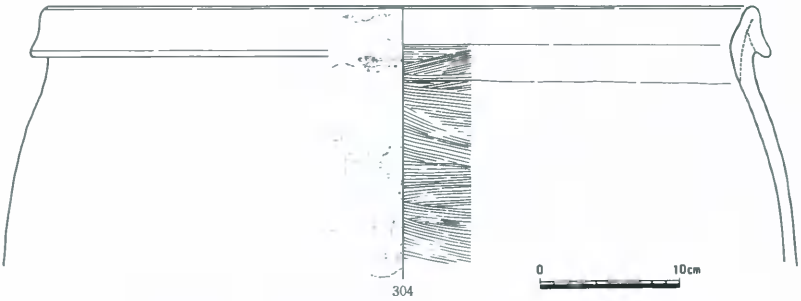


第112図　土壙－60（1/30）





第114図　土壙－63（1/30）・出土遺物

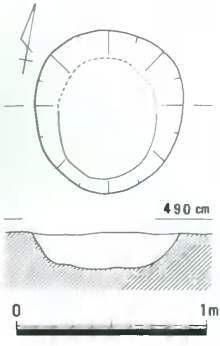


第113図　土壙－62（1/30）・出土遺物

円形を呈するもので、最深部で15cmと残りの悪い土壙である。壙内からは残存状態の悪い馬骨（下顎、後足等）が検出された。埋葬状態は、頭部を東にした状況である。埋土中からは高台付土師器椀が出土している。

土壙－64（第116図）

土壙－65の西に接する土壙で径80～85cmとほぼ円形を呈するもので、深さ20cmを測る擂鉢状の土壙である。



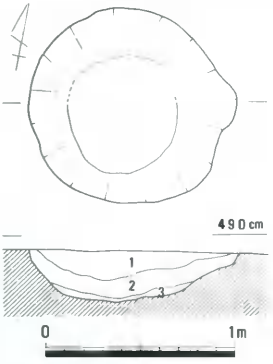
第115図
土壙－64（1/30）

土壙－65（第116図）

土壙－64に接した東て径100㎝のほぼ円形を呈するもので、東側が段状の掘方を示す擂鉢状の土壙である。

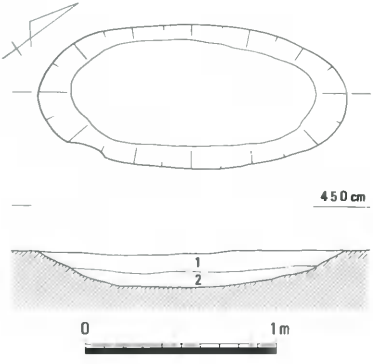
土壙－66（第117図）

調査区南東部に位置する長軸が北東－南西で約160㎝×80㎝の胴張り長楕円形の平面形、深さは中央で約20㎝を測る。埋土中には焼土、炭化物、灰等を含む。伴出遺物は皆無。



1．暗灰黄茶褐色土
2．１と同じで、灰・炭を含む
3．暗灰色土（粗砂）

第116図　土壙－65（1/30）



1．暗茶褐色土
2．黒灰茶褐色土
（1．２には焼土・灰・炭化物を含む）

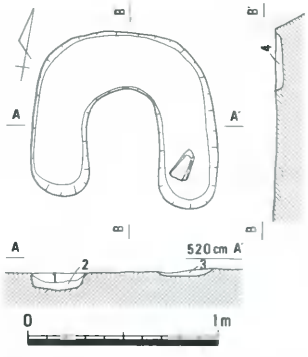
第117図　土壙－66（1/30）

(4)　炉跡

炉跡－１（第118図、図版25－２）

建物－７の北に隣接して検出された馬蹄形に掘り窪めた炉床部分と考えられる遺構である。付属遺構、時代等についても明確に判断し難い遺構である。

（二宮）



1．淡黄色土
（焼土・炭化物を含む）
2．暗黄茶色土
3．１と同じで炭化物なし
4．１と同じで焼土なし

第118図　炉跡－１（1/30）

(5) 中世墓

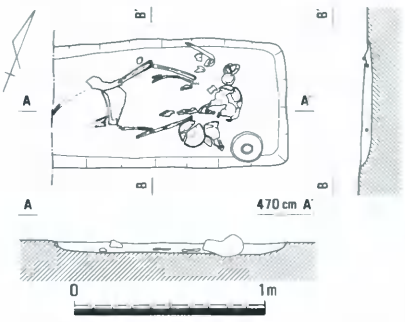
津寺遺跡の土筆山調査区は中世に形成された微高地で、北側は河道に面している。微高地の中央部には、溝で区画された居住区域があり、北側と西側、それに南側は1段低くなっている。微高地から掘立柱建物や土壙とともに、中世墓が多数検出された。

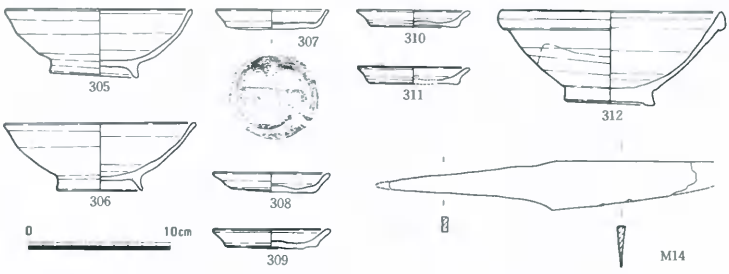
調査前は土筆山一帯は水田となっていたところで、墓地などはまったくみられなかったが、山陽自動車道予定地のほぼ全域にわたって、中世墓が検出されている。中世墓の形状は長方形のものと楕円形のものがあり、箱形の木棺を伴うものと単なる土葬も存在するようである。また、副葬品についても、和鏡や輸入陶磁器、土器、鉄製品を多数伴うものとわずかな土器しか伴わないものなどがある。

中世墓－1（第119図、図版44－1）

微高地の北端部にあり、1A区に位置する。墓壙の平面形は長方形である。西端の一部が調査区の境目になって十分に確認できなかったが、ほぼ全容を知ることができる。墓壙の大きさは、長さ122cm以上、幅67cm、検出面からの深さ7cmを測る。主軸はN69°Eを示している。床面は平坦であるが、木棺については確認できなかった。

墓壙内において、保存状態は良くないが人骨1体を検出した。頭位を東として上向きに埋葬されているが、顔が南向に傾いている。両腕部分は比較的よく残っているが、背骨や助骨などの残りはよくない。脚部は曲げているようである。鑑定によると



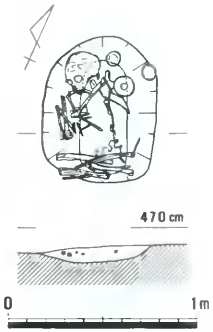


第119図　中世墓－1（1/30）・出土遺物

埋葬人骨は熟年女性である。

副葬品には白磁椀１個、早島式土器の椀２個、土師器の小皿５個、刀子１点がある。白磁椀と早島式土器の椀は頭部の南側に置かれ、土師器の小皿と刀子は頭部の北側に置かれていた。白磁椀だけは少し高い位置にあり、伏せた状態で出土した。時期は鎌倉時代に比定される。

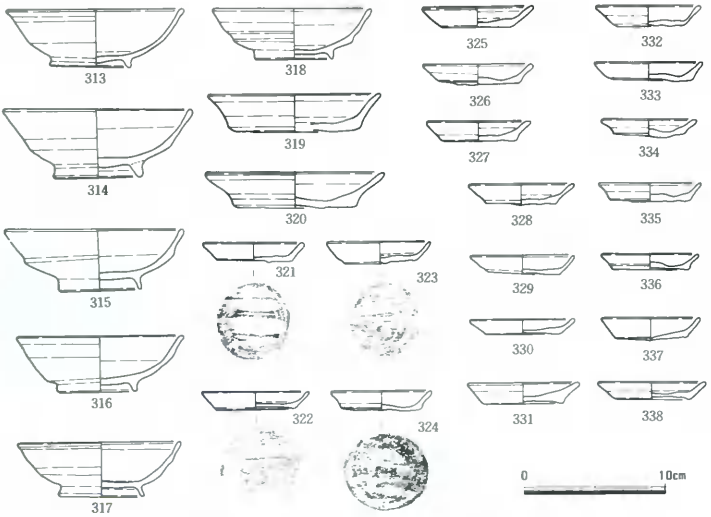
中世墓－２（第120図、図版44－２）



微高地の北端部にあたり、１区に位置する。墓壙の平面形は楕円形を呈する。大きさは、長径78㎝、短径60㎝、検出面からの深さ８㎝を測る。主軸はN24°Wを示している。床面は浅い皿状を呈し、木棺等の痕跡は認められなかった。

墓壙内において、保存状態はよくないが、人骨１体を検出した。頭位を北として、西向きに横臥屈葬されている。手と足は完全に折り曲げられている。鑑定によると成人女性である。

副葬品としては、人骨とほぼ同じ高さで、早島式土器



第120図　中世墓－２（1/30）・出土遺物

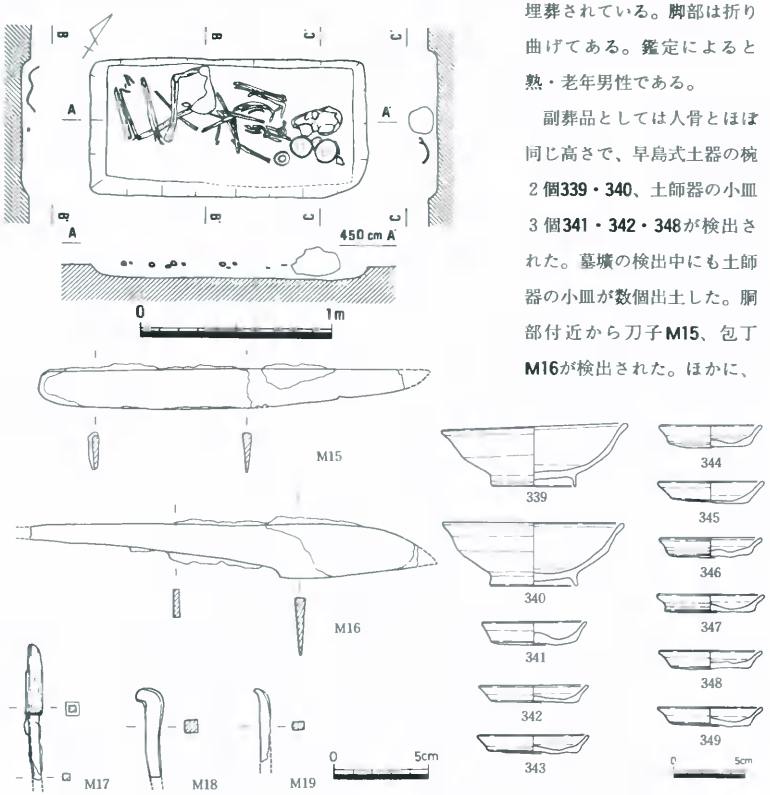
の椀１個**317**、土師器の小皿２個**322・323**が検出された。墓壙の検出中にも、早島式土器の椀、土師器の小皿が多数出土しているので、埋葬後墓壙内へ納めたものと考えられる。時期は鎌倉時代に比定される。

中世墓－３（第121図、図版45－１）

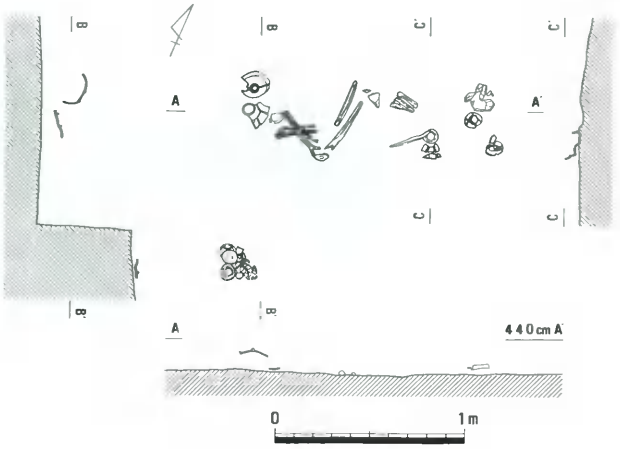
微高地の北端部にあたり、１区に位置する。墓壙の平面形は長方形を呈する。大きさは、長さ144cm、幅73cm、検出面からの深さ８cmを測る。主軸はN57°Eを示している。床面は水平で、鉄釘が検出されることから木棺を使用していたことが確認される。

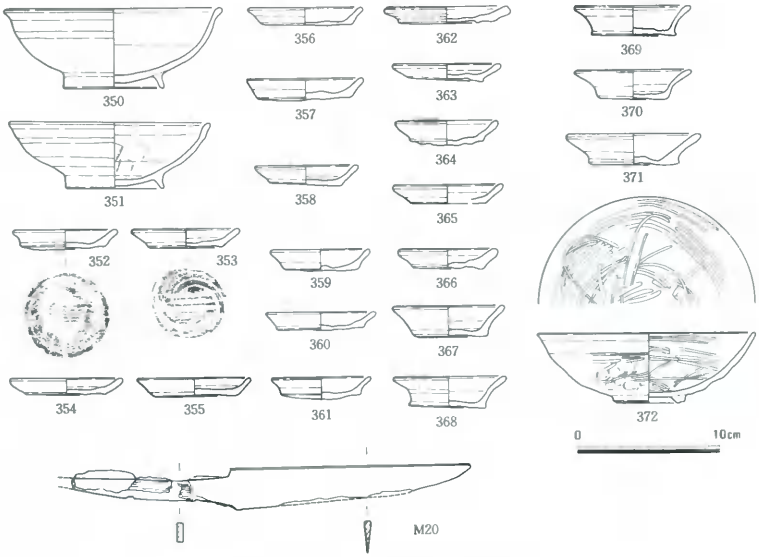
墓壙内においては、保存状態はよくないが、人骨１体を検出した。頭位を東として上向きに埋葬されている。脚部は折り曲げてある。鑑定によると熟・老年男性である。

副葬品としては人骨とほぼ同じ高さで、早島式土器の椀２個**339・340**、土師器の小皿３個**341・342・348**が検出された。墓壙の検出中にも土師器の小皿が数個出土した。胴部付近から刀子**M15**、包丁**M16**が検出された。ほかに、



第121図　中世墓－３（1/30）・出土遺物





第122図　中世墓－４（1/30）・出土遺物

鉄製の錐**M17**が１点ある。先は断面正方形を呈し、把には木質が残っている。時期は鎌倉時代に比定される。

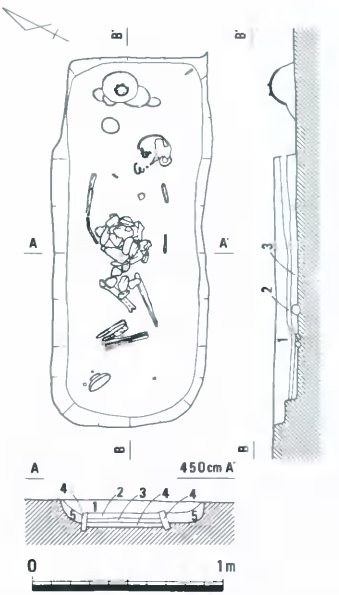
中世墓－４（第122図、図版44－２）

微高地の北端部にあたり、１区に位置する。中世の包含層を掘り下げ中にはじめて人骨を確認したもので、墓壙を確認できなかった。人骨や遺物の配置状況からすると長方形の墓壙が掘られていたものと推測される。また木棺の使用も考えられる。人骨や遺物配置から主軸を推定するとN67°Eを示している。

保存状態はよくないが、人骨１体を検出した。頭位を東とし、左側臥葬にされている。脚部は小さく折り曲げられている。鑑定によると成人（女性）である。

副葬品としては人骨とほぼ同じ高さで、瓦器椀、早島式土器の椀、土師器の小皿、小型鉢、刀子が出土している。頭部の南側からは、小型鉢４個**367～369・371**、脚部付近からは瓦器椀**372**、早島式土器の椀**350**、小皿**355**が検出された。刀**M20**は胴部付近出土である。

脚部から南へ約40cm寄った地点において、人骨より約50cm高い位置から土師器の小皿**353・354・358・363・364・370**、小型鉢**368**がまとまって検出された。位置関係からすると埋葬後に置かれたものと推定される。なお、**351**早島式土器の椀は頭部から北東へ１ｍの地点で出土したもので、前の小皿とほぼ同じ高さであり、本遺構に関係する可能性がある。時期は鎌倉時代に比定される。

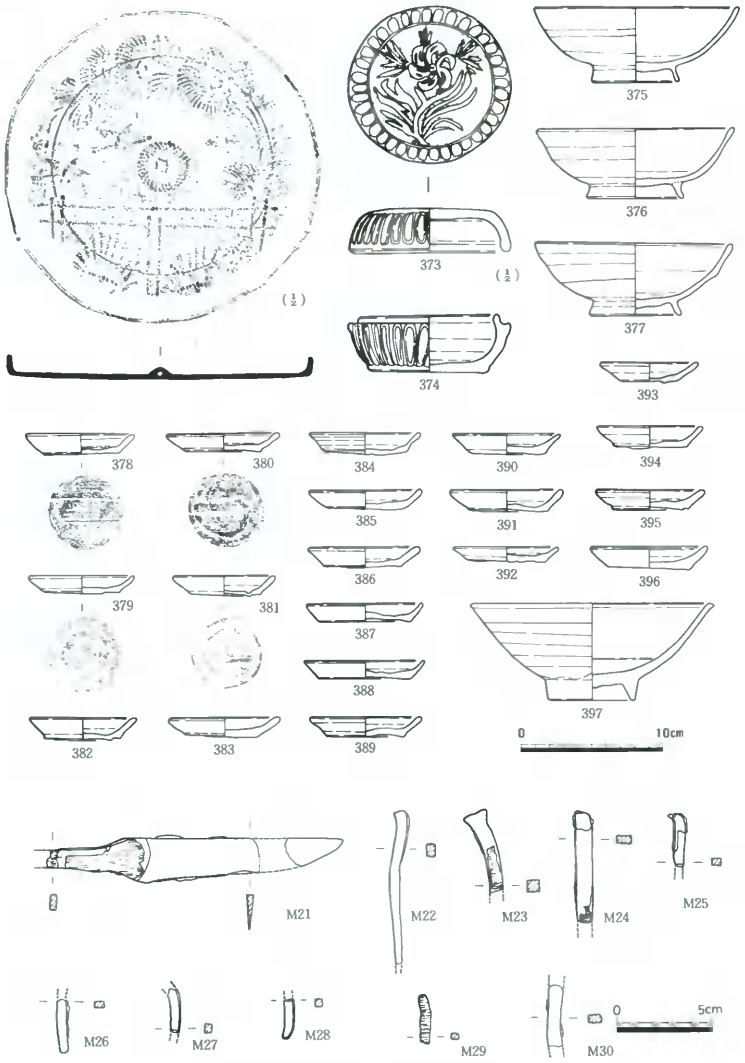


第123図　中世墓－５（1/30）

中世墓－５（第123、124図、図版46－１）

微高地の北端部に近いが、中世墓１～４よりは南にあり、２区に位置する。墓壙の平面形は長方形を呈する。大きさは長さ191cm、幅82cm、検出面からの深さ16cmを測る。主軸はN62°Eを示している。床面は水平で、木棺の痕跡からかろうじて確認される。鉄釘も人骨を囲むような位置から検出された。木棺痕跡の大きさは、長さ143cm、幅40cmである。

木棺痕跡内において、保存状態はよく



第124図　中世墓－５　出土遺物

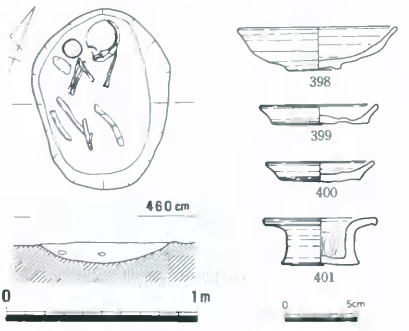
ないが、人骨１体を検出した。頭位を東とし、左側臥葬にされている。脚部は小さく折り曲げられている。頭部は少し移動しているようで、南側に寄って北へ顔を向けている。鑑定によると成人（女性）である。

木棺痕跡の内側にある副葬品には、和鏡と白磁合子、刀子がある。和鏡は頭部の北側に鏡面を上にして置かれていた。背面には布の痕跡がよく残存していたことから、布に包んで副葬されていたことがわかる。保存状態は良好である。背面には上部に菊の花を配し、１対の鳥が飛んでいて、下部には垣根と草を描いている。菊花双鳥文鏡と呼ぶことができよう。和鏡の縁は直角に折り曲げたようになっていて、鏡面はわずかに凸面を呈する。鏡の直径は107.7㎜、鈕高4.0㎜、縁高6.1㎜、鏡面の厚さ1.5㎜を測る。

白磁の合子は頭骨の下から検出された。蓋をした状態で出土したが、内部からは何も検出されなかった。蓋は２つに割れ、身も口縁部に小さな欠損部が見られるが、優品である。蓋の上面に花の文様があり、側面に花弁状の文様が配されている。内外面とも釉がかかっている。大きさは、口径5.4㎝、器高1.6㎝を測る。身は小さな口縁部が高ち上がり、受部は少し外へ開く。底部は平底で、小さく突出する。側面には花弁状の文様を配している。受部を除く内外面に釉がかかっている。大きさは、口径4.7㎝、底径4.0㎝、高さ2.1㎝を測る。色調はいずれも明緑灰色を呈する。

刀子は胴部付近で検出された。一部欠損しているが、把に木質も少し残っている。

東部の東側において、木棺痕跡と掘り方の間には白磁椀、早島式土器の椀、土師器の小皿が重ねて置かれていた。白磁椀**397**は最も上にあり、伏せて置かれていた。完存し、優品である。白磁椀の下からは早島式土器の椀**375・377**、土師器の小皿**378・380・381**が出土した。脚部の西側においても、木棺痕跡と掘り方の間から早島式土器の椀**376**が出土した。墓壙の検出中や掘方内からは土師器の小皿が出土した。時期は鎌倉時代に比定される。



第125図　中世墓－６（1/30）・出土遺物

中世墓－６（第125図、図版46－２）

微高地の北端部に近く、中世墓－５の北９ｍにあり、２区に位置する。墓壙の平面形は楕円形を呈する。大きさは、長径95㎝、短径72㎝、検出面からの深さ11㎝を測る。主軸はN22°Wを示している。床面は皿状に湾曲している。

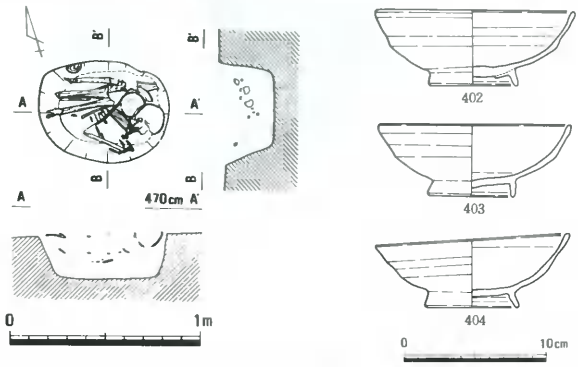
墓壙内において、保存状態はよくないが、人骨１体が検出された。頭位を北とし、手と脚を曲げて、小さくうずくまるような状態で埋葬されている。

鑑定によると壮年（女性）である。

副葬品としては、頭部の横に早島式土器の椀398が１個置かれていた。墓壙の検出中に、土師器の小皿399・400や小型鉢401が出土した。時期は鎌倉時代に比定される。　（正岡）

中世墓－７（第126図、図版47－１、２）

本調査区（4a区）北東隅で検出された土壙墓である。検出された土壙の平面形態はやや不正楕円形を呈している。掘方については南東・北東側が急に、反対側はかなり傾斜を持たせて掘り下げられ、その計測値は70×58cm、深さ32cmを測った。

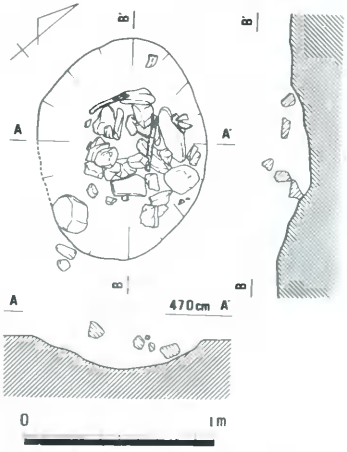


第126図　中世墓－７（1/30）・出土遺物

埋葬形態は頭部を南東に向けて少し高くして股関節、膝関節を強く曲げた上向きの屈位での埋葬である。人骨は頭蓋骨・腕・脚等々の存在が確認され、保存状態はきわめて良好なものである。

墓壙内からの遺物の出土は土師器の高台付椀・小皿がある。椀の出土状態から推察すれば、人体埋葬後に胸部上に埋納されていたものであろう。

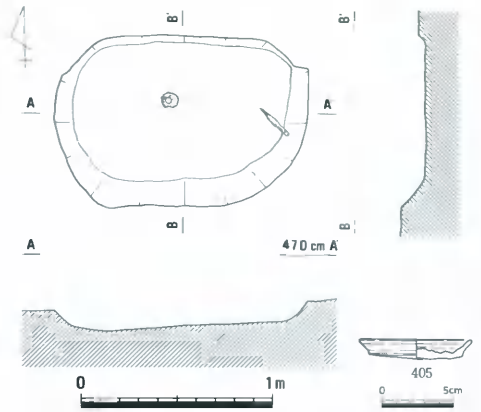
土壙墓内出土遺物から中世に相当する遺構である。



第127図　中世墓－８（1/30）

中世墓－８（第127図、図版48－１）

調査区南東部で東西方向の溝－１東部で北側に接する位置で検出された遺構である。検出面での形態は、長軸を



第128図　中世墓－9（1/30）・出土遺物

北西－南東に持ちやや不整楕円形を呈し、土壙は歪ではあるが擂鉢状に掘り上げられている。その計測値は長辺119cm、短辺92cm、最深部で15cmを測り得る土壙であるが、壙内には人頭大、あるいはそれ前後の礫が混入している中に骨片が確認された。

土壙墓内の底面よりやや浮いた位置に礫が配石されている。あたかも棺台の形態を示すものである。礫上に存在する骨の保存状態はきわめて悪いものである。他に伴出遺物は認められなかったが周辺の遺構等から想定して中世に比定されるであろう。

中世墓－9（第128図）

4a区の北東隅部で側溝の掘り下げ中に確認、検出された土壙であり、一部が側溝のため削られているが、東西方向に長軸をもつ小判形の平面形を示している。

検出された土壙の数値は長辺136cm、短辺92cm、深さは10cm程度であり、床面はわずかに西が窪んではいるがほぼ水平に掘られている。

壙内中央部に土師器の小皿が出土している。また東側には骨片が認められた。土壙の形態等から推測して墓壙と考えざるを得ない。

埋納は頭部を東にした状態で納めていたものであろう。中世と考えられる。

中世墓－10

中世墓－8の北約3.5mの位置で検出した東西方向に長軸を持った遺構であり、東辺部を近世の溝が走っている。

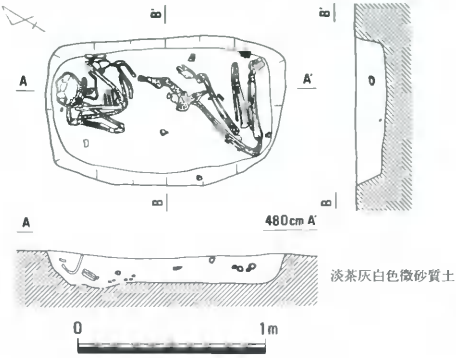
土壙の形態は、120×70cm、深さは約11cm程度と浅い残りの遺構で、平面形態は隅丸長方形

を呈している。

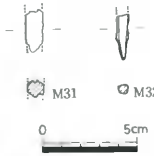
遺構の形態や検出状態等から中世の墓壙と考えるのが妥当と思われる。　（二宮）

中世墓－11（第129図、図版49－１）

５区の南西、Ｃ区画内で検出された土壙墓である。墓壙の平面形は、長方形を呈し、掘方は長径134㎝、短径80㎝、深さ17㎝を測り、底面はほぼ平坦である。墓壙は、上部がかなり削平されているため、人骨頭部はかなり欠損している。人骨は頭部を北西に向け、右を下にした右側臥屈葬であった。副葬品は、出土していないが、鉄釘（**M31・M32**、２）が出土していることから、木棺に埋葬されていたと思われる。



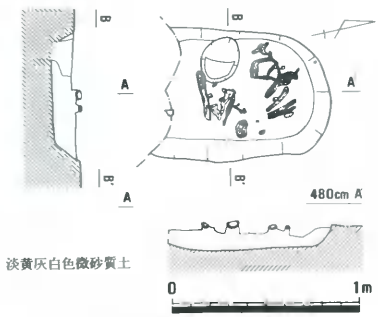
第129図　中世墓－11（1/30）・出土遺物



中世墓－12（第130図・図版49－2）

５区のＣ区画南端、土壙墓21の南で検出された土壙墓である。墓壙は、かなり削平を受け、さらに南部分が土壙によって切られているため残存状態は悪い。墓壙の平面形は、隅丸長方形を呈し、掘方は長径100㎝、短径70㎝、深さ16㎝を測り、底面はほぼ平坦である。人骨はかなり欠損しているが、頭部を北に向けた右側臥屈葬であった。副葬品は出土していない。鉄釘の出土はみられなかったが、墓壙形態からみて、木棺に埋葬されていたと思われる。

中世墓－13（第131図）



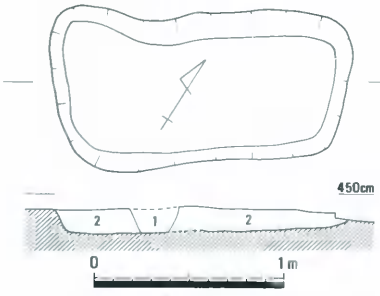
第130図　中世墓－12（1/30）

５区のＤ区画南端付近で検出された墓壙である。墓壙の平面形は、隅丸長方形を呈し、掘方は長径158㎝、短径80㎝、深さ14㎝を測り、底面は平坦である。人骨、副葬品等は出土しなかったが、土壙の規模、形態などからみて、墓壙の可能性が極めて強い遺構である。

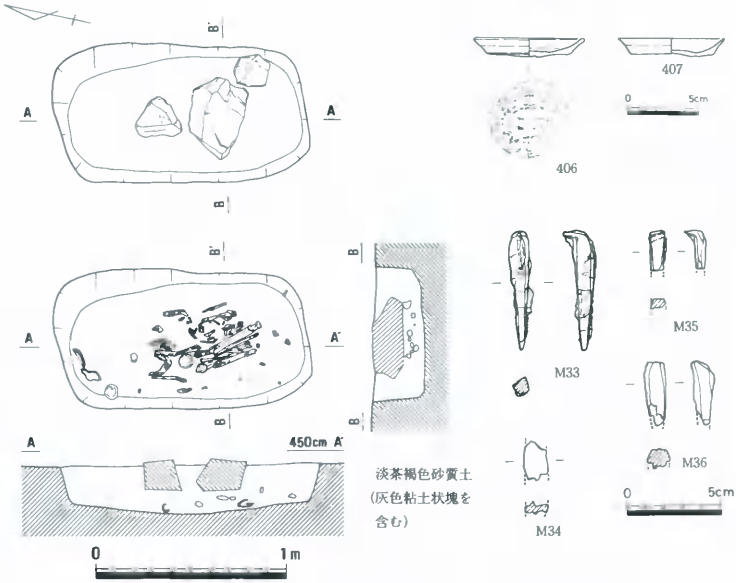
中世墓－14（第132図、図版50－１、２）

５区のＤ区画北西端、溝12近くで検出された土壙墓である。墓壙の平面形は、長方

形を呈し、掘方は長径138cm、短径75cm、深さ26cmを測り、底面はほぼ平坦である。墓壙はやや削平を受けているが、遺構の残存状態は比較的良好であった。人骨は、頭部が柱穴によって破損されていたが、他は保存が良好であった。大腿骨の在り方からみて、頭部は、北に向けた仰臥屈葬であったと思われる。副葬品としては、頭部付近と胸部の上に土師器の皿（406、407、401）が1点ずつあった。なお、墓壙の南から西壁にかけては、鉄釘の出土（M33～M36）がみられたことから、木棺に埋葬されていたものと思われる。木棺の規模は鉄釘の出土状態からみて、長さ100cm、幅50cmと推定される。なお墓壙内の人骨上に角礫が3個（最大30×40cm）が置かれていたが、これは、墓壙を埋めた後に墓標として置かれたもので、木棺の陥没に伴ってこの様な状態になったのであろう。（松本）



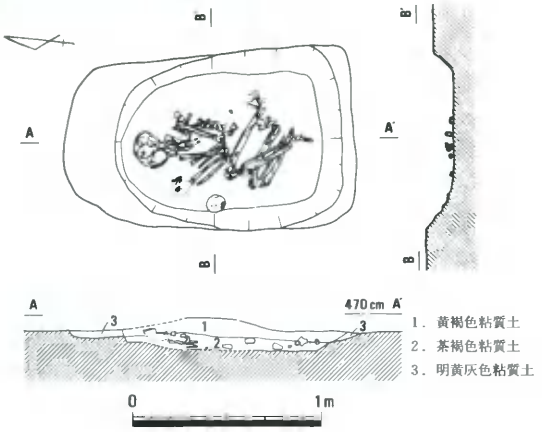
第131図　中世墓－13（1/30）



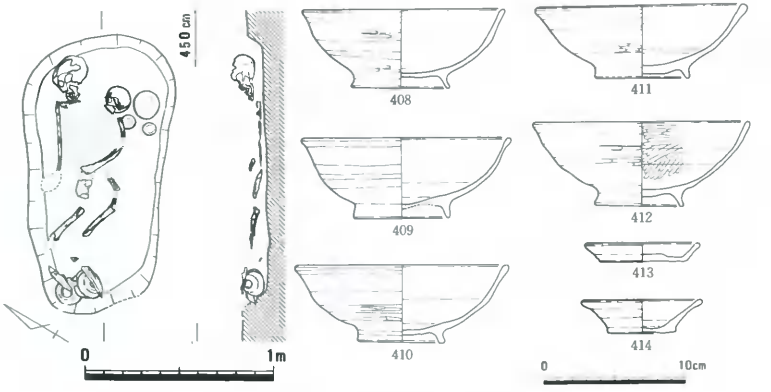
第132図　中世墓－14（1/30）・出土遺物

中世墓－15（第133図、図版51－１）

建物－27のほぼ中央部に位置し、頭を北に向け、右を下にして股関節、膝関節、腕を強くまげた横臥屈位で埋葬されている。墓壙は南（足元）側がやや広く北側は丸く二段堀りで、155cmの長さを測り、幅は南が95cm、北が75cmから丸く終わる変形の隅丸長方形の平面形を呈し、検出面からの深さは10～20cmを測り得た。墓壙内出土遺物から中世の遺構である。



第133図　中世墓－15（1/30）



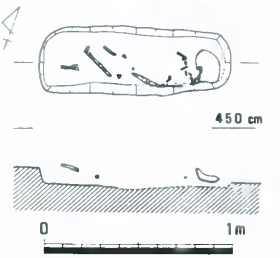
第134図　中世墓－16（1/30）・出土遺物

中世墓－16（第134図、図版51－２）

６区北東部で頭部を東北東に向け足を『く』字状にまげた状態で埋葬されている。一部分の骨をのぞいて消滅し、保存状態のきわめて悪いものである。墓壙は長軸148㎝、短軸72㎝の歪な隅丸長方形の平面形で、検出面からの床面までの深さは９～12㎝で、頭部が若干ではあるが浅くなっている。壙内からの遺物は、左肩部・足元の右側から椀・小皿等の出土が認められた。これらから中世に比定される遺構である。

中世墓－17（第135図、図版52－１）

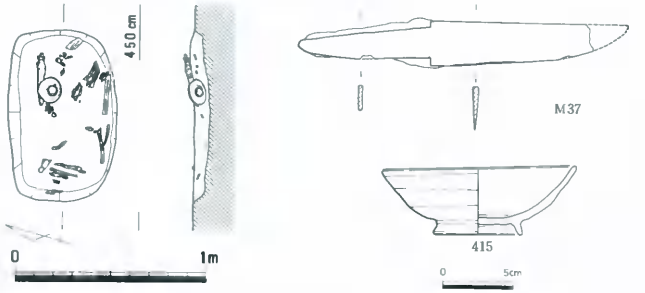
建物－27北西角の西に位置し、頭を北東に向けて埋葬されているが、極めて保存状態の悪い土壙墓である。平面形態は約100㎝×約35㎝を測り、頭部の狭い隅丸長方形である。深さは10㎝前後と残りも浅いものである。



第135図　中世墓－17（1/30）

中世墓－18（第136図・図版52－２）

路線に直交するような方向で検出された南西辺に丸味をおびた隅丸長方形の形状を呈する土壙墓である。計測値は



第136図　中世墓－18（1/30）・出土遺物

長さ95㎝、最大幅65㎝、中央最深部で約10㎝という数値を得ることができた。保存状態が非常に悪いが左を下にして、股関節・膝関節を強くまげた形の横臥屈位で埋葬されていたものと思われる。同時に検出されたものに刀子、高台付椀がある。中世に比定される遺構である。

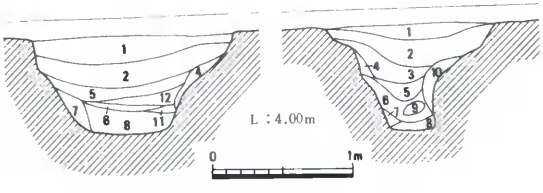
中世墓－19

調査区内微高地の南東部で、南北方向のやや胴張りの隅丸長方形を示す掘方の土壙で、長軸120㎝、短軸55㎝、深さは検出面から５㎝を測ることができた。埋葬形態は頭を北に向けていたようである。しかし保存状態は非常に悪いものである。伴出遺物は無し。　　（二宮）

(6) 溝

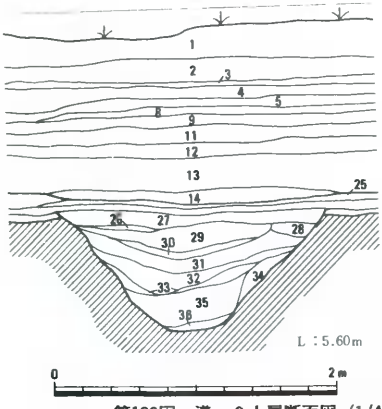
土筆山調査区全体で検出、確認された溝であるが、１区～３区においては水田に伴う畝溝であり、4a区～５区では微高地上に掘られているもので、これらは方形の区画に作られているため、居住区を区画する溝である。さらに下流（６区～10区）では上流部と同じく水田に伴う溝（畝溝）で幅はまちまちである。

調査区中程ではほぼ東西方向の大溝が微高地を東から西へと分断して流走している。いずれにしても、全体的にこの地区では、微高地を区画する溝と、水田あるいは畑に伴う畝溝また、水田に水の取り入れのための取水を兼ねた溝である。さらに10区では中世水田層を切って南北方向の溝も数本確認されているがどのような遺構に伴うかは不明である。



1．灰黒色粘質土
2．灰色微砂土
3．灰色粘質土
4．青灰色砂質土
5．暗灰色粘色土
6．３と同じ、粘性強い
7．１と同じ、炭化物含まず
8．７と同色、粘性強い
9．５と同色、炭化物含まず
10．青暗灰色砂質土
11．４と同色
12．５と同色、微砂混じり

第137図　溝－１土層断面図（1/40）

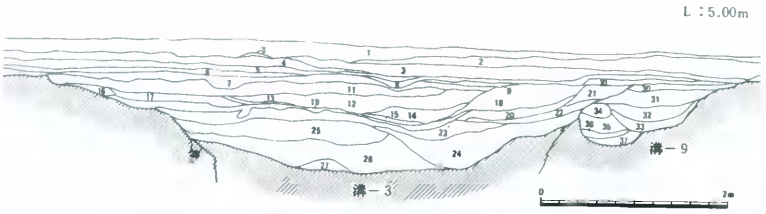


1．表土層
2．暗黄茶褐色土
3．暗灰淡黄茶色土
4．淡灰黄茶褐色土
5．４と同じで、褐色が濃い
8．暗茶褐色土
9．暗灰茶褐色土
11．淡黄暗茶褐色土
12．暗黄淡茶色土
13．淡黄茶褐色土
14．灰白色・茶褐色土
25．黒灰青色土
27．灰青暗黄茶色土
28．暗灰青色土／暗黄茶色土　の互相
29．黒灰青色土／暗黄茶色土　の互相
30．黒灰青褐色土
31．黒灰暗緑色土
32．黒緑暗灰青色土
33．黒灰暗青灰色土
34．黒灰暗青色土
35．黒灰色土（小枝・木の葉を含む）
36．黒灰色土

第138図　溝－２土層断面図（1/40）

溝－１（第137図）

4a区の微高地部分でほぼ東西方向の幅50～80㎝、深さ75㎝前後を測り、東側は丸く終わり、南西部で南に『L』字状に曲がり、延長は14ｍの溝である。この溝によって北側の建物、中世



1．黒茶褐色土
2．暗灰黒茶褐色土
3．暗灰淡黄茶褐色土
4．暗青灰淡黄暗茶色土
5．暗青灰淡黄茶色土
6．5より粘質強い
7．5の茶色土が濃い
8．5と同じで、粗砂含む
9．淡黄黒茶色土
10．暗青灰黒茶褐色土
11．黒茶色粘色土
暗青灰色砂質土
12．17．21．
黒青灰茶色土
淡黄淡茶色土
の互相
13．暗灰青色土
黒灰色土
の互相
14．20．22．
黒青灰茶色粘質土
淡青茶色砂質土
の互相
15．黒青灰茶色土
16．黒灰青暗茶色土
淡黄灰色土
の互相
18．暗青灰茶褐色土
19．黒灰青茶色粘質土
黄淡茶色砂質土
の互相
23．黒灰暗緑茶色土
24．暗灰茶淡黄緑色土
（粘土・砂の互層）
25．黒灰淡黄茶色土
淡黄灰白色土
の互相
26．黒灰青茶褐色土
27．黒茶灰淡黄色土
28．黒灰青淡黄色土

第139図　溝－3・9土層断面図（1/60）

墓との区画分けの遺構と考えられる。

溝－2（第138図・図版53－1、2）

この溝は4a区を走っている溝－1の南西部を切って南の4b東へと続いて振り進められている溝である。

溝は場所によって東側が段状を呈して掘られ、はっきりと西側の水田部分と区別している。溝の掘り方は、幅が最狭80cm、最大130cm、深さは約85cmであり、南に向かいわずかに傾斜を示しているが、南端部分は後世（近世以降）の攪乱によって消滅しているため不明。さらに、この溝の北端では、不整形の楕円形の平面形態を持った窪みから始まっている様に思われ、南に走っている溝底より数cm深く掘り込まれている。いずれにしても溝－1・2は同一時期に微高地上の居住区を区画するために掘られた溝である。

溝－3・9（第139図・図版55－1）

4b東区南東部側で、微高地上をほぼ東西方向に流走する大溝であり、周辺に検出された遺構に伴うものでなく、調査区外からの用排水路的な溝を兼ねる遺構である。溝は数回にわたり補強のため、法面に丸木の杭が打たれている。最大幅は330cm、深さ約100cmを測る。

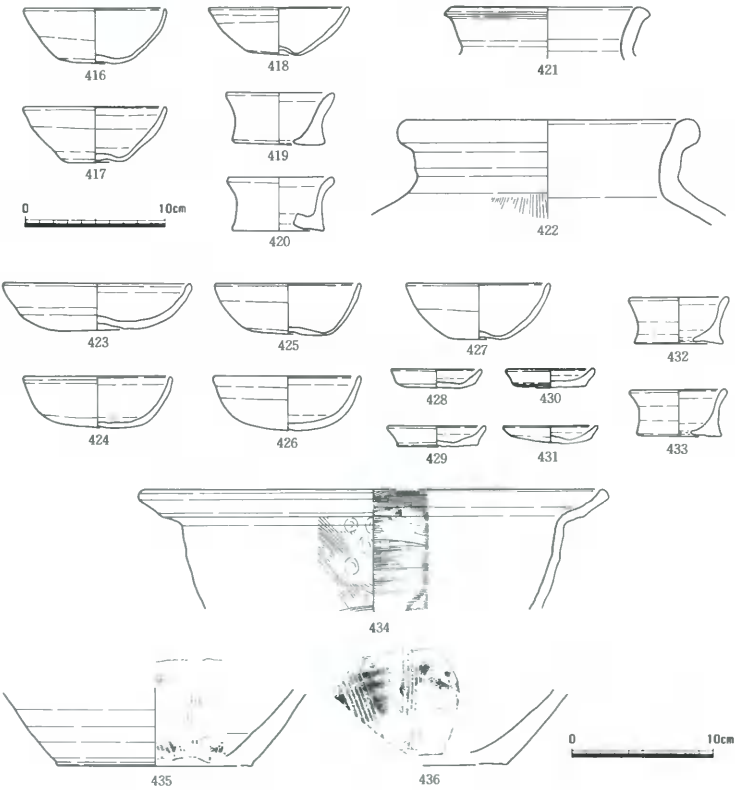
溝は中世の遺構を切断し、近世の攪乱を受けている。中世～近世初頭　　（二宮）

溝－４（第146、152図）

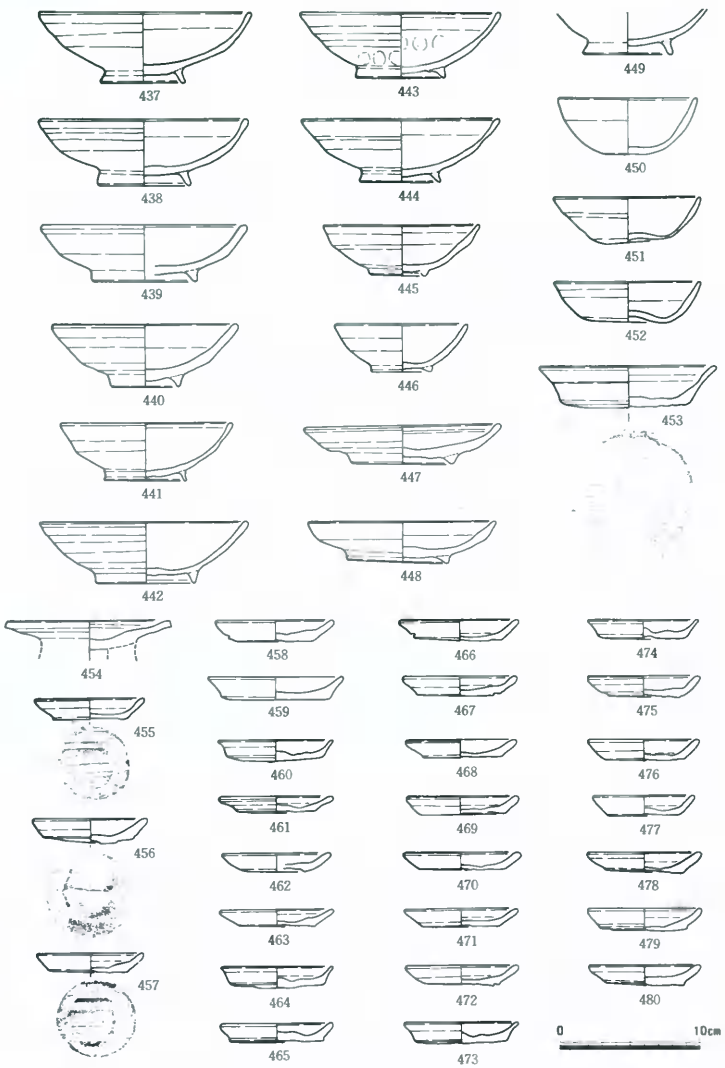
５区の中央部、東端で検出された遺構である。東西方向に走行する溝である。幅は30～45cm、深さ８cm、長さ11.5cm。遺物は丸瓦**559**が出土している。最も新しい時期のものである。

溝－５（第146、153図）

溝－３の南で検出された、東西方向に走行する溝である。幅は40～70cm、深さ６cm、長さ6.5m。遺物は、土師器の鍋**560**、**561**、**564**、椀**562**、**563**、亀山焼の甕**565**、壺**566**、**567**が出土している。**562**は口径13cm、高台径5.8cm、器高4.8cm。高台断面はやや扁平な方形を呈している。検出土層からみて、溝４とほぼ同時期の遺構と思われる。



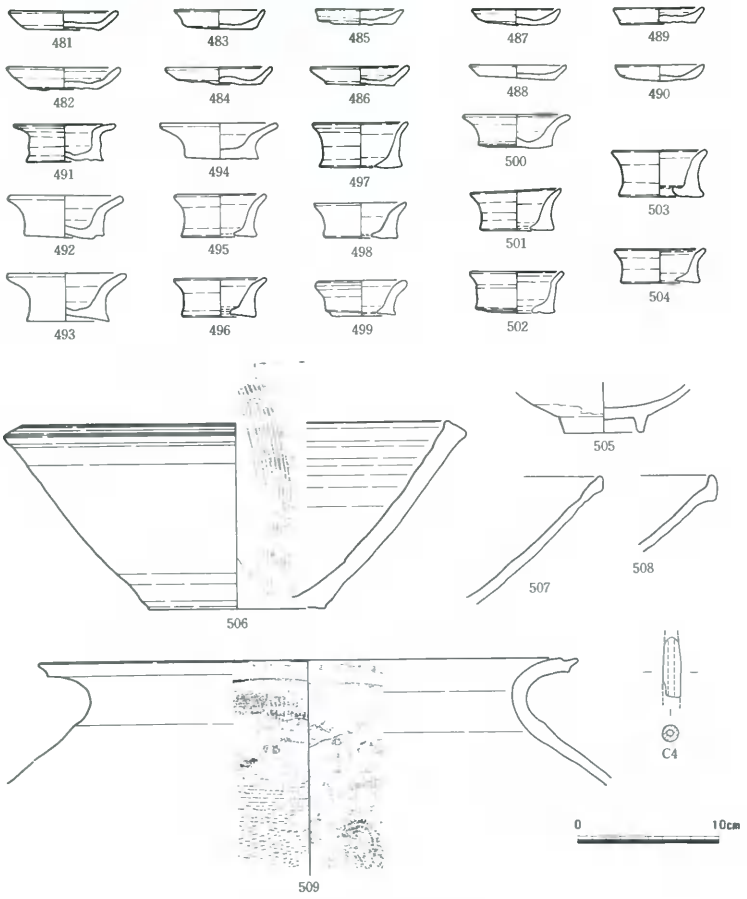
第140図　溝－１出土遺物



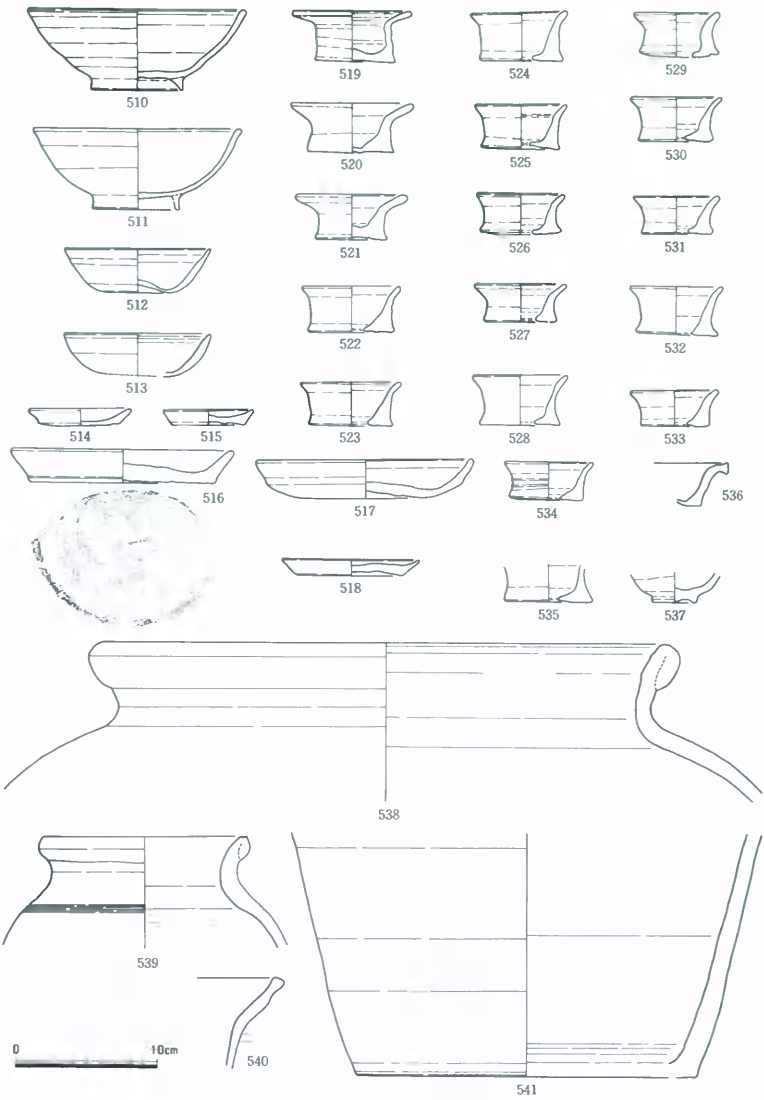
第141図　溝－3出土遺物

溝－６（第147、154図）

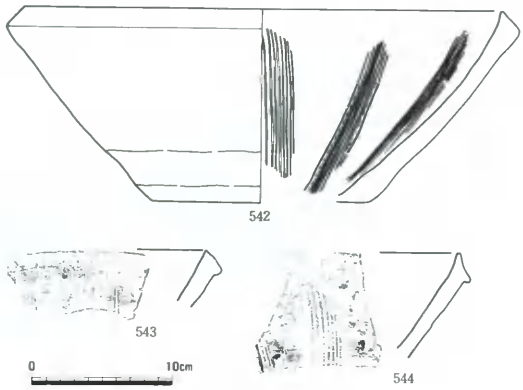
溝５の南で検出された、東西方向に走行する溝である。途中で消失しているが、長さ24ｍ以上となり、幅55～110㎝、深さ８～21㎝で、断面はＵ字形である。埋土は２層に区分される。遺物は、土師器の椀**568**、**569**、脚台**570**、備前焼の擂鉢**571**、亀山焼の甕**572**、丸瓦**573**が出土している。**568**、**569**は無台で、ヘソ椀と呼ばれるものである。



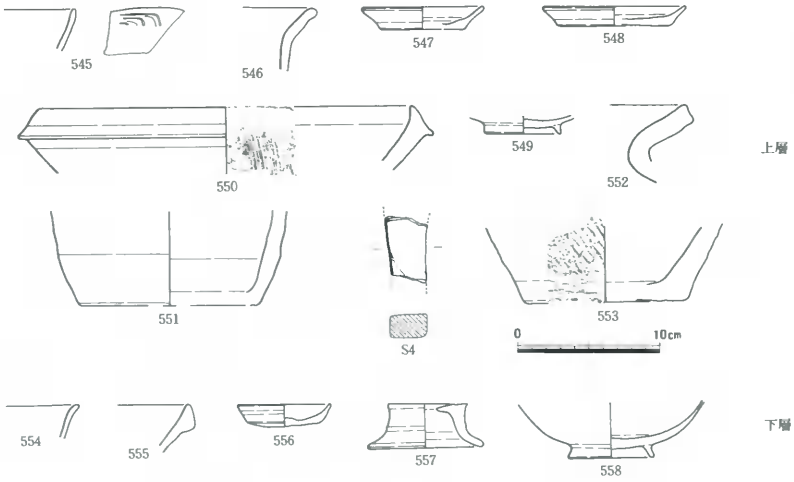
第142図　溝－３出土遺物



第143図　溝－３出土遺物



第144図　溝－３出土遺物



第145図　溝－３出土遺物

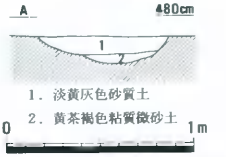
溝－7（第148図）

溝19の南に検出された、東西方向に走行する溝である。西端は消失しているが、長さ11.5m、幅70～145cm、深さ16～20cmである。断面は浅いU字形を呈する。出土遺物はない。

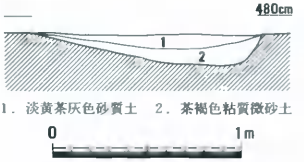
溝－8（第149、155図）

5区の北東端に検出された、南北方向に走行する溝である。長さ8.5m、幅70～115cm、深さ5～8cmの浅い溝である。遺物は、土師器の椀**574**、**575**、脚台**576**、鍋**577**、備前焼の擂鉢**578**が出土している。なお、椀には時期差が認められる。

第146図　溝－4・5断面（1/30）

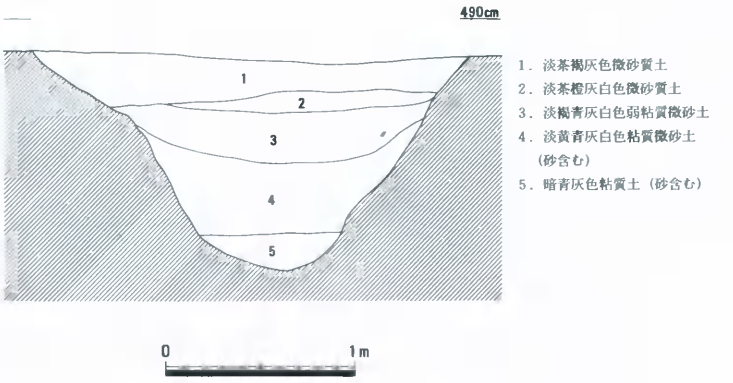


第147図　溝－6断面（1/30）

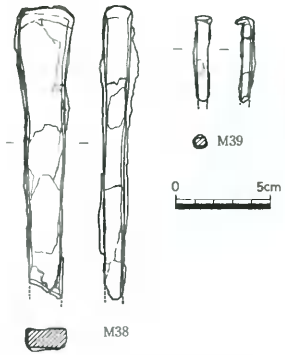


第148図　溝－7断面（1/30）

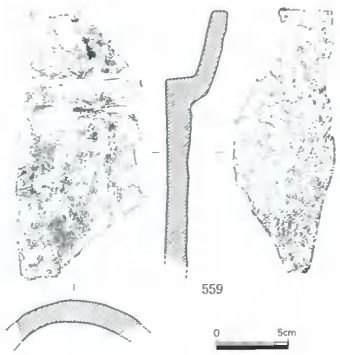
第149図　溝－8断面（1/30）



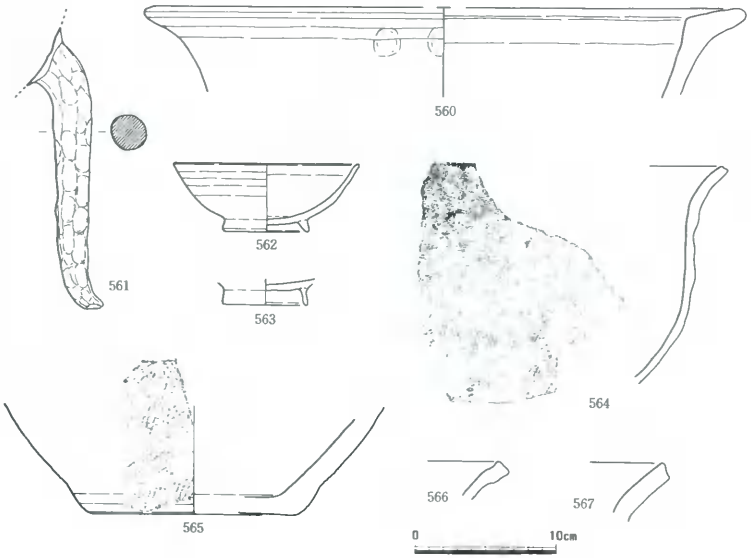
第150図　溝－9断面（1/30）



第151図　溝－３出土遺物



第152図　溝－４出土遺物

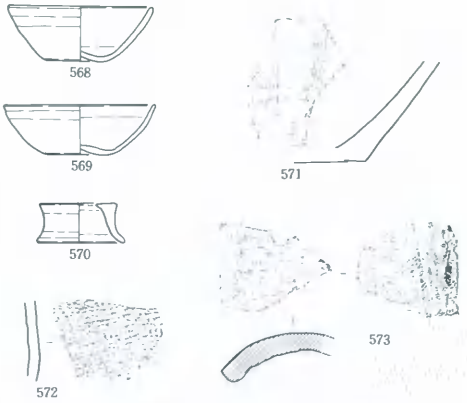


第153図　溝－５出土遺物

溝－9（第150、156、160、162、163図・図版57－２、59－１～３）

５区の北西部にあるコ字状の大規模な溝。上幅は170～240㎝、深さ100～130㎝、断面はＶ字形に近いが、改修痕が顕著に認められる。長さは南で東西18ｍ、南北33ｍ、北で東西26ｍを測り、総延長77ｍ。なお、北東は溝３によって切られている。溝の埋土は砂質土、粘質微砂土が堆積していて、５～７層に区分される。南の東西溝で、溝11と接続する所に、10～30㎝の角礫が投げ込まれていた。

遺物は、１～３層で出土したものを上層、４～７層で出土したものを下層として取り扱っている。主な上層遺物は、土師器の椀590、脚台591、皿592、備前焼の擂鉢593、壺594、甕595、平瓦596、597、砥石S5、楔M40がある。下層出土遺物は、土師器の椀599、600、皿601～603、墨書が書かれている脚台604、鍋605、606、東播系のこね鉢607、備前焼の甕613、壺615、瓦598、616、陶磁器608～612、滑石製の石鍋S6が出土している。608は14世紀後半から15世紀前半の青磁碗で、609は12～13世紀代の青磁小壺、610は12～13世紀の青磁碗、612は13～14世紀代の青磁香炉である。



第154図　溝－６出土遺物

溝－10

（第161図・図版58－１）

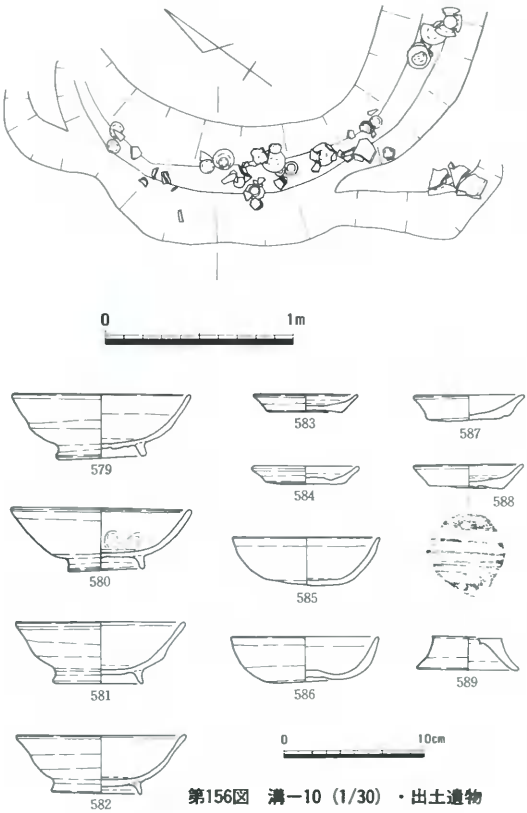
５区の北東端に検出されたＵ字形の溝。両端は不明である。長さは2.6ｍ、幅35～55㎝、深さ18㎝の断面Ｕ字形を呈する。遺物は溝の底部から、土師器の椀579～582、585、586、皿583、584、587、588、脚台589が出土している。椀は高台を有するもの、無高台のもの、そしてヘソ椀となるものがある。さらに、高台付は器形、法量によって579、580と581、582に細分できる。

第155図　溝－８出土遺物

溝－11（第157、158、164、165図・図版56－１、２、59－４、５）

５区の中央部にあるＬ字状の大規模な溝。上幅は120～230cmであるが、屈曲部は130cmである。深さは24～50cmであるが、溝10との接続部は50cmと最も深く、東に向かって浅くなっている。掘方は二段掘りを呈し、底部はＵ字形となっている。長さは南北20ｍ、東西11ｍで、ここから、断面がＷ字状になって、溝16、17となる。溝の埋土は色調の異なる粘質微砂土が堆積していて、３～４層に区分される。

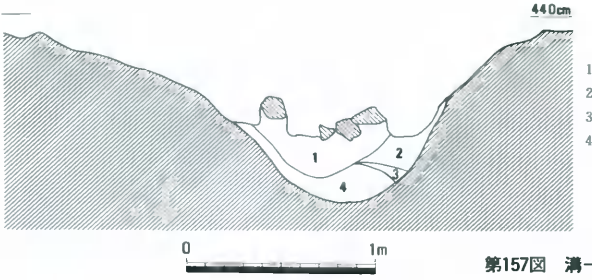
遺物は、１～２層で出土したものを上層遺物、３層で出土したものを中層遺物として取り扱っている。上層遺物は、土師器の脚台617、618、皿619、620である。脚台は受部が穿孔するものと、しないものの２種類がある。中層遺物では、土師器の脚台622、皿623～625、椀621、鍋629、青磁碗626、627、東播系のこね鉢628、630、631、633、634、備前焼の壺632、瓦635、636が出土している。鉄器では釘M41、土製品では土錘C5、石器では砥石S7～８、９、銭貨では「開元通寶」K6がある。621の外面には意味不明の墨書がみられる。また、この溝では、東播系の遺物がまとまって出土している。口縁部の形態からみて、４種類に分類が可能である。



第156図　溝－10（1/30）・出土遺物

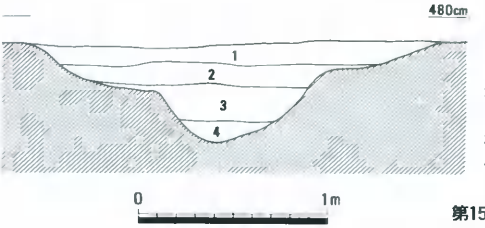
溝－12（第159、160、165～167図）

５区の中央部に位置し、溝９、11の南にある大規模な溝。溝中央では、約３ｍ程が掘削されておらず、陸橋の様相を呈する。この空間地を挟んで、溝は東西に走行するが、東の溝は改修



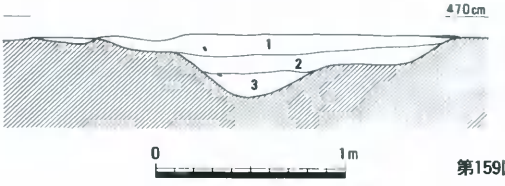
1．暗黒灰白色粘質微砂土
2．淡灰白色砂質土
3．淡黒灰白色粘質微砂土
4．淡黄灰白色砂質土

第157図　溝－９断面（1/30）



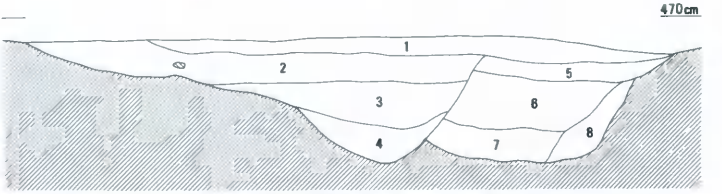
1．茶褐灰色粘質微砂土
（マンガン粒子含む）
2．淡黄灰白色粘質微砂土
（マンガン粒子含む）
3．淡黄青灰白色粘質微砂土
4．淡青灰白色砂質土

第158図　溝－11断面（1/30）



1．淡茶褐灰色微砂質土
2．淡褐灰色粘質微砂土
3．淡青灰色粘質微砂

第159図　溝－11断面（1/30）



1．淡黄茶灰白色粘質微砂土（炭、焼土、マンガン粒子含む）
2．淡黄茶灰白色微砂質土（炭含む）
3．淡青灰白色粘質微砂土（炭、焼土含む）
4．暗青灰色粘質微砂土（炭、焼土含む）
5．淡茶青灰白色粘質微砂土（炭、焼土含む）
6．淡灰白色粘質微砂土（黄色砂炭、焼土含む）
7．淡黄暗灰白色粘質微砂土（炭含む）
8．黄淡青灰色砂質土（炭含む）

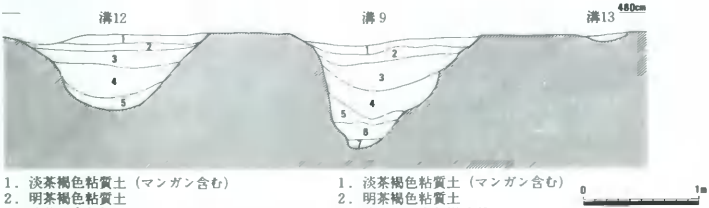
第160図　溝－12断面（1/30）

が行われており、新古が土層断面で確認されている。古い溝の幅は不明であるが、深さ57～77cm。新しい溝の幅は2.5m、深さ58～78cm。長さはいずれも22mである。断面はU字形に近く、いずれも溝底は東に向かって下がっていく。西の溝は、幅１～2.4m、深さ58～75cm、長さ31mである。幅は東端が最も広い。西端では北と南に分流するが、北は溝９に合流し、南は溝19と合流する。溝12より９が深く、溝19より12が深いため、溝12が満水となれば、溝９と19に流下したものと思われる。特に、溝19は集落外の水田に水を流していたものと思われる。溝の埋土は色調の異なる粘質微砂土、砂質土が堆積していて、４～５層に区分される。

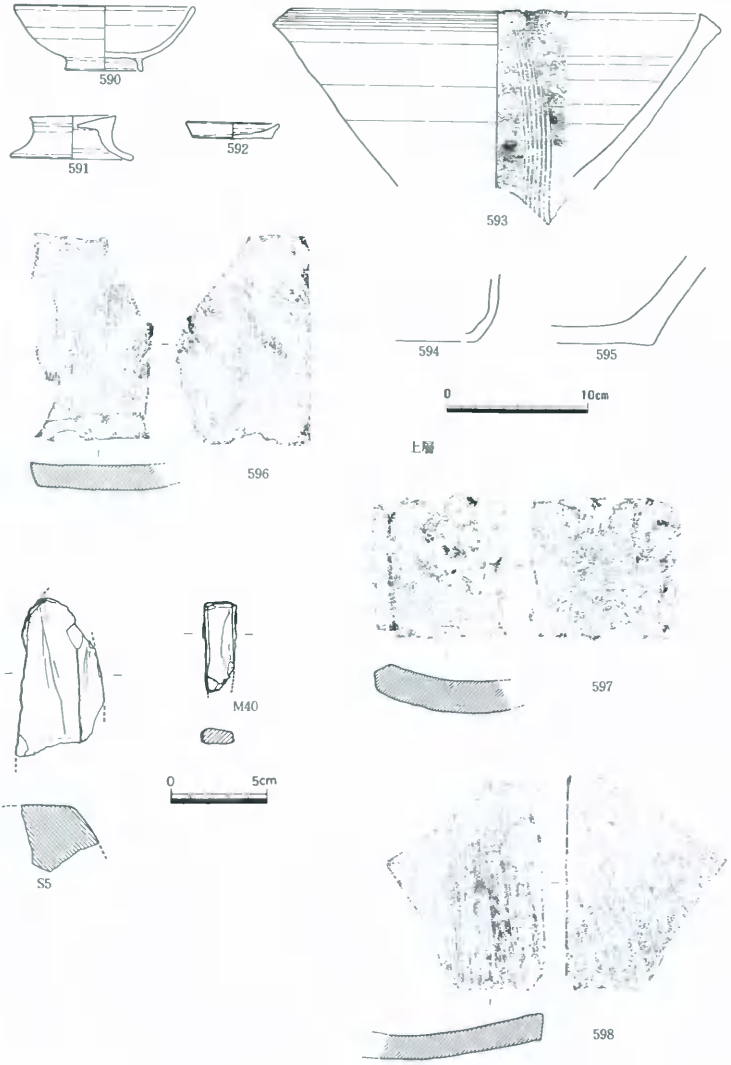
遺物は、１、２層で出土したものを上層遺物、３～５層で出土したものを下層遺物として取り扱っている。上層遺物は、土師器の皿**638**、杯**643**、東播系のこね鉢**650**、砥石**S11**、刀子**M42**、鉄釘**M47**などがある。**638**は口縁部に煤が付着しており、燈明皿として使用されていた。下層遺物は、土師器の杯**639**～**642**、皿**644**～**649**、椀**651**～**655**、**658**、脚台**656**、**657**、釜**661**、**662**、鍋**671**、**672**、備前焼の壺**663**、**664**、擂鉢**665**、瓦質の香炉**659**、亀山焼の擂鉢**666**、**667**、甕**673**、**674**、東播系のこね鉢**668**、**669**、瀬戸系陶器のおろし皿**675**、中国製の青、白磁碗**676**～**679**が出土している。石器では、硯**S10**、砥石**S12**、**13**、土製品では土錘**C6**、**7**、鉄製品では、楔**M43**、**44**、釘**M45**、**46**、工具（鑿）**M48**などが出土している。特に下層遺物については、杯が高台付と無高台の２種類、椀は12世紀代～14世紀前半までと幅広く器形が存在する。脚台は受部の穿孔は同じであるが、器形が全く異なるタイプである。釜は球状の体部から直立する口縁部を持ち、胴部中央部に鍔がつくものである。**662**には鍔の上部に一対の釣手がつくものである。**663**は口縁部が玉縁状になり、口径12.6cm、底径14cm、器高30.1cm。肩部に３条の沈線がある。**666**は口径35.2cm、現存器高9.8cm。内面には一単位が７条のカキメがみられる。**S10**は最大長3.8cm、最大幅3.8cm、最大厚2.2cmあり、石材は頁岩である。

溝－13（第160図）

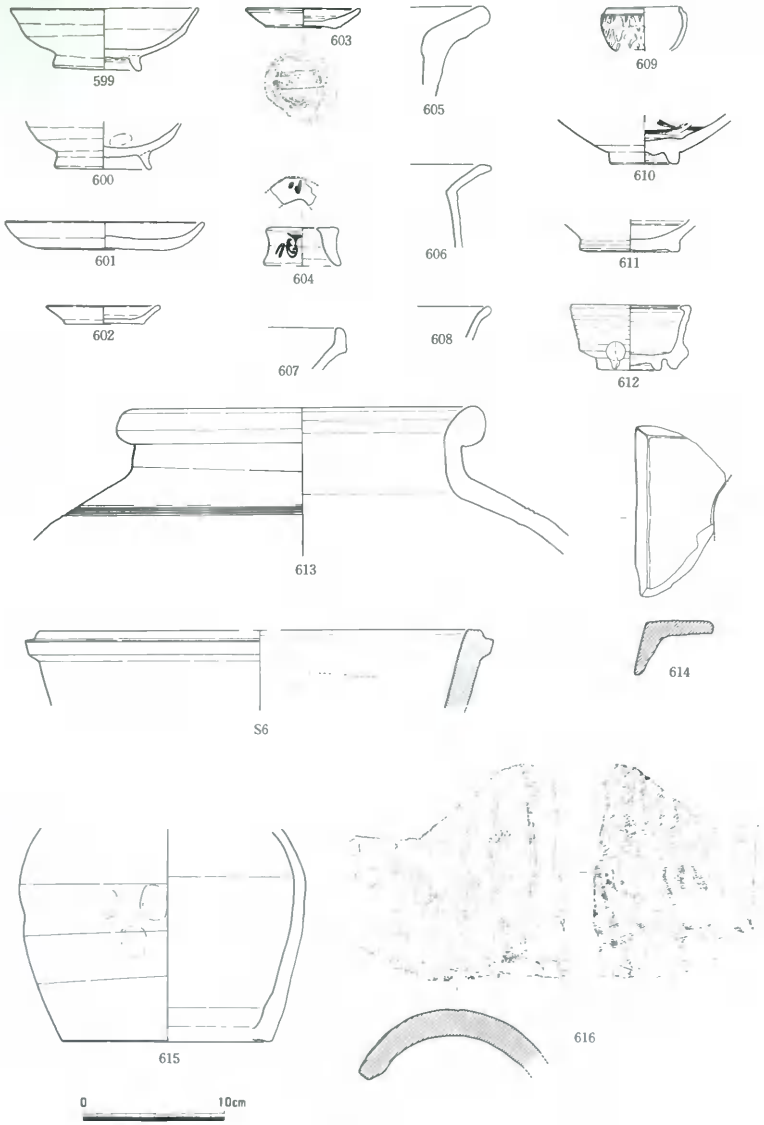
溝９の北に検出された溝で、東西方向に走行する。長さは10m、幅25～70cm、深さ５～14cm。建物９の雨落溝の可能性がある。遺物は、土師器の土器細片が出土している。



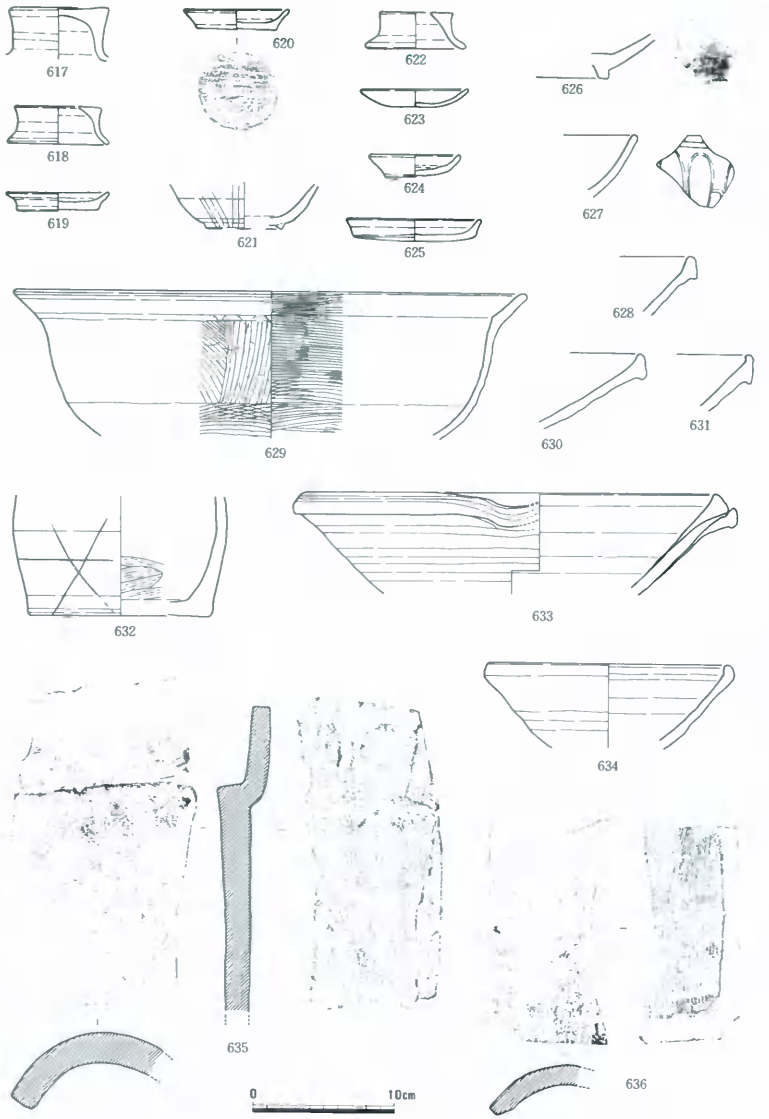
第161図　溝－９・12・13断面（1/50）



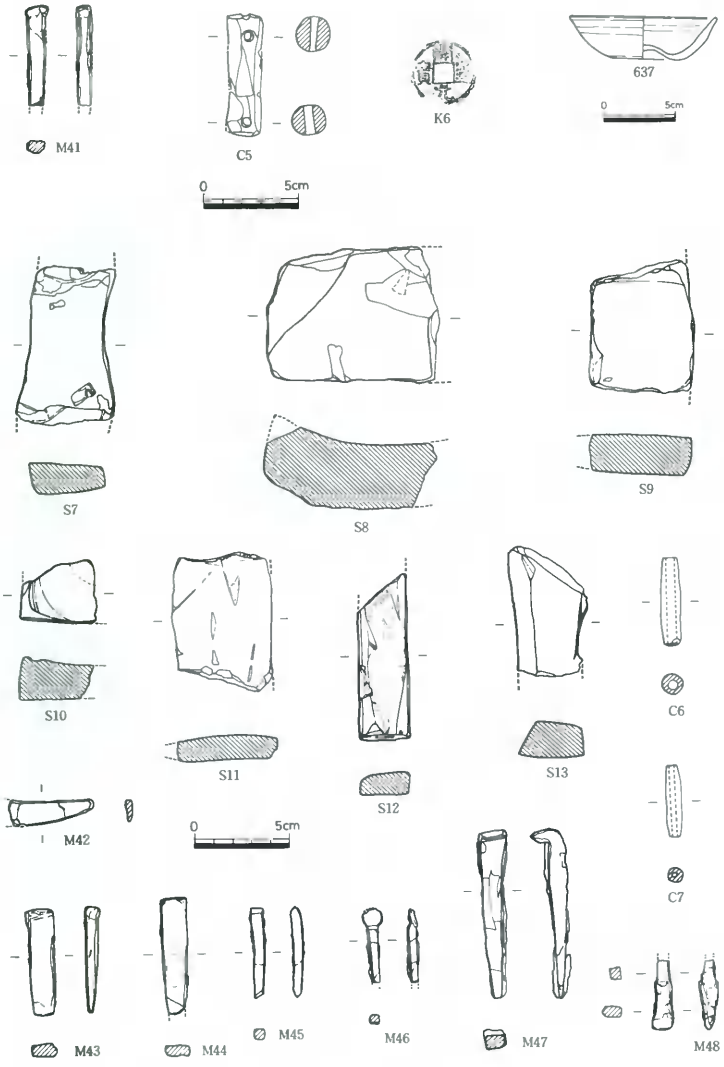
第162図　溝－9出土遺物（1）



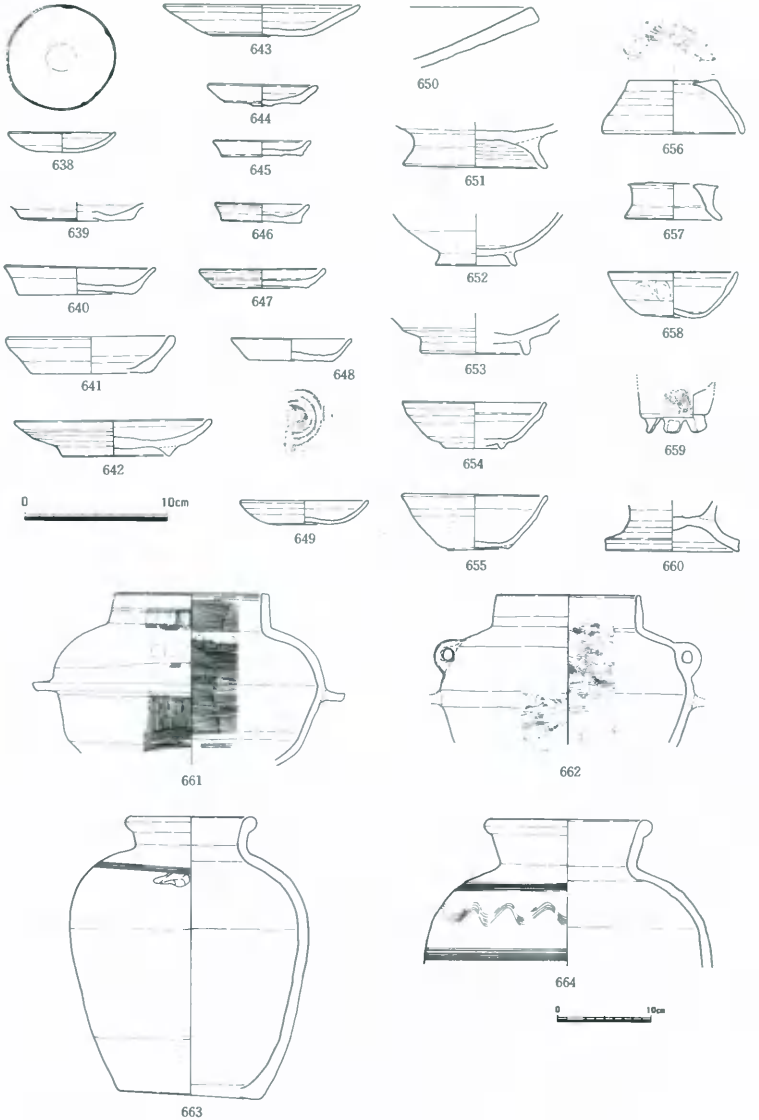
第163図　溝－９出土遺物（2）



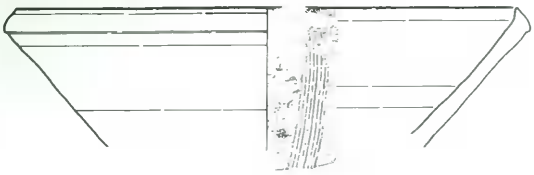
第164図　溝－11出土遺物



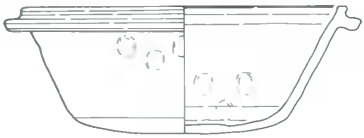
第165図　溝―11・12・14出土遺物



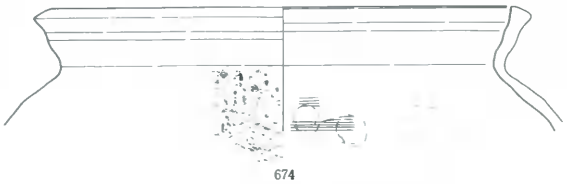
第166図　溝－12出土遺物（1）


665

666


672

673


674

667

668

669

670

671

675

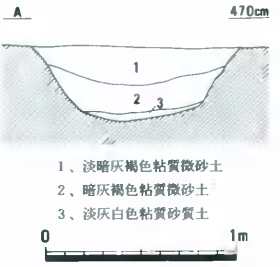
676

677

678

679

第167図　溝−12出土遺物　(2)



第168図　溝－15断面（1/30）

溝－14（第165図）

5区の中央部で検出された溝。L字形に走行し、長さ9.5m、幅40～180cmと東に広くなっている。深さは5～20cm。遺物は、土師器の椀**637**が出土している。ヘソ椀で、色調は橙色を呈する。

溝－15（第168図）

5区の北東端で、東西に走行する溝、西端は消失している。長さ7.7m、幅130～160cm、深さ10～41cmを測り、断面はU字形で、西から東に流れていた可能性がある。埋土は3層に区分できる。遺物は土師器の土器片が出土している。

溝－16（第169図）

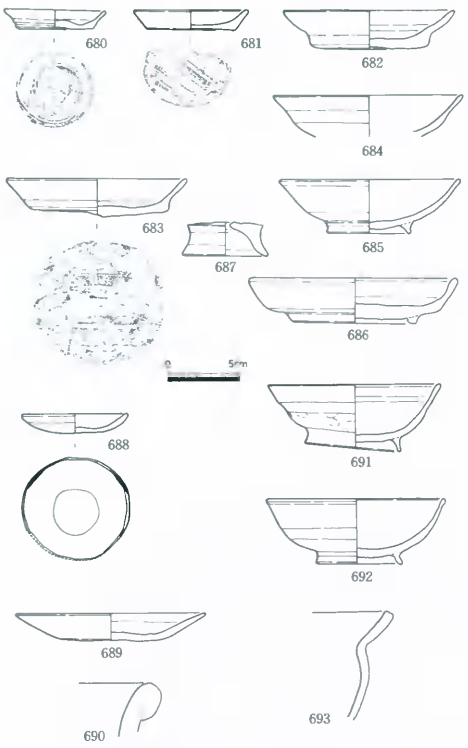
5区の中央東端に位置し、東西に走行する溝。溝11が東で分流して溝16、17となる。検出された溝の長さは13m、幅は70～120cmと東に向かって広くなり、深さは21～36cm。遺物は、土師器の皿**680**、**681**、椀**684**、**685**、杯身**682**、**683**、**686**、脚台**687**が出土している。

溝－17（第169図）

溝16の南で、東西に走行する溝。長さは13m、幅50～70cm、深さ20～36cm。遺物は、土師器の皿**688**、杯**689**、備前焼の甕**690**が出土している。

溝－18（第169図）

溝16、17の上層で検出された溝。東西方向に走行するが、東端は土壙によって切られている。長さは5.7m、幅40～60cm、深さ16～30cm。



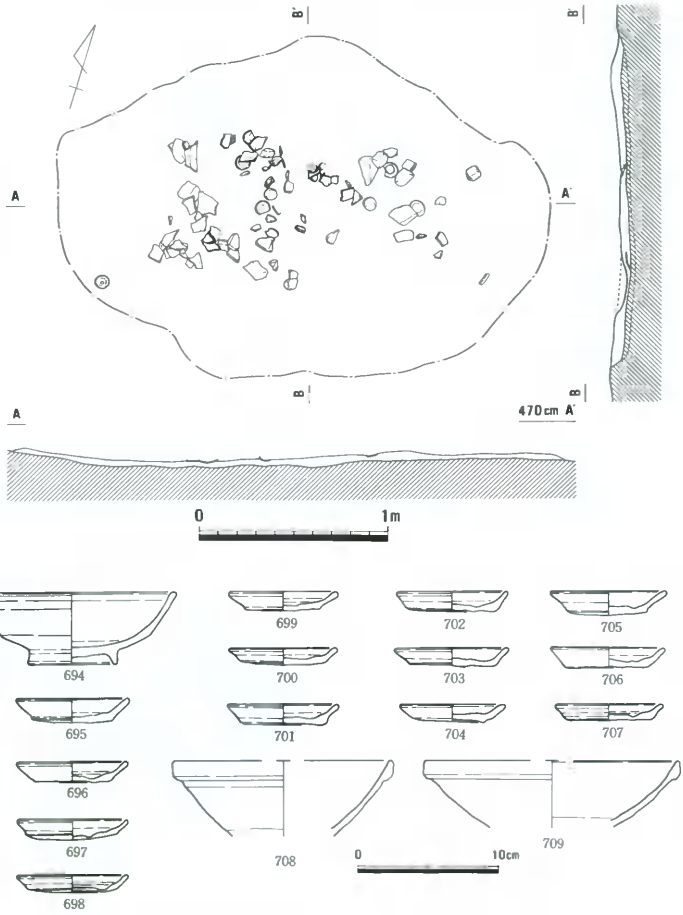
第169図　溝－16～18出土遺物

遺物は、土師器の椀691、692、鍋693が出土している。　（松本）

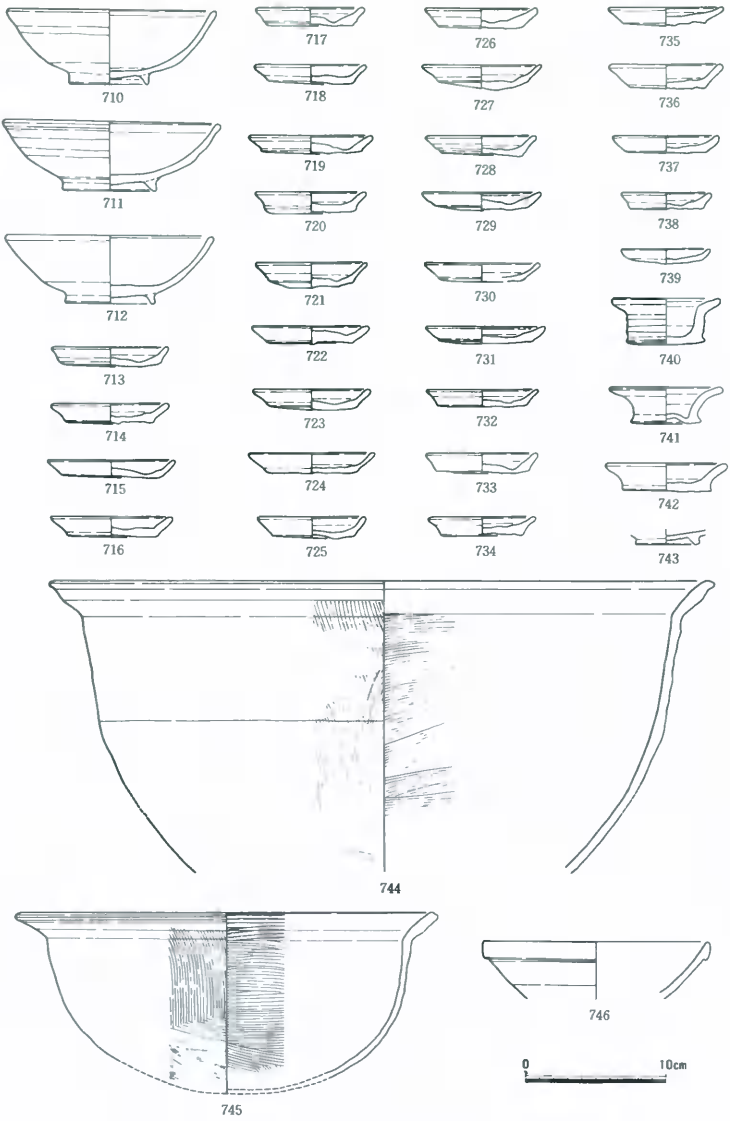
(7)　土器だまり

土器だまり－１（第170図）

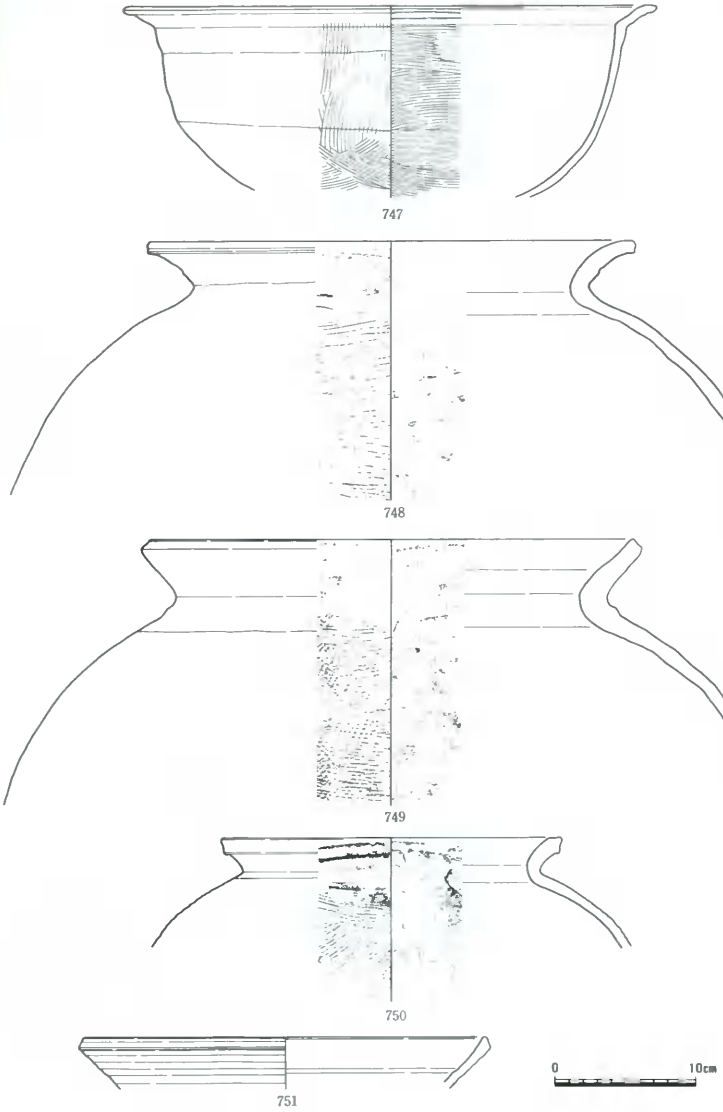
1A区の北寄りの地点の少し凹みになったところで、土器がまとまって検出された。出土した遺物には、早島式土器の椀694、土師器の小皿695～707、白磁椀708・709がある。



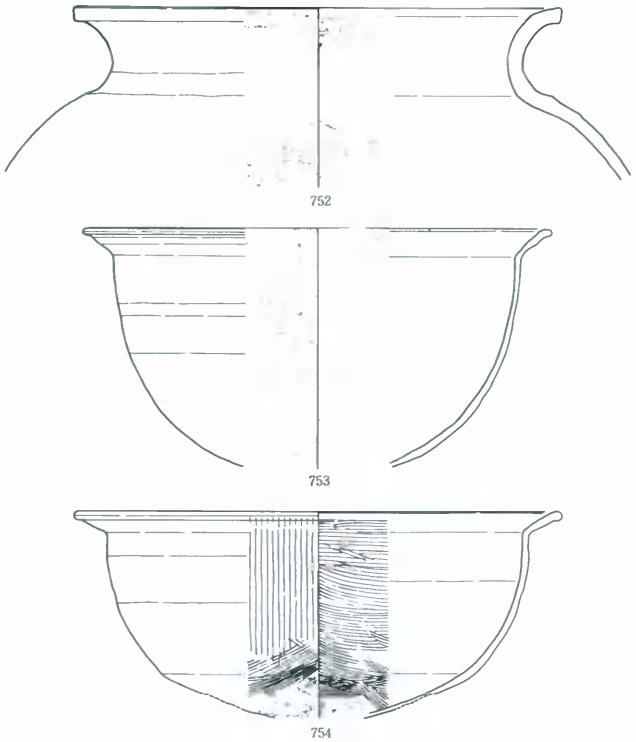
第170図　土器だまり－１（1/30）・出土遺物



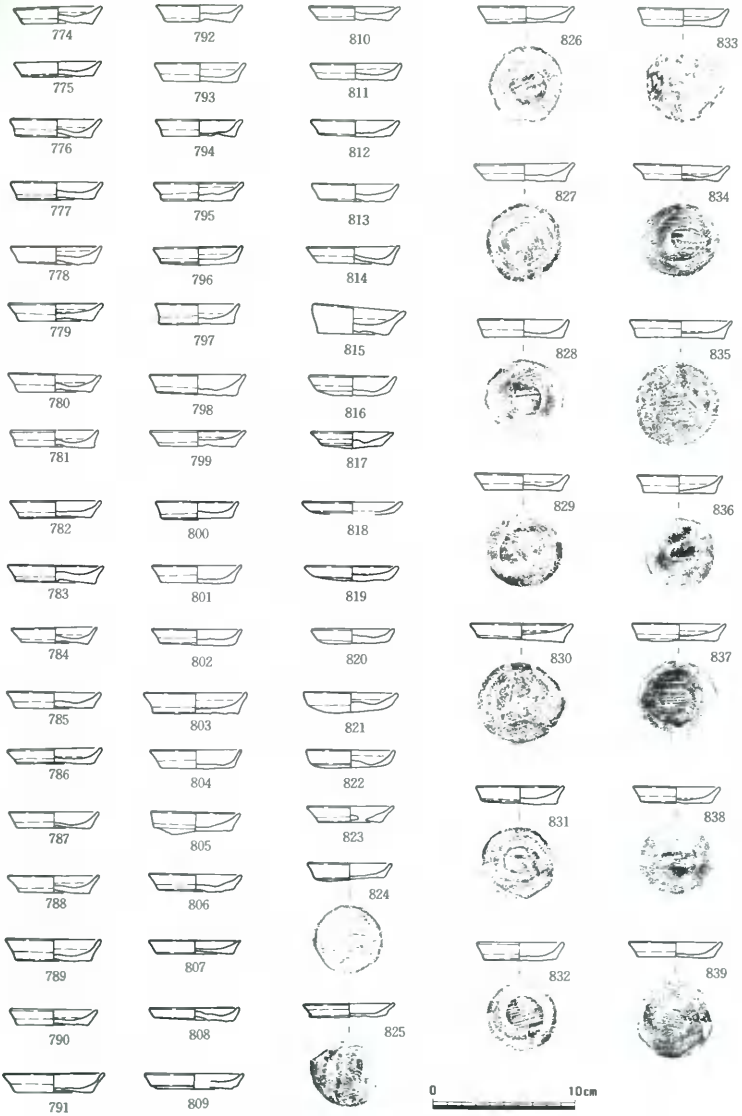
第171図　土器だまり－２出土遺物　(1)



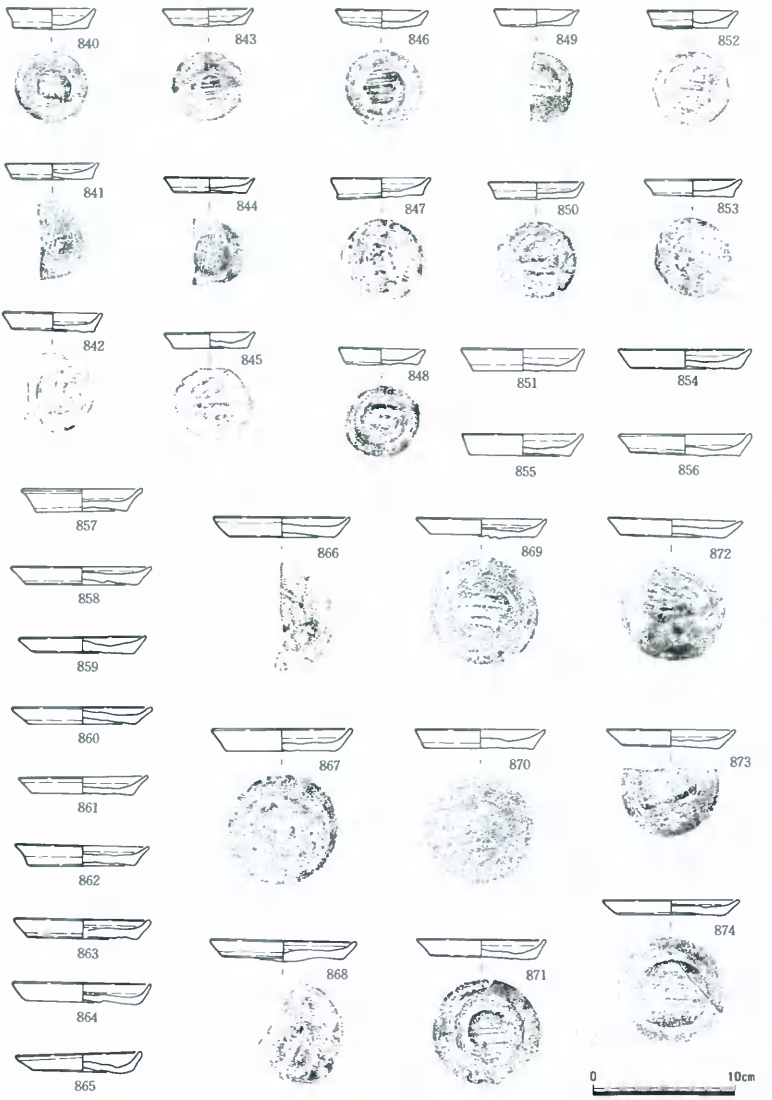
第172図　土器だまり－２出土遺物（2）



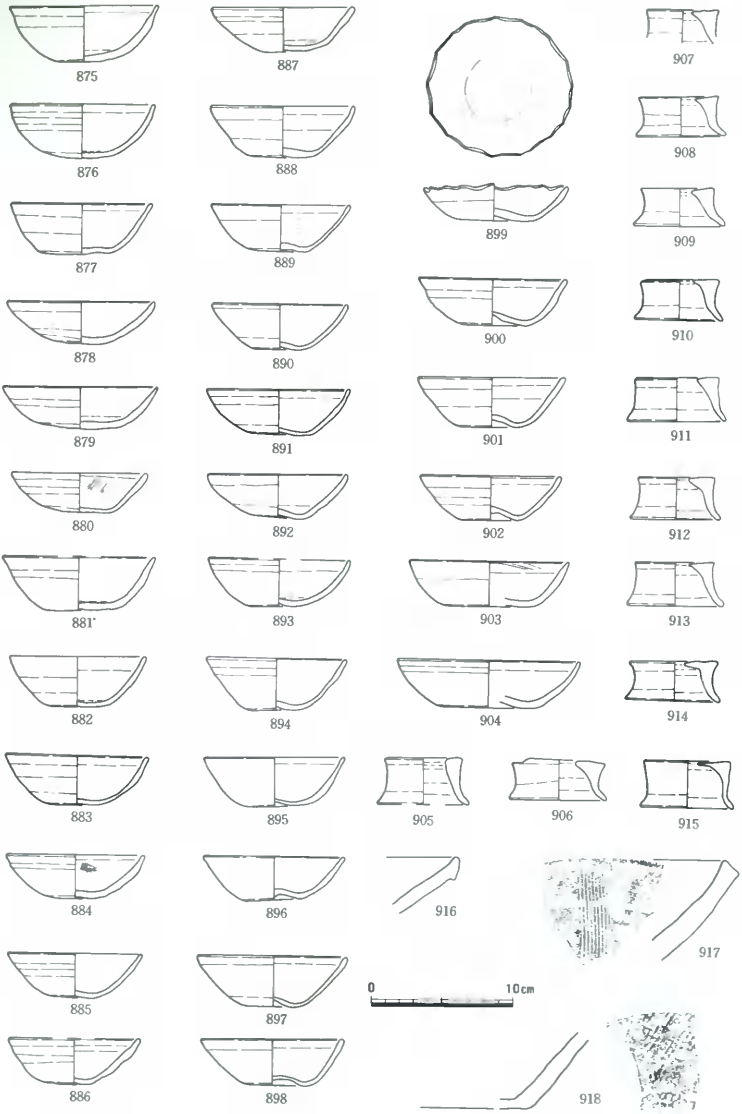
第173図　土器だまり－２～４出土遺物



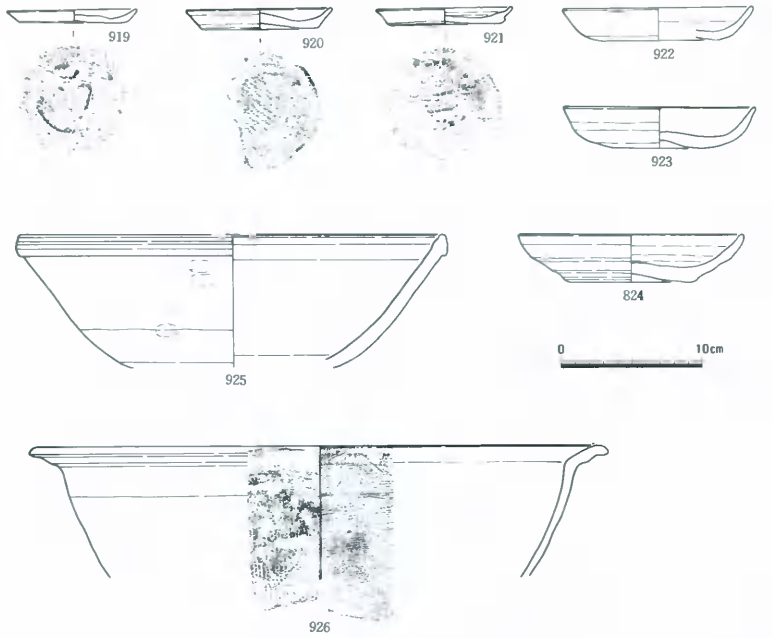
第174図　土器だまり－５出土遺物（1）



第175図　土器だまり－５出土遺物　(2)



第176図　土器だまり－５出土遺物　(3)



第177図　土器だまり－5出土遺物（4）

土器だまり－2（第171～173図）

土筆山調査区の中央部付近にある4b東区には、中世土器の集積したところがあり、3つのブロックに分けられる。東寄りに位置するのが土器だまり－2である。出土遺物は多く、早島式土器の椀**710～712**、土師器の小皿**713～739**、小型鉢**740～742**、瓦器の椀**743**、土鍋**744・745・747**、白磁碗**746**、亀山焼の甕**748～750・752**、東播系の鉢**751**などがある。

土器だまり－3（第173図）

土器だまり－2の西側にあり、土鍋**753・754**のほか小皿なども出土した。

土器だまり－4（第173図）

土器だまり－3の西側にあり、土器の量は余り多くない。出土遺物には、土師器の**椀755～758**、土師器の小皿**759～770**、小型鉢**775～773**がある。

土器だまり－5（第174～177図・図版60－1、2）

5区の北東部にあり、焼土、炭などとともに多量の土器が出土した。器種は小皿と椀が多く、ほかに少量の土鍋、皿、甕、鉢などがある。

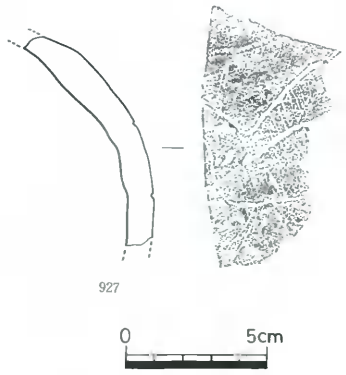
(8)　包含層出土の遺物

遺構検出中や包含層中からも多くの遺物が出土している。特に土器類が多く、中世のもののほかに近世の陶器も含まれている。特異なものとしては、4a区から出土した絵画土器がある。須恵器の壺の破片で、肩部にあたるところにヘラガキの絵画がある。色調は内外面とも灰白色を呈する。９×５㎝程の小破片のため、全容は分らない。絵は動物の胴部と推定される。胴部にはかぎ形にした線刻を３段描き、頸部と思われるところは１段である。胴部の下端から２本の足と思われるものが描かれている。何の動物を描いたのかよく分らない。また、須恵器の年代も比定しがたい。

１区・２区包含層の出土遺物

１区・２区から出土したものが、第179～181図である。早島式土器の椀**928～939**には、口径が少し大きくて深いものから、やや口径が小さく浅いものまであり、年代幅がある。土師器の皿**940～944**は浅いもの**943**と少し深いもの**942**がある。土師器の小皿**945～1013**は多い。殆どは口径７～８㎝、深さ1.5㎝前後である。底部にはヘラ切りのあと、乾燥のために板の上にのせた痕が残っているものが多い。小型鉢**1014～1022**には、高台の付くもの**1015**もあるが、多くはヘラ切りのままである。**1023**は丸底の小型椀である。底面に×印がある。

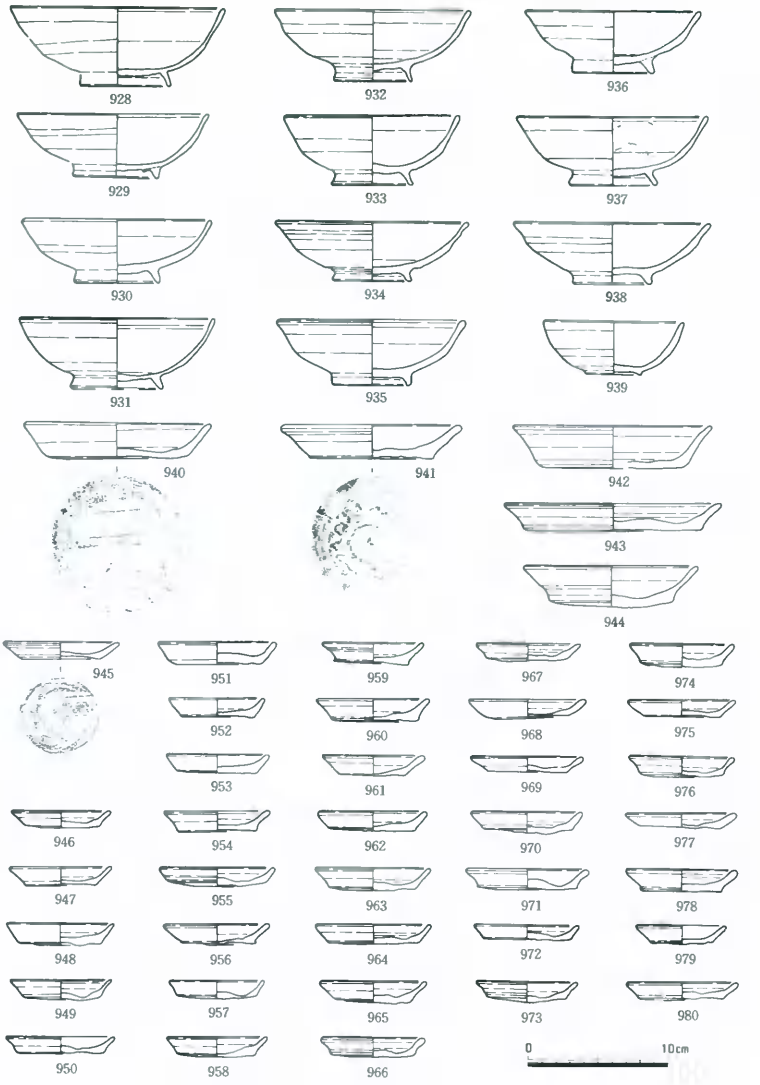
瓦器の椀**1025**も少量みられる。高台は低い。土鍋には大きいもの**1026**、小さいもの**1027**、つばの付くもの**1028**がある。中世の陶器には、亀山焼、備前焼、東播系、輸入青白磁がある。**1029・1030**は亀山焼、**1032**は備前焼小壺、**1033・1034**は備前焼の擂鉢、**1037・1041・1056・1060**は亀山焼の擂鉢である。**1035・1036・1038～1040・1042～1047・1049～1055・1057～1059**は東播系の鉢である。中国から輸入された陶器には、耳付壺**1061**、青磁碗**1064・1069**、白磁碗**1062・1063・1065～1068**がある。**1062**は10～11世紀、その他は11～13世紀に比定されている。



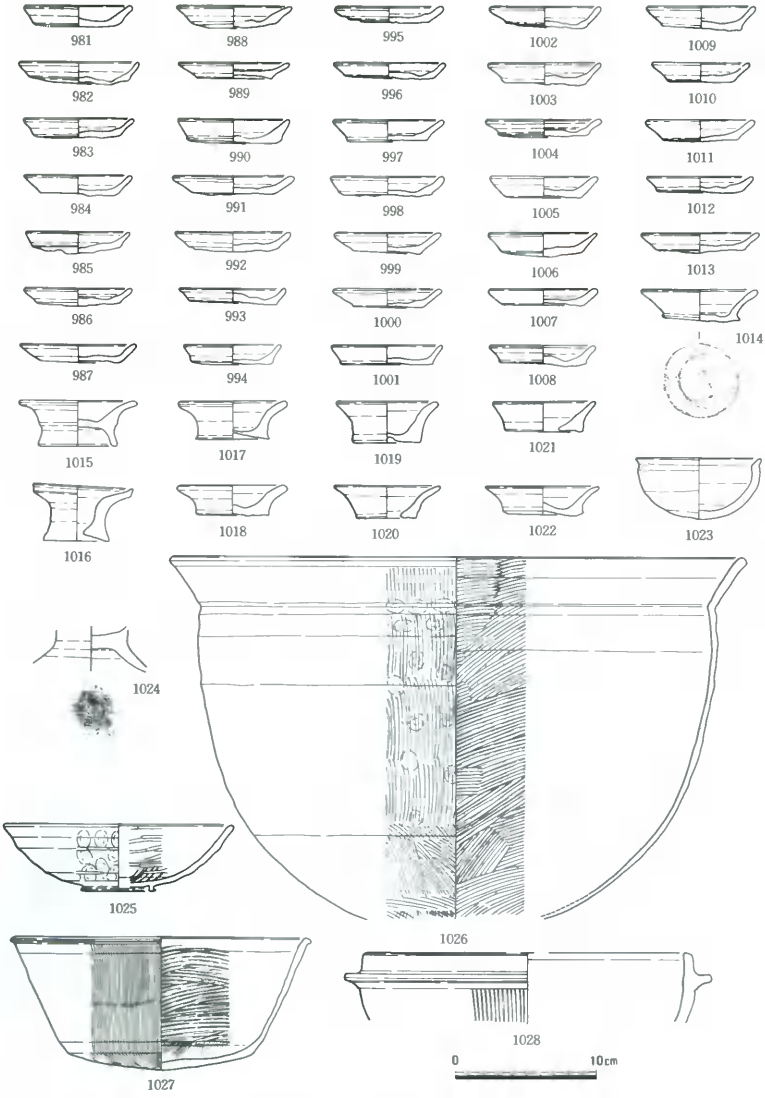
第178図　絵画土器

4a・4b区包含層の出土遺物

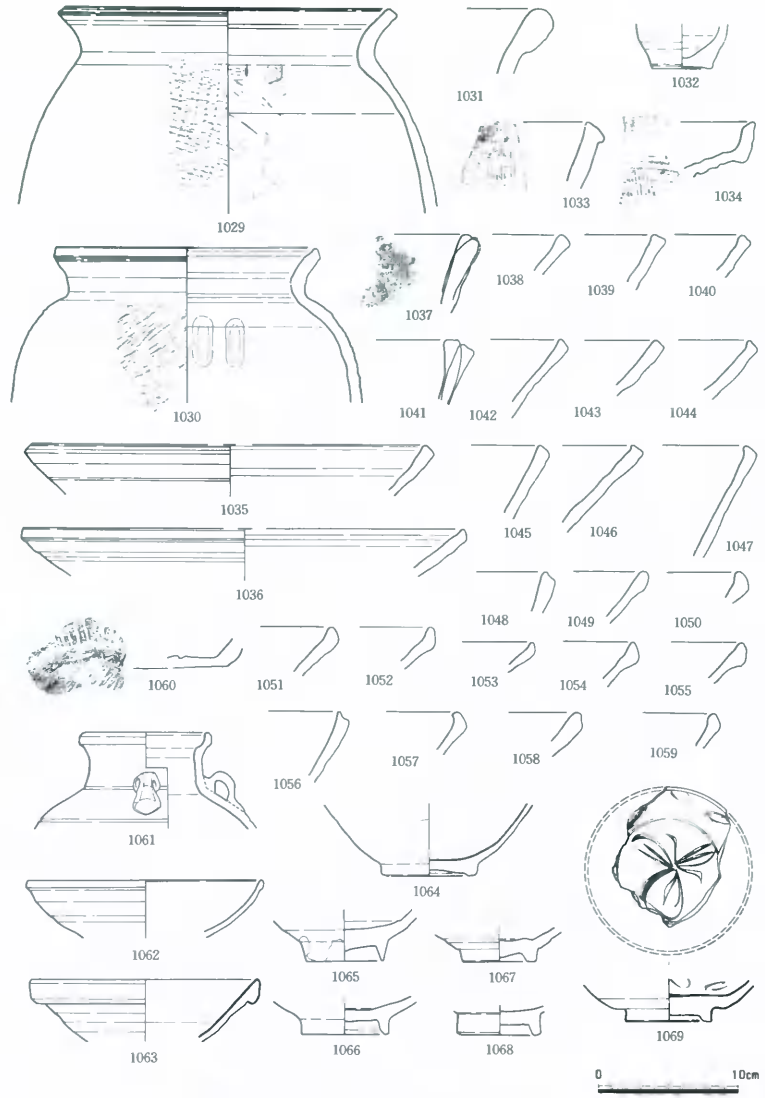
4a・4b区からも中世の遺物を多量に出土している。早島式土器の椀**1123～1128**には少し小型のものも含まれている。高台の付かない椀**1129～1145**は、口径10㎝前後、高さ４㎝くらいのものが多く、底の中央部が内側へ突出するものが多い。高い高台付の杯**1146・1147**、土師器の皿**1148**もある。土師器の小皿**1049～1093**は、特に多い器種である。小型鉢**1094～1108**は深さ



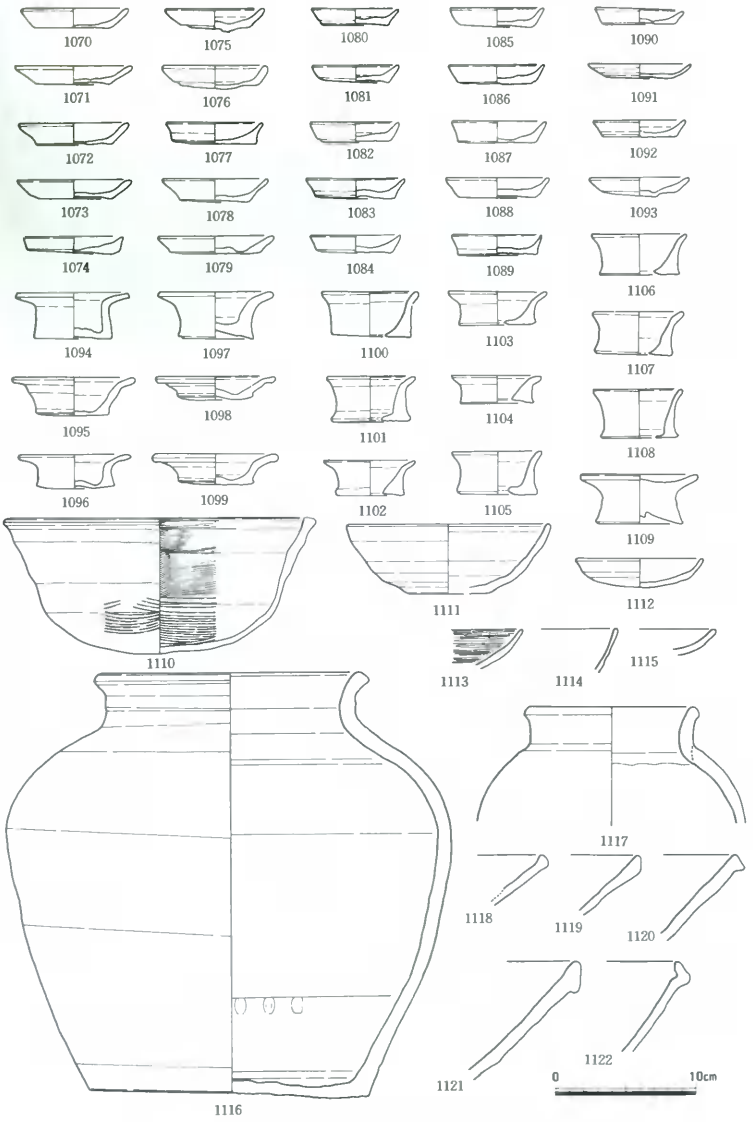
第179図　1・2区包含層出土遺物



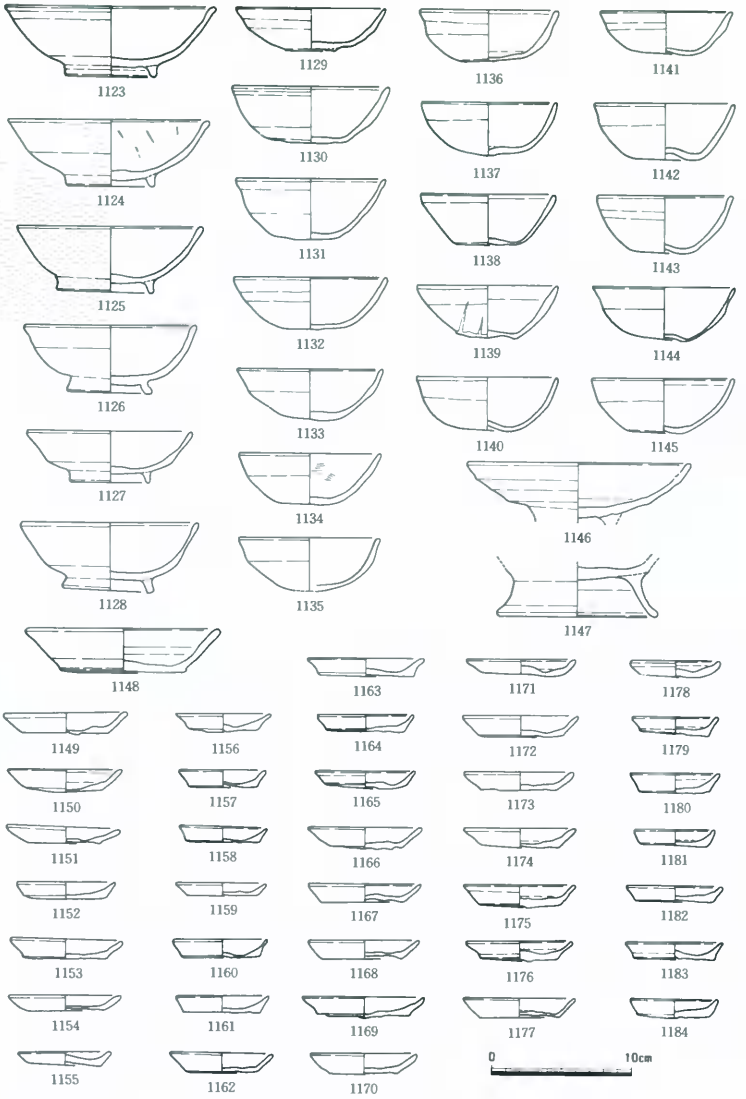
第180図　１・1A・２区包含層出土遺物



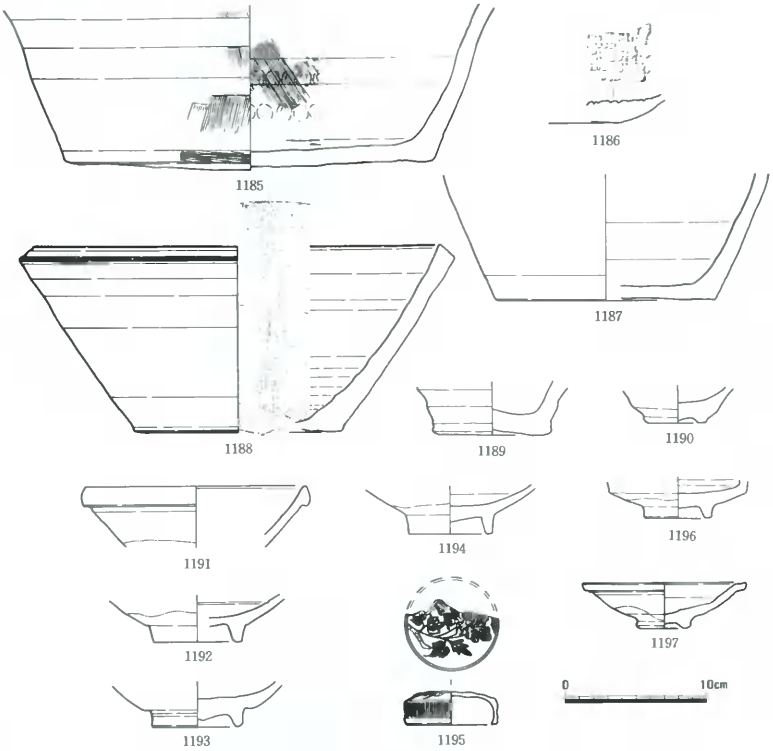
第181図　1・1A・2区包含層出土遺物



第182図　4a・4b東区包含層出土遺物



第183図　4a・4b区包含層出土遺物



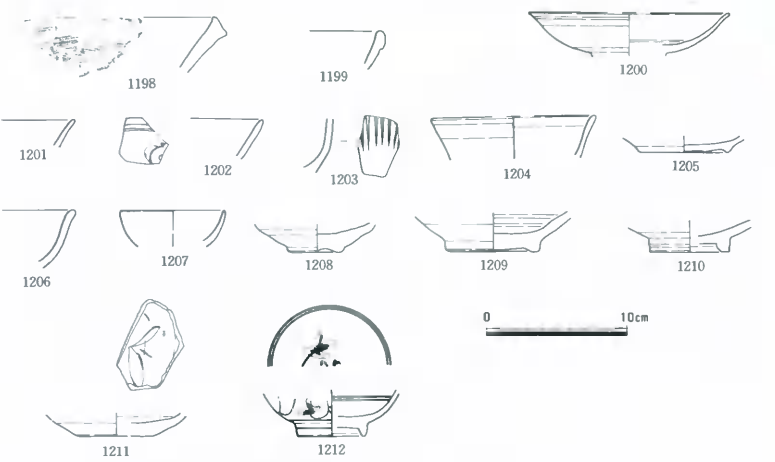
第184図　4b区包含層出土遺物

の深いものと浅いものがある。**1109**は中実で変形しているものと考えられる。土鍋**1110**は小型のもので、口縁部は肥厚するだけで外反していない。椀には備前焼**1111**、瓦器**1113・1114**、皿には瓦器**1112・1115**がある。

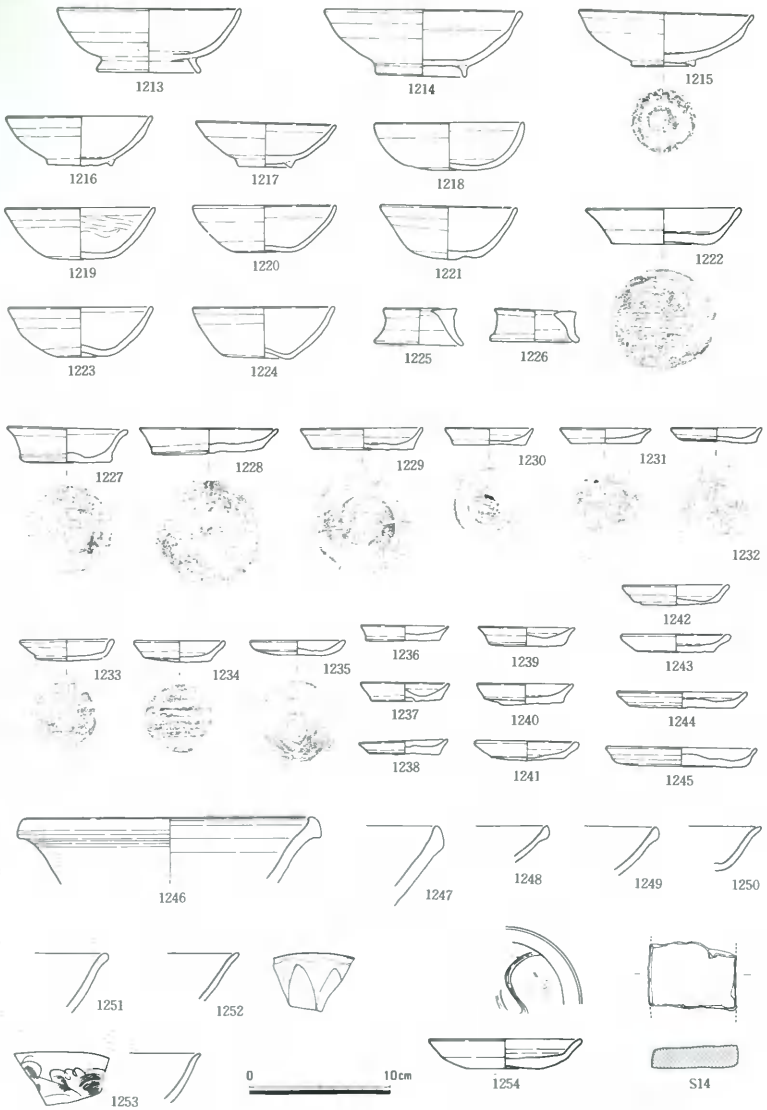
備前焼には、壺**1116・1117**、壺か甕の底部**1185・1187**、擂鉢**1188**がある。東播系のものには、鉢**1118～1122**がある。**1186**は東播系と推定されるおろし皿である。輸入陶器には、青磁の壺底部**1189**、白磁碗**1191・1192・1194**、青白磁の合子蓋**1195**、青磁碗**1193**などがある。合子の蓋は13～14世紀に比定されている。近世陶器では、肥前陶器の碗**1190・1196**、肥前陶器の皿**1197**がある。　（正岡）

4C・5区の包含層等出土遺物（第185～190図）

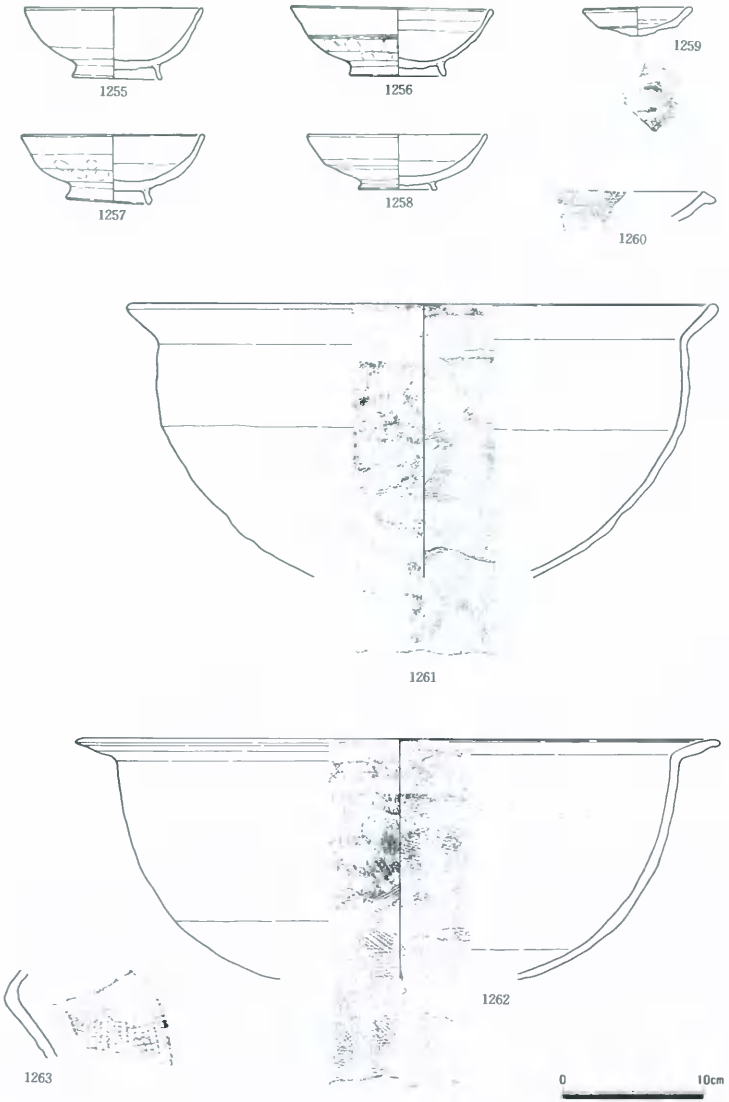
3区では、中国製の青、白磁の碗**1199**、**1200**、皿**1201**～**1203**、**1205**と国内産で亀山焼の擂鉢**1198**、肥前産の碗**1204**が出土している。4C区では、青、白磁**1206**～**1212**が近世水田層などで出土している。**1202**は中国福建省広東周辺の窯のものであり、16世紀末～17世紀初頭のものと考えられる。5区では柱穴内から出したもの（第186図）と包含層から出土したものがある（第187～190図）。柱穴内出土遺物は土器と石器（砥石）がある。土器は土師器と陶磁器に大別される。土師器は椀**1213**～**1221**、**1223**、**1224**、杯身**1222**、**1227**、脚台**1225**、**1226**、皿**1228**～**1232**がある。椀は器の大小や、付高台もしくは無台化によって細分が可能であり、ここでは4種類に細分が可能である。**1246**、**1247**は東播系のこね鉢である。**1248**～**1254**は中国製の青白磁である。**1250**は口禿の白磁皿で、13～14世紀中葉頃のものである。**1253**は龍泉窯系の青磁碗で、内面には櫛描文がみられる。12～13世紀代のものである。**1254**は青磁の皿で、内面に櫛描文がみられる。12～13世紀代のものである。包含層出土の遺物では、第187図が斜面堆積の遺物である。土師器の椀**1255**～**1258**、皿**1259**、鍋**1260**～**1262**、亀山焼の甕**1263**が出土している。第188図は土師器の椀**1264**～**1272**、**1278**、皿**1274**～**1277**、鍋**1280**、脚台**1273**、瓦器椀**1279**、備前焼の擂鉢**1281**、甕**1284**、亀山焼の甕**1282**、東播系のこね鉢**1283**、瓦**1285**～**1287**が出土している。瓦には、墨書がみられるものがある。**1285**は丸瓦で、内外面とも意味不明の墨書が書かれている。**1286**は平瓦で、『妙』の字が読みとることができる。第189図は陶磁器である。**1294**は青磁



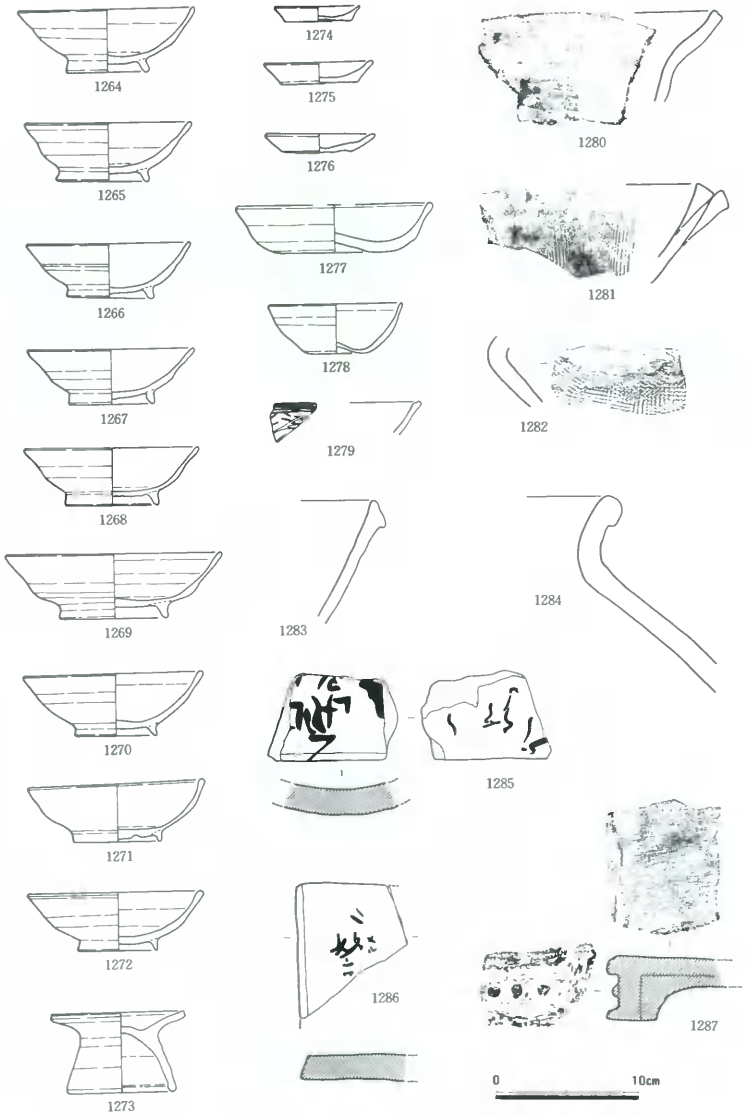
第185図　3・4c区包含層出土遺物



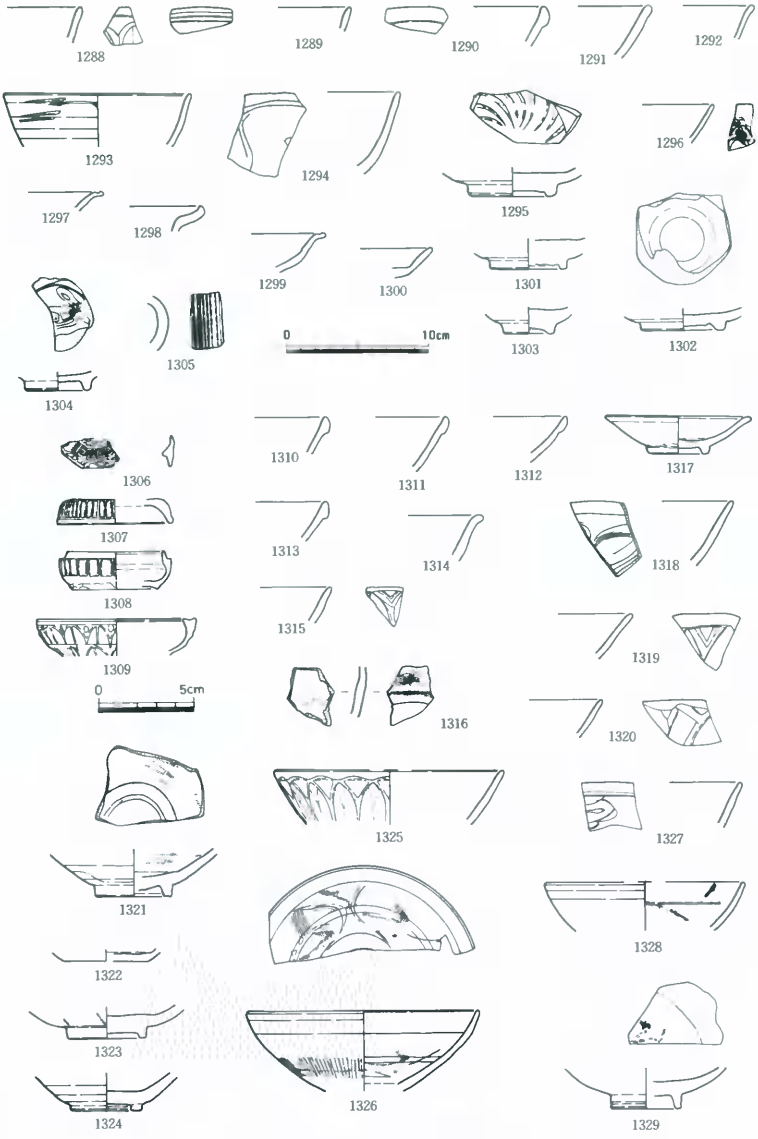
第186図　５区柱穴内出土遺物



第187図　5区包含層出土遺物　(1)

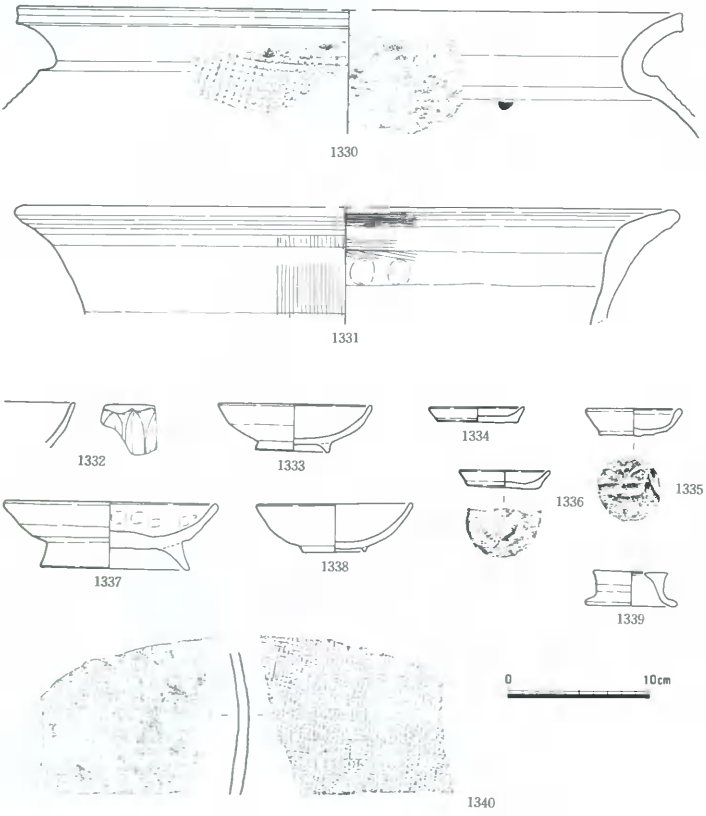


第188図　５区包含層出土遺物　(2)



第189図　5区包含層出土遺物 (3)

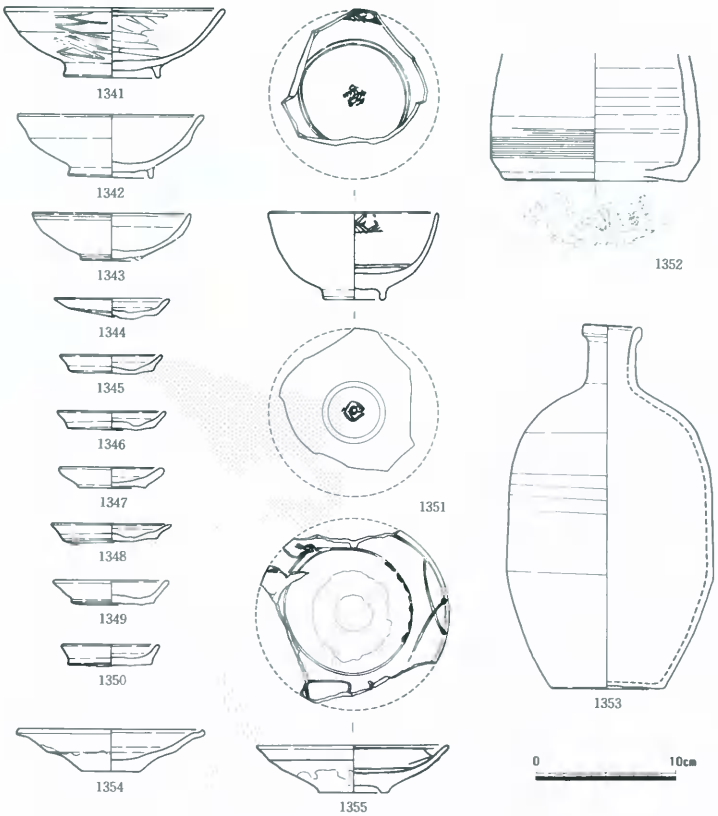
の碗で、内面に画花文がある。12～13世紀代のものである。**1324**は瀬戸の灰釉碗で、14～15世紀代のものである。貼付高台。**1326**は青磁の碗で、内面には櫛描文がみられる。同安窯のもので、12～13世紀のものである。**1306**は白磁で、壺か水注の蓋で、12～13世紀のものである。**1307～1309**は白磁の合子である。**1307**は蓋で、口径６㎝、器高1.3㎝を測る。12～13世紀のものである。**1308**は口径５㎝、器高２㎝を測る。12～13世紀代のものである。**1309**は口径8.4㎝を測る。第190図は土師器の鍋**1331**、椀**1333**、**1337**、**1338**、皿**1334～1336**、脚台**1339**、亀山焼の甕**1330**が出土している。　（松本）



第190図　５区包含層出土遺物（4）

6～9区出土遺物（第191図）

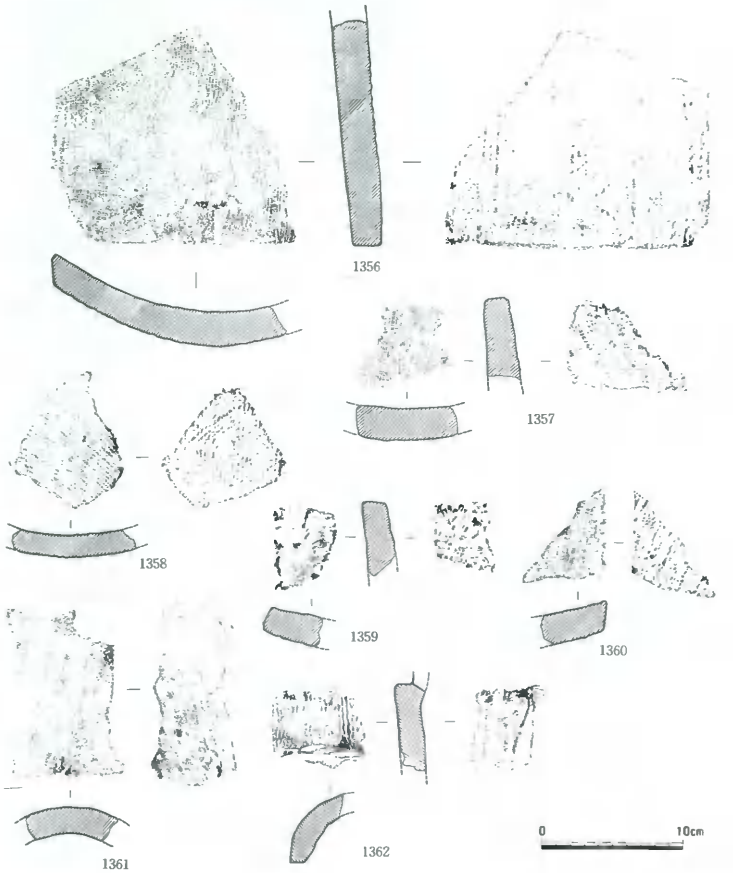
包含層などから出土した遺物に、早島式土器、近世陶器がある。早島式土器の椀**1341～1343**は少し小型化している。土師器の小皿**1344～1350**も多い。近世以降の遺物には、井戸－1から出土した肥前陶皿**1354**、肥前系陶皿**1355**、6区の集石付近から出土した肥前青磁染付碗、6区から出土した備前焼壺**1352**、同徳利**1353**がある。**1355**には鉄絵がみられる。**1354・1355**は17世紀前半に比定されている。**1351**の碗には、内面に「見込み五弁」、高台内に「渦福字」を描かれ、18世紀後半に比定されている。**1352**の壺底部には、△形の窯印がある。



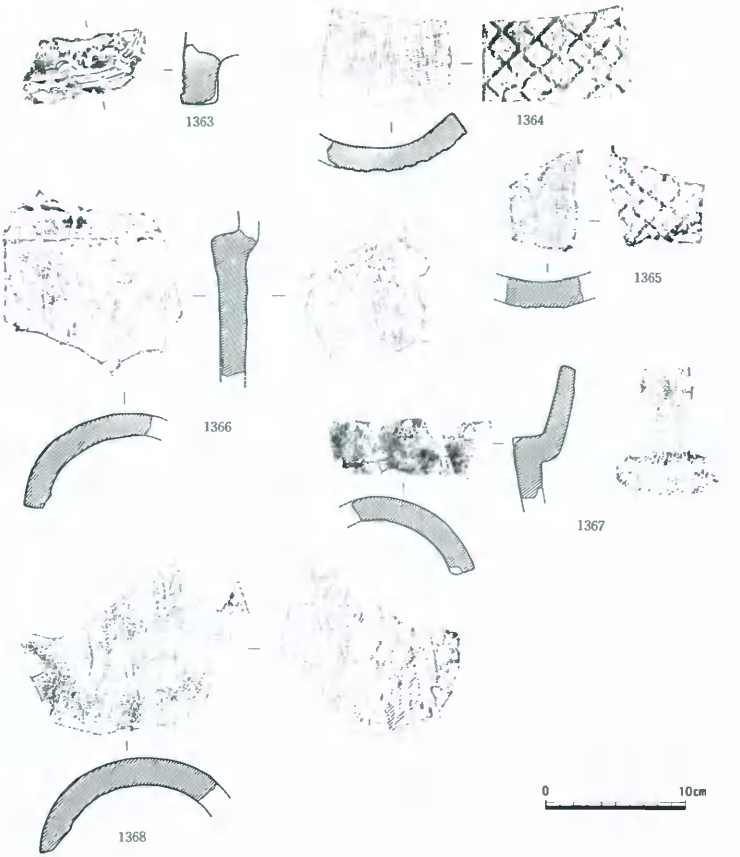
第191図　6～9区包含層出土遺物

瓦（第192・193図）

包含層中から瓦片が出土しているが、量が少なく、礎石建物が確認されていないことから、土筆山調査区内で使用されたかどうかは分らない。１区・２区からは縄目の平瓦**1356～1360**と丸瓦**1362**も出土している。４区では軒平瓦**1363**、格子目の平瓦**1364・1365**、丸瓦**1366・1368**、９区からは丸瓦**1367**が出土している。



第192図　１・２区出土遺物（瓦）

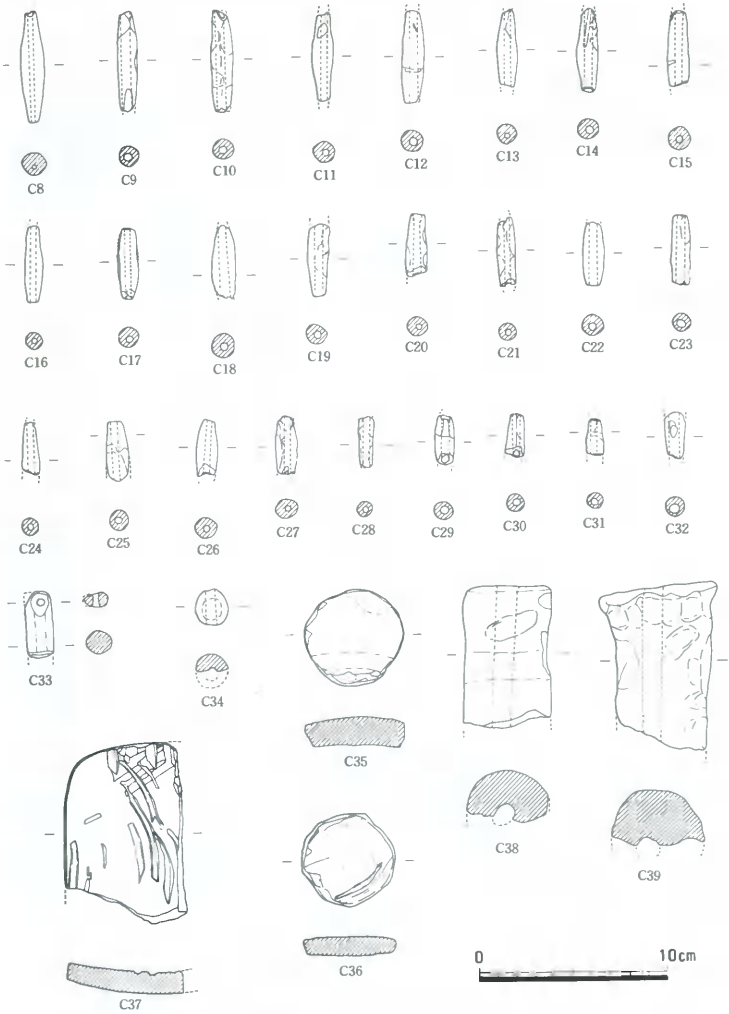


第193図　4・9区出土遺物（瓦）

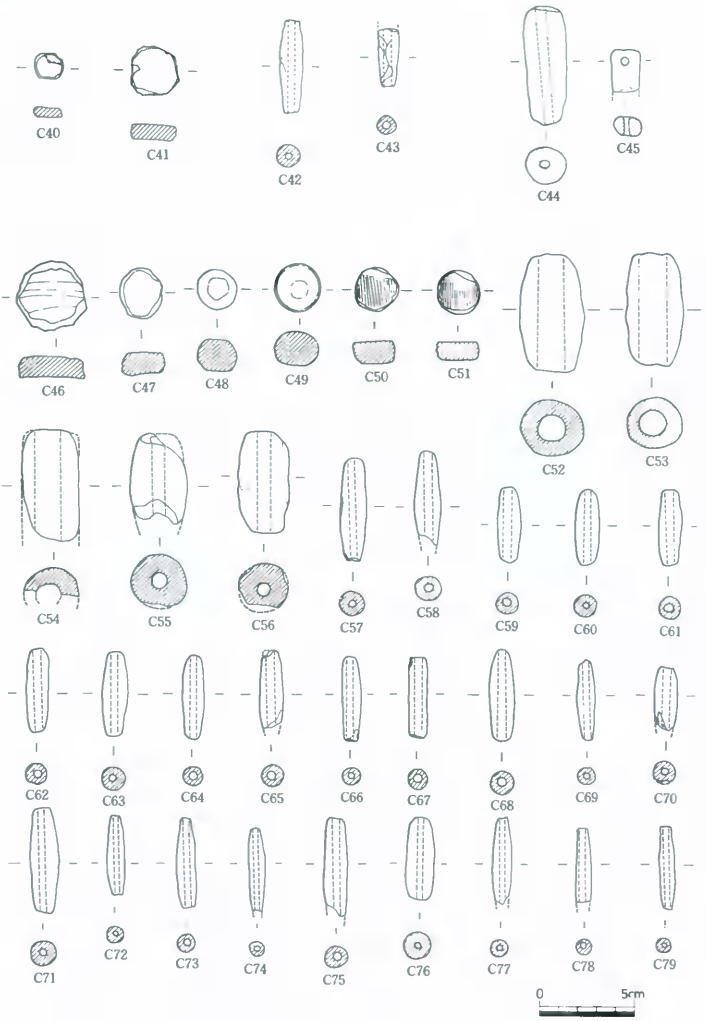
土製品（第194・195図）

中世の遺構検出中や包含層中から多数の土製品が出土している。ほとんどは土錘であり、付近の河川での漁労を推定することができる。土錘には5種類のものがみられる。最も多いのは細長い紡錘形をしたもの**C8～C32・C42～C43・C57～C79**である。長さ4～5㎝、太さ1㎝前後、重さ4～8ｇくらいのものである。次に多いのが、やや大きい土錘**C44・C52～C56**で長さ5～6㎝、太さ3㎝前後、重さ40ｇ前後を測る。最も大きいもの**C38・C39**は棒状を呈し、

径４～５㎝、重さ100ｇを超える。ほかに、細い棒状で、端部に円孔を穿つもの**C33・C45**、小型で球形を呈するもの**C34**などがある。ほかには、須恵器片を利用した硯**C37**、土器片などを利用した円盤状土製品**C35・C36・C40・C41・C46～C51**がある。



第194図　５区出土遺物（土製品）

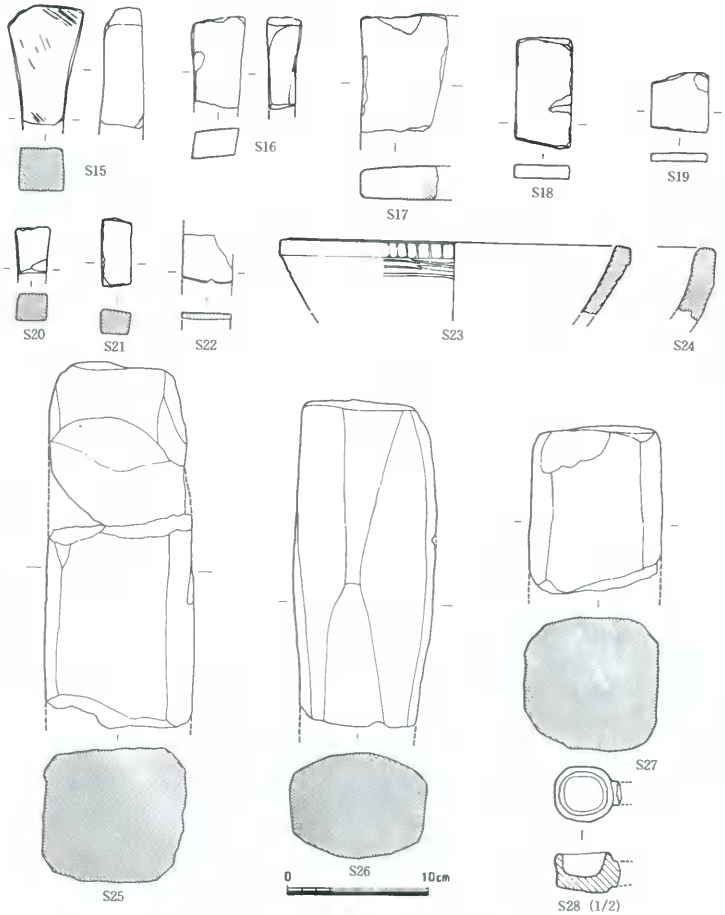


第195図　1・2・4・5・8・10区　出土遺物（土製品）

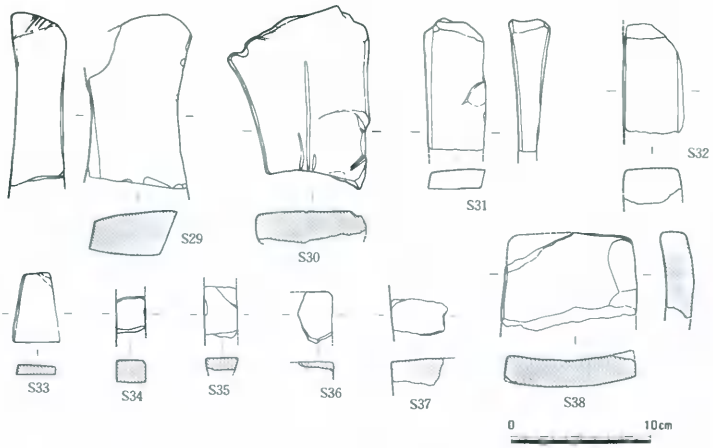
石製品（第196～199図）

中世の石製品には砥石が多いが、ほかに石鍋や硯などもある。

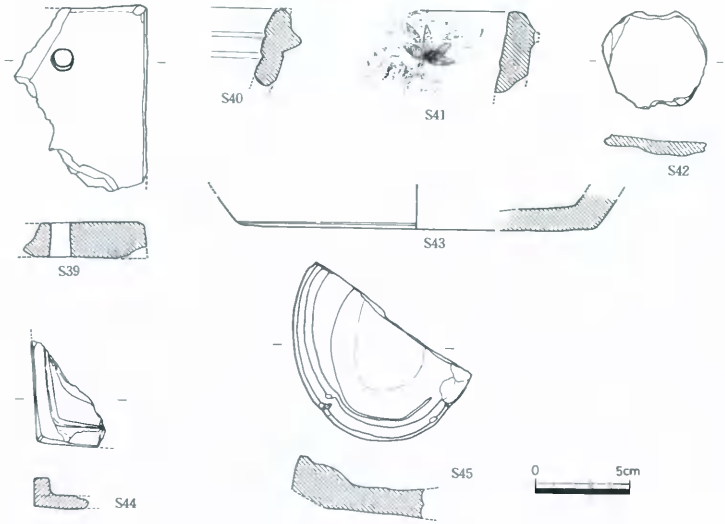
砥石**S15～S22・S29～S37・S46～S60**には、やや扁平なものと断面が方形を呈するものがある。石材には、流紋岩、頁岩、砂質泥岩、アプライト、緑色紋岩、砂岩などがあり、多種類の石材を利用している。石鍋**S23・S24・S38～S41・S43**は滑石製で、長崎県あたりからの移入



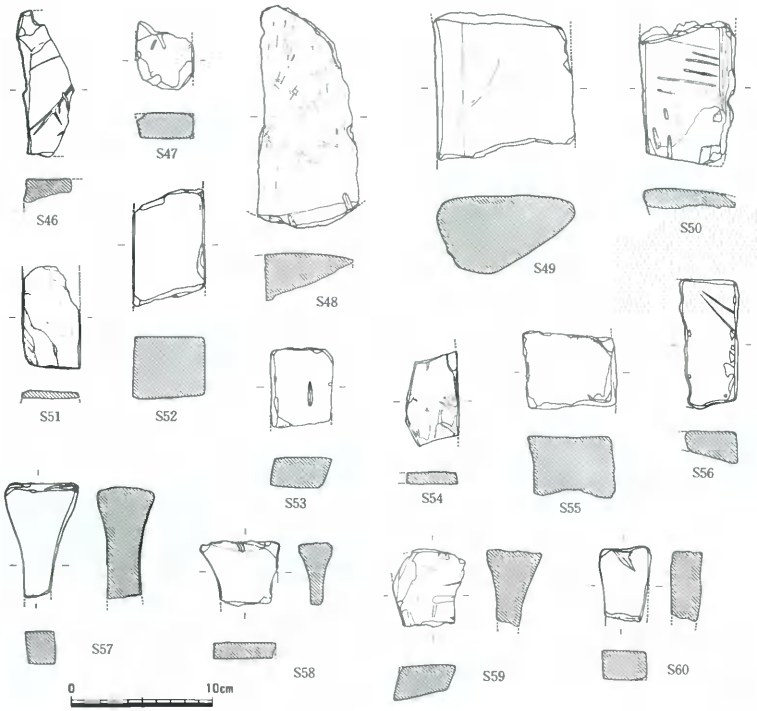
第196図　１・２・４ｂ東区出土遺物（石器）



第197図　4a・4b・8・10区出土遺物（石製品）



第198図　5区出土遺物（石製品）



第199図　５区出土遺物（石製品）

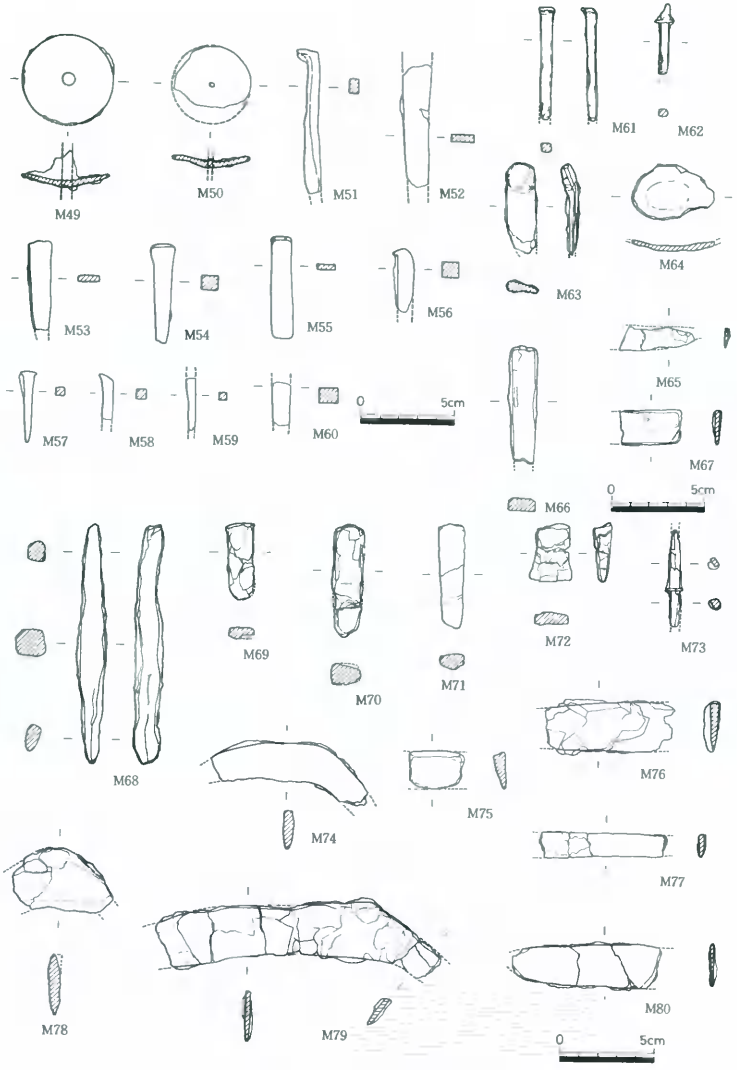
品である。凝灰岩をレンガ状にきったものS25～S27がある。

硯には方形のものS44と楕円形のものS45がある。S45は頁岩製である。S42の石錘は砥石を転用したものである。ほかに、１Ａ区から出土した小型のひしゃく形をした滑石製品S28がある。

鉄製品（第200図）

中世の包含層中からは多数の鉄製品が出土している。大部分は釘であるが、ほかに紡錘車、鎌、刀、刀子などもある。錆化が進行し、脆いものが多く、化学処理を行って保存している。ここでは釘以外のものを重点的に報告する。鉄滓もいくらか出土しているので、近くで鍛冶を行っていたものと推測される。

鉄製の紡錘車M49・M50は少し湾曲した円形の鉄板の中央に鉄製の軸を付けている。軸はわ



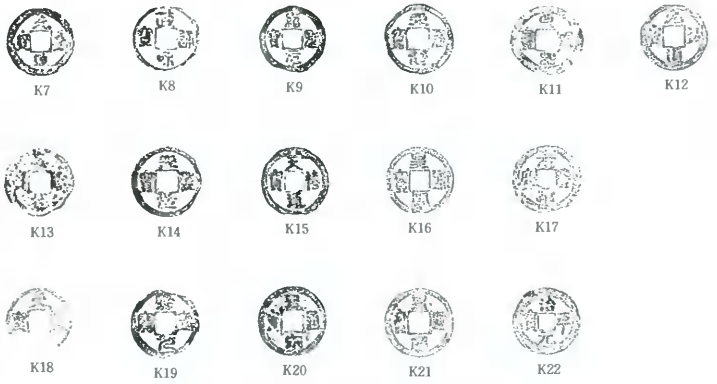
第200図　1・2・4・5区出土遺物（鉄製品）

ずかしか残っていない。大きさは、**M49**が径46㎜、**M50**が径33㎜を測る。釘**M51～M62・M66・M69～M72**には、断面が方形のものと扁平なものがある。頭部は一方へ折り曲げられている。**M61・M62**は５区の柱穴内から出土したものである。

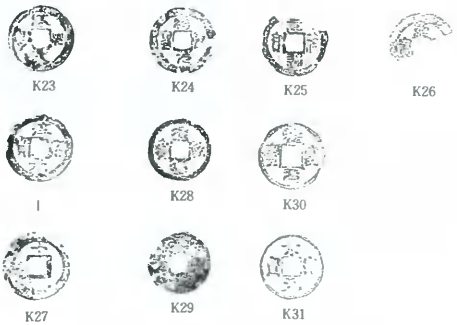
M68はタガネと考えられるもので、長さ128㎜、幅16㎜、重さ67.6ｇを測る。鎌**M74・M78・M79**は、いずれも湾曲したもので、近代のものに類似している。**M65・M67・M76・M77**は刀子、**M75**は刀と推定される。**M73**鉄鏃の一部である。

銅銭（第201～203図）

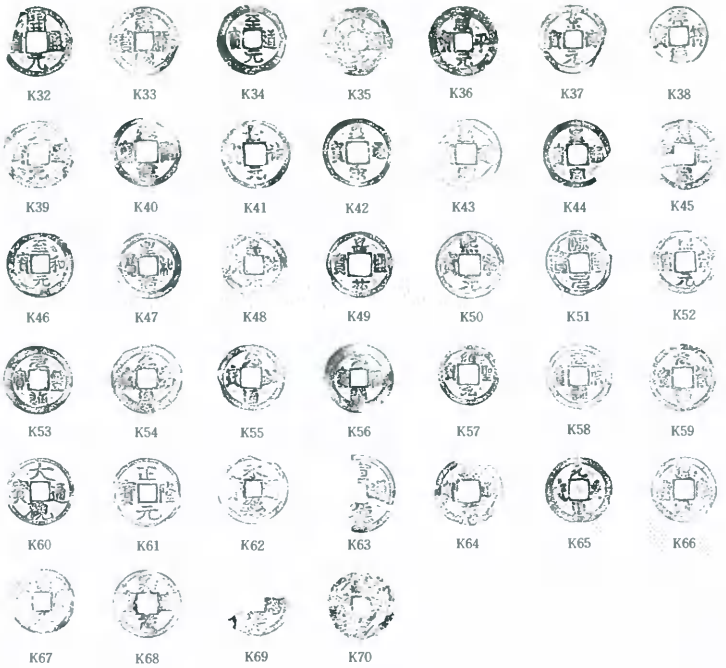
銅銭は１区～６区にかけて出土し、南寄りの地点では出土していない。包含層中から出土し



第201図　１・２区出土遺物（銅銭）（1/2）



第202図　４区出土遺物（銅銭）（1/2）



第203図　5区出土遺物（銅銭）（1/2）

たもののほかに、柱穴から出土する例もあり、意図的なものか検討を要するものもある。いずれも錆化が進行し、脆いものが多く、銭名が判読できないものも多い。詳細は表5の銅銭一覧表に載せている。

銭名の明らかなものには、元祐通宝、治平元宝、開元通宝、至道元宝、隆平元宝、景徳元宝、天聖元宝、至和元宝、熙寧元宝、大観通宝、正隆元宝、永楽通宝、宣徳通宝などがある。

大きさは、径24～25㎜、重さ1.2～1.5ｇくらいのものが大部分である。銭名から見ると、開元通宝（初鋳621年）から宣徳通宝（初鋳1433年）のものまである。　（正岡）

小　結

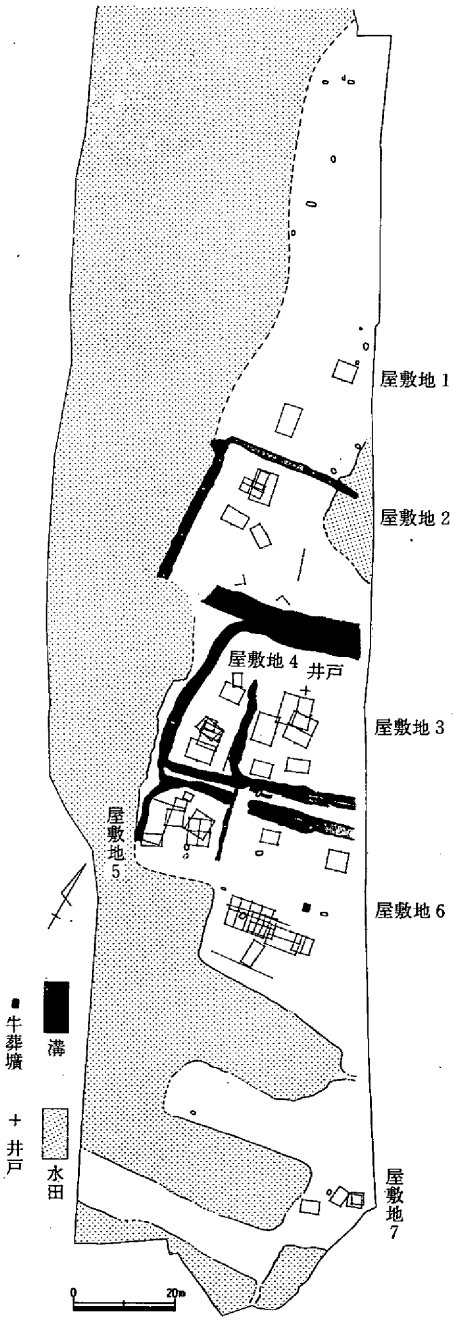
発掘調査の結果、土筆山調査区は旧足守川によって形成された、南北に細長い微高地上につくられた集落であることを確認した。以下、調査結果をもとに若干のまとめをしておきたい。

１．集落構成について

集落は溝で方形に区画されているが、境界の不明瞭な区画も存在する。この方形に区画された範囲内には、掘立柱建物、土壙、墓地などが存在するため、これらの区画を「屋敷地」と考えることが可能である。これらの屋敷地は、溝で区画されるもの（屋敷地２～６）、境界の不明瞭なもの（屋敷地１、７）を含めて、調査範囲内において７区画の屋敷地が想定可能である。

屋敷地１は集落の東端にあって、屋敷地２と共有する北辺の区画溝のみで、他は水田によって区画されている。敷地内には掘立柱建物２棟、土壙、土壙墓が検出されている。特に、集落外れの水田近くに土壙墓が多く存在する。

屋敷地２は長さ30ｍ程の北辺区画溝が集落東側の水田と接続する導入水口となっており、西辺区画溝は集落と水田を区画している。敷地内には掘立柱建物７棟、柵列１、炉、土壙がある。特に炉跡－１（第118図）は基底部だけであるが、土師器椀、皿などを焼成した炉の可能性をもつ遺構とも考えられる。屋敷地４は３の拡張であり、拡張期の区画規模は南北30ｍ、東西40ｍ以上である。敷地内には掘立柱建物12棟、柵列１、土壙、土器溜りなどが多数検出されている。土壙には炉壁片、焼土塊、炭などを投棄したもの（土壙－13、14）や報文では土壙－33としているもののように、炉を想定させる遺構



第204図　遺構略図（1/1,500）

の存在や、多量の土器や焼土塊などが出土することから、この敷地内で土師器などを焼成した可能性がある。屋敷地5は12×20mの規模をもち、南辺は水田で区画されている。敷地内には掘立柱建物7棟、土壙、土壙墓がみられた。屋敷地6は北辺と西辺の1部が溝（25×30m）で区画されている。特に西辺の南半分と南辺は水田によって区画されている。この敷地内には掘立柱建物7棟、柵列1、土壙墓、土壙が検出されている。屋敷地6は区画溝が存在せず、西辺は水田によって区画されている敷地である。敷地内には掘立柱建物4棟、土壙、土壙墓が検出されている。

このように、区画された屋敷地は1辺は15～30m程の正方形ないし長方形を呈するが、いづれも屋敷地7を除いて、区画溝を他の屋敷地と共有している。明瞭な区画を持たない屋敷地1、7は集落から外れるため、これらの屋敷地に確認された遺構が、居住施設もしくは農作業等に関係する施設か不明である。特に屋敷地7は屋敷地6から約40m程南に存在するため、別集落の可能性も想定できる。

各屋敷地内には数棟の掘立柱建物が重複して存在するため、2－3時期に細分できると思われるが、集落内における各時期の建物構成を明らかにすることはできなかった。しかし、柱穴数の密度が建物がつくられた回数に比例すると仮定すれば、屋敷地3、4が他の屋敷地と比べて建物数が最も多く、かつ長期にわたって建物が存在したところであったと云えるであろう。

屋敷地内の建物構成をみると、廂付き建物など大規模な建物が確認されてないため、屋敷地内は各時期とも数棟の中小の掘立柱建物のみで構成された集落であったと推察される。なお、井戸と思われる遺構は、屋敷地3に1基のみ検出されているが、他の屋敷地内に井戸がみられないことが注目される。恐らく集落の東付近に共同の井戸を持っていたと考えられる。

2．中世墓について

本調査区で検出された中世墓と思われる遺構は19基ある。（なお、報文では土壙1、7としているものも、出土遺物が副葬品と推定されるため加えている。）そのうち、人骨が出土している16基についてまとめておきたい。

検出された墓は屋敷地と区画された中にあるものと、集落の縁辺に所在するものの2形態が存在する。

墓は木棺に埋葬された人（中世墓3～5、11～13）と埋葬施設を持たない土壙に埋葬された人に区別することができるが、埋葬姿勢はいずれも屈葬であった。なお、頭位、性別など人骨の所見については付載2を参照されたい。

副葬品の埋納位置は、頭部を中心とするが、遺体の両側や脚部にも埋納されている。また、中世墓－7、14のように胸部に土師器の椀、皿を置く例もみられ、埋納方法は各種存在する。これらの副葬品には輸入陶磁器、和鏡、鉄製品、土師器、瓦器、土製品があるが、埋葬時期は

土師器椀の形態からみて、いずれも13世紀後半の年代を示している。そして、表－1でみられるように、集落の縁辺に埋葬された人が屋敷地内に埋葬された人に比べて、副葬品の内容が圧倒的に豊富である。特に布につつんだ和鏡を伴う中世墓－5は成人女性ではあるが、副葬品の内容からみて、集落の上層階級の人であったことを想定させることから、墓に階層の格差が存在していたことを想定させる。

3．特異な遺構について

本調査区における特異な遺構として、土壙－48と63がある。土壙48は報文において詳細に述べたが、再度強調しておきたい。すなわち、この遺構内における遺物及びその出土状態は極めて特異な在り方をしているからである。したがって、本遺構の性格を、建物地鎮か水利に関係する祭祀遺構のいずれかを想定させるものであり、本調査区における注目すべき遺構として取り上げておきたい。土壙－63は屋敷地と屋敷地の間に位置し、出土した骨から牛葬壙であることが判明した。このような遺構は、中世においても検出例の少ない遺構である。農耕牛としても貴重な労力であった動物であるため、本来は埋葬も丁寧に行われていたものと推察される。

表－1　副葬品一覧表

	白磁			土師器			瓦器		土錘	和鏡	鉄製品			その他	備考
	碗	皿	合子	椀	皿	脚台	椀	皿			刀	包丁	錐		
土壙1				1	9	1			1		1	1			
中世墓－1	1			2	5						1			土師器椀5 土師器皿18	熟年・女性
2				1	2										成人・女性
3				2	3						1		1	鉄釘　2 土師器皿6	熟・老年・男性
4				1	5	5	1				1			土師器椀1 土師器皿10	成人(女性)
5	1		1	3	3					1	1				成人(女性)
6				1										土師器皿2 脚台　1	壮年(女性)
7				3	1									土鍋など小破片あり	壮年・男性
8															
9					1									土鍋片など	
10															
11														鉄釘2＋α	壮年・男性
12															小児・不明
13															
14					2									鉄釘4＋α	壮・熟年・男性
15															壮年・男性
16				5	1	1									壮年・不明
17															幼児・不明
18				1							1				成人・不明
19															成人・不明

さらに類例が増加するものと思われる遺構である。

4．遺物について

日常生活に使用する道具は各種あるが、本調査区で注目すべき遺物として、ここでは土師器椀、硯、石鍋をあげ、若干説明を加えておきたい。

土師器椀は報文においては早島式土器とも述べているものである。この土器はその器形から高台付、無高台そしてヘソ椀と呼ばれる底部が上げ底になったものの3形態が存在する。

高台付椀は詳細に分類可能であるが、ここでは、法量や高台の変化によって大きく3形態に分類しておきたい。すなわち、第1類は**49**のような椀であり、第2類は**377**、第3類は**169**のように高台部が形骸化してしまった椀である。無高台の椀は**194**のような土器と**76**のような土器に細分可能であるが、**194**にみられるタイプは高台が形骸化した**193**と共伴するものと、土壙－49出土のようにヘソ椀と共伴するものが認められる。**76**はヘソ椀と共伴している。一方、土壙－48で一括出土したヘソ椀は器面調整で2種類に細分でき、高台付椀を共伴していない。しかし、土壙－14で第2類に分類される高台椀が1点だけヘソ椀と共伴しているが、形態からみて同時期生産のものではないため、ヘソ椀には高台付椀が共伴しないものと推察される。

このように、椀の器種変化は高台付椀から無高台に変化し、さらにヘソ椀に至るものと考えられるが、時期的には12世紀後葉から14世紀中葉の所産と思われる。

なお、土師器椀については、まだ充分に検討してないため、他の共伴資料との関係についても併せて再度検討を試みたい。

石鍋は滑石製である。形態は口縁部直下に鍔などを持たないもの**S1**、**24**と口縁部直下に鍔が周るもの**S6**、**40**、**41**の2種類に分類できる。さらに、鍔の周るものは、全て鍔の形態が異なっている。これら滑石製の製品は石材が加工しやすい特徴があるため、破損したものは再加工されて他の製品となっている。**S1**、**9**は温石（懐炉）として再加工されている。穿孔は紐を通す穴である。**S28**はひしゃく形製品に、**S41**は口縁内面に見事な紅葉のレリーフが施されており、なんらかに転用されている。これら滑石製の石鍋は**S1**を除いて包含層出土である。再加工された**S1**は土壙－30から出土したが、共伴する遺物が14世紀前半頃と考えられることから、それ以前の年代を与えることができる。いずれにしても、本調査区出土の石鍋は13世紀後半から14世紀前半頃に使用されるものである。

硯は石製品、土器（須恵器）片の再利用したものがあり、形態は長方形と楕円形を呈するものの2種類が認められる。時期は遺構に伴わないため断定できないが、他の包含層出土遺物からみて、13世紀後半から14世紀前半のものと思われる。

以上のように、本調査区は日常生活における全ての遺構が検出された遺跡であり、今後さらに究明しなければならない課題の多い遺跡である。（松本）

表－２　津寺遺跡土筆山調査区遺構番号新旧対照表

新	旧	新	旧	新	旧
建物－１	4a区SB01	建物－31	６区SB05	土壙－25	５区土壙103
2	4a区SB02	32	８区SB04	26	５区土壙104
3	4a区SB03	33	８区SB03	27	５区土壙108
4	4a区SB05	井戸－１	６区井戸１	28	５区土壙111
5	4a区SB06	2	６区井戸２	29	５区土壙112
6	５区SB01	3	６区井戸３	30	５区土壙114
7	５区SB02	土壙－１	1A区土器だまり２	31	５区土壙116
8	５区SB03	2	1A区集石遺構２	32	５区土壙117
9	５区SB04	3	1A区集石遺構１	33	５区土壙119
10	５区SB05	4	1A区中世墓６	34	５区土壙126
11	５区SB06	5	4b東区土壙11	35	５区土壙129
12	５区SB07	6	4b東区土壙12	36	５区土壙130
13	５区SB08	7	4b東区土壙15	37	５区土壙141
14	５区SB09	8	4b東区土壙14	38	５区土壙144
15	５区SB10	9	4b東区土壙18	39	５区土壙204
16	５区SB11	10	4b東区土壙19	40	5d区土壙５
17	５区SB12	11	５区土壙５	41	5d区土壙７
18	５区SB13	12	５区土壙６	42	5d区土壙26
19	５区SB14	13	５区土壙８	43	5d区土壙20
20	５区SB21	14	５区土壙10	44	5d区土壙21
21	５区SB22	15	５区土壙13	45	5d区土壙24
22	５区SB23	16	５区土壙15	46	5d区土壙28
23	５区SB24	17	５区土壙23	47	5d区土壙36
24	５区SB26	18	５区土壙24	48	5d区土壙39
25	５区SB27	19	５区土壙26	49	5d区土壙43
26	５区SB25	20	５区土壙27	50	柱穴
27	６区SB01	21	５区土壙28	51	６区土壙１
28	６区SB02	22	５区土壙29	52	６区土壙２
29	６区SB03	23	５区土壙30	53	６区集石１
30	６区SB04	24	５区土壙36	54	６区土壙６

新	旧	新	旧	新	旧
土壙－55	6区土壙11	中世墓－7	4a区土壙墓1	溝－7	5区溝20
56	6区土壙12	8	4a区土壙墓2	8	5区溝21
57	6区土壙13	9	4a区土壙墓4	9	5区溝102
58	6区土壙15	10	4a区土壙墓3	10	5区溝101
59	6区土壙16	11	5区土壙墓21	11	5区溝103
60	6区土壙25	12	5区土壙墓22	12	5区溝105
61	6区土壙29	13	5区土壙墓23	13	5区溝109
62	10区土壙2	14	5区土壙墓31	14	5区溝104
63	6区土壙29	15	6区土壙墓1	15	5d区溝6
64	10区土壙3	16	6区土壙墓2	16	5d区溝7
65	10区土壙4	17	6区土壙墓3	17	5d区溝8
66	10区土壙5	18	7区南土壙墓1	18	5d区溝8
炉跡－1	4b東区炉跡	19	8区土壙墓1	19	5区溝108
中世墓－1	1A区中世墓7	溝－1	4a区溝20	土器だまり－1	1A区土器だまり1
2	1A区中世墓5	2	4a区溝22	2	4b東区土器だまり1
3	1A区中世墓2	3	4a区溝23·4c区溝1	3	4b東区土器だまり2
4	1区中世墓1	4	5区溝17	4	4b東区土器だまり3
5	2区中世墓3	5	5区溝18	5	5区土器だまり
6	2区中世墓4	6	5区溝19		

表－3　津寺遺跡土筆山調査区土製品一覧表

図	番号	遺　物	出土地区	遺　構	材　質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備　考	時期
50	C1	土錘	1A区	土壙1	土	39	14	14	7.2	一部欠損	中世
78	C2	円盤状土製品	5区	土壙29	〃	22	22	16	8.7	完存	〃
〃	C3	土錘	〃	〃	〃	27	9	9	2.0	一部欠損	〃
142	C4	〃	4b区	溝4	〃	32	8	8	2.1	〃	〃
165	C5	〃	5区	溝15	〃	54	14	18	2.6	完存	〃
〃	C6	〃	〃	〃	〃	47	11	11	5.7	双孔	〃
〃	C7	〃	〃	〃	〃	38	8	8	2.4	〃	〃
194	C8	〃	〃	包含層	〃	59	15	12	6.55	一部欠損	〃
〃	C9	〃	〃	〃	〃	52	11	11	5.2	〃	〃
〃	C10	〃	〃	〃	〃	54	11	11	5.7	〃	〃
〃	C11	〃	〃	〃	〃	48	11	11	5.4	〃	〃
〃	C12	〃	〃	〃	〃	49	12	11	6.0	〃	〃
〃	C13	〃	〃	〃	〃	41	11	11	3.5	〃	〃
〃	C14	〃	〃	〃	〃	43	11	10	3.5	〃	〃
〃	C15	〃	〃	〃	〃	40	11	12	5.6	〃	〃
〃	C16	〃	〃	〃	〃	40	9	9	3.1	〃	〃
〃	C17	〃	〃	〃	〃	37	11	10.5	4.0	〃	〃
〃	C18	〃	〃	〃	〃	39	12	13	6.0	〃	〃
〃	C19	〃	〃	〃	〃	39	11	10.5	4.0	〃	〃
〃	C20	〃	〃	〃	〃	34	12	10	3.8	〃	〃
〃	C21	〃	〃	〃	〃	37	9	9	2.9	〃	〃
〃	C22	〃	〃	〃	〃	34	11	11	4.2	〃	〃
〃	C23	〃	〃	〃	〃	37	10	10	3.5	〃	〃
〃	C24	〃	〃	〃	〃	28	9	9	1.6	〃	〃
〃	C25	〃	〃	〃	〃	32	12	11	3.5	〃	〃
〃	C26	〃	〃	〃	〃	31	11	11	3.6	〃	〃
〃	C27	〃	〃	〃	〃	31	11	10	3.5	〃	〃
〃	C28	〃	〃	〃	〃	26	8	8	1.5	〃	〃
〃	C29	〃	〃	〃	〃	26	10	10	2.5	〃	〃
〃	C30	〃	〃	〃	〃	22	10	9	1.8	〃	〃
〃	C31	〃	〃	〃	〃	18	10	8.5	1.2	〃	〃
〃	C32	〃	〃	〃	〃	24	12	10	2.0	〃	〃
〃	C33	〃	〃	〃	〃	34	15	8	6.7	棒状	〃
〃	C34	〃	〃	〃	〃	18	17	(18)	2.7	球状	〃
〃	C35	円盤状土製品	〃	〃	〃	52	50	14	45.1	完存	〃
〃	C36	〃	〃	〃	〃	49	45	9	23.1	〃	〃
〃	C37	硯	〃	〃	〃	94	63	12	116.8	一部欠損	〃
〃	C38	土錘	〃	〃	〃	75	43	24	105.1	大型棒状	〃
〃	C39	〃	〃	〃	〃	70	50	25	131.0	〃 棒状	〃

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備考	時期
195	C40	円盤状土製品	5区	柱穴	土	15	15	5	1.2	完存	中世
〃	C41	〃	〃	〃	〃	26	26	9	7.4	〃	〃
〃	C42	土錘	〃	〃	〃	50	11	11	6.9	〃	〃
〃	C43	〃	〃	〃	〃	31	10	10	3.0	一部欠損	〃
〃	C44	〃	8区	水田	〃	85	30	27	78.8	完存	〃
〃	C45	〃	10区	包含層	〃	30	21	18	12.2	双孔	古代?
〃	C46	円盤状土製品	1区	〃	〃	36	34	11	20.0	完存	中世
〃	C47	〃	1A区	〃	〃	27	23	12	8.0	〃	〃
〃	C48	〃	〃	〃	〃	21	21	17	9.0	〃	〃
〃	C49	土玉	1区	廃土中	〃	26	24	18	11.0	〃	〃
〃	C50	円盤状土製品	4a区	P14	〃	24	23	12	8.0	〃	〃
〃	C51	〃	〃	水田層	〃	24	23	11	7.0	〃	〃
〃	C52	土錘	1A区	包含層	〃	63	35	30	56.0	〃	〃
〃	C53	〃	〃	〃	〃	59	30	27	41.0	〃	〃
〃	C54	〃	2区	〃	〃	59	28	14	21.0	欠損	〃
〃	C55	〃	〃	〃	〃	47	30	26	30.0	〃	〃
〃	C56	〃	1区	〃	〃	54	27	25	35.0	一部欠損	〃
〃	C57	〃	〃	〃	〃	55	13	12	10.0	完存	〃
〃	C58	〃	1A区	〃	〃	51	14	13	7.0	一部欠損	〃
〃	C59	〃	1区	〃	〃	40	12	11	5.0	完存	〃
〃	C60	〃	〃	〃	〃	41	13	12	6.0	〃	〃
〃	C61	〃	〃	〃	〃	41	12	12	6.0	〃	〃
〃	C62	〃	〃	〃	〃	45	13	11	7.0	〃	〃
〃	C63	〃	1A区	〃	〃	45	13	13	7.0	〃	〃
〃	C64	〃	〃	〃	〃	44	11	11	5.0	〃	〃
〃	C65	〃	1区	〃	〃	42	12	12	6.0	一部欠損	〃
〃	C66	〃	〃	〃	〃	46	10	9	4.0	完存	〃
〃	C67	2区	〃	〃	〃	42	11	10	5.0	〃	〃
〃	C68	〃	〃	〃	〃	49	13	12	8.0	〃	〃
〃	C69	〃	〃	耕土	〃	42	9	9	3.0	〃	〃
〃	C70	〃	〃	包含層	〃	34	13	12	5.0	一部欠損	〃
〃	C71	〃	4a区	〃	〃	56	14	13	9.0	完存	〃
〃	C72	〃	〃	〃	〃	42	9	8	3.0	〃	〃
〃	C73	〃	〃	〃	〃	47	10	9	3.0	〃	〃
〃	C74	〃	〃	〃	〃	44	9	8	3.0	一部欠損	〃
〃	C75	〃	〃	〃	〃	52	12	11	7.0	〃	〃
〃	C76	〃	〃	〃	〃	44	15	14	10.0	完存	〃
〃	C77	〃	〃	〃	〃	46	10	9	4.0	一部欠損	〃
〃	C78	〃	〃	溝	〃	39	9	8	2.0	〃	〃
〃	C79	〃	〃	包含層	〃	44	8	8	2.0	完存	〃

表－４　津寺遺跡土筆山調査区石製品一覧表

図	番号	遺　物	出土地区	遺　構	材　質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	備　考	時期
80	S１	石鍋	５区	土壙30	滑石				113.4	破片	中世
〃	S２	砥石	〃	〃	流紋岩	58	32	23	75.5	〃	〃
85	S３	〃	〃	土壙35	流紋岩質	42	35	16	34.3	〃	〃
145	S４	〃	4c区	溝３	11	31.5	21.5	12	13.8	〃	〃
162	S５	〃	５区	溝９	砂質泥岩	80	34	35	155.0	破片	〃
163	S６	石鍋	〃	〃	滑石			21	198.7	〃	〃
165	S７	砥石	〃	溝15	流紋岩	89	51	20	110.4	〃	〃
〃	S８	〃	〃	溝12	〃	73	91	32	345.4	〃	〃
〃	S９	〃	〃	溝13	〃	70	64	25	135.9	〃	〃
〃	S10	硯	〃	〃	頁岩	38	38	22	42.3	〃	〃
〃	S11	砥石	〃	〃	流紋岩	72	52	15	81.5	〃	〃
〃	S12	〃	〃	〃	頁岩	87	25	16	48.8	〃	〃
〃	S13	〃	〃	〃	〃	55	34	22	80.0	〃	〃
186	S14	〃	〃	柱穴	流紋岩	60	45	19	79.0	〃	〃
196	S15	〃	１区	包含層	泥岩	85	54	29	173.0	〃	〃
〃	S16	〃	1A区	〃	流紋岩	63	35	24	79.3	〃	〃
〃	S17	〃	〃	〃	〃	79	60	24	196.6	〃	〃
〃	S18	〃	２区	〃	頁岩	35	34	5	7.0	〃	〃
〃	S19	〃	〃	柱穴	〃	42	39	6	16.3	〃	〃
〃	S20	〃	1A区	土壙	泥紋岩	31	24	23	26.6	〃	〃
〃	S21	〃	２区	耕土	〃	47	20	17	29.9	〃	不明
〃	S22	〃	〃	包含層	頁岩	35	38	5	7.0	〃	中世
〃	S23	石鍋	4b東区	〃	滑石				118.2	〃	〃
〃	S24	〃	〃	〃	〃				236.0	〃	〃
〃	S25	レンガ状石製品	１A区	〃	凝灰岩？	256	111	94		一部欠損	〃
〃	S26	〃	〃	〃	〃	228	96	74	1350.0	〃	〃
〃	S27	〃	１区	〃	〃	114	93	93		〃	〃
〃	S28	ひしゃく形石製品	1A区	〃	滑石	23	20	15	7.4	ほぼ完存	〃
197	S29	砥石	4a区	〃	砂質泥岩	122	65	35	389.5	破片	〃
〃	S30	〃	〃	土器だまり	流紋岩	129	99	27	438.3	〃	〃
〃	S31	〃	〃	溝	砂質泥岩	92	27	28	133.1	〃	〃
〃	S32	〃	〃	包含層	流紋岩	78	42	25	102.5	〃	〃
〃	S33	〃	８区	水田	頁岩	50	32	8	17.6	完存	古代?
〃	S34	〃	4b東区	土壙	流紋岩	24	21	16	13.9	破片	中世
〃	S35	〃	4a区	包含層	頁岩	35	23	9	11.4	〃	〃
〃	S36	〃	〃	〃	〃	37	27	6	5.6	〃	〃
〃	S37	〃	4b東区	柱穴	流紋岩	40	25	21	26.0	〃	〃
〃	S38	石鍋	4a区	包含層	滑石				236.0	〃	〃
〃	S39	〃	５区	〃	〃				210.2	〃	〃

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備考	時期
197	S40	石鍋	5区	包含層	滑石				38.9	破片	中世
〃	S41	〃	〃	〃	〃				80.8	〃	〃
〃	S42	石錘	〃	〃	頁岩	55	52	11	30.3	〃	〃
〃	S43	石鍋	〃	〃	滑石				93.9	〃	〃
〃	S44	硯	〃	〃		52	36	17	23.1	〃	〃
〃	S45	〃	〃	〃	頁岩	61	102	29	236.9	〃	〃
〃	S46	砥石	〃	〃	〃	105	34	18	65.0	〃	〃
〃	S47	〃	〃	〃	流紋岩	46	40	20	44.7	〃	〃
〃	S48	〃	〃	〃	頁岩	155	72	37	510.3	〃	〃
〃	S49	〃	〃	〃	アプライト	100	93	57	799.3	〃	〃
〃	S50	〃	〃	〃	緑色紋岩	100	66	16	180.8	〃	〃
〃	S51	〃	〃	〃	頁岩	71	40	6	24.8	〃	〃
〃	S52	〃	〃	〃	流紋岩	75	48	46	290.5	〃	〃
〃	S53	〃	〃	〃	砂岩	57	43	29	104.7	〃	〃
〃	S54	〃	〃	〃	頁岩	59	36	8	33.8	〃	〃
〃	S55	〃	〃	〃	流紋岩	60	52	47	216.5	〃	〃
〃	S56	〃	〃	〃	頁岩	90	40	25	136.5	〃	〃
〃	S57	〃	〃	〃	流紋岩	80	48	46	151.7	〃	〃
〃	S58	〃	〃	〃	〃	45	56	26	53.5	〃	〃
〃	S59	〃	〃	〃	〃	62	49	39	94.4	〃	〃
〃	S60	〃	〃	〃	〃	53	34	24	62.9	〃	〃

表－5　津寺遺跡土筆山調査区金属器一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備考	時期
13	M1	釘	4a区	建物2	鉄	14	7	6	1.2	破片	中世
50	M2	刀子	1A区	土壙1	〃	133	25	6	22.5	欠損	〃
〃	M3	刀	〃	〃	〃	101	22	4	20.2	〃	〃
66	M4	釘	5区	土壙17	〃	52	6	8	3.8	ほぼ完存	〃
〃	M5	〃	〃	〃	〃	57	14	12	12.7	〃	〃
73	M6	〃	〃	土壙24	〃	52	8	9	5.8	〃	〃
79	M7	装飾品	〃	土壙30	銅	20	18	1	2.9	〃	〃
80	M8	釘	〃	〃	鉄	74	9	6	9.7	欠損	〃
82	M9	〃	〃	土壙32	〃	47	6	6	3.9	ほぼ完存	〃
85	M10	〃	〃	土壙35	〃	53	11	9	13.9	欠損	〃
〃	M11	〃	〃	〃	〃	77	10	10	17.0	〃	〃
〃	M12	〃	〃	〃	〃	30	5	3	0.9	〃	〃
102	M13	〃	〃	土壙50	〃	235	133	13	443.5	完存	〃
119	M14	刀子	1A区	中世墓1	〃	164	26	4	30.0	ほぼ完存	〃
121	M15	〃	1区	中世墓3	〃	191	21	4	58.6	欠損	〃

図	番号	遺　物	出土地区	遺　構	材　質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備　考	時期
121	M16	包丁	1区	中世墓3	鉄	204	28	5	65.7	欠損	中世
〃	M17	錘	〃	〃	〃	71	4	4	5.6	〃	〃
〃	M18	釘	〃	〃	〃	47	7	7	7.0	〃	〃
〃	M19	〃	〃	〃	〃	38	8	5	2.5	〃	〃
122	M20	刀子	〃	中世墓4	〃	212	22	5	28.1	完存	〃
124	M21	〃	1A区	中世墓5	〃	147	23	5	35.8	欠損	〃
〃	M22	釘	〃	〃	〃	81	9	5	6.6	〃	〃
〃	M23	〃	〃	〃	〃	43	13	6	6.4	〃	〃
〃	M24	〃	〃	〃	〃	59	9	5	8.7	〃	〃
〃	M25	〃	〃	〃	〃	29	7	5	2.4	〃	〃
〃	M26	〃	〃	〃	〃	26	5	4	0.8	〃	〃
〃	M27	〃	〃	〃	〃	22	6	4	0.9	〃	〃
〃	M28	〃	〃	〃	〃	21	5	4	1.0	〃	〃
〃	M29	〃	〃	〃	〃	26	5	4	0.8	〃	〃
〃	M30	〃	〃	〃	〃	32	7	4		〃	〃
130	M31	〃	5区	中世墓10	〃	21	9	9	3.3	破片	〃
〃	M32	〃	〃	〃	〃	24	6	5	1.3	〃	〃
132	M33	〃	〃	中世墓13	〃	63	11	11	10.3	完存	〃
〃	M34	〃	〃	〃	〃	21	11	6	2.5	欠損	〃
〃	M35	〃	〃	〃	〃	20	8	5	2.3	〃	〃
〃	M36	〃	〃	〃	〃	36	11	10	5.8	〃	〃
137	M37	刀子	6区	中世墓17	〃	155	26	4	28.2	一部欠損	〃
153	M38	タガネ	5区	溝4	〃	155	28	20	148.0	〃	〃
〃	M39	釘	〃	〃	〃	44	7	7	4.7	〃	〃
162	M40	〃	〃	溝10	〃	47	12	9	12.4	〃	〃
165	M41	〃	〃	溝15	〃	52	11	7	9.0	〃	〃
〃	M42	刀子	〃	溝13	〃	44	13	5	3.2	破片	〃
〃	M43	釘	〃	〃	〃	55	14	8	9.9	完存	〃
〃	M44	〃	〃	〃	〃	61	14	7	14.6	一部欠損	〃
〃	M45	〃	〃	〃	〃	47	6	6	3.5	〃	〃
〃	M46	〃	〃	〃	〃	38	10	6	2.3	〃	〃
〃	M47	〃	〃	〃	〃	87	14	11	40.5	完存	〃
〃	M48	〃	〃	〃	〃	35	10	9	6.0	欠損	〃
200	M49	紡錘車	2区	包含層	〃	22	46	2	21.7	〃	〃
〃	M50	〃	4a区	〃	〃	40	33	3	10.3	〃	〃
〃	M51	釘	1区	〃	〃	76	8	7	14.0	〃	〃
〃	M52	〃	1A区	〃	〃	64	14	4	7.9	〃	〃
〃	M53	〃	4a区	溝	〃	47	12	4	9.7	〃	〃
〃	M54	〃	〃	包含層	〃	52	12	8	10.2	〃	〃
〃	M55	〃	〃	〃	〃	54	11	4	5.9	〃	〃

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備考	時期
200	M56	釘	4a区	溝	鉄	33	9	8	6.5	欠損	中世
〃	M57	〃	1区	包含層	〃	37	8	4	1.8	完存	〃
〃	M58	〃	1A区	土壙	〃	27	5	4	1.3	欠損	〃
〃	M59	〃	〃	〃	〃	24	7	6	1.8	〃	〃
〃	M60	〃	4a区	溝	〃	22	10	8	3.5	〃	〃
〃	M61	〃	5区	柱穴	〃	60	8	5	4.9	〃	〃
〃	M62	〃	〃	〃	〃	37	6	5	1.6	〃	〃
〃	M63	不明	〃	〃	〃	48	16	6	7.6	〃	〃
〃	M64	〃	〃	〃	〃	43	29	4	7.9	〃	〃
〃	M65	刀子	〃	〃	〃	40	12	2	2.1	〃	〃
〃	M66	釘	〃	〃	〃	64	14	7	26.6	〃	〃
〃	M67	刀子	〃	〃	〃	32	19	4	5.8	〃	〃
〃	M68	タガネ？	〃	包含層	〃	128	16	15	67.6	〃	〃
〃	M69	釘	〃	〃	〃	40	15	8	9.1	〃	不明
〃	M70	〃	〃	〃	〃	60	15	11	23.1	〃	〃
〃	M71	〃	〃	〃	〃	55	13	8	12.3	〃	〃
〃	M72	〃	〃	〃	〃	30	22	9	7.0	〃	〃
〃	M73	鏃？	〃	〃	〃	53	9	9	4.0	〃	〃
〃	M74	鎌	〃	〃	〃	84	21	5	22.2	〃	〃
〃	M75	刀	〃	〃	〃	28	20	7	11.9	〃	〃
〃	M76	刀子	〃	〃	〃	68	30	9	23.9	〃	〃
〃	M77	〃	〃	〃	〃	67	14	5	7.7	〃	〃
〃	M78	鎌	〃	〃	〃	54	32	9	21.1	〃	〃
〃	M79	〃	〃	〃	〃	150	27	6	51.8	〃	〃
〃	M80	刀子	〃	〃	〃	77	24	3	15.1	〃	〃

表－6　津寺遺跡土筆山調査区銅銭一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備考	時期
63	K1	元豊通宝	5区	土壙14	銅	25.0		1.1	2.8		
73	K2	明道元宝	〃	土壙24	〃	22.6		1.2	2.2		
〃	K3	天聖元宝	〃	〃	〃	22.9		1.2	2.0		
〃	K4	天祐通宝	〃	〃	〃	20.6		1.2	1.4		
〃	K5	元符通宝	〃	〃	〃	21.3		1.3	1.9		
165	K6	開元通宝	〃	溝	〃	23.9		1.2	2.1		
201	K7	元豊通宝	2区	包含層	〃	24.6		1.2	3.4		
〃	K8	政和通宝	〃	〃	〃	23.5		1.4	2.1		
〃	K9	紹聖元宝	〃	〃	〃	24.0		1.4	3.2		
〃	K10	皇宋通宝	〃	〃	〃	25.4		1.2	3.3		
〃	K11	至和元宝	〃	〃	〃	25.2		1.1	2.7		

図	番号	遺　物	出土地区	遺　構	材　質	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	備　考	時期
201	K12	元祐通宝	1A区	包含層	銅	24.2		1.5	2.9		
〃	K13	不明	1区	〃	〃	24.1		1.4	1.8		
〃	K14	天聖元宝	2区	〃	〃	25.2		1.5	3.3		
〃	K15	天禧通宝	〃	〃	〃	24.9		1.3	2.6		
〃	K16	皇宋通宝	〃	〃	〃	24.3		1.6	3.0		
〃	K17	元豊通宝	1A区	〃	〃	24.7		1.6	3.0		
〃	K18	不明	1区	〃	〃	23.7		1.1	1.7	欠損	
〃	K19	〃	2区	〃	〃	25.0		1.2	1.9		
〃	K20	皇宋通宝	〃	〃	〃	25.0		1.4	3.3		
〃	K21	〃	〃	〃	〃	25.0		1.2	2.5		
〃	K22	治平元宝	1A区	〃	〃	24.2		1.5	3.7		
202	K23	不明	4a区	〃	〃	23.7		1.4	3.6		
〃	K24	紹聖元宝？	〃	〃	〃	23.8		1.4	2.9		
〃	K25	元符通宝	4b東区	柱穴	〃	23.9		1.5	2.1		
〃	K26	紹〇〇宝	6区	包含層	〃			1.3	1.5	破片	
〃	K27	淳熙元宝	4a区	〃	〃	24.0		1.3	2.8		
〃	K28	不明	〃	〃	〃	22.0		1.6	2.5		
〃	K29	〃	4b東区	柱穴	〃	24.0		1.7	3.9		
〃	K30	熙寧元宝？	4a区	包含層	〃	22.0		0.9	1.6		
〃	K31	景徳元宝	4b東区	柱穴	〃	23.1		1.3	2.7		
203	K32	開元通宝	5区	土壙	〃	25.0		1.3	2.2		
〃	K33	唐国通宝	〃	包含層	〃	24.7		1.4	3.6		
〃	K34	至道元宝	〃	柱穴	〃	24.9		1.2	2.9		
〃	K35	〃	〃	〃	〃	24.7		1.4	3.3		
〃	K36	咸平元宝	〃	〃	〃	24.9		1.2	3.4		
〃	K37	景徳元宝	〃	包含層	〃	24.9		1.5	3.4		
〃	K38	祥符通宝	〃	〃	〃	21.4		1.5	2.4		
〃	K39	天聖元宝	〃	〃	〃	25.5		1.5	3.0		
〃	K40	天聖元宝	〃	柱穴	〃	24.7		1.5	3.7		
〃	K41	景祐元宝	〃	〃	〃	24.9		1.5	3.0		
〃	K42	皇宋通宝	〃	〃	〃	25.0		1.3	2.9		
〃	K43	〃	〃	包含層	〃	25.5		1.1	2.5		
〃	K44	〃	〃	〃	〃	24.5		1.4	2.0		
〃	K45	〃	〃	〃	〃	24.6		1.3	2.9		
〃	K46	至和元宝	〃	〃	〃	23.8		1.4	3.5		
〃	K47	〃	〃	柱穴	〃	23.8		1.2	2.9		
〃	K48	嘉祐元宝	〃	包含層	〃	23.6		1.6	4.2		
〃	K49	〃	〃	〃	〃	23.8		1.3	2.8		
〃	K50	熙寧元宝	〃	〃	〃	24.5		1.6	3.8		
〃	K51	熙寧元宝	〃	〃	〃	23.8		1.1	2.6		

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備考	時期
203	K52	熙寧元宝	5区	土壙	銅	23.6		1.5	2.7		
〃	K53	元豊通宝	〃	包含層	〃	24.9		1.1	2.4		
〃	K54	〃	〃	〃	〃	25.3		1.3	3.4		
〃	K55	元祐通宝	〃	〃	〃	24.1		1.1	2.2		
〃	K56	〃	〃	柱穴	〃	24.8		1.5	4.5		
〃	K57	紹聖元宝	〃	包含層	〃	22.1		1.0	1.5		
〃	K58	元符通宝	〃	〃	〃	23.7		1.5	3.4		
〃	K59	〃	〃	柱穴	〃	24.3		1.2	2.3		
〃	K60	大観通宝	〃	包含層	〃	24.6		1.5	2.8		
〃	K61	正隆元宝	〃	〃	〃	25.3		1.5	3.6		
〃	K62	永楽通宝	〃	〃	〃	24.8		1.4	3.2		
〃	K63	宣徳通宝	〃	〃	〃	27.8		1.2	1.8	破片	
〃	K64	不明	〃	〃	〃	25.8		1.2	3.0		
〃	K65	元祐通宝	〃	〃	〃	24.1		1.2	2.4		
〃	K66	熙寧元宝	〃	〃	〃	23.8		1.2	2.6		
〃	K67	不明	〃	〃	〃	23.7		1.4	3.1		
〃	K68	〃	〃	〃	〃	24.6		1.4	3.3		
〃	K69	〃	〃	〃	〃	不明		1.5	1.4	破片	
〃	K70	〃	〃	〃	〃	24.6		1.4	2.5		

第２節　丸田調査区

はじめに

津寺遺跡丸田調査区は、足守川左岸堤防の東側、すぐ北に接する土筆山調査区の南方に位置し、県道を挟んで平面的に連なり、基本的に同一の遺跡の一部と考えられる。調査区の南端は、旧河道となり約60ｍで野上田調査区となる。足守川の堤防越しの、南西方向には県下最大の造山古墳（全長360ｍ、前方後円墳）が存在する。また周辺には、1582年の高松城の水攻めの際構築された、毛利方の小規模な山城が拠った、東西方向の二つの丘陵が存在する。

１．発掘調査の概要

発掘調査は、1988年４月から1990年１月までの１年10カ月に亘って実施した。調査区は、第１図に示すように便宜上丸田Ⅰ区・ⅠE区・Ⅰ～Ⅳ農区・Ⅱ区・Ⅲ区・ⅥA区・ⅥB区の７調査区に分割した。また、確認調査のみ行ったⅤ区がある。これは、発掘調査着手の順番を示しているが、調査区の東側の水田の耕作は継続して行われており、当然のことながら、調査区内に用水路を確保したり、収穫期には農業機械の進入路（Ⅰ～Ⅳ農区）が確保される必要があったため、その都度発掘対象地点の移動を行ったり、優先的な調査順位の変更を余儀なくされた。そのため、Ⅱ区はⅢ区に用水路が存在したため調査着手が前後し、Ⅰ区と接しない矛盾も生じたが、記録（実測原図・遺物注記など）や出土品の遺物基本台帳などの大幅な変更を避けるため本報告ではあえてそのままとした。また、連続して検出される遺構、とくに溝などの平面プランなど整合が困難な地点もあった。さらに、発掘区の設定後降雨や湧水などに対応するための側溝をめぐらしたため、単独で存在する下層の遺構の一部は損壊を免れ得なかった。

発掘調査以前の調査区は、畑あるいは水田で足守川左岸堤防と調査区の間には、土手根川（水路）と呼ばれる普段は流水がほとんど見られない、小さな溝がある。田植えが始まる６月中旬から下旬にかけては大幅に増水し、津寺から加茂地区にかけての水田を潤す、重要な用水路となっている。しかし、調査区への水の流入は大量で、排水作業は困難をきわめた。とくに、降雨時の増水が加わると、復旧作業には一層手間取った。

工事との競合は、当初は当然のことながらほとんどないものと予測されていたが、1989年には丸田Ⅰ～Ⅵ区にかけての発掘区の西側に沿って工事用道路（土運搬道路）を造成することが図られ、ⅣA区はそのために、本来は一つのⅣ区を分割して、1989年３月より幅約15ｍで先行発掘を行った部分である。しかし、８月下旬には北側の県道からダンプカーによる土と花崗岩

が搬入され、重機による転圧が行われたが、発掘調査区からの排水ポンプのホースや電源（100・200ボルト）からのコードなど工事用道路の下部に敷設したものの、土圧や花崗岩の巨石により一部の機能がマヒする事態も生じた。さらに、9月2日にはダンプカーから下ろされた花崗岩の巨石（0.8×1.3m）が、発掘現場の中に転落し、幸い休憩中で作業員は居合わせず、大事には至らなかったが、要請に応じて現場から除去されたのは10日後のことであった。このような危険をともなう発掘調査は、工事現場なみの防護フェンスの設置など今後に大きな課題を提起したものであったが、丸田調査区完了後に担当した津寺・中屋調査区（ジャンクション部分）では、さらに大きな危険に遭遇することになったが、この時点では予測する暇もなかった。

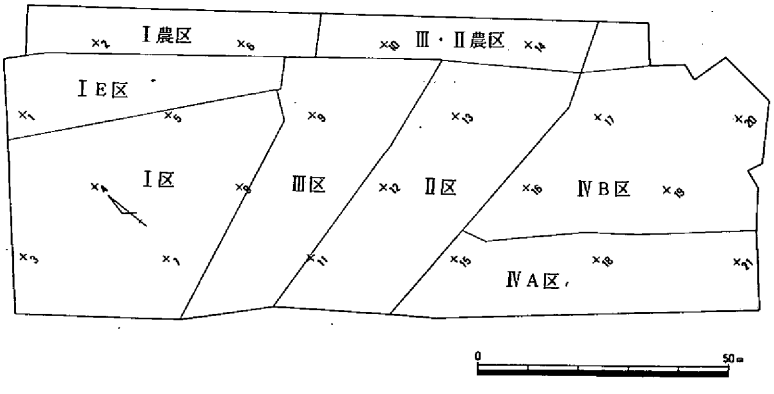
発掘調査の実施にあたっては、多くの作業員の方々の献身的な労力の負うところが多かった。発掘班の作業員の大半は、バスの運行によって約15～20㎞の道程を通勤して頂き、さらに遠隔の賀陽町からの作業員をも加え、常時20名前後の作業員を確保して調査を進めることができた。本来ならば芳名を録して謝意を表すところであるが、編集上および紙幅の事情により、割愛を余儀なくされた。

発掘調査班は、常時3名の調査員、1名の調査補助員を加えて編成されたが、他班の応援などや事前の確認調査の実施など、通年的にフルメンバーであった時期は限られた。

2．検出遺構・出土遺物の概要

発掘調査の対象としたのは、一次調査（坪掘り）によって把握された第1図に示す約8000㎡にのぼる広大な範囲である。一部に旧河道を取り込む、沖積地の一画のほぼ全面に水田遺構をはじめ、集落遺構が検出された。丸田Ⅴ区は、旧河道のみ確認され、全面発掘は行わなかった。

低位部で検出された水田遺構は、古代から近世にかけて継続的に経営された農業生産遺構と



第1図　発掘調査区設定図（1/1500）

えられ、稲作のみならず、季節によってはほかの作物も裏作として生産されていた可能性が強い。古代においては、微高地部分と低位部の両方でこのような生産遺構が検出されており、前者は格子目状の溝、後者は微高地に平行して複数の溝が連なる形状を示している。当然、微高地部分では、畑作も十分考えられるであろう。

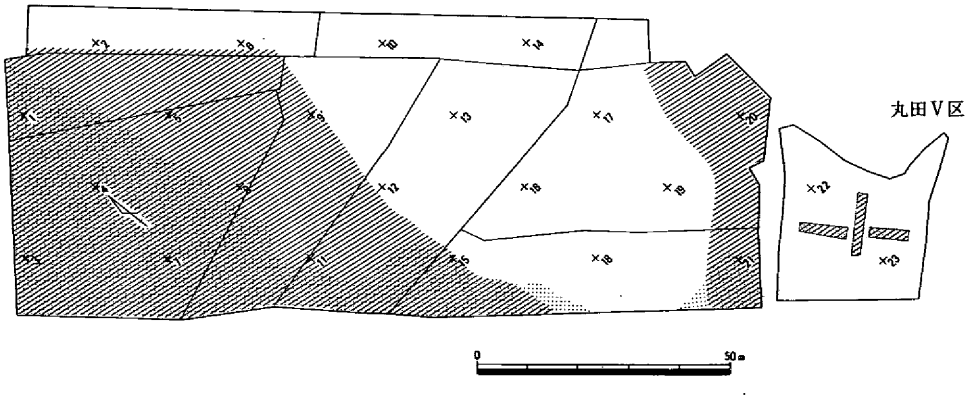
微高地部分では、やはり古代から中世にかけての掘立柱建物・溝・土壙・集石土壙・井戸・墓址・鍛冶炉・柱穴群など集落を構成する、多数の基本的な構造物が検出された。掘立柱建物は、多数の柱穴群を詳細に分析すればさらに増加する可能性があるが、本稿では、検出当初現認された建物のみをとりあげることとした。しかし、第８・136図などでは、規模は不明であるが、存在する可能性が強い部分に網目で表現しておく。

溝は完全に検出されても、残存度が低いものも多く、性格・用途など明らかにできなかった溝もある。しかし、溝－19・28などのように平面的に区画する意図的に掘られた溝などがある。また、通路部分の掘残しがみられる溝－18もある。溝１は、断続的に微高地側にやや弧を描きながら検出された、時期的にはもっとも古く、しかも規模が大きい溝である。Ⅰ区では直角に分岐する部分もあり、調査区の東方に存在する古代遺跡の周縁にあたることが推定される。

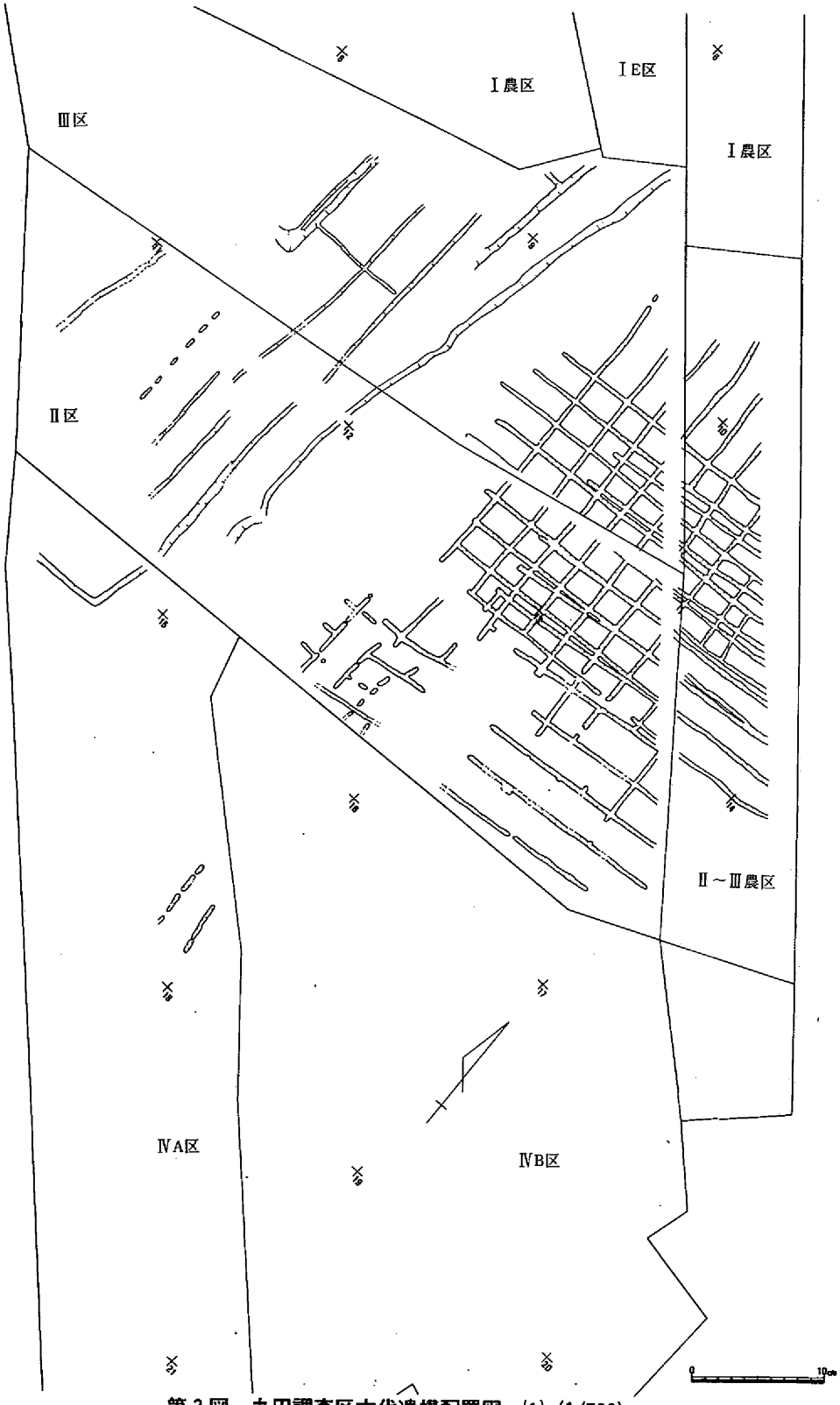
柱穴についで多く検出されたのが、大小様々な土壙である。円形・楕円形・長円形・不整方形・不整円形・方形などの様々な平面形を示す。また、土壙－60・89のように溝状をなす土壙もある。明らかに、貯蔵穴として使われたとみられる土壙－22など袋状をなすものがある。

井戸は、５基検出されたが、位置的にはⅡ区に集中する。これは、恵まれた水量と、清澄度が高かったと思われる湧水層が、この微高地と低位部との境界部分に限定されていたことを物語っている。

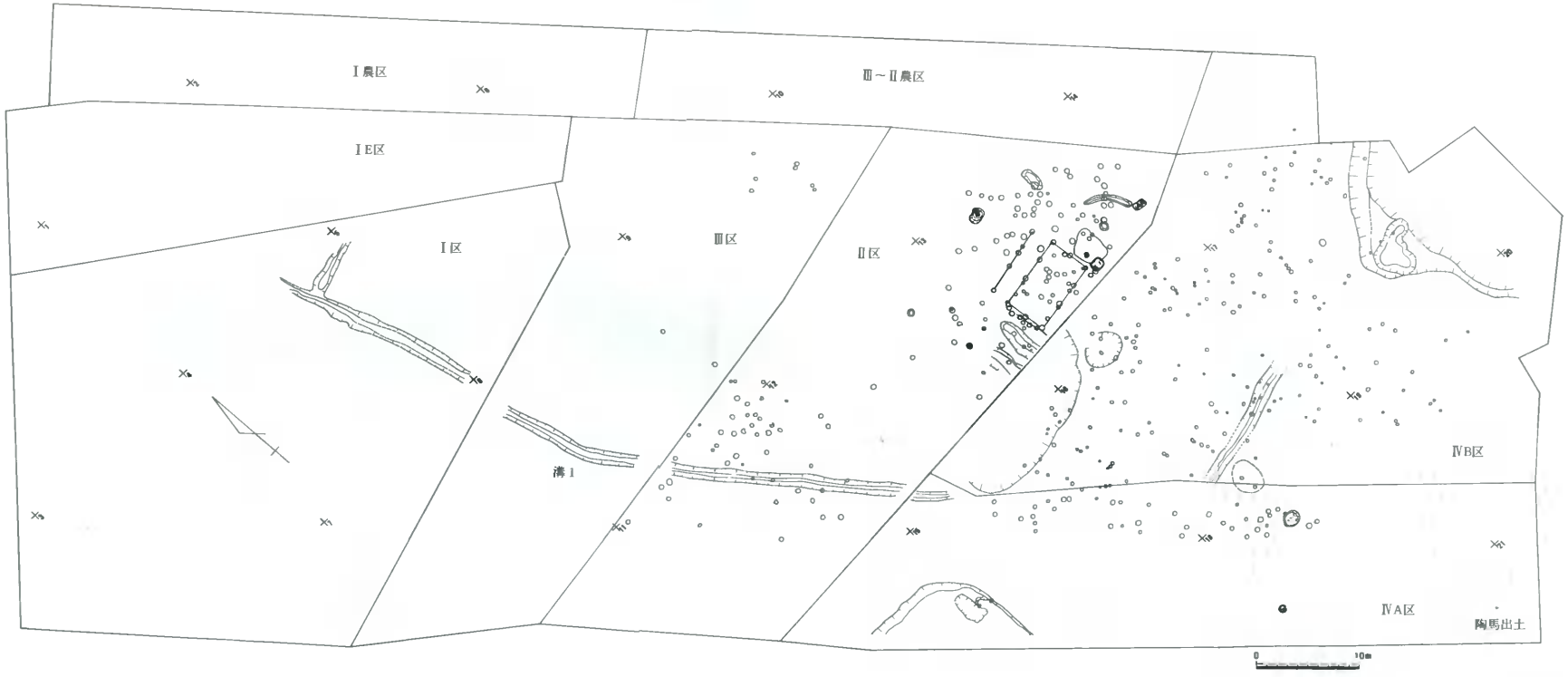
墓は、６基の土壙墓と１基の火葬墓が検出されている。Ⅰ区・ⅠE区・Ⅰ農区・Ⅱ区・Ⅲ区・ⅣA区に散在する。どちらかといえば、微高地の西側の縁辺部に偏りがあるといってもよ



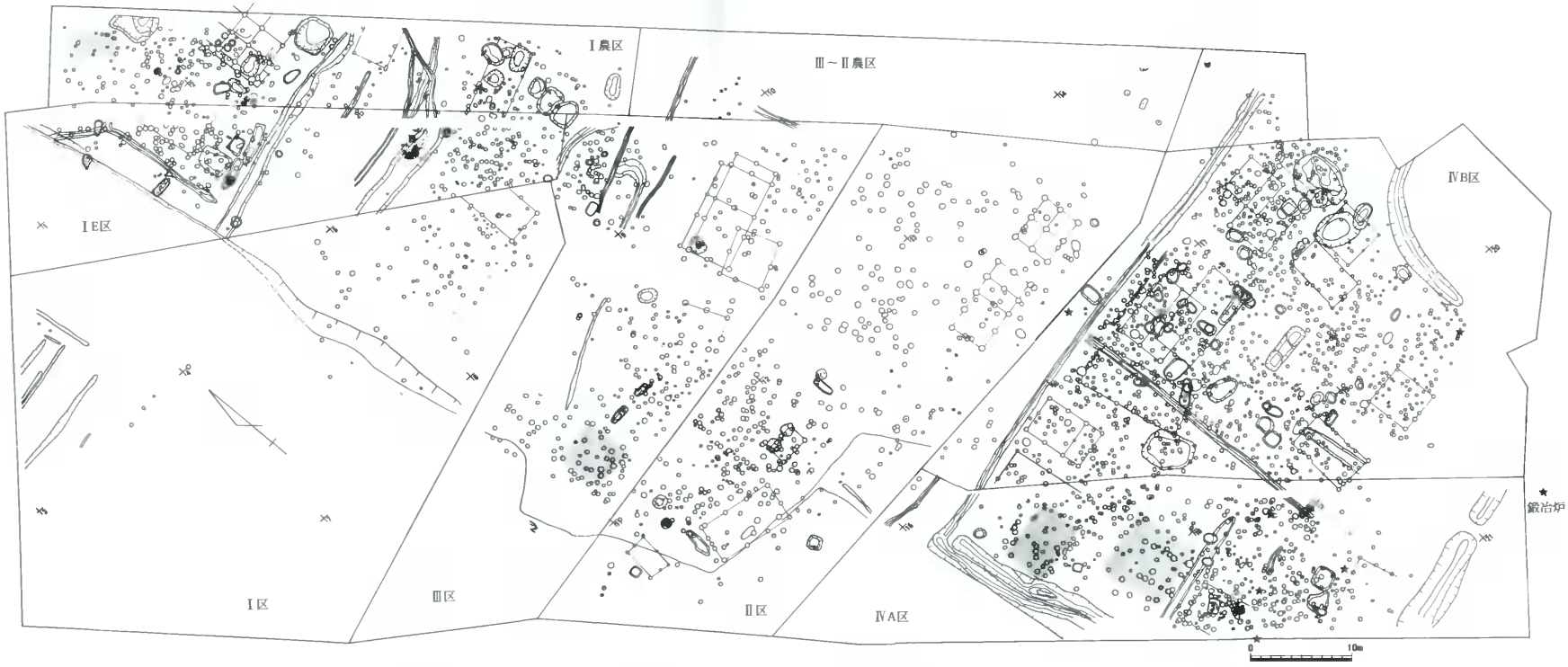
第２図　古代低位部（斜線）・中世低位部（網目）（1/1500）



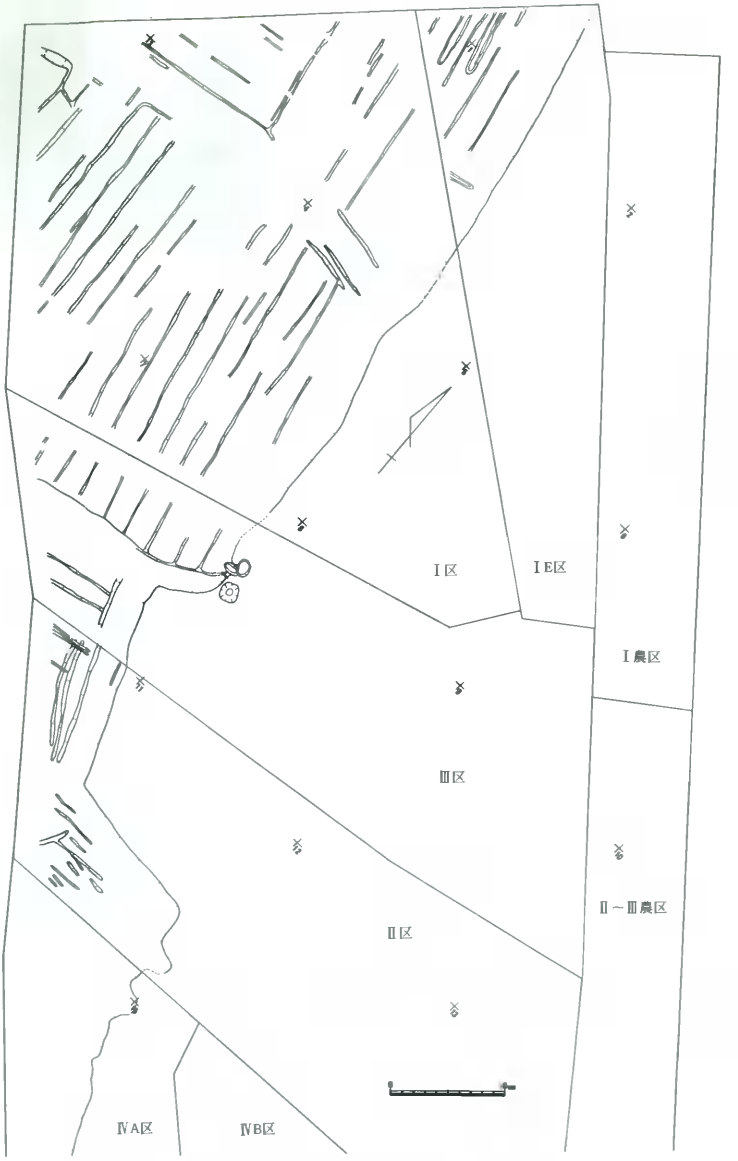
第3図　丸田調査区古代遺構配置図　(1) (1/500)



第４図　丸田調査区古代遺構配置図（2）（1/500）



第５図　丸田調査区中世遺構配置図（1/500）



第6図　丸田調査区近世遺構配置図（1/500）

い。土壙墓は、掘方が明瞭であるものはなく、人骨の発見によって初めてその存在に気付くほど不明瞭であった。土壙など同時期に比定される遺構が、比較的明瞭な平面形によって発見されたのと対照的である。伸展葬は火葬墓を含む5基と多く、屈葬は2基に過ぎない。一方、火葬墓はその発見はきわめて珍しいといえる。これも火葬特有の特徴的な焼骨の発見と焼土の検出によってかろうじて見つかったものである。(註1)

Ⅰ農区の土壙－29からは、人骨が出土しているが埋葬されたような状況ではないので、墓とは区別する。また微高地の縁辺部や低位部では、しばしば骨片が出土したがその大半は、獣骨であった。遺跡地は、骨などが比較的遺存しやすい土壌であったようである。

鍛冶炉は、ⅣA・B区で数箇所検出された。炉床部の被熱部分のみ残存するものもあるが、炉底部の一部が比較的良好な状態のものもある。鍛冶道具一括が副葬された土壙墓－6の近くに多く検出されている事実は、特筆される。

出土遺物は、遺構はもとより表土から包含層にかけて多量に出土している。大半は、土器で、土師器・須恵器・陶磁器・瓦器・黒色土器など多様な器種で構成される。特殊なものとしてⅣA区で出土した陶馬がある。土師器の器種は、杯・皿・椀・高杯・竈・甕・鍋などのほか、津寺遺跡の中世遺跡で顕著にその出土がみられる脚台と仮称している小型器種がある。須恵器は古代の包含層からは、杯・高杯・蓋・甕・壺もみられる。中世では、土師器に比べると量は少なく、亀山焼や東播系の甕や捏鉢などがその多くを占めるようになる。陶磁器では、平安時代を中心として、施釉陶器（緑釉・灰釉）がみられる。中世では備前焼などの国産陶器のほか、輸入された青磁・白磁の碗・皿などがみられる。白磁のなかには、いわゆる「影青」の青白磁合子の蓋などの出土も注目される。近世の遺物は比較的少量であるが、伊万里などの染付陶器が表土などから出土している。

土製品としては、土錘がある。いずれも小型で棒状単孔の淡水漁撈用とみられる。

金属製品としては鉄器・銭貨がある。柱穴・土壙など遺構からの出土品のみならず、包含層からも多数出土している。鉄器では釘がもっとも多く、ついで刀子・鏃など武器としての鋭利器が多い。また、様々な金具もみられる。一方で、土壙墓－6出土の鍛冶道具一括副葬品のように、鉄製品を製作するために用いられた重要な遺物もある。関連する遺物としては、鉄滓・炉壁片など鍛冶に関するものがある。また、鋤先の完形品が柱穴から出土している。鎌の出土と共に特筆すべき遺物である。

銭貨の大半は、輸入された宋銭である。初鋳年のもっとも古いものは「開元通宝」で、唐銭である。多くは、建物などの周囲から出土しており、当時日常的に使われたことを物語っている。また、緡銭の出土は、備蓄あるいは隠匿を思わせ、遺跡地での経済活動や、関連する商工業者の居住を示唆している。

石製品の大半は、砥石である。鉄製品の普及に比例するように、60点以上にのぼる砥石が出土している。小型で携帯用のものや、大型で備え付け用のものもある。

木製品は、井戸－４の底に埋置された曲物や井側に使われた、板材などのほかは製品として出土は見られない。建物の柱穴には、稀に柱根の一部が遺存していた例もあるが大半は腐食して原形を留めるものはない。

骨などの動物遺存体については、その多くは食用に具したと思われる牛・馬などである。しかし、溝や土壙などからの歯牙がついた顎骨の出土をみると、祭祀に使われた可能性も高い(注2)。井戸の底からは、ゴミムシなどの昆虫やその翔なども遺存していた。

３．各調査区の概要

(1)　**Ⅰ区・ⅠE区・Ⅰ農区**（第７～65図、図版75～93）

丸田調査区の北半部を占める調査区で、西半分の低位部と東半分の微高地とにほぼ二分される。微高地部分の中世遺構検出面は、Ⅰ農区の高いところで、海抜約4.6m、表土から30～40cmの深さで到達する。（第９図）Ⅰ区では4.4m～4.5mと、低位部に近いため中世遺構面はやや低い。

検出遺構は、溝・柱穴・掘立柱建物・土壙墓・土壙・集石遺構・水田遺構など多様である。ⅠE区からⅠ農区にかけては、本来は一連の遺構と考えられる溝も検出されているが、調査時期が前後したため、一貫した記録は残せなかった。また検出時の諸条件も異なるため、レベル不一致なども生じた。とくに溝の検出では、それらの事由により、幅が異なっている。

水田遺構は、すでに第６図に掲げたように、発掘着手の初期に検出された近世水田で、東西あるいは南北に走る細い溝の痕跡が残されている。中世に遡るとみられる水田遺構は、第５・８図に掲げる低位部のなかに残された、わずかな細い溝の痕跡と考えている。これらの溝の検出レベルは海抜４mから3.9m前後で微高地と約40～50cmの差がある。

以下、Ⅰ区からⅠE区・Ⅰ農区にかけての検出遺構および遺物について概略を述べたい。

①Ⅰ区

Ⅰ区は、微高地と低位部からなり、西半部の大半は中世から近世にかけての水田遺構が広がる。その一部は直線的に延び、ⅠE区の西におよんでいる。Ⅰ農区では低位部はなく、遺跡地内でももっとも高所に位置している。中世の基盤層は、比較的堅硬な明黄褐色を呈する粘質土である。Ⅰ農区から南方のⅢ区からⅡ区にかけては、グライ化して青みを増し、粘性が強まる傾向がみられる。以下、時期的に古い順にそれぞれの遺構について説明を加える。

溝－１（第11・12図、図版79）

これらの調査区で検出されたもっとも古い遺構は、第７図に示すようにⅢ区・Ⅱ区を経て、

ⅥA・ⅥB区に達する溝1である。Ⅰ区では、溝幅が狭まる北よりで、ほぼ直角に東方に折れる。ⅠE区では、その痕跡は確認できなかった。Ⅰ区では、微高地部分の中世遺構面より約50cm下がった海抜4mでこの溝1が検出される。断面形は緩やかなU字形をなし、幅約1.2m、深さ50～60cm測る。溝1が検出されるすぐ上層では、第10図に掲げる須恵器（1～3）・土師器（4・5）が出土している。溝の上面からは、須恵器（6～8）や土師器（9～17）が出土している。須恵器は平瓶・杯、土師器では、杯・甕・竈などの器種がみられ、いずれも平安時代の前半期（9世紀代）に比定される、同時期の一括遺物と考えている。須恵器はいずれも精良なつくりで1や6など丁寧なつくりが窺える。土師器甕は、赤褐色ないし、橙褐色を呈し、大型品では比較的直線的で薄手な体部の形状が特徴的である。体部外面は、縦方向の刷毛調整を行い、内面は荒いナデ調整を行う。小型品は、まるみを帯びた体部を示す。一部には煤がわずかに付着しているものもある。ほかに同時期の遺構としては、微高地部でわずかな柱穴が確認されている。

建物－1（第13図、図版77）

微高地上で検出された建物で桁行5～8尺（150～240cm）、梁行6尺（180cm）を測る棟方向を南北にとる。柱痕跡は暗黄褐色、掘方の埋め土は暗灰褐色を呈する。ⅠE区の柱穴とは、明確にまとまらず、3間くらいの桁行でおさまる可能性が強い。

出土遺物には、わずかな土師器細片がみられるにすぎない。Ⅰ農区の建物－5と方向・時期的関連する可能性がある。微高地では、ほかに円形で同規模の掘方の形状が類似する柱穴が散在するが、確実な建物を推定復元することはできなかった。

土壙－1（第14図、図版78）

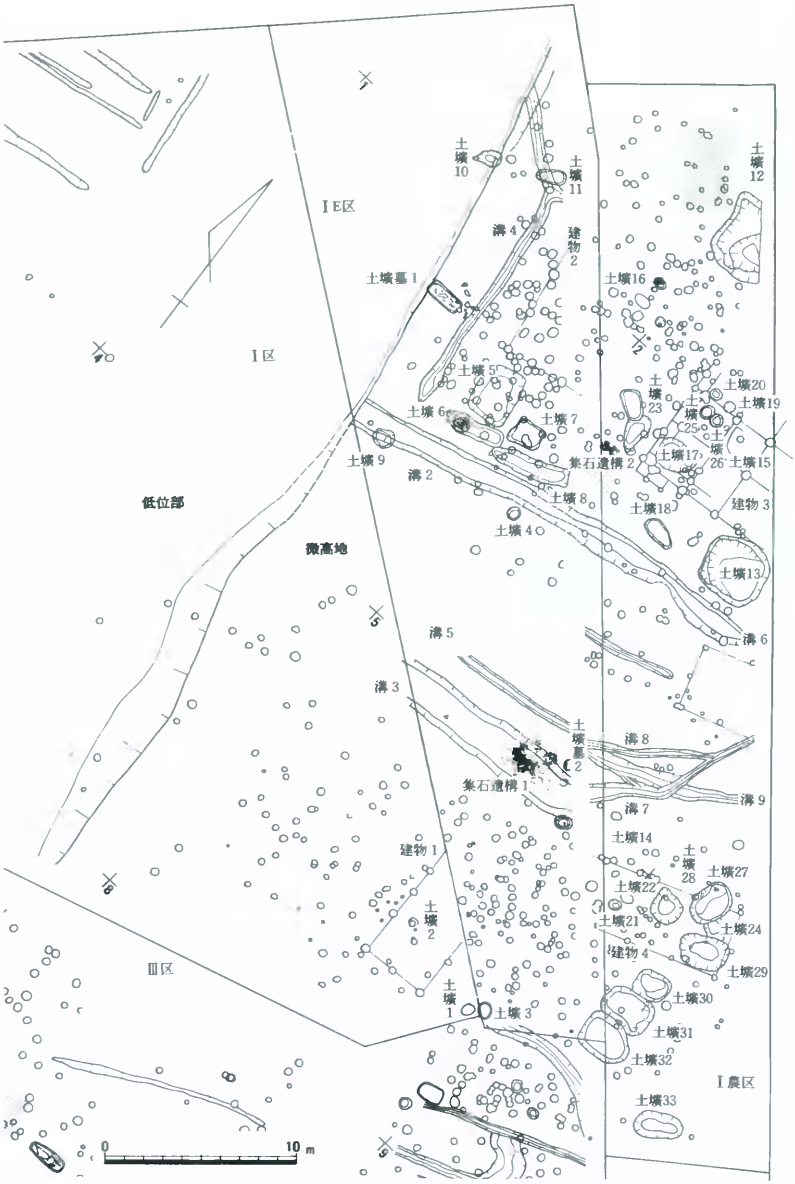
建物－1の東約4mに位置する土壙で、やや長円形を呈する。小児頭大あるいは、拳大の花

表－1　発掘調査工程表

調査区	面積㎡	1988年			1989年				1990年	
		4月	7	10	1	4	7	10	1	4
丸田Ⅰ区	1,600	·····								
丸田ⅠE区	800			·····						
丸田～Ⅳ農区	800				·····					
丸田Ⅱ区	1,300		·····							
丸田Ⅲ区	1,000		·····							
丸田ⅣA区	1,000					·····				
丸田ⅣB区	1,500						·····			

（※面積は端数切り捨ての概数値）

第7図　Ⅰ～Ⅲ区古代遺構配置図（1/300）

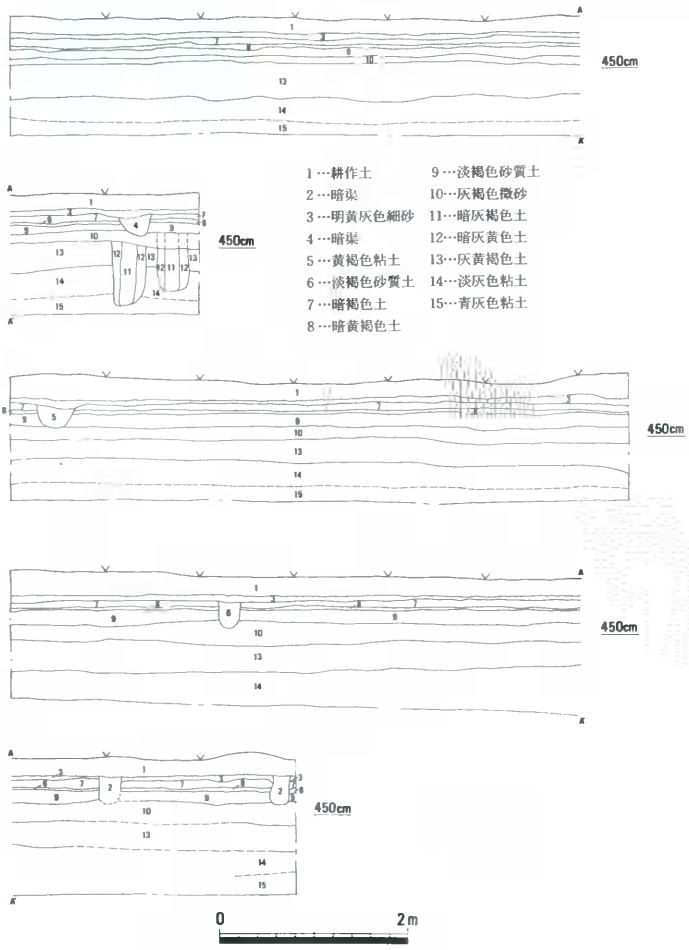


第8図　Ⅰ～Ⅲ区中世遺構配置図（1/300）

崗岩が埋積している。土壙の中央は柱穴のように、深くくぼんでいるが柱穴となる可能性は少ない。出土遺物には、土師器細片がみられる。

土壙－2（第15図、図版78）

土壙－1の西約3mに位置する。やや隅丸の方形を呈する浅い土壙である。出土遺物には、



第9図　Ⅰ区土層断面図（1/60）

土師器椀（いわゆる早島式の小口径の椀）などが出土している。微高地上の柱穴を切って掘り込まれた土壙である。

Ⅰ区の検出遺構としては、主なものは以上であるが、包含層からは、第16図に示すように、数多くしかも幅広い時期の遺物がみられる。18～25は輸入磁器（中国製）で18～22は白磁、23～27は青磁である。18はいわゆる青白磁の合子である。26・27は常滑焼である。

第16図は土師器（29～48）のほか、28の須恵器の注孔部分である。土師器は、皿・小皿をはじめ鍋・甕等の器種がみられる。

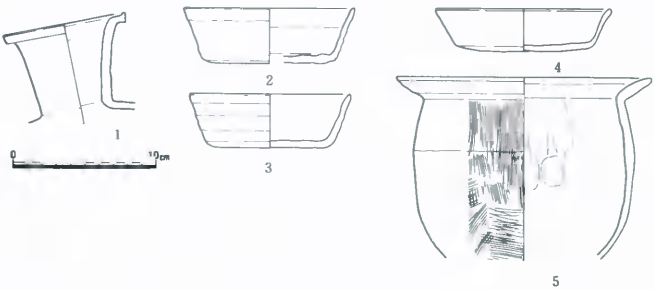
S1は赤褐色を呈する管玉で、石材は不明である。古墳時代に比定され、のちに掲げる埴輪片の出土（228）などと関連する遺物として注意される。

第18図には、近世の水田層を掘り下げて検出された水田遺構から出土した遺構で、主に中世に比定されるものである。49は青白磁の合子蓋である。18とも関連する。11世紀代に多く輸入された遺物で時期的に興味深い。50・51は白磁、52は見込みに文様が施された青磁皿である。53～56は土師器小皿である。このような小皿はしばしば柱穴内からも出土している。

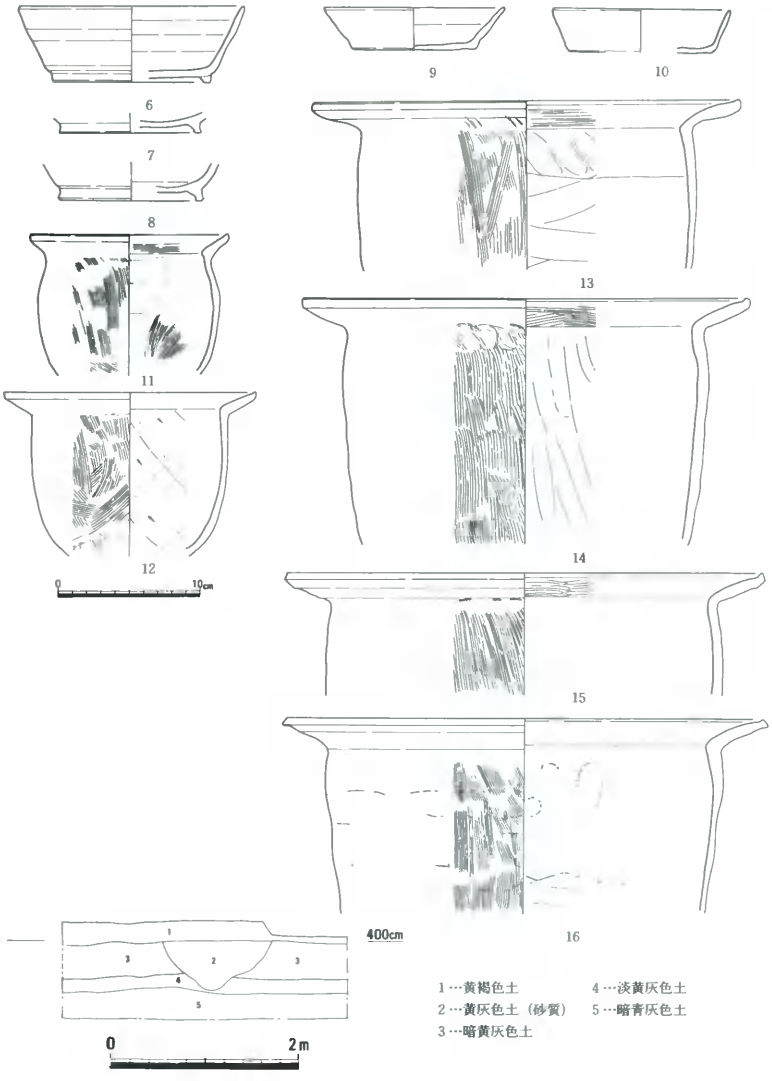
②ⅠE区

Ⅰ区の東側に接する調査区で、南側は狭く北側はやや広いいびつな矩形を呈する。Ⅰ区ではみられなかった溝・土壙墓などの中世を中心とした遺構群が散在する。柱穴も数多く検出されたが、建物は建物－２の１棟のみ確定している。しかし、南方の一画など柱穴が密集しており、かなり複雑な様相を示し、検討の余地もある。

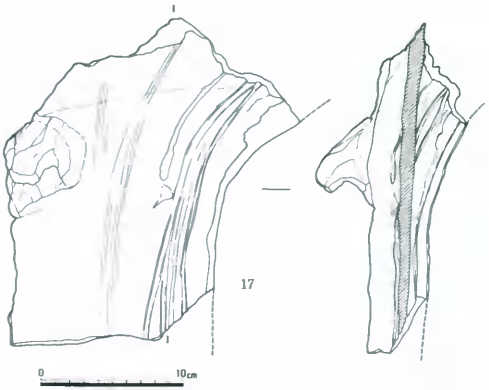
柱穴のなかには、意外にも完形品やそれに近い遺物が比較的多くみられ、建物の新築時の祭祀あるいは、廃絶時の祭祀などを考えさせる。たとえば、57・58は同一の柱穴から出土した鍋で、底部をわずかに失っているもののかなり大きな破片である。また、P－31（第21図）のように63～65の土師器小皿が出土したり、67～69のように同じ形態の小皿が出土しているものも



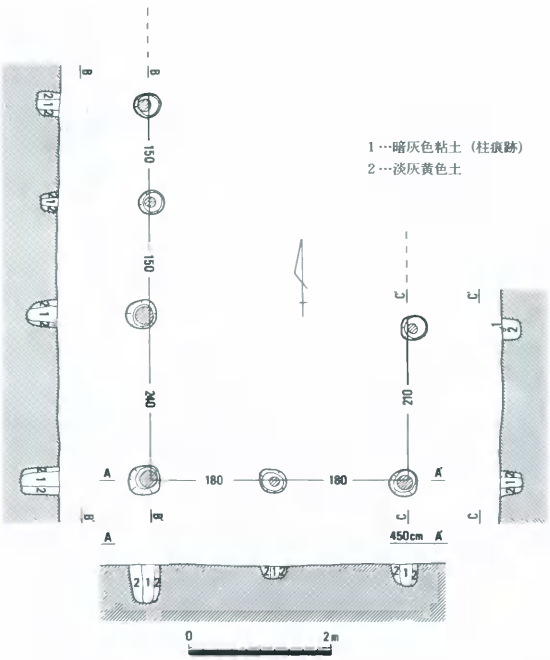
第10図　微高地出土遺物



第11図　溝－１土層断面図（1/60）・出土遺物（1）



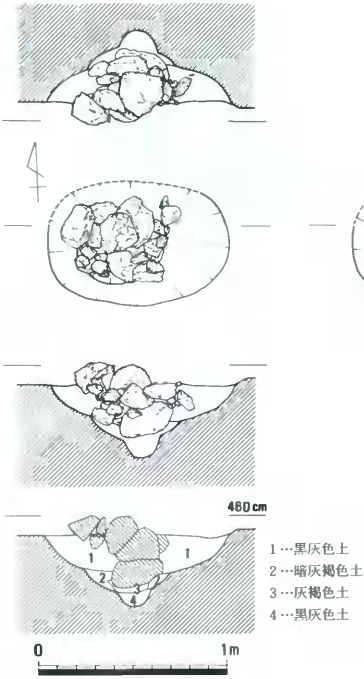
第12図　溝－1出土遺物　(2)



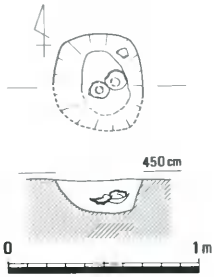
第13図　建物－1　(1/80)

ある。数的に完形品3点という共通性には一応注意される。

このように、柱穴から遺物が出土している状況は第24図に掲げるとおりであるが、通常は、柱穴の抜き取り痕跡が観察されている。遺物は、掘方の埋め土にも混じることは比較的少なく、抜き取り穴の中に埋没していることが多い。その中には稀に**70**のような白磁もみられる。また、**75**のような脚台もある。この器種は、すべて土師器で上面は完全にふさがっていないもの（**161**・**361**・**362**など）と、あたかも底部のようにふさがって、平らに成形されたもの（**364**・**392**・**414**）の2種類がある。脚端は鍛風に外反して丸くおさまるのが、一般的である。灯明皿として使われた小皿台として用いられたと推定されるが、灯芯の油痕は認め



第14図　土壙－１（1/30）



第15図　土壙－２（1/30）

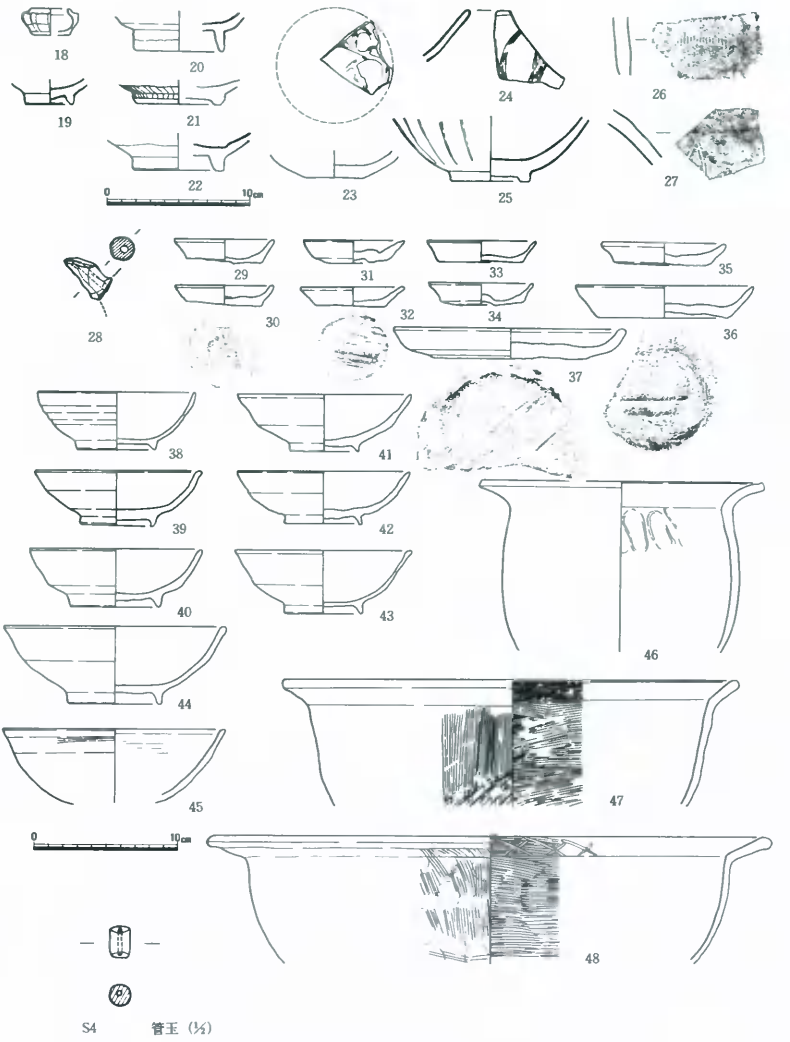
られない。墓に伴う副葬品としての出土もまた確認されていない。製作方法は、小皿を作るのとほとんど同一手法で、単純である。

包含層からは、中世土師器として広く知られる、いわゆる早島式の椀も数多く出土している。口径11～12cm、あるいは、15cm前後、器高４cm前後から５cm前後を測るものまで時期的に幅をもって変遷している。一方、89のように古代から普遍的にみられた、皿も存在するが、量的には少ない。また石製品としては、S2の滑石製の石鍋片の出土は特筆される。S3は、小型の砥石で頁岩製である。ほかに、銭貨も出土しているが、Ⅰ農区とあわせて後述する。

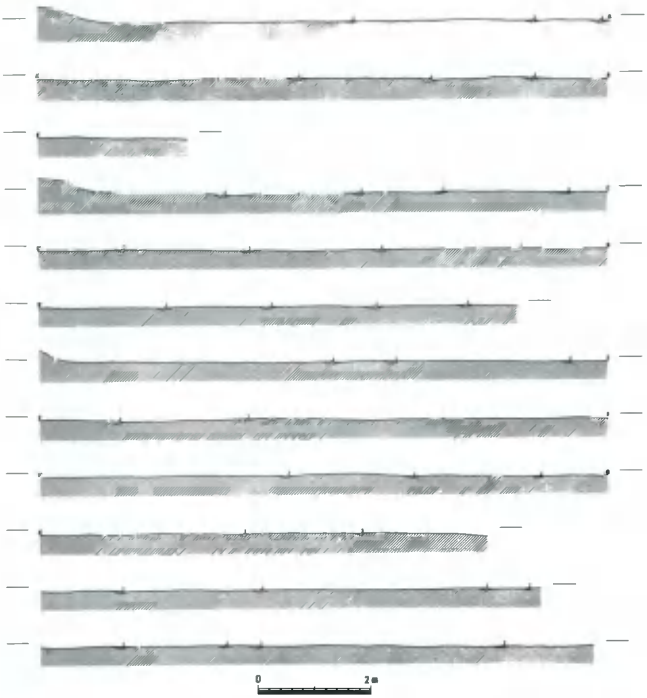
以下、おもな遺構について概述する。

建物－２（第20図、図版81）

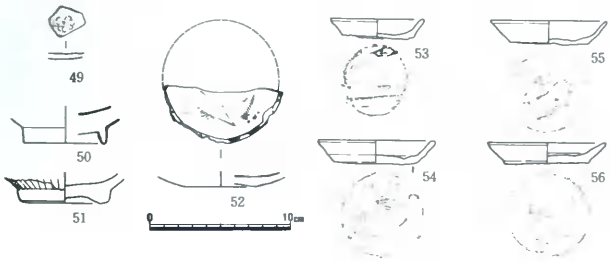
桁行２間、梁行２間分のみであるが、前者は５尺・６尺と不規則、後者は８尺（2.4m）等間である。第20図で復元推定すると、ほぼ南北に棟方向を示す建物となる。柱痕跡は、暗褐色、



第16図　Ⅰ区包含層出土遺物（1/4・1/2）



第17図　Ⅰ区低位部水田断面図（1/80、レベルは海抜４m）



第18図　水田層出土遺物

埋め土は灰黄褐色を呈する。

土壙－3（第27図）

復元長径約90㎝、深さ10㎝足らずの土壙である。出土遺物には、**90～92**の土師器がみられる。

土壙－4（第28図）

いびつな円形を呈する径約70㎝の土壙である。上層には炭を多く含む暗褐灰色土、下層には灰色土と灰黄色土が埋積する。遺物には、土師器細片がみられる。

土壙－5（第29図、図版81）

隅丸方形を呈するいびつな土壙で、深さ約20㎝と浅い。溝－2と溝－4に囲まれた区画の内側に位置している。多くの柱穴と重複する。全体に焼土や炭の細片を多く含む淡灰黄褐色土が埋積出土遺物には土師器椀などがみられる。

土壙－6（第30図、図版85）

土壙－5の南に近接して検出された溝状の土壙で、新旧関係は明らかではないが、2基重複して存在すると考えられる。中央よりやや東寄りで直径80㎝のほぼ円形の掘方があり、わずかに深くなっている。第30図の網目部分には焼土、黒っぽく表現した部分に木炭が濃密に散布する。出土遺物には**93～98**の土師器のほか少量の鉄滓がみられる。土師器は小皿のほか口径が10㎝を切って、8～9㎝となる時期ですでに高台をもたない**97**のような椀も出現している。

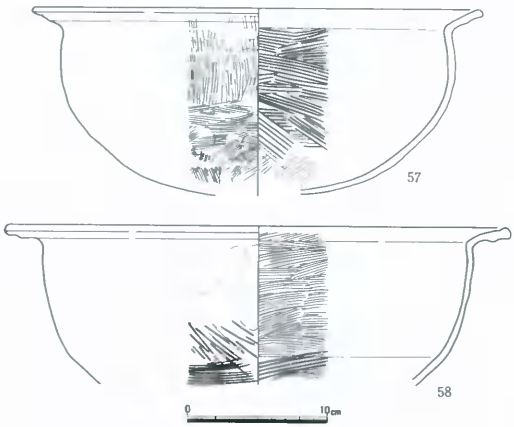
土壙－7（第31図、図版81）

土壙－5のすぐ東側に近接する、いびつな方形を呈する土壙で深さは約10数㎝と浅い。埋積土は上層は淡灰黄褐色土、下層は基盤層とほとんど変わらない灰黄色を呈する。いずれもわずかな炭・焼土片を含む。出土遺物には、**99～101**の脚台がある。

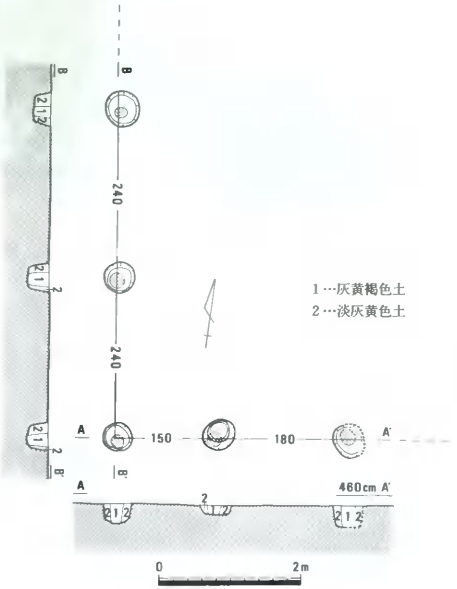
土壙－8

（第32図、図版81）

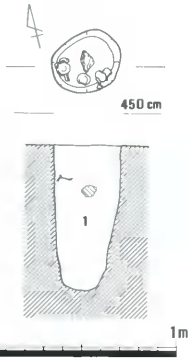
土壙－6とあたかも連続するように東側に接して検出された溝状の土壙である。深さは約10㎝を測り、埋積土は土壙－6



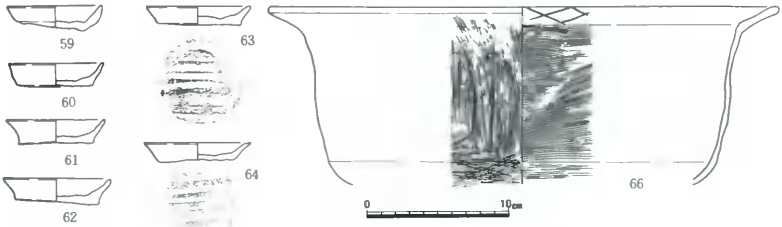
第19図　柱穴（SP34）出土遺物



第20図　建物－２（1/80）

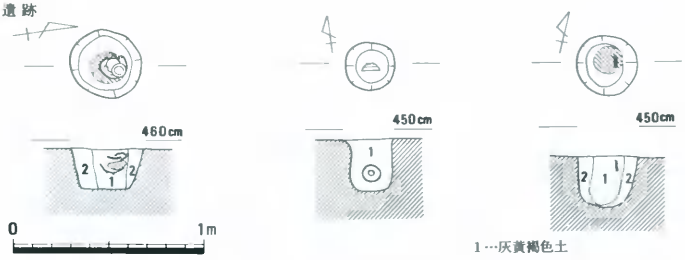


第21図　柱穴（P-31；1/30）

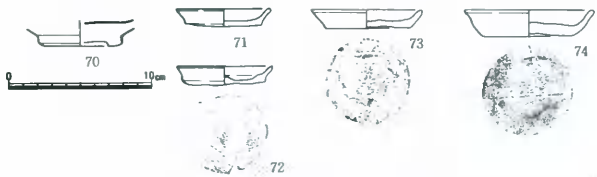


第22図　包含層・柱穴出土遺物

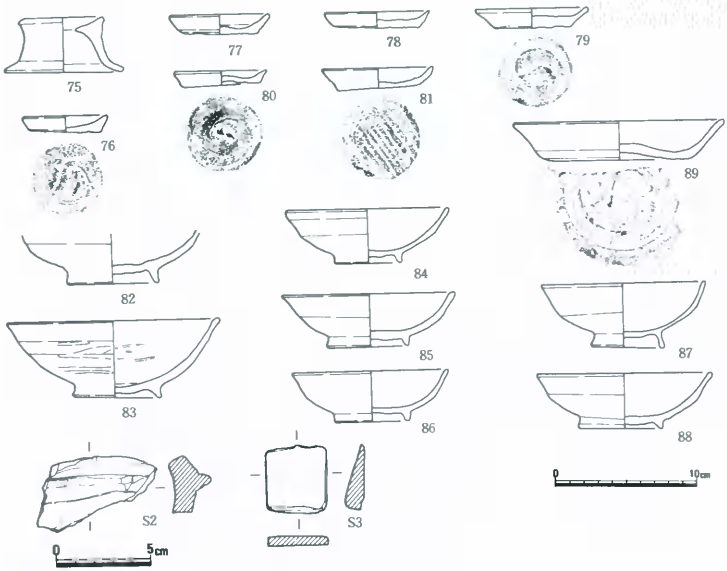
第23図　柱穴出土遺物



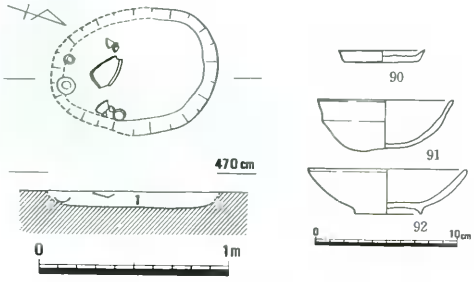
第24図　ＩＥ区検出柱穴（1/30）



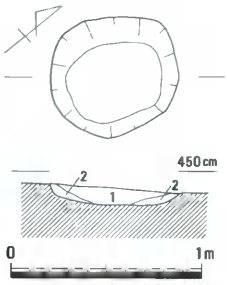
第25図　ＩE区　柱穴出土遺物



第26図　ＩE区包含層出土遺物（1/4・1/3）



第27図　土壙－３（1/30）・出土遺物



第28図　土壙－４（1/30）

と同様で焼土・木炭を多く含む。出土遺物には土師器をはじめ土器細片が多数出土している。

土壙－９（第32図）

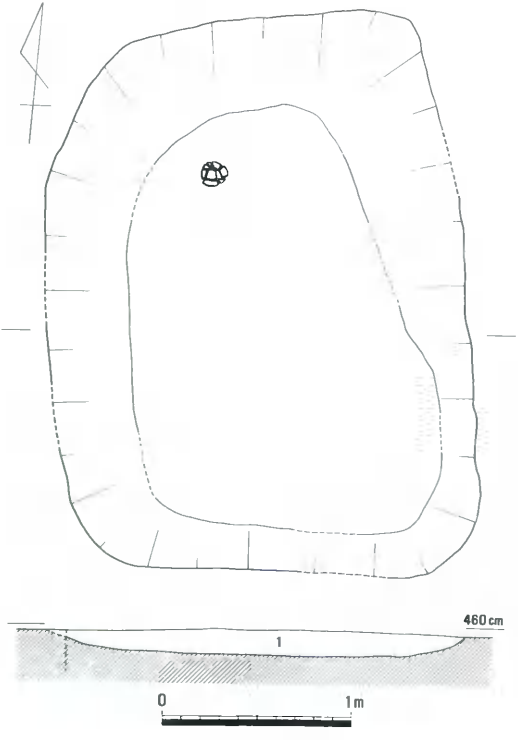
溝－２を切って検出された浅い土壙で、いびつな円形を呈する。上面に、炭・焼土が顕著であった。

土壙－10（第32図）

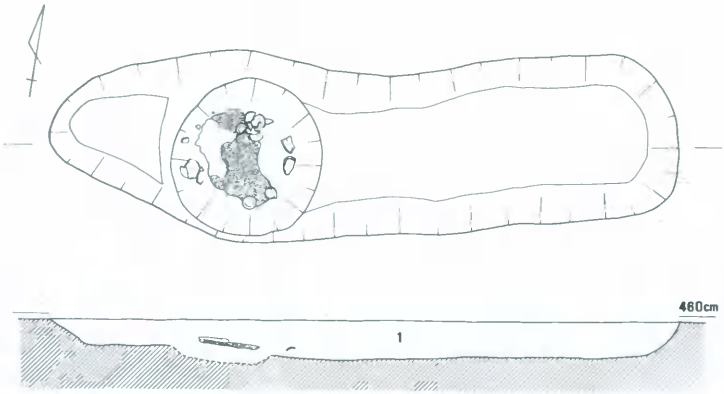
元は、長円形の土壙の西側が失われて、ややいびつな形状を呈している。埋積土は、暗褐灰色土で炭・焼土が含まれる。出土遺物には、土師器などのほか、また少量の鉄滓もみられる。

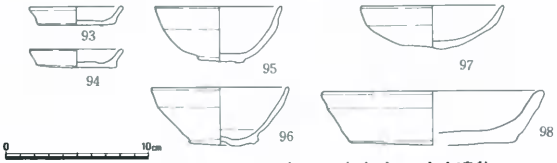
土壙－11（第32図）

溝４を切って検出された長円形を呈する土壙である。上層には淡灰褐色土、下層には淡灰黄色土が埋積する。わずかの鉄滓と土師器小皿

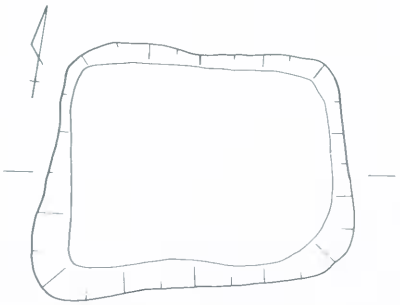


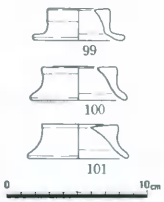
第29図　土壙－５（1/30）





第30図　土壙－6（1/30）・出土遺物



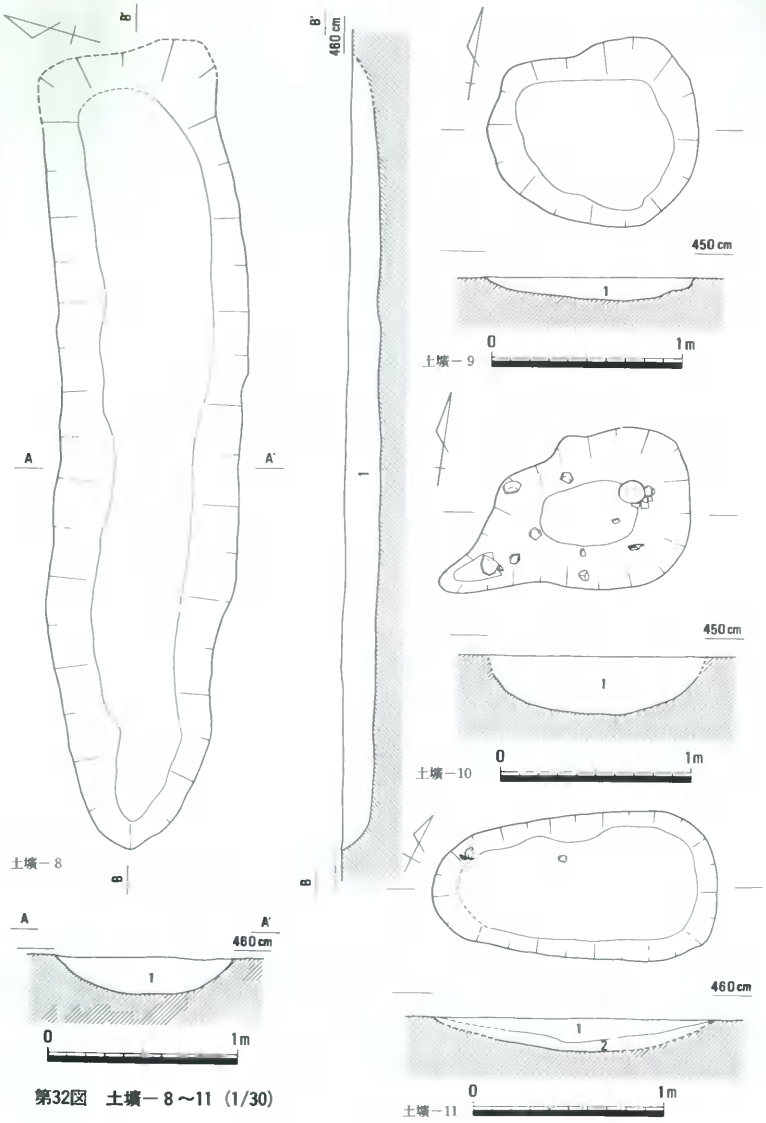


第31図　土壙－7（1/30）・出土遺物

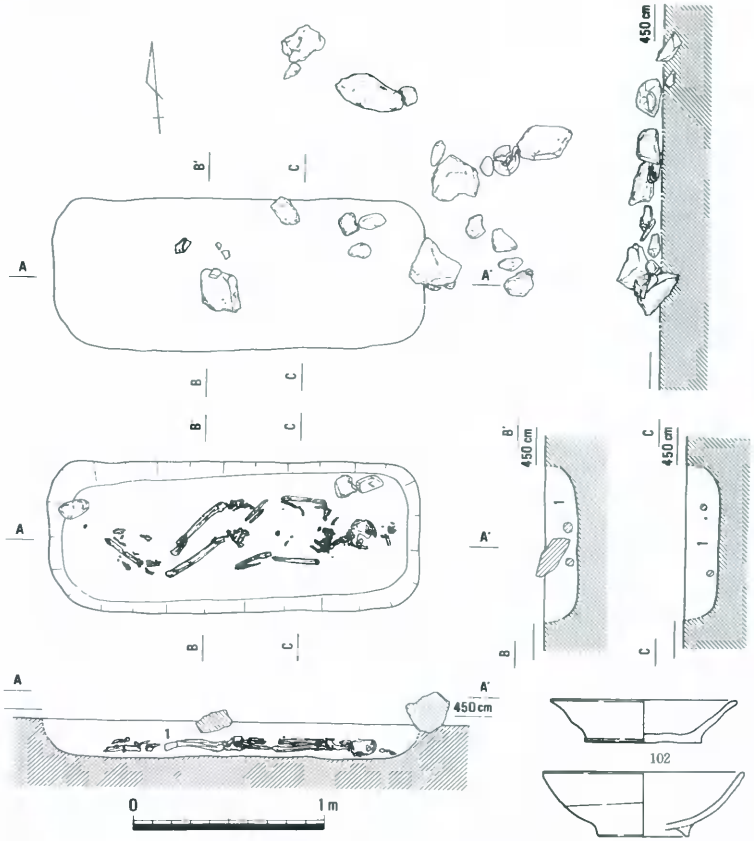
片が出土している。

土壙墓－1（第33図、図版84）

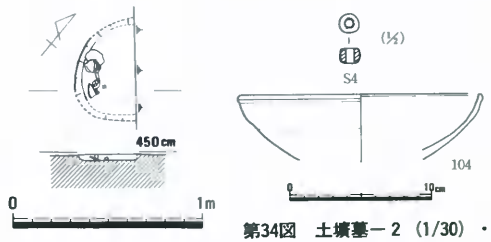
溝4の南北方向の部分の西側に位置する。伸展葬で頭位は東に向ける。人骨の残りはあまりよくないが、頭骨をはじめ上腕骨や大腿骨など遺存している。頭骨の下顎骨の近くには、数本の歯牙もみら



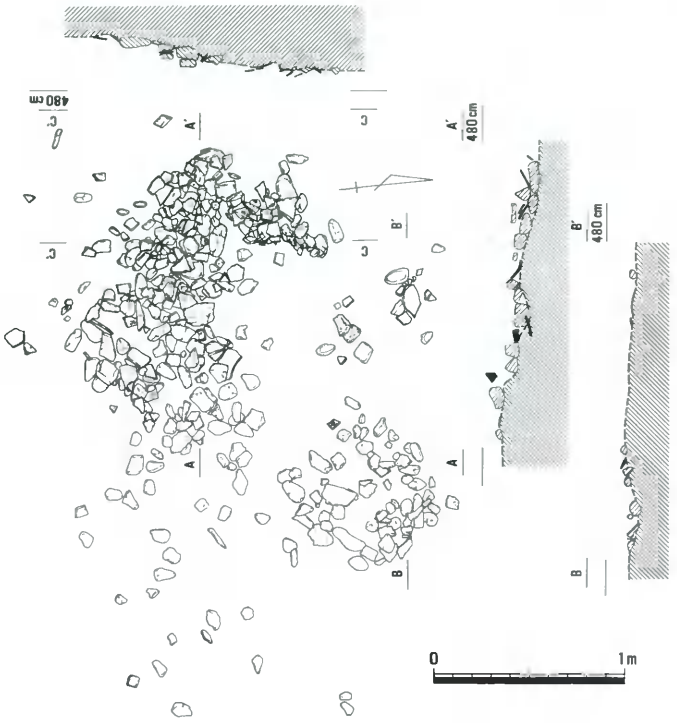
第32図　土壙－８～11（1/30）



第33図　土壙墓－1 (1/30)・出土遺物



第34図　土壙墓－2 (1/30)・出土遺物

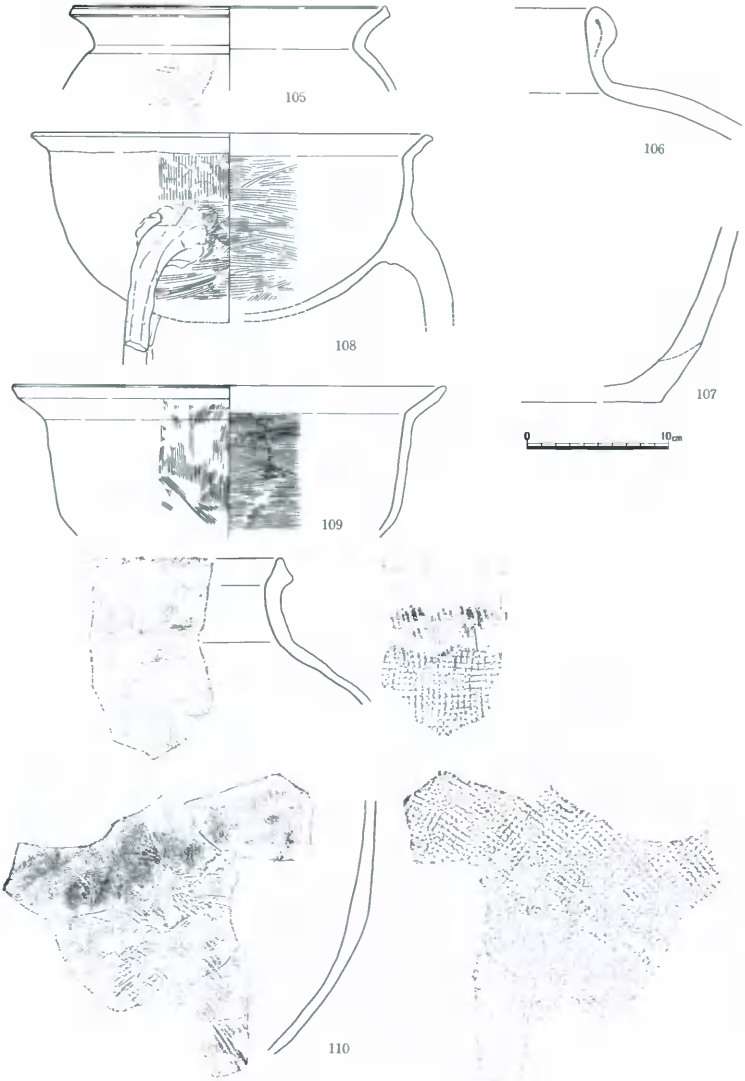


第35図　集石遺構－１（1/30）

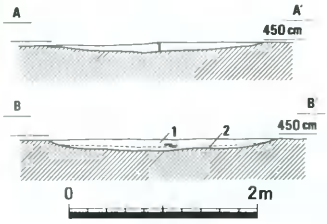
れた。膝はやや南に曲げられ、脛骨は左脚の方がよく残っている。隅丸長方形の掘方上面には人頭大もしくはやや大きめの石が散在していたが、墓標のような性格とは思われない。副葬された状態ではないが、上面近くから出土した**102・103**の土師器がみられる。人骨は、熟年男性と鑑定されている。平安時代に比定される可能性もある。

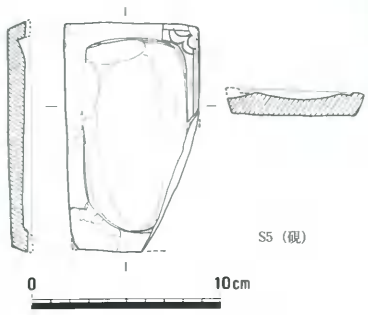
土壙墓－２（第34図、図版85）

溝－３と５の間、集石遺構－１のすぐ東側で検出された。側溝を掘りぬいた際、半分を失った。規模から判断すると、掘方の小規模な屈葬と思われる。幸い頭部の一部が遺存しており、歯も歯冠もわずかながら認められる。副葬品には**104**の白磁、**S4**の貝製の小玉がある。前者は、口縁部があまり肥厚しない、乳白色を呈する鈍い釉調が看取される。後者の素材は、鮑か栄螺と思われるが、不詳である。人骨の性別等は不明である。



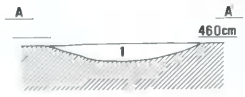
第36図　集石遺構－1出土遺物

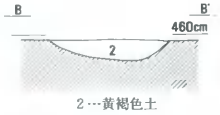


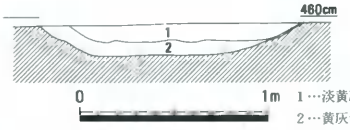


溝上面礫集中部

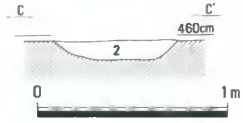
第37図　溝－３断面図（1/60）・出土遺物



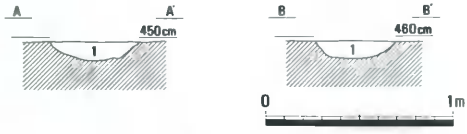




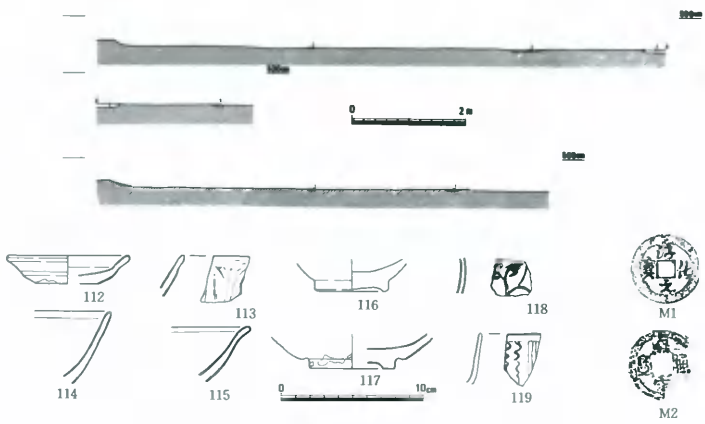
第38図　溝－２断面図（1/30）



第40図　溝－４断面図（1/30）



第39図　溝－５断面図（1/30）



第41図　低位部水田断面図（1/100）・出土遺物（1/4・1/2）

集石遺構－1（第35図、図版83）

溝－3の上面で検出された。東西3.5m、南北2.5mの範囲に拳大から小児頭大の花崗岩を主体とする石が集中している。やや盛り上がった感じで、当時はかなりの高さであった可能性がある。石の隙間には、備前焼・亀山焼・須恵器（東播系の捏鉢）・土師器（椀・鍋・竈など）・瓦などの土器類のほか、わずかな骨片が出土している。人骨ではなく、獣骨の可能性が強い。出土遺物では、**105・110**は亀山焼の甕、**106・107**は備前焼、**108・109**は土師器である。亀山焼は、いずれも外面は格子目タタキが施されている。**108**は脚が取り付けられており、鍋として使われている。

溝－2（第37図、図版81）

調査区のほぼ中央に位置する。Ⅰ農区の溝－6に連なり、幅約1.4m、深さ20cm、検出全長は約25mである。断面形は凸レンズ状をなし、西方にやや下降する傾向にある。上層には、淡黄灰色土、下層には黄灰色土が埋積する。土器片のほか炭・焼土細片が含まれる。

溝－3（第37図、図版82）

溝－2の南方約12mにほぼ平行して検出された。幅約2.6m、深さ15cm、Ⅰ農区の溝－7の延長部にあたる。溝－7では、Ⅰ農区がレベル的に高位にあるため、検出幅が狭まっている。上層は焼土を含む暗赤褐色土、下層はやや粘性を増す。北部分では、第37図のように礫が集中する部分もある。出土遺物としては**S5**の石製硯があげられる。右側下端を欠失するが、海部の上の周縁に刻まれた鱗状の模様の一部が観察される。陸部は使用による摩滅のために窪んで

いる。111の土師器椀のほか、備前焼・須恵器・瓦なども出土している。

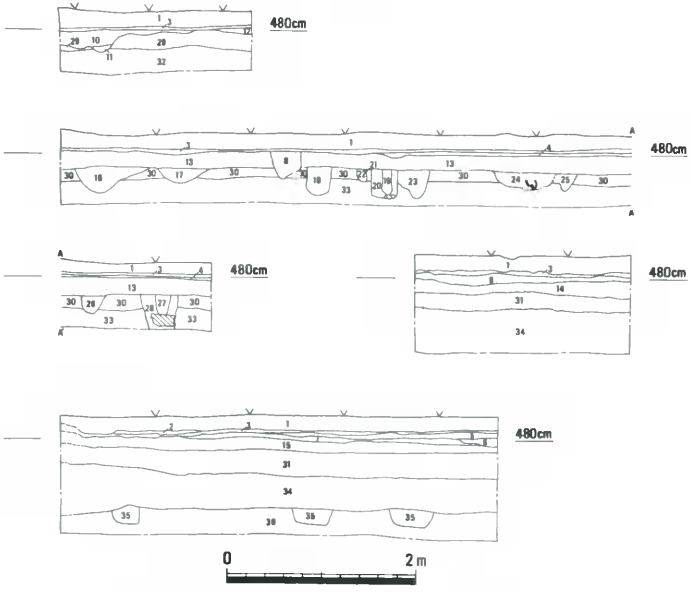
溝－４（第39図、図版81）

調査区の北端で二またに分かれた状況で検出された。南半分は微高地の肩に平行して直線的である。断面形は凸レンズ形を呈し幅60～90cm、深さ10～20cm前後を測る。埋積土は灰黄褐色土である。出土遺物には、土器細片・木炭・焼土がある。

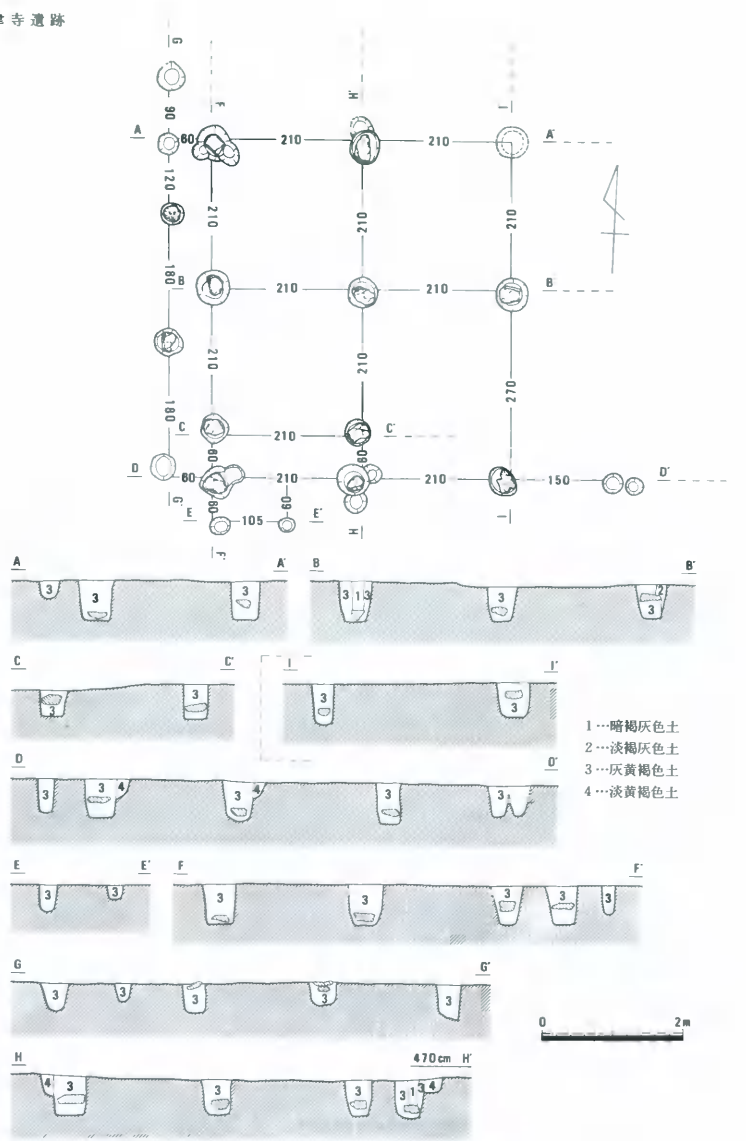
溝－５（第40図、図版82）

溝－３の北側で平行して検出された。Ⅰ農区の溝－８に続く溝と考えられる。幅40～50cm、深さ約10cmを測る。埋積土は、暗黄褐色土で炭・焼土を含む。出土遺物には、土器細片が多いが亀山焼捏鉢などもみられる。

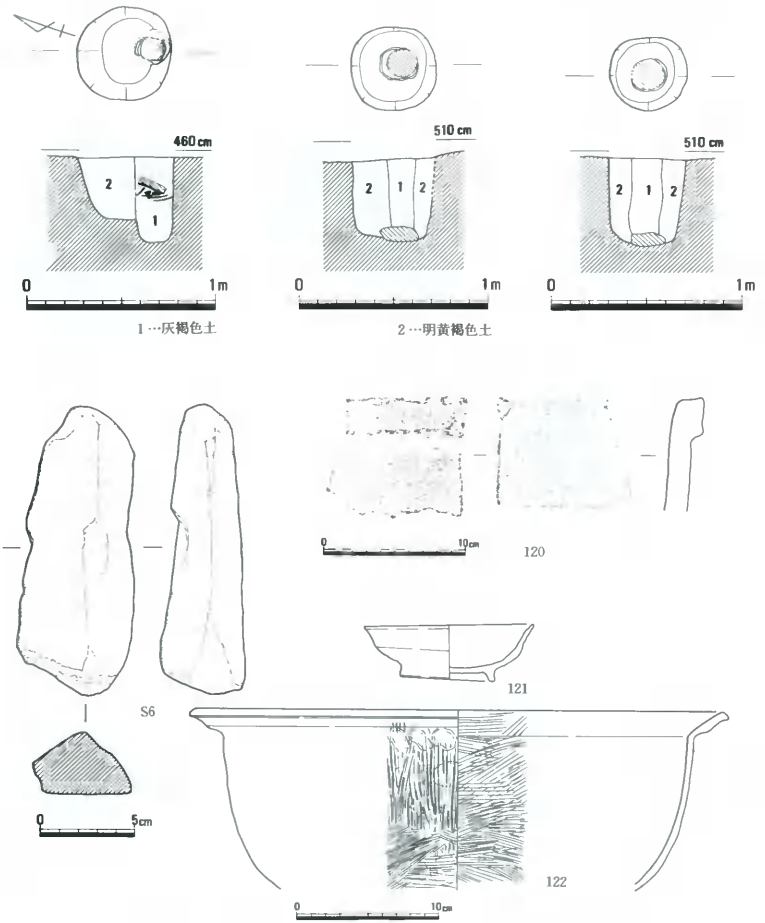
以上、主な遺構についてはその概略を述べたが、中世以降では、調査区北半の西側で検出された近世の水田遺構がある。水田面では、浅い数条の溝がみられる。112～119の陶磁器やM1・２の宋銭が出土している。112は12～13世紀に比定される青磁の小皿である。113～117も青磁碗である。118は、中国製の染付で室町時代（15世紀代）に比定される碗である。119は肥前陶器と推定される。宋銭は、淳化元宝と皇宋通宝である。



第42図　丸田Ⅰ農区土層断面図（1/30）



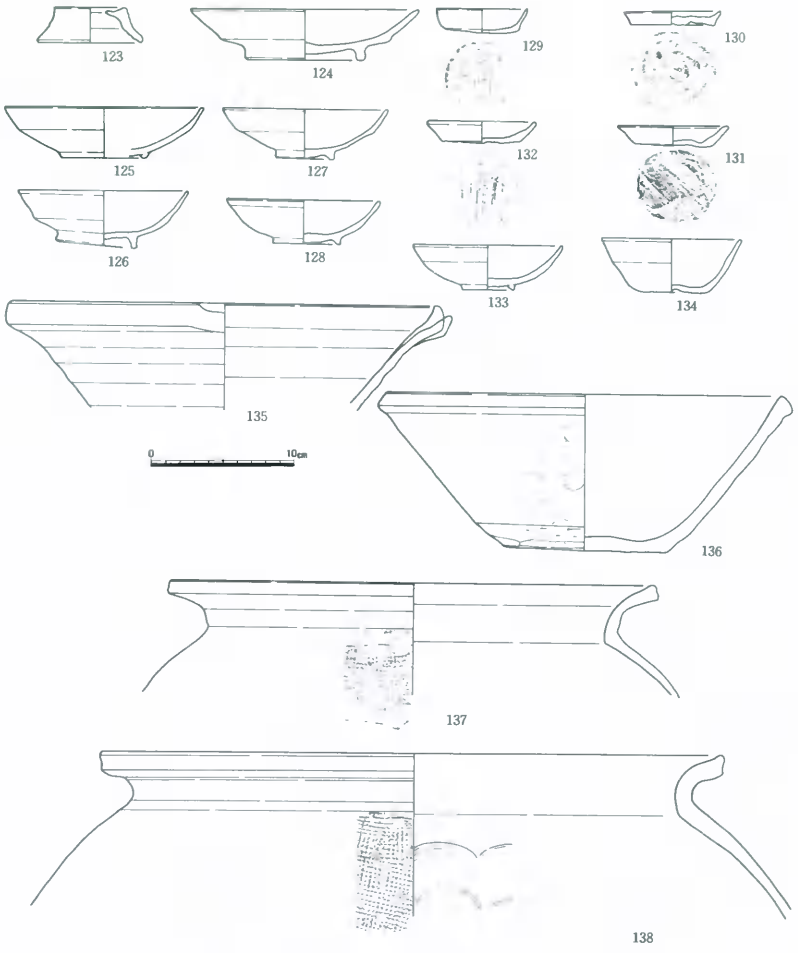
第43図　建物－3（1/80）



第44図　丸田Ⅰ農区柱穴（1/30）・出土遺物（1/3・1/4）

③Ⅰ農区

ⅠE区の東側に接する狭長な調査区で、実際にはⅣB区の東側まで一気に調査を行なった。第42図の土層断面図に示すように、微高地部分では、比較的表土から約30㎝の30層で中世遺構面が検出される。低位部では、31・34層のように青灰色の粘土質の層にかわり、35層の格子目

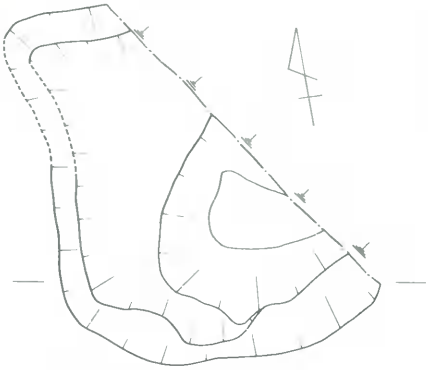


第45図　丸田Ⅰ農区包含層出土遺物

状溝が検出される古代の遺構以外、目立った中世遺構は認められない。

この中世遺構面は、明るい黄色を呈する微砂質の堅硬な土層で、海抜4.4m～4.6mの範囲で大半の遺構が検出される。北側が高位、南方へ微高地は下降する。

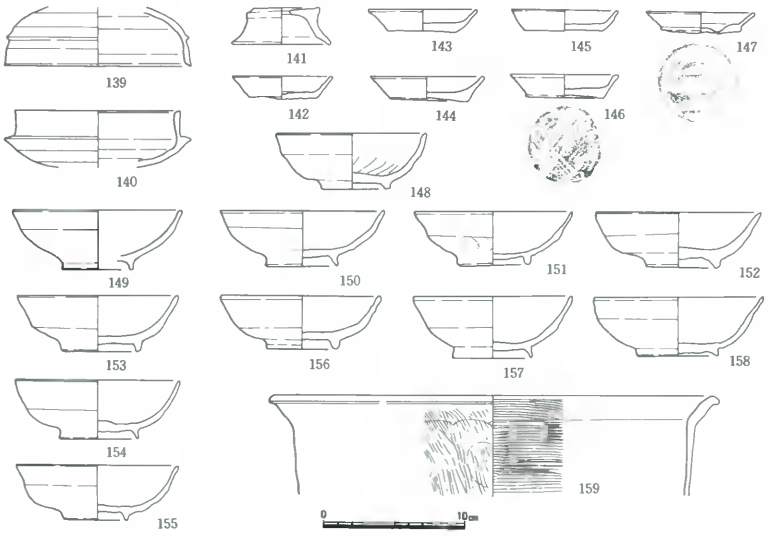
遺構は、建物・溝・土壙・集石遺構などで、建物としてまとまらない柱穴も多数検出された。



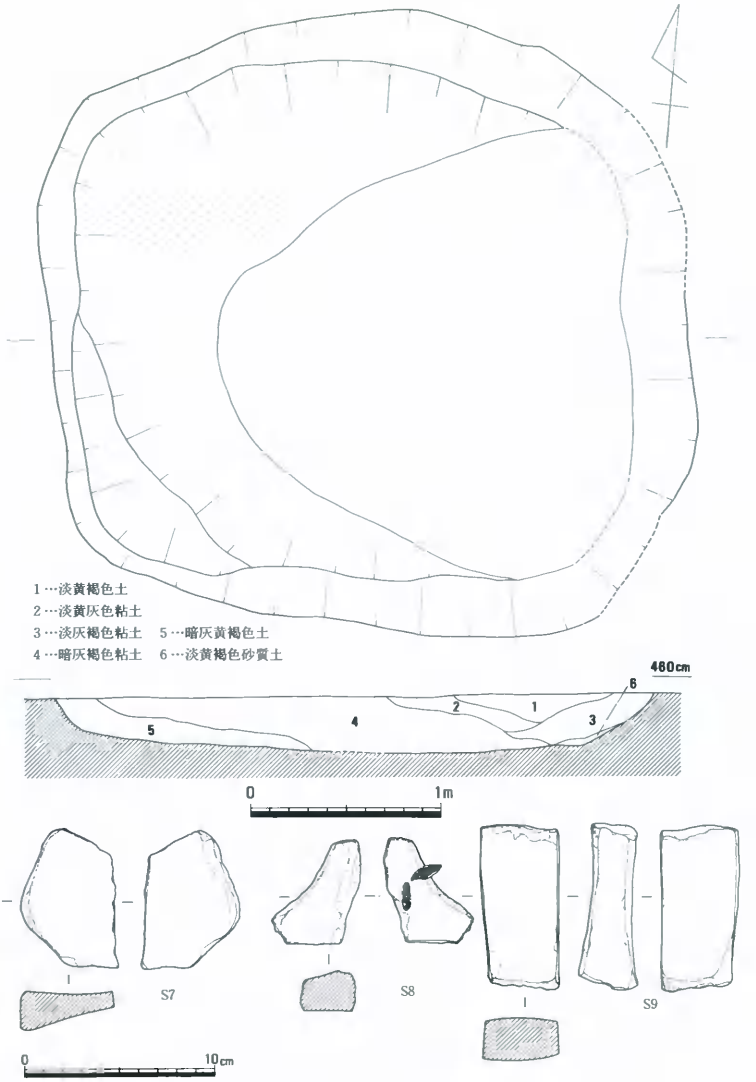
墓はなく、もっぱら居住に関連する遺構が多い。以下、主な遺構について概略を述べる。

建物－３（第43図、図版57）

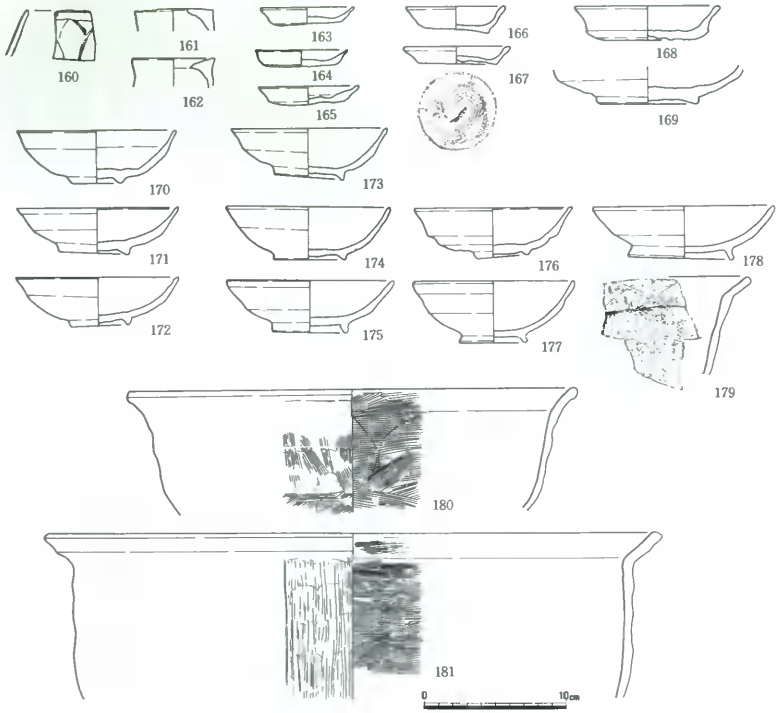
溝－６の北側で検出された総柱建物で、それぞれの柱穴の底には片側の面が平らな花崗岩を置き、根石としている点に大きな特色がある。これは、建物の西側で検出された柱穴列にも看取され、これも建物に付属するも根拠と理解している。石は、凸面を下に置き、平らな面を上に向け、ほぼ水平に高さを保ち、柱を立てたようである。柱の長さに応じて、高さを調整したようで微妙に高低差



第46図　土壙－12（1/60）・出土遺物



第47図　土壙－13（1/30）・出土遺物（砥石）（1/3）



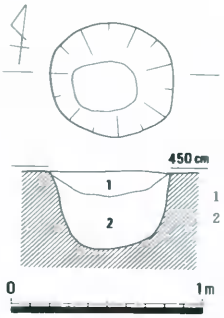
第48図　土壙－13・出土遺物

がつけられているものもある。柱穴の拡大図は第44図の右端に示す。

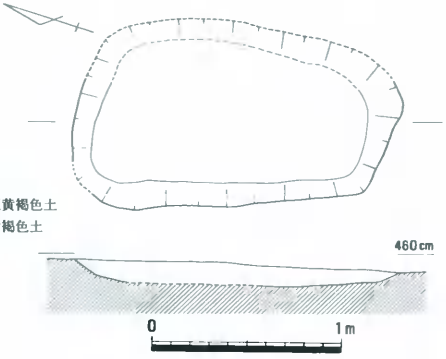
他に柱穴がまとまる可能性が強い建物が数棟あるが、調査区内ではまとめきれなかった。柱穴の中からは、S6の花崗岩質砂岩製の砥石や、122・123の土師器（同一の柱穴から出土）のほか、第45図に掲載する土師器が多数出土しているが、120のやや大型の円筒埴輪の出土は注意される。135・136は東播系の須恵器捏鉢、137・138は亀山焼の甕である。

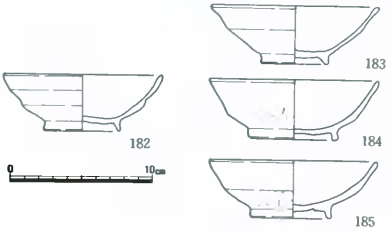
土壙－12（第46図、図版86）

建物－３の北約５ｍに位置する、ややいびつな隅丸方形を呈する、比較的大型の土壙である。出土遺物には、中世の土器が大半を占めるが、139・140のような古墳時代の須恵器（蓋・杯）も出土している。土師器の椀は、口径10～11㎝前後の早島式椀である。

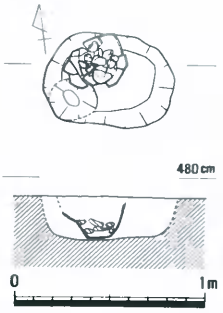


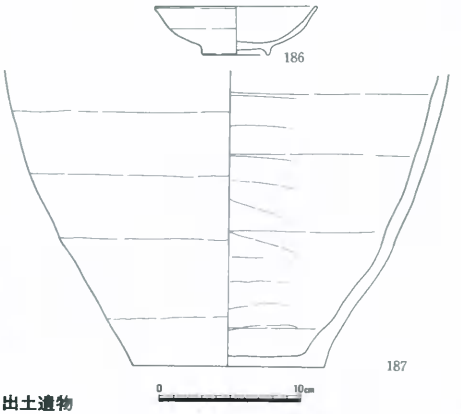
第49図　土壙－14（1/30）



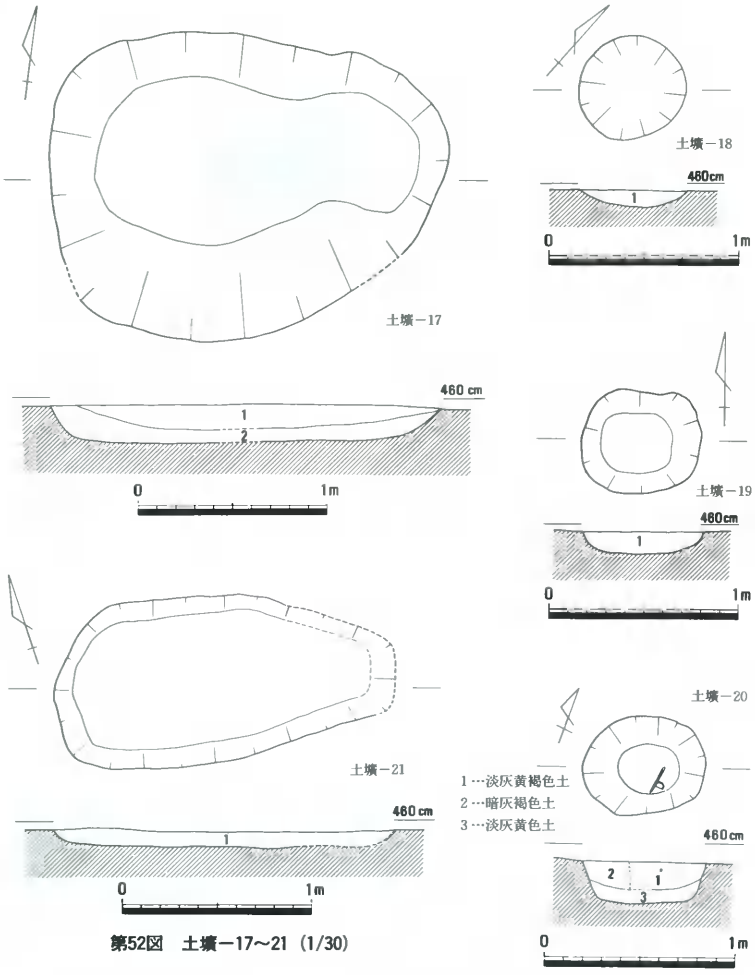


第50図　土壙－15（1/30）・出土遺物





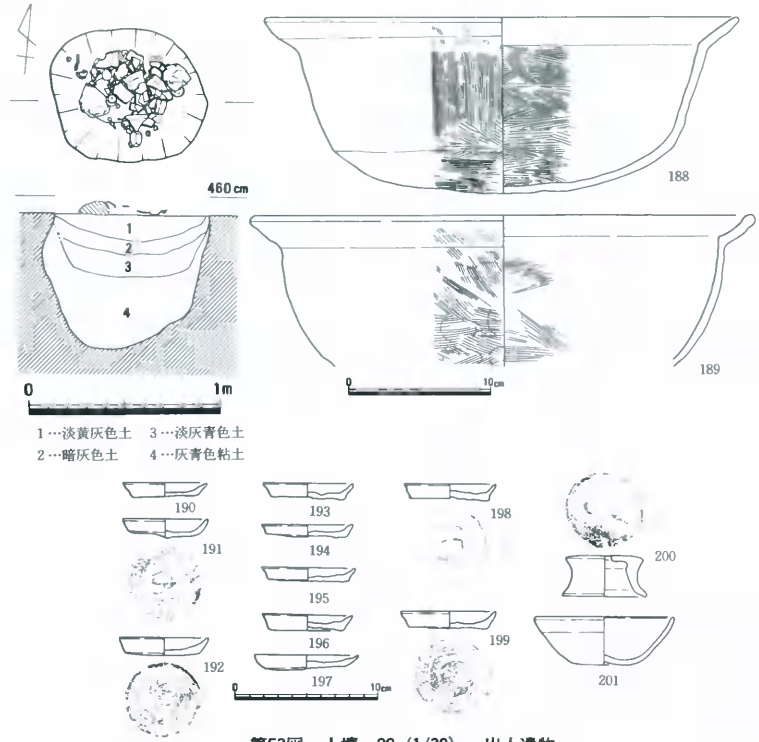
第51図　土壙－16（1/30）・出土遺物



第52図　土壙－17～21（1/30）

土壙－13（第48図、図版89）

建物－３の南に接する大型の土壙で、底部は比較的平坦である。出土遺物には、S7～S9の３点の砥石が含まれている。土器類では、160の青磁碗のほかは土師器が大半を占める。土壙－12とほぼ同時期に比定される。



第53図　土壙－22（1/30）・出土遺物

土壙－14（第49図）

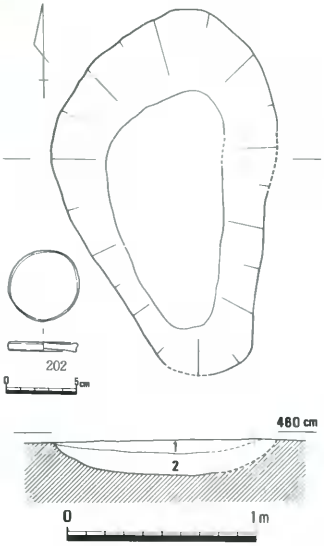
ほぼ円形を呈する土壙である。上層には、炭・焼土細片を含む暗灰褐色土、下層には淡黄灰土が埋積する。柱穴の可能性は少なく、貯蔵穴の可能性がある。

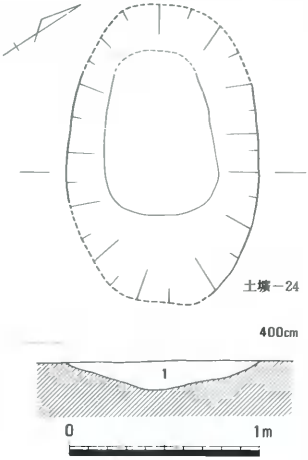
土壙－15（第50図）

建物－３と重複して検出されたいびつな長方形を呈する土壙で、建物－３より古い。出土遺物には、**182～185**の土師器椀がある。

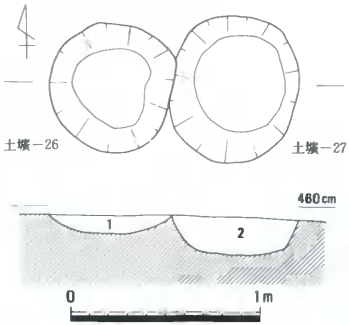
土壙－16（第51図、図版91）

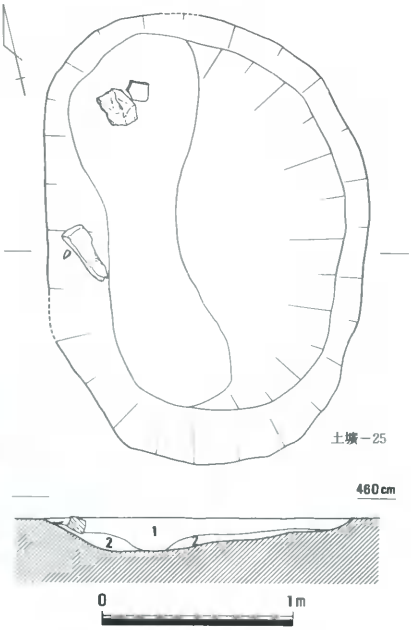
土壙－12の南西方で検出された小土壙で、信楽焼あるいは、伊賀焼と推定される壺187が埋置されていた。壺の内部には、3.4～7.8㎝前後の円礫がほぼ二段に置かれており、特殊な容器として用いられた可能性が強い。礫の上に、**186**の土師器が置かれていたが、埋葬遺構の副葬





第54図　土壙－23（1/30）・出土遺物





第55図　土壙－24～27

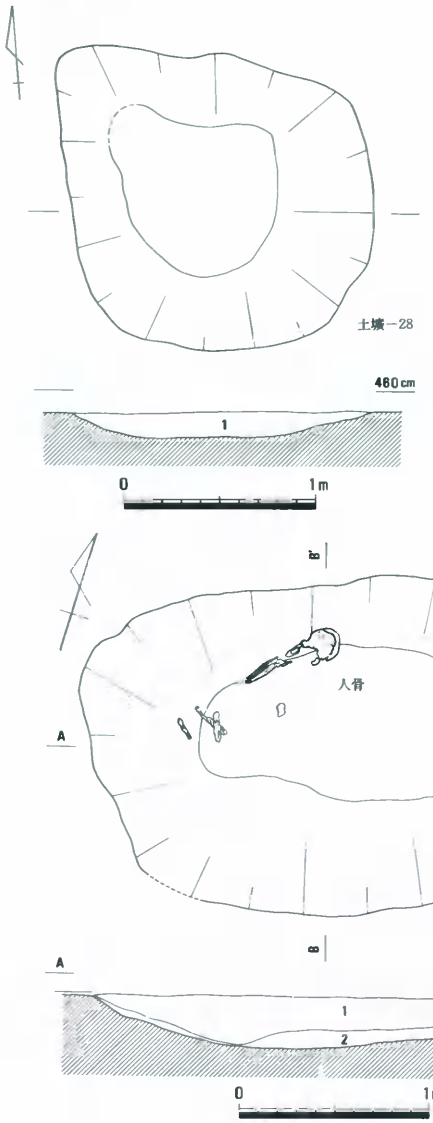
品とは断定できない。

土壙－17～21（第52図、図版86・87）

不整形な土壙群である。いずれも比較的浅い。土壙－17は上層には砥石・土器片などを含む淡灰黄色土、下層には淡黄褐色土が埋積する。土壙－18・20はいずれも淡黄灰色土を基調とする埋積土がみられる。

土壙－22（第53図、図版91）

溝－7の南5mに位置する。深さ約70cmと他の土壙にくらべるとかなり深い。断面形は袋状をなし、上層に多数の遺物が出土している。土師器鍋188・189、土師器小皿190～199、脚台200、椀201など大半が、日常使用される土器の一群であ



第56図　土壙－28・29（1/30）

る。また、亀山焼の格子目タタキが施された甕片も出土している。

土壙－23（第54図、図版86）

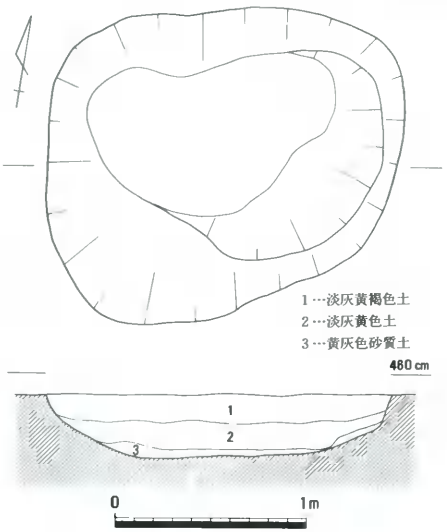
建物－３の西に位置する不整形な土壙で、上層には黄褐灰色土、下層には淡灰黄土が埋積する。出土遺物のなかに202の土師器椀の高台部分の底部を利用して円板としたもので、周縁を面取りしている。遊戯具に転用されたと考えられる。

土壙－24（第55図、図版92）

土壙－27と土壙－29のあいだで検出された。やや長円形を呈する土壙である。埋積土は淡黄灰色土である。

土壙－25・26

（第55図、図版86・87）



第57図　土壙－30（1/30）

建物－３のなかで接して検出された円形を呈する土壙である。遺物は皆無である。埋積土は、黄灰色土である。

土壙－27（第55図、図版92）

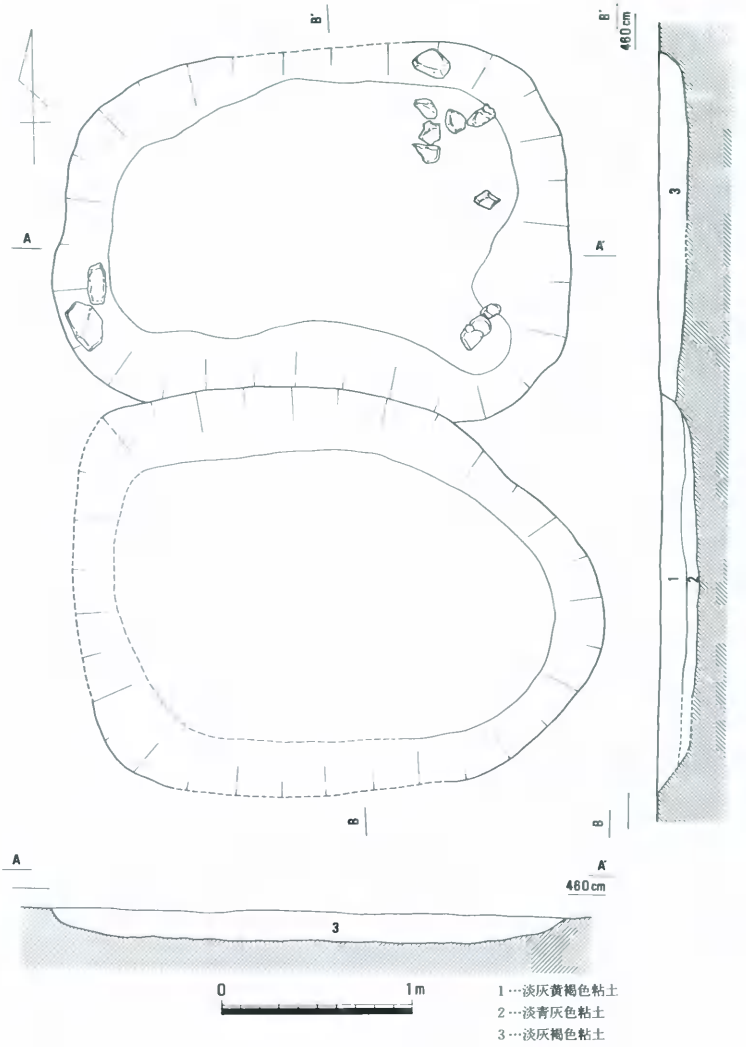
土壙－24を切って北側に位置する大型の土壙である。長径2.4ｍ以上、短径1.7ｍを測る。上層には、礫のほか獣骨と思われる骨片を含む、淡灰黄色土、下層には、明黄褐色土が埋積する。この土壙から南にかけては、やや大きめな土壙が集中し、また柱穴も比較的多い。

土壙－28（第56図、図版92）

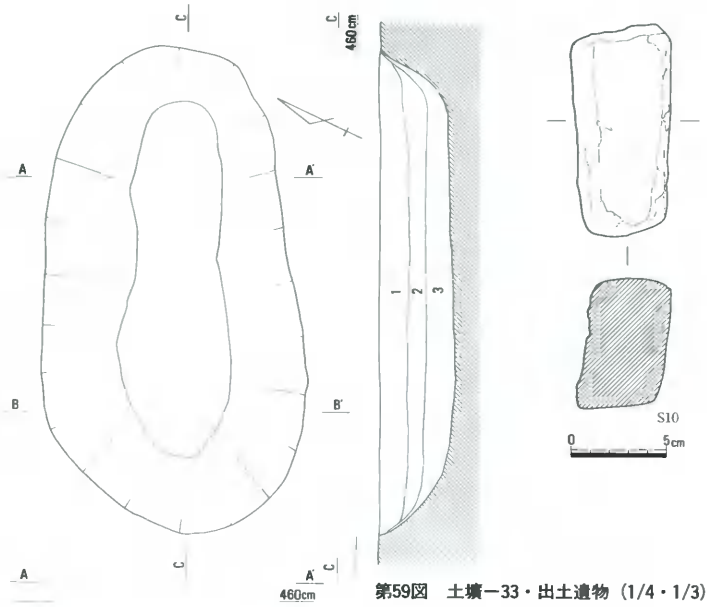
土壙－25のすぐ西側に位置する、かなりいびつな形状を呈する土壙である。淡灰黄褐色土が埋積する。

土壙－29（第56図、図版92・93）

土壙－24を切って南に位置する土壙で、西側法面下部で人骨が出土している。頭骨と四肢骨の一部が確認されている。下肢骨は、頭位に直行しているので屈葬のように、下半身は折り曲げられたようである。性別・年令等が確定できるほど残存度はよくない。墓として掘られた土壙とは思えず、不慮の死あるいは、行き倒れのような遺棄死体で、放置された可能性もある。人骨は成人で、男性の可能性が高いと鑑定されている。上層には、淡灰褐色土、下層には淡灰黄色土が埋積し、通常の土壙と同じ埋積土で、遺跡地で検出された土壙墓が、平面形が分かり



第58図　土壙－31・32（1/30）



第59図　土壙－33・出土遺物（1/4・1/3）

づらいのと対照的であった。

土壙－30（第57図、図版93）

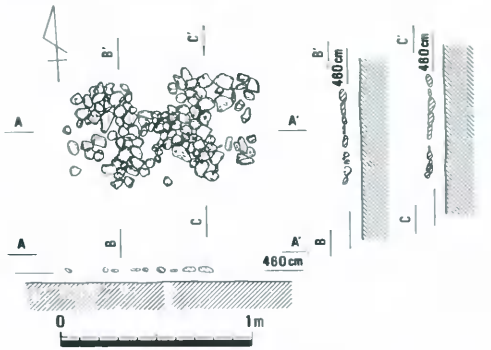
土壙－31の北に接して検出された長径1.8ｍを測るいびつな平面形を示す土壙である。埋積土壙のなかには炭・焼土片が含まれる。

土壙－31（第58図、図版93）

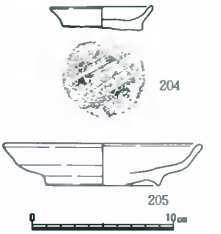
土壙－32に切られて検出された土壙で、どちらも同じような形状を示す。東側には、拳大の礫が散在する。

土壙－32（第58図）

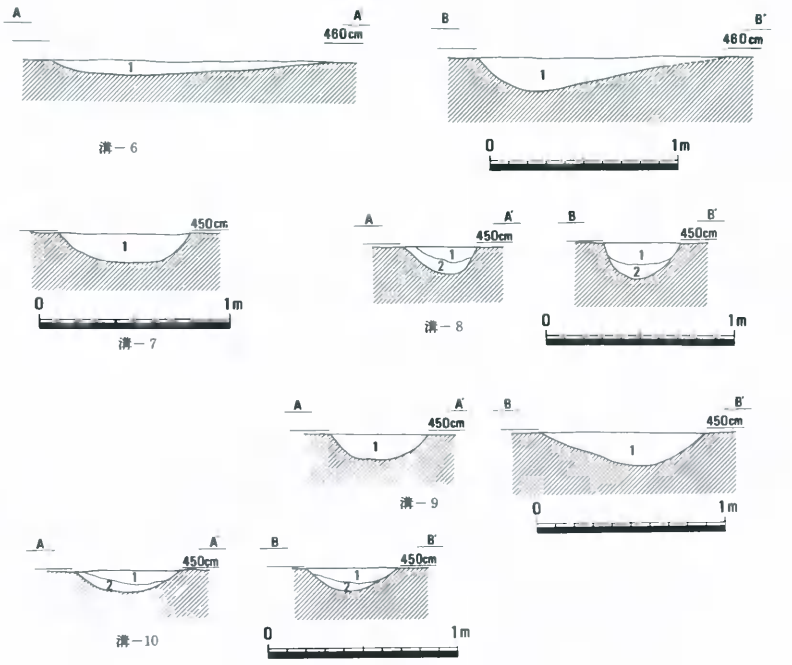
土壙－31を切って掘りこまれた土壙で、やや暗い色調の埋積土が



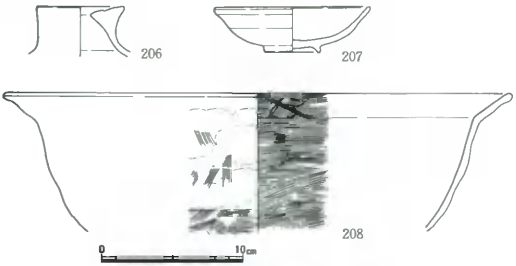
第60図　集石遺構－2 (1/30)



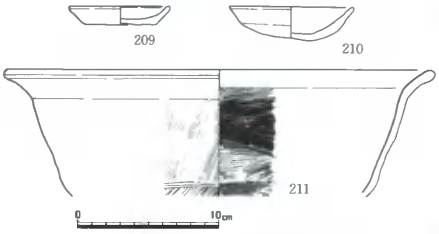
第61図　溝－6出土遺物 (1/4)



第62図　溝－6～10断面図 (1/30)



第63図　溝－７出土遺物



第64図　溝－９出土遺物

看取される。

土壙－33（第59図）

本来は、Ⅲ農区としてとりあげるべき地点に位置する。やや長円形を呈し、比較的丁寧に掘りこまれている。徐々に埋まった状況が土層断面図からわかる。出土遺物には、**S10**の砂岩製の砥石のほか、土師器**鍋203**がみられる。

集石遺構－２

（第60図、図版86・90）

土壙－23の南側で検出された集石部分で、本来は、浅い土壙であった可能性もある。あたかも敷き詰めたように、礫の面をほぼ水平に揃えている。礫は、大きいもので10数㎝、大半は5.6㎝前後である。建物－３に付属する施設・設備の可能性もある。礫を除去すると、古い時期の柱穴が検出されている。

溝－６（第61図）

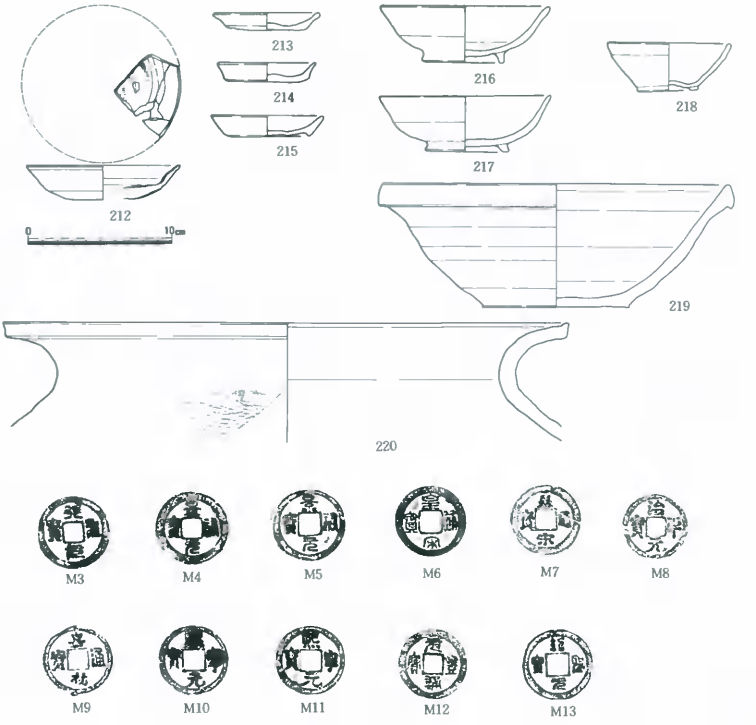
ⅠE区の溝－２の東部分である。ほぼ東西方向に直線的に延びることが明らかとなった。この溝から北側の方が、柱穴の密度が高く、時期的にも土筆山調査区の集落と関連する可能性が強く、南側を区画する溝と考えられる。出土遺物には、**204・205**の土師器がある。埋積土は、灰褐色を呈する。

溝－７・８（第62図、図版86）

本来は、一条の同じ溝であるが、南西方に向け分岐する。溝－７はⅠE区の溝－３に、溝－８は溝－５に連接する溝－７からは、**206～208**の土師器がみられる。埋積土は、溝－７は暗灰褐色～灰黄褐色、溝－８は上層が灰黄褐色、下層は黄褐色を呈する。

溝－９（第62図、図版86）

溝－７・８に切られる状態で検出された。西方に溝底のレベルが下がっているので、幅の変化も考えあわせると、東から西へ流れていたことがわかる。出土遺物には、**209・210**の土師器



第65図　Ⅰ農区柱穴、包含層出土遺物（1/4・1/2）

皿や鍋211がある。埋積土は、淡灰褐色を呈する。

溝－10（第62図）

これもⅢ農区に位置する。ほぼ東西方向を示す。上層には灰黄色粘質土、下層には淡青灰色粘質土が埋積する。

以上、主な遺構について述べた。出土遺物としては、遺構以外の包含層や遺構検出面からも多くみられる。第65図には、それらの遺物の一部を掲載した。青磁皿**212**、土師器皿**213～215**、椀**216～218**、東播系の須恵器捏鉢**219**や亀山焼の甕**220**などの土器のほか、**M3～13**の宋銭がある。宋銭は、建物－３の近くで比較的多く出土した。たとえば、身舎に含まれる柱穴から、皇宋通宝２枚、熙寧元宝２枚、景祐元宝２枚、紹聖元宝１枚、天聖元宝１枚と計８枚（**M3～**

7・10・11・13）もまとめて出土した例は特筆される。

(2)Ⅱ区

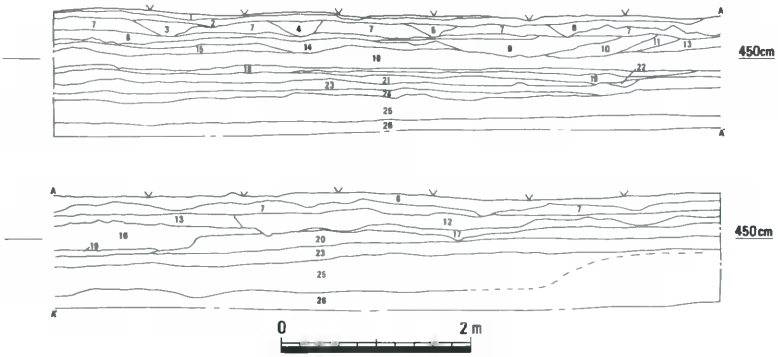
Ⅰ区とは接しないが、連続する遺構として溝－1があるほか、古代にさかのぼる遺構群が初めて検出された調査区である。しかし、工事用道路をはじめさまざまな要因によって南半あるいは、北半と分けて調査を行なったため、遺構の現認や確認には困難をともなった。

第66図は調査区の北側低位部の土層断面図である。16層は、最終的に近世水田が埋没した際の洪水砂で20～30cmの厚みをもつ。18層から下に水平堆積する水田遺構が存在する。23層以下の水田遺構の存在を示唆する青灰色粘土層が堆積する。24層からは、第71図に収載する221～223の土師器が出土しており、ほぼ鎌倉時代の前半期に比定される水田層の存在を示す。のちに、古代おそらく平安時代前半期に比定される水田遺構が検出された際の土層断面図では、第70図のように微高地と低位部の、およそ40cmの落差をもつ境界が明瞭に看取された。

以下、主な遺構について概要を述べることとする。

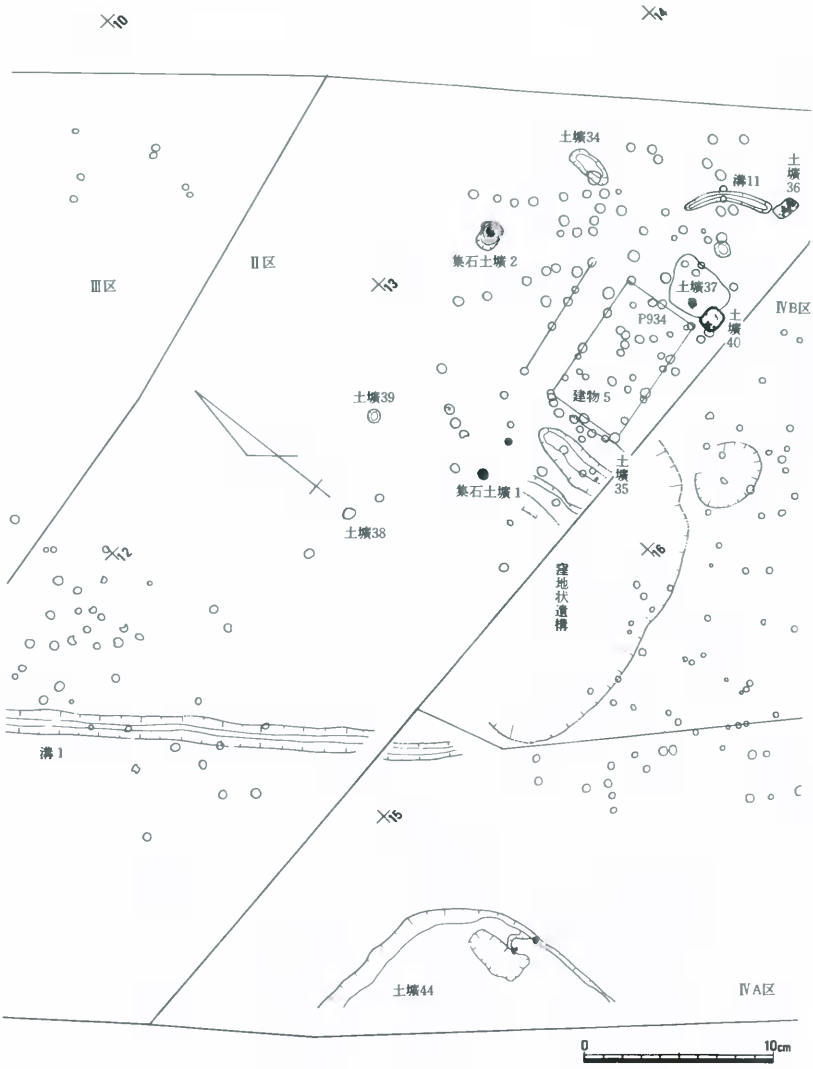
格子目状溝（第67・73～76図、図版107・108）

この調査区で最古の遺構としては、第67図の微高地で検出された格子目状溝があげられる。Ⅱ区からⅢ区にかけてもっとも明瞭で、Ⅳ区の一部で同様な溝の存在が確認されている。基本



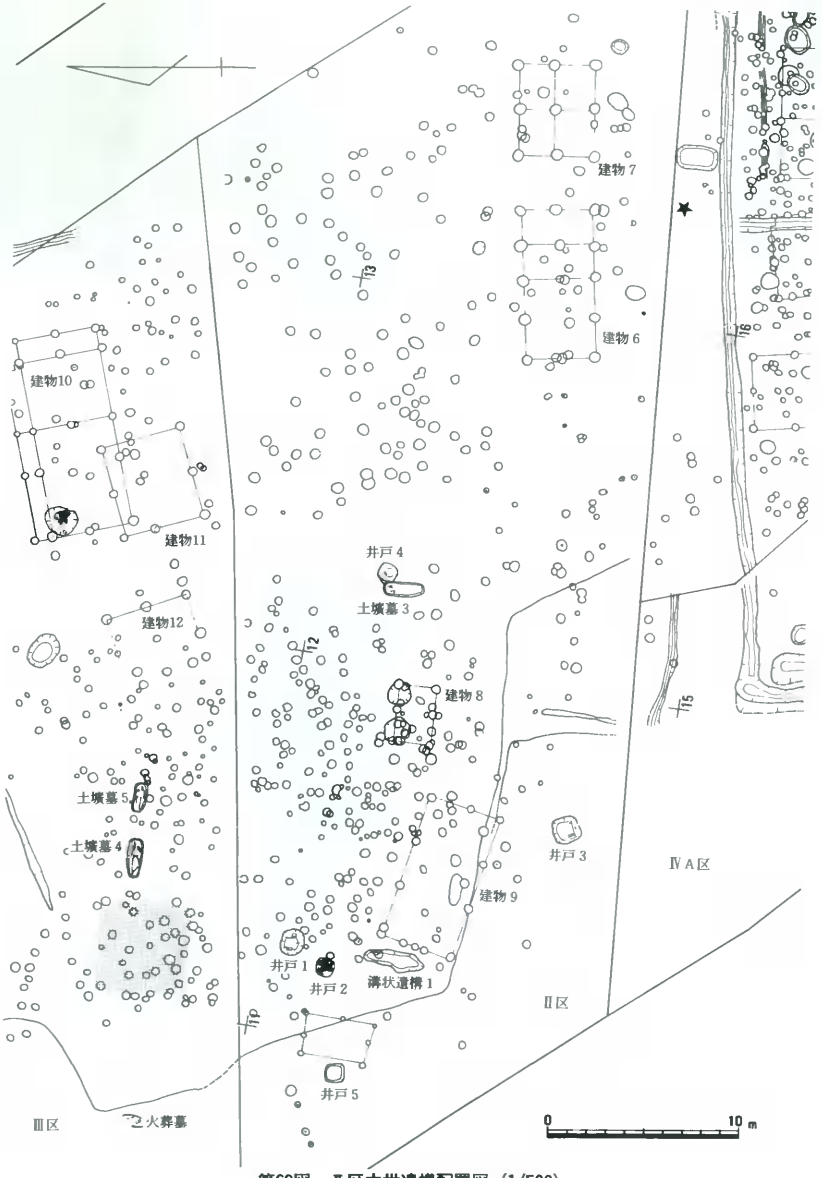
第66図　丸田Ⅲ区北壁土層断面図（1/60）

的に、東西南北の方向性をもち、断面形はU字形（第73・74図）あるいは、東側で顕著だった逆台形（第75図）を示す。一部では方向の修正が行なわれた痕跡もみられる。同時期に存在したと思われる低位部の水田遺構は、格子目状を示さない。このことは、栽培した作物が異なっていた可能性を示唆するばかりでなく、季節に応じた作物の栽培がおこなわれていたことをも暗示している。

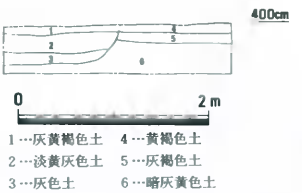


第68図　丸田Ⅱ～Ⅳ区古代遺構図（2）（1/300）

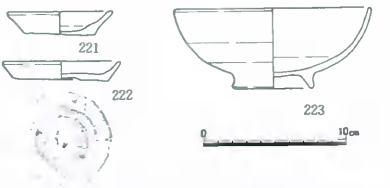
第67図　丸田Ⅱ区古代遺構配置図（1）（微高地上の格子目状溝・低位部溝）（1/300）



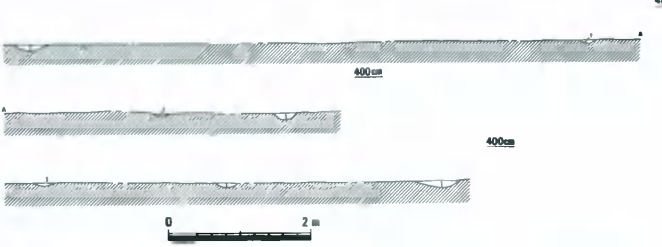
第69図　Ⅱ区中世遺構配置図（1/500）



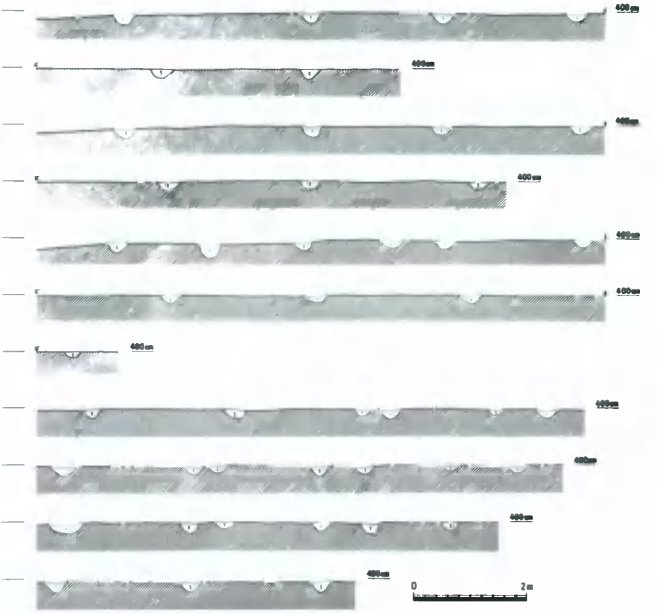
第70図　微高地肩土層断面図（1/60）



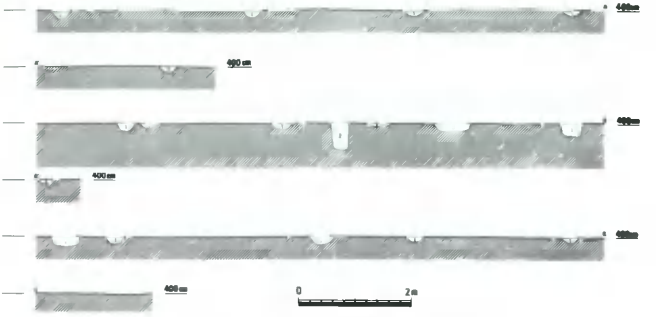
第71図　低位部水田出土遺物



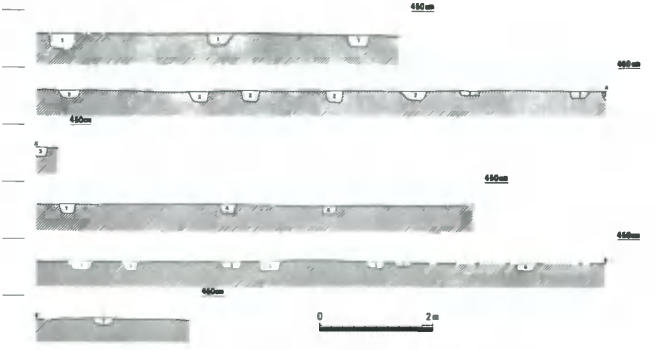
第72図　低位部水田（溝）断面図（1/80）



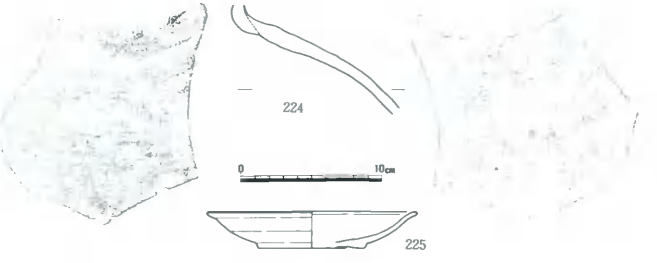
第73図　格子目状溝断面図1（1/100）



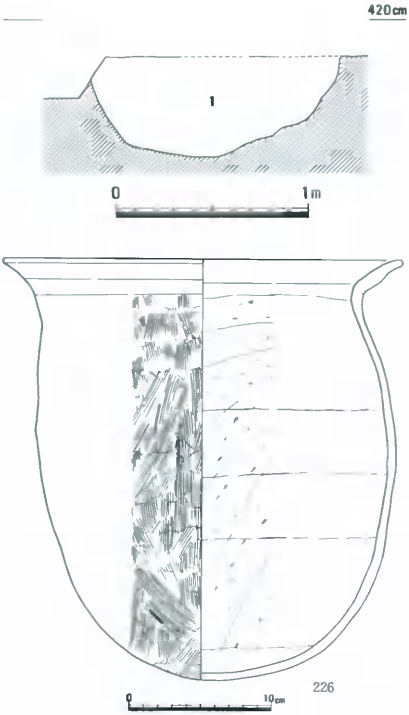
第74図　格子目状溝断面図２（1/100）



第75図　格子目状溝断面図３（Ⅱ～Ⅲ農区；1/100）



第76図　格子目状溝出土遺物



第77図　溝－1（1/30）・出土遺物

格子目状溝からの遺物の出土はきわめて少ないが、224の須恵器甕の破片のほか、225の緑釉陶器の皿の破片がある。225は軟陶で精良な胎土に光沢のある黄緑色を呈する釉調を観察できる。平安時代前半期、9世紀代に比定される遺物である。

溝－1（第77図、図版106）

Ⅰ区で検出された続きで同一の形状を示す断面形が確認された。青灰色を呈する粘土が堆積する。出土遺物には、226の土師器甕がある。ほぼ完形で、体部は長胴で類例は少ない。

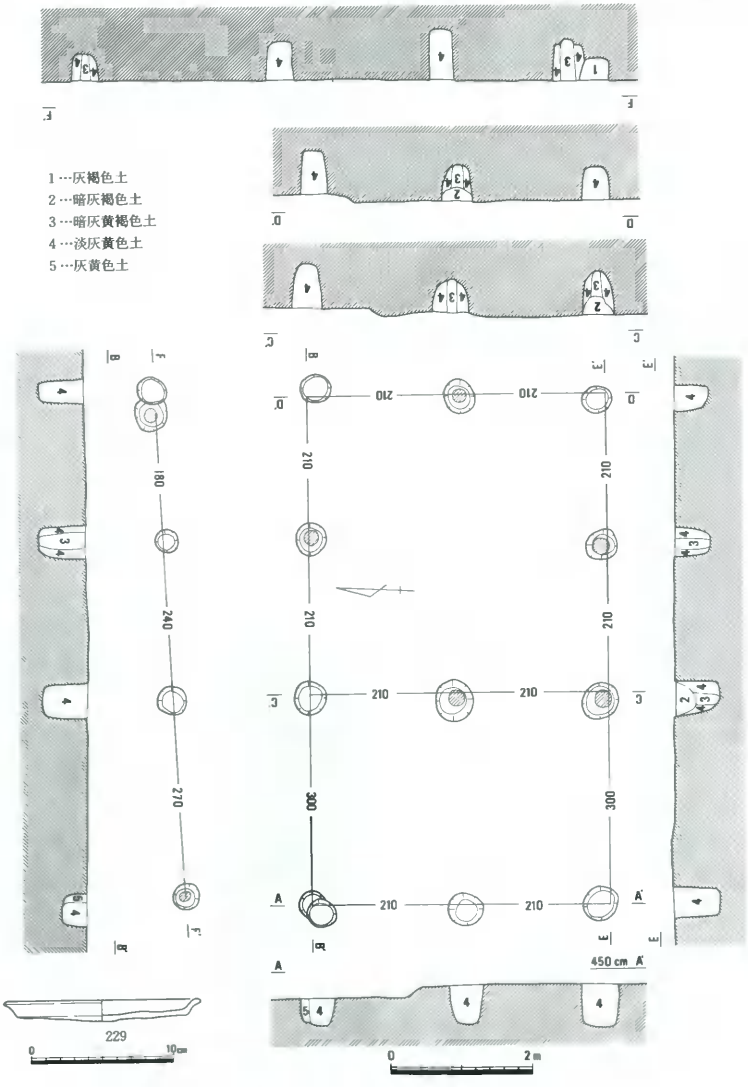
遺物としては、第78図にかかげるように、須恵器器台227のほか、円筒埴輪228があり、古墳時代の遺物が出土していることは、周辺の古墳や集落遺跡の存在に注意される。

建物－5（第79図、図版102）

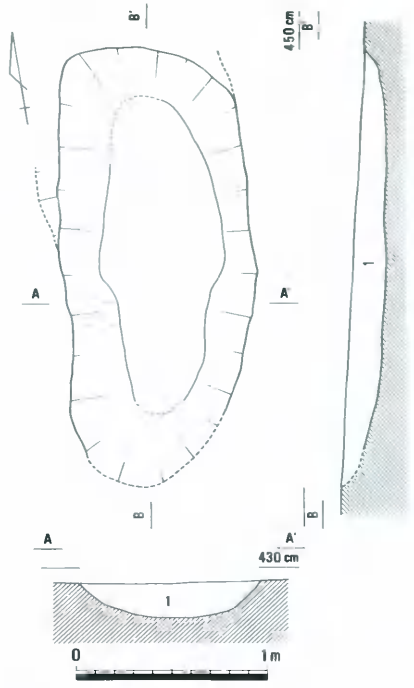
格子目状溝よりも上層で検出された建物で、目隠し風の塀を北側にもつ。桁行

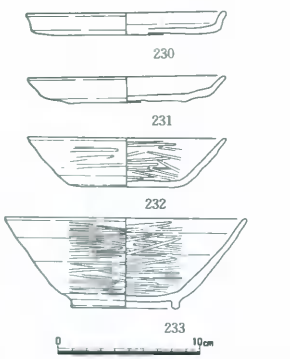
第78図　微高地出土遺物（1/4）

3間、梁行2間の間仕切りをもつ建物と復元推定される。基本的に、7尺あるいは10尺を基準としている。柱穴からの出土遺物には、229の土師器皿があり、平安時代前半から中頃に比定される。のちに触れるM14が出土した柱穴は、建物東辺のすぐそばにある。



第79図　建物－5（1/80）・出土遺物





第80図　土壙－34（1/30）・出土遺物

土壙－34（第80図）

建物の北東方約７ｍに位置する。溝ともみえる長円形を呈する平面形が検出された。埋積土壙は、炭の細かい破片を含む暗灰褐色を呈する。出土遺物には**230～231**の土師器皿と黒色土器の椀がある。**232**は高台が付かないもので、直線的に外方する体部が特徴的である。調査区での類例は少ない。**233**は高台の付くもので、底部から直線的な体部が**232**と共通する。いずれも黒色土器Ｂで、内外面には横方向の篦ミガキが施され、外面は橙褐色、内面は黒色を呈する。

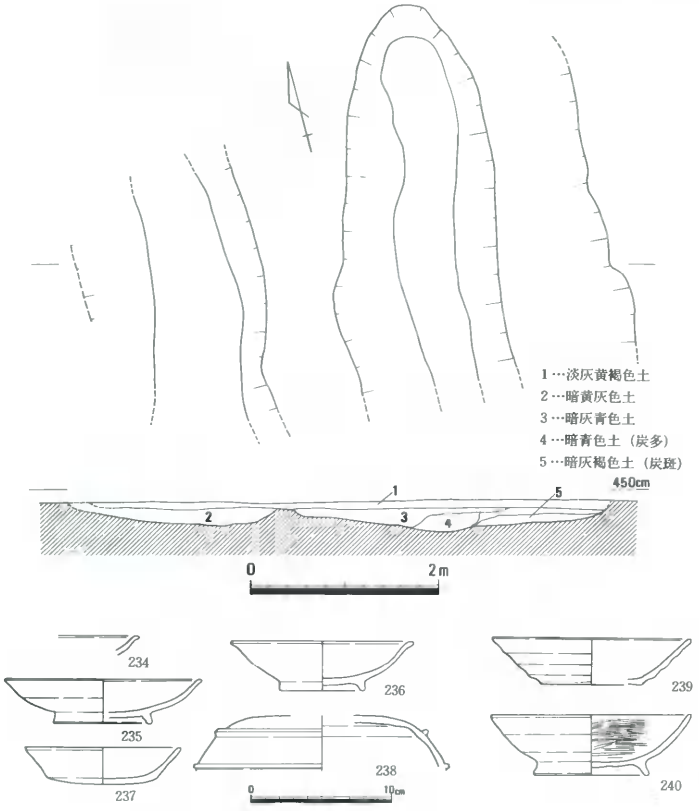
土壙－35（第81図、図版102）

建物－５の西側に位置する。ほぼ南北方向を示す、２条の溝状をなす起伏のある部分で、ⅣB区の窪地状遺構に連なる一連の土器溜りをなし、大きな凹地を形成している。

出土遺物には、**234～236**の緑釉陶器皿のほか、**237**の土師器皿、**238・239**の須恵器、**240**の黒色土器椀がある。**238**は壺の体部の肩部の破片で、２条の突帯が巡る。比較的丁寧なつくりである。**240**は内面に横方向の篦ミガキが顕著で黒色を呈し、外面は橙褐色である。いずれも９世紀末から10世紀代にかけての時期が比定される。

土壙－36（第83図、図版103）

建物－５の東方約８ｍに位置する。遺物の出土状態からいびつな長方形を呈する平面形が推定される。埋積土は暗灰褐色を呈し、少量の花崗岩の礫とともに、廃棄された土器がかたまっ

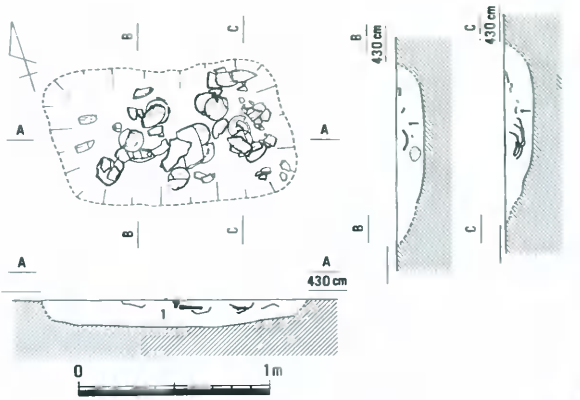


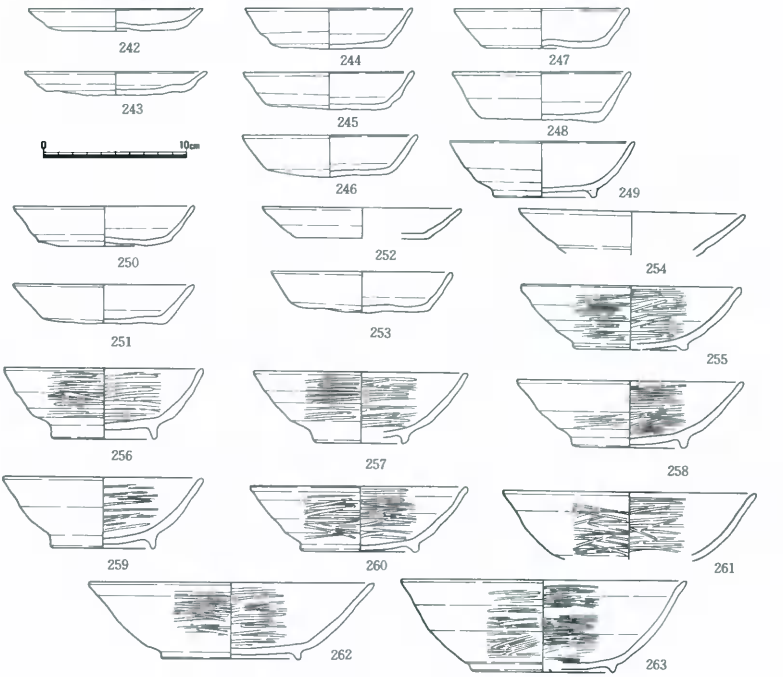
第81図　土壙（溝状）－35（1/30）・出土遺物

て出土している。土師器皿・杯など**242～254**のほか黒色土器椀**255～262**が大半を占め、竈の破片も少しみられる。黒色土器のなかには、**261～263**のように口径の大きいやや大振の椀がみられるが、他の遺構からは多く出土していない。平安時代、それも９世紀後半から10世紀前半に比定される。

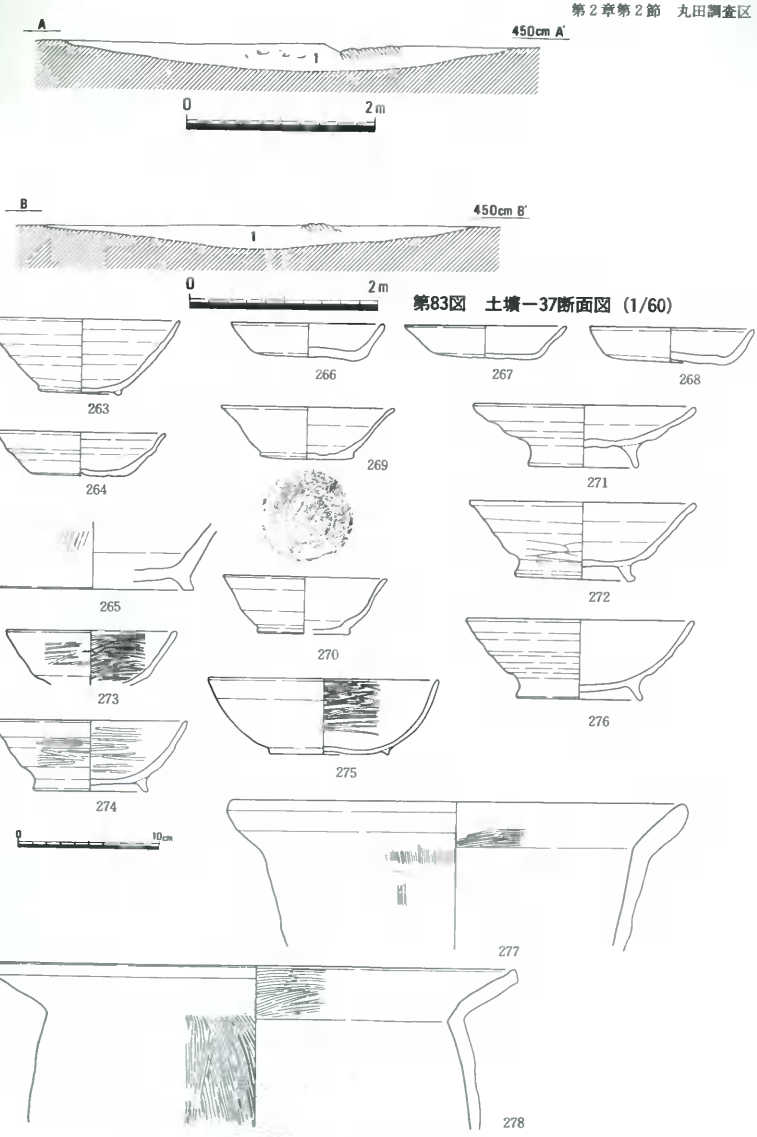
土壙－37（第84図）

建物－５のすぐ東側に位置する窪地状の遺構で、内部には第85図の集石土壙がある。深さ約20cmを測り、粘質の灰黄褐色土が埋積する。出土遺物には、**263～265**の須恵器をはじめ、**266**



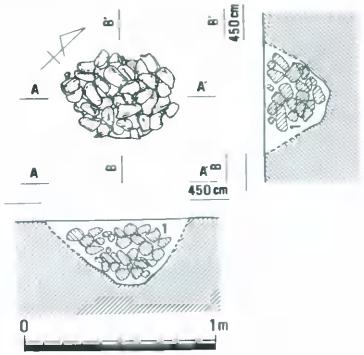


第82図　土壙－36（1/30）・出土遺物

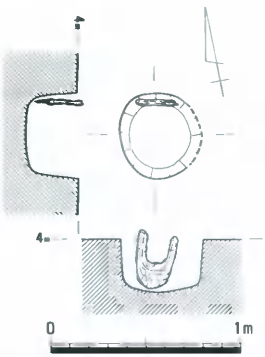


第83図　土壙－37断面図（1/60）

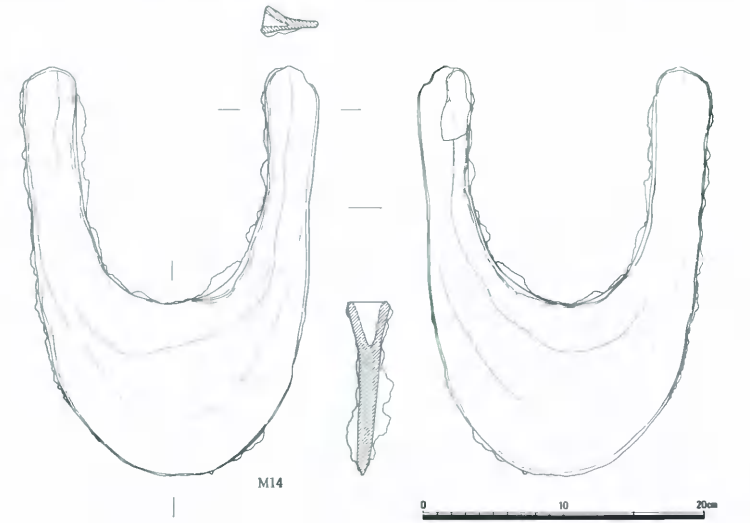
第84図　土壙－37・出土遺物



第85図　土壙－37内集石土壙（1/30）

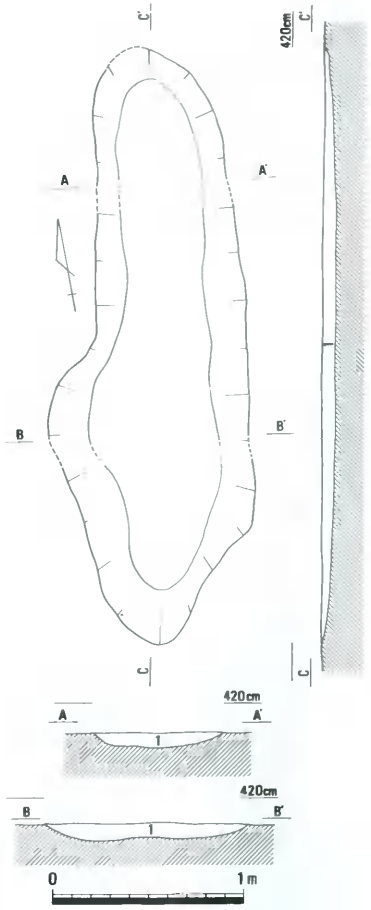


第86図　P－934鋤先出土状態（P934；1/30）

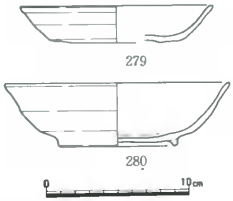


第87図　P－934出土鋤先（1/4）

～272・277・278の土師器や黒色土器273～275がみられる。須恵器は椀263、杯264、壺265など少量で、須恵器の少ない時期を示しているといえる。土師器は皿のほか、台付きの皿ともいえる271がある。黒色土器の椀でも275のように断面形が三角形を呈する高台をもつものもみられる。時期的には、土壙－36などとあい前後する時期に比定されよう。



第88図　溝－11（1/30）



第89図　溝－11出土遺物（1/4）

第85図に示す土壙－37は、摺鉢状に深くくぼむ。石は約90個で詰め込まれた状態に近い。埋積土は淡灰黄色の粘質土である。

第86図は、鉄製鋤先が出土したＰ－934で、立位の状態て出土したので、おそらく柄が着いたまま突き立てて放置されたのではないかと推察される。鋤先はＵ字形を呈し、長29㎝、幅20㎝を測る。

溝－11（第８・89図）

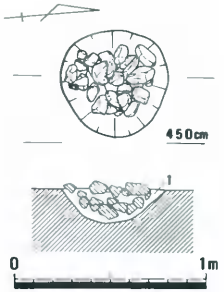
建物－５の東方約７ｍ、土壙－36に接して検出された弧を描く短い溝である。深さは10～20㎝を測り、淡黄灰褐色土が埋積する。土師器皿**279**や黒色土器**280**が出土している。

土壙－38（第91図）

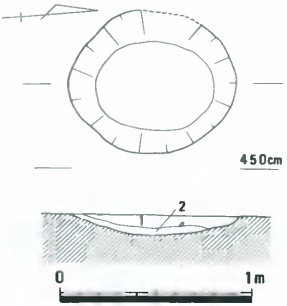
建物－５の北西方約10ｍに位置するいびつな円形を呈する土壙である。中央部の最上層には木炭の破片が集中して散布している。上層には淡灰黄色粘質土、下層には淡黄灰褐色土が埋積する。検出されたレベルから古代に比定される。

土壙－39（第92図）

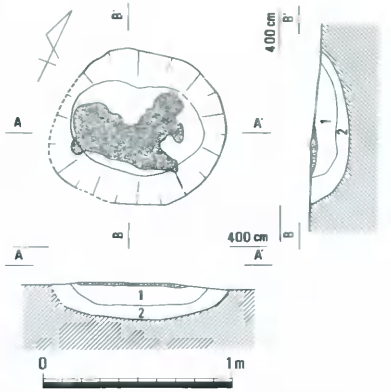
土壙－37の東側に位置する、円形を呈する浅い土壙である。上層には焼土を含む暗灰黄褐色土壙、下層には炭を多く含む淡黄灰色土が埋積する。中世の柱穴に切られる、古代の土壙と考えられる。



第90図　集石土壙－1（1/30）



第92図　土壙－39（1/30）

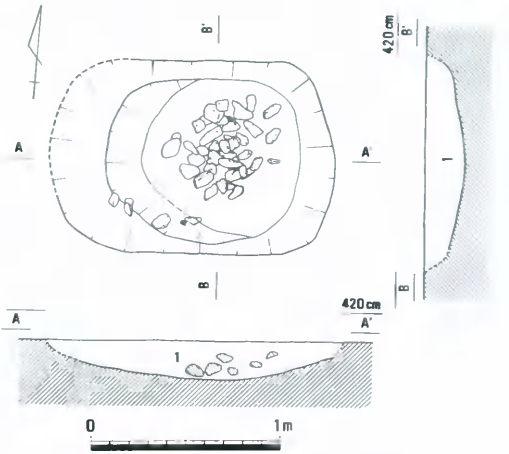


第91図　土壙－38（1/30）

集石土壙－1（第90図）

土壙－35の北側に位置する。摺鉢状に窪む穴に拳大あるいは、やや大きめな礫を多数詰めている。出土遺物には土師器細辺があるが、古代に比定される可能性が強い。

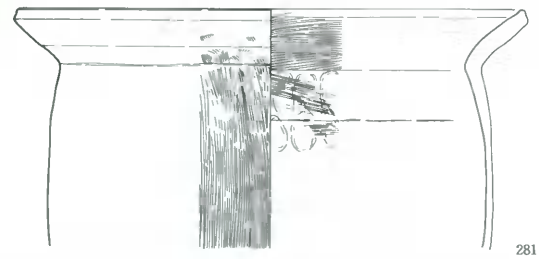
集石土壙－2（第93図）

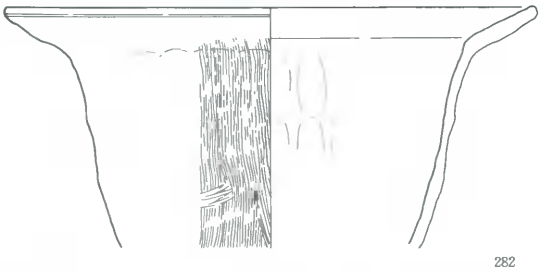


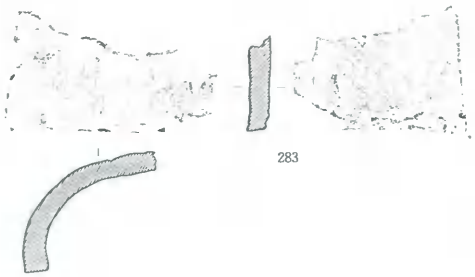
第93図　集石土壙－2（1/30）

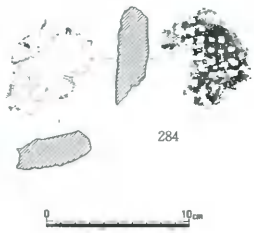
央からやや東に寄った部分に拳大の礫が集中する。出土遺物は土師器細片のみである。古代に比定される。

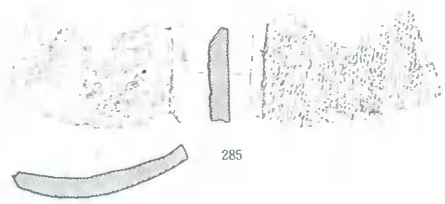
以上の土壙が検出された遺構面までの包含層からは、第94図に示す平安時代の遺物が多くみられる。土師器では、281・282などの煮沸用具とし



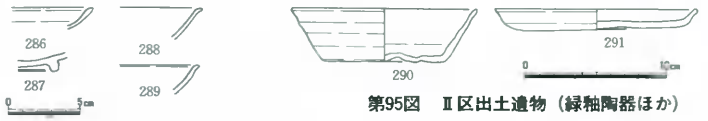




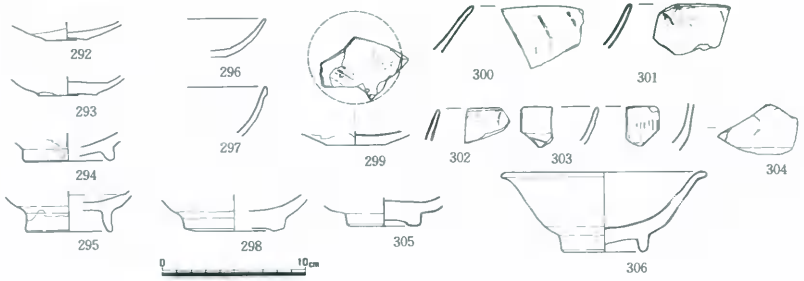




第94図　包含層出土遺物



第95図　Ⅱ区出土遺物（緑釉陶器ほか）



第96図　Ⅱ・Ⅲ区出土遺物（白磁・青磁）

ての甕や290・291の杯・皿がみられる。また瓦283～285もある。瓦の多くは、凸面には縄目、凹面には布目が看取される。稀に、284のような格子目もある。さらに、286～289の緑釉陶器片も散見する。いずれも９世紀後半から10世紀代にかけて京都で生産されたものが多い。

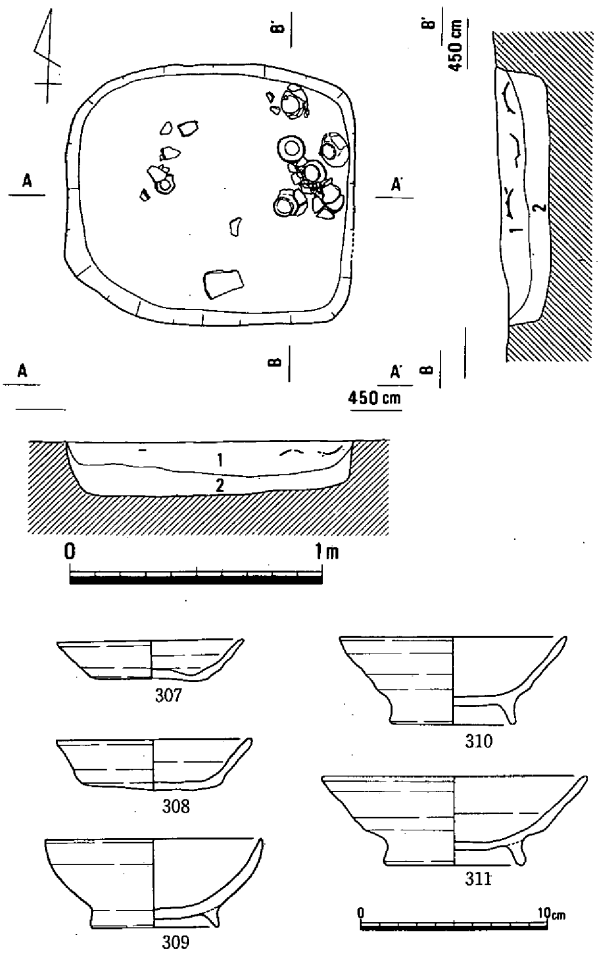
土壙－40（第97図、図版104）

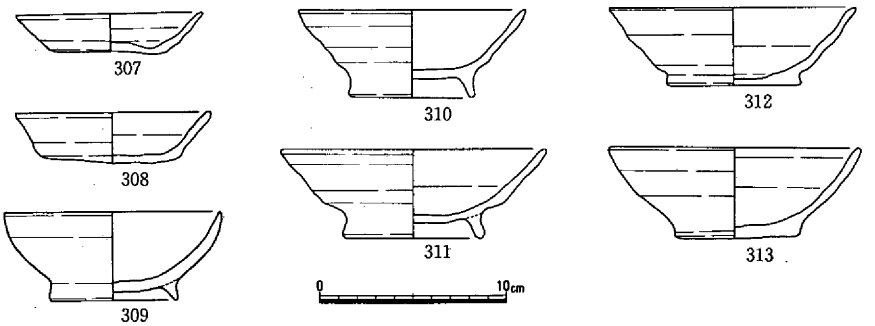
土壙－37の南に接するように検出された隅丸方形を呈する土壙で、丁寧に掘り込まれた形状が観察される。上層には炭を多く含む暗灰褐色土、下層はグライ化して青みを帯びる灰褐色の砂質土が堆積する。出土遺物には、307～313の土師器があるが、黒色土器は認められない。平安時代、10世紀後半から11世紀に比定される可能性がある。312・313の底部のつくりは円盤を貼り付け、安定感をもたしている。309～311など中世の早島式の椀の成立との比較に興味深い形観察される。上層には炭を多く含む暗灰褐色土、下層はグライ化して青みを帯びる灰褐色の砂質土が埋積する。

出土遺物には、307～313の土師器があるが、黒色土器は認められない。平安時代、10世紀後半から11世紀に比定される可能性がある。312・313の底部のつくりは円盤を貼り付け、安定感をもたしている。309～311など中世の早島式の椀の成立との比較に興味深い形態を示す。

建物－６（第98図、図版95）

建物－５と重複して存在する。中世の遺構面から検出された間仕切りをもつ建物で棟方向を東西に向ける。推定される規模は、桁行３ないし４間、梁行２間である。６尺あるいは、７尺を基準としている。





第97図　土壙－40（1/30）・出土遺物

柱の痕跡は比較的明瞭である。掘方の１層は抜き取り痕跡とも考えられる。２層は暗灰褐色、３層は灰黄色を呈する埋め土である。

建物－７（第99図、図版95）

建物－６と棟方向を同一にする総柱の建物である。東西は８尺、南北は６ないし７尺を基準としている。１層は柱痕跡、２層は埋め土である。

建物－８（第100図、図版96）

調査区の西半部で検出された小規模な建物である。

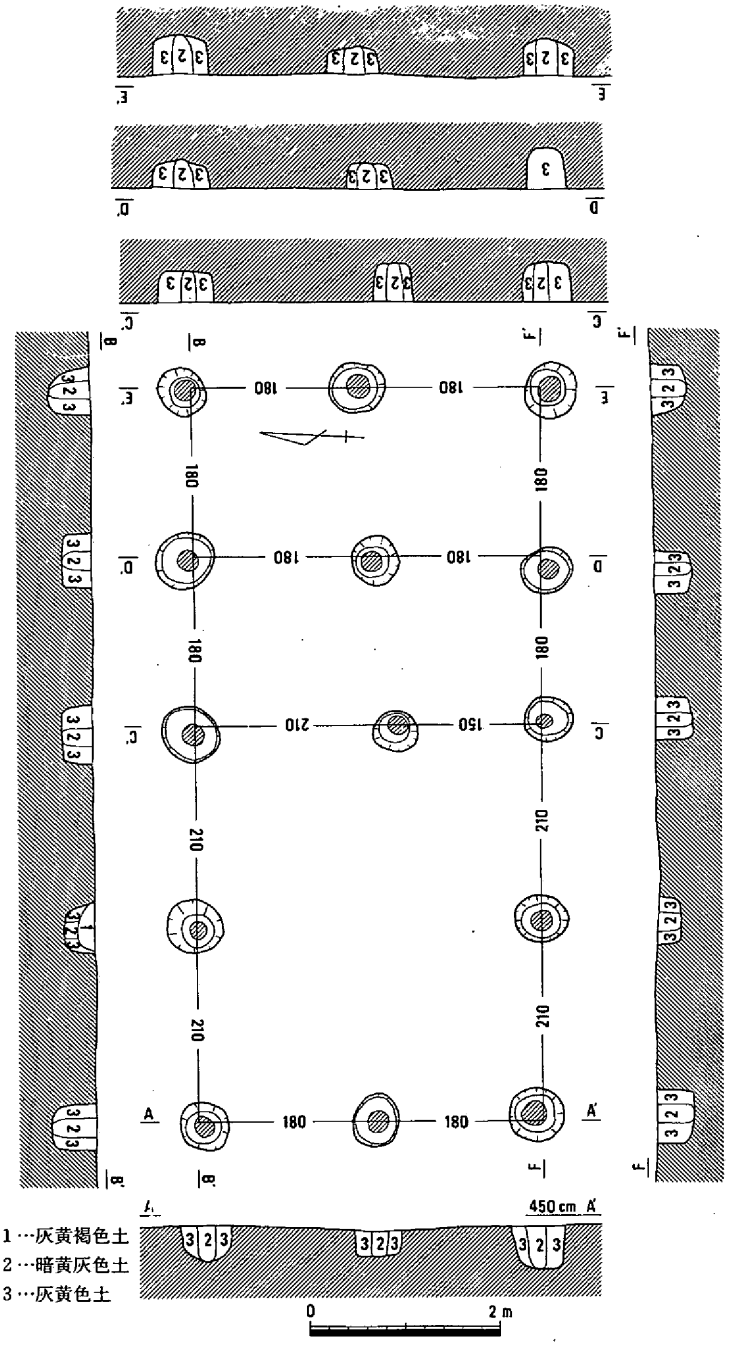
建物－９（第101図、図版96）

建物の西側で検出された、桁行３間、梁行２間で建物－６と規模が類似する。検出されたレベルはかなり低く、当時も微高地の縁辺部に位置していたようである。しかし、周囲には井戸が多く検出されており、その密接な関連に注意される。

柱穴の埋積土については、別な柱穴の柱痕跡である１層は灰黄色、その埋め土は淡黄褐色で建物の柱痕跡の３層は灰黄褐色、その埋め土は淡灰黄褐色を呈し、いずれも炭片や焼土が多く含まれる。

他に数棟の建物が推定される可能性あるが、いずれもいびつな復元形となる。

第110図に示すように、円形もしくは不整円形の掘方を示す柱穴は、むしろ西半部に集中している。Ⅲ区にかけて一つのまとまりがあるのと、墓あるいは井戸との関係に関心がもたれる。



第98図　建物－6 (1/80)

中世の建物のなかで、もっとも新しいと認識された柱穴には、焼土の固まりが埋積しているのが観察された。焼土の中にはスサのような繊維は認められず、壁土とは断定できなかった。脚台と称する器種は、とくにこれらの柱穴からの出土が目立ち、中世それも鎌倉時代の中頃から後半にかけての時期（13世紀後半以降）が比定されるといえる。

したがって、Ⅰ区の土壙等の同一時期の遺構の広がりも推定される。

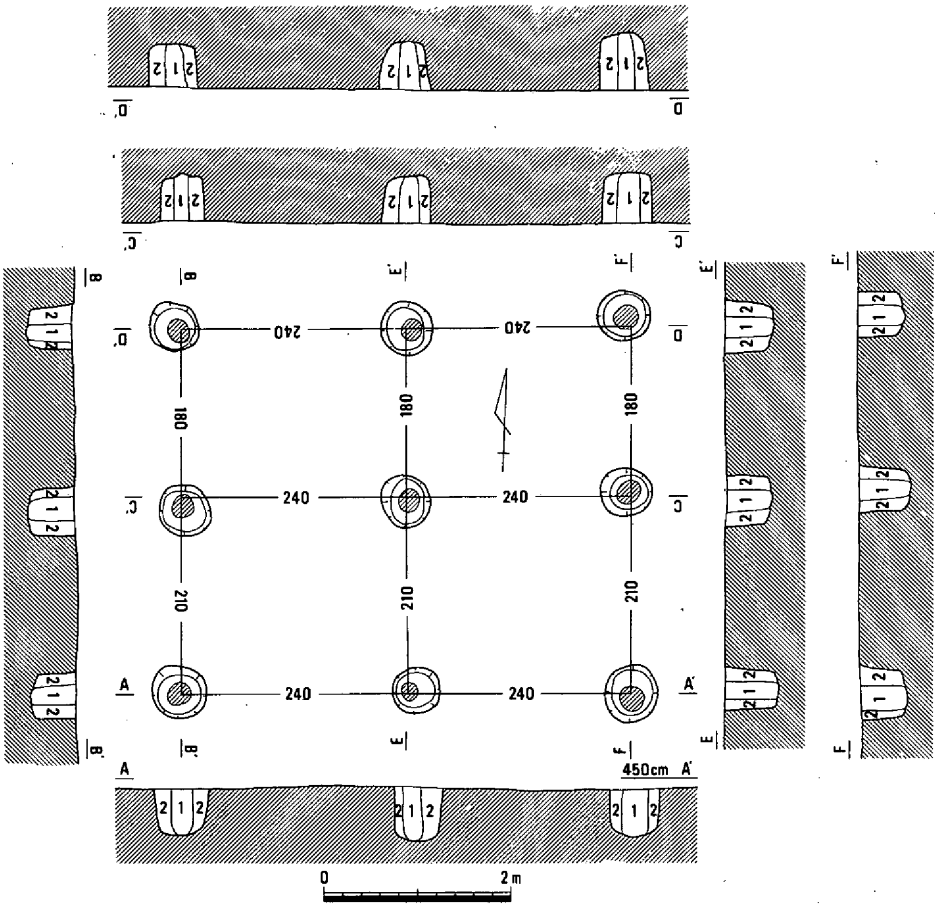
土壙墓－3

（第102図、図版101）

井戸－4を切って掘り込まれた墓で、頭位を北に向けた伸展葬である。顔面は東向きに傾いて検出された、頭部以下の骨はほとんど遺存していないが、脛骨の一部と思われるわずかな骨片が出土している。性別は不明であるが、壮年人骨と鑑定されている。

掘方は、隅丸の長方形と推定され、平面形は不明瞭であるが、幅70cm前後、全長2m前後を測ることが推定される。

出土遺物には、頭部付近でかたまって出土した土師器小皿314～317と白磁碗318・319がある。



第99図　建物－７（1/80）

318は底部を失った破片であるが、319は完形品である。12～13世紀に盛んにわが国に輸入された中国製の磁器である。

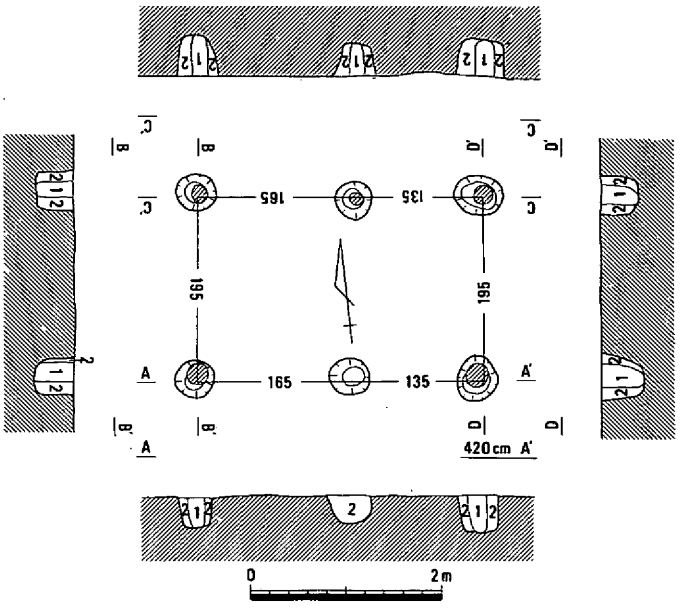
後に触れる、直線距離で約20ｍ離れたⅢ区の土壙墓－４・５と方向が直行している点に注意される。また、集落内における墓の位置や方向性についても興味深いものがある。

井戸－１（第103・104図、図版97）

建物－９の北側約５ｍに位置する。径1.3～1.4ｍ、深さ約1.5ｍを測る。下層は砂礫を多く含む黄灰色土が埋積する。

井底は、ほぼ平坦で、湧水層となる灰色の砂礫層に達している。下層には、先端を尖らせた杭状の木や、人頭大の花崗岩などが埋積している。井側に使われたと思われる木材は一切なく、抜き取られた可能性が強い。

出土遺物には、320の弥生土器の高杯がみられる。下層の旧河道に混入した遺物と考えられ



第100図　建物－8 (1/80)

る。時期的には、弥生中期に比定される。**321**は、土師器小皿である。**322～324**は、土師器椀で比較的しっかりとした大きめの高台が取り付けられ、口径も15cmを越えるものも含まれ、鎌倉時代前半期に比定されるものである。これらの椀は、第2層から多く出土している。層位的には、湧水が途絶えて埋められたりして廃絶された後の時期を示しているといえる。

また、**S11**の砥石も下層から出土している。花崗岩質で3面を使用しており、使用頻度が高かった一面は、光沢を放つほどツルツルしている。

井戸－2（第105図、図版98）

井戸－1の南西方約1.5mときわめて近い位置で検出された。径90cmのやや角張った隅丸の方形を呈し、深さ約1.4mで円礫を主体とした砂礫層の湧水層に達する。

上層は小礫を含む灰黄褐色粘土層、下層は暗灰色の微砂質の粘土層が埋積する。下層には、板材など加工木片を含む木片が堆積しているが、井側などに使われた用材がそのまま残っているのではない。木片は、長さ50cm前後を測るものが多く、板材状のものは井側上部の縦板に使われた可能性もある。

出土遺物には、**325・326**の土師器小皿のほか、**327**の瓦器椀、**328**の土師器椀がある。**327**には、内外面に篦ミガキが施されたものである。

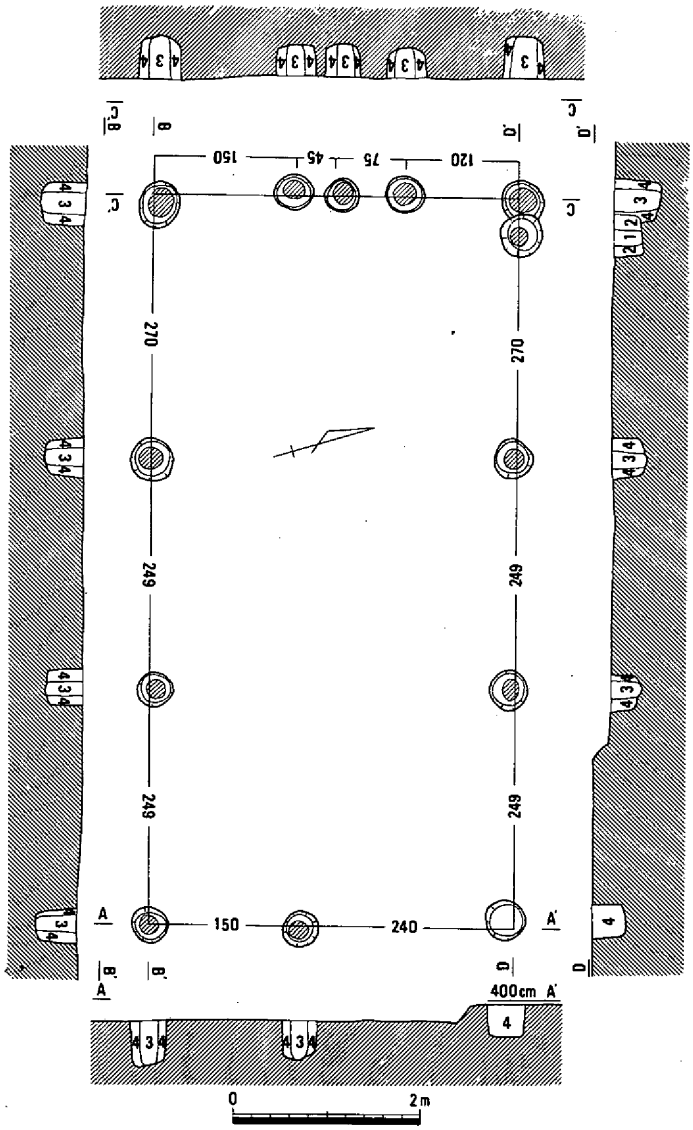
時期的には、井戸－1とさほど差はないものとかんがえられる。

井戸－3（第106図、図版99）

建物－9の南方約4mに位置する。やはり隅丸の方形を呈し一辺約1.4mを測る。深さは、1.3mである。上層は円礫を多く含む灰青色粘質土、下層は暗灰青色の砂質土である。

下層には、西辺と北辺の井側の一部が残っており、縦板に使われた厚さ3cm、高さ約30cmの板材が5枚みられる。また、横桟のほか、立った状態の隅柱も2本残っている。

このような状況から、大半の井側の用材は抜き取られた可能性が強いといえる。



第101図　建物－９（1/80）

出土遺物には、329の円筒埴輪のほか、330～333の土師器がある。Ⅰ区でも埴輪が出土しているので、おそらく同一の契機に遺跡地に埋没した可能性がある。330・331は小皿、332は椀である。333は鍋であるが、特徴的な刷毛目がみられない。内外面に押圧痕が残され、口縁部、内側に、太い篦状の工具による刻線が施される。しばしば、鍋あるいは、甕に同様な刻線が認められ、持ったときの一種の滑り止めの機能があるとみられる。

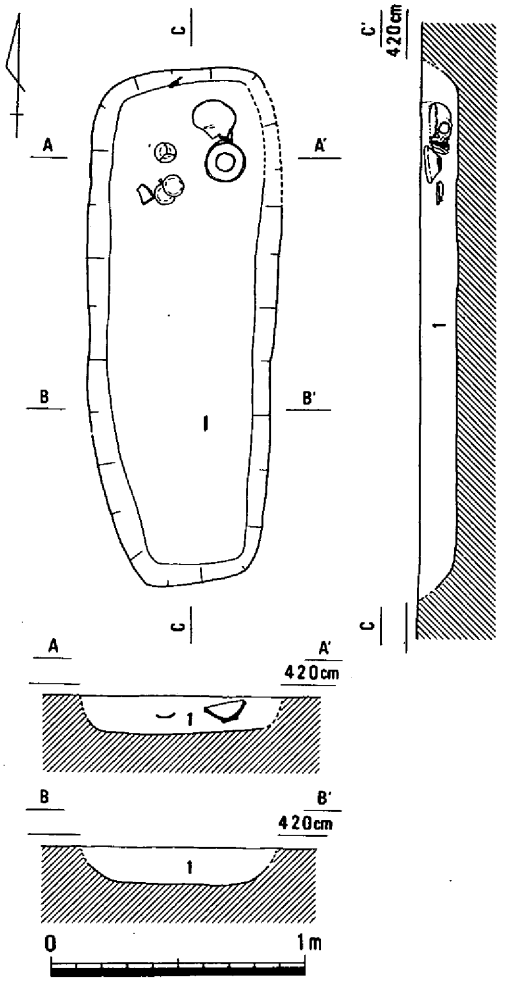
井戸－４

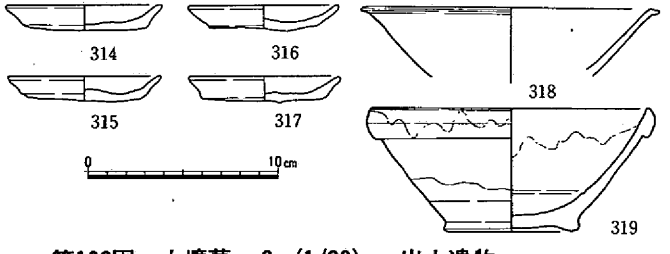
（第106・108・109図、図版100）

土壙墓－４に切られた井戸である。一辺約90cm、深さ1.6mを測る。最下層のほぼ中心には井筒として曲物が埋置されているが、井側などの用材は認められない。井筒は、固定されるために、周囲に３箇所直径３cmほどの心持材を打ち込んでいる。埋積土は、円礫を含む淡灰青黄色を呈する粘質の微砂である。

井筒に用いられた曲物は、直径約50cm、高さ25cmを測り、綴じ合わせには、桜の皮が使われている。

出土遺物には、334の土師器椀、335の瓦器椀、336の外面に平行タタキをもつ須恵器甕片がみられる。335は、内外面に篦ミガキが施されている。





第102図　土壙墓－3（1/30）・出土遺物

井戸－5（第108図）

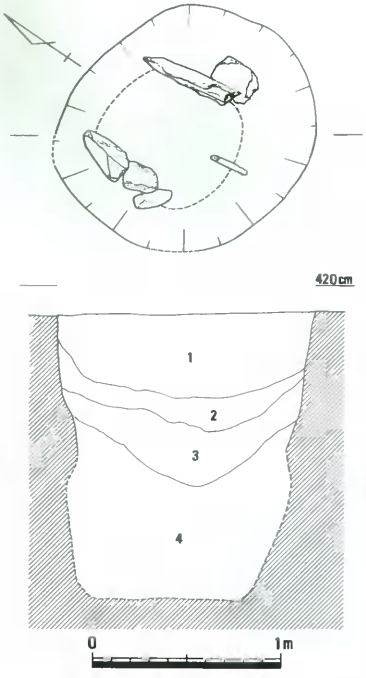
井戸－2の西約5mに位置する。やはり、隅丸方形を呈し一辺約1m、深さ約1.2mを測る上層。上層には、黄褐色土の小塊を含む暗灰黄微砂質土、下層には黒灰色の微砂質粘土が堆積している。

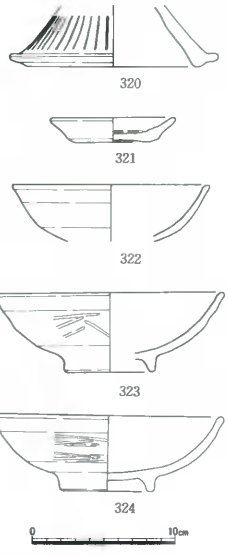
出土遺物は、土師器細片がわずかにみられる以外ほとんどなく、また井側などの構造物もまったく残存していない。

以上の井戸は、ほとんど同一の湧水層に達しており、使用されたことは間違いない。しかし、井側などの遺存度は低く、遺物も少量であった。出土遺物から推察すると、鎌倉時代の一時期に集中して掘られた井戸で、それも前半期に限定できよう。

また、井戸の掘方はやや隅丸の方形を呈するものが多い。これは、現状からかなり上部には方形の井桁が置かれたことを示唆しているものと考えられる。本来の上部の掘方は、当然のことながら、通常しばしばみられる円形を呈していたと推定される。

出土遺物のなかには、昆虫の羽などの動物遺存体もあり、ゴミムシのたぐいの甲虫の破片などが、少なからず見受けられた。井戸使用中に落下したと考えられる。植物遺体は、樹葉などのほか、小枝などの木片がみられ、風などによって吹き飛ばされて落下したものと推定される。いずれにしても、墓との切り合いなど状況から、長期にわたって使用されたとは考えられず、比較的短期間で廃棄されたのではないかと推察される。原因は、おそらく接近する河道の流路の変化や、それによる旧河道の湧水量の減少あるいは、水質の劣化などがあげられよう。





第103図　井戸－１（1/30）・出土遺物

また、いずれの井戸にも廃棄・廃絶にともなう祭祀が行なわれた痕跡はまったくみられない。井戸－５のように、実際に使われたかどうか疑わしいものもある。

埋積層位は、図に示されるように比較的単純で、徐々に埋まったのではなく、一度に人為的に埋められた状況が観察される。

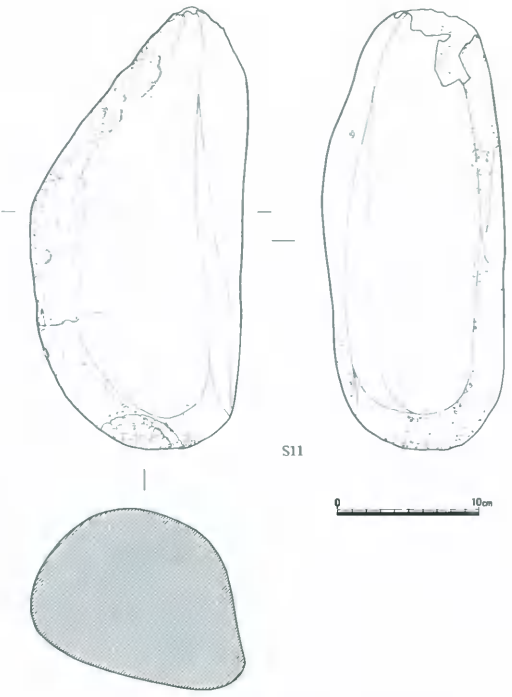
井戸－４の１基だけ、曲物の井筒が確認された。檜の薄い板を用いて巧みに製作されている。当時のすぐれた木工技術を示すとともに、井筒に転用して重宝されていたことがわかる。

集石土壙－３（第112図）

浅い凹みで、礫がかたまって検出された。埋積土は、灰黄褐色である。このような土壙は遺跡地内で散見するが多くは土器類などは、出土しない。

柱穴群（第111図）

大小さまざまな柱穴が検出されているが、そのすべては本来建築遺構として立体的に存在し



第104図　井戸－1出土遺物(2)

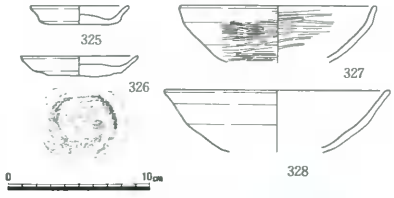
たはずである。しかし、掘立柱建物として、整然とまとまるものはきわめてすくないのが、現状である。建物以外でも、柵・堀・足場穴・杭など、実際には空間を持たないものもあったと考えられる一方、簡便な礎石などが部分的に使われた建物が存在したことも考えられ、遺跡地に当時の集落の面影がすべて残されていたとしても、その復元的推定はきわめて困難といえる。

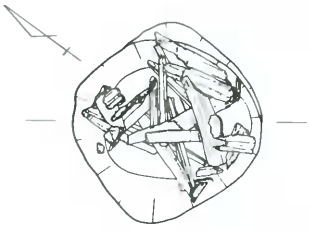
柱穴の大半は、30～50cmを測る円形を呈するもので、多くは埋め置かれた柱の痕跡が観察される。通常、それは柱穴の中央に位置し、ほぼ垂直を示す。柱穴は建物の廃棄にともない、しばしば柱は抜き取られ、その抜き取り穴の中から土器や礫が出土する。

Ⅰ区でも触れたように、抜き取り穴の中に日常使われた土師器の小皿・脚台などの完形品出土することがある。建物の廃棄に伴う祭祀的行為と推定される。また、銭貨の出土することもある。これは柱を立てた際の埋め土に含まれることもあり、地神に対する祭祀や家の繁栄などを祈願する祭祀行為と考えられる。

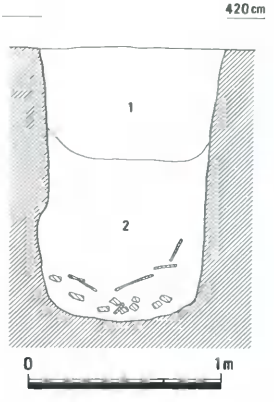
第113図には、柱穴から出土した遺物のみを掲げる。

337は灰釉陶器皿で内外面に光沢のある、灰緑色の釉がかけられている。素地は灰白色である。**338・341・342**は黒色土器で、**338**には底部外面に墨書があり、「廾」字形の直線的な記号風の文字が書かれる。**339・340、343～364**は土師器で、早島式椀や小皿・脚台・甕などである。脚台も色々な形状を示す。**365**は、内外面に篦ミガキが施され、口縁端部が屈曲する瓦器椀であ





第105図　井戸－２（1/30）・出土遺物



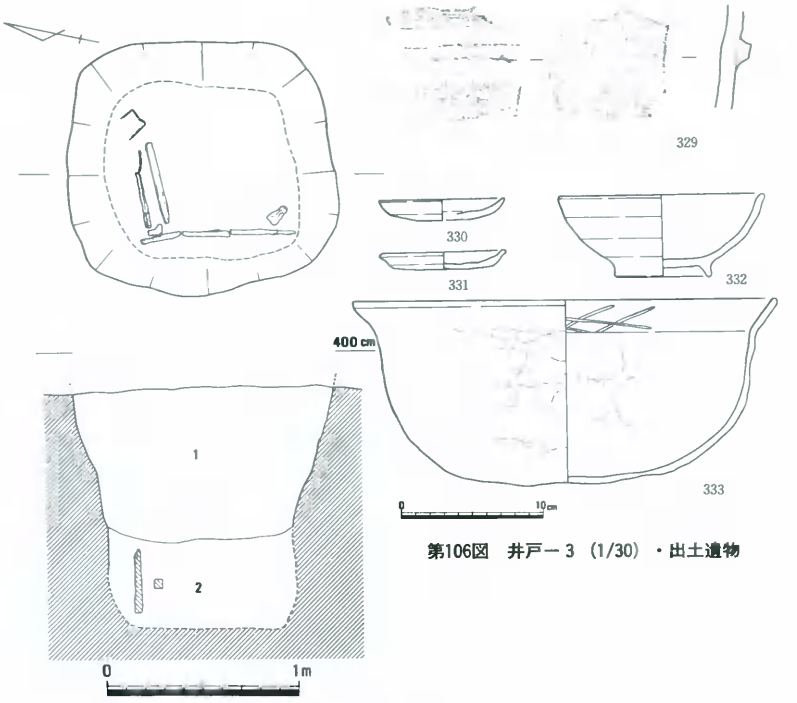
る。**366**は、外面に格子目タタキが施された壺で亀山焼と考えられるが、やや焼きが甘く格子目は長方形である。外底部には、下駄印が残る。

第113図には、包含層出土の遺物を掲げる。**367～375**は須恵器、**380～383**は黒色土器、**384～395**は土師器である。**367**はやや大型の杯の底部で、外底部に×印のカマジルシ（記号）がある。**368**は壺の底部である。**369・370**は高台をもたない杯である。**371**は体部は、逆「ハ」字形に外方する。高台は径が小さく、しかも低い。**373**の外底部には三本の線を交叉させた墨書がある。文字というより、記号の可能性が強い。**375**は高台が付けられた浅い椀で高台をもつ。土師器の器形の影響が感じられる。**381**は、椀の外底部に「井」字形の文字が書かれる。**382・383**は高台が付けられた皿で、椀と同様体部内面は黒色、外面は明るい橙褐色を呈する。**387・389・391**は、やや特異な器種で上下逆転してもそれなりの機能があったと思われる。脚台、小皿いずれとも決しがたい。

土器の示す時期範囲は、**367**が８世紀代に遡る可能性があるが、主に平安時代から鎌倉時代にかけてのものが主体をなす。墨書土器の存在など古代の土器は、検出遺構とともに注目される。

第115図には、土器などを掲載している。**396～398**は遊戯に使う円板状の土製品で、**396**は備前焼、**387**は須恵器、**398**は瓦を素材としている。**399**は須恵質の土鈴で薄手なつくりを示す。上部には、ややいびつな吊り輪が取り付けられている。**C1・C2**は、棒状単孔の土錘である。**S12**は、黒の鈍い光沢がある碁石である。石材は不明である。**S13**は砥石である。石材は流紋岩質凝灰岩である。**M14～16**は、宋銭である。

以上、Ⅲ区出土の遺構に伴わない遺物について説明を加えた。



第106図　井戸ー3（1/30）・出土遺物

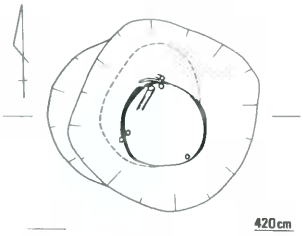
(3)Ⅲ区

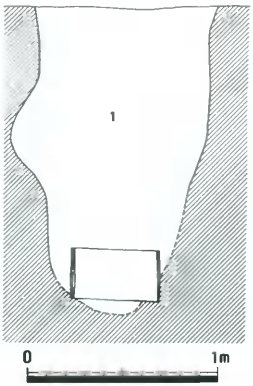
Ⅰ区とⅡ区に挟まれた調査区である。この調査区内に東西方向の用水路があったため、調査順位が前後したものである。

Ⅱ区と同様、微高地と低位部からなり、下層にはいずれも格子目状溝など、古代に遡る生産遺構が存在する。

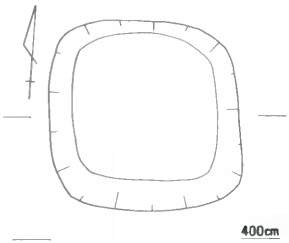
第115図には、一点鎖線で中世の遺構が検出された、微高地から低位部にかけての二か所の土層断面図である。3層が低位部の水田層である淡黄灰色土を示す。微高地上面は、5～6層の青灰色を基調とした、微砂質の土層からなる。下層にかけては、黒灰色（11層）などを経て、徐々に明るい色調となり、海抜3mまでさがると、Ⅱ区の井底に連なる湧水礫層に達する。15層は、細かい砂層である。なお後述の**401・402**の須恵器は、第6層の下層から出土した。

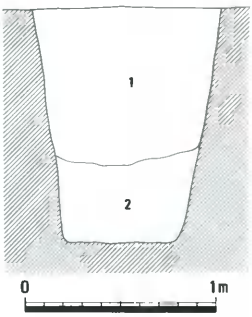
以下、おもな遺構について概要を述べる。



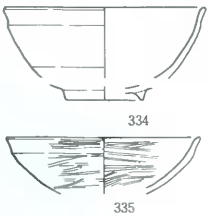


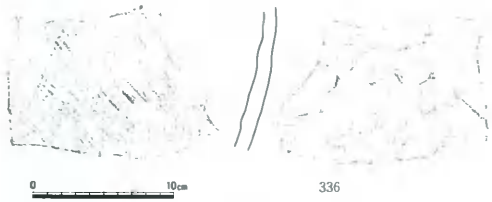
第107図　井戸－４（1/30）





第108図　井戸－５（1/30）

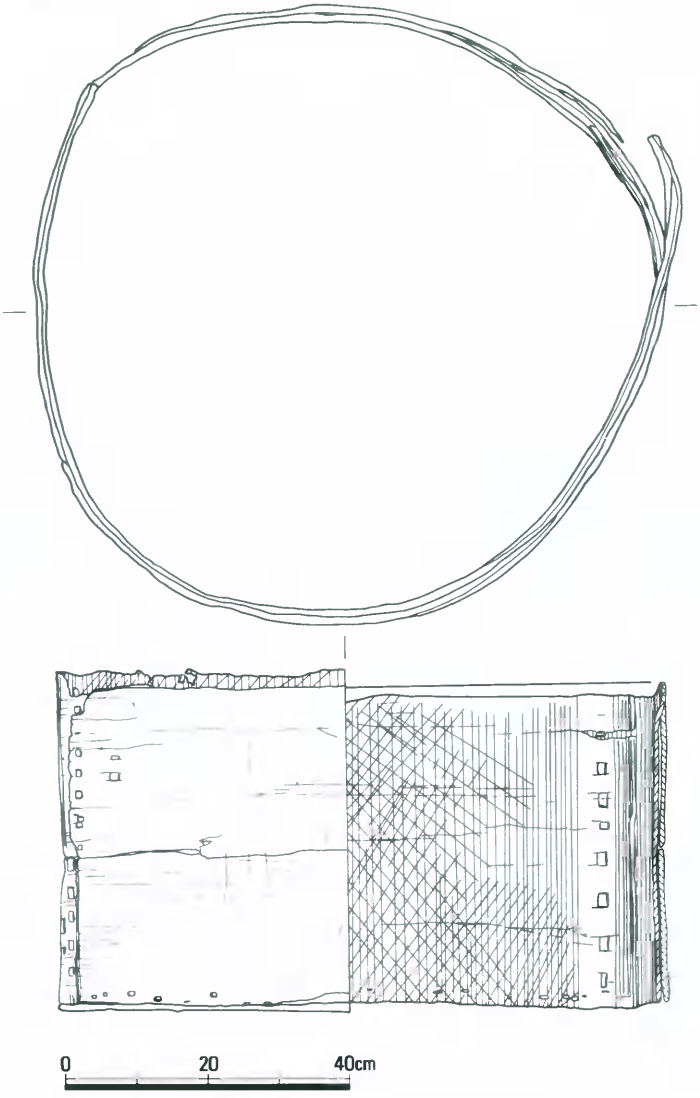




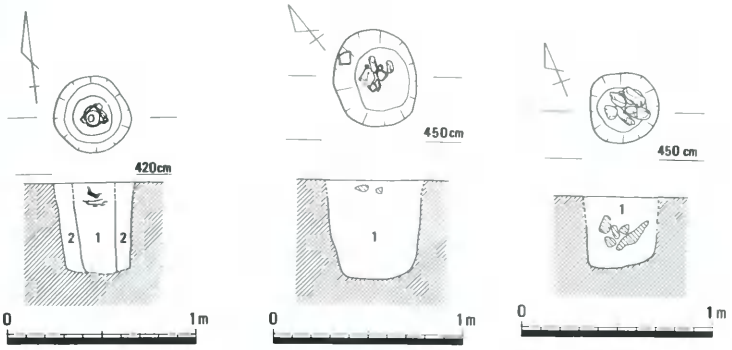
第109図　井戸－４出土遺物

格子目状溝（第117図、図版107）

Ⅱ区と連続して検出された。ほぼ東西南北に検出され、東側はⅢ農区に達している。西側は、低位部との境界の肩まで到達せず、溝の末端は丸く終わっている。溝の中からの出土遺物は皆無に近く、時期を示す土器などもみられなかった。



第110図　井戸ー4井筒（1/8）

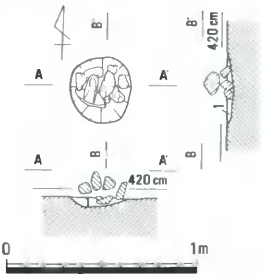


第111図　Ⅱ区柱穴（1/30）

低位部で検出された溝は、概して細く浅い。微高地と平行して南北に検出された溝が４条あるが、もっとも西側の１条は幅１ｍ以上、深さ15cmを測る。

溝－１（第119図、図版106）

Ⅱ区では、ほぼ直線的に検出されたが、Ⅲ区では、わずかに弧を描くように曲っている。検出レベルは約４ｍで、Ⅱ区とほぼ同じであるが、底は10cmほど浅くなっている。Ⅰ区とはほぼ形状も同じで、おそらく北から南に向けて流れる溝であろう。断面形は共通して緩やかなＵ字形を呈する。



第112図　Ⅱ区集石土壙－３（1/30）

溝－12（第120）

細長い溝で土壙墓－４・５の北側で検出された。溝－16とつながる可能性もある。赤みを帯びた灰色土が埋積する。

溝－13（第120）

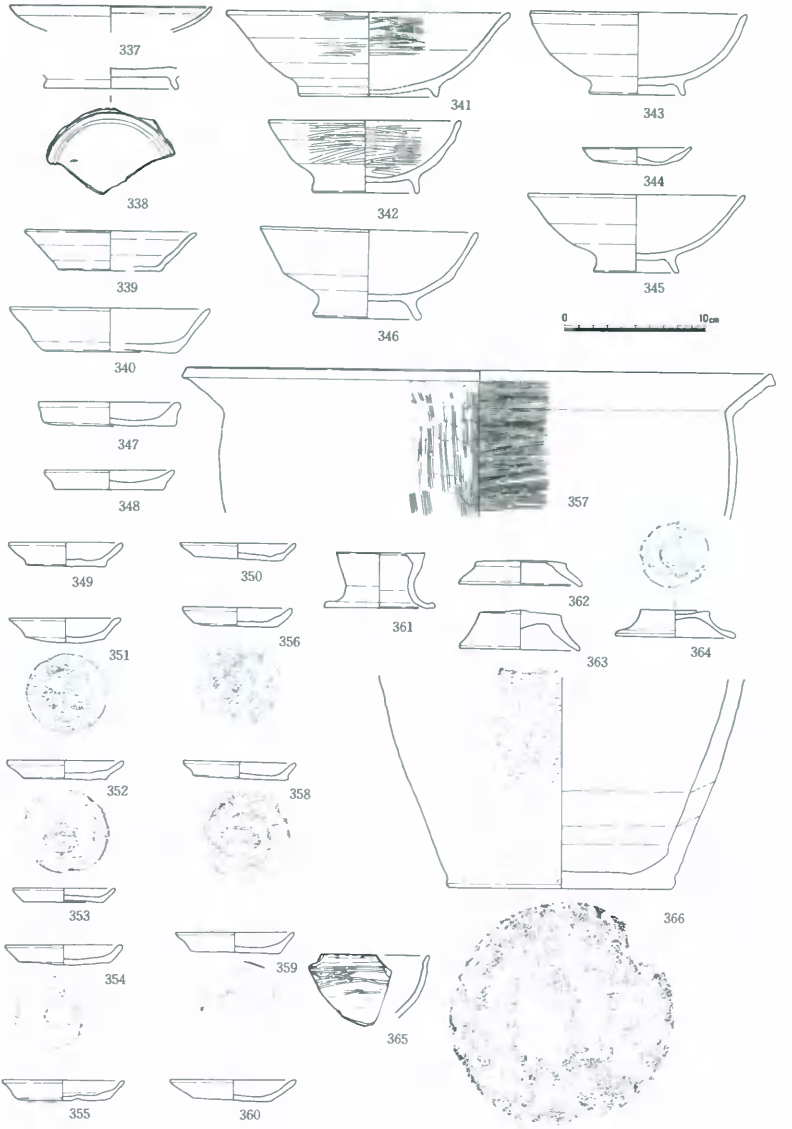
調査区の北東部では比較的集中して溝が検出された。そのなかで、農機道調査区にかけて検出された、ほぼ南北方向の溝である。検出全長は短いが灰褐色土から多量の炭・焼土が出土している。埋積土は、淡灰黄色粘質土である。

溝－14（第121図）

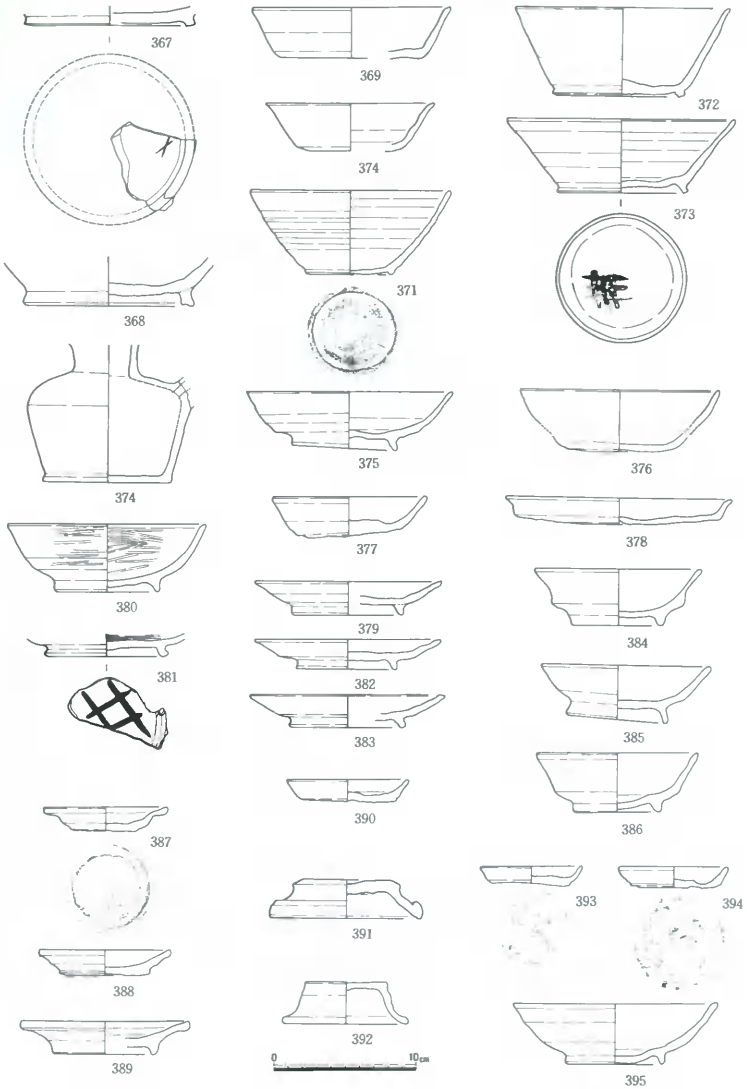
一部はⅠE区にかかる位置で検出された。緩やかな弧を描き、焼土・炭を多く含む灰褐色土壙が埋積する。

溝－15（第121図）

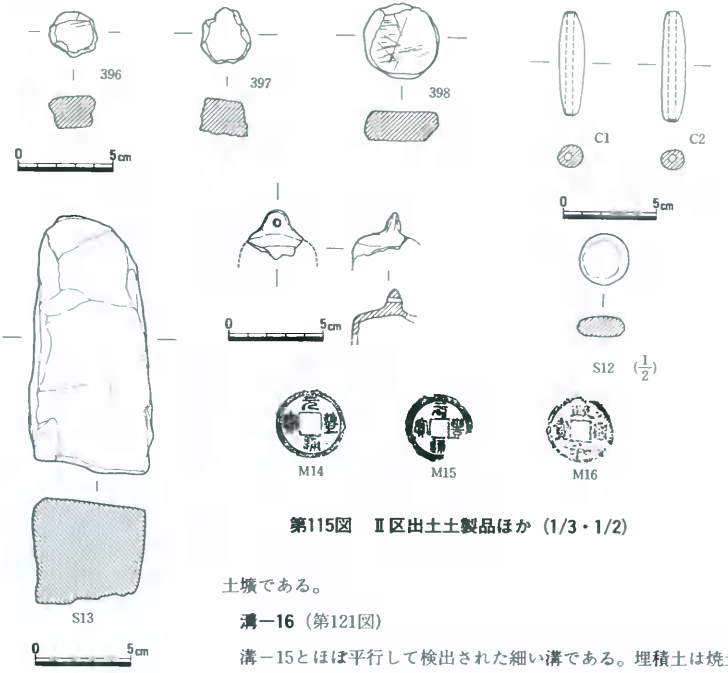
東西方向を示し、溝－17を切って直線的に延びる。埋積土は、淡灰褐色ないし灰青色微砂質



第113図　Ⅱ区柱穴出土遺物



第114図　Ⅱ包含層出土遺物



第115図　Ⅱ区出土土製品ほか（1/3・1/2）

土壙である。

溝－16（第121図）

溝－15とほぼ平行して検出された細い溝である。埋積土は焼土を含む淡灰黄色である。

溝－17（第121図）

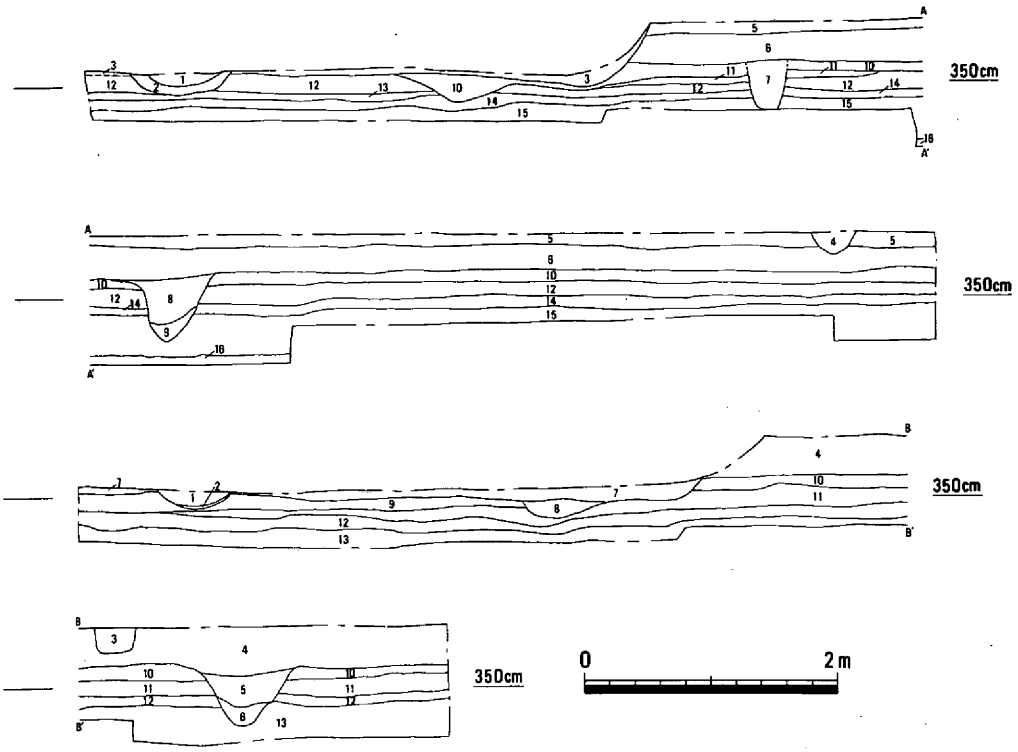
いびつな弧を描く。もっとも張り出した部分が深い。細い部分は、直線的でほぼ東西方向を示す。上層には淡灰褐色土、下層には焼土・炭をわずかに含む淡灰青色土が埋積する。わずかな土師器片が出土しているが、いずれも中世に比定される細片である。

建物－10（第122図、図版109）

微高地の東で検出された。濡れ縁あるいは、庇をもつ東西棟の建物で、身舎には間仕切りがある。桁行３間、梁間２間で後者は７尺等間を示す。多くの柱穴には柱痕跡が観察される。比較的長大な建物である。

建物－11（第123図、図版109）

建物－10の南側で検出された。７尺強等間で直線的に並ぶ。建物の一部と推定したものである。北端の柱穴は、柱の抜き取り痕跡がある。



第116図　Ⅲ区土層断面図（1/60）

建物－12（第124図、図版109）

建物－10の西で重複する。棟方向は東西で、桁行２間、梁間２間である。北よりに間仕切りがあった可能性がある。

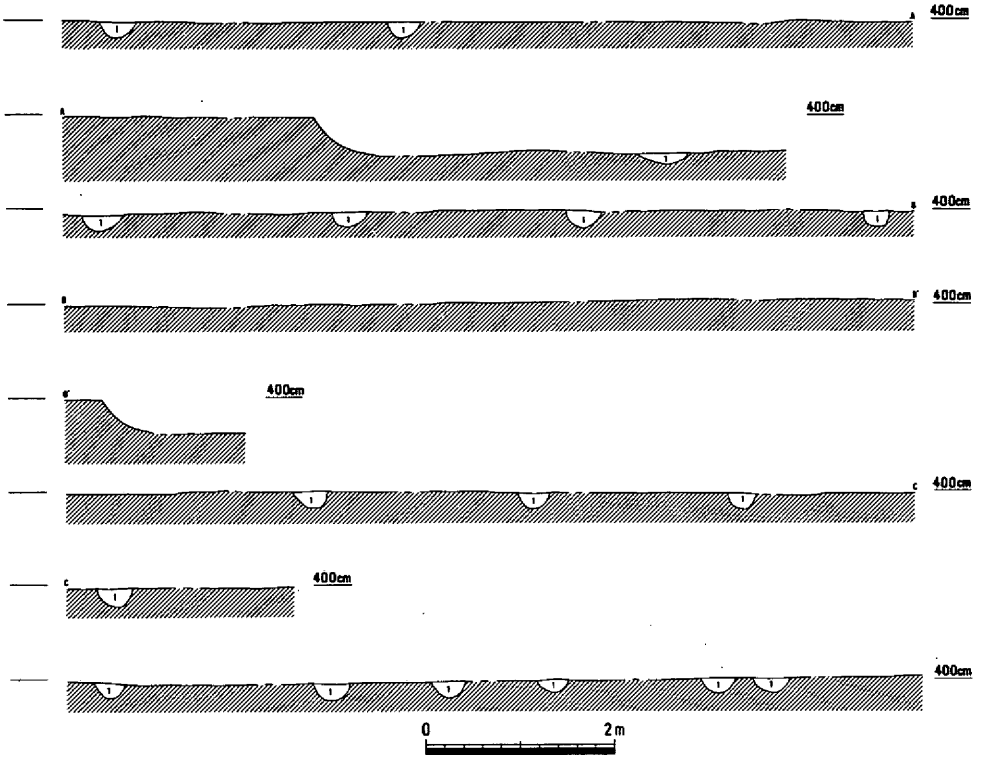
他に、数棟の建物が存在する可能性があるが、第69図では網目で表現しておく。

土壙墓－４（第125図、図版110・111）

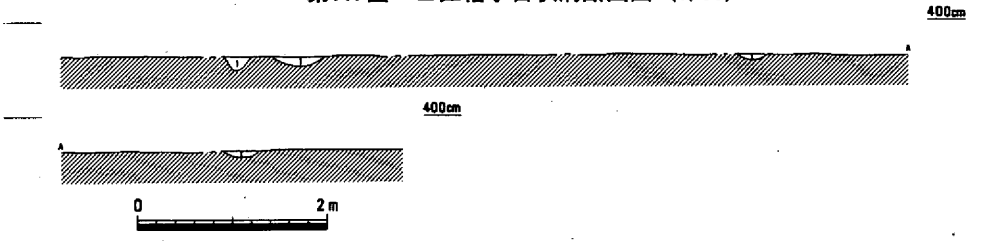
溝－12の南で検出された。頭位を東に向ける伸展葬である。顔面は、北を向く。人骨は比較的残りがよく、当時の人としてはかなり長身の男性人骨であることが判明している。上面からは、400の白磁碗が出土しているが、破片であるため副葬されたものであるかどうか断定できない。足元にはM15の刀子が出土している。刀身部分には木質が付着しているので、鞘に収めて副葬された可能性がある。刀子にしてはやや大振であるが、当時「腰刀」として一般的に所持されていたものであろう。人骨は、壮年の男性と鑑定されている。

土壙墓－５（第126図、図版110）

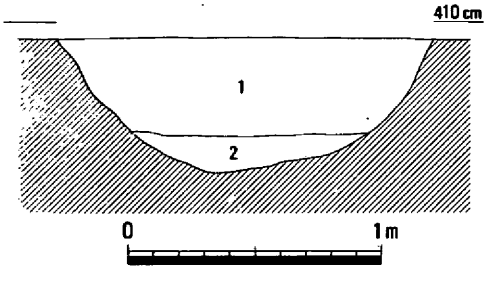
土壙墓－４東側に位置する。墓壙の掘方の方向も土壙墓－４と同じであり、親子などの近親関係にあったことが推察される。人骨の残りは悪く、とくに頭骨はわずかに遺存する。副葬品は皆無である。人骨は成人女性と鑑定されている。



第117図　Ⅲ区格子目状溝断面図（1/80）



第118図　Ⅲ区低位部水田上溝断面図（1/80）

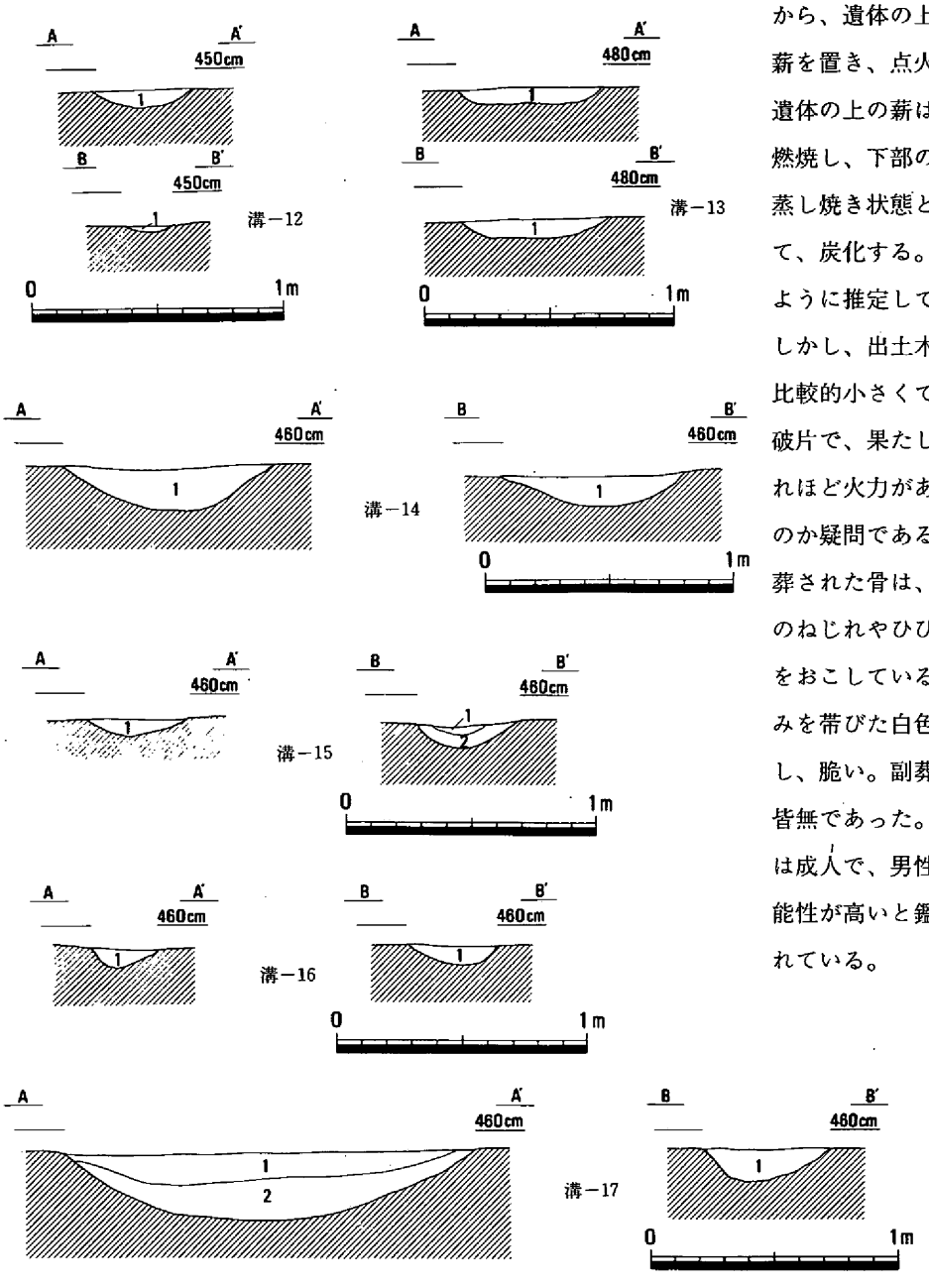


第119図　溝－1断面図（1/30）

火葬墓（第127図、図版112）

土壙墓－4の西13mで検出された。両端の状況は明らかではないが、舟底状の墓壙の下部は被熱によって、3cmほど赤変して硬く焼き締まっている。南側に肋骨と推定される骨の破片が集中しているので、頭位は南と考えられる。しかし、北側でも指骨と歯が出土しているため、屈葬の可能性が強い。荼毘に付す方法としては、まず薪を敷き詰め、その上に遺体を置く。それ

第120図　Ⅱ・Ⅲ区中世遺構配置図（1/300）

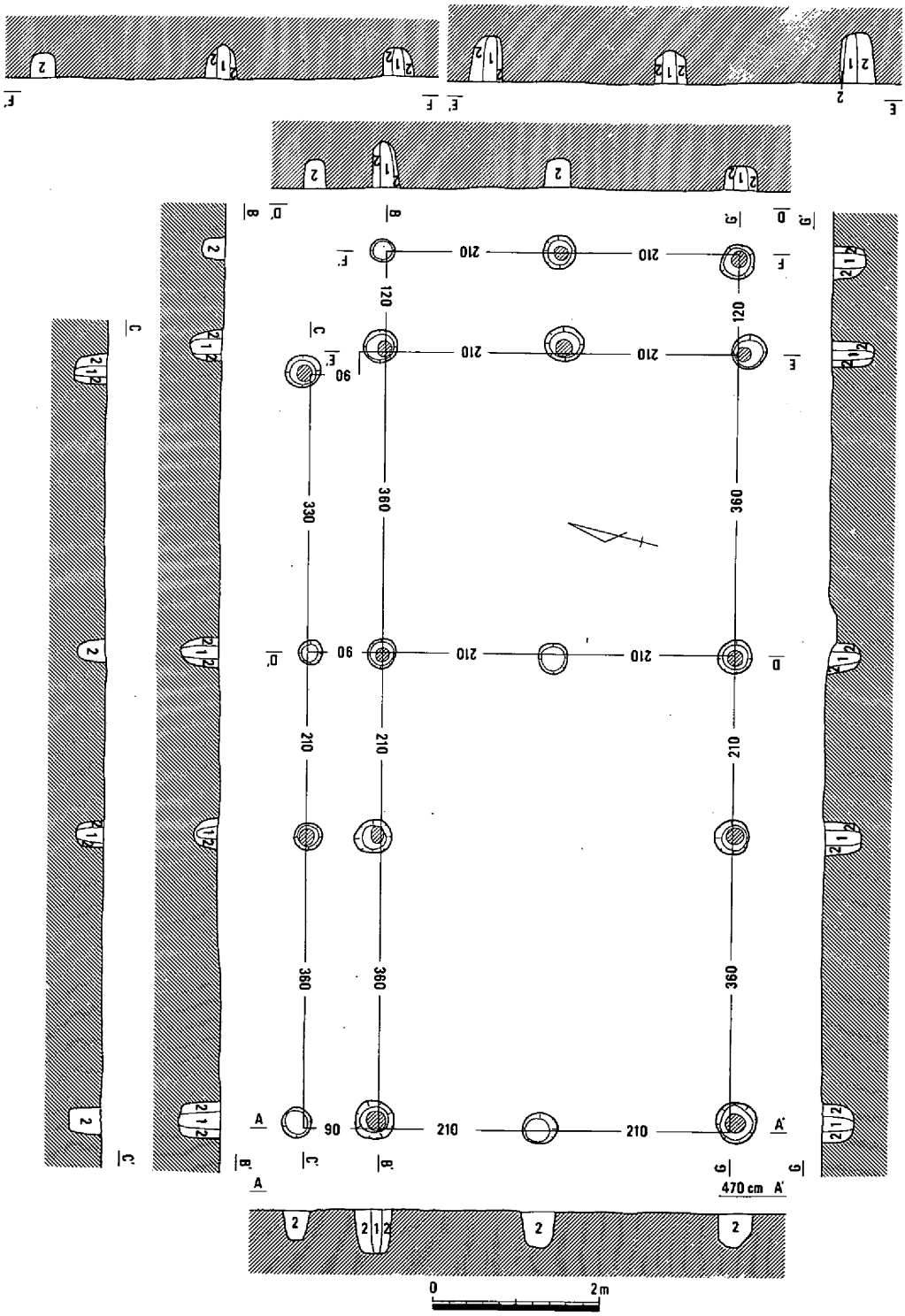


から、遺体の上にも薪を置き、点火する。遺体の上の薪は完全燃焼し、下部の薪は蒸し焼き状態となって、炭化する。このように推定している。しかし、出土木炭は比較的小さくて短い破片で、果たしてどれほど火力があったのか疑問である。火葬された骨は、特有のねじれやひび割れをおこしている。青みを帯びた白色を呈し、脆い。副葬品は皆無であった。人骨は成人で、男性の可能性が高いと鑑定されている。

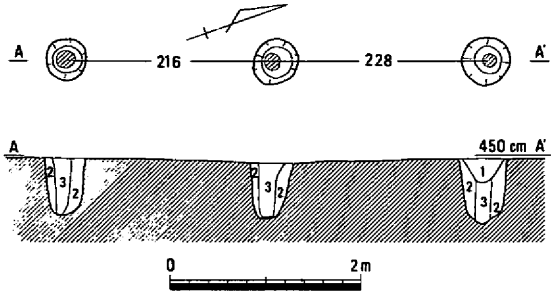
第121図　Ⅲ区検出溝断面図（1/30）

土壙－41（第128図、図版113）

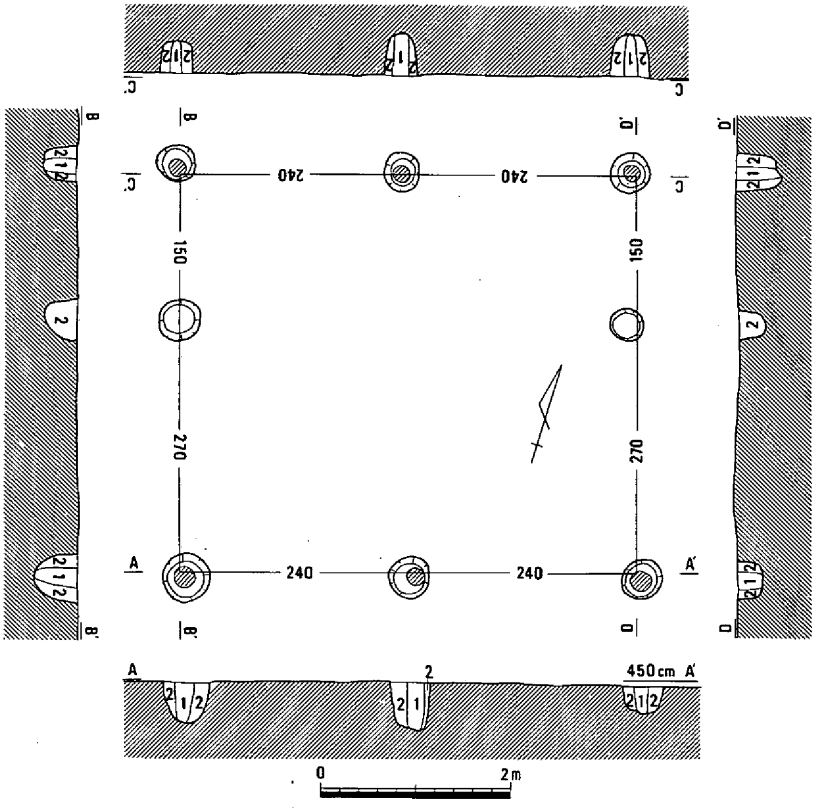
建物－10の北西隅で検出された。一種の集石土壙である。かなり大きな二人持ち大の花崗岩礫も含まれる。埋積土は、暗灰褐色を呈する。中世土師器の細片がわずかにみられる。



第122図　建物－10（1/80）



第123図　建物－11（1/80）



第124図　建物－12（1/80）

土壙－42（第129図）

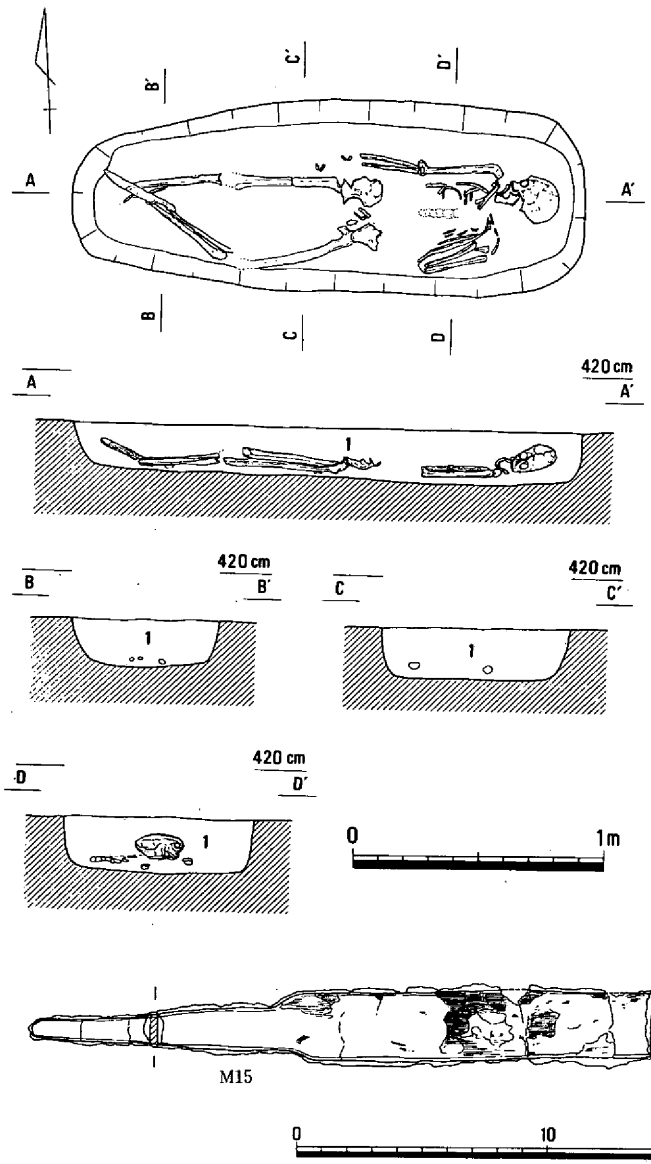
溝－15の西端で検出された隅丸方形を呈する土壙である。埋積土は、淡灰褐色土である。

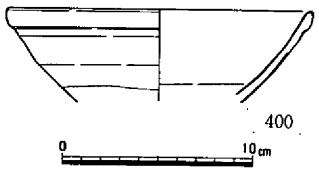
土壙－43（第130図）

建物－10の西で検出された長円形の土壙である。上層には灰褐色粘質土、下層には暗灰褐色粘質度が埋積する。

これらの土壙は、いずれも中世に比定されるが、出土遺物はきわめて少量である。

以上、Ⅲ区のおもな遺構について述べた。包含層出土遺物については、第131～133図に掲げるように、圧倒的に中世に比定される土師器・須恵器が多い。**401・402**は、須恵器蓋で、古墳時代に比定されるもので、微高地の下層から出土した。遺構に伴う状況ではない。**403**は、須恵器壺である。体部内面には同心円タタキがみられる。**404**の須恵器甕とともに、微高地の格子目状溝付近から出土しており、その時期を示していると推定される。**401～422**は、土師器である。小皿・椀・脚台・鍋などの器種が多い。**424**は外面に細かい格子目タタキが施された亀山焼の甕である。**425**は、青白磁合子の蓋である。平安時代後半期に輸入されたものである。**426**は、緑釉陶器皿で微高地下層から出土し





ている。427は、備前焼壺の破片で体部外面に、「嘉吉四□」の紀年銘と推定される箆描き文字がある。右側には「代一文(？)」の３文字が認められるが、断定できない。「嘉吉四年」とすると、西暦1444年を示し、細片ではあるが貴重な資料といえる。(註３)

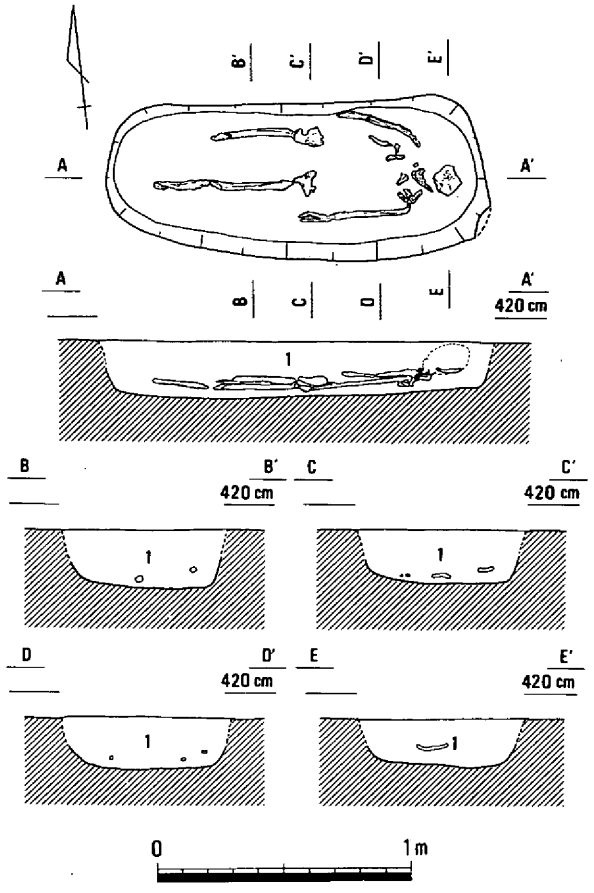
S14・15はいずれも砥石で、流紋岩質溶岩である。M16～M21は、唐代の鋳造になる開元通宝を含む、宋銭である。

以上、包含層出土遺物について概略を述べた。

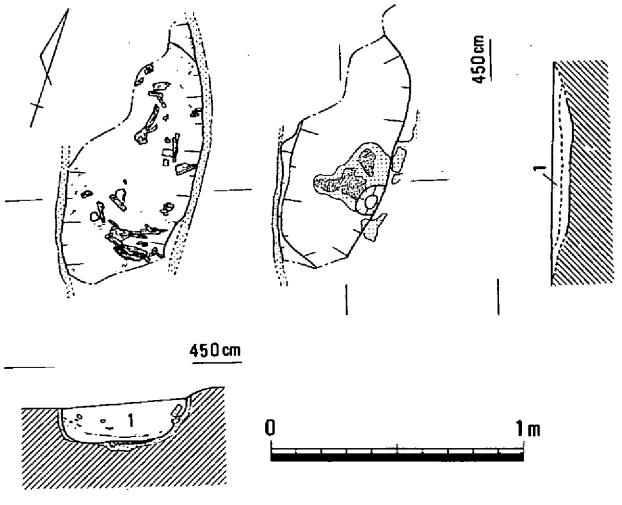
第125図　土壙墓－４（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

(4)Ⅳ A区

当初は、Ⅳ区として一つのまとまりのある広大な調査区であったが、工事用道路造成のため先行して発掘を行なった調査区である。調査区の南端は低位部となっており、第134図に掲げるように、微高地は徐々に下降していく。灰褐色を呈する第９～11層からは、古代とりわけ奈良時代の遺物が比較的多く出土しており、レベル的には第140図の陶馬は第11層に対応すると考えられる。第５・７・８層は、溝－18である。なお、第１・２層は柱穴で、柱穴抜き取り痕



第126図　土壙墓－5 (1/30)



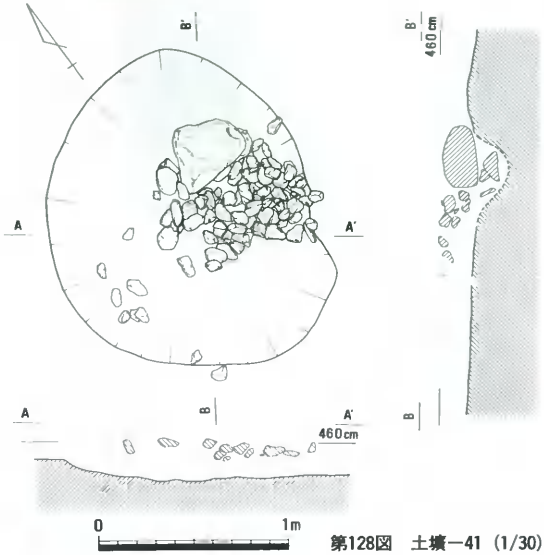
第127図　火葬墓 (1/30)

跡からは、582の備前焼が出土している。第13層は、旧河道を形成する砂礫層である。

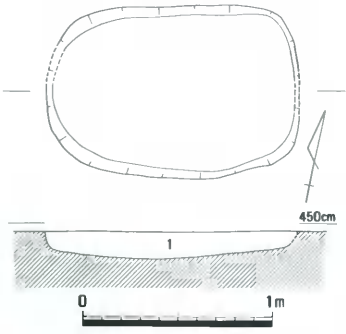
また、第137図の土層断面図は、調査区の西壁の北より、土壙－44付近の層位で第13・14層（斜線部分）は土壙－44を形成する。中世遺構の多くは、海抜約4.5m前後でおもに検出される。古代の遺構は、それより50cm以上下がった、海抜4m前後で検出された。第138図は、調査区の南端西壁の断面図で、第15層以下砂礫層となる。したがって、古代では微高地の縁辺部あるいは、河道であったことがわかる。

下層の砂礫層からは、第139図に掲げる遺物の出土がみられた。428～431の中期から後期にかけての弥生土器をはじめ、432～435の土師器、436～438の須恵器がある。調査地周辺の集落遺跡の年代を示唆している。

砂礫層上層を形成する青灰色あるいは、褐灰色の包含層からは、おもに古代すなわち奈良時代から平安時代にかけての遺物が多く出土する。第140図に掲げる大半は、南側の低位部から出土したものである。439～442は、須恵器で440の外底部には×印の篦記号（カマジルシ）がみられる。442は、やや大型の杯で比較的しっかりした高台がつけられる。441は、高杯の脚部で内面には絞り



第128図　土壙－41（1/30）



第129図　土壙－42（1/30）

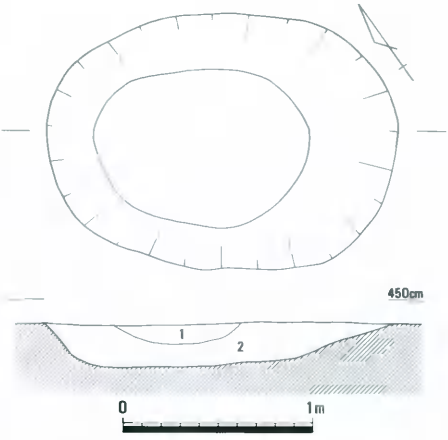
目がある。いずれも8世紀代に比定される。**443～447**は土師器である。**443**は、ツマミをもつに丹塗りが施されたもので、天井部と体部の境界は明瞭な稜をなす。**444・445**は杯、**446・447**は皿である。**447**には、丹塗りが施される。

第141図は、いわゆる須恵質の陶馬である。低位部砂礫層上面から出土したもので、馬具を一切装着しない裸馬である。青灰色を呈する胴部はほぼ完存しており、遠距離を流れ着いたものとは思えず、意外に表面もさほど摩滅していない。全体にわたって、成形時の丁寧なユビナデ調整痕が残る。目は、竹管の押圧によって表現する。口元は、篦で切りこみをいれているが、焼成の際、ヒビ割れて裂けたようになっている。鬣と耳は一体になって、前方を向く。脚は1本のみ残存する。わずかに外方にふんばり端面には小孔が穿たれ、焼成の際のガス抜き孔とされている。尻尾は、背中から一気に伸びてやや垂れ下る。尻には肛門を思わせる小孔が穿たれるが、脚部と同様ガス抜きを兼ねたものと思われる。体部の一部には、わずかに煤が付着したような黒色部分があり、祭祀に伴った破砕の後、火を受けた可能性もある。

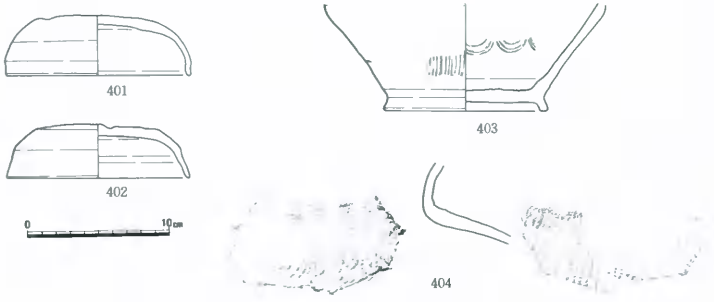
残存重量870ｇ、全長25.6㎝、高さ15.5㎝を測る比較的大型の陶馬で、県下ではもっとも残りがよく、大型品といえる。調査区の近くの公的な施設で、祈雨祭祀などが行なわれたことを示す重要な遺物である。

第142図M22は、青銅製の帯金具の一部で銙尾にあたる。溝－22の南付近の包含層から出土した。表は、平滑に仕上げられ、周縁は丸みをもった端正な稜が巡る。わずかに青錆がみられるが、素地の部分は黄褐色の銅地の色調の名残を残す。「衣服令」に定められる下級官人着用の遺物と考えられ、『烏油腰帯』と記載されるように、銅が黒漆塗りとされたものの可能性がある。

第143図は、包含層出土の施釉陶器である。449・450は緑釉陶器皿、451～453は灰釉陶器である。いずれも、平安時代、それも10世紀代に比定される。



第130図　土壙－43（1/30）



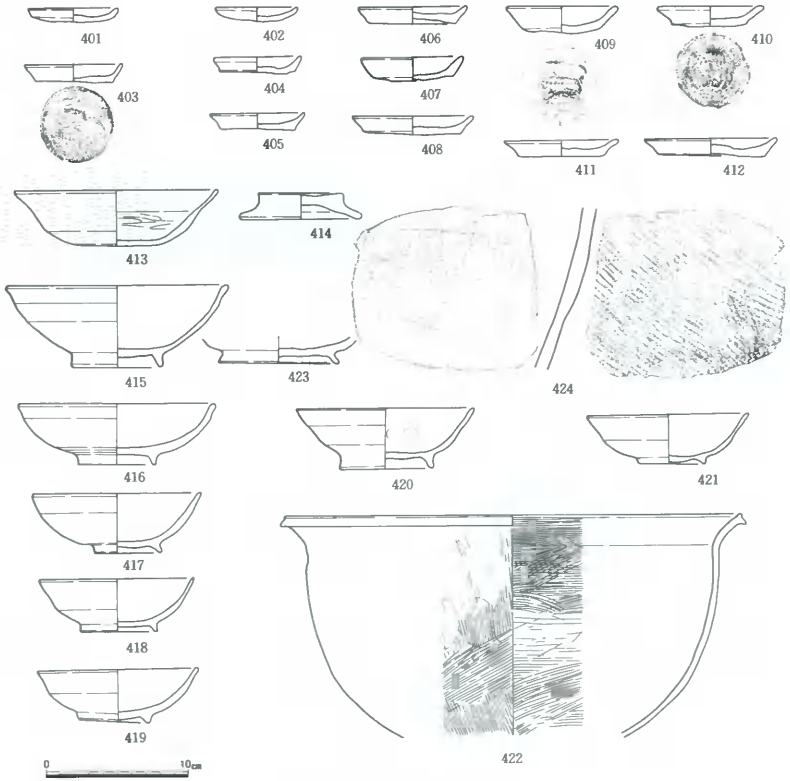
第131図　包含層出土須恵器

古代に比定される包含層出土遺物について概要を述べた。以下、おもな遺構について古い時期のものから、概述を加える。

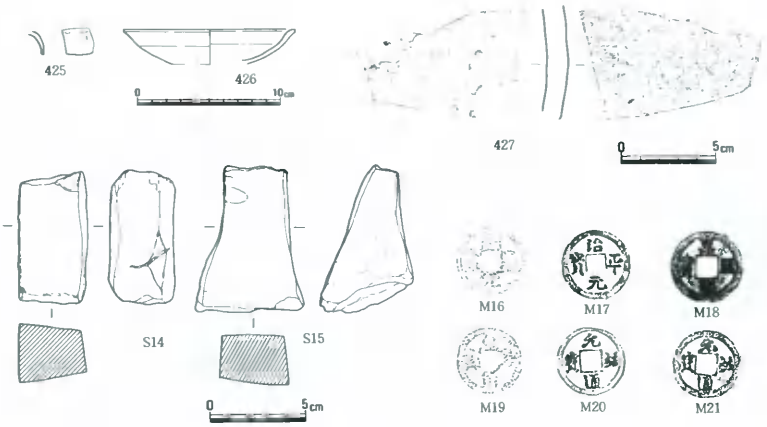
土壙－44（第145～149図、図版128～131）

調査区の北端に位置する。中世遺構の調査後の掘り下げによって検出された。土壙というよりは、凹地あるいは、たわみといった方が適切であるが、便宜上土壙の呼称をもちいる。掘方の東肩で集石が認められたが意図・用途は不明である。内部には炭・焼土のほか、多量の炭化

物を含む灰色を主体とした粘土層が埋積する。炭化物のなかには、数多くの木片のほかに多量の穀物がみられ、オオムギ・コムギ・コメ・エゴマなどが確認されている。それらについての所見は、巻末の関連諸科学鑑定報告に、松谷暁子先生（東京大学総合研究資料館）の玉稿を収載しているので参照されたい。コメについては、出土状態で芒がついたままの籾稲も少なからず見受けられた。動物遺体としては、ウマの下顎骨も出土している。後に触れる土器のなかには、被熱によって変色した緑釉陶器もみられ、火災に遭った建物などから運び捨てられた廃棄物が埋積したのではないかと推察される。出土遺物には、第146図の小型の鉄釘**M23・24、C3～6**の土錘のほかは土器と瓦が大半を占める。施釉陶器は、緑釉**454・456**、灰釉**455・457**があ



第132図　Ⅲ区柱穴出土遺物



第133図　Ⅲ区出土遺物（白磁・緑釉陶器；1/3、備前焼・砥石；1/3、銭貨；1/2）

る。**454**は被熱によって色ムラが生じて、本来の黄緑色の釉調が暗緑色に変色した部分もある。**456**は、輪花皿の口縁部である。須恵器は、土師器や黒色土器に比べると量的には極端に少ない。**458**は、蓋の可能性もある。**459**は、小型の壺で外底部には糸切痕がある。**460・461**は、甕で前者には、内面に同心円タタキとカキ目調整痕が観察される。後者には横位のカキ目調整のみである。いずれも外面は、平行タタキで仕上げられる。**462～486**は土師器である。Ⅲ**462～479**は、**475**を除いてほぼ同じ法量の完形の皿で、同一使用場所での供膳形態を考える上で興味深い。第145図に掲げるように、15点がまとめて捨てられたように折り重なって出土した。内面に卸し目状の特徴的なカキ目調整痕を残すものがある。**480・481**は椀で、**480**には内面に篦ミガキがみられ、黒色土器の影響がうかがえる。**481**はやや凹凸のある器壁が特徴的である。中世の早島式の椀出現に、形態的影響を及ぼしたのではないかと考えられる器形を示す。**482**は甕、**483**は竈の破片である。**484～486**は鍋・甕で直線的な体部に特徴がある。**487～490**は瓦で、丸瓦・平瓦の２種がある。平瓦の凹面には、布目が残る。凸面には、すべて縄目タタキがみられる。**491～504**は、黒色土器椀である。体部内外面の横方向の篦ミガキが特徴的で、わずかに外方する、高めの高台が共通する。時期的には、施釉陶器などから平安時代中ごろすなわち、10世紀前半から中葉に比定される。後述のⅣB区東斜面遺構と性格・出土遺物の内容など共通する、まったく同一時期に形成された遺構として、位置的にも注目される。

土壙－45（第150図）

土壙－44の南東方約28ｍに位置する、不整円形を呈する浅い土壙である。壙底からわずかに

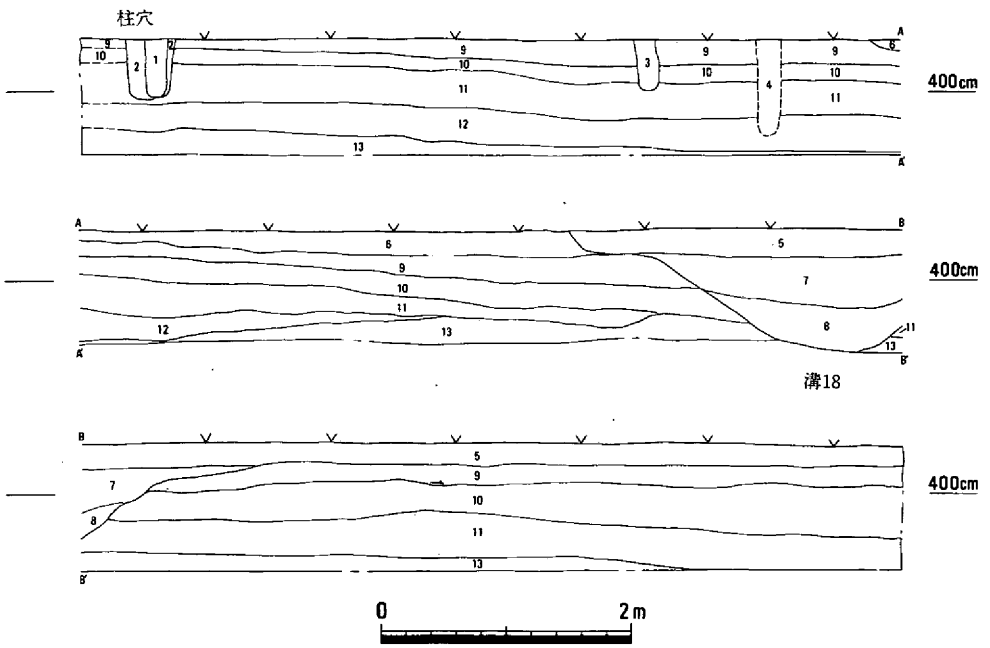
浮いた部位にかけて、８個体のまとまった土器と須恵器片が出土している。**505・506**は須恵器で、前者は杯、後者は甕の破片と考えられる。**507～512**は土師器である。**507・508**は、体部外面に刷毛調整が施され、やや深い椀である。他に類例は少ない。**509**は杯、**510**は、体部が大きく外方する丹塗りの椀である。**511**もやはり丹塗りで、浅い杯である。**512**は、高杯の杯部の破片である。**513**は、黒色土器で内面に篦ミガキがみられる。一括遺物と考えられるが、土壙－44に先行する、９世紀後半に比定される。

建物－13（第151図、図版115）

土壙墓－６・土壙－51と重複するように存在する。桁行３間以上、梁間２間で後者は７尺等間である。棟方向は、ほぼ南北を示し、すべての柱には暗灰褐色の柱痕跡がある。掘方埋め土は、灰黄色を呈する。溝－19・20の東側のⅣB区より、あるいは溝－22の北側にも第136図に網目で示すように、建物の存在が推定されるが、正確な柱の配置については確定できない。

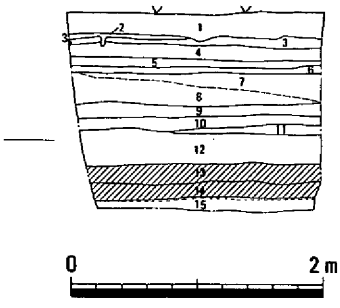
溝－18（第134図）

調査区の南端で検出された。一箇所、幅約１ｍほどの通路状の掘り残し部分がある。ほぼ東



第134図　ⅣA区低位部南北トレンチ土層断面図（1/60）

西方向を示すが、西に延びて溝－19あるいは、溝－20につながる可能性がある。その場合溝－18と溝－28間の距離は43ｍを測り、「コ」字形の区画を形成することが推察される。



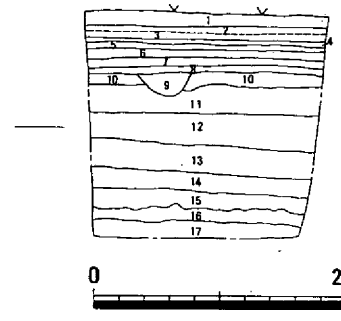
1…淡黄灰色微砂（客土）
2…灰色微砂
3…明黄色微砂
4…淡黄褐色微砂
5…淡黄灰色微砂
6…黄灰色微砂
7…黄褐灰色微砂
8…淡黄褐灰色微砂
9…淡灰青色微砂粘土
10…暗青灰色微砂粘土
11…灰青色粘土
12…青灰黄色粘土
13…黒青灰色粘土
14…灰黒色粘土
15…明灰黄褐色土

第137図　ⅣA区西壁土層断面図　(1)（斜面部分は土壙－44；1/60）

溝－19・20（第152・153図、図版119・120）

調査区の北に位置する。溝－19は、南北方向から直角に東に折れ曲がり、ⅣB区の溝28と連接してⅣB区とⅣA区の広い範囲を囲むかのように区画された溝である。溝－20は、西側が低位部であったためか、掘り加えられた可能性がある。溝の埋積は一度に埋められたのではなく、少しずつ埋まっていった様子が、土層断面図からわかる。

出土遺物には、混入遺物として溝－20から出土した**514**の白磁がある。いわゆる青白磁の合子の蓋で天井部に蓮弁が表現される。**515～520**は、溝－19から出土した土師器で、小皿**515～517**、杯**518**、鍋**519**、鉢**520**などがある。溝－20からは、土師器ではやはり小皿**521～532**、皿



1…淡黄灰色微砂
2…淡灰色微砂
3…淡黄灰色微砂
4…灰褐色微砂
5…黄灰色土
6…灰褐色土
7…暗灰色微砂粘土
8…暗黄灰色微砂
9…黒灰色土
10…淡灰褐色土
11…灰黄色土
12…淡灰青色粘土
13…灰青色粘土
14…暗灰青色粘土
15…砂礫層
16…粗砂層
17…砂礫層

第138図　ⅣA区西壁土層断面図　(2)（1/60）

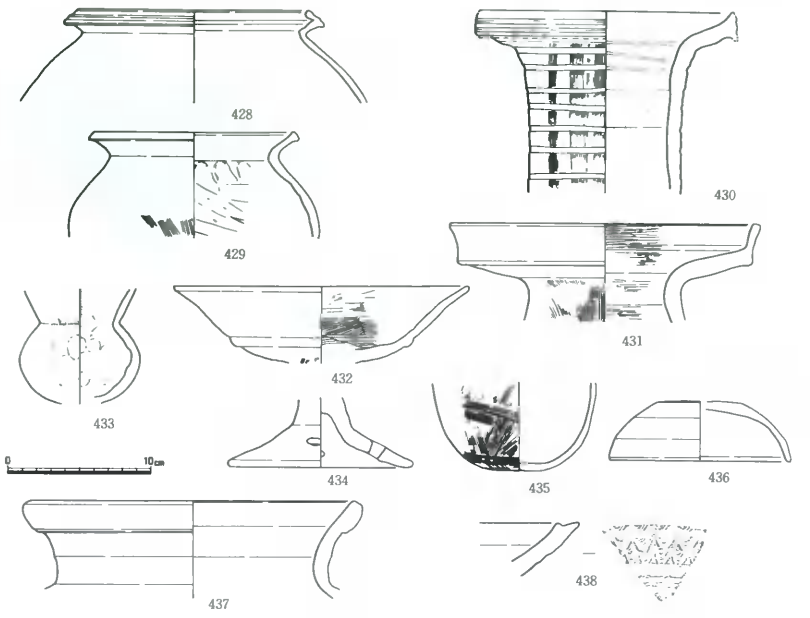
533～535、浅い椀**536～541**、杯**542**、脚台**543**などの小型器種のほか、鉢**545・546**、鍋**544・547**などがある。**548**は、須恵質あるいは瓦質の鍋である。**549**は、亀山焼の甕で外面には、格子目のタタキが施される。土師器椀では、すでに高台が取り付けられない時期を示し、室町時代、14世紀後半以降に比定される。溝－18もほぼ同一時期と考えられる。

溝－21（第154図）

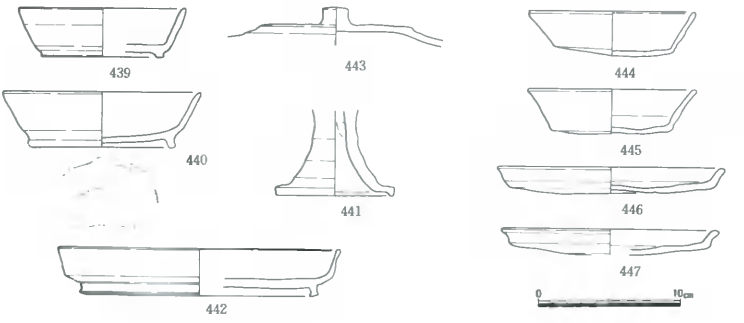
溝－19の北側の角から約４ｍに位置する、東西方向の溝である。淡灰黄色の粘土層が埋積す

第135図　ⅣA・B区古代遺構配置図（1/300）

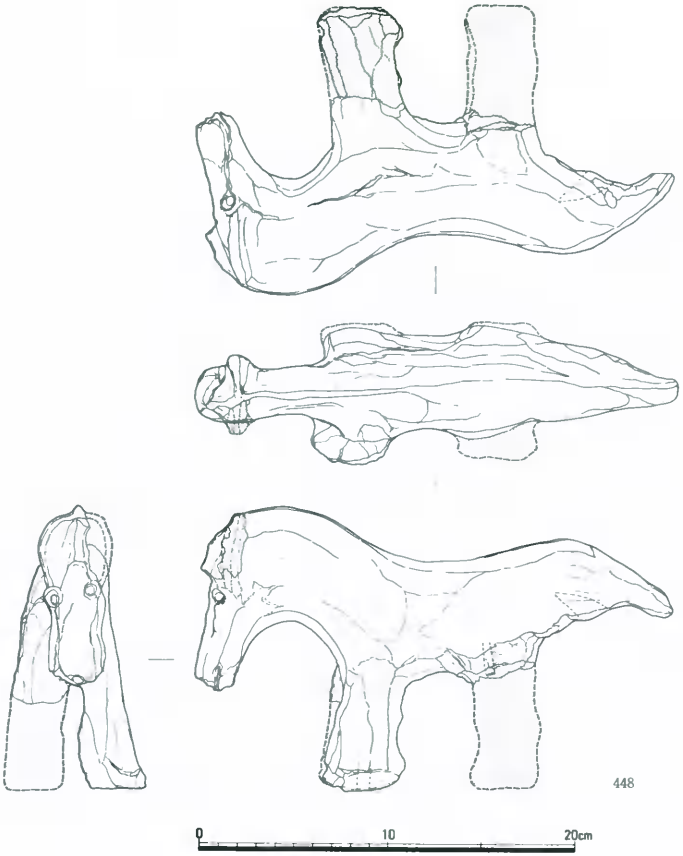
第136図　ⅣA・B区中世遺構配置図（1/300）



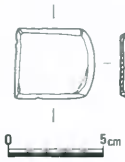
第139図　低位部（南端）出土遺物　(1)



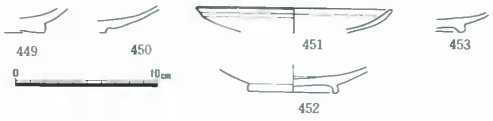
第140図　低位部（南端）出土遺物　(2)（陶馬関連古代遺物）



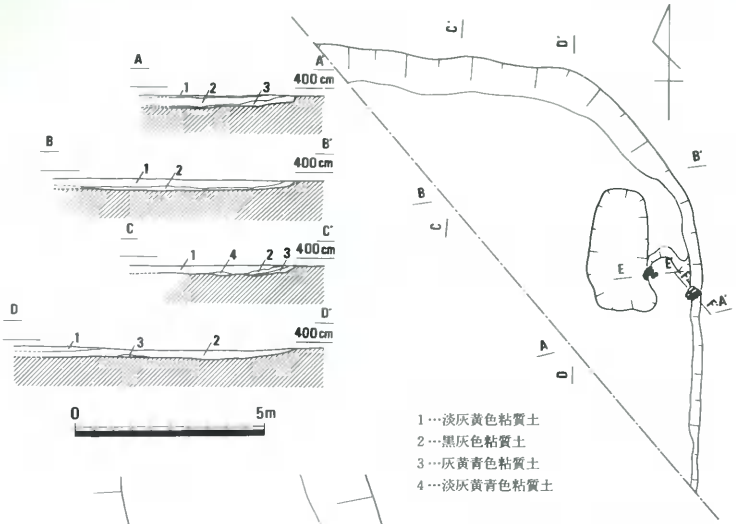
第141図　陶馬（網目部分は欠失部分；1/3）



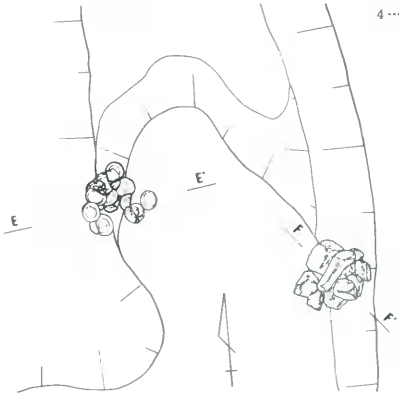
第142図　鈪尾（1/3）

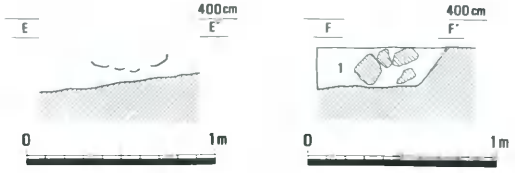


第143図　施釉陶器（1/4）

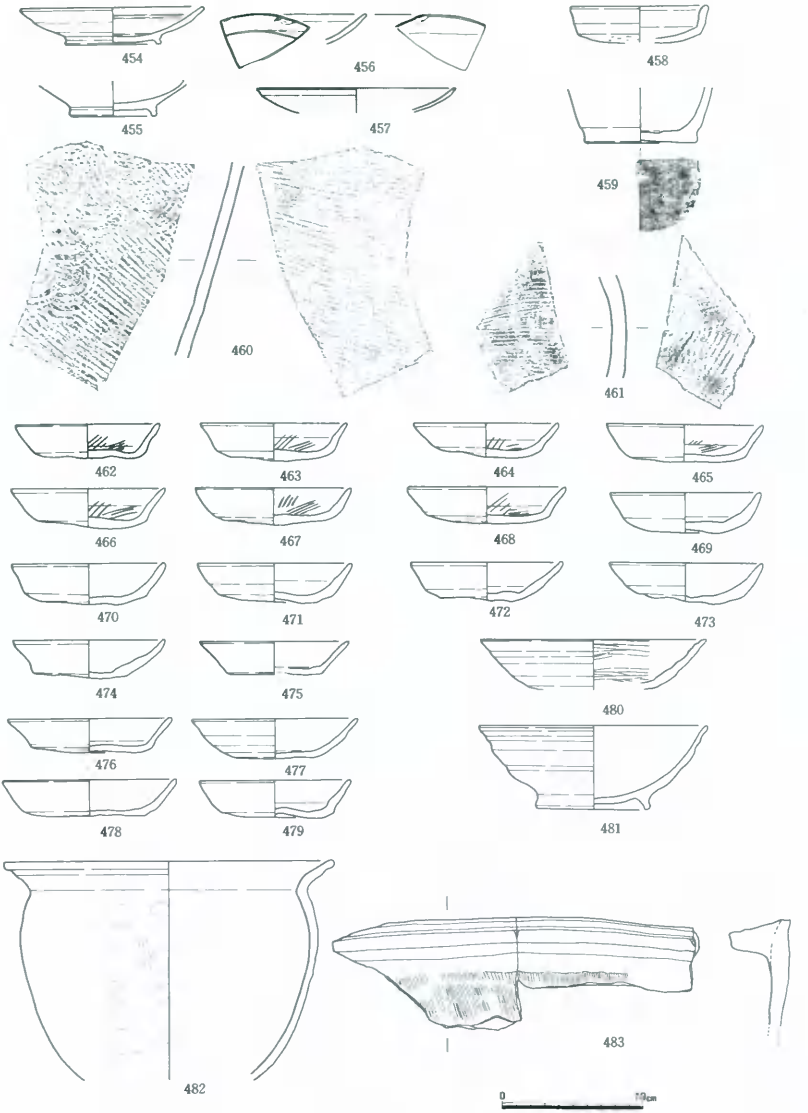


第144図　土壙－44（1/60）

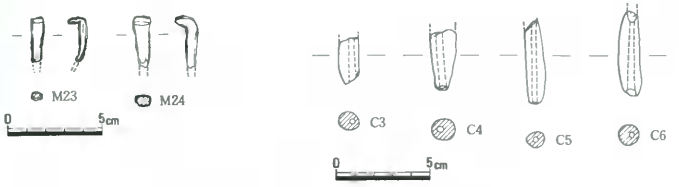




第145図　土壙－44土師器皿集中部分・集石部分（1/30）



第146図　土壙－44出土遺物　(1)



第147図　土壙－44出土遺物　(2)（1/3）

る。出土遺物は、中世それも、溝－20より古い鎌倉時代に比定される土師器片がみられる。貫流する溝というより、区画溝の可能性が強い。

溝－22（第155・156図、図版115）

建物－13の北側に位置する、東西方向の浅い溝である。断面形は凸レンズ形を呈する。埋積土は、淡灰黄色で炭・焼土の細片を含む。出土遺物には、**550～554**の土師器のほか、**C7**の鞴の羽口が出土している。土壙墓－６や付近の鍛冶炉の存在が示唆するように、周辺で鍛冶が行なわれたことを示す資料である。上端部には飴状に溶けたガラス質の部分が観察される。**550**は、やや高い脚台である。**552**は、椀の高台部分である。鎌倉時代に比定される。

溝－23（第157・159図）

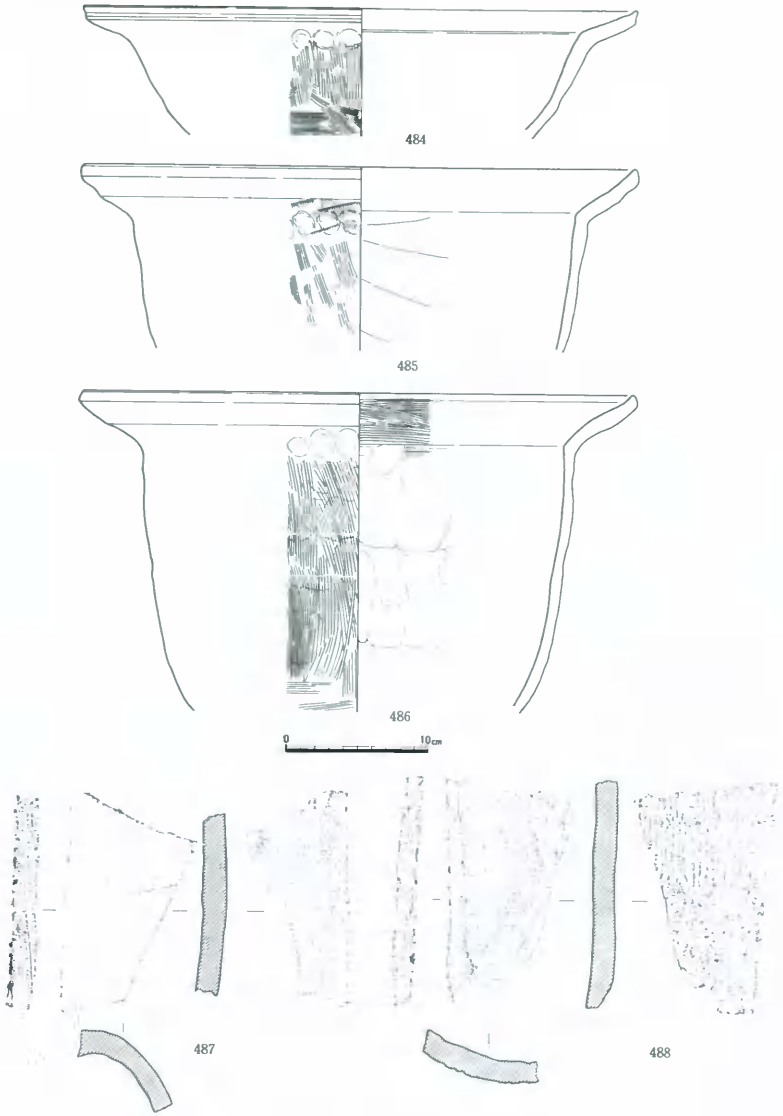
溝－24を切る東西方向の溝である。検出された部分はわずかである。上層には焼土を多量に含む淡灰黄色土、下層には淡青灰黄色土が埋積する。出土遺物には、**555～558**の鎌倉時代に比定される土師器がある。

溝－24（第158図）

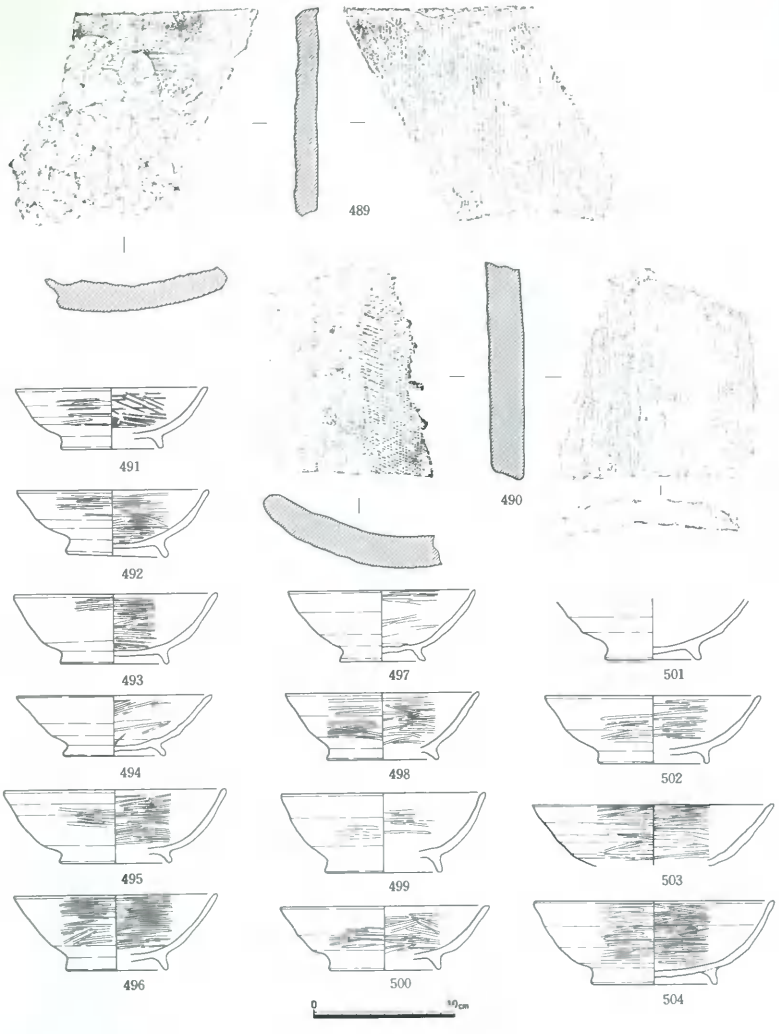
溝－23に切られる、南北方向の浅い溝で北側のⅣB区に一直線に延び、溝－28の手前に達する。溝－26と同一の溝である。接続する部分は不明瞭で、同時に存在した溝かどうかわからない。埋積土は上層に淡灰青色粘質土、下層に灰褐黄色の粘質土が埋積する。出土遺物は土師器細片がわずかであるが、鎌倉時代に比定されるものである。

土壙墓－６（第160～163図、図版121～123）

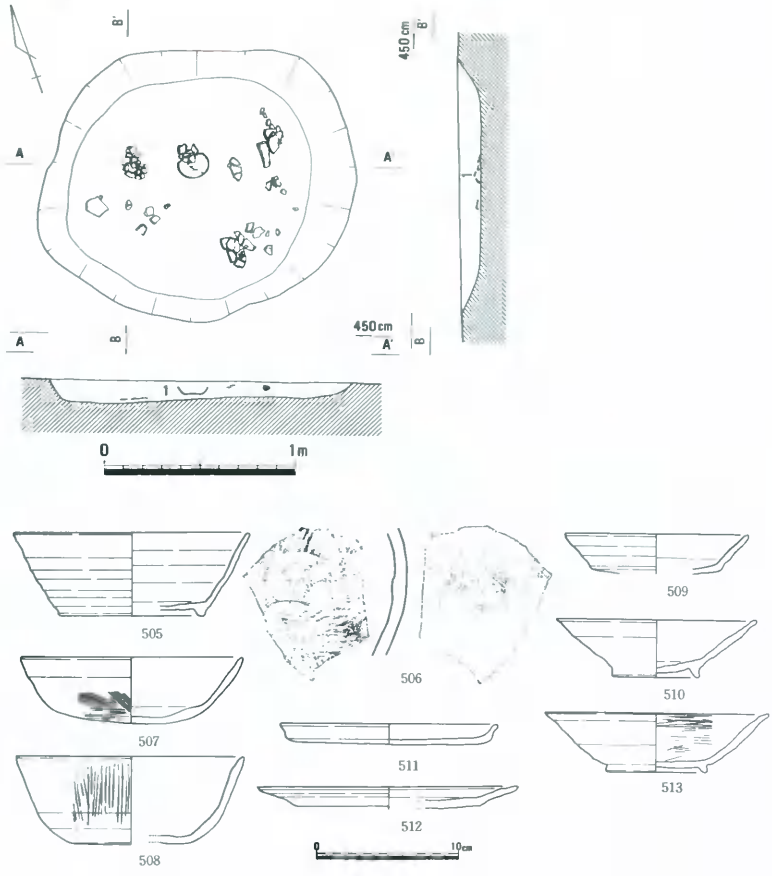
建物－13と重複し、溝－22の南に位置する。後述の集石遺構－３は、この墓の上面で検出されている。頭位は北東方向を指す。大腿骨・脛骨の遺存状態から、ほぼ隅丸の方形掘方の墓壙に屈葬の状態で葬られたものである。人骨の残りは良好ではないが、ほぼ原形を留める頭部のほか、上腕骨・肋骨の一部なども遺存している。人骨は、壮年男性骨と鑑定されている。副葬品は、頭部の北側でまとまって出土した土師器があり、**559～562**の皿、**563**の椀がそれぞれ完形で出土している。椀は伏せ置かれた状態、皿は上向きに置かれていたようである。遺体のほぼ中央には、切っ先を足元に向けた刀子**M25**が置かれ、「魔よけ」のための守り刀の役割をは



第148図　土壙－44出土遺物　(3)

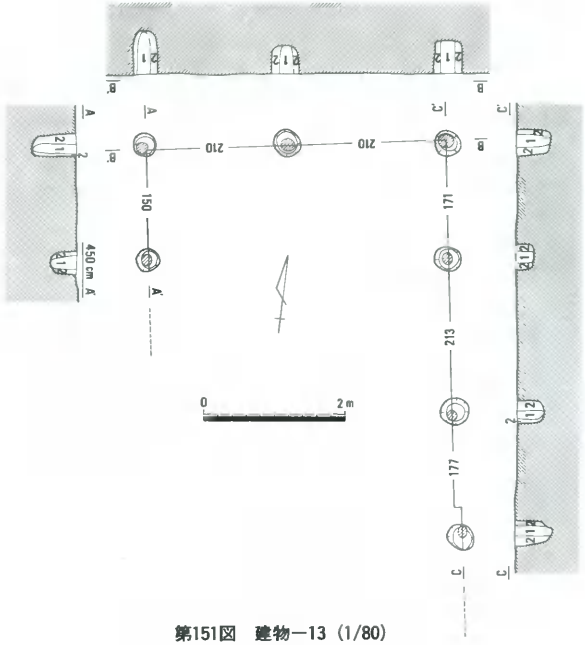


第149図　土壙－44出土遺物　(4)



第150図　土壙－45（1/30）・出土遺物

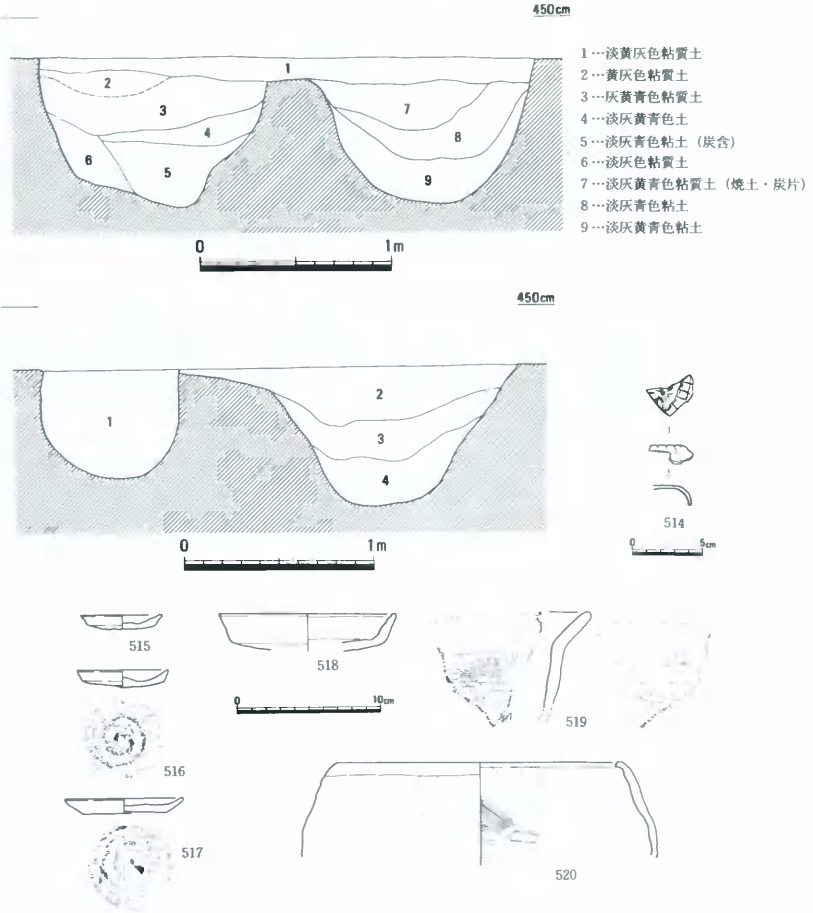
たしている。頭部の上には、棒状の鉄器がみられるが、用途は不明である。遺体の南側には、保存の良好な、注目すべきまとまった鉄器の一群が発見された。これらの鉄器の配置については、第160図に掲げるとおりであるが、その内容から鍛冶道具の一括遺物と理解された[註4]。以下それぞれの鉄器について説明を加えたい。**M26**は、金鎚で柄をはめこむ方形の孔が貫通しており、木質が遺存している。しかも柄が抜けないように釘状の楔が添えられていた。図の左側は丸みをもった正方形を呈し、餅状に別の鉄片が貼り付けられている。使用面はいずれとも断定



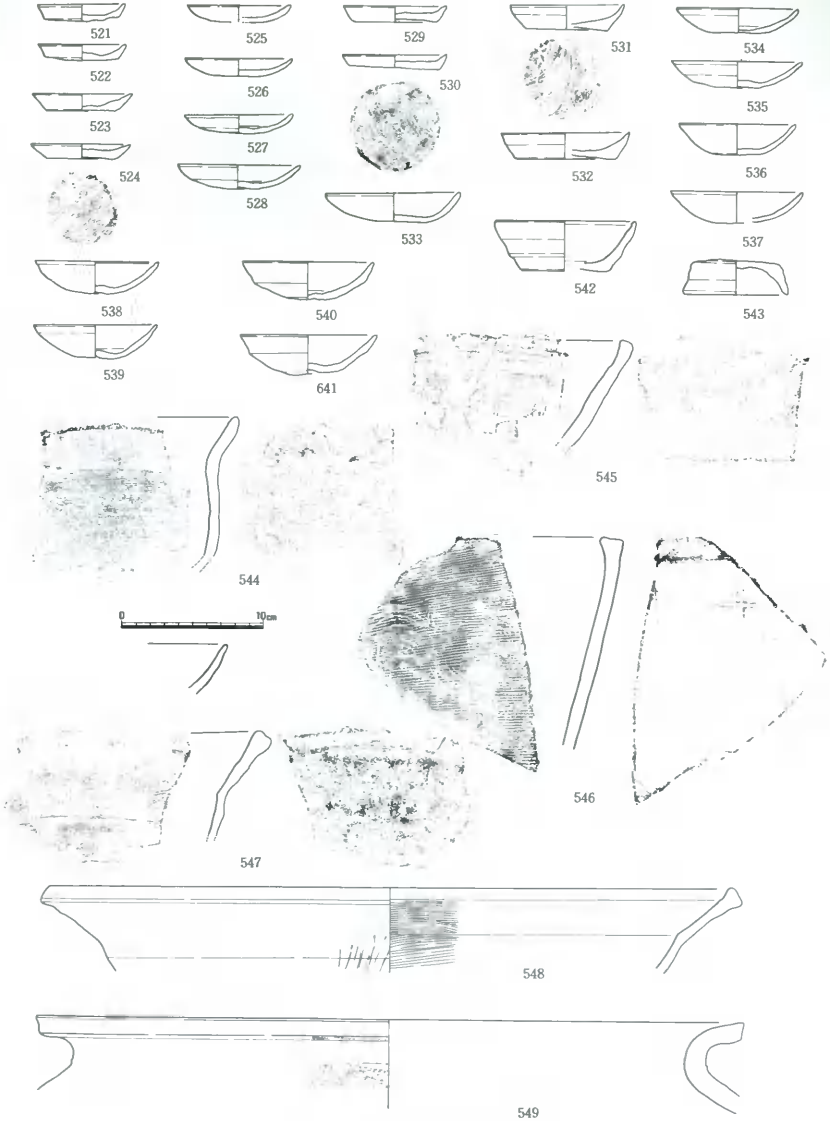
第151図　建物－13（1/80）

しがたいが、使用時のバランスを考慮したうえで、あるいは、過度な使用によって摩滅した部分に補填が必要となったのかもしれない。残存重量は450ｇである。**M27**は相鎚である。金鎚に比べ、細長い。細身となった側に柄を差し込む小さな方形の孔が貫通し、やはり木質の柄が残る。重量は、130ｇである。**M28**は、小型の工具の茎と推定される。**M29**は、頭部付近で出土したもので、やはり工具の柄あるいは、茎と考えられる。出土位置から、鍛冶に用いられた工具の可能性は少ないかもしれない。**M30**は、炭掻きの先端と考えられ、やや反り返った匙状をなす。『職人尽絵』などをみると、鍛冶炉の近くにみられる。柄はおそらく木製であったと推定される。**M31**は、環状の鉄器で内側に木質が付着遺存していた。一箇所合せ目があり、厚めの鉄板を折り曲げて環状にしたものであるが、たがねなどの工具の柄に用いる責金具ではないかと考えられるが、本体部分をみない。**M32**は、火打ち鎌（金）と推定され、復元すると逆三角形をなすとみられる。**M33**は鏨（せん）推定される。『和漢三才図会』などにみられる、木工用の内鑿・外鑿に類似し、後者に似る。刀剣などの地金を削る道具とされ、両端に把手をはめこむ茎があり、左右対称である。図の下端が刃部となっており、手前に引いて使用された

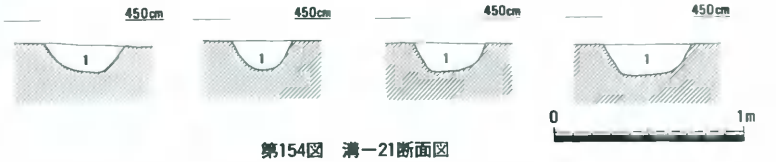
と考えられる。重量は150ｇである。**M34**は、鑓と考えられる。図の左端は右側に比べやや薄手で、柄が付けられた可能性がある。断面形は長方形を呈する。重量は、150ｇである。**M35**は、鉄鉗（かなはし）である。ふたつの棒状の柄を、一方から丸いボルトで留める。先端は平たく、物をつかみやすく成形されている。柄の部分の断面形は丸い。重量は、400ｇである。



第152図　溝－19・20土層断面図（1/30）・出土遺物

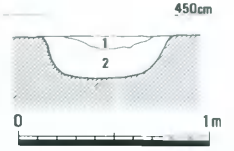


第153図　溝－20出土遺物

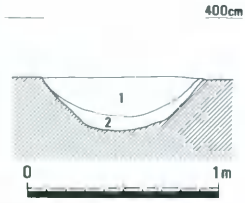


第154図　溝－21断面図

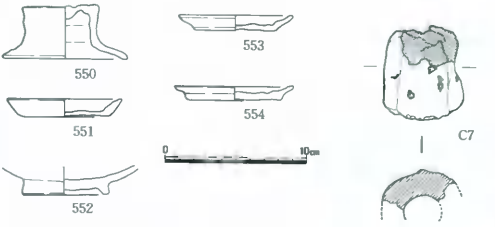
第155図　溝－22土層断面図



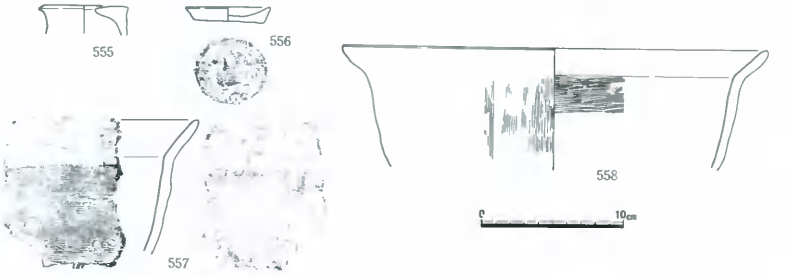
第157図　溝－23土層断面図（1/30）



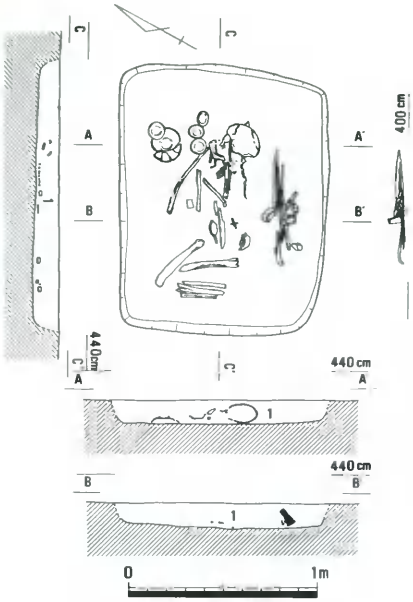
第158図　溝－24土層断面図（1/30）



第156図　溝－22出土遺物



第159図　溝－23出土遺物



第160図　土壙墓－６（1/30）

以上、鍛冶にかかわる一括遺物について述べた。墓が居住区の一画にあり、近くに鍛冶炉の炉床も点在していることから、生前、生業として鍛冶を営んだすぐそばに埋葬された可能性がきわめて強い。被葬者の職業を知ることができる稀有な例で、副葬された鍛冶道具一式にこめられた「職人気質」にふれる思いがする。被葬者がこの鍛冶道具を使って何を製作したのか、農具なのかあるいは、刀などの武器なのか、今後の大きな研究課題といえる。

時期的には、土師器の形態などから鎌倉時代の前半期に比定される。

土壙－46（第164図）

土壙－49と接するように検出された。また鍛冶炉－１にも近接する。平面形は隅丸の方形を呈し、焼土を含む淡黄灰褐色土が埋積する。鉄器の細片が出土している。

土壙－47（第165図、図版124）

溝－22を切って検出された。上層には、土師器片や炭片を含む暗灰黄褐色土、下層は灰黄褐土が埋積する。

土壙－48（第166図、図版124）

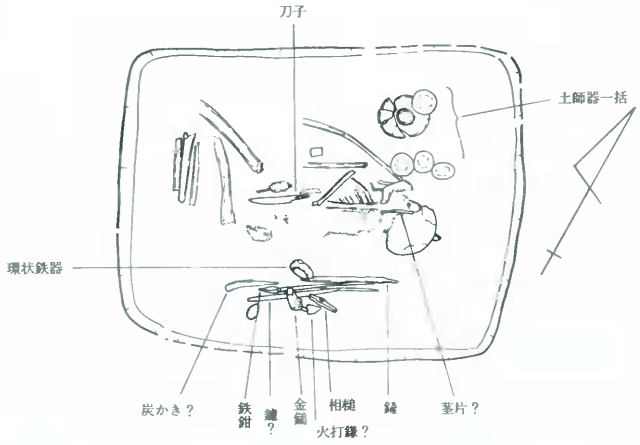
やはり、溝－22を切って検出された土壙である。上層には、灰・炭片を多く含む淡灰黄褐土、下層には、淡灰黄土が埋積する。土師器細片がわずかに出土している。

土壙－49（第167図、図版124）

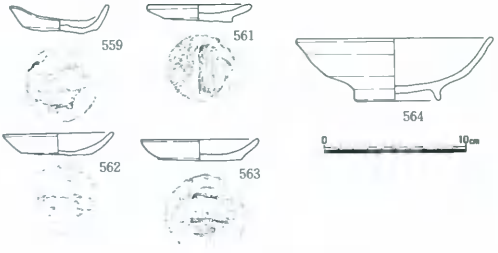
土壙－46の西側に接するいびつな形の土壙である。埋積土は、淡黄灰色の粘土質の微砂で礫・炭・鉄滓片・焼土を含む。周辺に鍛冶炉が多いので関連する遺構と考えられる。

土壙－50（第168図）

溝－20の東約10ｍに位置する。埋積土は、淡灰黄色を呈する粘土である。



第161図　土壙墓－6副葬遺物配置図（1/20）



第162図　土壙墓－6出土遺物（1）

土壙－51

（第169図、図版125）

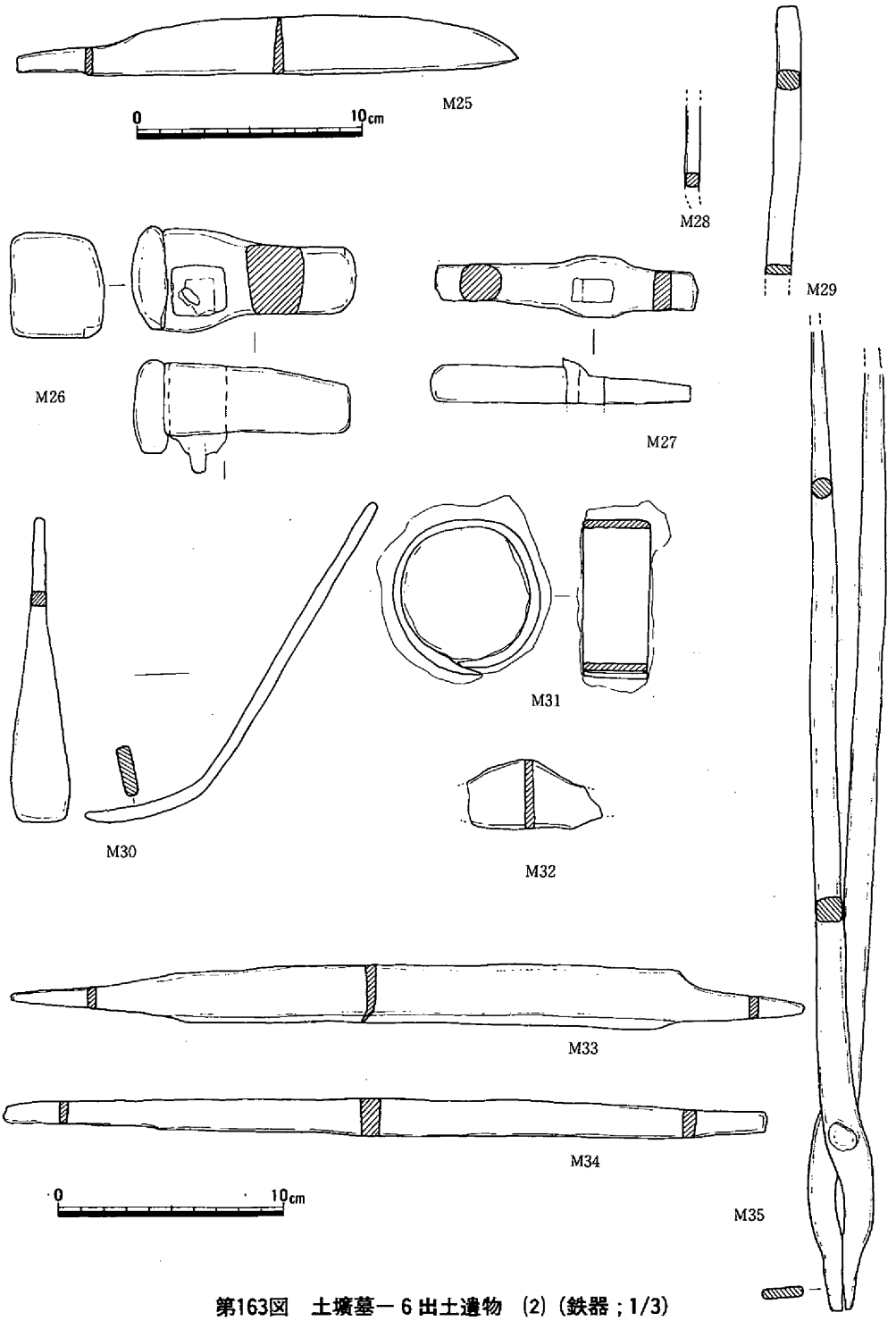
土壙墓－6のすぐ南で検出された、長円形を呈する浅い土壙である。5～10㎝の小礫が敷き詰められたかのように置かれている。礫と壙底の隙間には炭が多く淡灰黄土が埋積している。上面には、淡黄灰褐色土がみられる。性格・用途は不明であるが、Ⅰ農区で検出された集石遺構－2などとも類似する。周辺に鍛冶炉もあり、関連性があるかもしれない。

土壙－52（第170図）

土壙－49の北側に位置する小型の円形の土壙である。埋積土は、灰色の粘土層である。出土遺物には土師器甕**564**がある。形状から平安時代に遡る可能性が強い土師器である。

土壙－53（第171図）

溝－20の東に位置する隅丸方形を呈する、やや袋状の土壙である。上層には土師器細片・炭・砂を含む暗黄灰土、下層には粘土質の暗灰色土が埋積する。



第163図　土壙墓－6出土遺物　(2)（鉄器；1/3）

土壙－54（第172図）

溝－22の北側で検出された袋状をなす深めの土壙である。

以上の土壙の大半は、中世それも鎌倉時代の範囲に比定されると考えられるが、土壙－52のように古代に遡る可能性があるものも含まれる。後述の柱穴の中にも比較的古代のものが多くみられる点に注意される。

集石遺構－3（第173図、図版126）

土壙墓－6の上面にほぼ重なる遺構である。位置的に墓上に礫を集めたような状況であるが、追善供養に伴う遺構であるかは断定できない。出土遺物には、白磁碗565、土師器566～574がある。白磁は、12～13世紀に多くもたらされたものである。土師器には、脚台567～570、小皿571～573のほか椀574がある。563とほとんど同じ形状を示す。

土壙－55（第174図）

溝－21の西側に位置する。上の図の右側部分は、炭が多く、ついで網目の部分では焼土となる。全体には、淡黄灰色土が埋積し、それらを取り除くと下図となり、白抜き部分によく焼けた、古い炉床が残存している。遺構番号は土壙としているが、鍛冶炉の下部と推定される遺構で、数回にわたって使用された可能性がある。

集石遺構－4・鍛冶炉－1（第175図、図版125）

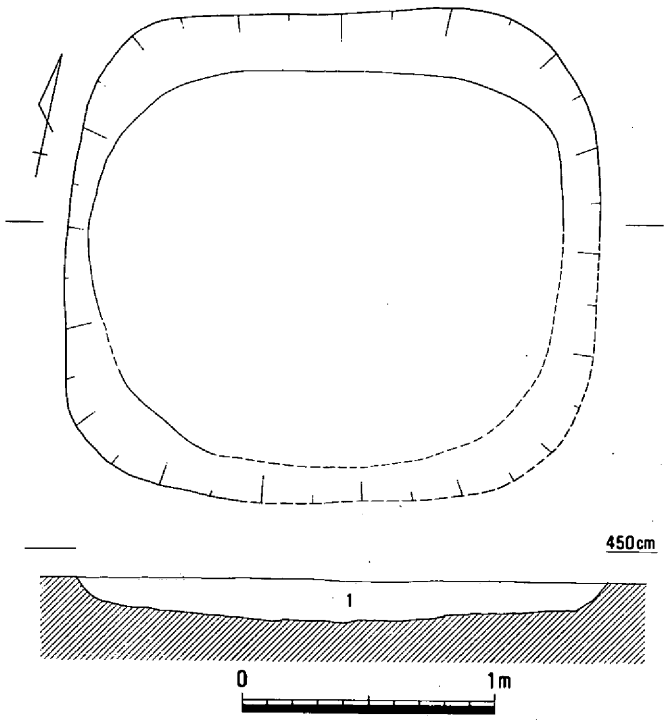
土壙－46の南東に位置する。集石遺構は、鍛冶炉の東側に近接し、鍛冶炉に伴うものと考えられる。炉床あるいは炉底と思われる部分は、2面みられる。最上部は、灰色ないし白灰色を呈し、硬く還元焔焼成となっている。

鍛冶炉－2（第176図）

土壙－51の東に位置する。炉床部が残っている状態で検出された。上面は、還元焔焼成となって灰色を呈している。もっとも外側の線は被熱部分の広がりを示す。周辺の柱穴には鉄滓が出土するものが多く、また付近からは、錆ついた鉄滓（鍛冶滓）もみられる。

以上、検出遺構について述べた。調査区では、古代から中世にかけてのその他の遺物として、多くの柱穴や包含層から出土したものがある。それらについては、第177～182図に掲げるとおりであるが、古代に比定される柱穴では、580・581のような平瓦が出土したものも多い。土師器では、鍋575・576・605、椀577～579、皿599～602、杯603・604のほか、脚台596・597、ミニチュアのような椀598などがみられる。また、備前焼も比較的多く出土しており、第133図の土層断面図の柱穴（1・2層）から出土したいわゆるすずめ口の壺582や、体部の肩に櫛描き文様がある583を含む壺584～586、片口の擂鉢588～591、甕592～595などがある。

また、輸入陶磁器としては第180・181図（ⅣA・ⅣB区の出土品を併せて掲載）に示すように、白磁606～618、青磁619～632があり、碗・皿が大半の器種を占める。白磁は、大半が12世



第164図　土壙－46（1/30）

紀から13世紀にかけてのものが多い。青磁碗では、見込みに草花文などが描かれるものが多い。それらの多くは、14世紀後半から15世紀中ごろに比定される。また**630**は雷文帯蓮弁文碗の破片で、同時期に比定される。

銭貨は**M36**・**M37**の2点の宋銭、淳熙元宝・祥符通宝が出土している。後者は柱穴から出土したものである。

S16は、きめの細かい砂岩製の砥石である。上部を欠失するが、周縁を含む全面が使用されている。

一部の遺物については、ⅣB区とあわせて図を掲載し、説明を加えた。ⅣA区から連続する遺構も多く、時期的にも共通する重要な遺構もある。古代においては、Ⅱ・Ⅲ区で検出された格子目状の溝の残存は限られたが、とりわけ平安時代の遺構・遺物にみるべきものが多い調査区といえる。

(5)ⅣB区

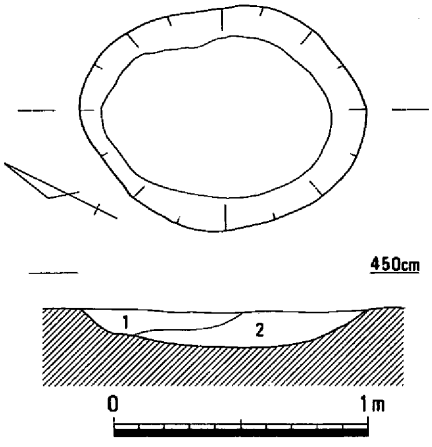
ⅣA区の東側にひろがる広大な調査区である。調査担当者にとっては、丸田調査区発掘調査の最後の戦場となった調査区でもあり、しかも遺構検出密度がきわめて高い地点でもあった。

他の調査区と同様、古代から中世・近世にかけての多くの遺構が検出された。また出土遺物も多様かつ大量に出土した。地勢的には、微高地が大半を占めるが、第188・189図に示すように東部は徐々に下降する層位があらわれ、丸田Ⅴ区の低位部につながるものとみられる。

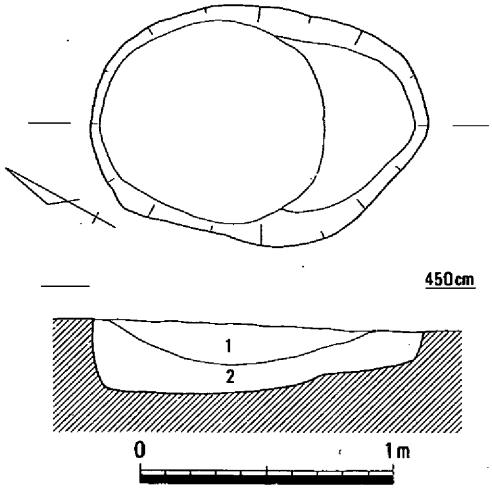
以下、検出された遺構について概述する。

溝－1（第183図、図版143）

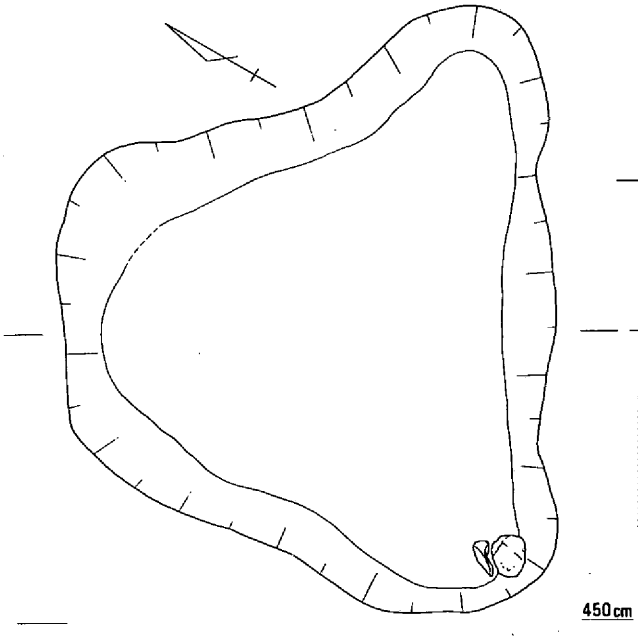
Ⅰ区からⅢ区・Ⅱ区・ⅣA区にかけて、北西から南東方向に向けて検出された古代溝である。規模・形状から連接するものとみられる。ⅣB区で検出された部分は、ほぼ東西方向を示し、中世遺構調査後下層から現れた。ⅣA区からつながるとみられる部分は、側溝を掘削した際、大半が失われ屈曲部は検出することができなかった。東端部の溝底レベルは、海抜3.05ｍで、

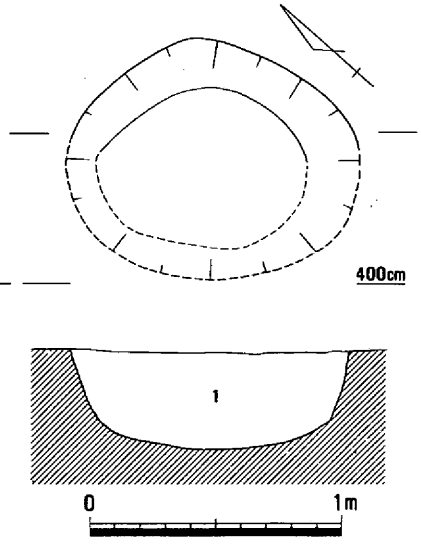


第165図　土壙－47（1/30）

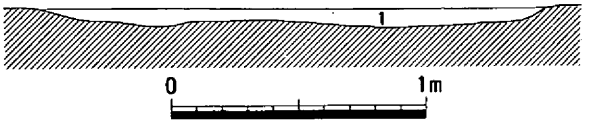


第166図　土壙－48（1/30）

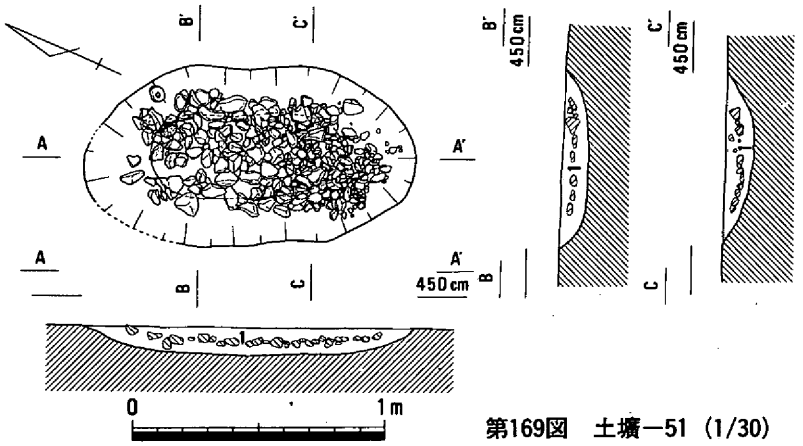




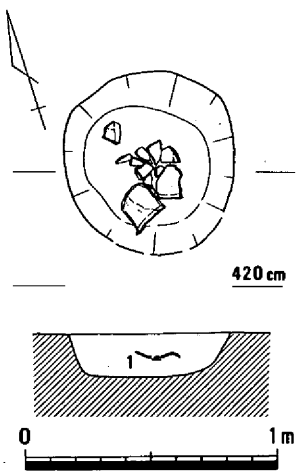
第168図　土壙－50（1/30）

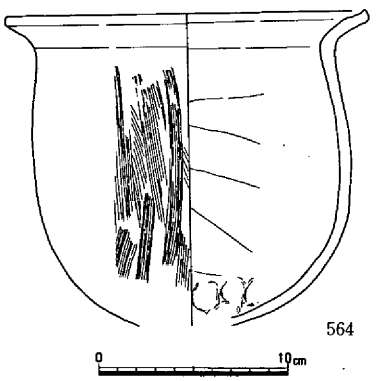


第167図　土壙－49（1/30）

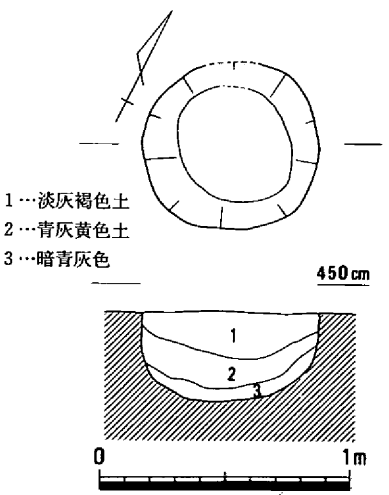


第169図　土壙－51（1/30）

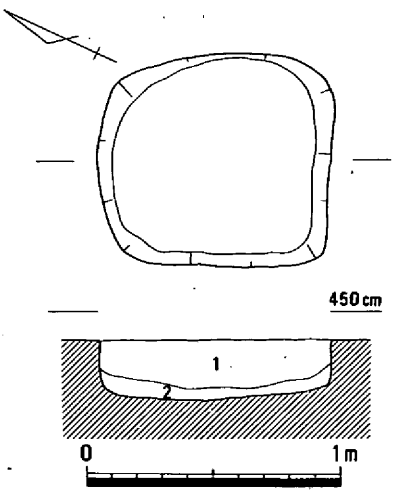




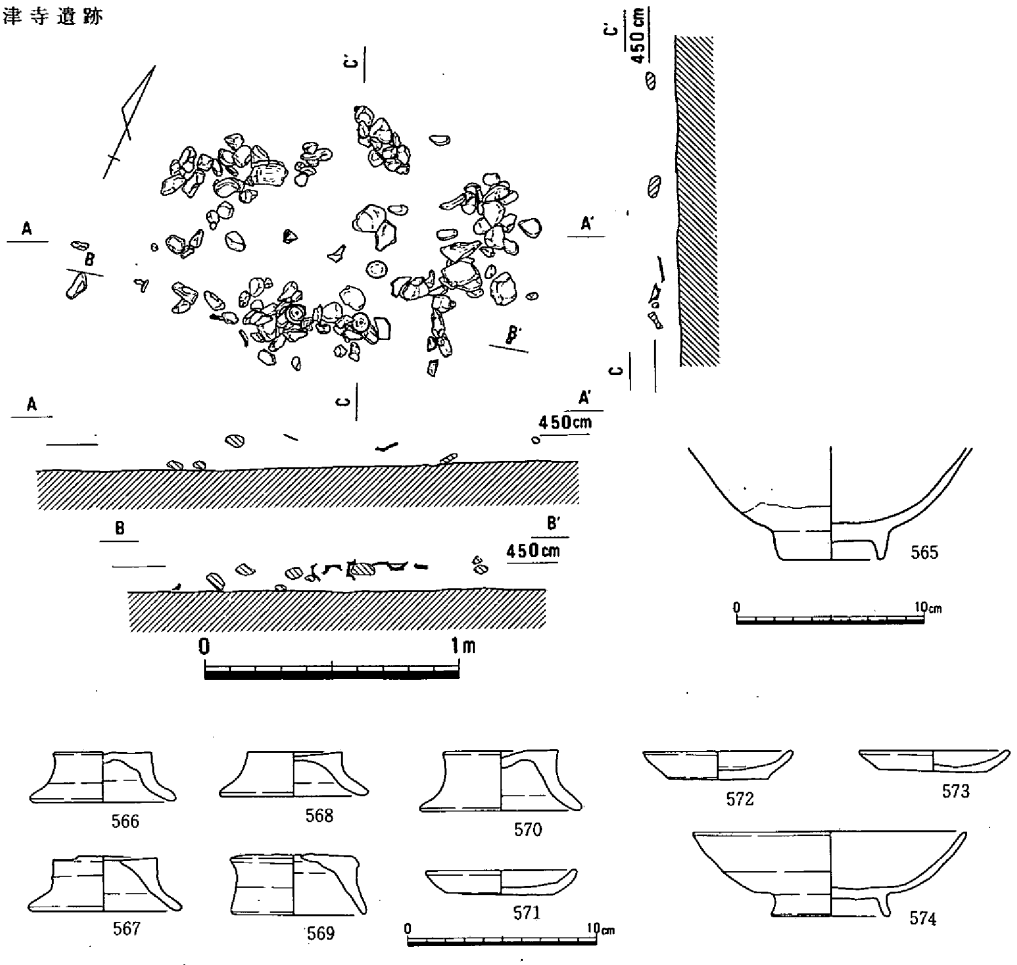
第170図　土壙－52（1/30）・出土遺物



第171図　土壙－53（1/30）



第172図　土壙－54（1/30）

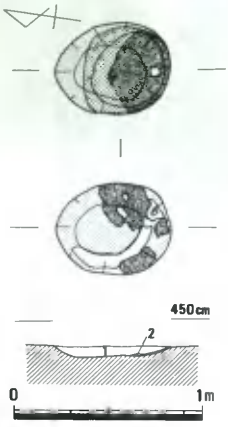


第173図　集石遺構－3（1/30）・出土遺物

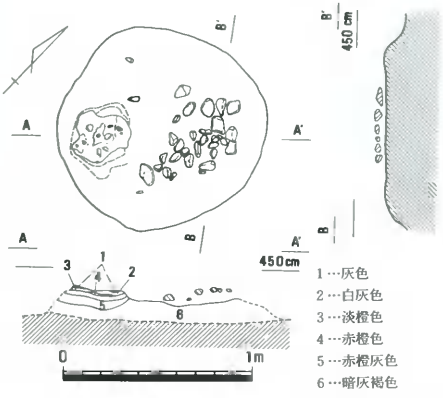
ⅣA区の溝底レベル（3.13m）に比べやや低い。

出土遺物は、第183～185図に掲げる。第183図は、黒色土器633～636、土師器637・638、須恵器639・640で、上層から上面にかけての一部で集中的に出土したものである。黒色土器はすべて椀で内外面に横方向の篦ミガキが施される。638は、竈の一部で鍔が貼り付けられる。634は甕で、やや長胴の直線的な体部をもつ。639は甕の体部片で、内面には同心円タタキがみられる。640は焼成良好な大型の甕で、復元推定高は、70cm近くに達する。外面には、平行タタキのあと横方向のカキ目調整がめぐる。口縁端部は屈曲する、特徴的な形態を示す。頸部内面には指頭押圧痕跡が明瞭に看取される。

第184・185図は、検出された部分全体で出土した遺物である。須恵器641～643、土師器644・645・652・654～657、黒色土器646～650・653、瓦658～661などがみられる。641・642は

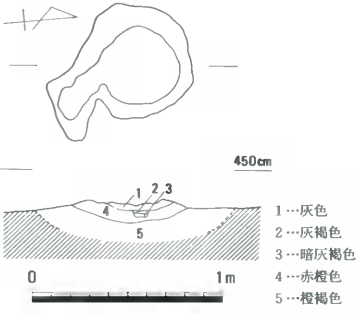


第174図　土壙－55（1/30）



第175図　集石遺構－４・鍛冶炉－１（1/30）

いずれも波状文がめぐる、甕あるいは器台と思われる破片である。混入の可能性が強い。土師器は、杯・甕・竈からなる。甕は独特の長胴形を示す。竈は、複数の個体の炊き口の破片がみられる。黒色土器は椀と甕がある。後者は、完形で内外面に丁寧な箆ミガキが施される。外面には、煤が付着する。瓦は丸瓦と平瓦がある。平瓦の凹面には布目、凸面には縄目タタキが施される。



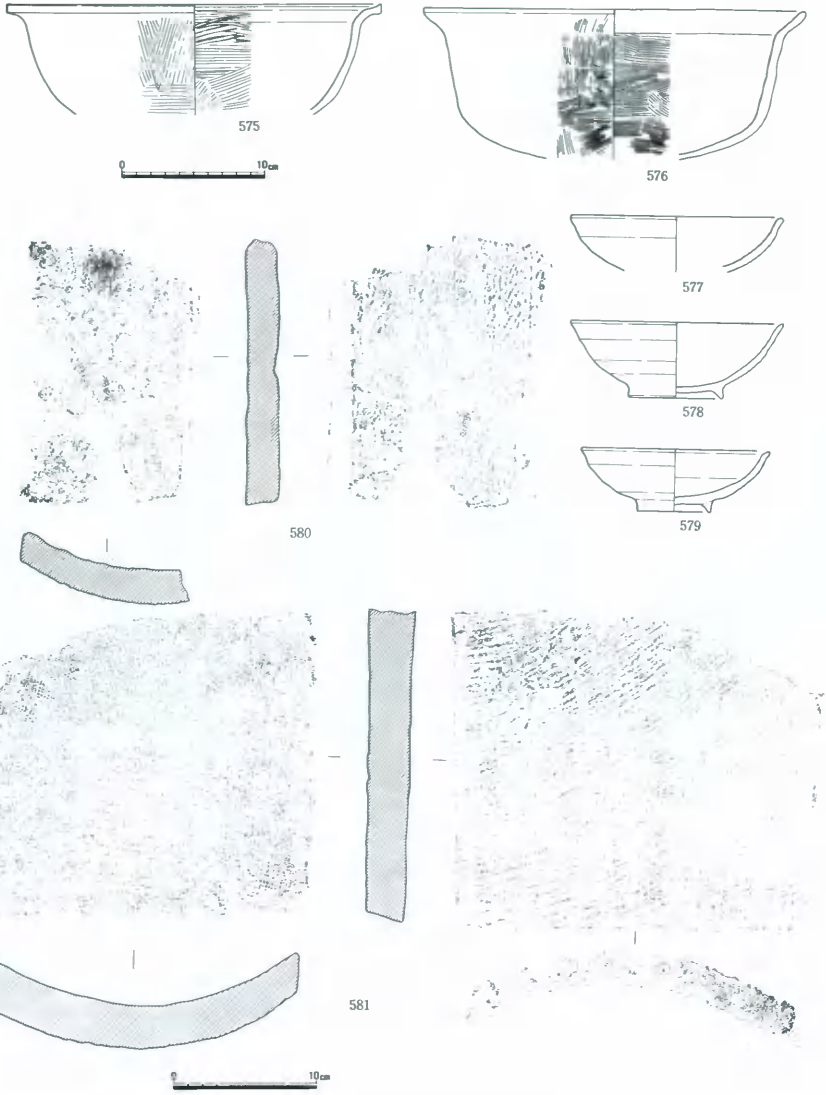
第176図　鍛冶炉－２（1/30）

これらの遺物の示す時期は、平安時代の中頃に比定され、Ⅰ区で出土した遺物にくらべるとやや下る時期になる。存続期間の幅を示す可能性が強いが、一方で別の溝とするわずかな可能性もある。

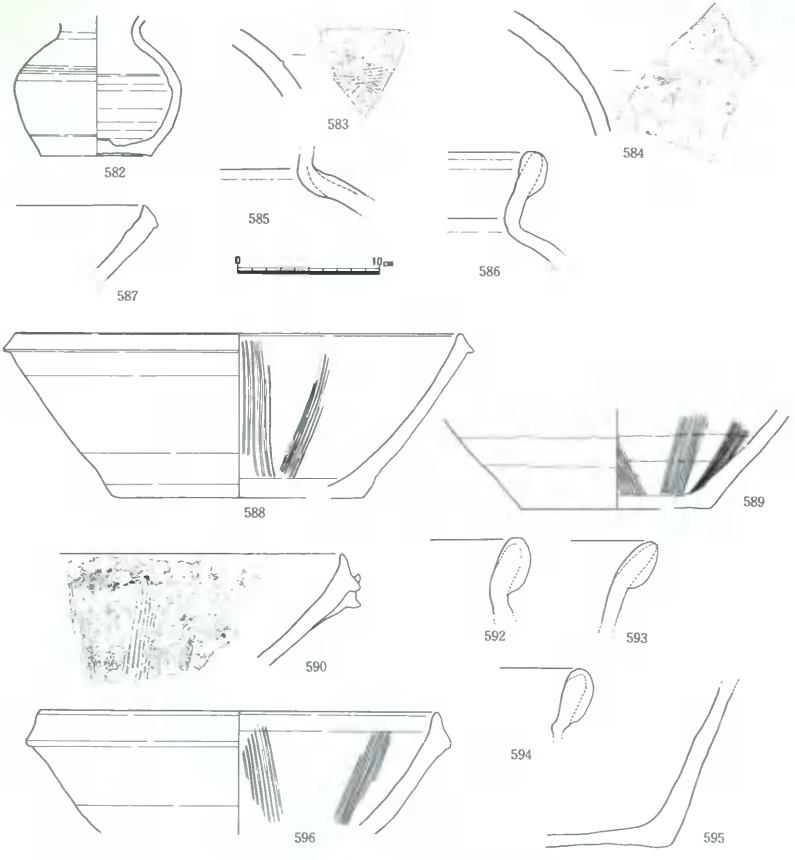
窪地状遺構（第186・187図、図版144）

Ⅱ区の土壙－35の南側から、西方にかけて扇形に広がる浅い窪地あるいは、たわみともいうべき遺構である。上面は、酸化鉄の凝集、下層はグライ化という最悪の条件で検出されたため、元の形状については不明であるが、本来は、土壙－35と一体の遺構と考えてよいと思われる。深さは、平均すると10～15cm前後を測り、炭・焼土を多く含む暗灰褐色土が埋積している。

出土遺物は、二箇所で集中しており、須恵器662～664、土師器665～674、黒色土器675～693、

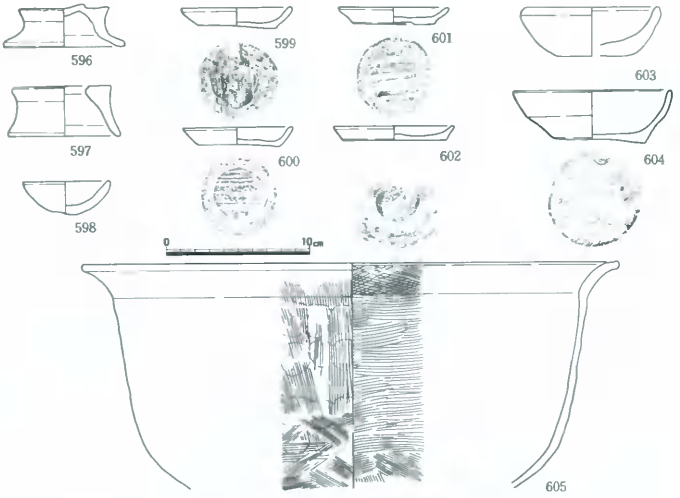


第177図　ⅣA区柱穴出土遺物

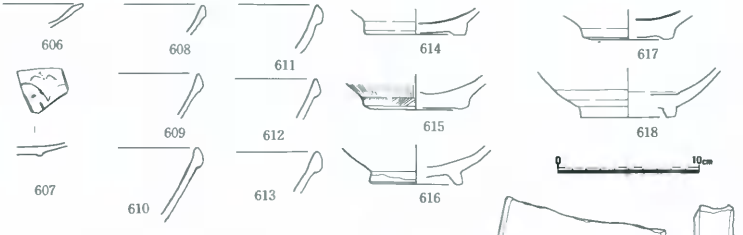


第178図　ⅣA・B出土遺物（備前焼）

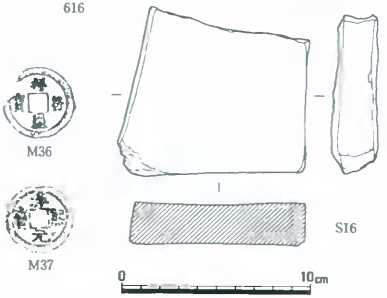
瓦**694～698**からなる。**662**はやや分厚い器壁をもつ皿、**663**は比較的丁寧なつくりの杯である。**664**は、高台が付けられた杯で直線的に外方する体部が観察される。**665・666**は、浅い皿である。口縁端部はわずかに反る。**667～669**は、やや角張った皿で体部は直線的である。**670～673**は杯で、丸みをもった体部を示す。黒色土器は、椀のほか**692**のような小型の甕がある。内外面に丁寧な篦ミガキが施される完形品である。**693**も甕であるが、やや大型である。瓦の多くは、平瓦で凸面には、縄目がみられる。



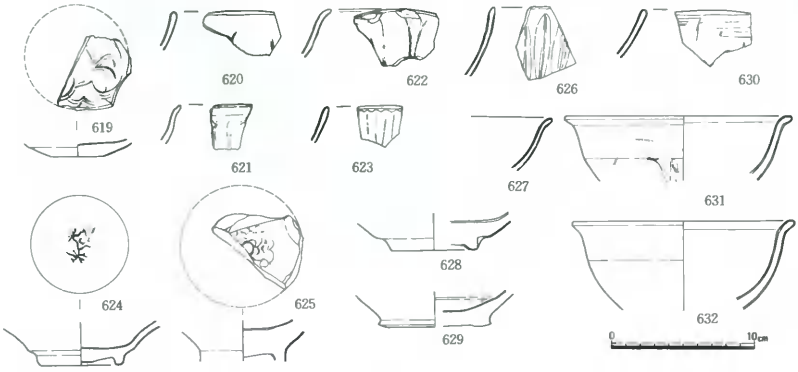
第179図　ⅣA区柱穴・包含層出土遺物



第180図　ⅣA・B区出土白磁



第181図　ⅣA区出土遺物（1/2・1/3）



第182図　ⅣA・B区出土青磁

664は、時期的にやや古い９世紀中頃にまで遡る可能性があるが、他の多くは、10世紀前半から中頃の時期的範囲が比定される。

東斜面（第188～198図、図版145・146）

調査区の東部分、すなわち微高地の端部縁辺にあたる位置で多量の土器が出土している。また、ⅣA区の土壙－44で出土した炭化穀物も、ムギ・コメなどが少なからず発見された。微高地部分の土層は、第188・189図に示すように、中世の溝－25が切る層は、上層ではほとんど水平堆積を示すが徐々に南方へ緩やかに下降する。なお溝－25は、溝底から青磁椀片が出土している。東斜面堆積として広がる範囲は、第135図に示すいびつな凹地の部分であるが、とくにその部分は遺物が多量に出土している。第189図は、ちょうどその凹みの中央付近の土層を示すが、第19・21・22層の炭・焼土を多く含む灰黄色微砂質土層が、多くの遺物の包含層である。なお、第24層は、海抜2.4ｍで湧水が生じる砂礫層で河床と考えられる。時期的には、先に述べた土壙－44とほぼ同時期であり、しかも炭化穀物を伴うことからみても遺物の廃棄が同一契機になされた可能性がつよく、自然堤防状をなす微高地の両側にそれぞれ位置したものと考えられる。したがって、微高地上では、当然建物などの施設が存在したと推定されるが、今回の発掘調査範囲では、検出されなかった。

出土遺物は、黒色土器**699～721**、土師器**723～740**、**742～789**、緑釉陶器**741**、須恵器**757～770**、瓦**771～788**、鉄釘**M38・39**がある。黒色土器の大半は、椀であるがいままで紹介してきたものと形状が異なる、**719～721**など、高台の断面形が三角形あるいは、四角く低いものでや

や口径も大きいタイプのものがある。畿内で出土する黒色土器の形態に類似する点がある。**727**は、甕である。内外面に荒い篦ミガキが看取される。土師器では、杯・皿が大半を占め、ついで甕・竈がある。中には、高台が付けられた椀**742**～**749**もあり土壙－40出土遺物の中の**310**・**311**などに類似する。後の早島式椀の成立や、黒色土器の影響などをみることができる。甕は、小型と大型の２種があるが、**750**のように刷毛調整が施されないものもある。また、**756**のような鍋がある。須恵器は、椀**757**、壺**758**～**762**、甕**763**～**770**がある。**761**・**763**は、同じような壺のものと思われる高台である。後者は、完形に復元することができた短頸壺で、全体に暗黒青色を呈する。焼成は良好でわずかな自然釉がかかる。外面には、平行タタキの痕跡がみられ、数条の沈線がめぐる。内面には、同心円タタキの痕跡が観察される。須恵器片の多くは甕であるが、中には**765**のように内面の同心円タタキが摩滅してツルツルになるほど使用された転用硯もある。文字の使用と、それにかかわる人々の存在の関連に注意される。大半の甕は、外面には平行・格子目タタキが施され、さらにカキ目調整を加えるものがある。内面には、同心円タタキがみられる。瓦は、丸瓦と平瓦があり、**773**など前者は玉縁がつくものがある。平瓦のほとんどは、凸面には縄目、凹面には布目圧痕が残る。

出土遺物から、時期的には土壙－44と同じ10世紀前半から中葉に比定される可能性が強いとみられる。

建物－14（第199図、図版133）

調査区の北西端に位置する南北棟の建物である。溝－28と方向が一致し、建物－22・23などと共存する可能性が強い。桁行３間、梁間２間で西側が７尺、東側が６尺と不揃いである。南よりに間仕切りがあると推定される。柱痕跡も一部観察される。掘り方の埋め土は、淡黄灰色土を呈す粘質土、柱痕跡には炭・焼土を含む暗黄灰色土が埋積する。

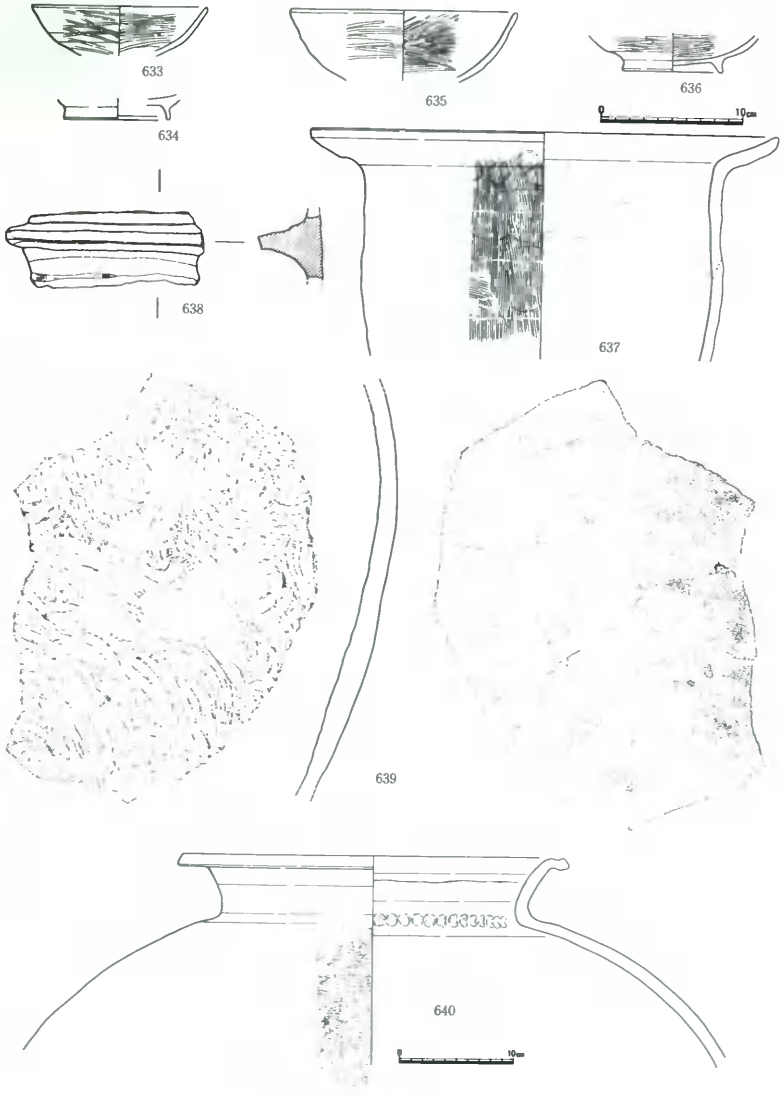
柱穴からの出土遺物には、青磁碗**790**のほか**791**～**796**の土師器、瓦**797**がある。青磁は、見込みに花文を描き、12～13世紀に輸入されたものである。土師器には、皿・椀・甕などが少量出土している。瓦は燻し焼き状で灰黒色を呈する。

建物－15（第200図、図版133）

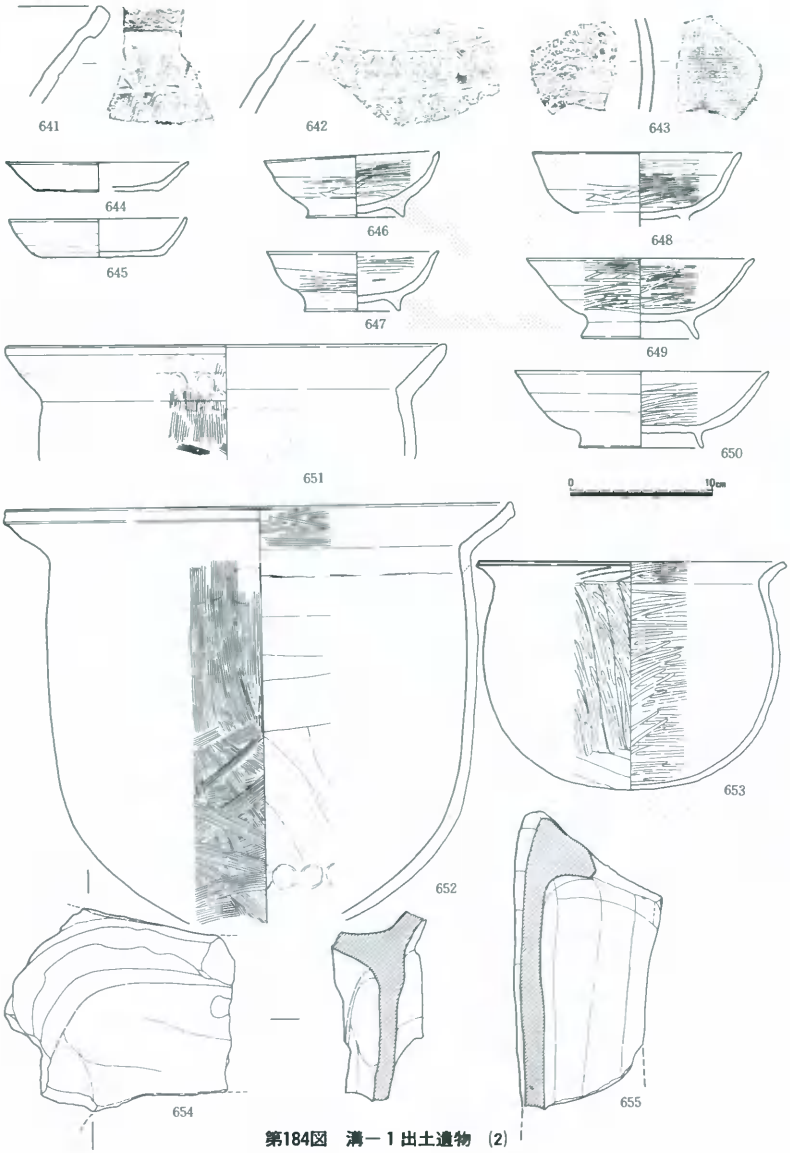
建物－14の西側に位置する。桁行３間以上、梁間２間と推定される南北棟建物と推定される。ⅣA区にまたがるため全容はあきらかにできなかった。柱穴の埋積土は淡黄灰色粘質土で一部に残る柱痕跡は、灰青色を呈する。

建物－16（第201図、図版137）

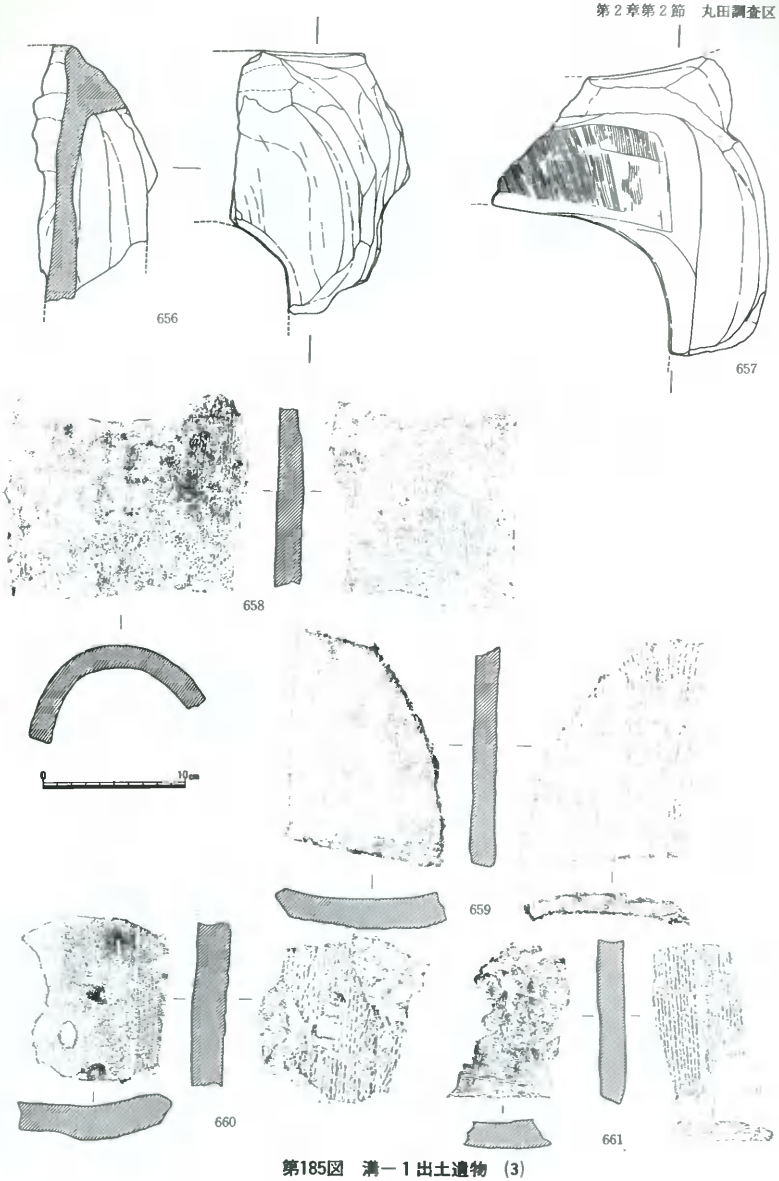
溝－25の北側、建物－17に近接して位置する南北棟建物である。平面形は、正方形に近いがわずかに南北に長い。桁行4.5ｍ、梁間4.2ｍを測る。柱穴のなかからの出土遺物には、**S17**の砥石がある。鋭利な金属器を研ぐのに用いられたとみられ、細かな条線や擦痕がみられる。全



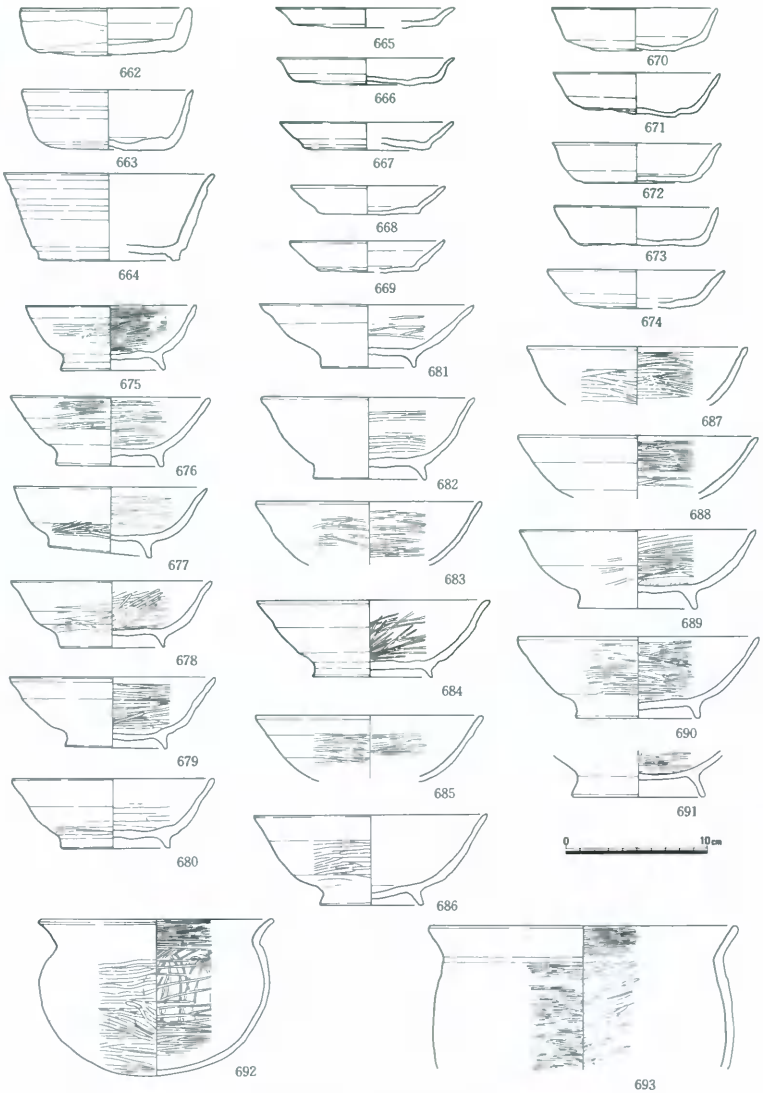
第183図　ⅣB区溝－１出土遺物　(1)（1/4・1/5）



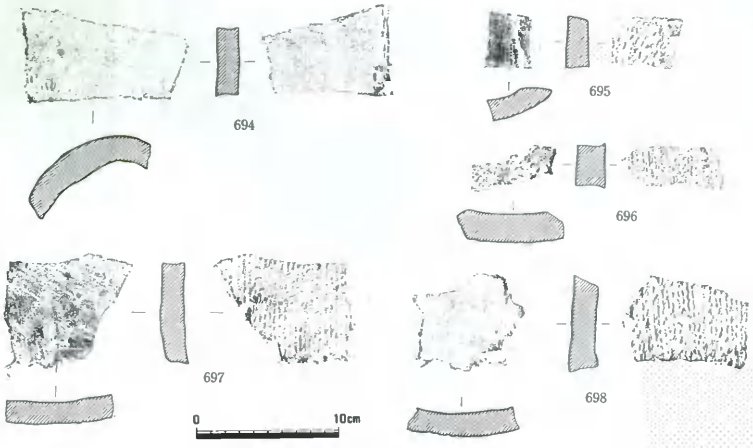
第184図　溝－1出土遺物 (2)



第185図　溝－１出土遺物　(3)



第186図　窪地状遺構出土遺物　(1)



第187図　窪地状遺構出土遺物　(2)（瓦）

体的に黒色を呈する頁岩製である。また、799の土師質の壺片もある。

建物－17（第202図、図版137）

建物－16の西側に近接する建物で、北梁間の棟持柱は検出できなかった。桁行６ｍ（10尺等間）、梁間3.3ｍを測る南北棟建物である。埋積土は淡黄灰色を呈する。出土遺物には797の土師器鍋がある。

建物－18（第203図、図版138）

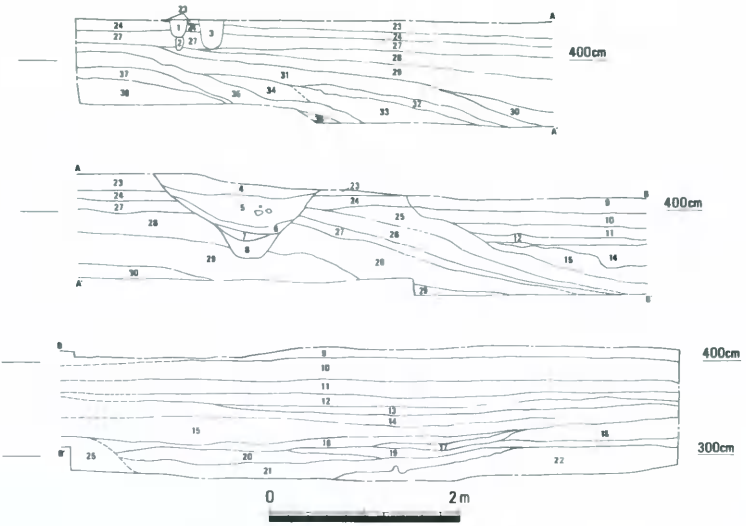
調査区の南側、建物－19の東側に位置する。ほぼ南北に棟方向を示し正方形に近い平面形を示す。桁行4.5ｍ、梁間4.2ｍを測る。

建物－19（第205図、図版138）

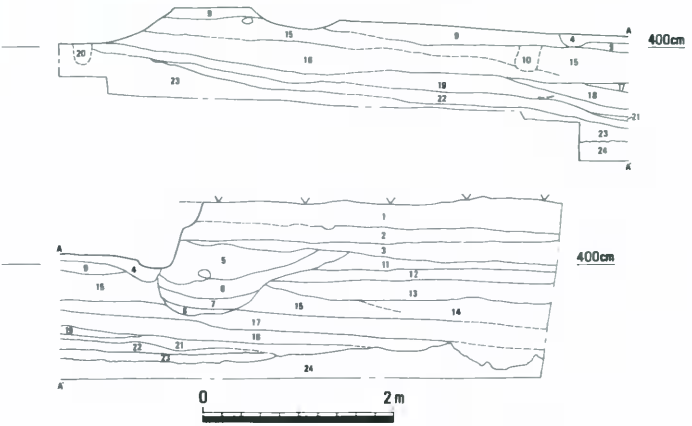
溝－27と重なって検出された南北棟の建物である。桁行３間（6.3～6.5ｍ）、梁間には棟持柱は検出できなかった。柱の大きさもまちまちで、柱通りも不揃いで、ややいびつな平面形を呈する。柱穴掘り方には淡褐灰色土、柱痕跡は炭の細片を含む灰褐色土である。

建物－20（第206図、図版134）

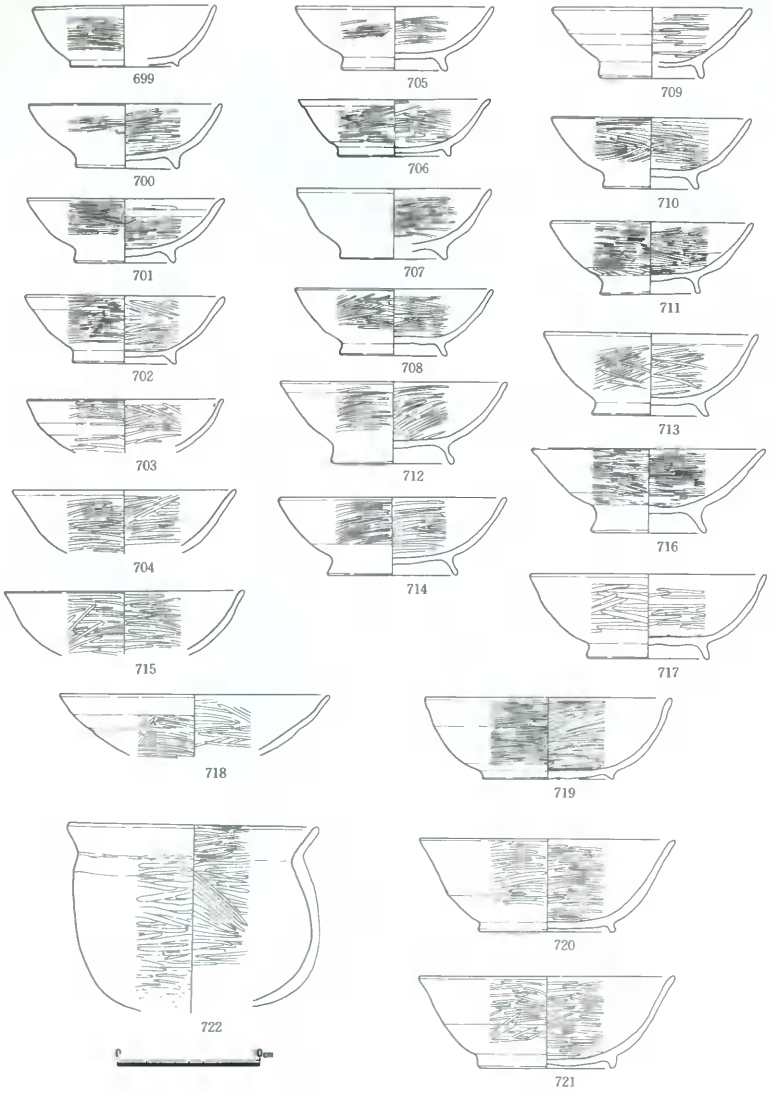
溝－26と重なるように検出された南北棟建物である。溝－28にほぼ直行して検出され、区画内では、比較的長大な建物である。桁行５間、梁間２間の規模が復元推定できる。柱穴は小さく、間隔や形状にバラつきがある。柱穴の埋積土は淡黄灰色土で、柱痕跡は黄灰色の粘質土である。



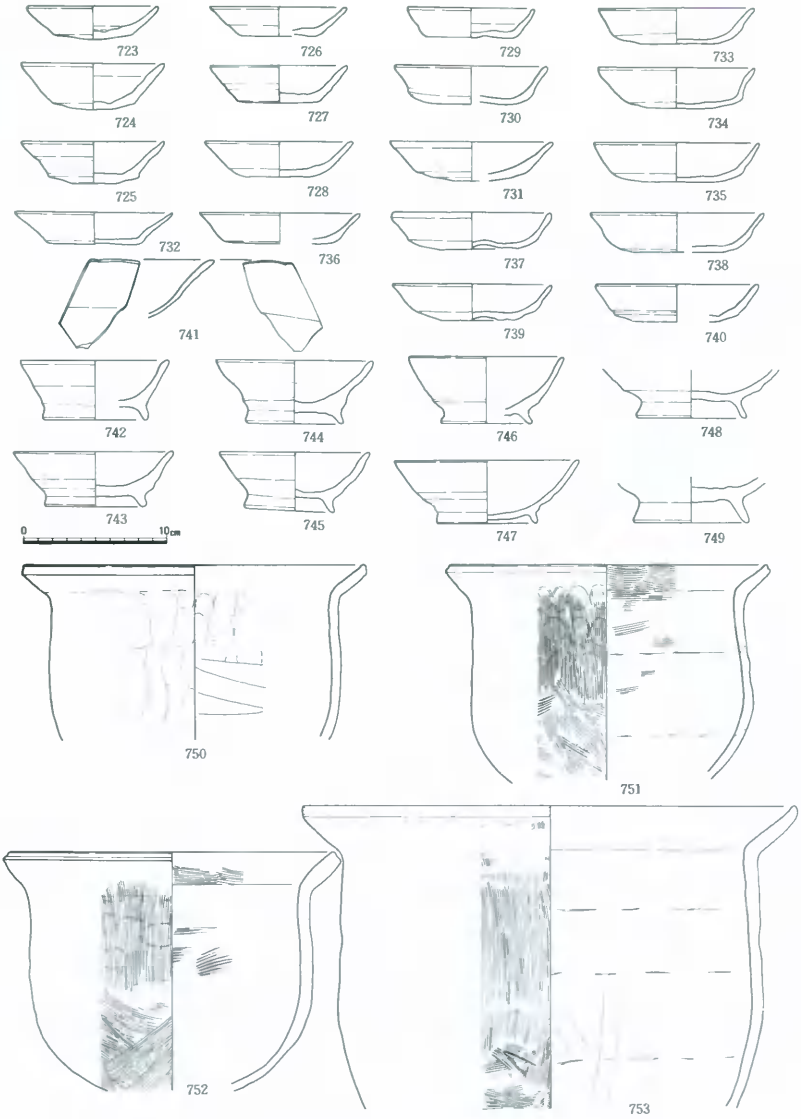
第188図　ⅣB区溝－25土層断面図　(1) (1/60)



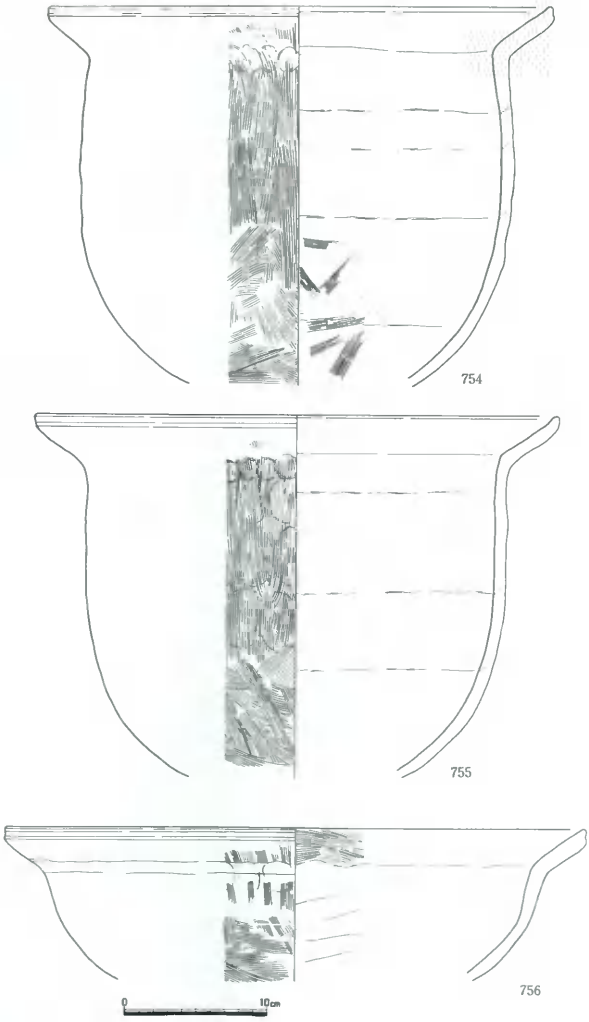
第189図　ⅣB区溝－25土層断面図　(2) (1/60)



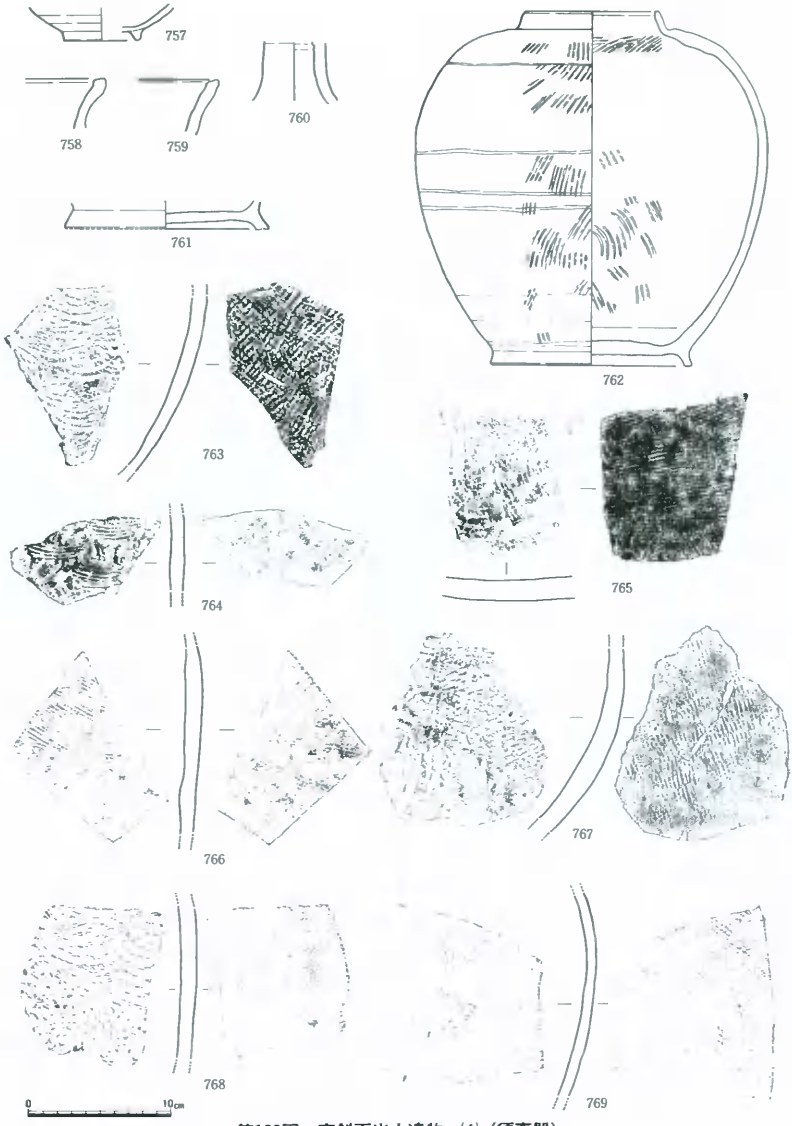
第190図　東斜面出土遺物（1）



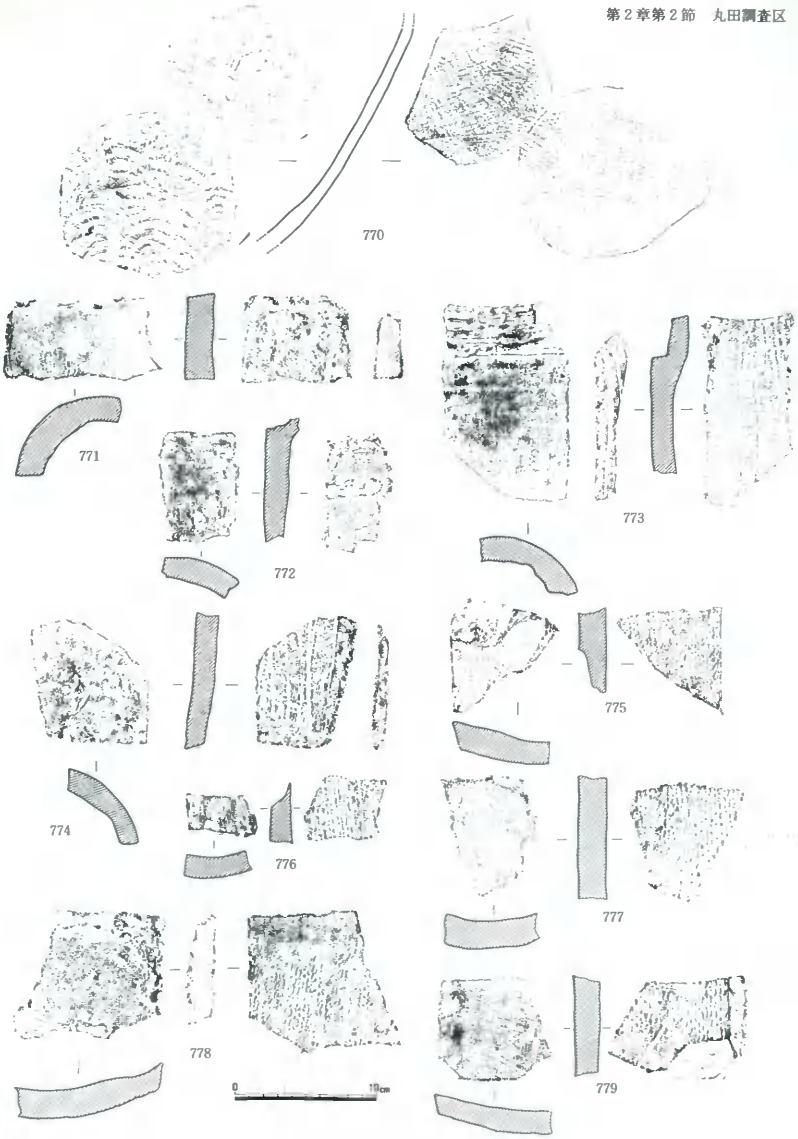
第191図　東斜面出土遺物　(2)（土師器・緑釉陶器）



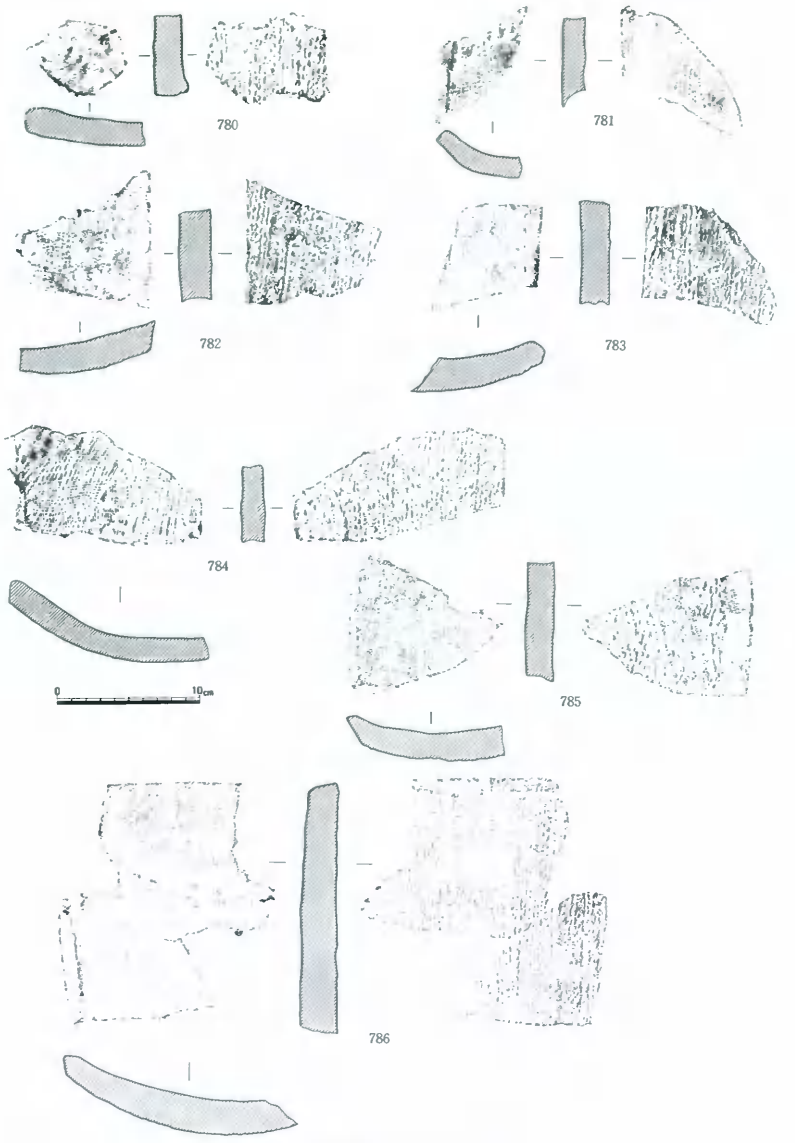
第192図　東斜面出土遺物（3）（土師器）



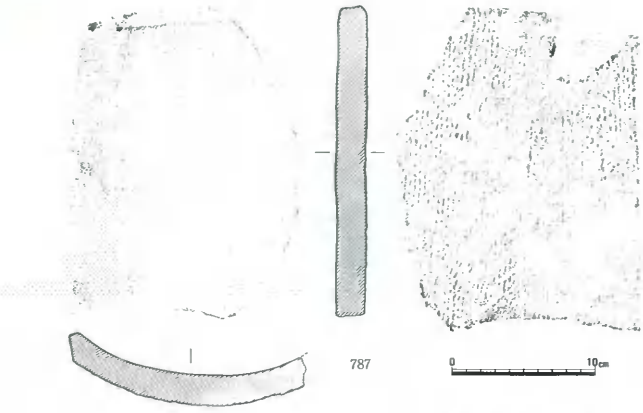
第193図　東斜面出土遺物　(4)（須恵器）

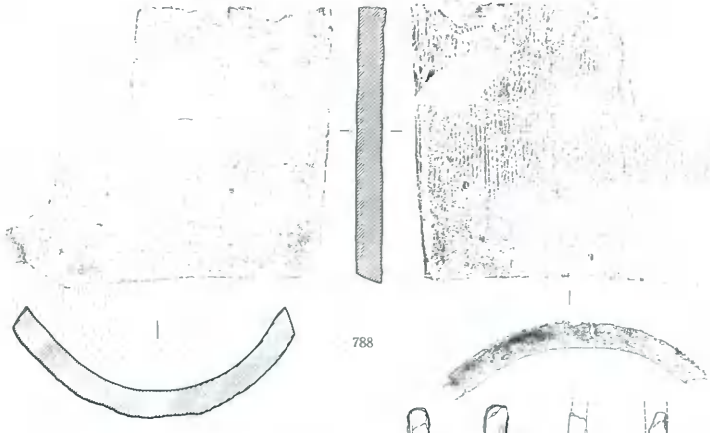


第194図　東斜面出土遺物　(5)（須恵器・瓦）

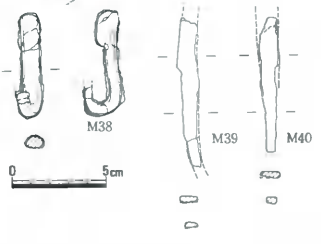


第195図　東斜面出土遺物　(6)（瓦）

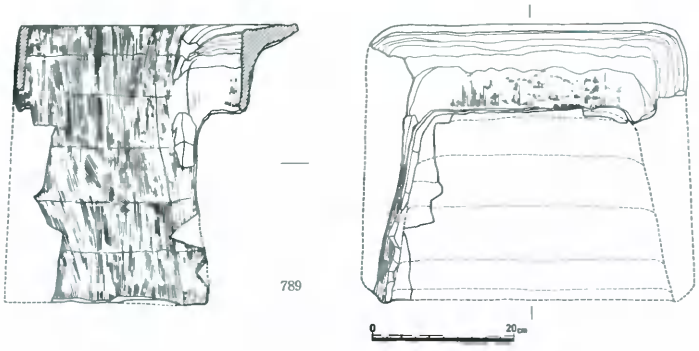




第196図　東斜面出土遺物　(7)（瓦）



第197図　東斜面出土遺物　(8)（鉄釘；1/3）



第198図　東斜面出土遺物　(9)（竈；1/8)

建物－21（第207図、図版137）

建物－22の北側に重なって検出された建物である。南北にやや長い建物で、建物－16・18などと同規模で、小規模な雑舎のような性格が考えられる。柱穴の多くは、径15～20㎝前後の明瞭な柱痕跡が残され、淡黄灰色を呈する。柱穴掘り方の埋め土は、灰黄褐色を呈する粘質土である。

建物－22（第208図、図版137）

建物－21の南側に位置する。桁行３間、梁間２間で東よりに間仕切りをもつ東西棟の建物である。ほとんどの柱穴には、径15㎝前後の柱痕跡が残される。柱穴の底に根石として礫が置かれているものもある。いくつかの柱穴では、柱抜き取りのために掘られた痕跡もみられる。

出土遺物には、798の土師器鍋のほかS18の砥石がある。石材は、白っぽい凝灰岩である。

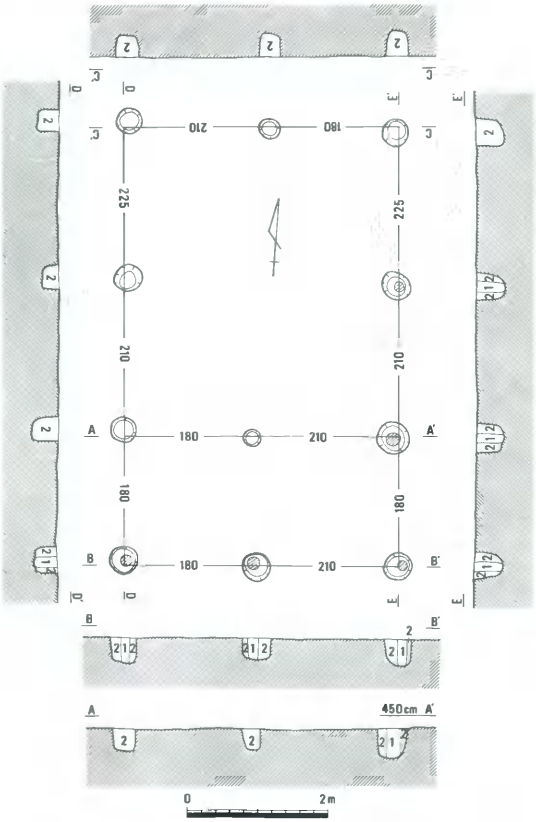
建物－23（第209図、図版134）

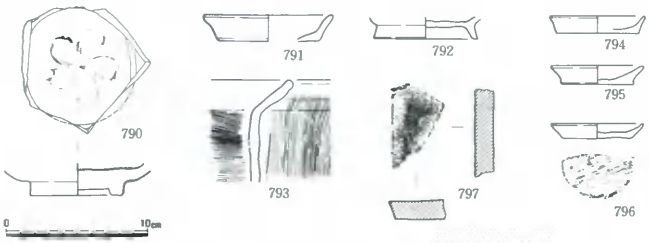
溝－28の南側、建物－24と重複して検出された東西棟の建物で、総柱となる可能性が強い、桁行２間、梁行２間でわずかに東西方向が長い、柱穴の多くには、柱痕跡が残り径15～20㎝前後の円形を呈している。柱穴の中の埋め土や柱痕跡には、炭・焼土が多く含まれている。柱痕跡には、径２㎝前後の大きめな焼土の出土が目立つ。

建物－24（第210図、図版134）

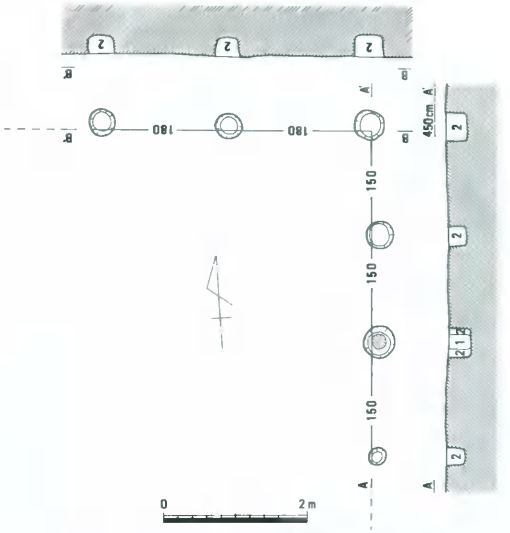
建物－23と重複して検出された、東西方向の建物である。周辺には、大小の土壙が密集して検出されている。桁行は３間、梁間２間でやや小振りな柱穴で構成される。いくつかの柱穴には、柱痕跡がみられ、焼土が多く含まれる。柱の径は15㎝前後を測る。

以上の建物11棟は、すべてが同時期に存在したとは、考えがたい。また、規模も図に示す平

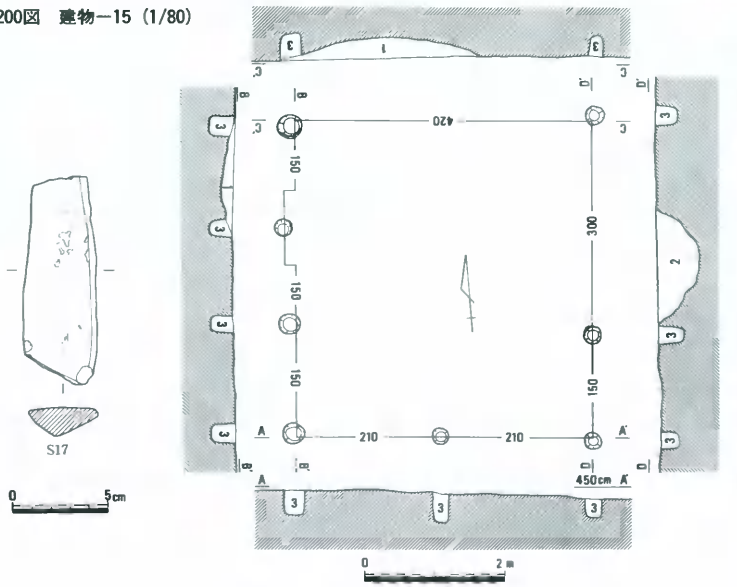




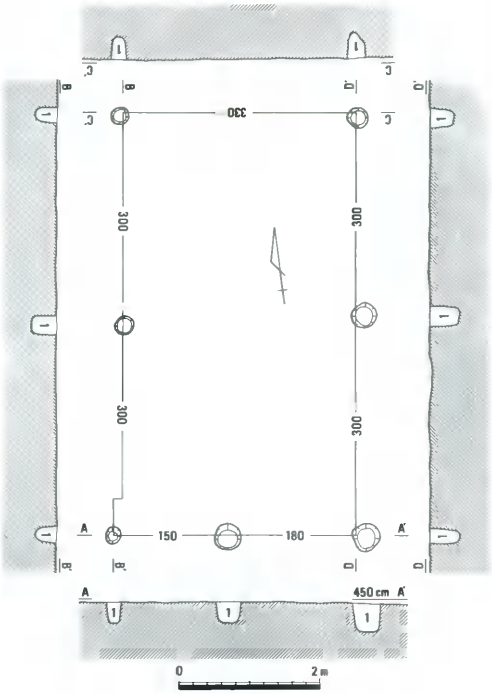
第199図　建物－14（1/80）・出土遺物



第200図　建物－15（1/80）



第201図　建物－16（1/80）・出土遺物（1/3）



第202図　建物－17（1/80）

面形が正しいとはいえない。さらに数棟の建物が復元推定できる柱穴もあるが、限定された調査期間では、実地での検証にはおのずと限界があり、あえて建物を忠実に再現するより、「歴史的遺構を恣意的に創る」愚を回避した。

建物番号を付した建物の大半は、東西あるいは、南北に柱通りや棟方向をそろえるもので、基本的に溝－19・20・26・28などに区画された範囲におさまる。この区画の南限は、溝－18あるいは、溝－25付近の低位部がはじまるあたりと推定される。

土壙－56

（第211図、図版142）

建物－21の中で検出された小型の土壙である。平面形は、いびつな円形を呈し底から２個体の土師器甕が合せ口の状態で出土している。埋積土は暗灰色で、何らかの埋葬あるいは、祭祀遺構の可能性もある。800・801はいずれも底部を欠く。ともに、直線的な体部の外面には、縦方向のハケメ調整が施される。時期的には、土壙－44や東斜面遺構の出土遺物と類似し、平安時代に比定される。

土壙－57（第212図）

溝－28の中ほどの北側で検出された、隅丸方形を示す浅い土壙である。埋積土は、炭を含む淡黄灰色の粘質土である。出土遺物は、土師器小片がわずかにみられる。

土壙－58（第213図）

建物－21の北西隅で検出された円形を呈する、袋状土壙である。貯蔵穴として使用されたものと推定される。

出土遺物は、上層から出土した802～804の土師器皿がある。

土壙－59（第214図）

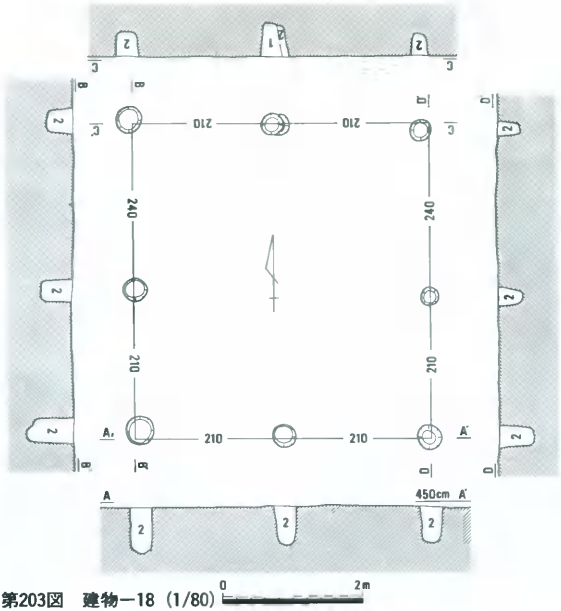
土壙－58に近接して検出された。土壙－58に比べると一回り小さい袋状土壙である。埋積土は、上層に灰褐色土、下層に灰青色土である。出土遺物には、土師器細片がわずかに認められる。いずれも、建物の近くに位置し通常は木蓋で覆って使用された可能性がある。

土壙－60

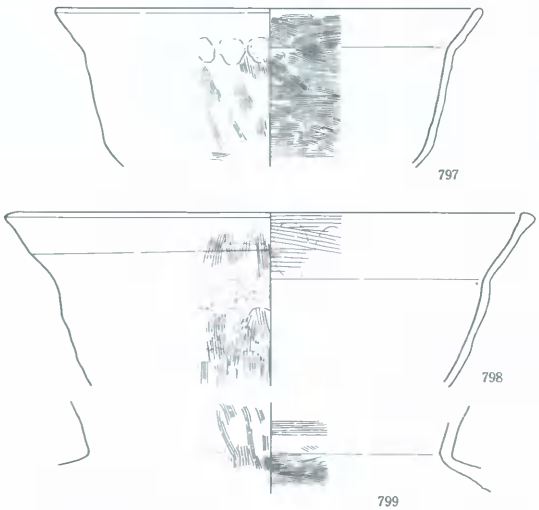
（第215図、図版139）

調査区の中ほど、やや柱穴の密度が低い部分で検出された。2基の土壙が連接するように、溝状の遺構となっている。出土遺物はきわめて少ないが、土師器細片以外に見込みに草花文が描かれた805の青磁碗がある。

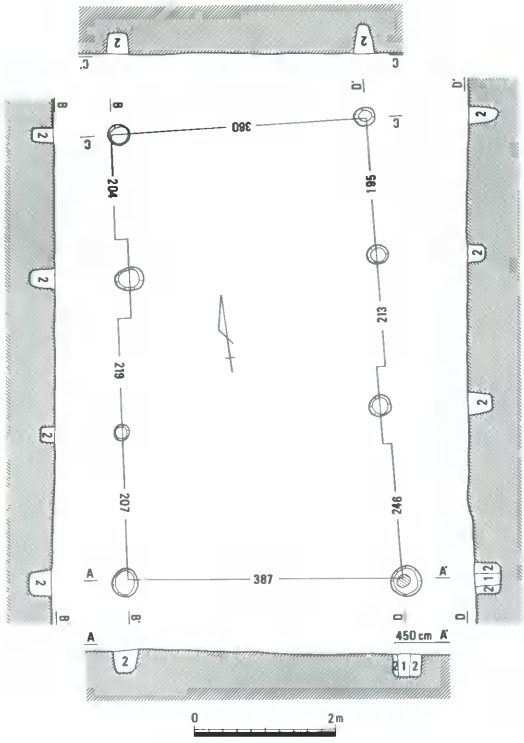
遺構の性格・用途は不明であるが、最下層には粘質土が埋積しており、貯水などの特殊な目的に使われた可能性が強い。ほぼ東西方向に掘り込まれている点からも、区画



第203図　建物－18（1/80）



第204図　建物－18出土遺物



第205図　建物－19（1/80）

内に計画的に配置された土壙と思われる。

土壙－61

（第216・217図）

建物－22の西側で検出された長円形を呈する土壙である。下層には、亀山焼の大型甕一個体分の破片が埋積していた。多くの破片を復元すると第217図に掲げる**806**のように、底部の一部を除く大半を形づくった。体部外面には、格子目タタキが施され、内面には同心円タタキを消すナデ・ハケ調整痕跡がみられる。形状から、底部は丸底と推定され鎌倉時代後半に比定される。

土壙－62（第218図）

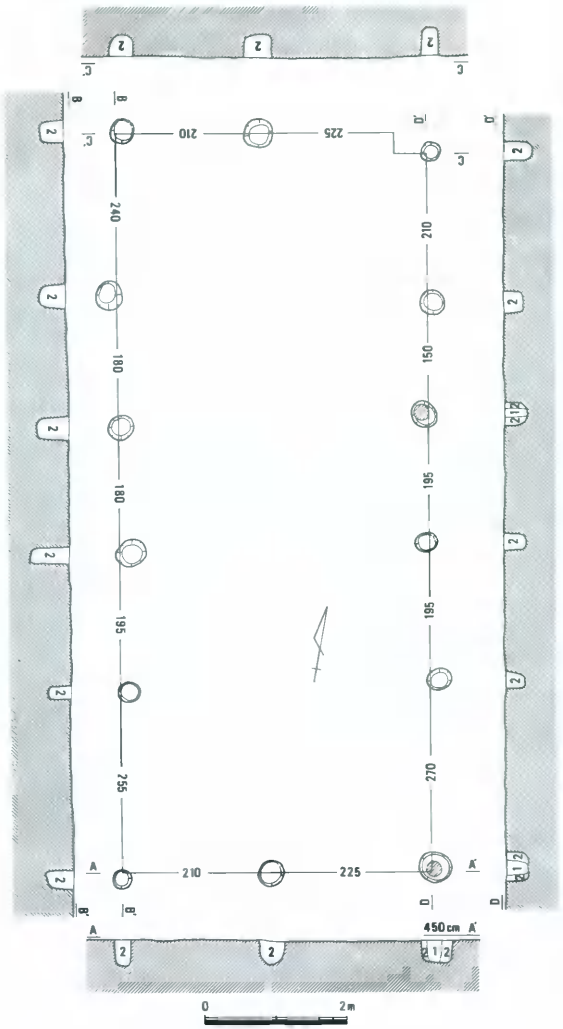
建物－22の東隅で土壙－63と近接して検出された。ややいびつな円形を呈し、炭の細片を多く含む淡灰黄褐色土が埋積する。浅い掘り方の中から、軟質の須恵質の擂鉢**806**が出土している。内面に、横方向の刷毛調整のあと卸目がみられる。外面には、縦方向のカキ目調整が施される。

土壙－63（第219図、図版141）

土壙－62の西、建物－22の内部で検出された。ややいびつな方形を呈し、深く垂直に掘り込まれている。井戸の可能性は少なく、やはり貯蔵穴の可能性が強いと考えられる。出土遺物には、流紋岩製の小型砥石**S19**がある。

土壙－64（第220図、図版141）

建物－16の東に重なって検出された長円形の土壙で、２基重複している。埋積土は炭・灰・



第206図　建物－20（1/80）

小礫を多く含み、全体的に微砂質である。出土遺物には、土師器椀808・甕809があるのみできわめて少ない。

土壙－65（第221図）

建物－19の北西隅で、土壙－66を切って検出された浅い土壙で、丸みをもった方形を呈する。

土壙－66（第222図）

土壙－65に切られる土壙でいびつな円形を呈する。出土遺物には、土師器細片のほか須恵器甕片（亀山焼か）がみられる。

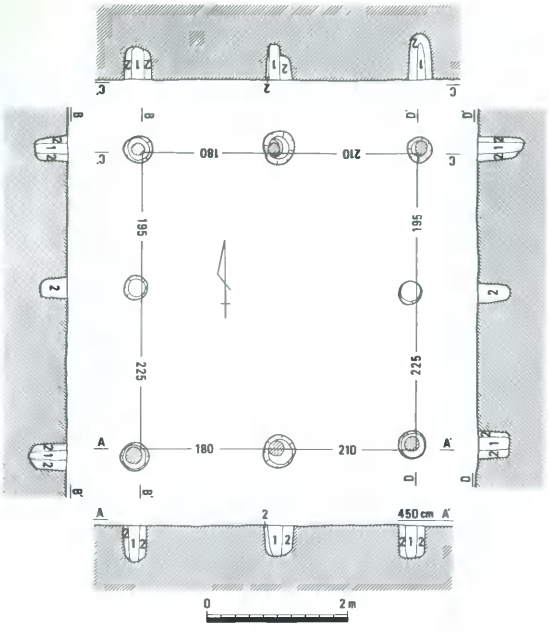
土壙－67（第223図）

建物－19の北側、土壙－69を切って検出された浅い小土壙である。

土壙－68

（第224・225図、図版141）

建物－16の中、土壙－64に切られて検出された、比較的大型の土壙である。下層には、焼土の小塊が多く含まれる。出土遺物には土師器810～813・817・



第207図　建物－21（1/80）

818、須恵質の捏鉢814、甕815（亀山焼）のほか、瓦816がある。

土壙－69（第226図）

建物－19の北側に位置し、土壙－67に切られる。出土遺物には、土師器皿819がある。

土壙－70（第227・228図、図版141）

建物－22の東側で検出された大型の土壙である。やや長円形を呈し、壙底はでこぼこしている。出土遺物には、土師器820～827・832・833、須恵質土器831・832、東播系捏鉢829、亀山焼擂鉢830、備前焼擂鉢834のほか瓦828・835がある。また、流紋岩質砂岩の砥石S20も出土している。鎌倉時代後半以降に比定される。

土壙－71（第229図）

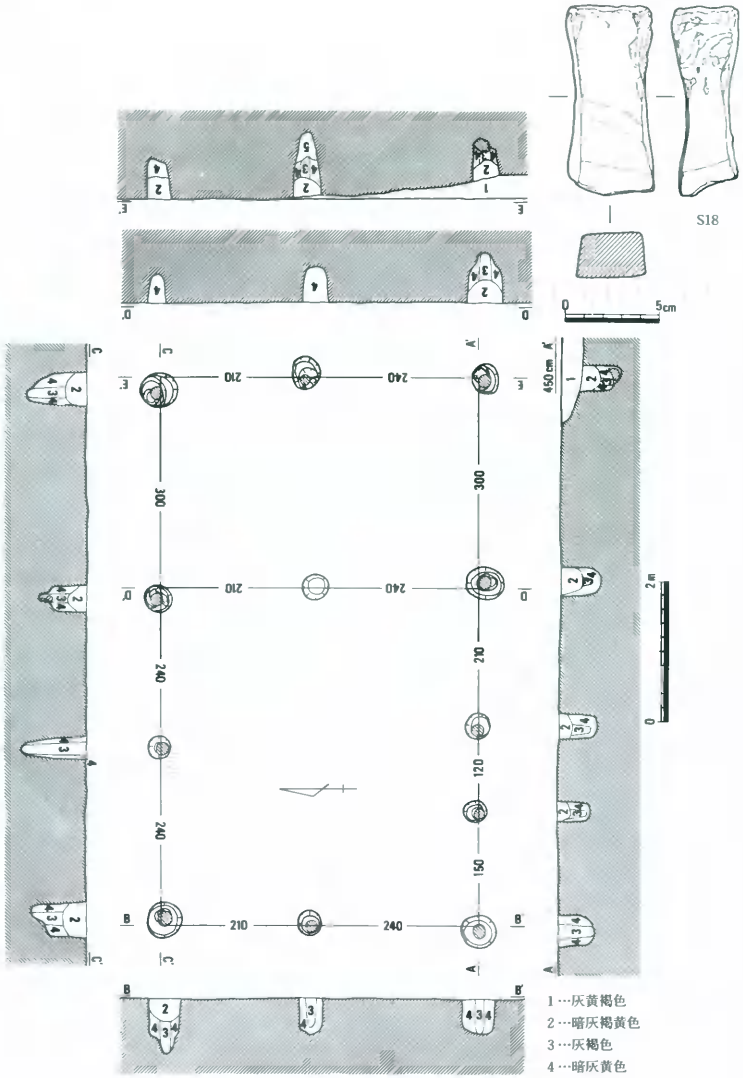
建物－24の東辺で検出された、小土壙である。上層には炭・焼土を含む淡灰褐色土、下層には淡灰黄色土が埋積する。

土壙－72（第229図）

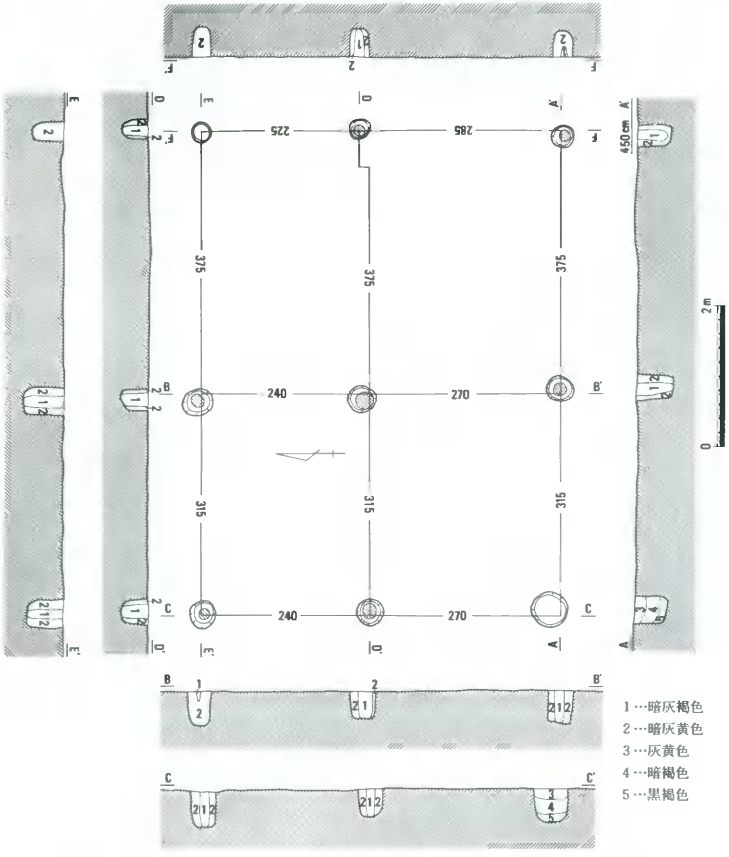
溝－26に切られて検出された、やや長円形の土壙である。上層には、多量の焼土片が含まれている。

土壙－73（第229図）

建物－23の中で、土壙－91を切って検出された。上層には淡黄灰色粘質微砂、下層には淡黄青粘質土が埋積する。



第208図　建物－22（1/80）・出土遺物



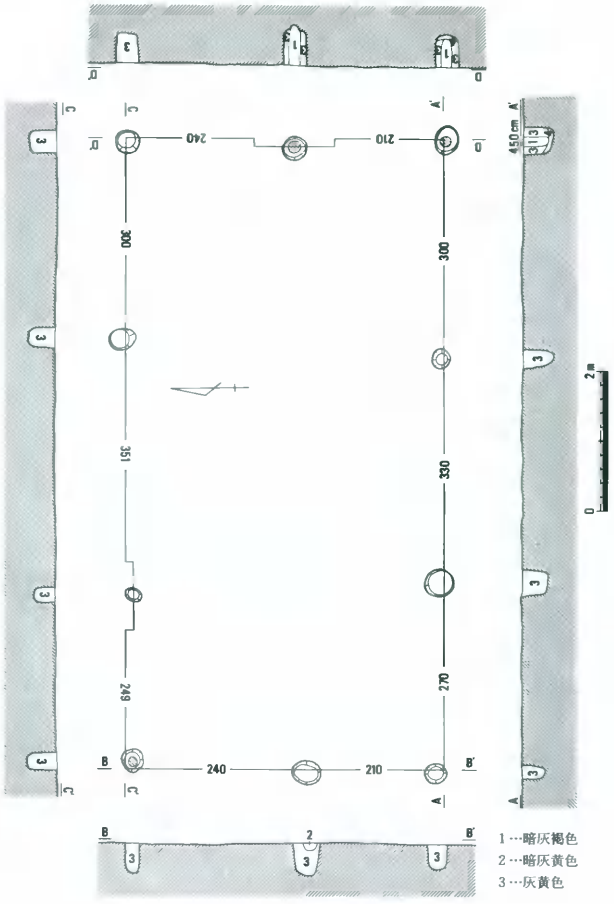
第209図　建物－23（1/80）

土壙－74（第229図）

建物－23の東辺で検出された小土壙である。上層には淡灰褐色土、下層には淡青灰色土壙が埋積する。

土壙－75（第229図）

建物－23の東側、土壙－78と近接して検出された。



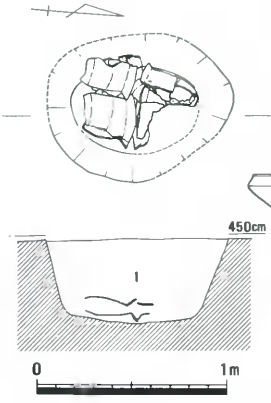
第210図　建物－24（1/80）

土壙－76（第230図）

建物－23の西辺で検出された。上層には淡灰黄褐色土、下層には淡灰黄土が埋積する。

土壙－77（第231図）

土壙－74の北側、建物－23の東よりで検出された。上層には炭・焼土を含む淡灰褐色土、下

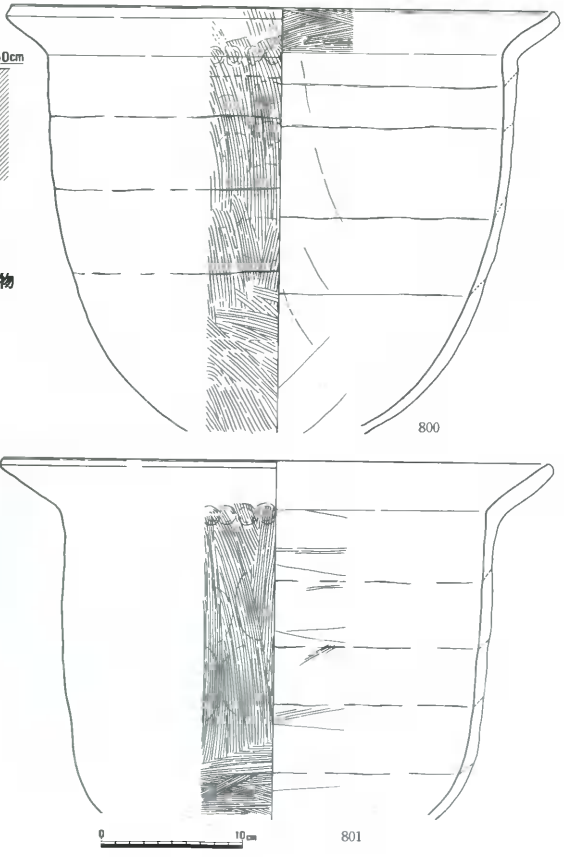


第211図　土壙－56（1/30）
出土遺物

層には淡灰色土が埋積する。

土壙－78（第232図）

建物－23の北東隅、土壙－75と近接して検出された。上層には淡灰褐色土、下層には淡黄灰色の粘質土が埋積する。



土壙－79（第233図）

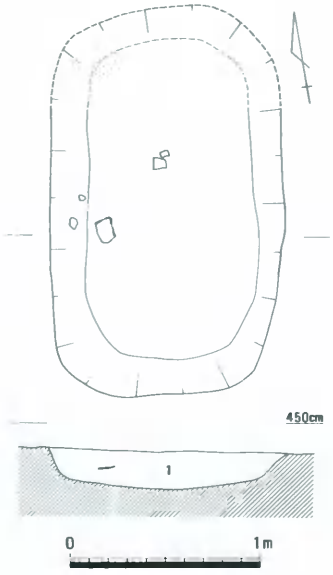
建物－17の北辺で検出された不整形な溝状土壙である。上層には焼土・炉壁片を多く含む暗灰褐色土、下層には小礫・炭を含む暗褐灰色土が埋積する。

土壙－80（第234図）

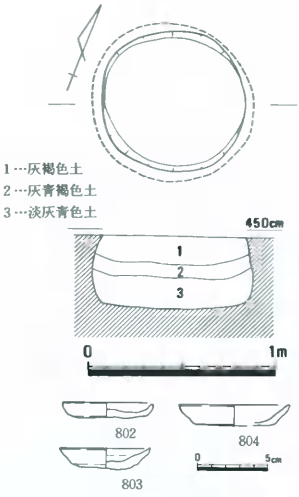
建物－24の中の南辺で検出された不整な長円形を呈する土壙である。南側の壙底は一段下がって円形を示す。最上層には焼土・炭がきわめて多く含まれる。

土壙－81（第235図）

建物－23の北辺で検



第212図　土壙－57（1/30）



第213図　土壙－58（1/30）・出土遺物

出された。上層には、炉壁・焼土・炭を多く含む淡灰褐色土、下層には、炭を含む暗灰色土が埋積する。

土壙－82（第236図、図版141）

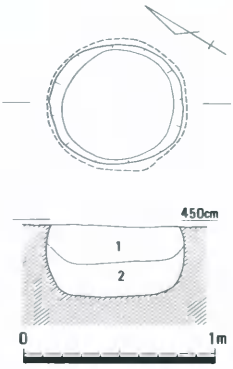
建物－24の南方、土壙－67の北側で検出された大型の土壙である。上層には淡黄灰色粘質土、下層には淡灰青色土壙が埋積する。多くの柱穴に切られて検出された。

土壙－83（第237図）

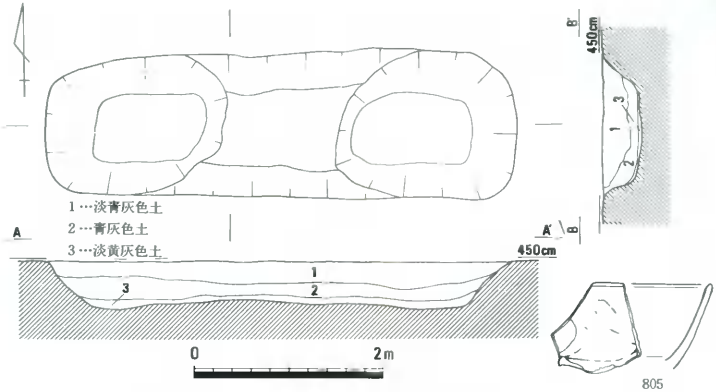
溝－25・土壙－95の西側で検出された長円形の小土壙である。出土遺物には、土師器**837・838**、黒色土器がある。時期的に古く、平安時代に遡る可能性がある。埋積土は、炭を含む淡黄灰色土である。

土壙－84（第238図）

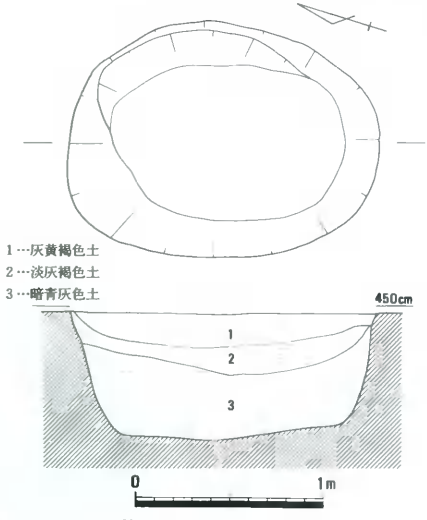
建物－22の西側で検出された。貯蔵穴ともいえる、深く掘り込まれた土壙である。出土遺物には、土師器皿**840**がある。



第214図　土壙－59（1/30）



第215図　土壙－60（1/30）・出土遺物



第216図　土壙－61（1/60）

土壙－85（第239図）

建物－19の北東隅で検出された不整な長方形を呈する土壙である。埋積土は、小礫を含む淡黄褐色土である。出土遺物には、土師器脚台**841**、椀**842・843**がある。

土壙－86（第240図）

建物－19の北東で近接して検出された。埋積土は、淡黄灰色土である。

土壙－87（第241図）

建物－19・土壙－85の北東で検出された。埋積土は、炭を含む淡灰色土である。

土壙－88・89

（第242・243図、図版138）

建物－24の南東隅で検出された２基の土壙で、礫を多く含む土壙－88が、Ｔ字形を呈する溝状土壙－89を切って検出された。出土遺物には、土壙－88から**844**の亀山焼の甕がみられる。体部外面に、格子目タタキが施される。

土壙－90（第244図）

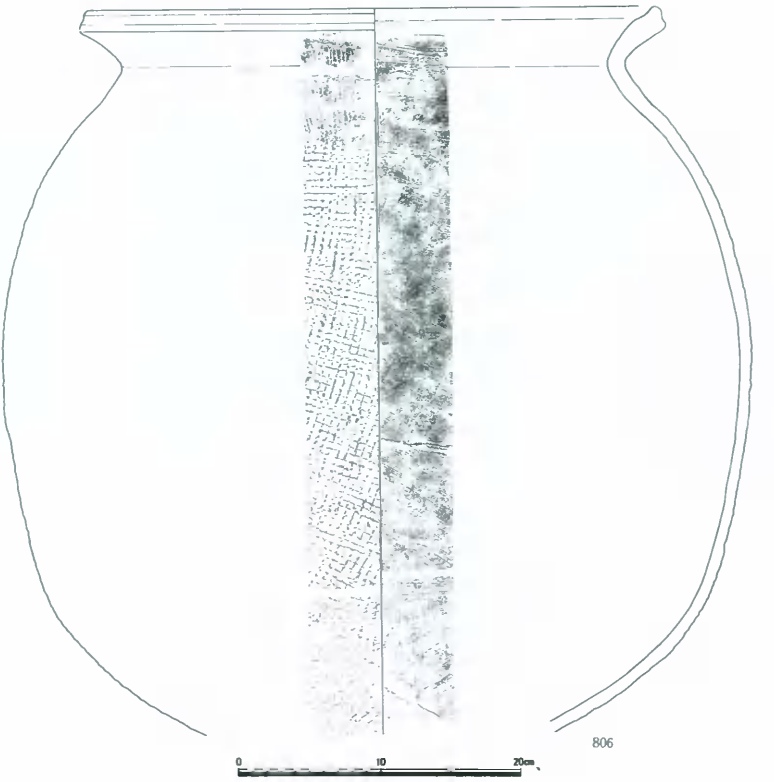
建物－24の北西隅で検出された、やや大型の土壙である。埋積土は、淡黄灰色で出土遺物には土師器鍋**845**がある。

土壙－91・92（第245・246図、図版134）

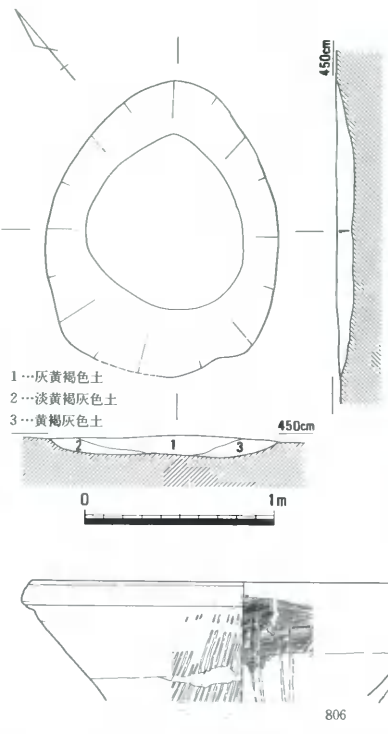
土壙－82の北側で検出された２基の土壙である。土壙－91の下層には、礫が多く含まれる。土壙－91の出土遺物には、**846**の土師器甕がある。

土壙－93・94（245・247図、図版134）

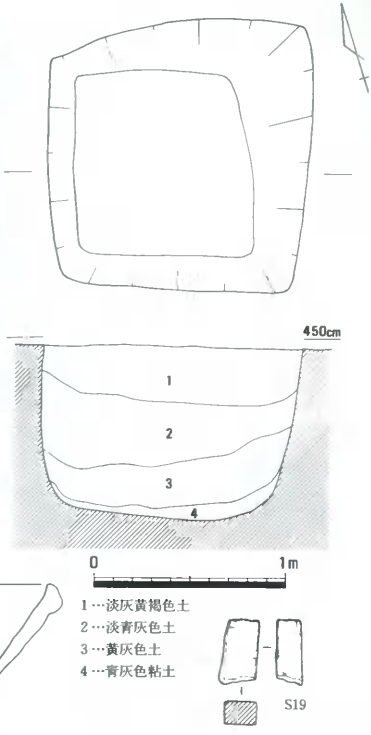
溝－26の東に近接して検出された２基の土壙で、円形を呈する土壙－93が土壙－94を切る。



第217図　土壙－61・出土遺物（亀山焼）



第218図　土壙－62（1/30）・出土遺物



第219図　土壙－63（1/30）・出土遺物

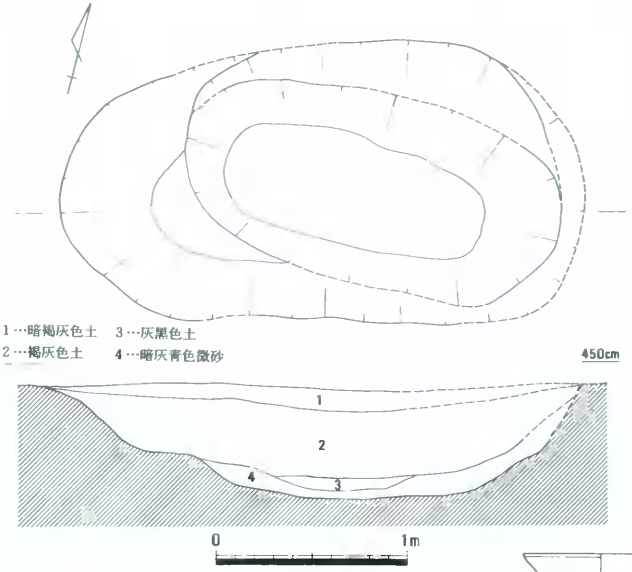
土壙－93の埋積土は黄灰色土、土壙－94は、淡黄色灰色土である。土壙－93からは、土師器甕**848**・椀**849**が出土している。

土壙－95（第248図）

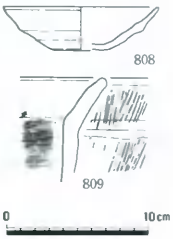
溝－25のすぐ北側で検出された。壙底には炭・焼土が埋積する。東斜面遺構のちょうど肩口にあたる。

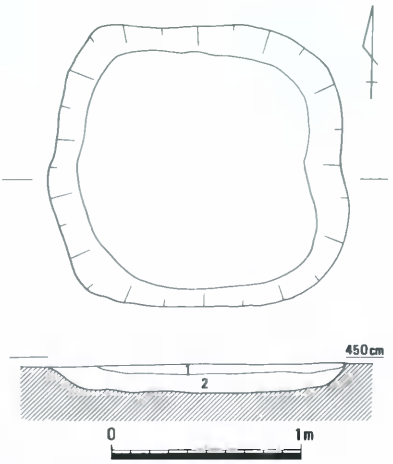
土壙－96（第249図、図版142）

溝－26の西側、建物－20の西の一部と重なって検出された大型の土壙である。上層には小礫・細砂・を含む暗灰色土、下層はややグライ化した黒灰色土が埋積する。出土遺物には、**850**の土師器皿がある。



第220図　土壙－64（1/30）・出土遺物

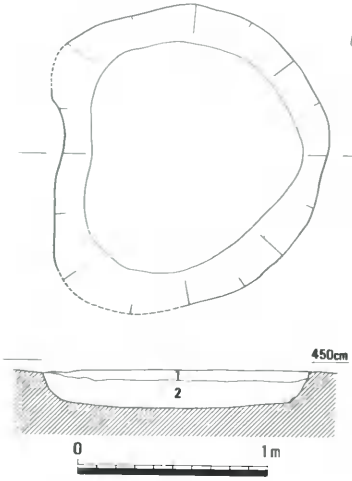




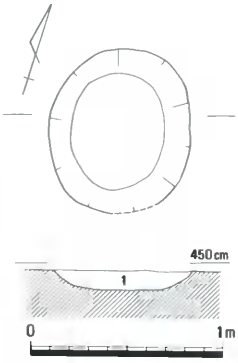
第221図　土壙－65（1/30）

集石遺構－4（第250図、図版140）

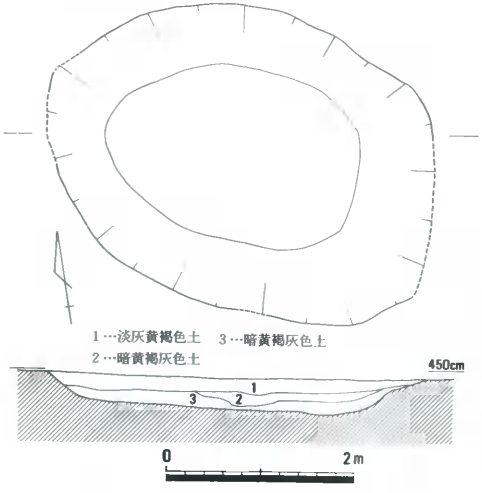
建物－27付近で発掘着手初期に検出された。70×170㎝の範囲に花崗岩を主体にした集石遺構である。出土遺物には、**S14**の石臼がある。直径26.5㎝、高さ8～10㎝を測る。花崗岩製で軸木を挟み込む貫通孔が中心よりややずれた位置にある。裏面には、放射状の刻線が彫られる。ほかに、中世に比定される土師器鍋片が少量みられる。



第222図　土壙－66（1/30）



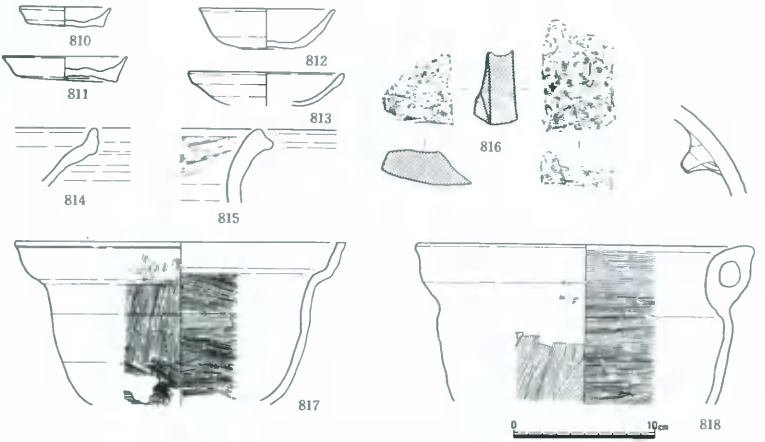
第223図　土壙－67（1/30）



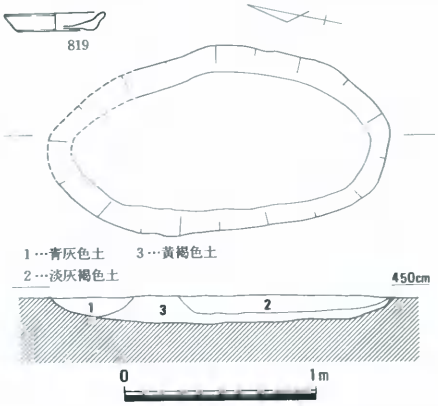
第224図　土壙－68（1/30）

以上、土壙群について概略を述べた。土壙の大半は、鎌倉時代から室町時代にかけてものが圧倒的に多く、わずかに平安時代に遡る遺構も残存しているようである。建物群との共存関係は遺構の切り合いが複雑で、しかもすべての遺構や柱穴から遺物が得られるわけではないので、明快に断定できないのが実情である。

古代に比定される遺構以外では、第251図に掲げる小土器溜りから出土した一括遺物があるので補足しておく。**851**は、須恵器椀で直線的に外方する体部が特徴的である。**852**は、やや小型の土師器杯、**853・854**はやはり土師器椀である。土壙－37出土の**269・270**などに類似する土師器で、９世紀末から10世紀代にかけての時期が比定される。



第225図　土壙－68出土遺物



第226図　土壙－69（1/30）・出土遺物

以下、溝について説明を加える。

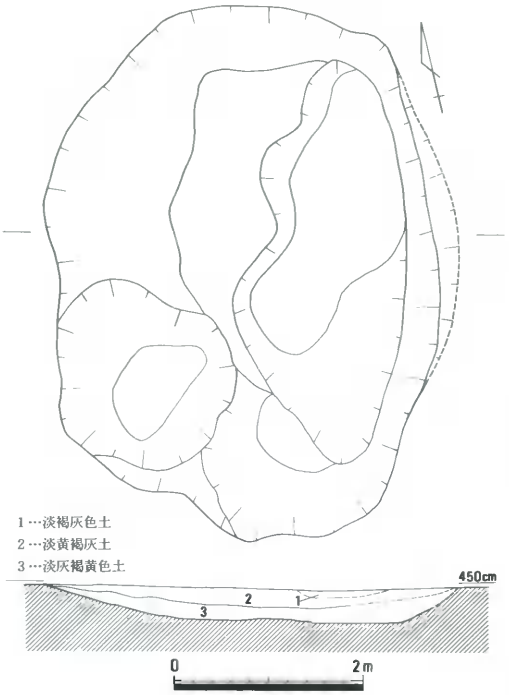
溝－25

（第135・188・189図、図版135）

調査区の東端の微高地肩部に位置する、弧を描く溝である。この溝から東では、中世以前の遺構はまったくみられず、低位部に移行する。溝は徐々に埋積したと推定され、埋積土は、礫を多く含む微砂質の褐灰色土である。溝底からは、青磁碗片が出土している。鎌倉時代後半から室町時代前半にかけて存続・機能した溝と考えられる。なお、第261図の輸入染付皿は、この溝の東よりの南で検出された杭穴から重なって出土したものである（図版147・171）。

溝－26（第252・253図、図版134）

ⅣA区から続く南北方向の浅い溝である。ⅣB区での断面形は、図に示すように、逆台形を呈する。溝－19・28が区画するL字形の区画内をさらに仕切るように掘られている。この溝－



第227図　土壙－70（1/30）

26より東側の方が、建物の数も多い。埋積土は、淡黄色灰色を呈する粘質の微砂でわずかに炭・焼土を含む。出土遺物には、土師器小皿855・856、吊り手状の環がつけられた土師器鍋856のほか、見込みに草花文を描く青磁碗857などがある。

溝－27（第254図、図版138）

建物－19と重なって検出された、深さ約20cmほどの浅い溝である。ほぼ南北方向を示し、南方で徐々にレベルを下げて消滅する。断面形は、凸レンズ形を呈し、焼土片を含む淡黄灰色土が埋積する。

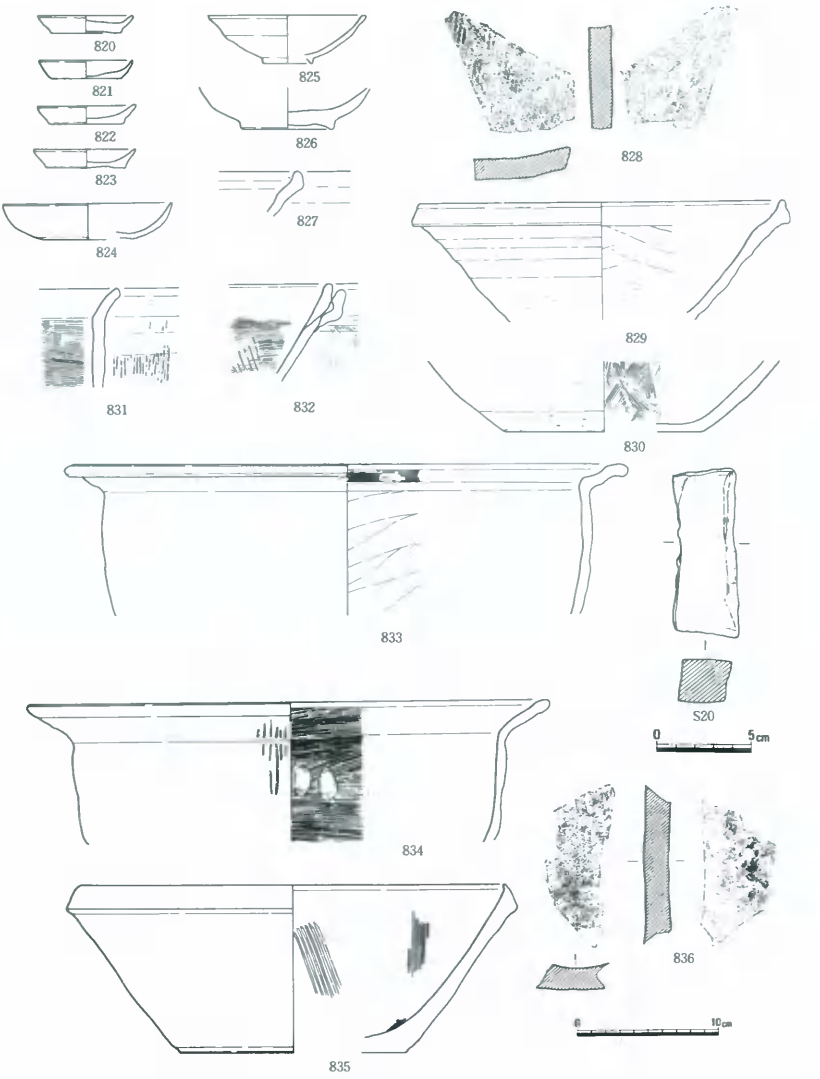
溝－28

（第255・256図、図版134）

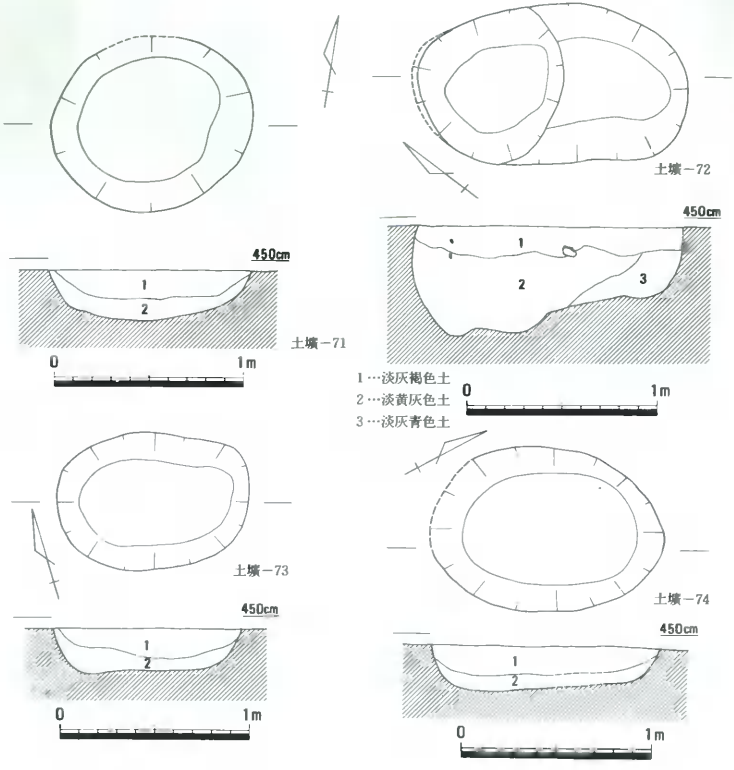
ⅣA区の溝－19の北コーナーから東西に延びる、検出全長50mを越える大規模な遺構である。淡灰青色を基調とする粘質土が埋積する。上層より下層の方が粘性が強い。出土遺物には、859～862の土師器がある。体部が直線的に外方する土師器杯で、底部が穿孔されている。860は、脚台の可能性がある。

以上、主要な遺構について概述した。以下、包含層などからの出土遺物について補足的に説明を加え、土錘・鉄製品については、丸田調査区全体の出土遺物についてまとめて掲載することとした。

ⅣB区では、南端に旧河道が存在するため、古代以前の出土遺物がかなりみられた。第257図では、おもに南端地区、第258・259図では、微高地部分の出土遺物について掲載する。石器の出土はまったく確認されなかったが、土器には第257図に掲載する弥生時代中期から後期にかけての高杯863・868、甕865、器台866・867、壺864などがある。いずれも器壁は、かなりの摩滅を受けている。古墳時代の遺物としては、すでにⅠ農区土壙－12出土須恵器139・140、Ⅱ

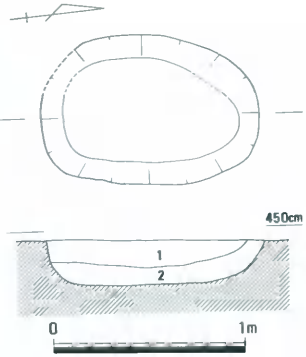


第228図　土壙一70出土遺物（1/4・1/3）

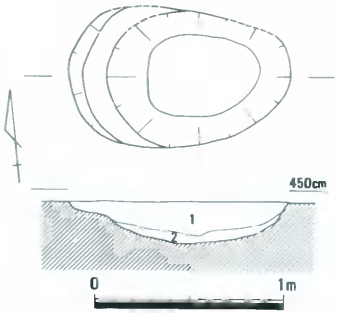


第229図　土壙－71～75（1/30）

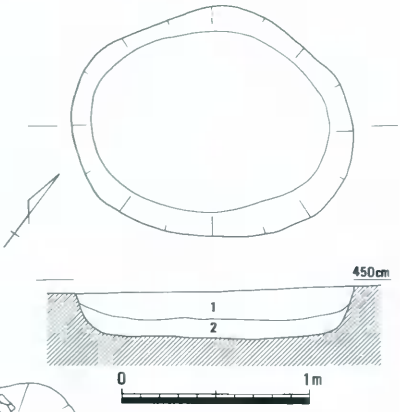
区包含層出土の須恵器器台227、円筒埴輪228、井戸－３出土の円筒埴輪329などを紹介してきたが、本調査区でも円筒埴輪の出土遺物がある。869は、内面にヨコハケ調整痕を残す小片である。須恵器は、平瓶920、壺875・919、甕876・877、大甕880などがあるが、一部は奈良時代に降る可能性もある。甕の内面には、いずれも同心円タタキが施される。奈良時代以降では、稜椀870、鉄鉢形鉢921、蓋922、壺871～874、杯878、椀879・923・924



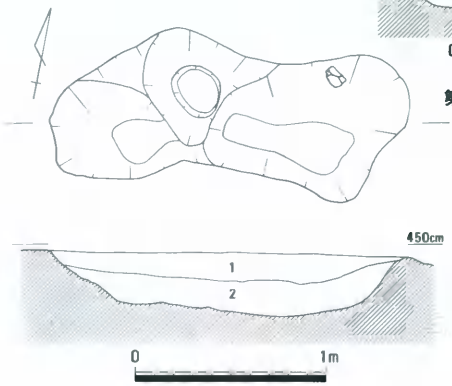
第230図　土壙－76（1/30）



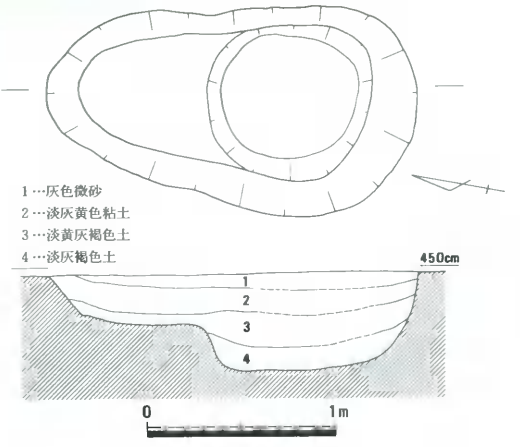
第231図　土壙－77（1/30）



第232図　土壙－78（1/30）



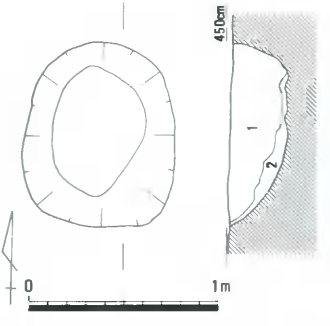
第233図　土壙－79（1/30）



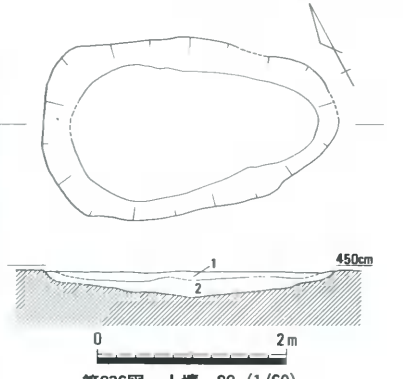
第234図　土壙－80（1/30）

などがある。921は、比較的出土例が少ない器種で、寺院あるいは、官衙からの出土が多い点が注目される。

土師器は、奈良時代から中世にかけて広い範囲で出土している。古代では、高杯925、杯933・936～940、皿931～936、椀943～947などの小型器種のほか、甕948・949がみられる。黒色土器は、椀(881～884)がもっとも多く、すべて内面のみ黒色を呈するいわゆる黒色土器Aである。高台



第235図　土壙－81（1/30）

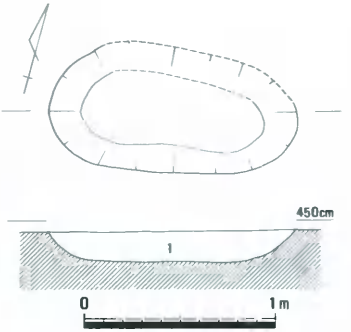


第236図　土壙－82（1/60）

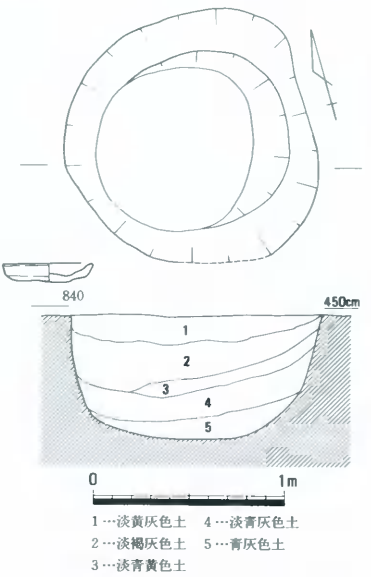
のみの882の外底部には、「川本」と墨書されている。「本」は、「大」の下に「十」を書き加えた筆運びが看取される。姓あるいは、地名の可能性がある。

施釉陶器は、遺構出土のものについてすでに触れたが、包含層からの出土では、緑釉陶器が少なからず見受けられる。器種には、皿・椀がみられ、926は輪花皿である。927・928・930は皿、929は、椀の可能性がある。高台はすべて削り出しである。

中世の土師器では、やはり椀・脚台・皿などの小型器種に加え、鍋・甕などの煮沸用の大型器種がある。椀885～889は、やや古いタイプの早島式の椀で、小口径化して890、891へと変化



第237図　土壙－83（1/30）・出土遺物



第238図　土壙－84（1/30）・出土遺物

し、さらに高台がなくなる、892～894・910に到達する。918は、環状の内耳をもつ鍋である。

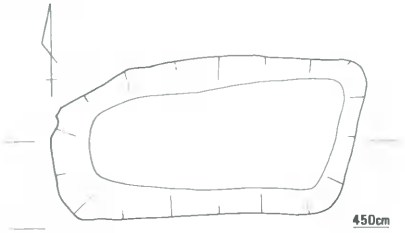
次に、もっとも多い遺構、柱穴からの出土遺物について触れてみよう。第260図に掲げる遺物のなかには、C8の轆の羽口がある。小片は、ⅣA・B区で多くみられる。

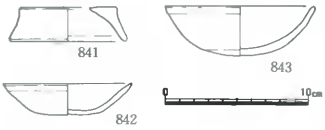
施釉陶器は、古代に比定される柱穴からの出土し、皿950、椀951がある。須恵器では、鉢952があるが、古墳時代に比定される可能性がある。968・969は瓦質で、前者は火舎、後者は内外面にハケ調整が施された壺と考えられる。土師器は、皿（953～961）がもっとも多く、ついで鍋・甕（971～975）などの破片が埋積することが多い。なかには、975のように完形に復するものもみられる。またⅣA区でみられたように、970のように瓦が抜き取り穴に埋められるような例もしばしばみられる。東斜面から出土したものと形状は一致する。

以上の出土遺物の大半は、古代から中世にかけての時期に比定される。

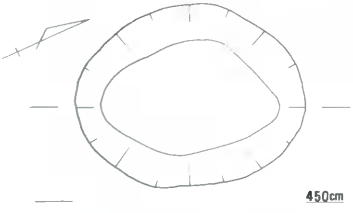
第261図は、溝－25の南東方で出土したすべて完形で、同じ法量の染付陶器皿で、いずれも見込みには、2条の青色の線が巡る。また体部外面に青色の草花文が巡るもの（976～979）もある。16世紀代に中国から輸入されたものとされる。

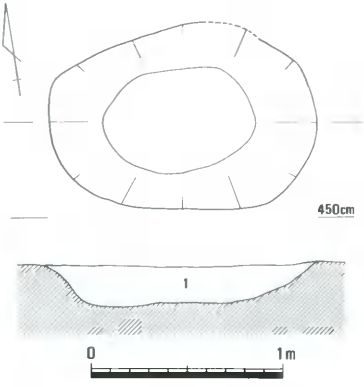
第262図C9～C26は、Ⅰ～Ⅳ区にかけて出土した土錘で、遺構から出土しているものと同じ棒状単孔のものである。C9には、孔から紐を結ぶための細い溝が刻まれている。





第239図　土壙－85（1/30）・出土遺物

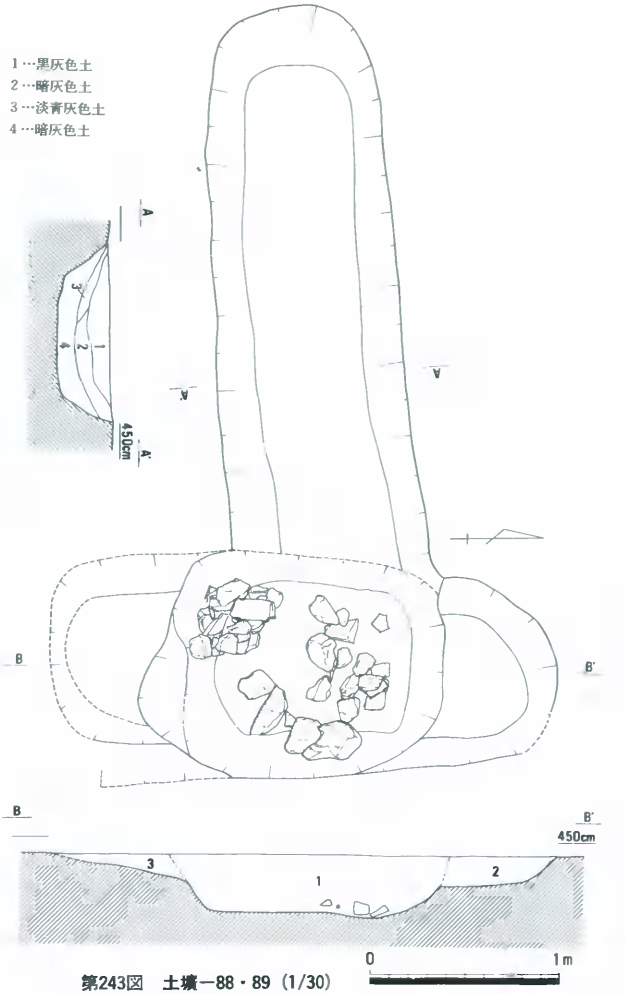




第241図　土壙－87（1/30）

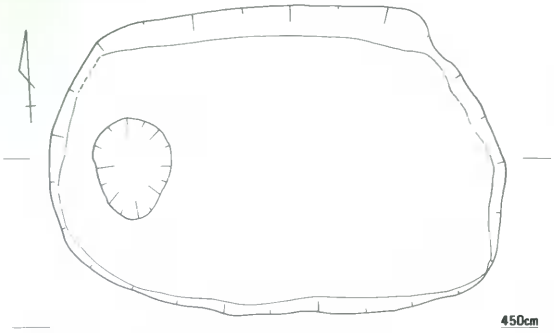
第240図　土壙－86（1/30）

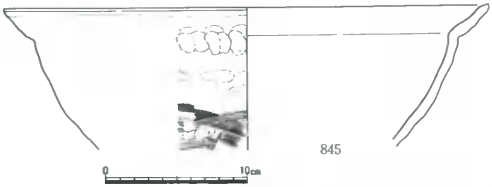
第242図　土壙－88（1/30）
・出土遺物



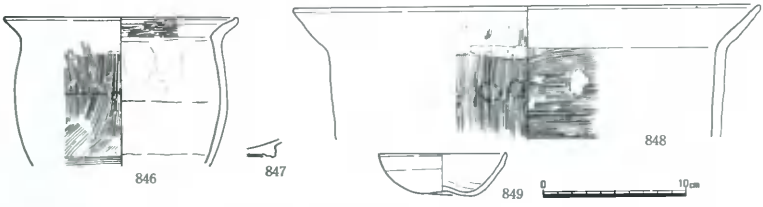
第243図　土壙－88・89（1/30）

第263図は、ⅣA・B区で出土した砥石・銭貨である。**S21～23**は、流紋岩の熔岩製である。**S24**は、上部に鈕状の紐通しの孔があり、携帯用の砥石であった可能性が強い。石材は、流紋岩の熔岩である。





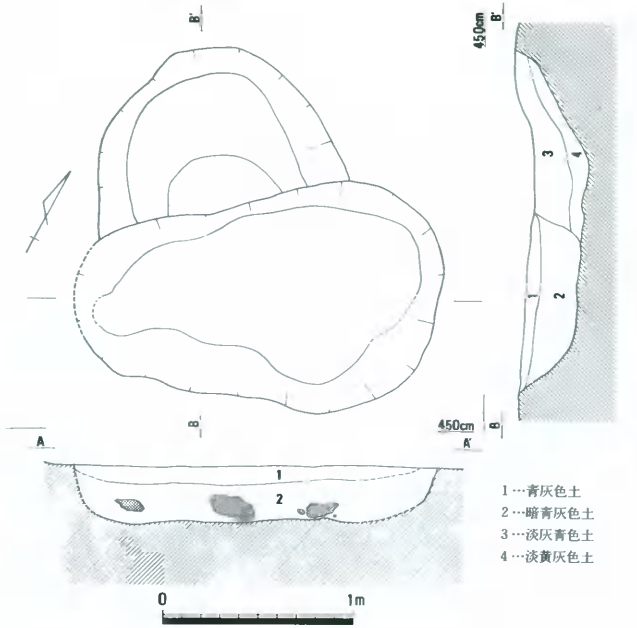
第244図　土壙－90（1/30）・出土遺物



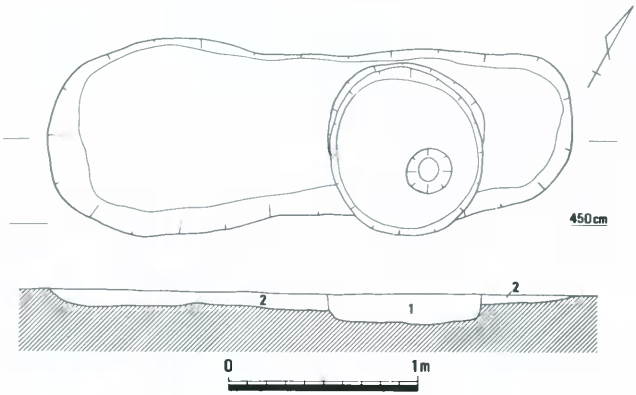
第245図　土壙－91・93出土遺物

銭貨は、表２に掲げるように、大半が宋銭であるが、M54は明銭である。第184図に掲げる銭差しに連なった緡銭（M55）は、建物－22の北西方1.5ｍで立位の状態て出土したもので、省百法により、元豊通宝をはじめとする宋銭96枚が連らなっている。出土状態のまま保存しているため、すべての銭種は確認していない。一番上には、緡縄の端がわずかに残っている。土中に埋めて隠匿された可能性もある遺物である。（図版148）

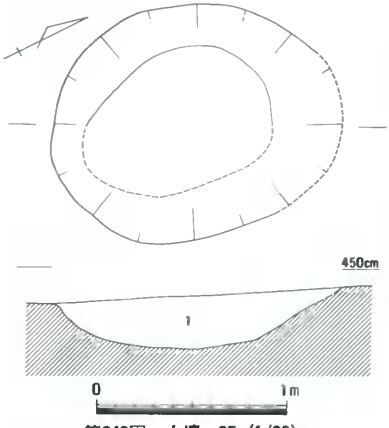
第265・266図には、Ⅰ～Ⅳ区の包含層から出土している鉄器である。圧倒的に多いのは、釘で長さ２㎝あまりの小型のものから18㎝に達する大型のものがある。身の断面は、大半は方形を呈する角釘である。M83・84は楔あるいは、鏨の可能性がある。M82は、針の可能性がある。M86は、鑿であろう。M85は小型の銛の可能性がある。M87～90は、紡錘車である。３点には鉄芯が遺存する。M91は、火打ち金と推定され、



第246図　土壙－91・92（1/30）



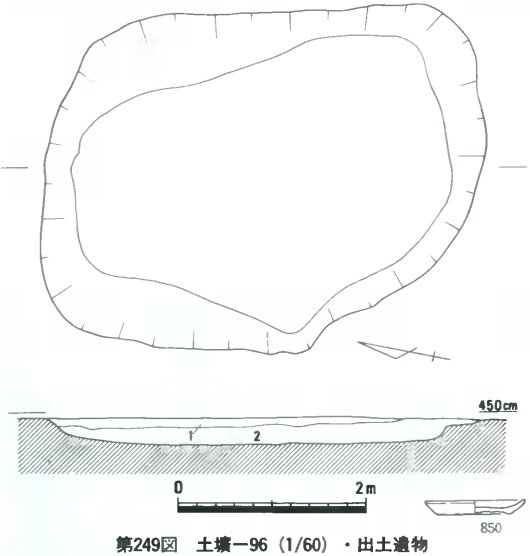
第247図　土壙－93・94（1/30）



第248図　土壙－95（1/30）

土壙墓－6出土のM32に類似する。M92は、両端を丸いボルトで固定する金具である。M93は、両端に小孔を穿つ留金具である。武器としては、M94～98の鏃がある。それらの中には、方頭の鏃もある。M96・98は、きわめて鋭利な実戦的な形状を示す。前者には、鏑が明瞭に看取される。M99・100は、鏃と考えられる。M101～107は、太刀の切っ先をはじめとする、刀子などの茎片を含む武器の断片である。M102・103には、目釘孔が観察できる。

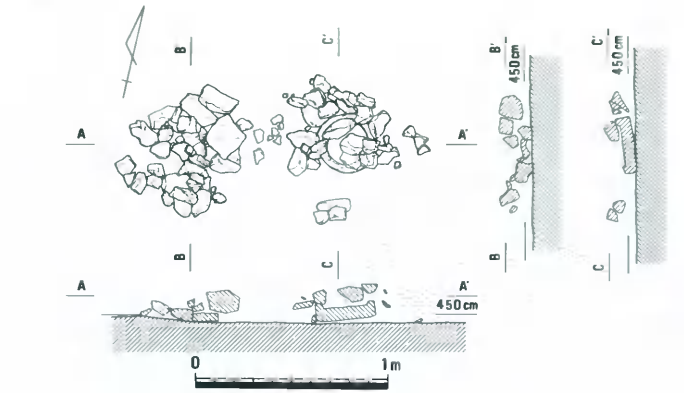
以上、包含層・柱穴などからの出土遺物について概要を述べた。

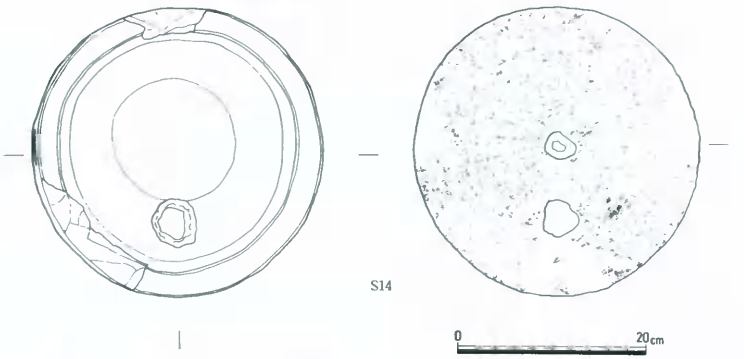


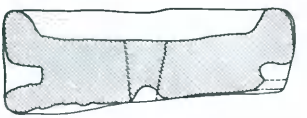
第249図　土壙－96（1/60）・出土遺物

4．小結

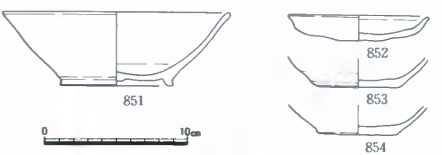
8000㎡を越える広大な調査区の発掘調査は、一度に全面の調査を行なうことはできず、7調査区に分割して、比較的短期間に調査の完了を迫られたものであった。遺構の精査や記録保存の不十分な点もあるが、とりわけ建築遺構の復元的な再現については、調査担当者の力量不足に加え、あまりにも時間が不足していたといえる。多量の遺物についても、報告書の作成にかかる整理期間は短く、調査担当者（報告書執筆者）が実際に手にとって確かめることができた時間はわずかであった。発掘調査が報告書の刊行をもっておわるとすれば、いささか心残りな点がある。



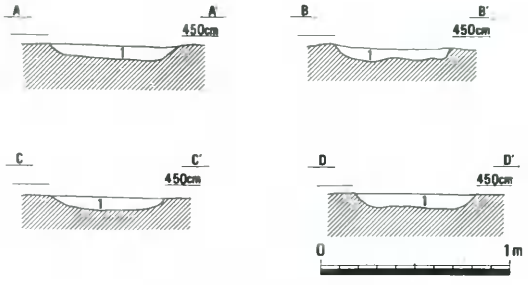




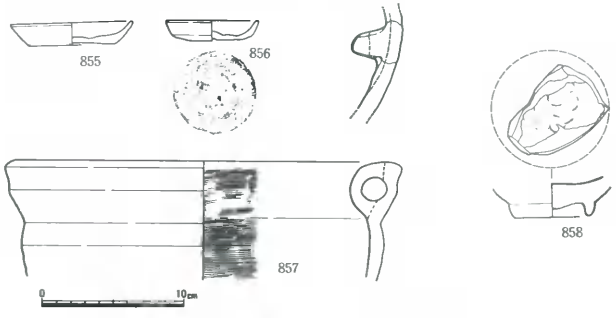
第250図　集石遺構－4（1/30）・出土遺物（1/6）



第251図　小土器溜り出土遺物



第252図　溝－26断面図（1/30・1/4）

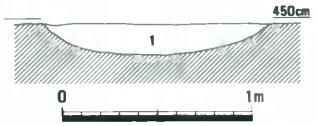


第253図　溝－26・出土遺物

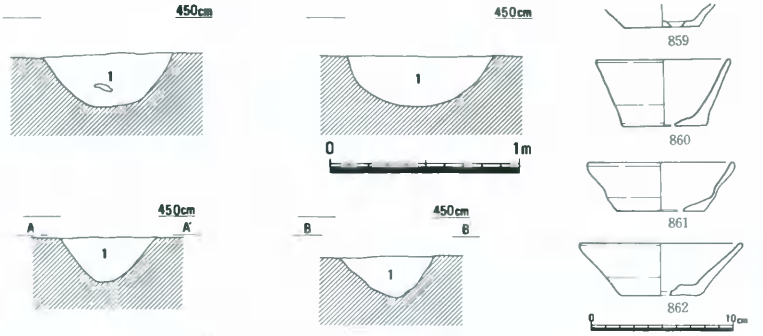
今回の発掘調査によって得られたいくつかの事実について、今後の検討課題ともいえる点をも考慮しつつ、補足説明を加えたい。

まず、遺跡地の時期的にみた遺構群の変遷について整理しておく。全体図で掲げるように、もっとも古い遺構は、平安時代前半（９世紀代）に比定される格子目状溝で、おもに微高地上で検出された。低位部では、対応するかのように直線的な溝だけ検出されているが、いずれも農業に関わる遺構と考えてよいだろう。蔬菜などを栽培する畑作も盛んになる時期でもあり、当時の社会を支える生産基盤として注意される。また、農業技術の発達により二毛作など、裏作に伴う溝である可能性もある。格子目状溝は、南方約400ｍの中屋調査区（ジャンクション部分の調査区[区5]でも、やはり微高地上で検出されている。

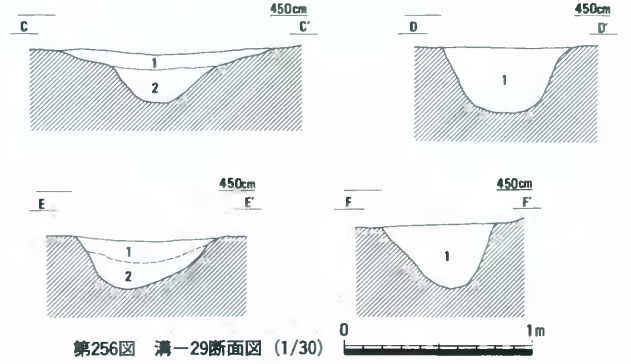
平安時代中ごろ以降になると、溝－１をはじめ土壙－44、東斜面遺構などに代表される遺構が検出された。溝－１は、何らかの施設を区画する溝と考えられる。出土遺物も多量の黒色土器をはじめ、斉一性に富む各種の土師器など貴重な一括資料が得られているが、特に土壙－44



第254図　溝－27断面図（1/30）

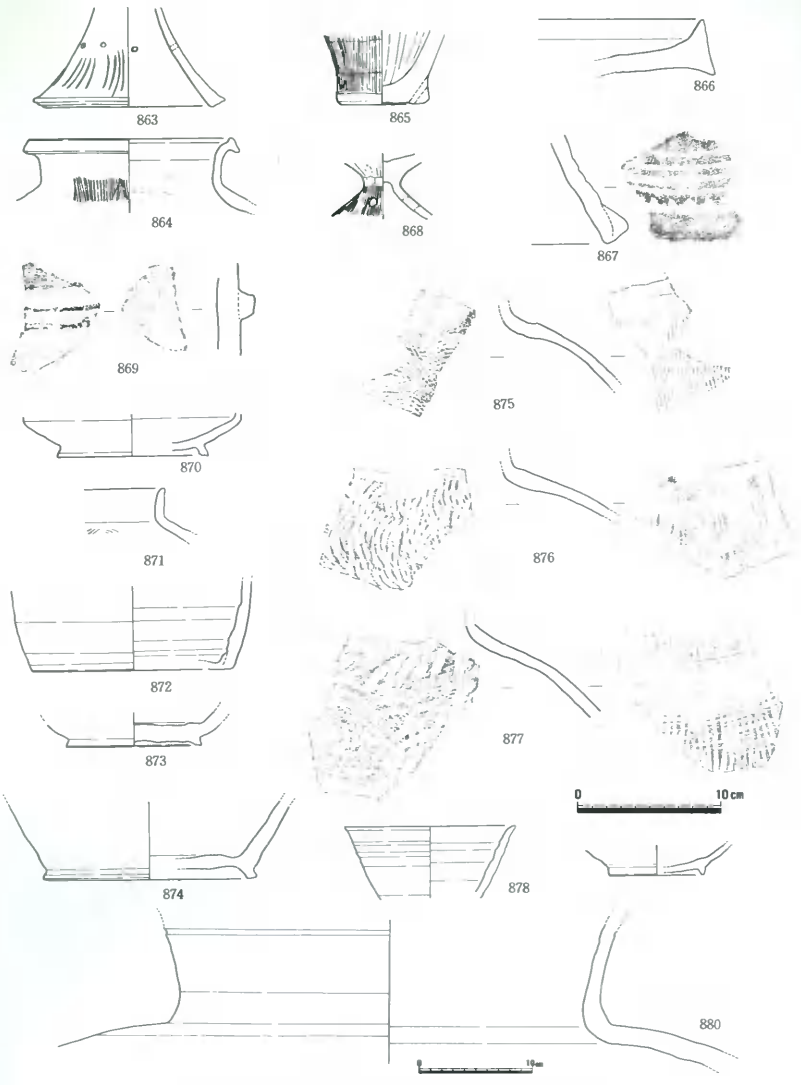


第255図　溝－28断面図・出土遺物（1/30）

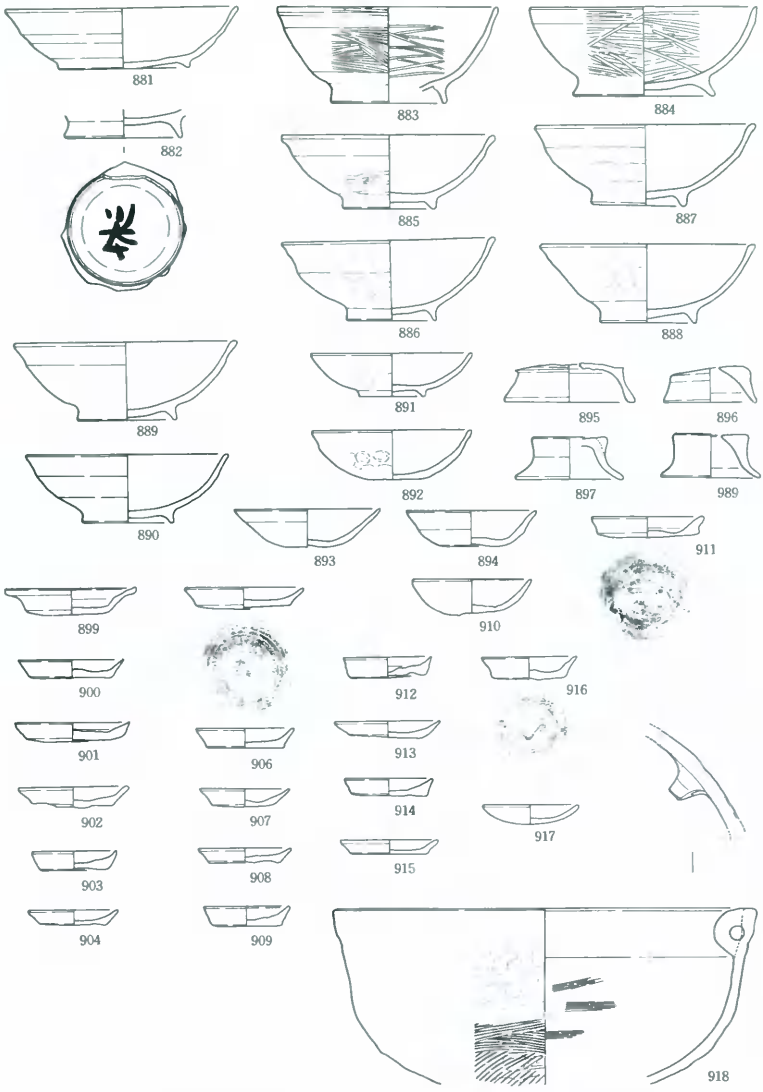


第256図　溝－29断面図（1/30）

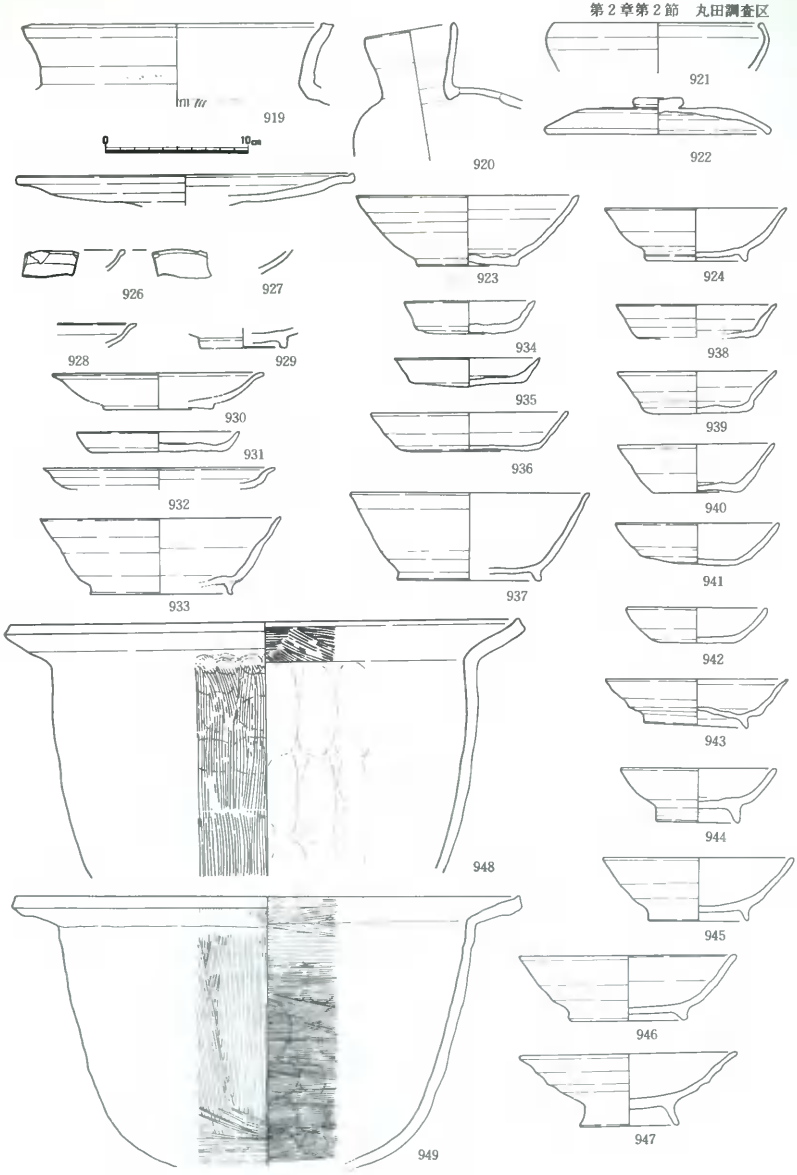
から発見された炭化穀物は、多くの問題を提起している。おそらく、公的な施設に保管されていた穀物と推定され、火災によって焼失した後、廃棄されたものと考えられる。火災については、不正の発覚をおそれての放火あるいは、失火など不測の事態によって引き起こされた可能性が強いとみられる。穀物は、コメよりもムギの量が多く、加えてエゴマや豆類など、多様な生産物がみられた。コメには、芒が付いたままのいわゆる穎稲が、わずかながら認められる点



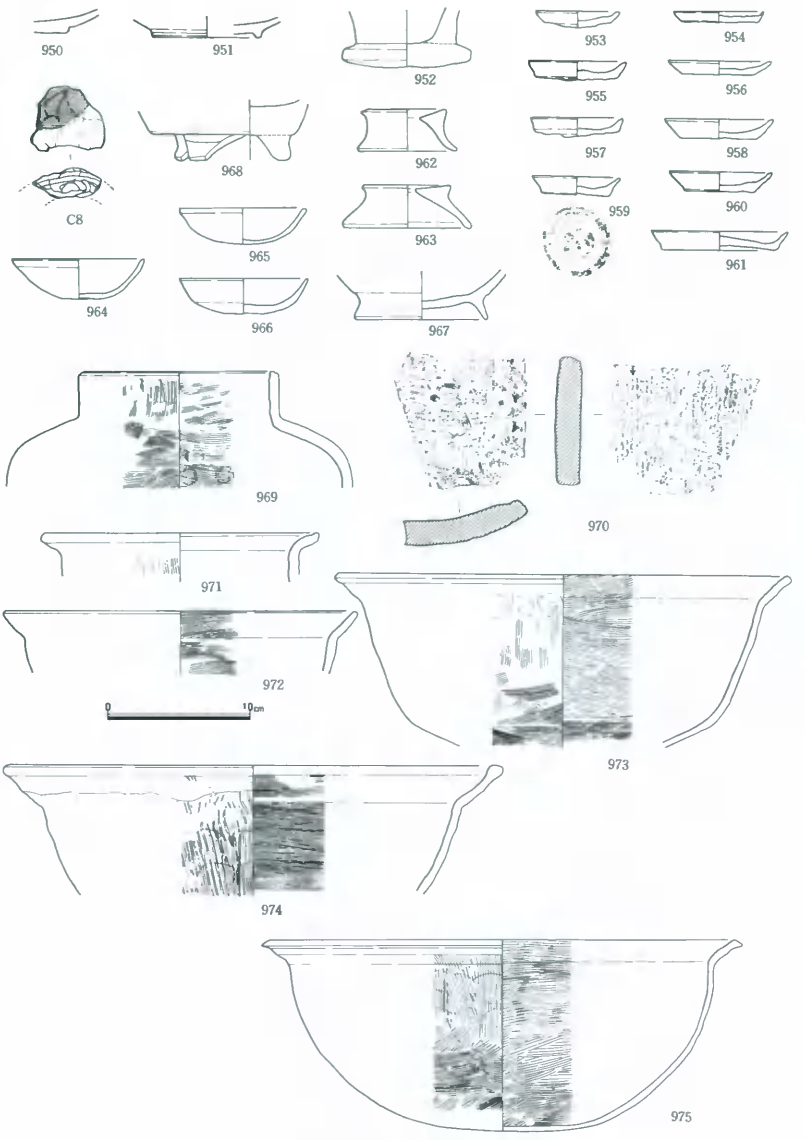
第257図　ⅣB区包含層出土遺物　(1)（1/4・1/5）



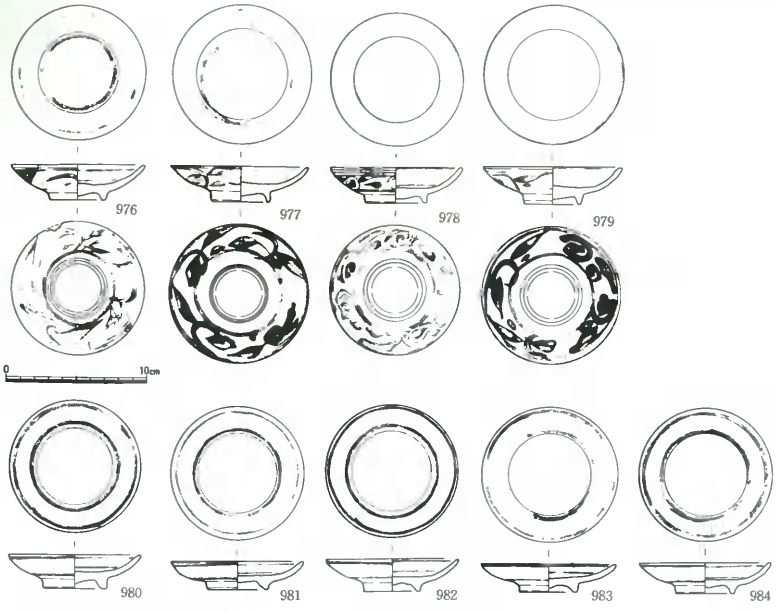
第258図　ⅣB区包含層出土遺物　(2)



第259図　ⅣB区包含層出土遺物　(3)



第260図　ⅣB区柱穴出土遺物

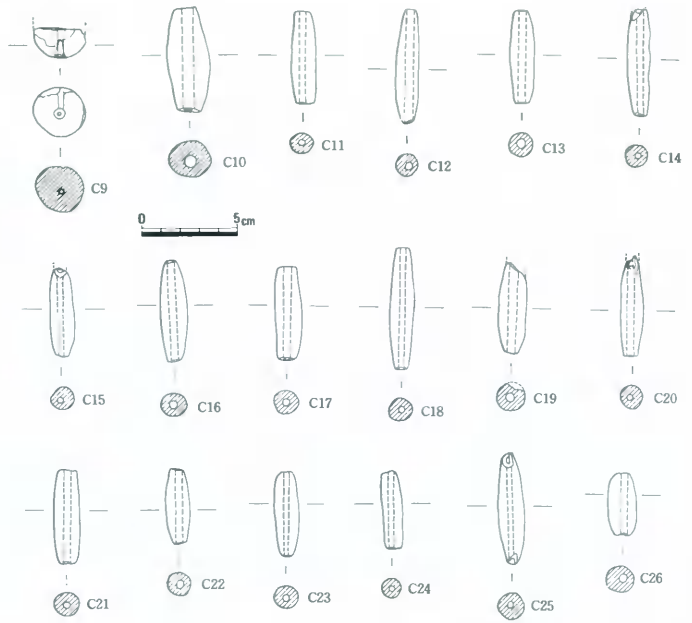


第261図　ⅣB区近世柱穴出土一括染付皿

は、収納方法などを考える上で注意される。また、大豆やコムギで作られたとされる醤（ひしほ）・未醤（しょうゆ）など、この頃から出現するとされる。さらに、『延喜式』では、延長５年の記載には、備中国の中男作物に「胡麻油」が現われている。(註6)

中世には、低位部にはさまれた微高地上では、爆発的に遺構が増加する。建物をはじめとする集落が展開し、井戸・溝・土壙・墓など多数の遺構が残された。とりわけ、土壙墓－６の発見は、被葬者の職業を示す鍛冶道具一括が副葬されている点で特筆される。点在して検出された鍛冶炉の痕跡によって、遺跡地内で鍛冶が行なわれていたことは確実であろう。低位部における水田耕作を基本とする農業以外に、小規模な鍛冶炉の検出や土錘の出土に示される、鍛冶や漁労などをはじめとする、さまざまな生業が営まれたことがわかる。比較的多数出土した銭貨によって、貨幣経済の浸透と活発な経済活動を示唆し、商工業の発達がそれを支えたことが、遺物によっても示される。鋤先をはじめとする、多数の鉄製品の出土は、古代から備中国の特産品として貢納された系譜をあらためて想起させる。

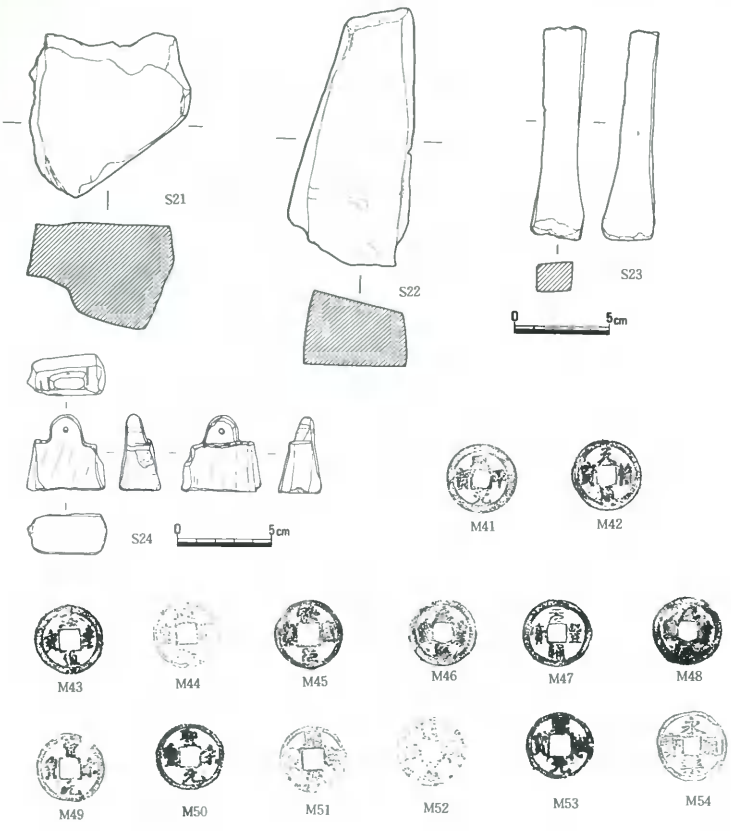
出土遺物では、日常什器を主体とした土器類が圧倒的に多い。なかでも、古代から中世にか



第262図　丸田調査区出土土錘（1/3）

けての土師器の変遷は、黒色土器や施釉陶器・輸入陶磁器など、他地域の影響をうけながら多様な様相を呈している。特に、黒色土器は畿内の影響をうけながらも、遺跡地近くで生産されたものと考えられ、今後の編年研究の進展に好資料となろう。土器のなかには、文字あるいは、記号が墨で書かれた墨書土器がみられ、転用硯の出土や、官人が佩用したと考えられる鉈尾の出土など、識字層の居住や公的施設との至近性を示唆する(註7)。中世でも、ⅠE区での石硯の出土もまた注意されよう(註8)。施釉陶器には、緑釉陶器があり、前者の大半は、京都の洛西の窯で生産されたものである。わずかに、近江産もある。灰釉陶器は、岐阜の大原窯、愛知県の猿投窯の両者がみられる(註9)。輸入陶磁器には、白磁・青磁の碗・皿が占める。中には、いわゆる青白磁の型押し文様が施された合子が、わずかながら認められている。また、染付陶器など近世の肥前系の椀など多数出土しているが、16世紀前半から中頃にかけて輸入された染付皿も特筆される遺物で、当時の幅広い交易を示している(註10)。

自然遺物には、動物遺存体としてウシ・ウマの骨が認められている。古代に比定されるのは、



第263図　ⅣA・B区出土砥石・銭貨（1/3・1/2）

ウマが３例、中世では、ウマ１例、ウシ４例となっている。わずかではあるが、魚骨や、井戸のなかから昆虫の一部なども発見された。

以上、不十分ながら補足的な検出遺構・出土遺物について述べた。特に土器類については、今後の編年作業に待つところも多い。そのため、断定的かつ性急に年代を比定しなかった点については、近い将来精度の高い年代観に裏付けられた結論が出せることを期したい。

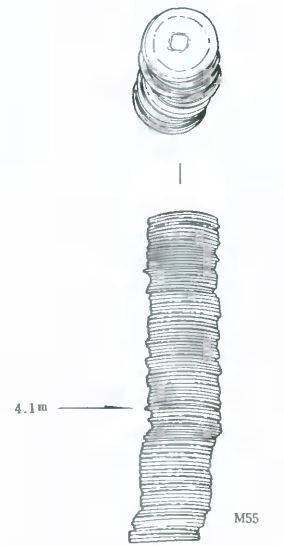
報告書の作成にあたっては、全面的に献身的な整理作業を行い、図面などの浄写などに苦労を

表2　出土銭貨一覧表

種類（初鋳年Ａ Ｄ）	丸田Ⅰ～Ⅰ農区	丸田Ⅱ区	丸田Ⅲ区	丸田Ⅳ A区	丸田Ⅳ B区	計
開元通宝(621)			1			1
淳化元宝(990)	1					1
咸平元宝(998～1003)				1		1
祥符通宝(1008)				1		1
天禧通宝(1017～1022)					1	1
天聖元宝(1023)	1					1
景祐元宝(1034)	2					2
皇宋通宝(1039)	3					3
皇宋元宝(1039)					1	1
嘉祐通宝(1056)	1		1			2
治平元宝(1064)	1		1			2
熙寧元宝(1068)	2			2		4
元豊通宝(1078)	1	2			3	6
元祐通宝(1086)			2	1		3
紹聖元宝(1094)	1					1
元符通宝(1098)			1			1
聖宋元宝(1101)					1	1
政和通宝(1111)		1			1	2
淳熙元宝(1174)				1		1
永楽通宝(1408)					1	1
不　　明				95	1	96
（計）	13	3	6	101	9	132

強いた澤山孝之君と、発掘当時から遺構・遺物の写真撮影について、多大かつ有益なご指導いただいた政田　孝先生に深く感謝する次第である。発掘調査によって得られた成果については、大勢の作業員の方々の労苦に負うところがきわめて多い。本来ならば、録して本書に芳名をとどめるべきであるが、紙幅の都合により割愛を余儀なくされた。衷心より感謝の意を表したい。

（岡田　博）



第264図　緡銭出土状態（1/2）

註

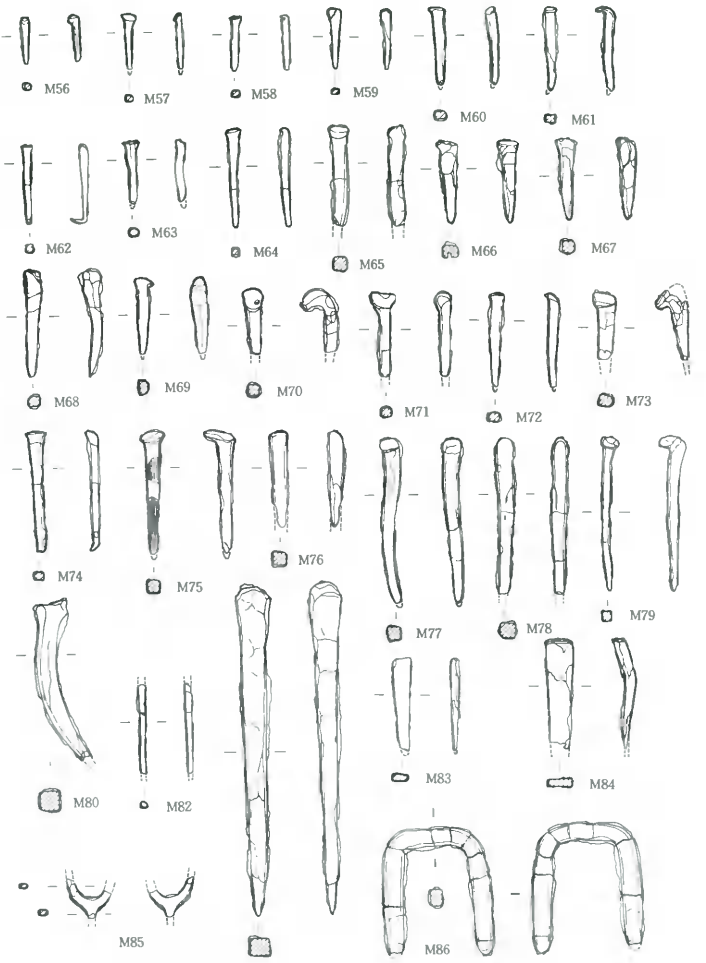
（註1）人骨については、すべて九州国際大学　池田次郎先生の鑑定によった。

（註2）本文中に触れた獣骨は、すべて早稲田大学　金子浩昌氏の鑑定によるものである。

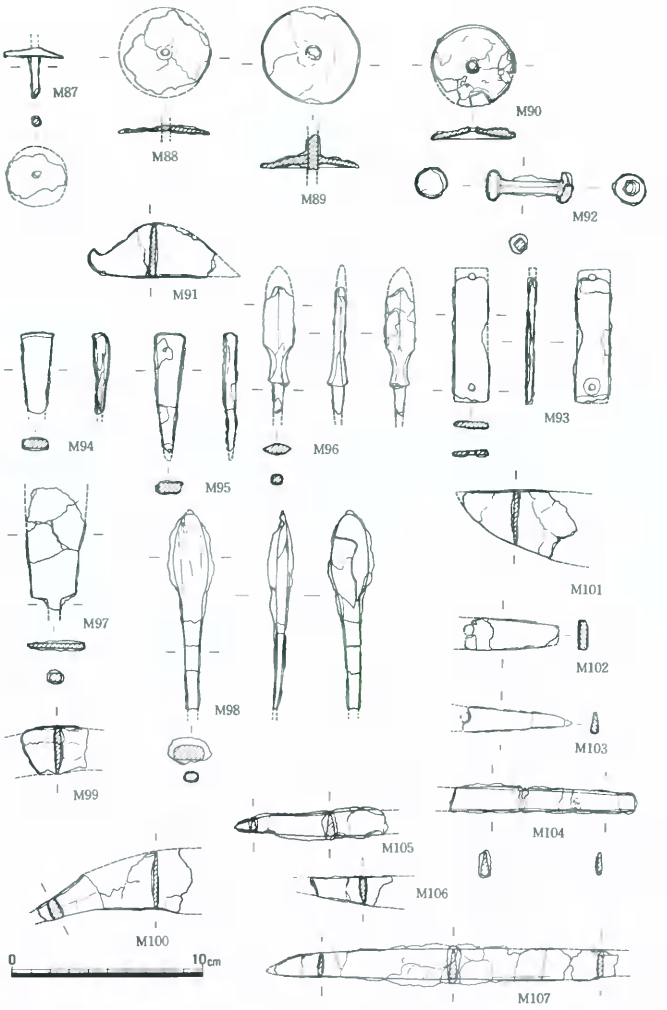
（註3）岡山県立美術館　上西節雄氏、岡山県立博物館　加原耕作氏らのご教示を得た。上西氏には備前焼全般についてもご教示を得た。

（註4）吉川金治「鍛冶道具考」～実験考古学ノート～（神奈川大学日本常民文化叢書2）1991．8　平凡社刊。発掘調査中には、臼井洋輔氏（当時、県立博物館勤務）の多大なご教示を得た。また、環状鉄器については安来市和鋼博物館　三宅博士氏のご教示を得た。

（註5）高畑知功「古代の役所とその周辺」『特集　山陽自動車道と埋蔵文化財』教育時報第507号　岡山県教育委員会



第265図　丸田調査区出土鉄器　(1)（M56～81…釘，M82～84…茎，M85…鉇？，M86…鎹）



第266図　丸田調査区出土鉄器　(2)（1/3）（M87～90…紡錘車，M94～98…鉄鏃，M92・93…金具，M99・100…鎌，M101～107…太刀・刀子）

1991。溝に囲まれる矩形区画が発見されており、「備中国風土記逸文」記載の『新造御宅』に比定される可能性が強い官衙に想定される。

（註６）『岡山県史』第19巻　編年資料　1988年　岡山県史編纂委員会。

（註７）丸田調査区に南接する、野上田調査区では緑釉・灰釉陶器のほか、「倉」・「吉」・「上厨」などの墨書土器が出土している。また、津寺遺跡の東端では、和銅開珎５枚を納めた脆衣容器（土師器甕に須恵器蓋を置く）が発見されている。当時の知識人である、官人層の居住地に近接していると思われる。

（註８）草原孝典「小丸山（中山中）遺跡発掘調査報告」1993　岡山市教育委員会。本書のなかで、中世遺跡出土の陶硯について詳しく集成がなされており、石硯と形態的に比較検討できる点に興味深い着目がある。

（註９）緑釉陶器と灰釉陶器との時期的な年代の比較では、同一の遺構から出土した遺物について、教示を仰いだが、それぞれかなりの隔たりがある。

（註10）大半の陶磁器については、佐賀県九州陶磁文化館　大橋康二氏のご教示によるところが多い。

主要参考文献

◆日本生活文化史　第三巻　日本的生活の基点　1974年　河出書房新社刊。

◆『岡山県史』第19巻　編年資料　1988年　岡山県史編纂委員会。

◆『岡山県史』第３巻　古代Ⅱ　1990年　岡山県史編纂委員会。

第３節　野上田調査区

１．野上田調査区の概要

本調査区は山陽自動車道岡山ジャンクションの北端部に当たる。中屋・西川調査区の北、丸田調査区の南に位置し、現足守川の左岸土手に接した南北に長い調査区であり、この報告書では10区に分割して発掘した区のうち北の方１～６区を掲載している。

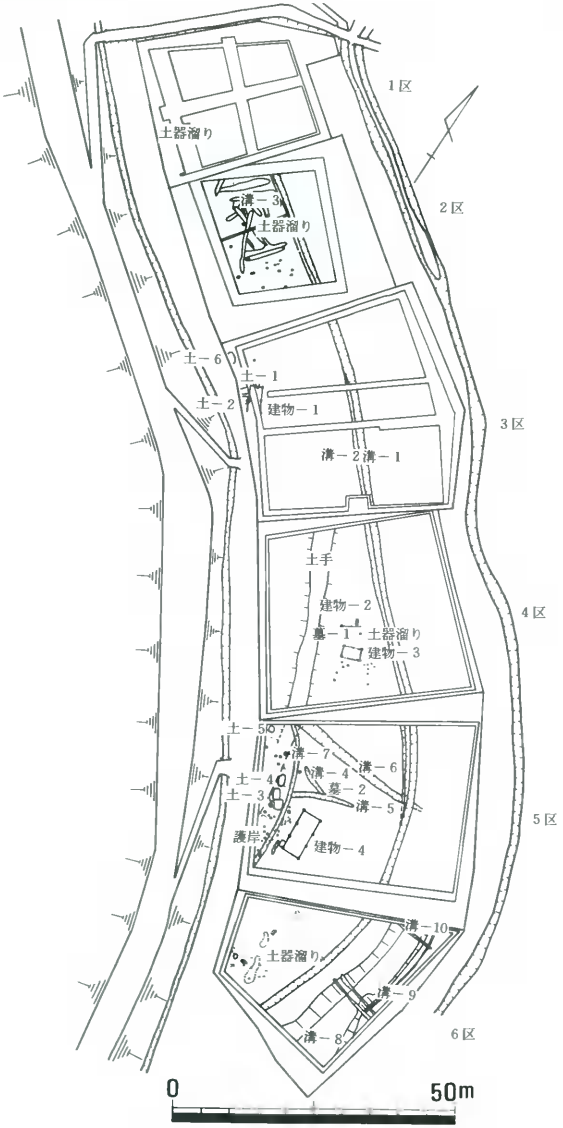
発掘の結果、５区は古代河道の右岸であり、７区は古代左岸で、６区は古代河道の中央部にあたることが判明した。

１～６区の検出した主要な遺構は下記の一覧表に示している。古代は土手状遺構・護岸施設・土器溜り・旧河道があり、中世は建物・土壙・溝・柱穴多数、近世は溝・水田になっている。

遺物は土器総数整理箱に130箱程在って、時期としては弥生後期から近世まで続いている。が、中心となる時期は古代と中世である。磁器も多数出土しているが、白磁が比較的多数見られ、青磁は少ない。緑釉陶器も若干ある。墨書土器が数点見つかり「倉」「上厨」「吉」等が読み取れる。木器も数点出土し、船・ひしゃく・曲物がある。土師器椀の中に漆の容器に使用したものもある。曲物の横に「南□阿」と読める墨書するものがあった。鉄釘・羽口・砥石・鉄滓等鍛冶関連遺物もある。植物遺体としてはヒョウタン・モモ・クチナシ・アシ・アベマキ・モロマツ等。動物遺体としては人骨・馬歯が出ている。

表－１　主要遺構一覧表

番号	遺構名	調　査　区	旧　　名	番号	遺構名	調　査　区	旧　　名
01	建物-1	野上田３区	No9.10.4	02	建物-2	野上田４区	中世柱穴
03	建物-3	野上田４区	中世柱穴	04	建物-4	野上田５区	建物
05	土壙-1	野上田３区	No６	06	土壙-2	野上田５区	No７
07	土壙-3	野上田５区	中世土壙３	08	土壙-4	野上田５区	中世土壙４
09	土壙-5	野上田５区	中世土壙５	10	溝-1	野上田３区	No５溝
11	溝-2	野上田３区	No２溝	12	溝-3	野上田２区	近世溝群
13	溝-4	野上田５区	中世溝４	14	溝-5	野上田５区	中世溝５
15	溝-6	野上田５区	中世溝６	16	溝-7	野上田５区	中世溝７
17	溝-8	野上田６区	中世河道	18	溝-9	野上田６区	中世河道
19	旧河道	野上田６区	旧河道	20	護岸	野上田５区	護岸施設
21	土器溜り	野上田６区	土器溜り	22	土手	野上田４区	土手状遺構
23	墓-1	野上田４区	人骨	24	墓-2	野上田５区	人骨



第１図　野上田１～６区全体図（1/1,000）

2．弥生・古墳時代の遺構・遺物

(1)弥生時代

弥生土器（第３～５図）

１～47は、４～６区の旧河道砂礫層・護岸施設下層から出土した弥生土器である。護岸施設から出土したものはすだれ状遺構のすだれに挟まれた砂礫層に含まれており、河道の砂礫を盛り土に使用する際混入したと考えられる。

１・２は断面三角形の凸帯を張りつけた直口壺で、**２**の凸帯には刻みが施されている。**３～５・47**は壺で、**３**の頸部には沈線、**５**の垂れ下った口縁には鋸歯文が見える。**６～20**は甕である。口縁端部を上方に拡張するもの、上下拡張するもの、下方に拡張するものがある。また端面に凹線を施すものもある。**17**は外面の調整に叩きが使われている。**21**は大型の鉢。**22**は大型の甕。**23**は鉢。**24**は砂粒をあまり含まない粘土使用の小型直口壺。**25～34**は高杯で、後期初頭から後期末までのものがある。**35～39**は台付き鉢の台部で、製塩土器である。**40**は壺の底部と考える。**41～45**は甕の底部であろう。**46**は器台の下部で、長方形と円形の透かしが見られる。

土製品（第２図）

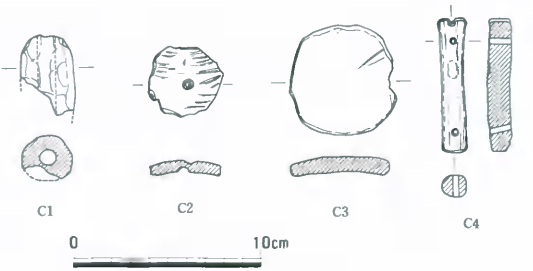
弥生時代の土製品としては土錘**C1**・紡錘車**C2**・円板**C3**が出土している。**C2**は小円孔が未完成である。**C3**は土器片は弥生だが使用時期は不明。

(2)古墳時代

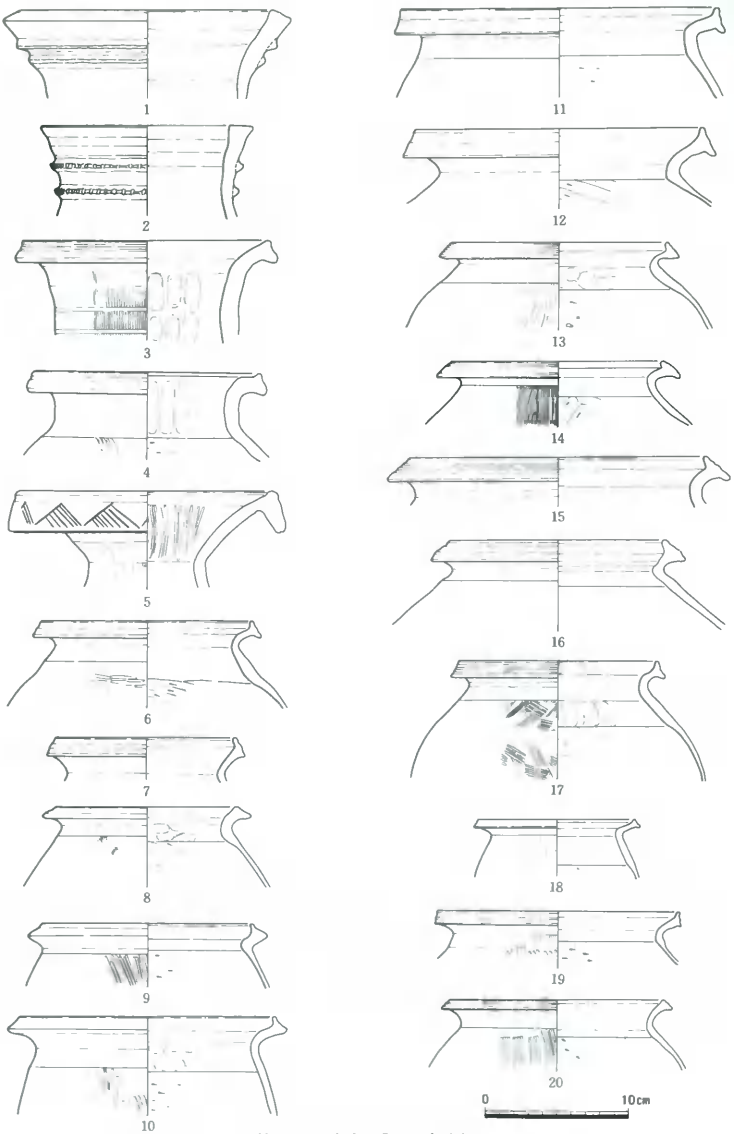
１区土器溜り（第１・５図）

１区土器溜りは１区の東西トレンチ西方で検出した。地表下100㎝の旧河道砂礫層中より完形あるいはそれに近い状態で出土した。**54・56～61**の甕と高杯がある。この出土状態と似ているのが三手遺跡向原調査区にある。水辺の一隅で祭りを行なったものであろう。

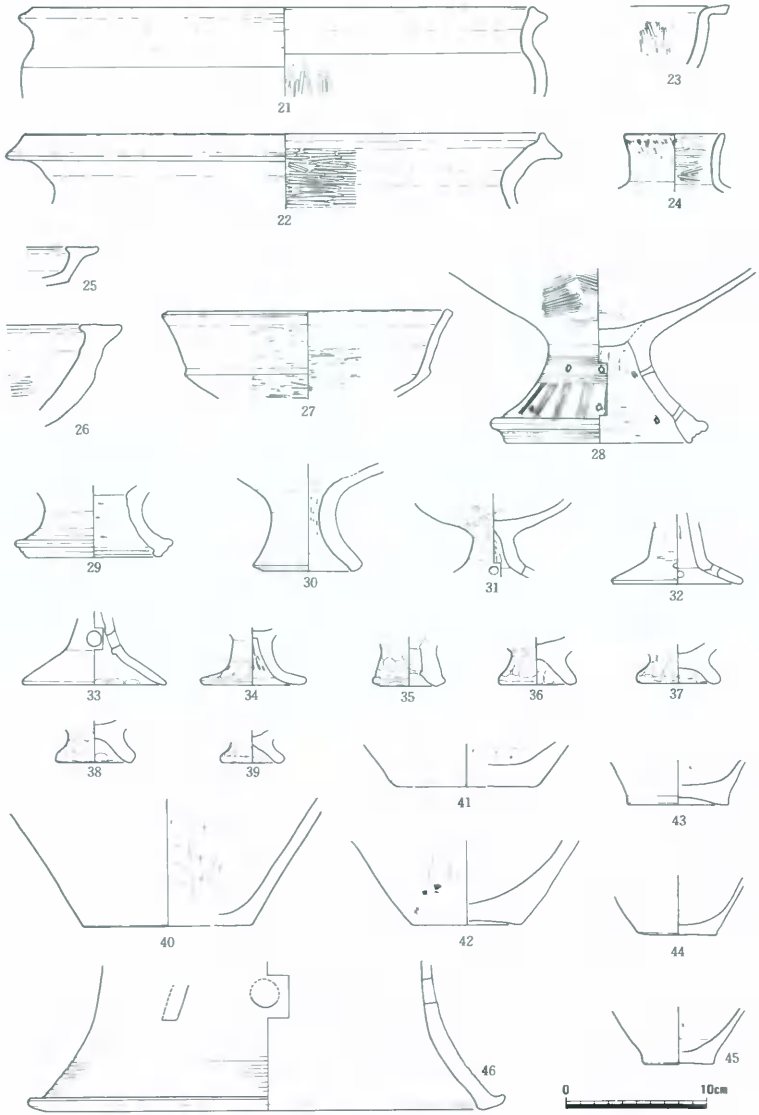
54は口縁端部にやや内傾する面を持つ。底部は丸底である。**56**は大型の高杯で、口縁も脚裾も直線的に伸びる。**59～61**は小型の高杯で、杯部は椀形、脚は長脚である。脚下部に円形の透かしを有するものとそうでないものがある。口縁端部は丸いが、脚端部は角張っている。



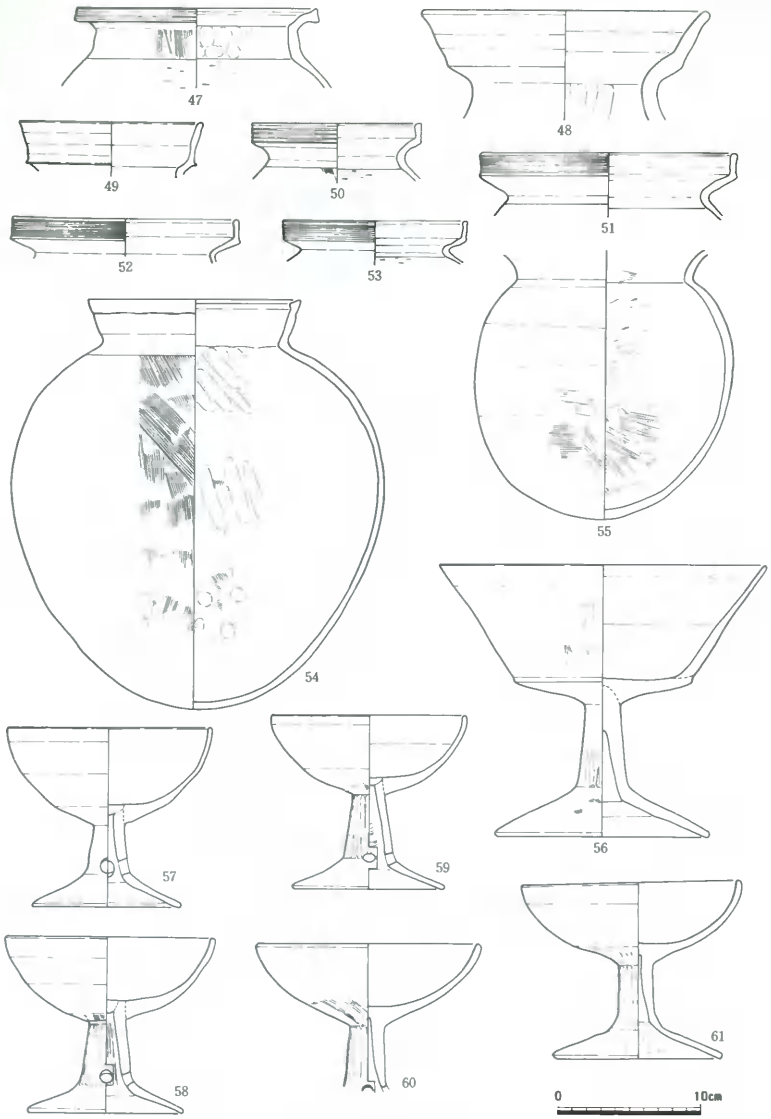
第２図　土製品（1/3）



第３図　弥生土器１（1/4）


21
23
22
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
41
43
40
42
44
46
45
0
10cm

第4図　弥生土器2（1/4）



第５図　土師器（1/4）

土師器（第５図）

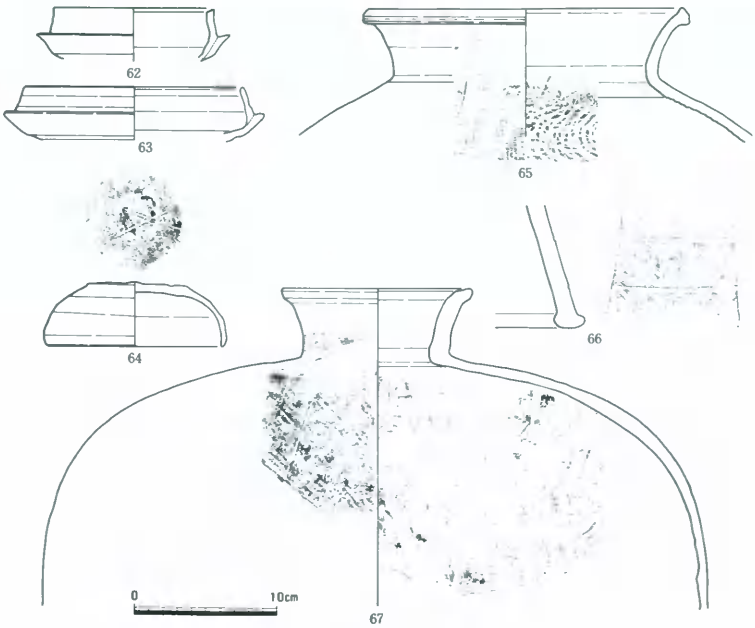
５区すだれ状遺構・２区土器溜り・５区砂礫層から少量の土師器が出土している。**48**は二重口縁を呈する壺である。**49**も二重口縁であるが、甕である。**50～51**は櫛描き沈線を数条持つ甕である。**55**は球形の体部をした甕で、２区から出土した。

須恵器（第６図）

62～67は４～６区出土の須恵器である。**62**は口径11㎝と小振りな杯身で、たちあがり端部に凹線がある。**63**は口径15㎝と大振りな杯身で、端部は丸く収める。**64**は杯蓋で、天井部に篦描きの×印が明瞭に残る。**65**は甕で、体部外面小さい格子叩き、内面同心円叩きしている。**66**は器台と考えられる。沈線と波状文が見える。**67**は横瓶またの名は俵壺で、外面平行叩き。

土製品（第２図）

C4は古墳時代の土錘と考えられる。棒状で両端に小円孔が穿たれ、さらに一方の端に半円を呈する溝を付ける。



第６図　須恵器（1/4）

3．古代の遺構・遺物

(1)護岸

すだれ状遺構（第11～13図）

5区の西南端で検出した非常に珍しい遺構である。岡山商科大学の畔柳鎮氏の植物遺体の鑑定によれば、すだれ状に敷き並べている植物は「アシ」、それに直交し、かつ押さえに使用している棒状小枝の材質は「ネズミサシ」すなわち「モロマツ」と鑑定された。このすだれ状の敷物は多いところで4面も重なっていた。その傾斜は中央の杭列の部分が高く、東と西に低くなっている。すだれの下層は粘土と円礫で、間は砂と円礫で充填している。「アシ」は束にして運び扇形に広げて土止めとして使用したもの。つまり本遺構は護岸の基礎工事と推定したい。

この遺構から出土した土器は先に述べた弥生土器・古墳時代土師器・同須恵器の他にはない。したがって築造時期は古墳時代より新しいと言っておこう。

杭列（第10・11図）

5区の西端でほぼ一列で検出できた。北の端は4区にわずかにかかっている。南はすだれ状遺構の中央を経過し、調査区外へ伸びる。一部孤状を呈して打ち込まれている箇所が見られるが、ほぼ北から南へ一直線である。杭の材質は「アベマキ」と鑑定された。細いものは丸太のまま、太いものは4分割し、先端を鉛筆削りにしている。またすだれ中央の杭列には「モロマツ」によってしがらみを組んでいる。

土手状遺構（第7～9図）

4区で検出した遺構で、5区・3区にも伸びていることを確認している。検出面の海抜高は430cmあたりで、中央の平坦面の幅は5m程ある。西は20～30cm緩やかに低くなるが、東はかなり急に130～150cmも下る。東西とも20～40cmの厚さの円礫が層をなしている。この遺構の下部構造に前二者がある。

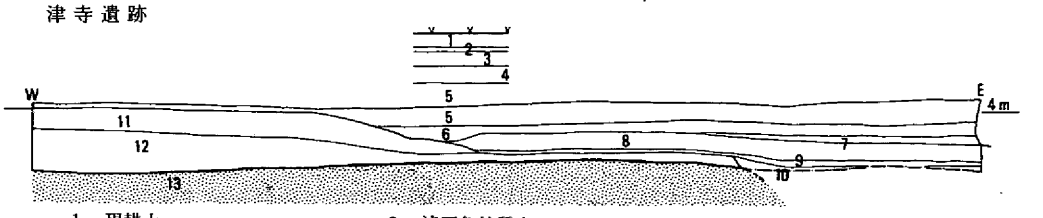
(2)土器溜り・その他出土遺物

6区土器溜り（第14～15図）

6区で検出した土器溜りである。大量の土器が集中して東緩斜面に張りつくように掘り出された。検出面の海抜高は300～350cmである。この土器溜りの土器群は旧河道が埋まり初めてほぼ埋まり終る間の一時期を示す重要な資料となるであろう。古いものも若干含まれているようであるが、ほぼ同一の10世紀前後に当てはまるのではないかと考えている。

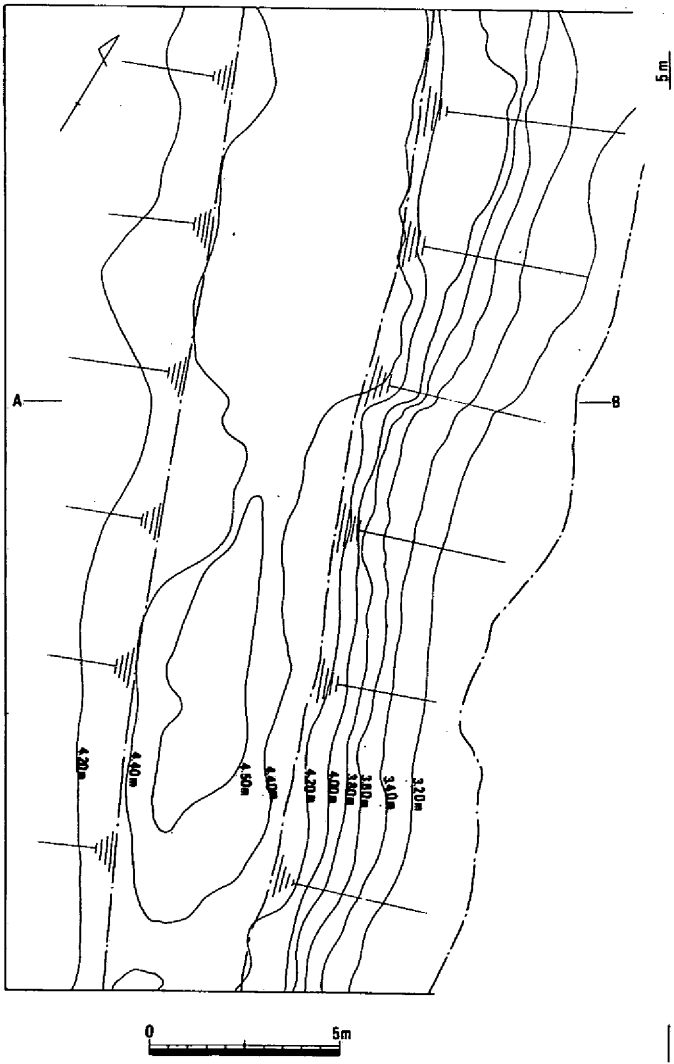
墨書土器（第16図）

上記土器溜りから出土した。**68**は口径12cmの小振りな土師器杯で、鮮やかに「倉」と墨書している。**69**は土師器杯あるいは皿の底部に「上厨」と薄く墨書している。**70**は土師器杯と考え

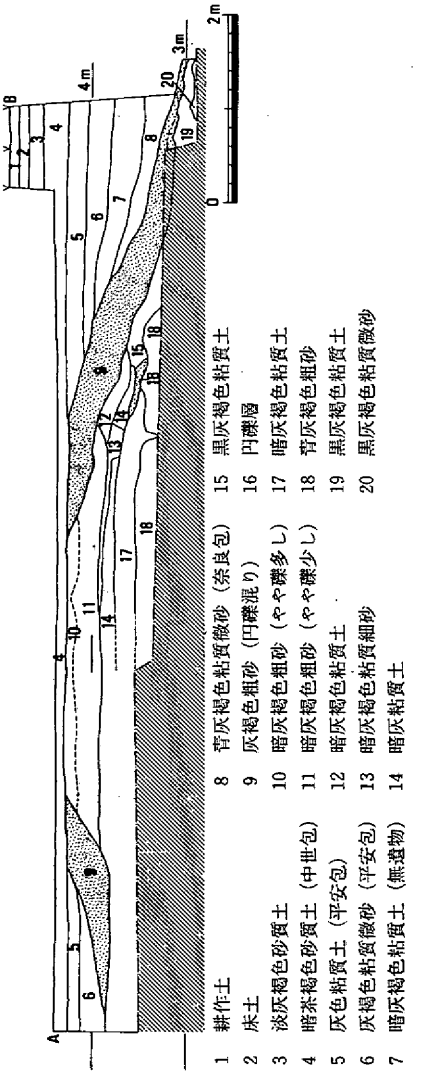


1 現耕土
2 淡黒色砂質土
3 暗灰色粘質土（鉄分多い）
4 暗灰色砂質土
5 暗灰色粘質土
6 灰色粘質土（5より砂が強い）
7 淡灰褐色粘質土
8 淡灰色粘質土
9 淡褐灰色粘質土
10 淡茶灰色砂質土
11 暗灰色砂質土
12 茶白色砂質土
13 砂礫層（大量の湧水）

第7図　1区東西トレンチ土層断面図（1/80）

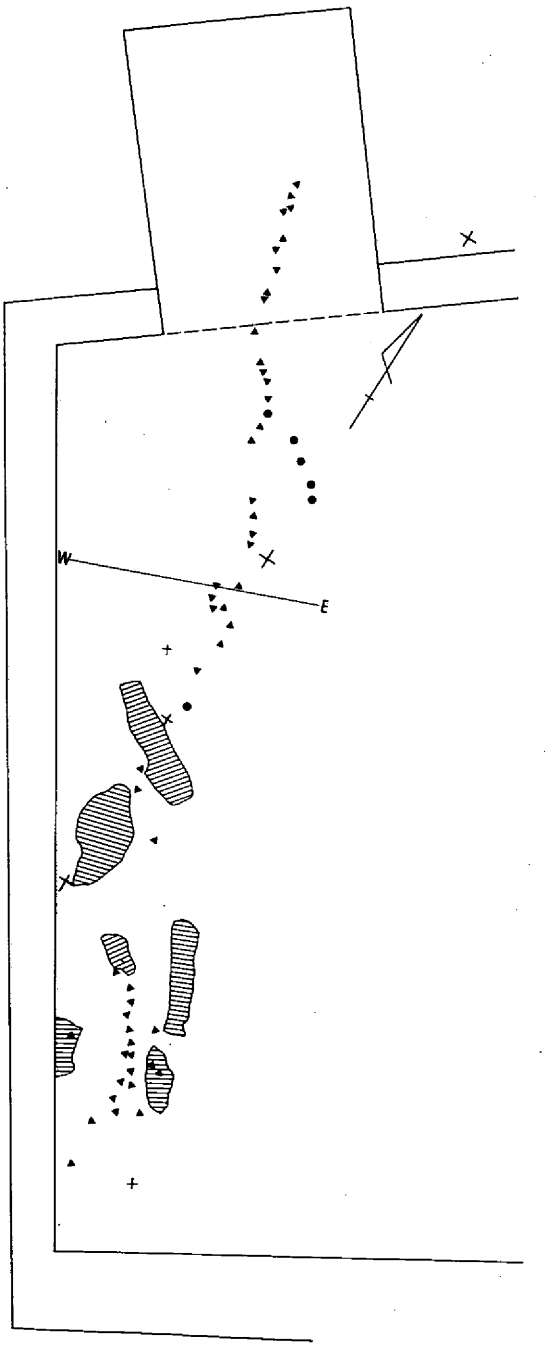


第8図　4区土手状遺構地形図（1/200）

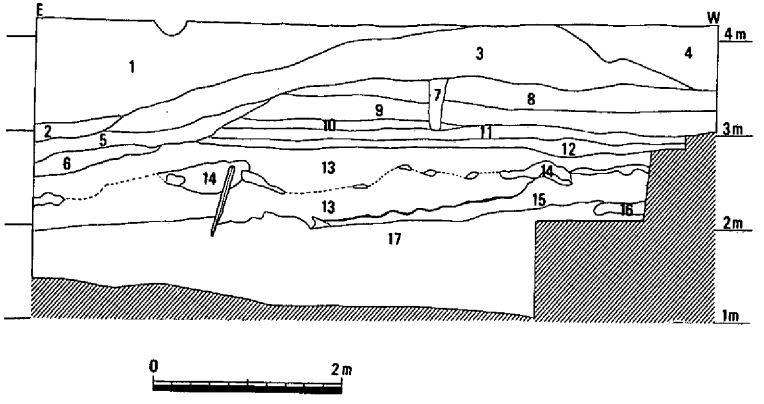


1 耕作土
2 床土
3 淡灰褐色砂質土
4 暗茶褐色砂質土（中世包）
5 灰色粘質土（平安包）
6 灰褐色粘質微砂（平安包）
7 暗灰褐色粘質土（無遺物）
8 青灰褐色粘質微砂（奈良包）
9 灰褐色粗砂（円礫混り）
10 暗灰褐色粗砂（やや礫多し）
11 暗灰褐色粗砂（やや礫少し）
12 暗灰褐色粘質土
13 暗灰褐色粘質細砂
14 暗灰粘質土
15 黒灰褐色粘質土
16 円礫層
17 暗灰褐色粘質土
18 青灰褐色粗砂
19 黒灰褐色粘質土
20 黒灰褐色粘質微砂

第9図　4区土手状遺構土層断面図（1/100）

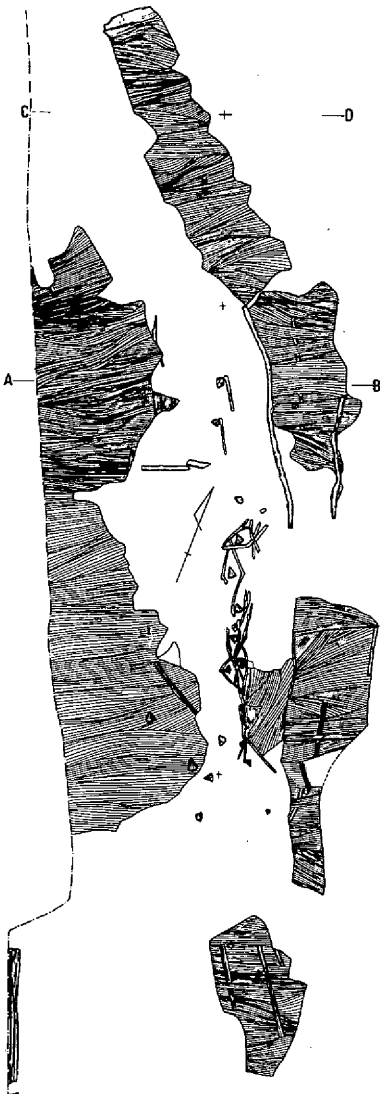


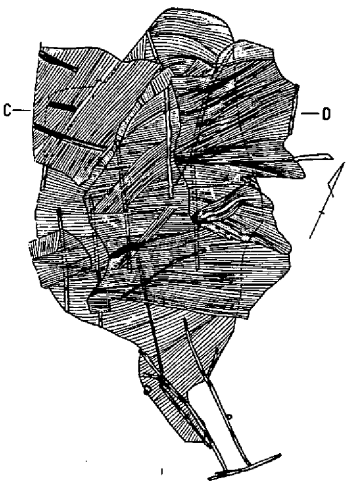
第10図　５区護岸施設下部全体図（1/200）

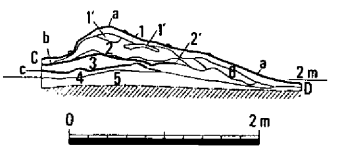


1　淡黄灰褐色粘質微砂
2　灰色微砂
3　淡黄灰色粘質微砂
4　暗黄灰色粘質細砂
5　淡緑灰色細砂
6　暗灰褐色粘質土
7　淡灰色粘質土（中世柱穴）
8　淡灰褐色粘質微砂
9　淡灰褐色粘質土
10　淡黄灰色粘質土
11　暗灰色粘質土
12　暗緑灰色粘質微砂
13　黒灰色粘質土
14　淡灰色粘質微砂（杭の頭部を検出）
15　黒褐色粘質土（上面に麻状炭化材あり。）
16　灰色粘土
17　青灰色円礫（砂層と互層の所もある。）

第11図　5区北杭列・中央土層断面図（1/80）

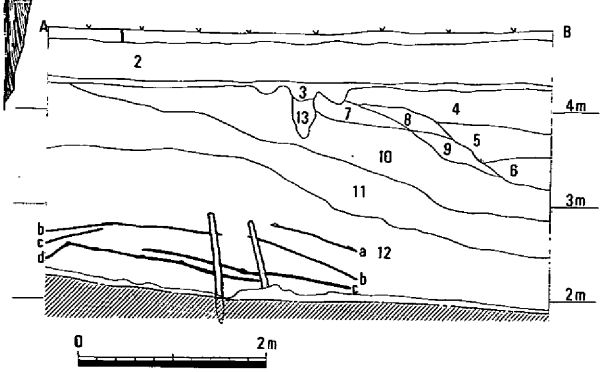






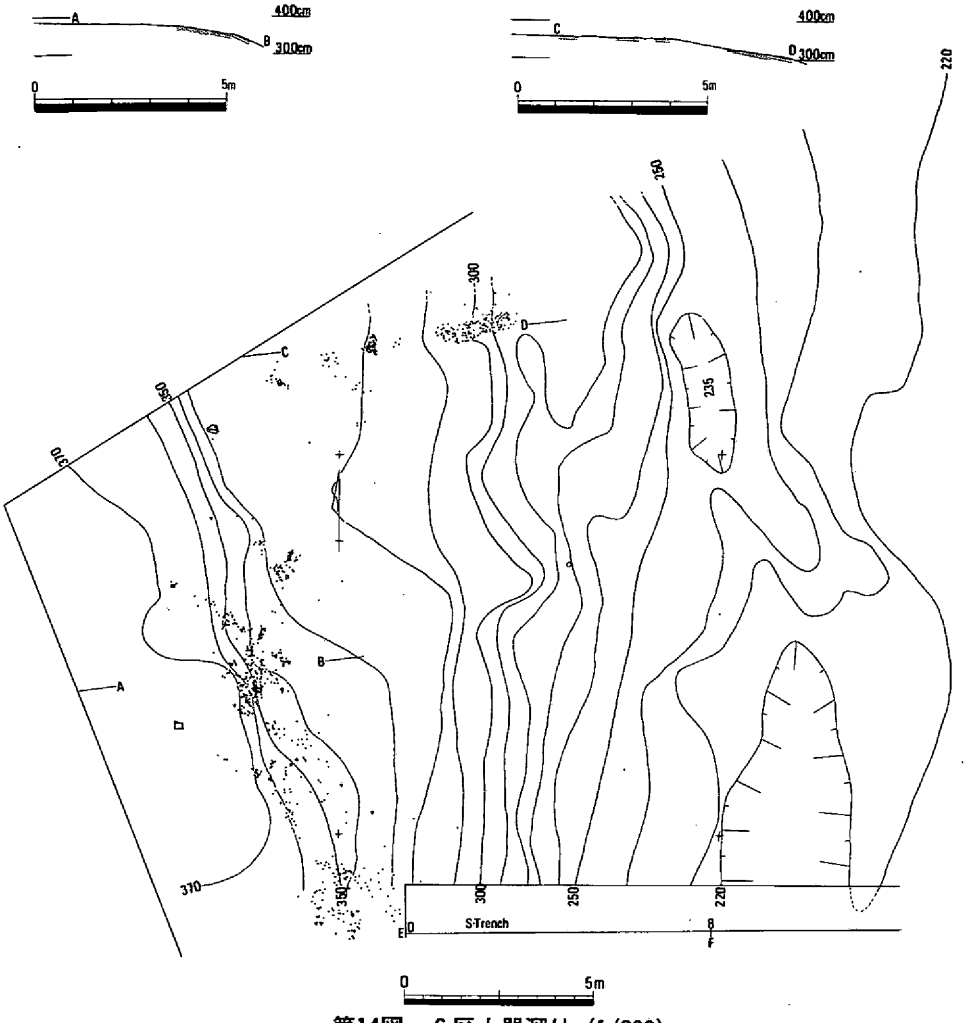
1　黒灰色（粘土と砂混合）、礫なし
1'　１の土層と基本的に同じだが円礫（３～５cm）入る
2　明黒灰色砂礫（粗砂・細砂・円礫も混る）
2'　砂を敷いてその上に礫を置く
3　黒色粘土
4　３の直下に円礫その下に砂礫
5　黒褐色砂礫
6　明黒灰色粘土（細砂がかなり混入）
a　簾状遺構（第４面）
b　〃　（第５面）
c　〃　（第６面）

第13図　５区すだれ２～４面・断面図（1/80）

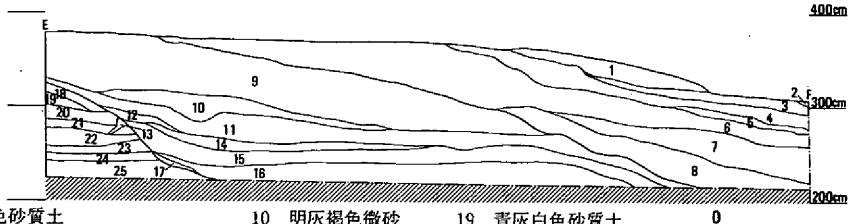


第12図　５区護岸施設南部すだれ図（1/80）

1　耕作土
2　灰褐色粘質微砂（近世水田）
3　暗灰褐色粘土（中世水田）
4　灰褐色粘質粗砂（平安包含層）
5　淡灰褐色粘質微砂
6　淡灰褐色粘質細砂
7　黒灰褐色粘質微砂
8　明灰褐色粘質微砂
9　灰褐色粘質細砂
10　黒灰褐色粘質細砂（奈良包含層）
11　黒灰褐色粘質微砂
12　黒褐色粘土
13　中世柱穴
a　簾状遺構（第１面）
b　簾状遺構（第２面）
c　簾状遺構（第３面）
d　簾状遺構（第４面）

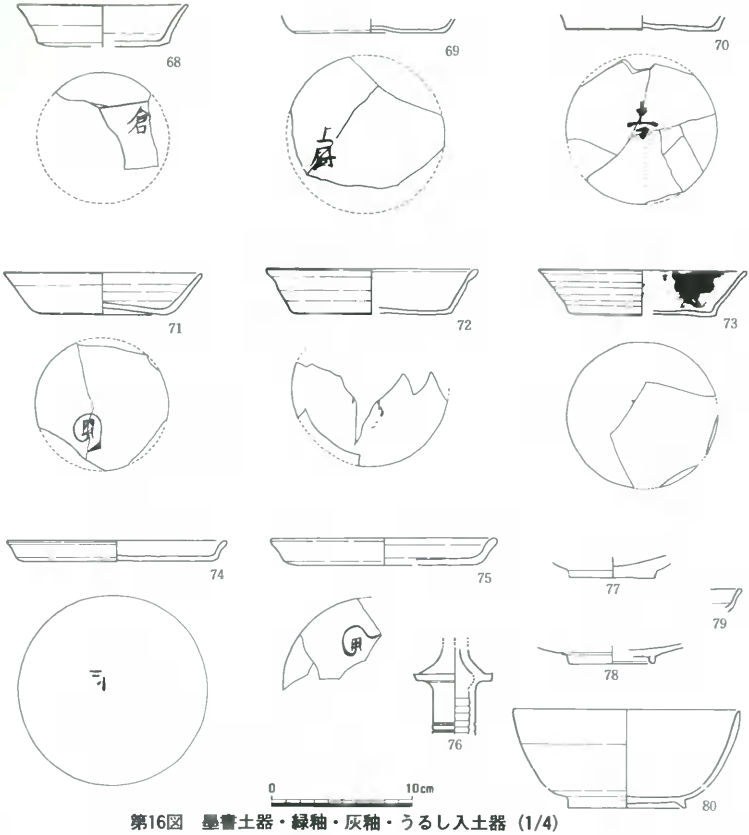


第14図　6区土器溜り（1/200）



1　灰褐色砂質土
2　同上
3　淡茶灰褐色砂質土
4　淡灰色砂質土
5　淡灰色粘質微砂
6　淡茶褐色砂質土
7　茶褐色粘質微砂
8　黒灰色粘質微砂
9　茶褐色砂質土（上面に土器溜り）
10　明灰褐色微砂
11　灰色砂質土
12　明黒灰色微砂
13　明黒灰色粘質細砂
14　黒灰色粘土
15　黒灰白色粘質細砂
16　黒灰色砂質土
17　明灰色細砂
18　暗灰色粘質微砂
19　青灰白色砂質土
20　黒灰色粘土
21　暗黒灰褐色粘質微砂
22　黒灰色粘土
23　明黒灰色粘土
24　黒灰色粘土（炭混入）
25　黒灰色砂質粘土（炭混入）

第15図　6区南トレンチ断面図（1/80）

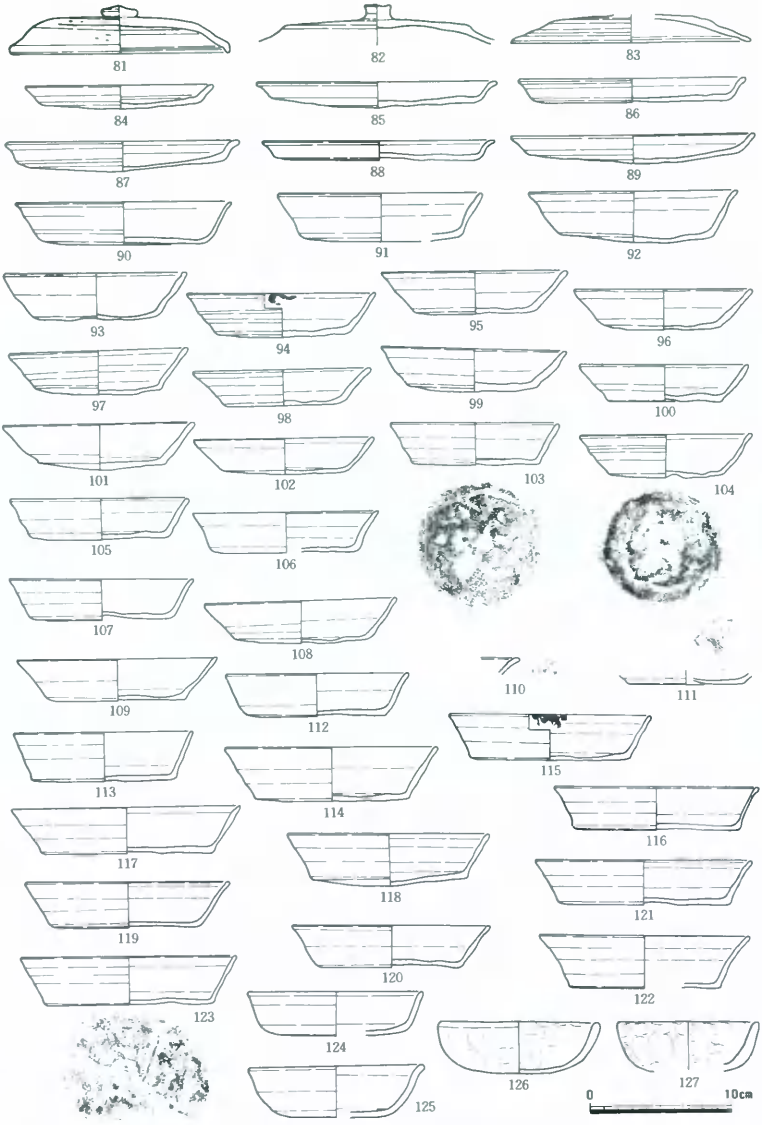


第16図　墨書土器・緑釉・灰釉・うるし入土器（1/4）

られ、底部に「吉」か。**71**は土師器杯で、「用」を○で囲んだものか。**72・73**はわずかに墨書が認められる。**74**は土師器皿で、判読できず。**75**は土師器皿で、「用」を曲線で囲んだものか。

緑釉陶器（第16図）

76は６区東端の砂礫層から出土した。浄瓶と呼ばれる高級な品で、おそらく岡山県内で初めての出土であろう。火事にあったものか、黒色に変色している。京都産と言う教示を得た。**77**は５区溝－５出土の蛇の目高台皿、**78**は３区出土の貼りつけ高台の皿であろう。**79**は３区出土の椀か皿の極小片である。



第17図　6区土器溜り出土遺物1 (1/4)

漆容器（第16図）

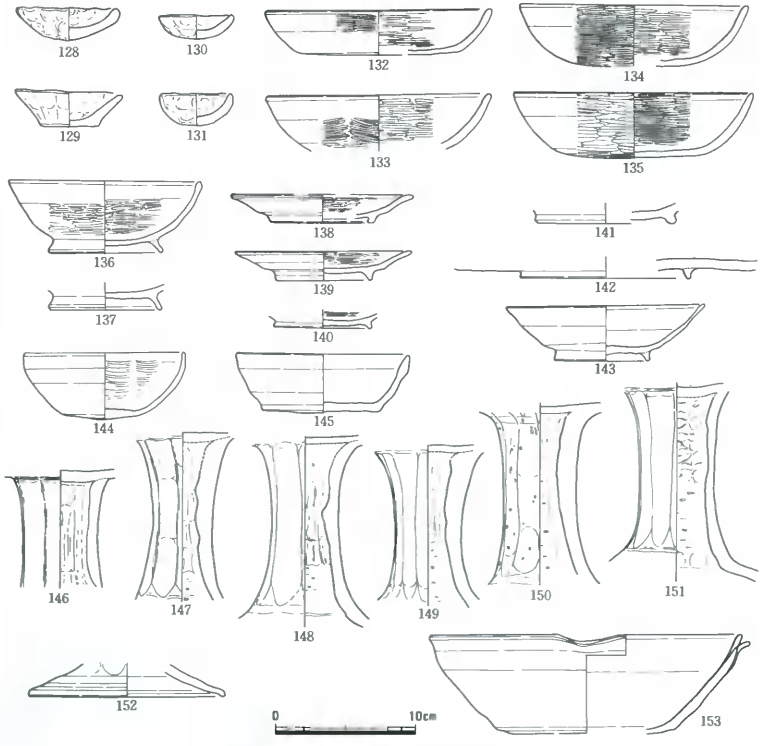
80は６区土器溜りから出土した漆容器として使用された高台付き椀である。口縁の破片と底部片が直接接合できなかった。黒色土器で、両面とも黒色である。

土師器杯蓋（第17図）

81～83は、６区河道から出土した。**81**は扁平な宝珠つまみを付け、口縁端部を下に折り曲げる。須恵器の焼きが甘いものかもしれぬ。**82**は小さなつまみを付ける。精製粘土を使用し、焼きも甘い。**83**はつまみを欠く。

土師器皿（第17図）

84～89は、６区土器溜りと６区河道から出土している。**84**は口径13㎝のやや小型の皿で、ほぼ完形品。**85**は口径16㎝あり、口縁部は外反している。底部は指押さえの跡が明瞭に残ってい



第18図　６区土器溜り出土遺物２（1/4）

る。86～88も同形。89は口径17㎝ある。

土師器杯（第17図）

90～125は、ほとんど6区土器溜りから出土している。口縁部の形態にいくつかの種類が認められる。93のように端部を内側に押さえるもの、90～93のように端部を外反させるもの、94～102のように45度外傾させるもの、113～123のように60度の立ち上がりを持つもの、124・125のように一度内湾し、その後外反するもの等がある。これらの杯の使用方法を示すものが、94・115に見られるように、灯明の煤の痕跡である。墨書土器の73にも煤が付着していた。110・111は口縁外面・底部内面に線刻が見える。皿の作りと同様底部外面は103・104・123のように指押さえの跡が明瞭に残るものもある。

手づくね（第17・18図）

126・127は6区土器溜まりから出土している椀である。128～131は6区河道から出土した小杯である。

黒色土器（第18図）

132～141が黒色土器で、すべて6区から出土している。132～134は両面黒色の椀、135は内黒である。136は両面黒色の高台付き椀、137・140は内黒の高台。138・139は内黒の高台付き皿である。

土師器盤（第18図）

142は6区土器溜りで出土した盤と思われる土器で、高台径11.5㎝を計る。

その他の土師器椀・杯（第18図）

143は6区旧河道東砂礫層から出土した完形の高台付き椀で、口径は13.8㎝あるが、器高は4.0㎝しかない。144は6区旧河道斜面から出土した須恵器のように良く焼け締まった無高台の椀である。145は6区土器溜りの杯で、粘土紐巻き上げ後、ろくろを使用している。

土師器高杯（第18図）

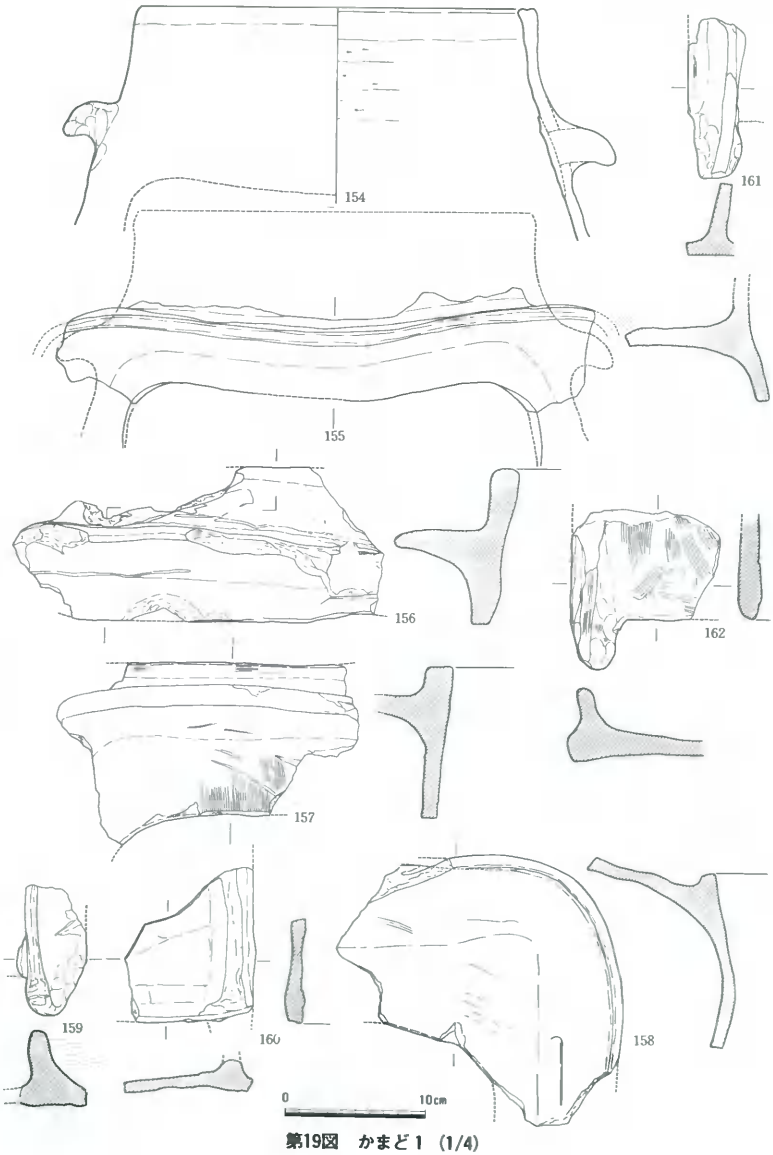
146～157は、6区土器溜りから出土した高杯の脚柱・脚裾部である。脚柱は長さ8～12㎝、太さ4～6㎝と様々である。いずれも面取りを施している。面の数は8～11とこれも企画性がない。152はこの面取りをした高杯の脚裾部と考えられる。

土師器鉢（第18図）

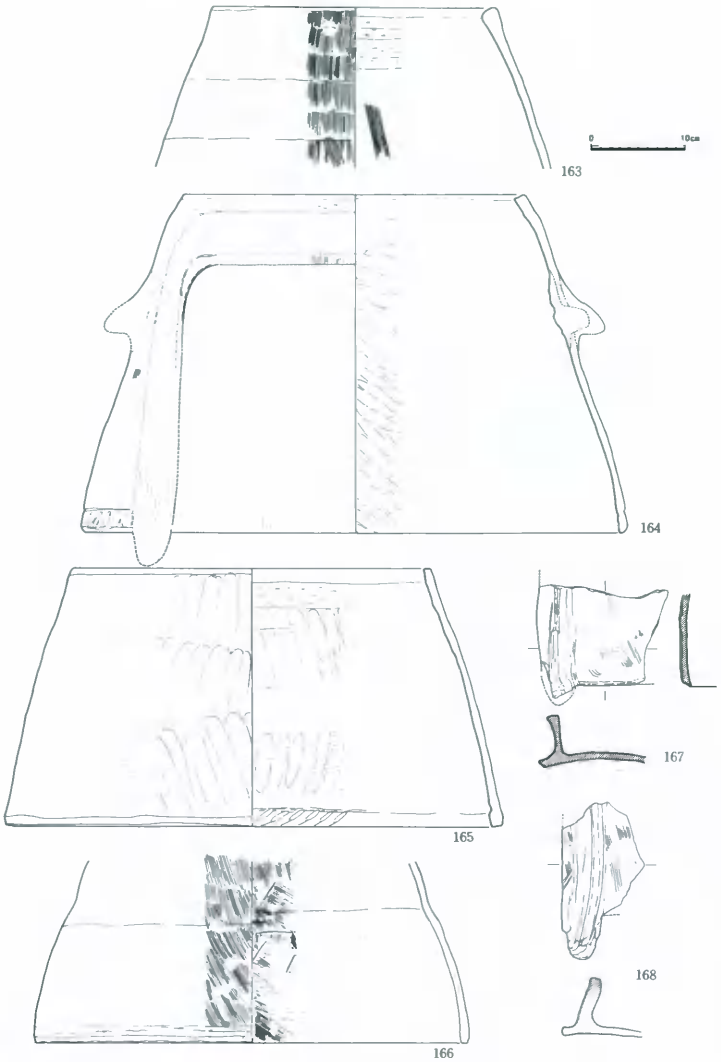
153は6区旧河道斜面すなわち土器溜りから出土した片口の作られた鉢で、口径は20.8㎝を計る。砂粒を含まない粘土を使用している。

土師器かまど（第19・20図）

154～168は、6区土器溜り・旧河道から出土したかまどの一部である。全形が推定できるものは164くらいで、他は口縁部・把手・ひさし・鍔・足・接地部である。胴体部の調整は指撫でが主で、ハケメのものも見える。かまどの大きさには大・中・小の3種類がある。足につい



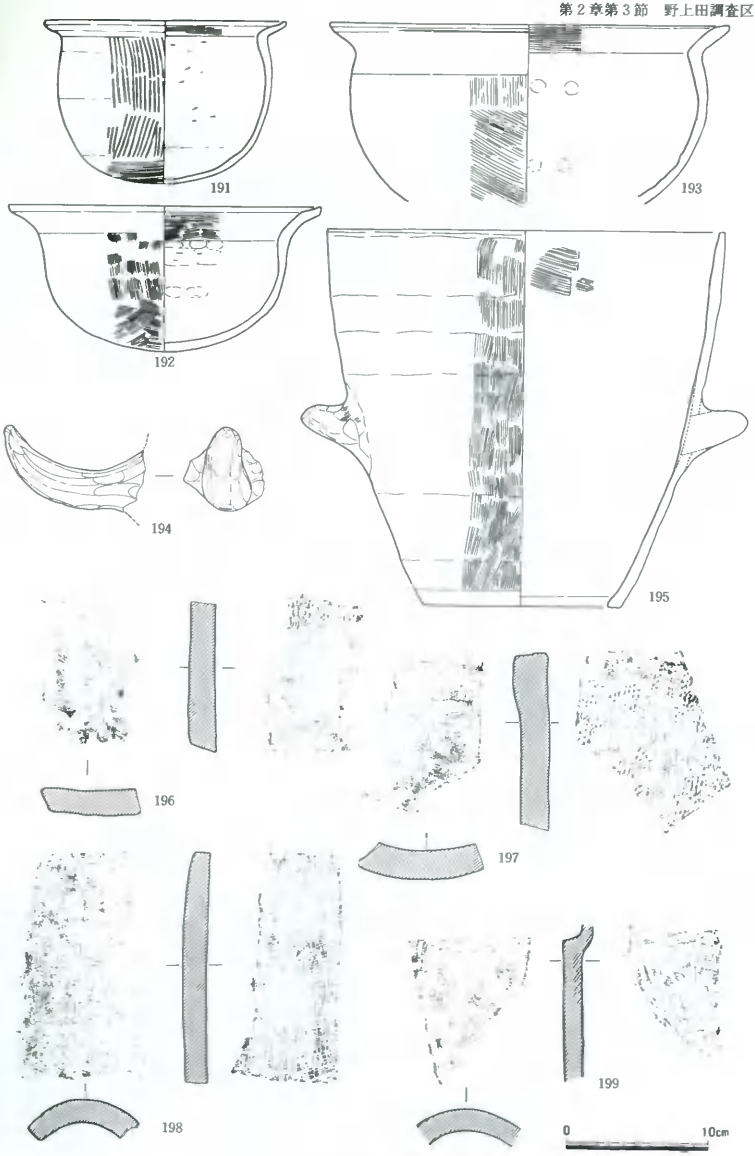
第19図　かまど１（1/4）



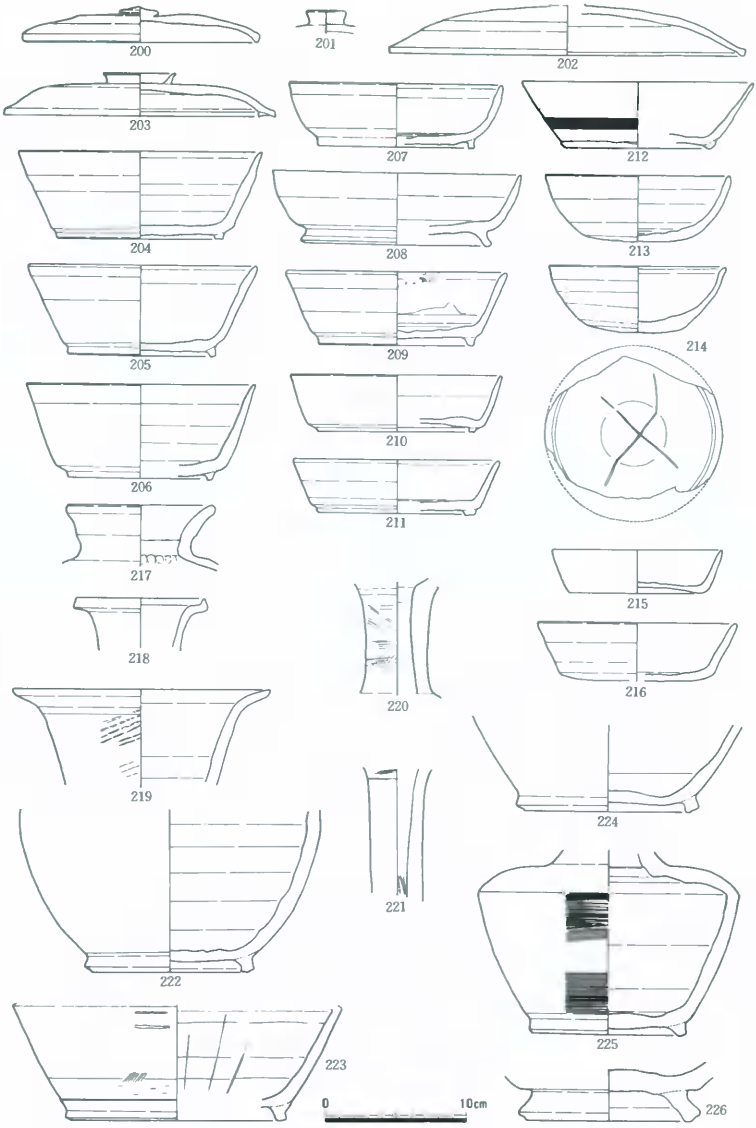
第20図　かまど２（1/6）

第21図　土師器１（1/5）

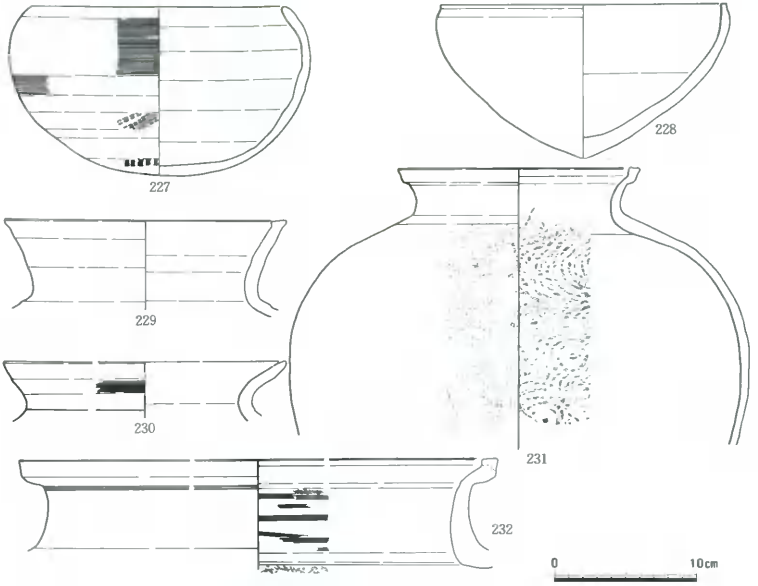
第22図　土師器２（1/4）



第23図　土師器３・瓦（1/4）


200
201
202
203
207
212
204
208
213
205
209
214
206
210
211
217
215
218
220
216
219
224
221
222
225
223
226
0
10cm

第24図　須恵器１（1/4）



第25図　須恵器２（1/4）

ては体部下端より２～３㎝飛び出し、炊き口前面がその分だけ浮くようになるか、あるいは飛び出した部分を土中に埋めてかまどを固定する役目があるのだろうか。なお、口縁内面とひさし外面には煤の付着がみられる。

土師器甕・鉢・こしき（第21・23図）

169～191は、**173**の５区を除いて、６区土器溜り・旧河道斜面から出土した甕である。**171・181・187**のように全形のわかるものもあるが、口縁部片が多い。底部は丸底で、粗いハケメ調整と指撫でをしている。外反する口縁の端部には２～３の型式がみえる。どれも煤付着。

192・193は、鉢。**194**は把手。**195**はこしきで、古墳時代のものと変わらない。

須恵器（第24・25図）

200～203は蓋で、**203**の口縁端部には返りが付く。**204～212**は高台付き杯で、奈良前期から平安初期まである。４～６区河道出土である。**213・214**は内湾杯で、**214**にはヘラ描き×印がある。**215・216**は外傾した杯である。**217～226**は壺で、**227・228**は鉢、**229～232**は甕である。

瓦（第23図）

196～199は古代に属す平瓦と丸瓦である。平瓦は縄目、丸瓦はヘラ削りである。

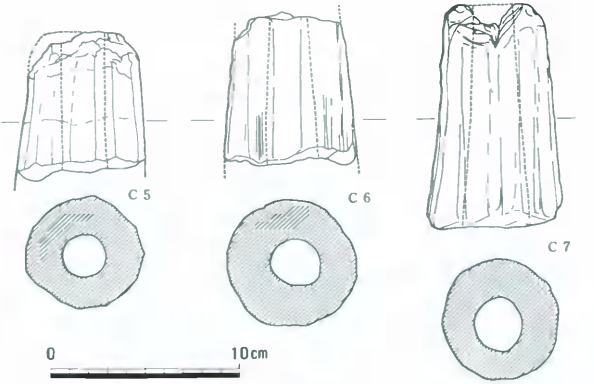
羽口（第26図）

表－９土製品一覧表に載せてあるように14点あり、６区土器溜りから大半出土している。

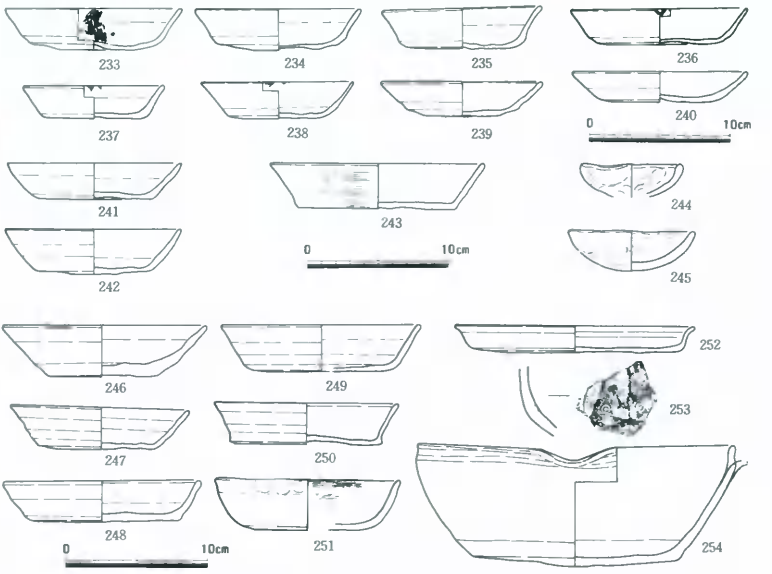
(3)河道

遺物（第27図）

233～240は３区旧河道から出土した杯で、**233・236～238**には灯芯の煤が付着している。**241～245**は４区から出土した杯・手づくねである。**246～254**は５区旧河道出土の杯・皿・高杯・片口鉢である。253の高杯片には竹管文が施されている。杯の形態は先に分類したものと大差がない。



第26図　羽口（1/3）



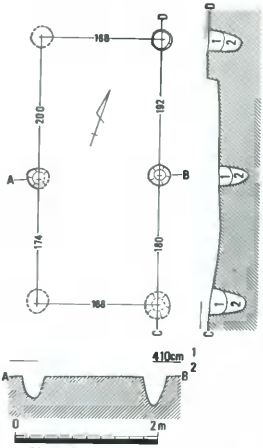
第27図　３・４・５区河道出土遺物（1/4）

４．中世の遺構・遺物

(1)建物

建物－１（第28図）

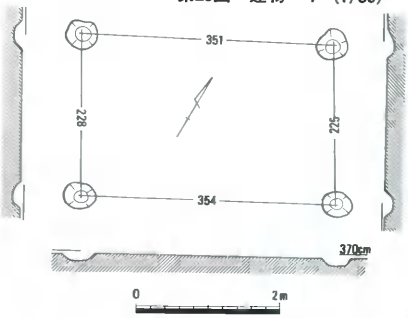
３区西北で検出した２間×１間の掘立柱建物である。棟方向は、北北西－南南東である。柱穴を４本検出し、北西隅の柱穴は側溝に、南西隅のは調査区外で検出できていない。柱穴の大きさは、直径30～38㎝、深さ42～50㎝を測る。柱痕跡は断面には認められない。柱間は梁行が168㎝、桁行が一定でなく174～200㎝ある。柱穴から遺物は出土していないが、土層から中世に建てられたものであろう。



第28図　建物－１（1/80）

建物－２（第29図）

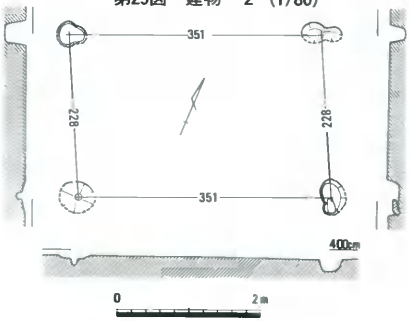
４区南部で検出した１間×１間の掘立柱建物である。棟方向は、北東－南西である。柱穴を４本検出した。円形あるいは不正円形で、大きさは、直径34～44㎝、深さ10㎝しかない。柱間は梁行が228・225㎝、桁行が351・354㎝を測る。柱穴から遺物は出土していないが、土層から中世に建てられたものであろう。



第29図　建物－２（1/80）

建物－３（第30図）

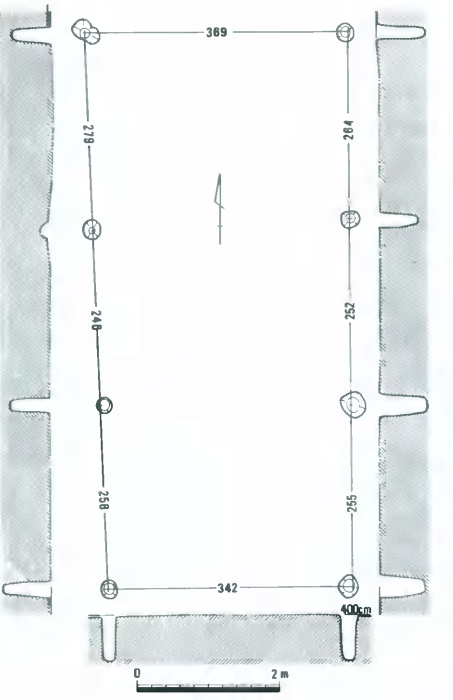
４区建物－２のすぐ南側で検出した１間×１間の長方形掘立柱建物である。棟方向は、北東－南西である。建物－２とほとんど同規模の建物である。南西隅の柱穴はわずか痕跡を残すのみ。後の３本は瓢箪形を呈しているので、ほぼ同じ位置にもう一軒建物が重複しているのであろう。遺物は出土していないが、土層から中世に建てられたものであろう。



第30図　建物－３（1/80）

建物－4（第31図）

5区南西部で検出した3間×1間の長方形大型掘立柱建物である。棟方向は、北－南である。柱穴は8本あり、円形あるいは隅丸方形を呈し、大きさは直径22～30cmと小振りだが、深さは一本を除いて平均60cmと深い。写真に載せているように柱痕跡が明瞭なものもある。建物全長8m・幅平均3.5mを測る。柱穴からは遺物は出土しているが、下層の土器であることが明らかで、周辺の柱穴および土層から中世に建てられたものと考えたい。



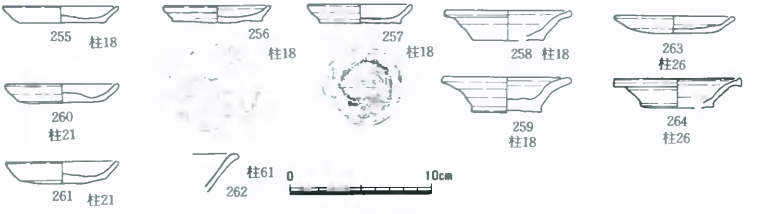
第31図　建物－4（1/80）

その他の柱穴（第1図）

野上田調査区の中で最も柱穴が集中して検出できたのは5区の南西部である。柱穴番号70番代を付けた。2区で20本弱、3区では建物以外ない。4区では10数本、6区は10本以下である。

柱穴出土遺物（第32図）

255～259は5区南端の柱穴18から一括出土した土師器皿である。256・257の底部には板目が付いている。258・259は少し変わった形態の皿である。蓋として使用したものか。260・261は5区柱穴21から出土した土師器皿である。262は5区柱穴61から出土した白磁の椀である。

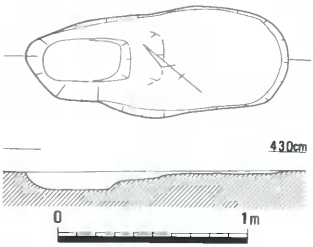


第32図　柱穴出土遺物（1/4）

(2)土壙

土壙－１（第33図）

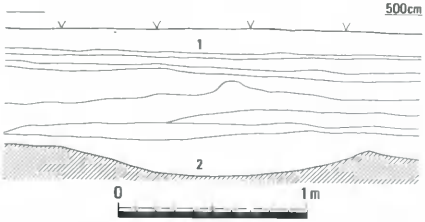
３区建物－１の北端で検出した長楕円形の土壙である。長軸は建物－１の棟方向と同様北北西－南南東である。三段掘りになっていて、北北西部が最も深く、長方形に掘り窪められている。長辺140㎝、短辺55㎝を測る。遺物は出土していないが、土層から中世に属すであろう。



第33図　土壙－１（1/30）

土壙－２（第34図）

３区建物－１の西端で検出した半楕円形の土壙で、調査区西断面に掛かっているため、この遺構の土層がどの時期か良く解る。中世の土層である。断面の位置での長さ160㎝、同深さ15㎝を測る。遺物は中世土器の細片しかでていない。

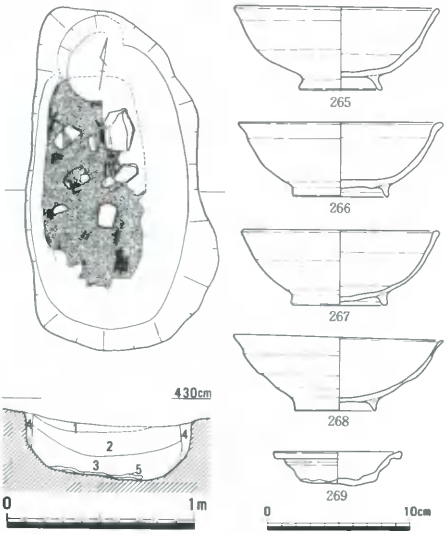


第34図　土壙－２断面図（1/30）

土壙－３（第35図）

５区西部で検出した長楕円形の土壙である。長軸はほぼ北－南にとる。検出面の長径180㎝、短径100㎝、深さ30㎝を測る。埋土は５層あり、床直上には炭化した藁むしろが敷かれていた。その上に**S11**の砥石・**265～269**の土器を含む第３層が堆積している。図の北端の円形にむしろが欠けているのは中世の柱穴に切り取られたもの。**265～268**は早島式土器

1．茶褐色粘質土
2．明褐色土
3．暗褐色土
4．褐色土
5．炭化したムシロ

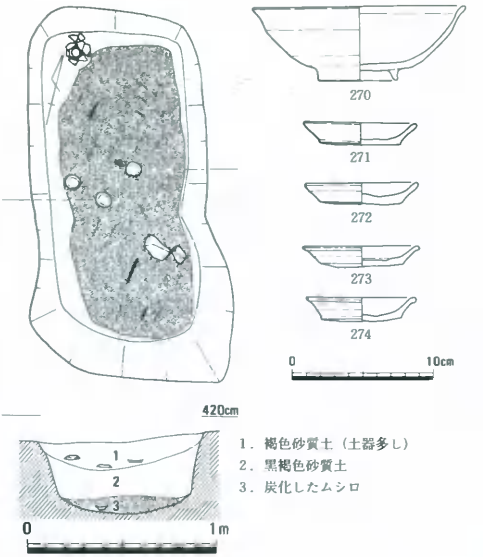


第35図　土壙－３（1/30）・出土遺物（1/4）

の椀で、269は土師器の皿である。これらの土器からこの土壙の廃絶の時期は鎌倉時代と言える。用途は不明。

土壙－4（第36図）

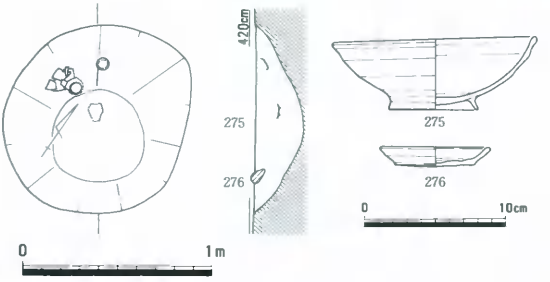
5区西部で土壙－3の1m北で検出した長方形の土壙である。長軸はほぼ北－南にとる。検出面の長辺200cm、短辺100cm、深さ40cmを測る。埋土は3層あり、床直上には炭化した藁むしろが敷かれていた。その上に274の土師器皿と角礫を含む第2層、その上に270～273の椀と皿を含む第1層が堆積していた。用途不明。廃棄の時期は土器から鎌倉時代と言える。



第36図　土壙－4（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙－5（第37図）

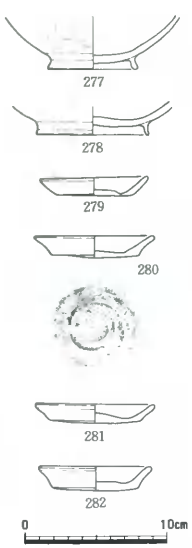
5区北西隅で検出した円形の土壙である。検出面の海抜高は420cm、直径は100cm、深さ25cmを測る。中央が深く、摺鉢形を呈している。埋土は1層だが、土器の出土状況を見ると2層に分けることが出来そうである。275の椀と276の皿が出土している。用途不明。土器から見て鎌倉時代に属する。



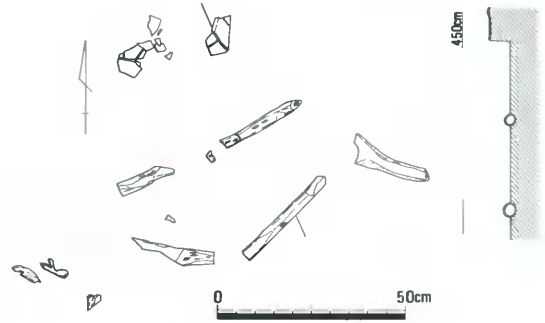
第37図　土壙－5（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙－6（第38図）

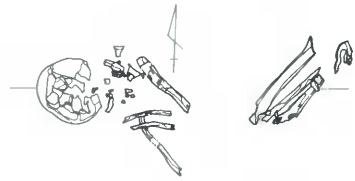
3区の北西端に検出した浅い溝状の土壙である。長さ100cm、幅60cm、深さ10cmを測る。長軸はほぼ北－南にとる。土器片が少量出土した。277・278は椀の底部で、279・282は皿である。これらの土器から鎌倉時代の遺構であることが解る。



第38図　土壙－７出土遺物（1/4）



第39図　墓－１（1/15）



第40図　墓－２（1/15）

(3)墓

墓－１（第39図）

４区建物－２の北側で検出した人骨である。

土器溜りもこの北側に存在し、人骨出土前に少量の拳大の円礫が出土している。おそらく墓壙上面に乗せていたものであろう。しかしその墓壙の掘り方は検出できなかった。人骨の鑑定はしていないが、左右の大腿骨・左右脛骨・指骨と考えられる。頭位は東方と考えるが、残存していない。時期は土器溜りの土器から鎌倉時代と推定したい。

墓－２（第40図）

５区中央部溝－４・５の交点北側で検出した人骨である。掘り方は検出できなかった。頭骨・～脛骨の内比較的厚みのある骨が残存し、屈葬であることが出土状態から明らかである。人骨の鑑定はしていない。頭位は西である。伴う遺物はなにも出土していないが、周囲の状況から見て、中世と推定したい。

(4)溝

溝－４（第41図）

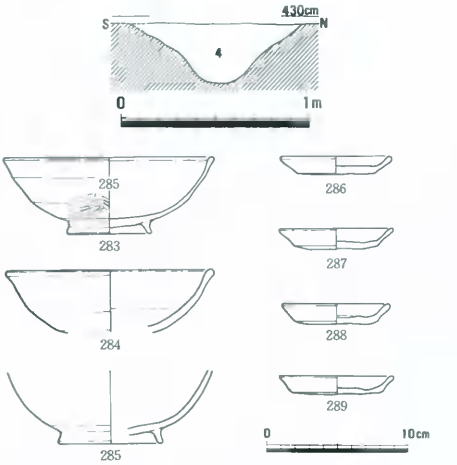
5区中央部で検出した溝である。突然始まり、溝－5に45度に注ぐ形で終わる。西から東に流れたのか、しだいに深みを増している。断面図は溝－5に近い位置で実測した。底の丸いV字形の断面形をしている。283～289は皿である。これらの出土土器から鎌倉時代に廃棄された溝と言える。

溝－5（第42図）

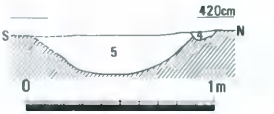
5区建物－4の北2～3m離れて検出した南東－北西にわずかに弧を描いて伸びる溝である。長さ11m、幅80cm、深さ20cmを測る。断面形は上部の広がったU字形を呈している。埋土は黒色土1層で、溝－4に切られていることが断面図で解る。遺物は出土していないが、中世の中に納まる。

溝－6（第43・44図）

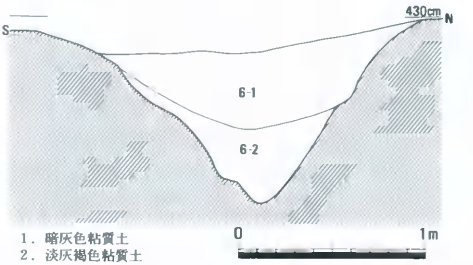
5区西北端から東中央部にかけてほぼ西－東に直線で伸びる溝である。長さ28m、最大幅200cm、最大の深さ100cmを測るしっかりした断面V字形の溝である。西の方は深くしっかり検出できたので4区でも検出出来るはずであるが出てこなかった。また、東についても次第に検出が困難になり、自然に消滅したのかあるいは溝－8に注ぎ込んだものか確認できなかった。土層は2層に分けられ、時間差がありそうだ。遺物は290～312の土師器椀・皿・片口付き鉢と296の白磁椀が西の深いところから集中的に出土した。これらの土器から廃絶の時期は鎌倉時代と



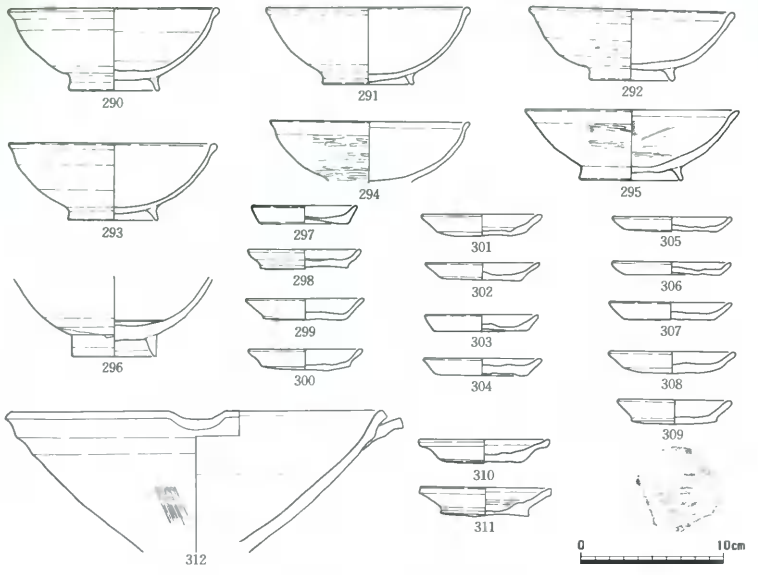
第41図　溝－4断面図（1/30）・出土遺物（1/4）



第42図　溝－5断面図（1/30）



第43図　溝－6断面図（1/30）

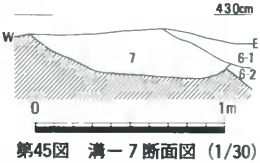


第44図　溝－６出土遺物（1/4）

言える。

溝－７（第45図）

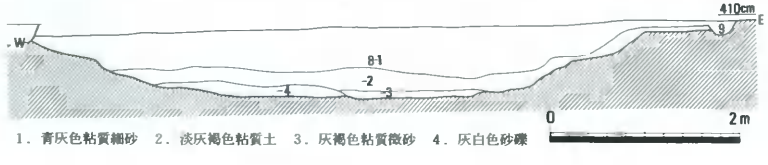
５区の西部にある建物－４のさらに西３ｍ離れて検出した溝である。北－南に右カーブを描きつつ建物－４の長軸と平行している。北端の土層断面を観察すると、溝－６の上層に切られ、下層を切っているようである。したがって溝－６とほぼ同時期と考えて良い。



第45図　溝－７断面図（1/30）

溝－８（第46・47図）

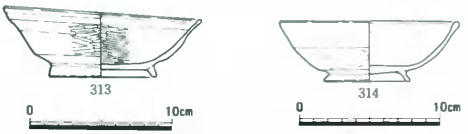
６区東部で検出した大溝である。北－南にわずか右カーブし、南端はかなり扇形に広がりを



１．青灰色粘質細砂　２．淡灰褐色粘質土　３．灰褐色粘質微砂　４．灰白色砂礫

第46図　溝－８・９断面図（1/60）

見せる。検出全長30m、北端断面での幅11m、同深さ70cmを測る。床は平坦で、その海抜高は330cmである。左岸は粘土質の壁で容易に検出出来たが、右岸は砂質の壁となり検出困難であった。床は礫層となり、絶え間のない湧水に悩まされた。**313**の土師器椀は完形で出ているが、古代のものらしい。また木器の大半がこの溝から出土しているが、下層に伴うものかもしれない。この溝の上層からは早島式土器片が出ているので、廃絶の時期は鎌倉時代であろう。



第47図　溝－8・10出土遺物（1/4）

溝－9（第46図）

6区溝－8の東70cm離れてほぼ平行して検出した細く浅い溝である。長さ20m、幅25cm、深さ15cmを測る。検出面は黒色粘土層で、海抜400cm。埋積土は溝－8の第1層と同じ青灰色粘質細砂である。したがって中世と考えられる。

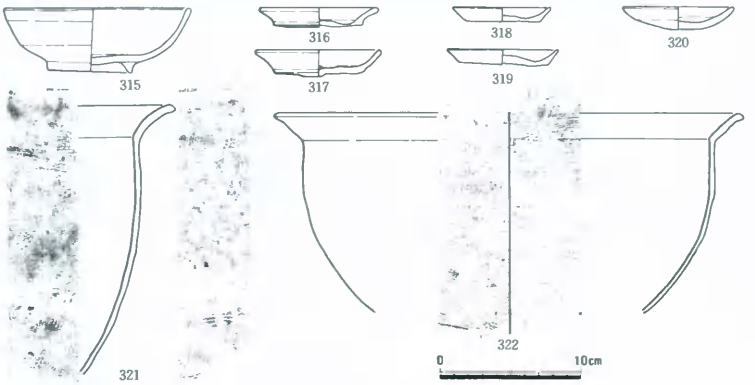
溝－10（第47図）

6区溝－8の上面でそれに直交して検出した細く浅い溝群で3条ある。長さ3～2m、幅30～40cm、深さ5～15cmを測る。中世後期の水田に伴う溝の可能性がある。遺物は**314**の早島式土器椀が出土しているが、溝－8に伴うものであろう。

(5)土器溜り

2区土器溜り（第1・48図）

2区中央部やや西寄りで検出した直径1mの範囲の土器溜りである。地表下60cmの深さで、



第48図　2区土器溜り出土遺物（1/4）

315～322の土器片が出土した。**315**は口径13.0cmと小振りな土師器椀で、**316～319**は小皿である。**320**も小皿であるが、形態が異なる。**321・322**は土鍋で、両面ハケメ調整している。これらの土器は中世後期のものである。

４区土器溜り（第１・49図）

４区建物－２の北、墓－１のさらに北側で検出した直径１ｍの範囲の土器溜りである。東に少し傾斜加減で掘り出された。建物－２・墓－１の時期決定に欠かすことができない。**323～334**が出土した。**323～326**は土師器椀、**327**は土師器小杯、**328～332**は土師器小皿、**333**は高台付き小皿、**334**は白磁小皿である。中世に入るものてある。

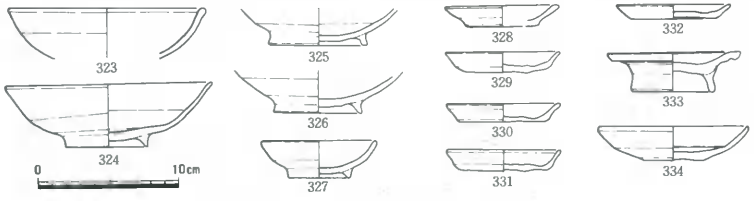
(6)包含層・その他出土遺物

５区包含層

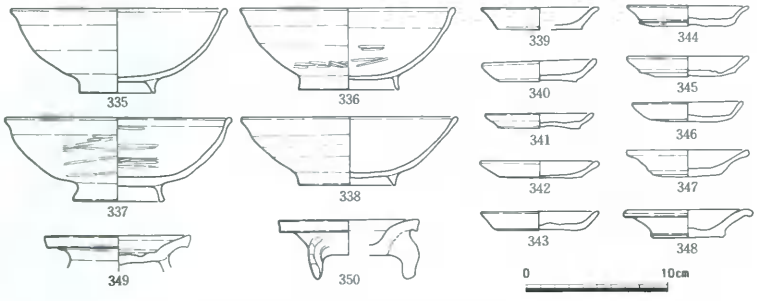
５区の西部に厚いところで20cm程中世土器をかなり大量に含む黒色土が見られた。この包含層から出土したのは土師器椀・同小皿・白磁椀・同小皿・青磁椀・同小皿・青白磁合子・土製品等である。この層を剝ぎ取った後、柱穴の検出ができた。

土師器（第50図）

335～348は主として５区包含層から出土している。**338・346**は６区、**348**は２区である。**335**



第49図　４区土器溜り出土遺物（1/4）



第50図　５区包含層出土遺物（1/4）

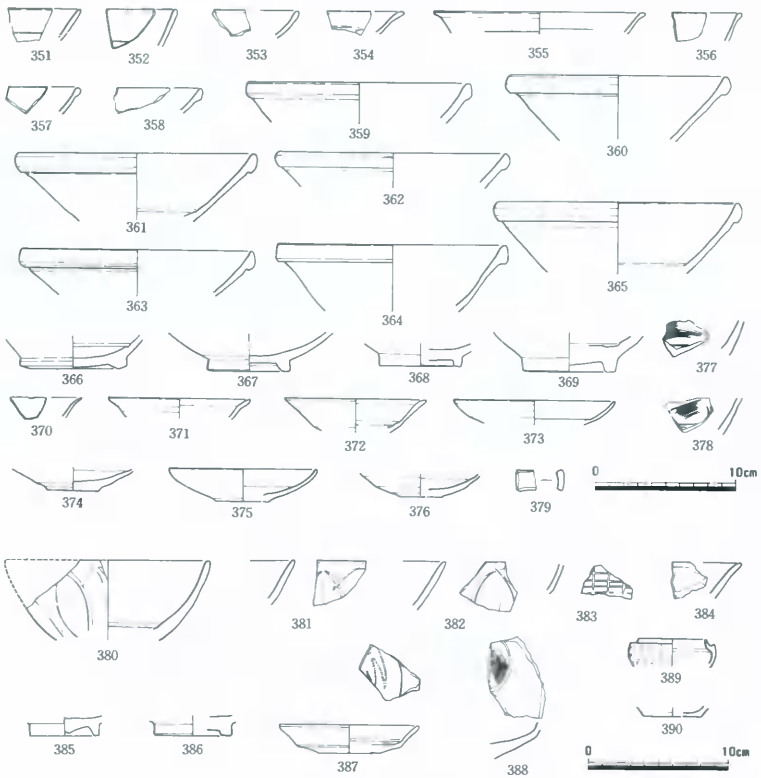
～338は椀、339～346は小皿、347・348は皿、349は高台付き皿、350は三足皿である。

白磁（第51図）

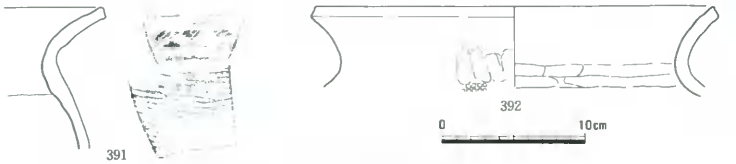
351～379が白磁である。１区～５区で出土している。しかし量的には５区包含層から最も多数出ている。白磁の全出土数は200点を少し超える。大型の破片は極めて少なくほとんど極小片と言って良い。中でも大型の破片を実測し、掲載した。椀には立ち縁・反り縁・玉縁（大）・玉縁（小）の４種類がある。皿には内湾縁と外反縁がある。内面ハケメも認められる。

青磁・青白磁（第51図）

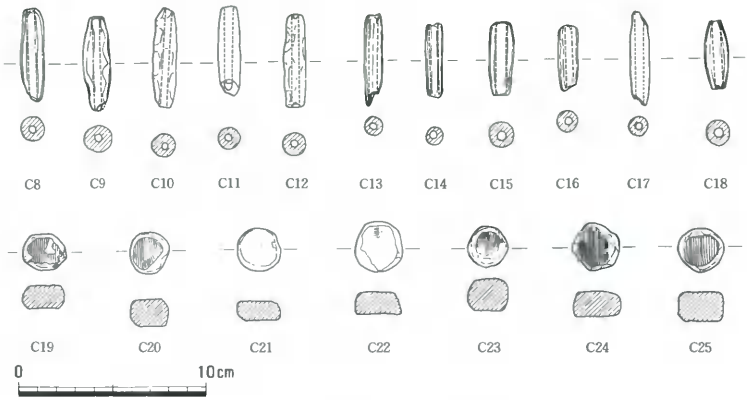
380～390が青磁・青白磁である。２～５区で19点しか出土していない。白磁出土数の10％である。このことから野上田調査区の時期が中世初期である証拠となる。椀の蓮弁も大きく古い



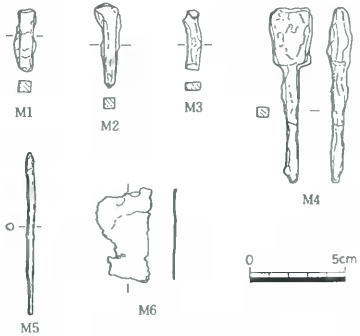
第51図　白磁・青磁（1/4）



第52図　須恵器（1/4）



第53　土製品（1/3）



第54図　金属器（1/3）

型式である。389の合子は細片である。

須恵器（第52図）

391・392は４・６区から出土した。391は外面平行叩き、392は格子目叩きを施している。口縁端は面をなす。

土製品（第53図）

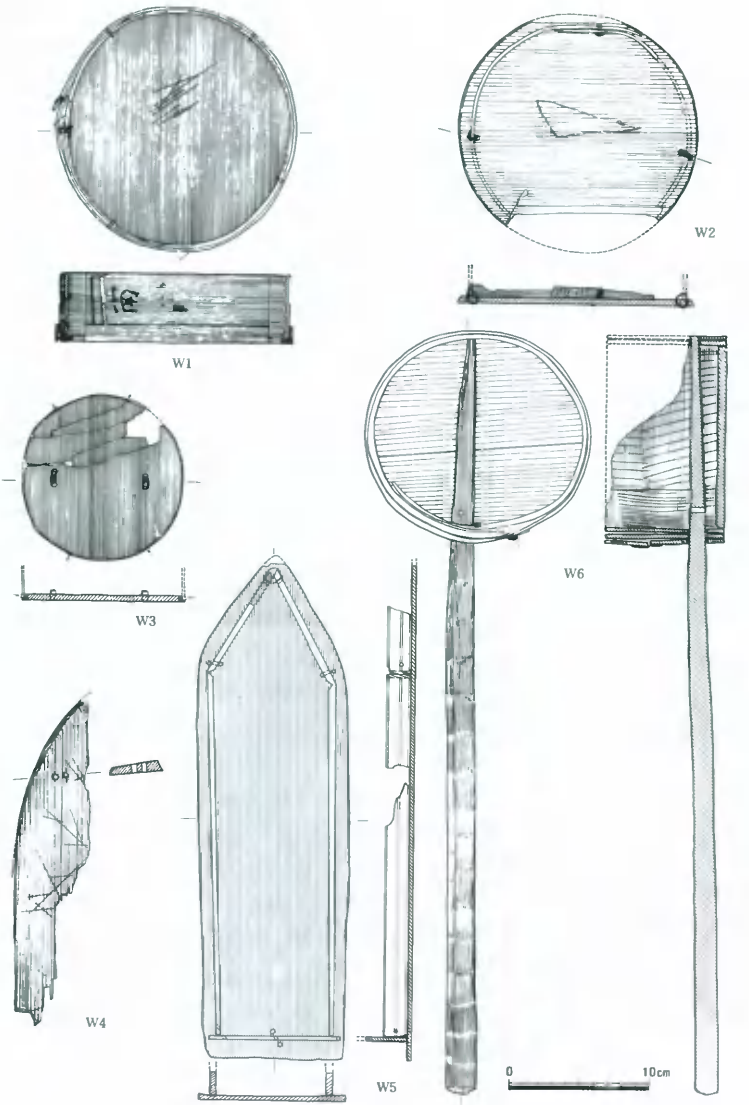
C8～C18は紡錘形円筒の土錘である。C19～C25は厚手の土器片を廃物利用した円板である。４～６区で出土。

金属器（第54図）

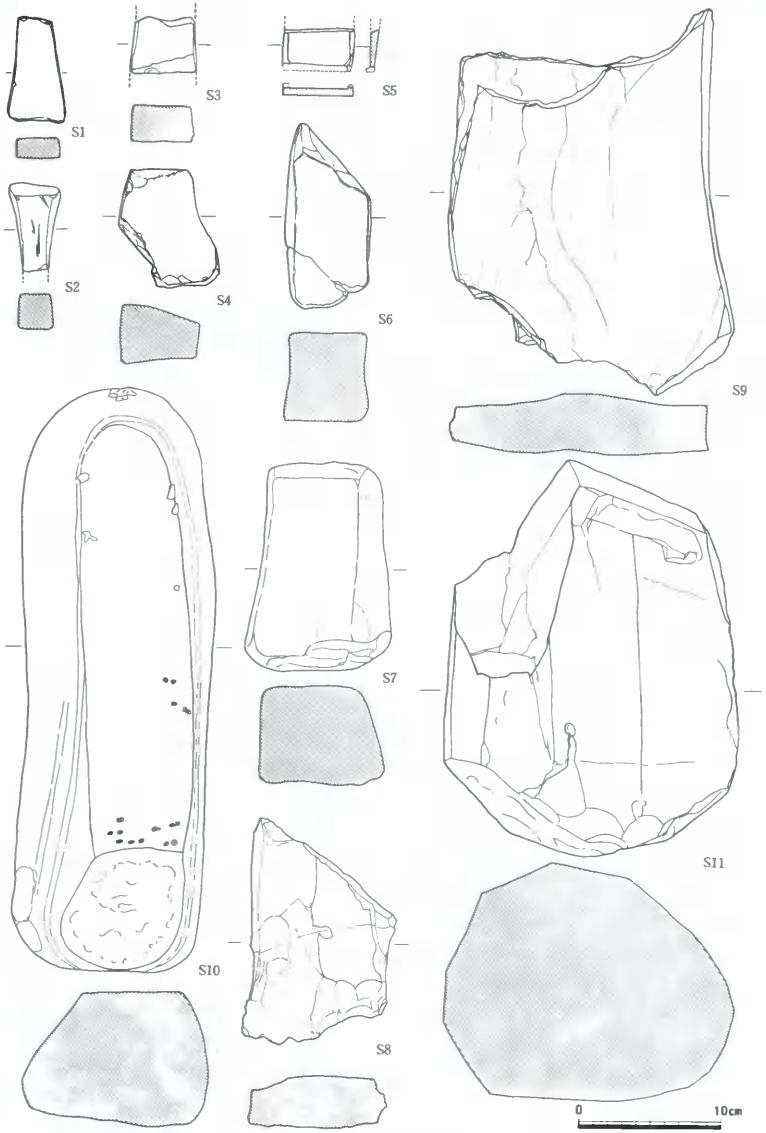
６区土器溜りから出ているので古代の可能性がある。釘・鏃？・針？・銅板がある。

木器（第55図）

W1～W6は６区旧河道から出土。W1の曲物外側には「南無阿・・・」？の墨書がある。W5



第55図　木器（1/4）



第56図　石器（1/4）

は舟、W6は杓である。畦柳氏の鑑定ではヒノキ・コウヤマキ・サクラを使用。

石器（第56図）

11点全て載せた。S1は5区柱穴62、S11は6区土壙－3出土。砥石・硯・金床？がある。詳細は一覧表参照。古代～中世を含む。

5．近世の遺構・遺物

(1)溝

溝－1（第1・57・58図）

2～6区を通じて調査区の中央部を貫通する溝である。現水田面がこの溝の上面で畦を伴い段差を有す。溝は東の一段低い水田下に検出できた。現水田の直前まで機能した用水路。

溝－2（第1・58図）

2～5区の溝－1下層で検出した溝。溝－1よりかなり古そうだが、中世には入らないようである水田に伴う用水路。幅は100cm前後、深さ50cmを測る。

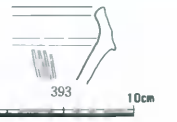
溝－3（第1・58図）

2区で検出した溝群を総称した。深さ5～25cmで、畑の畝立て溝であろう。

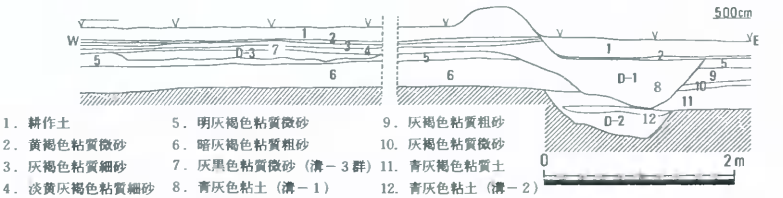
(2)包含層（水田層）

国産陶磁器（第59図）

大橋氏鑑定で、394は16Cの瀬戸天目、395は17C前半肥前陶

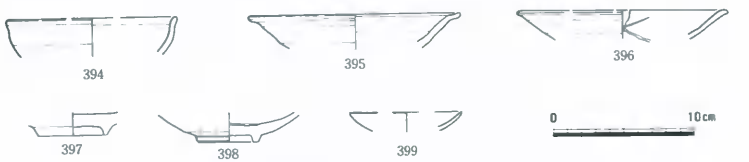


第57図　溝－1出土遺物（1/4）



1．耕作土
2．黄褐色粘質微砂
3．灰褐色粘質細砂
4．淡黄灰褐色粘質細砂
5．明灰褐色粘質微砂
6．暗灰褐色粘質粗砂
7．灰黒色粘質微砂（溝－3群）
8．青灰色粘土（溝－1）
9．灰褐色粘質粗砂
10．灰褐色粘質微砂
11．青灰褐色粘質土
12．青灰色粘土（溝－2）

第58図　溝－1～3断面図（1/60）



第59図　国産陶磁器（1/4）

器溝縁皿、396は肥前陶器皿、397は17C後半の肥前磁器椀、398は肥前磁器染め付け椀、399は陶器皿。２区出土品が多い。

６．小結

調査区の概要と遺構・遺物の概要で言葉が足らず言い尽せなかったことを加筆したい。

(1)弥生時代について

弥生時代の遺構は全く検出できない。土器は多数出土している。河道の中の砂礫層や古代の護岸施設の盛り土の中から角の取れた土器片として。明らかにかなり上流から土砂と共に流れ付いたものである。さてその元の遺跡はどこであろうか。高塚遺跡が有力である。貨泉・銅鐸の出土した弥生後期の集落跡である。

(2)古墳時代について

１区土器溜りが唯一の古墳時代の遺構といえる。他にはまとまって土器は出ていない。河道から少量須恵器が出土しているが、やはり高塚遺跡他から流れて来た物である。土器溜りの土器は一括資料としては良好である。甕・高杯の組合せで、５世紀前半の土器である。

(3)古代について

旧河道とその護岸施設および６区土器溜りが古代あるいはその前期に当たるであろう。旧河道の時期については少なくとも６区土器溜りが形成された平安時代中頃にはかなり埋まり、５区から７区の対岸までの50ｍの幅が40ｍ程になっていたと推定できる。護岸施設最下層のすだれ状遺構については奈良時代かあるいはそれよりやや古く飛鳥時代を当てたいが、対岸の７区・８区の杭列・小枝による土留め・スギ皮による土留め等の中から出土した最も新しい須恵器が７世紀前半ということから飛鳥時代で良いのではないだろうか。

６区土器溜りから出土した墨書土器に書かれた「倉」は国府・郡衙に伴う倉であろうか。また「上厨」は国府に関係する台所であろうか。とすると幻の備中国府がこの付近に眠っていることが十分考えられる。1992年「国厨」「郡厨」の墨書土器が揃って出土した遺跡が神奈川県平塚市で報道されている。「厨」は美作国府で出土している。

(4)中世について

掘立柱建物４棟・墓２基・土壙６基・溝７条・土器溜り２箇所・包含層１層等が検出されている。まとめていないが柱穴も多数ある。しかし古代につづいて調査区の東方は河道の残存した中世大溝－８の川岸をなしているため、しっかりした遺構は西方にのみ偏っている。中世包含層と柱穴その他の遺構が一番多いのは５区で、この区で河道がカーブし中世の基盤が安定していることによる。

(5)近世・現代について

調査区中央部に溝３条が検出でき、東方には一段低い水田が開発されている。そしてこの水田の段差はそのまま現代にも生き続けている。（浅倉）

表－２　建物一覧表

建物	規模	桁行cm	梁間cm	床面積m²	棟向	柱穴	区	時期	遺　物	備　考
1	２×１	372	168	6.25	南北	円形	３区	中世	椀細片	西２本無し
2	１×１	354	228	8.16	東西	円形	４区	中世	椀細片	図上復元
3	１×１	300	200	6.00	東西	円形	４区	中世	無し	図上復元
4	３×１	780	360	28.08	南北	円形	５区	中世	椀細片	完存・写真有

表－３　土壙一覧表　（単位cm）

土壙	区	長さ	幅	深さ	平面形	断面形	遺物	時期	備考
1	3	140	60	10	長楕円	皿	椀	中世	
2	3	－	130	10	楕円	皿	椀	中世	
3	5	180	90	30	長方	箱	椀皿	中世	炭筵
4	5	200	100	30	長方	箱	椀皿	中世	炭筵
5	5	100	100	35	円	椀	椀皿	中世	
6	3	100	60	10	長楕円	皿	椀皿	中世	

表－４　溝一覧表　（単位cm）

溝	区	長　さ	幅	深　さ	断面形	方向	遺　物	時期	備考
1	2～5	11,300	200	50	U字形	北西－南東	陶磁器	近世	
2	2～6	16,000	140	50	U字形	北西－南	陶磁器	近世	
3	2	1,300～300	20～120	5～30	U字形	不規則	陶磁器	近世	溝群
4	5	440	90	65	U字形	北西－南東	椀・皿	中世	
5	5	1,150	85	40	U字形	西－東	なし	中世	
6	5	2,400	200	100	U字形	西－東	椀・皿	中世	
7	5	2,500	140	50	U字形	南－北	椀・皿	中世	
8	6	3,000	650	70	U字形	南－北	椀・皿・曲物	中世	
9	6	2,000	30	15	U字形	南－北	なし	中世	
10	6	200～300	30～40	5～15	U字形	西－東	椀	中世	

表－5　木器一覧表

図番	名称	地区	遺構	樹種	長さ	幅	高さ	備考
W1	曲物	6区	旧河道	ヒノキ・コウヤマキ・サクラ	17.0	(13.5)	5.0	「南無阿…」墨書
W2	曲物	6区	旧河道	ヒノキ・コウヤマキ・サクラ	17.0	17.0	(1.4)	
W3	曲物	6区	旧河道	ヒノキ・コウヤマキ・サクラ	11.5	11.5	(0.4)	杓？
W4	桶	6区	旧河道	ヒノキ	(23.0)	(5.0)	(0.8)	
W5	舟	6区	旧河道	ヒノキ・スギ・サクラ	(35.0)	10.5	(3.4)	
W6	杓	6区	旧河道	ヒノキ・スギ・サクラ	54.0	16.0	8.6	

表－6　石器一覧表

図番	遺物	地区	遺構	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量mg	形状	時期
S1	砥石	5区	柱穴62	頁岩	74	40	14	729	長台形	中世
S2	砥石	4区	包含層	半花崗岩	62	36	36	1024	長台形	中世
S3	砥石	4区	包含層	流紋岩	40	47	31	825	方形	古代
S4	砥石	4区	包含層	半花崗岩	84	71	40	2,974	不定形	古代
S5	硯	2区	包含層	頁岩	25	50	6	169	方形	中世
S6	砥石	4区	包含層	半花崗岩	120	60	63	7115	方柱	古代
S7	砥石	2区	包含層	砂岩	149	85	84	1.9kg	方柱	古代
S8	砥石	6区	土器溜り	頁岩	160	108	36	7,989	台形	古代
S9	砥石	6区	土器溜り	砂岩	272	202	47	3.0kg	不定形	古代
S10	砥石	6区	土器溜り	砂岩	414	133	150	10.7kg	舟形	古代
S11	金床	6区	土壙3	半花崗岩	280	205	180	12.7kg	八角柱	中世

表－7　金属器一覧表

図番	遺物	地区	遺構	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量mg	形状	時期
M1	釘	6区	土器溜り	鉄	32	6	6	46	方柱	古代
M2	釘	6区	土器溜り	鉄	45	6	6	57	鉤形	古代
M3	不明	6区	土器溜り	鉄	31	8	5	30	方柱	古代
M4	のみ	6区	土器溜り	鉄	92	23	14	183	ヘラ状	古代
M5	不明	6区	土器溜り	青銅	84	4	4	28	釘状	古代
M6	板	6区	土器溜り	青銅	50	29	1	32	板状	古代

表－8　土製品一覧表

番号	図番	遺　物	地区	遺　構	材　質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量mg	形　状	時期
①	C 1	土錘	5 区	南トレンチ	灰褐色	43	26	26	253	太円管	弥生
②	C 4	〃	3 区	No 3 溝	黒褐色	71	15	12	156	棒状	古墳
③	C 8	〃	5 区	包含層	灰褐色	50	13	13	72	円管	中世
④	C 9	〃	〃	〃	黄褐色	50	15	14	95	紡錘円管	〃
⑤	C10	〃	〃	〃	茶色	54	12	12	70	〃	〃
⑥	C11	〃	〃	南端斜	淡茶色	48	12	12	63	〃	〃
⑦	C12	〃	〃	包含層	黒褐色	50	12	12	72	円管	〃
⑧	C13	〃	6 区	〃	褐色	49	10	10	44	〃	〃
⑨	C14	〃	5 区	〃	黒褐色	40	9	9	33	〃	〃
⑩	C15	〃	〃	中世溝 6	黄褐色	40	13	13	65	紡錘円管	〃
⑪	C16	〃	6 区	包含層	黒色	37	13	13	60	〃	〃
⑫	C18	〃	4 区	排土	黄褐色	33	11	11	35	円管	〃
13		〃	5 区	包含層	〃	31	11	11	31	紡錘円管	〃
14		〃	〃	中世水田	白色	21	15	15	27	〃	〃
15		〃	〃	中世水田	茶色	21	10	10	16	〃	〃
16		〃	〃	土壙 4	黒色	22	13	13	39	〃	〃
17		〃	〃	包含層	〃	28	11	11	35	〃	〃
18		〃	〃	中世溝 6	〃	18	11	8	17	〃	〃
19		〃	〃	〃	〃	30	10	10	28	〃	〃
20		〃	〃	〃	黄灰色	20	9	9	14	円管	〃
21		〃	〃	ST 1	白色	16	13	12	21	紡錘円管	〃
22		〃	〃	包含層	灰褐色	32	11	11	42	〃	〃
㉓	C 3	円板	3 区	〃	茶色	58	57	7	372	円板	弥生
㉔	C 2	紡錘車	5 区	ST 3	褐色	38	36	6	86	未通孔	〃
㉕	C19	円板	〃	包含層	淡茶色	23	19	13	69	円板	中世
㉖	C20	〃	4 区	〃	茶色	22	21	15	76	〃	〃
㉗	C21	〃	〃	〃	〃	24	23	10	76	〃	〃
㉘	C22	〃	5 区	〃	淡茶色	26	24	12	98	〃	〃
㉙	C23	〃	〃	中世溝 5	〃	22	21	16	87	〃	〃
30		〃	6 区	東水田層	灰褐色	28	25	13	127	〃	〃
㉛	C24	円板	5 区	中世溝 6	淡茶色	24	22	14	94	〃	〃
㉜	C25	〃	〃	土壙 3	赤褐色	23	22	16	108	〃	〃

番号	図番	遺　物	地区	遺　構	材　質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量mg	形　状	時期
33		円板	5区	包含層	黄褐色	25	20	13	85	円板	中世
34		〃	〃	〃	茶色	19	19	13	53	〃	〃
35		土錘	6区	河道斜	淡茶色	50	11	11	54	紡錘円管	〃
㉟	C5	羽口	〃	〃	茶灰色	82	63	63	2495	〃	〃
37		〃	〃	〃	〃	69	57	—	1100	〃	〃
㊳	C6	〃	〃	平安土器溜り		82	70	87	330.4	〃	〃
㊴	C7	〃	〃	〃		120	71	65	395.8		〃
40		〃	〃	〃　中央		81	57	21	103.9		〃
41		〃	〃	〃　〃		49	64	17	61.5		〃
42		〃	〃	〃 集小礫周辺		63	68	31	106.8		〃
43		〃	〃	西端		54	48	13	62.8		〃
44		〃	〃	旧河道斜面		43	57	23	55.1		〃
45		〃	〃	〃　西中央		—	—	13	24.7		〃
46		〃	〃	〃　堆西中央		55	51	21	66.7		〃
47		〃	〃			36	25	13	12.2		〃
48		〃	〃	平安土器溜り北集小礫周辺		62	39	15	36.3		〃
㊾	C17	土錘	〃	西トレンチ		50	10	10	5.0		中世
50		羽口	丸田	-100～-120		85	66	28	120.5		古代

第３章　調査のまとめ

第１節　三手・津寺遺跡の性格について

三手遺跡の性格について

第二次全面調査によって本報告の三手遺跡のまとめのように概要が明らかになった。向原調査区では東からの微高地上の中世集落には当たっていた。その西と南には中世水田の存在も予測通りに検出できた。新たに検出できたものは、北西端に古墳時代の微高地と竪穴住居および中世墓群がある。また旧河道の中からは多量の弥生から古墳時代の土器が出土していること。この河道の斜面に水神を祭ったと考えられる一括土師器の出土は津寺遺跡野上田調査区１区でも同様にある。中世墓群は向原Ⅰ・Ⅱ区で検出でき、中世集落から少し離れている。しかし、それらは津寺遺跡土筆山調査区・丸田調査区の中世墓のような副葬品を持たず、人骨のみ出土している。

津寺遺跡の性格について

津寺遺跡の性格について調査区毎にまとめてみよう。

土筆山調査区は北部・中部・南部と性格を異にする。北部は中世前期の墓地と中世後期以降の水田である。中世墓には和鏡・白磁等を副葬するものがある。中部は中世後期を中心とした方形区画溝に囲まれた集落である。この集落は東方に展開するようである。南部は古代末期以降の水田である。

丸田調査区は古代末から中世後期の遺物を大量に出土するが、中心は中世前期の集落と墓地である。ここの集落は溝に囲まれていない。時期の違いがこのことでも解る。中世墓の中には鍛冶道具を副葬しているものもある。

野上田調査区は１～10区に分けている。しかし旧河道などの遺構・現地形上６区までで分離するのが便利である。１～６区は旧河道右岸に位置する中世前期の集落末端部である。古代には右岸堤防部分である。古代末に河道が埋まりはじめ、そのある時期に墨書土器を含む土器溜りが形成された。

以上土筆山から野上田.6区までは古代旧河道右岸に位置し、古代は役所的領域にあり、中世は武士団的集落・墓地・水田領域にあり、近世以降水田領域であった。　（浅倉）

第2節　旧河道右岸の構造について

野上田調査区5区で検出したすだれ状遺構・杭列・しがらみ及び同調査区6区で検出した土手状遺構については、それぞれの項目で詳しく説明している。また野上田調査区の小結において「古代について」の項目でこれらの施設を再度説明した。ここでは更にこの施設の重要性を確認してみたい。

調査の手順として上層から掘削して行くため、まず4区の土手状遺構が現われる。これは天幅数m、下幅10m以上を測り、同時期の河道底の礫床まで2m近い落差を持っている。この遺構は右岸堤防と考えて良い。実際にはこのうえに草木など繁茂していたものであろう。

つづいて下層に掘進めていくと5区ではすだれ状遺構が検出される。2m以上の長い葦を束ねたものを解して扇形に開き、数束広げて敷き詰め、その上を俗称「ネズミサシ」の堅く弾力のある小枝で横押さえしている。その葦敷きは多い所で6層を数えることができた。葦敷きと葦敷きとの間は砂礫を10cmほど挟む部分と全く挟んでいない部分もあった。

杭は一列しか検出できなかった。と言うより当初から一列しか打ち込まなかったものであろう。5区と6区の南端部分しか打っていないし、南部は太いが北部は細いアラカシを使っている。すだれのほぼ中心線を通過し、すだれの上から打ち込んでいる。最南端には杭に小枝でしがらみを巻いている。

旧河道は5区で大きく右カーブしている。したがって水流は攻撃面が7区・8区に当る。当然その部分は削り取られ、抉り取られるはずである。そのためもし左岸側に守るべき集落なり重要な建物などの施設があるなら、あるいはこれから建築計画があれば、左岸の護岸は強固に築くはずである。まさにそうした護岸施設が7区・8区において検出されたのである。数千本の杭列である。詳しくは後年発刊の津寺遺跡2の報告書を参照されたい。

5区の杭列と7区の杭列西端との距離は55mを測る。したがってこの旧河道の幅は50m以上あったことになる。改修の完了した現在の足守川がほぼ50mあるのでこの旧河道は当時としては非常に大きな川であっただろう。古足守川と呼んでもさしつかえないだろう。

時期については6区土器溜り出土土器から古代末すなわち平安時代よりかなり古いと言うことが出来る。この河道が埋まっていくある時期に土器溜りが形成され、ほとんど埋まって幅10mほどの溝になったのは中世前期すなわち鎌倉時代と言える。しかし、杭列・すだれ状遺構・しがらみ等の護岸下部施設と上部の土手が築造された時期は奈良時代を含むそれ以前としか6区までの調査では判明しない。7区の杭列の調査では7C前半の築造と考えているようである。その根拠は後年発刊の報告書に待ちたい。　（浅倉）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　90
山陽自動車道建設に伴う発掘調査
9
（本　　文）

１９９４年３月20日 印 刷
１９９４年３月31日 発 行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
発行　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
　　岡山県教育委員会
印刷　サンコー印刷株式会社

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　90

山陽自動車道建設に伴う発掘調査 9

三手遺跡
津寺遺跡

（付編・図版）

1994・3

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　90

山陽自動車道建設に伴う発掘調査 9

三手遺跡
津寺遺跡

（付編・図版）

1994・3

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

岡山県教育委員会

山陽自動車道建設工事に伴う発掘調査による岡山工事区出土の人骨ー平安時代人骨

池田　次郎

岡山県古代吉備文化財センターが、昭和62年度～平成２年度に実施した山陽自動車道建設工事に伴う発掘調査により、岡山工事区内の６遺跡で弥生時代以降中世に至る各時代の人骨が検出された。本稿では、そのうちの平安時代の人骨について報告する。

(1)三手遺跡

向原Ｉ区（土壙墓－１）

頭を南東に向け、伸展位で埋葬されている。脳頭蓋、下顎骨、右上腕骨、左右の脛骨だけが遺存しているが、長骨はいずれも骨体片で、しかも表面が剝離している。成人骨であるが、性および詳しい年齢は推定できない。

(2)津寺遺跡

丸田Ｉ区２号墓（土壙墓－２）

破損が著しく、痕跡的に残っている頭蓋冠と上顎骨の破片で、上顎骨には右の第１・第２大臼歯が釘植している。第１大臼歯の磨耗はブロカの２度、第２大臼歯のそれは１度と弱い。若年もしくは壮年前半と推定されるが、性別は不明である。

山陽自動車道建設工事に伴う発掘調査による岡山工事区出土の人骨－中世人骨

池田　次郎

岡山県古代吉備文化財センターが、昭和62年度～平成２年度に実施した山陽自動車道建設工事に伴う発掘調査により、岡山工事区内の６遺跡で弥生時代以降中世に至る各時代の人骨が検出された。本稿では、その大部分を占める中世人骨について報告する。

１．人骨の遺存状態と性、年齢の推定

(1)津寺遺跡

土筆山１区１号墓（中世墓－４）

左の側頭骨、前頭骨の左眼窩上部から左の頬骨にかけての頭蓋骨片と左上腕骨、寛骨、左右の大腿骨と、下腿骨が残存する。上腕骨、寛骨は小破片で、下肢長骨は骨体の大部分を残すが、形態特徴が明らかな骨は大腿骨だけである。

大腿骨は細くきゃしゃで、女性成人骨と推定されるが、確かではない。

土筆山１区２号墓（中世墓－３）

残存する骨は、頭蓋骨、寛骨と上肢、下肢の主要な長骨である。頭蓋骨では、脳頭蓋の後半分はほぼ完形を保っているが、顔面頭蓋は著しく変形している。下顎骨は関節突起、筋突起を欠き、骨体の破損も著しい。

寛骨は小破片で、その形状から性を判別することはできないが、頭蓋の外後頭隆起はきわめて強く、下顎骨は頑丈で、左右の大腿骨と左脛骨は著しく太いなど、男性的特徴が顕著に認められる。矢状縫合全部と人字縫合ラムダ部が消失しており、下顎大臼歯の歯槽が閉鎖しているところから、被葬者は熟年後半もしくは老年の男性と推定される。

土筆山１区５号墓（中世墓－２）

頭蓋骨、上肢と下肢の主要な長骨以外に椎骨、寛骨が痕跡的に残存する。頭蓋骨は破損が著しく復元できない。下顎骨も関節突起、筋突起、骨体底部を欠き、歯は脱落もしくは歯根を残すだけである。四肢長骨はいずれも骨端を欠損し、左の大腿骨と脛骨が比較的よく残っている。

大腿骨、脛骨とも細く、女性成人骨と推定される。

土筆山1A区７号墓（中世墓－１）

頭蓋骨、肋骨、上腕骨、前腕骨、手骨、寛骨、大腿骨、下腿骨など比較的多くの骨が遺存するが、頭蓋骨、右寛骨、左脛骨以外はほとんど痕跡を残すだけである。脳頭蓋は変形が著しく復元することはできない。残存する上顎骨歯槽突起と下顎骨骨体には、上顎左右の第２小臼歯、右の第１・第２大臼歯、下顎左の第２大臼歯と右の犬歯、第１大臼歯が釘植しており、上顎右の側切歯、下顎左右の第２小臼歯、右の第１小臼歯、第２大臼歯の歯槽は閉鎖している。

右寛骨の形状から女性と判定される。大臼歯の磨滅は激しく、歯槽閉鎖が多くみられるところから、熟年骨と推定される。

土筆山２区拡張区３号墓（中世墓－５）

脳頭蓋、下顎骨、左右の上腕骨、前腕骨、大腿骨、下腿骨が残存するが、骨体の大部分を残す大腿骨以外は破損が著しい。

大腿骨も骨体表面が剝離しているが、細くきゃしゃで、成人女性骨と考えられるが、確かではない。

土筆山２区拡張区４号墓（中世墓－６）

遺存する骨は、頭蓋骨、左右の上腕骨、前腕骨、大腿骨、脛骨である。頭蓋骨では、右の側頭骨と後頭骨を含む脳頭蓋の一部と、ともに変形の著しい顔面頭蓋と下顎骨骨体の大部分が残っている。下顎骨にはすべての歯が釘植しているが、左右の第３大臼歯を除き歯冠が破損している。四肢長骨はいずれも骨体破片で、表面が剝離している。

四肢長骨は全般的に細くきゃしゃで、第３大臼歯の磨耗が弱いので、壮年女性と推定されるが、確かではない。

土筆山4a区１号墓（中世墓－７）

頭蓋骨と左右の主要な上下肢骨が残存する。頭蓋骨は、脳頭蓋の右半分と破損が著しい顔面頭蓋、左下顎枝を欠く下顎骨とからなる。上、下顎骨には第３大臼歯以外の歯が釘植しているが、歯冠が観察できたのは第１・第２大臼歯だけである。大腿骨以外の四肢長骨は、骨体の小破片、もしくは土圧のため変形している。

下顎骨体はきわめて高く、大腿骨は太く、粗線、殿筋粗面の発達は顕著である。大臼歯の磨耗は弱い。壮年男性骨と推定される。

土筆山4a区２号墓（中世墓－８）

脳頭蓋と大腿骨など四肢長骨のいずれも小破片である。

成人骨とみられるが、性、年齢の推定はできない。

土筆山５区21号墓（中世墓－11）

ほぼ全身の骨格が残っているが、いずれも破損が著しく、形態特徴がわかる骨はきわめて少ない。

寛骨の形状から男性と判定され、下顎歯の磨耗が弱いので壮年と考えられる。

土筆山５区22号墓（中世墓－12）

下顎骨、寛骨、四肢長骨が残存するが、保存状態はきわめて悪い。

下顎骨に釘植する左の第２大臼歯や遊離歯として検出された上顎左の第１・第２大臼歯、下顎右の第２大臼歯には、ほとんど磨耗が認められず、四肢骨も小形である。13歳前後の小児骨と推定される。

土筆山５区31号墓（中世墓－14）

ほぼ全身各部の骨が残存し、骨質は比較的堅牢で、とくに下肢骨の保存状態が良好である。頭蓋骨では頭頂骨と後頭骨の破片と下顎骨が残っており、下顎骨には左右の第１・第２小臼歯と第３大臼歯、右の第２大臼歯が釘植し、左の第２大臼歯の歯槽は閉鎖している。四肢長骨はいずれも骨端を欠く。

寛骨の破片からの性判定はできない。下顎骨骨体は高く、厚く、頑丈で、下肢長骨は太く、大腿骨の粗線や殿筋粗面も強いなど男性骨の特徴が明瞭に認められる。第３大臼歯の磨耗が強いところから壮年後半ないし熟年前半の男性骨と推定される。

土筆山６区１号墓（中世墓－15）

頭蓋骨の左半分と左下顎枝を欠く下顎骨、主要な四肢長骨のほか、椎骨、寛骨、指骨の断片が残存する。頭蓋骨と下顎骨は土圧のため変形が著しいが、上・下顎骨には上顎左の小臼歯、大臼歯と歯槽が閉鎖している下顎左の第２大臼歯以外の歯が釘植している。四肢長骨はすべて骨端を欠損する。

大腿骨、脛骨は太く、長骨の筋付着部は強い。大臼歯の磨耗はブロカの２度である。壮年男性骨と推定される。

土筆山６区２号墓（中世墓－16）

頭蓋骨と左右の大腿骨骨体が遺存する。頭蓋骨は顔面の左半分を欠損し、大腿骨とともに土圧による変形が著しい。上顎右の第１大臼歯と下顎左の第２小臼歯、第１・第２大臼歯が検出されている。

大臼歯の磨耗度はブロカの２度で、壮年骨と推定されるが、性は判別できない。

土筆山６区３号墓（中世墓－17）

脳頭蓋、右上顎骨、下顎骨の右半分と大腿骨など長骨の破片が残存する。上顎骨と下顎骨には、左の乳犬歯、第１・第２乳臼歯が釘植しており、永久歯の第１大臼歯はまだ萌出していな

い。５歳前後の幼児骨と推定される。

土筆山７区南（旧市道下）（中世墓－18）

橈骨、尺骨、脛骨、腓骨など長骨骨体の小破片が残存する。

性、年齢不明の成人骨である。

土筆山８区東１号墓（中世墓－19）

成人の椎骨、肋骨、大腿骨の破片が残っているだけである。

丸田ＩＥ区１号墓（土壙墓－１）

手骨、足骨、膝蓋骨を除く全身各部の骨が遺存するが、椎骨、肋骨など胴骨の破片は少ない。頭蓋骨は頭蓋冠の一部、下顎骨は左骨体の大部分を残し、大臼歯の歯槽は閉鎖している。四肢長骨のうち、骨体の大部分を残す大腿骨と上腕骨以外は骨体の小破片で、上腕骨の骨体表面は剝離している。

寛骨の大坐骨切痕から男性と判定されるが、それ以外、側頭骨の乳様突起が大きく、大腿骨は太く頑丈で、粗線の柱状性が著しく発達しているなど男性骨の特徴が明瞭に認められる。下顎左大臼歯の歯槽が全部閉鎖しているところから熟年もしくは老年と推定される。

丸田ＩＥ農区７号墓（土壙－29）

遺存する骨は、脳頭蓋、上腕骨と大腿骨の骨体の破片だけである。

四肢骨は太く、成人男性骨と推定されるが、確かではない。

丸田Ⅱ区３号墓（土壙墓－３）

土圧のため歪みが著しい頭蓋骨だけが残存する。上下顎骨に釘植している歯および遊離歯を含め、上顎左の側切歯、第１小臼歯、下顎の左第１・第２小臼歯、第１大臼歯、右の中切歯、第２・第３大臼歯以外の歯が遺存する。

大臼歯の磨耗度はブロカの２度で、壮年と推定されるが、性の判別はできない。

丸田Ⅲ区火葬墓

頭蓋骨を除く１体分の全身各部の骨が残存する。焼骨特有の亀裂や捩れなどの変形は比較的軽微である。

左上腕骨の下端幅50㎜は、焼成による骨の縮小を考慮すると大きく、成人男性骨と考えられるが確かではない。

丸田Ⅲ区２号墓（土壙墓－４）

手骨、足骨以外の骨が残存するが、椎骨、肋骨など胴骨は少ない。頭蓋骨は歪みが著しく、上顎骨に釘植する左の中切歯から第２大臼歯までの歯が観察できる。骨体の大部分を残す左大腿骨以外の四肢長骨は、変形しているか、もしくは骨体の小破片である。

左寛骨の大坐骨切痕の形状から男性と判定できる。大臼歯の磨耗が弱いので壮年であろう。

丸田Ⅲ区１号墓（土壙墓－５）

頭蓋骨、左右の上肢骨、寛骨、大腿骨、左の脛骨が残存するが、いずれも破損が著しい。

脛骨は細く、成人女性骨と推定される。

丸田ⅣA区３号墓（土壙墓－６）

保存状態は比較的良好で、頭蓋骨、上肢と下肢の主要な長骨のほか、椎骨、肋骨、寛骨の小破片が残っている。脳頭蓋はほぼ完全であるが、土圧による変形が著しい。顔面頭蓋は左半分がなく、右半分も破損しており、比較的残りがよい下顎骨も骨の表面が剝離している。上顎骨には左の中切歯と側切歯が、下顎骨には左の犬歯、第１・第２小臼歯、第１大臼歯、右の第２大臼歯が釘植している。四肢長骨では左右の大腿骨と脛骨は骨体の大部分を残すが、それ以外は骨体の小破片である。

寛骨破片からは性の判別はできない。大腿骨は短く、太さは中程度であるが、粗線の発達は強い。大臼歯の磨耗度はブロカの２度で、壮年男性骨と推定されるが、性別に関しては断言できない。

中屋H2区４号墓

右の側頭骨と上顎骨、下顎骨骨体の破片のほか、右の上腕骨と前腕骨、左右の大腿骨と脛骨、左腓骨が残存する。上顎骨には右の犬歯から第２大臼歯まで、下顎骨には右の中切歯から第２大臼歯までの歯が釘植している。右大腿骨だけが骨体の大部分を残しているが、それ以外の四肢長骨は骨体の小破片である。

歯冠のサイズは小さく、大腿骨は細く、柱状性が弱いので女性と推定される。大臼歯の磨耗は軽微で、壮年骨とみられる。

中屋H2区５号墓

残存する骨は、頭蓋冠、下顎骨骨体、右の橈骨と尺骨、寛骨破片、左右の大腿骨と脛骨である。頭蓋冠は土圧のため左右に押し潰されている。四肢長骨はいずれも骨体の小破片で、右脛骨だけが比較的残りがよい。

脛骨は太く、成人男性骨と推定される。

中屋P4区５号墓

成人の大腿骨骨体破片だけが遺存する。性、年齢とも不明。

中屋P4区７号墓

右の頭頂骨と側頭骨、後頭骨の一部、左右の大腿骨と脛骨の骨体破片が残存する。

大腿骨、脛骨とも骨体表面が剝離しているので計測できないが、太く頑丈で、成人男性骨の可能性が高いが、確かではない。

中屋E1区１号墓

残存する脳頭蓋骨と左頬骨の破片は、ネズミ色を呈し、焼骨特有の亀裂がみられる。７本の永久歯も歯根だけである。成人骨であるが、性の判別はできない。

中屋E1区３号墓

全身骨格の大部分が残存するが、骨の保存状態はきわめて悪く、観察できた骨は下顎骨だけである。下顎の大臼歯は左右ともなく、その歯槽は閉鎖している。下顎体は低く、下顎枝角が大きいので、老年骨と推定されるが、性は判別できない。

中屋E1区７号墓

保存状態は、調査地区出土の中世人骨の中で最も良好である。

頭蓋骨の右半分はよく残っているが、左半分は破損している。下顎骨は左の下顎枝と下顎骨体底の一部を欠く。第３大臼歯を除く全歯が上、下顎骨に釘植する。椎骨と左右肋骨の破片、右鎖骨の骨体の大部分、右肩甲骨の外側部破片、近位端を欠く左右の上腕骨と左の尺骨、遠位端を欠損する右の橈骨と尺骨、左橈骨の骨体破片、左の中手骨と指骨など上肢骨の残りはよい。下肢骨では、左右の寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨と足骨が残存し、寛骨は腸骨の大部分、左右の大腿骨と腓骨、左の脛骨は両骨端を、右の脛骨は近位端を欠損する。

寛骨の形状から女性と判定される。歯の磨耗は軽微で、大臼歯の咬頭も明瞭に認められるので、壮年前半のものと推定される。

中屋M8Ⅰ区92号墓（No.92）

上下左右の永久歯と乳歯が20数本検出された。永久歯の萌出状態は不明であるが、それらの歯根形成の完了しているものがないので、６～８歳の幼児のものと推定される。

野上田８区19号墓

２個体分の頭蓋骨と多数の四肢長骨が土壙墓の北東隅に集中しており、それからやや離れた所に大腿骨、脛骨とみられる長骨が残存する。

２個の頭蓋骨は重なりあっており、脳頭蓋と顔面頭蓋上部を残している。上のものは眉間の隆起が強いので成人男性骨とみられるが、下のものは脳頭蓋の右半分が痕跡的に残っているだけで、性別不明の成人骨である。

四肢長骨では、左上腕骨２体分、太く頑丈な左大腿骨と細くきゃしゃな左脛骨の骨体が計測に堪えるほど残りがよいが、それ以外に右上腕骨、橈骨、右大腿骨、脛骨その他同定不能の四肢骨骨体破片がある。

男女各１体と推定される成人２体の遺骨が改葬されたものと考えられる。

野上田９区東11号墓

全身骨格の大半が残存するが、骨の変形が著しく、骨質も脆弱であり、復元できる骨はない。

寛骨の形状は女性らしく見えるが、確かではない。第３大臼歯を除くすべての歯が残存し、第２大臼歯の磨耗が軽微であるので壮年前半のものと推定される。

西川５区１号墓

上、下顎の永久歯が、上下は逆転しているものの正常な位置関係を保って残存する。右側の下顎歯は中切歯から第３大臼歯まで全歯、上顎歯は第２大臼歯のみ、左側は歯種不明の下顎歯４本と上顎歯３本が認められる。下顎第２大臼歯の磨耗はかなり強いので、壮年後半と推定されるが、性別は不明である。

(2)三手遺跡

向原Ｉ区１号墓（土壙墓－５）

後頭骨と左右の側頭骨の一部を含む脳頭蓋後部、破損が著しい下顎骨と四肢長骨が残存する。下顎骨にはすべての歯が釘植しているが、左の第２・第３大臼歯だけが歯冠を残している。四肢長骨としては、右の上腕骨と前腕骨、左右の大腿骨と下腿骨が遺存するが、右上腕骨と左右の大腿骨以外は骨体の小破片である。

脳頭蓋骨は大きく、大腿骨は太く柱状性が強い。大臼歯の磨耗は強度であるが、脱落歯がないので、壮年後半の男性骨と推定される。

向原Ｉ区２号墓（土壙墓－12）

脳頭蓋の左側頭部、下顎骨骨体小破片、大臼歯の歯冠の破片と四肢長骨の骨体が遺存する。四肢長骨は、比較的残りのよい左大腿骨のほか、右の上腕骨と前腕骨、左の上腕骨、右大腿骨、左右脛骨の骨体破片である。

大腿骨は太く頑丈で、大臼歯の磨耗は弱い。壮年男性骨と推定されるが、確かではない。

向原Ｉ区３号墓（土壙墓－４）

頭蓋骨は残存せず、椎骨、肋骨、鎖骨、上腕骨、前腕骨、寛骨、大腿骨、下腿骨が遺存する。四肢長骨はいずれも骨端を欠くが、左上腕骨、左右の大腿骨と脛骨、右の腓骨の骨体が比較的残りがよい。

残存する寛骨の大坐骨切痕付近の破片から女性骨と判定される。成人骨であることは確かであるが、詳しい年齢は推定できない。

向原Ｉ区４号墓（土壙墓－３）

頭蓋骨の一部と上腕骨とみられる長骨破片が遺存する。頭蓋骨は、脳頭蓋の破片と上顎骨、下顎骨骨体の破片だけで、上顎骨には左の第２小臼歯、第１・第２大臼歯が、下顎骨には左右の第１・第２大臼歯が釘植しており、それ以外に左の中切歯、側切歯、犬歯を含む８本の遊離歯が存在する。

大臼歯の磨耗度はこれが壮年のものであることを示しているが、男女の別は不明である。

向原Ｉ区５号墓（土壙墓－８）

脳頭蓋、下顎骨、左右の大腿骨と脛骨が残存する。脳頭蓋と下顎骨は破損が著しく、下肢骨は骨体を残すだけである。

大腿骨は太く頑丈で、成人男性骨とみられるが確かではない。

向原Ｉ区６号墓（土壙墓－７）

脳頭蓋骨の破片と遊離歯６本が残存するだけで、そのうち歯冠形態がわかる歯は下顎大臼歯と上顎小臼歯の２本である。

大臼歯の磨耗が弱いので壮年と推定されるが、若年の可能性もある。男女の判別はできない。

向原Ｉ区８号墓（土壙墓－10）

脳頭蓋骨の小破片と、大腿骨、脛骨など下肢長骨４本の骨体片だけが遺存する。

性不明の成人骨である。

向原Ｉ区９号墓（土壙墓－11）

脳頭蓋の右側頭部、下顎骨骨体、左右の上腕骨、右の橈骨と尺骨、左右の大腿骨と脛骨が残存する。いずれも破損が著しく、四肢長骨は骨端を欠き、骨体も土圧のため変形している。

骨の大きさから成人男性骨と思われるが、確かでない。

向原Ｉ区10号墓（土壙墓－６）

脳頭蓋骨の破片と脛骨とみられる長骨骨体の破片が残っているだけで、性、年齢とも判明しない。

向原Ｉ区11号墓（土壙墓－９）

中屋E1区７号墓人骨に次いで残存する骨の保存状態は良好で、骨質も堅牢である。

頭蓋骨、左右の上腕骨と前腕骨、右の寛骨、左右の大腿骨と下腿骨が残存する。頭蓋骨は右半分を残し、下顎骨は左の下顎枝、右の関節突起と筋突起を欠き、左右の第２・第３大臼歯以外の歯が釘植している。四肢長骨はすべて骨端を欠損する。

右寛骨の大坐骨切痕は鋭角で、頭蓋骨の眉弓は強く隆起し、下顎体は高く、大腿骨は頑丈であるなど、男性骨の特徴が明瞭に認められる。大臼歯の磨耗度は中程度である。壮年男性骨と推定される。

(3)高塚遺跡

角田3a区２号墓（SK-02）

羽釜内に右の頭頂骨、側頭骨、後頭骨など脳頭蓋骨、下顎骨骨体、上腕骨と前腕骨の骨体が埋納されていたが、いずれも小破片である。

骨の大きさから幼小児骨とみられる。

角田3b区1号墓（SK-01）

左右の側頭骨など脳頭蓋骨、左上腕骨、左右の大腿骨と脛骨の骨体の破片以外に、上顎右の第3大臼歯を除く全歯が遊離歯として遺存する。

大臼歯の磨耗度は著しく軽微で、小児もしくは若年者と推定されるが、確かではない。性の判別はできない。

角田3c区1号墓（SK-01）

四肢長骨の断片4点だけが検出された。

性、年齢とも判明しない。

角田3c区2号墓（SK-02）

大部分の頭蓋骨が遺存するが、上顎骨と下顎骨以外の骨は破損が著しく、接続することはできない。上顎骨は左右の歯槽突起と口蓋突起を、下顎骨は左半分と右骨体の後部を残し、上顎骨には左右の中切歯、側切歯、犬歯、第2小臼歯、第1大臼歯と右の第1小臼歯が、下顎骨には右の第2小臼歯から第3大臼歯までと、左の中切歯から第3大臼歯までの全歯が釘植している。

胴骨では右の肋骨断片が数本、上肢骨では右の鎖骨と肩甲骨、左右の上腕骨と前腕骨が残存するが、このうち左上腕骨が骨体の大部分を残す以外、いずれも小破片である。下肢骨としては、左右の寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨がある。長骨は骨端を欠くが骨体の大部分が残っている。

下顎骨の骨体は高く頑丈で、四肢長骨はいずれも著しく強大である。大臼歯の磨耗度は強いが、歯槽の閉鎖は認められない。壮年後半の男性骨と推定される。

角田3c区5号墓（SK-05）

上腕骨、手骨と思われる破片各2点が検出されている。

性、年齢とも判明しない。

(4)政所遺跡

砂場北水路区1号墓（SK-01）

頭蓋骨以外に下肢骨と思われる長骨5本が遺存するが、保存状態がきわめて悪く、骨の同定は困難である。性、年齢とも不明である。

骨の大きさ、配置状態からみて成人骨の改葬墓である疑いがある。

2．埋葬姿勢

人骨が遺存していた土壙墓51基、1遺構における被葬者の埋葬姿勢を第1表に示す。

散乱骨および改葬墓を別とすれば、2体以上が埋葬されている土壙墓はない。

溝の中から幼児2体分の歯が検出された中屋P4区No.2溝、礫に混じっていた土筆山4a区2号墓、焼骨が検出された中屋E1区1号墓、男女各1体の遺骨が改葬されている野上田Ⅷ区19

号墓、改葬の疑いがある砂場北水路区１号墓、羽釜内に幼小児骨が埋納されている角田3a区２号墓に残存する人骨は正常な解剖学的位置関係を保っていない。これらを除く46基の土壙墓のうち遺存人骨が少なく、埋葬姿勢を推定することができないものが12基ある。

埋葬姿勢が確認もしくは推定できた34基のうち仰臥伸展葬は４基で、それ以外は屈葬である。中屋E1区３号墓の仰臥伸展人骨は、左の下肢を折りまげ、右足で立った状態で横たわっている。屈葬の内訳は、蹲踞姿勢をとる座位が２例、残りはすべて軀幹を棺底につけているが、そのうちの５例は膝を立てた仰臥で、23例が横臥である。横臥屈葬では左を下にした左側臥は５例認められるが、そのうち４例までが膝関節を軽くまげ、１例だけが強くまげている。これに対して右側臥18例のうち17例が股関節、膝関節とも強くまげている。したがって、下肢を強く折りまげた右側臥屈葬が圧倒的に多い。なお、丸田Ⅲ区火葬墓の焼けた人骨は、膝を強くまげた左側臥屈位の姿勢を保っており、遺体は土壙墓の中で焼かれ、そのまま埋葬されたものであろう。

次に頭位が判明している38例のうち、西北西、南西各１例を別とすれば、北と東を中心とする方位内に納まり、北北東と北西の間に20例、北東と東南東の間に15例が入る。次に埋葬姿勢が確認された34例の頭位を検討すると、４例の仰臥伸展葬では全例がほぼ真東である。また、最も多数を占める右側臥屈葬18例のうち13例の頭位が北北東から北北西の間にある。それ以外の埋葬姿勢と頭位との間には規則性は認められない。

全国各地で発掘された中世土葬墓の報告例を通覧し、遺存する人骨から被葬者の埋葬姿勢、

第１表　岡山工事区出土の中世人骨

遺跡名	地区名	土壙墓番号	被葬者の年齢・性	埋葬姿勢			備考
				頭位	下肢	軀幹	
津寺	土筆山１区	１号	成人・（女性）	北東	屈	左側臥	
		２号	熟・老年・男性	北東	屈	仰臥	
		５号	成人・女性	北北西	屈	右側臥	
	１A区	７号	熟年・女性	東北東	（屈）	仰臥	
	２区拡張区	３号	成人・（女性）	北東	屈	左側臥	
		４号	壮年・（女性）	北北西	屈	座位	
	４a区	１号	壮年・男性	東南東	屈	座位	
		２号	成人・不明	－	－	－	礫に混入
	５区	21号	壮年・男性	北西	屈	右側臥	
		22号	小児・不明	北	屈	右側臥	
		31号	壮・熟年・男性	北北西	屈	仰臥	
	６区	１号	壮年・男性	北北西	屈	右側臥	

		2号	壮年・不明	東北東	屈	右側臥	
		3号	幼児・不明	東北東	屈	左側臥	
	7区南		成人・不明	東北東	不明	不明	
	8区東	1号	成人・不明	不明	不明	不明	
	丸田ⅠE区	1号	熟年・男性	東	屈	左側臥	
	ⅠE農区	7号	成人・（男性）	不明	不明	不明	
	Ⅱ区	3号	壮年・不明	北	不明	不明	
	Ⅲ区	火葬墓	成人・（男性）	北	屈	左側臥	焼骨
		1号	成人・女性	東	伸	仰臥	
		2号	壮年・男性	東	伸	仰臥	
	ⅣA区	3号	壮年・（男性）	東北東	屈	右側臥	
	中屋H2区	4号	壮年・女性	北西	屈	右側臥	
		5号	成人・男性	北北西	屈	右側臥	
	P4区	5号	成人・不明	不明	不明	不明	
		7号	成人・（男性）	北北西	（屈）	（右側臥）	
		No2溝	幼児2体	—	—	—	散乱
	E1区	1号	成人・不明	—	—	—	焼骨、散乱
		3号	老年・不明	東	伸	仰臥	
		7号	壮年・女性	北西	屈	右側臥	
	M8Ⅰ区	No92	幼児・不明	不明	不明	不明	
	野上田8区	19号	成人男女2体	—	—	—	改葬
	9区東	11号	壮年・（女性）	北	屈	仰臥	
三手	向原Ⅰ区	1号	壮年・男性	西北西	屈	右側臥	
		2号	（壮年）・男性	北東	屈	右側臥	
		3号	成人・女性	北北東	屈	右側臥	
		4号	壮年・不明	不明	不明	不明	
		5号	成人・（男性）	北北西	屈	右側臥	
		6号	壮年？・不明	不明	不明	不明	
		8号	成人・不明	北	屈	（右側臥）	
		9号	成人・（男性）	北	屈	右側臥	
		10号	不明・不明	南西	（屈）	（右側臥）	

		11号	壮年・男性	北	屈	右側臥	
		12号	不明・不明	南南東	不明	不明	
高塚	角田３a区	２号	幼小児	—	—	—	羽釜内
	３b区	１号	不明・不明	東	伸	仰臥	
	３c区	１号	不明・不明	(北)	不明	不明	
		２号	壮年・男性	北	屈	仰臥	
		５号	不明・不明	不明	不明	不明	
政所	砂場北水路区	１号	(成人)・不明	—	不明	不明	(改葬)

(　) 内は不確実

頭位を検討した池田(1982)によれば、埋葬姿勢は変異に富んでいるが、全体としてみれば右側臥屈位が多く、頭位は北東から北西の範囲内に入るものが圧倒的多数を占めるので、北頭位右側臥屈位で顔を西に向けた埋葬が中世の普遍的な葬法であったろうという。北頭位右側臥屈葬が最も多い津寺、三手、高塚遺跡の中世墓の埋葬様式も中世の一般的葬法に従っているといえよう。

３．人骨の形態特徴

骨の保存状態は著しく悪く、また土圧による変形や表面の剝離が多くの骨にみられる。そのため、計測、観察に堪える資料はきわめて少ない。頭蓋および四肢骨の個体別計測値を付表１～４に示す。

頭蓋計測値

下顎骨を別とすれば、主要な計測値がえられた資料は中屋E1区７号墓壮年女性骨だけである。

その頭蓋最大長（181㎜）は女性としてはきわめて長く、後頭部が強く膨隆している。頭蓋最大幅は計測できないが、かなり狭いとみられ、長幅示数が長頭もしくは過長頭であることは確かである。バジオン・ブレグマ高も計測できないが、比較的高い。なお、丸田ⅣA区３号墓壮年男性の後頭部も強く後方に突出している。

顔高（110㎜）、上顔高（65㎜）、鼻高（49㎜）など顔面高径は山口県吉母浜中世人（中橋・永井、1985）の平均値に一致し、熊本県尾窪中世人（内藤、1973）よりやや高い。中顔幅（98㎜）も吉母浜中世人に近く、尾窪中世人より大きい。したがって、ウィルヒョーの顔示数（112.2）と上顔示数（66.3）は吉母浜中世人の平均値に合致し、顔示数は尾窪中世人よりやや小さく、上顔示数はやや大きいが、これら中世人の間では両示数に大きな差は認められない。

鼻根部が破損しているため、その形態は明らかでないが、歯槽側面角（53°）は尾窪中世人

よりやや大きく、吉母浜中世人および鎌倉材木座中世人（鈴木・他、1956）の平均値よりはるかに小さい。

下顎骨計測値は男性5例、女性2例で計測できたが、中屋E1区7号墓女性以外の計測値は他集団と比較できない。中屋E1区7号墓女性の数値は、下顎長がやや小さく、オトガイ高、下顎体高がやや高い以外、吉母浜、鎌倉材木座の中世人と大差ない。咬合型は鋏状である。

中屋E1区7号墓女性は、著しい長頭、低顔、歯槽性突顎という中世日本人頭蓋の特性を具えている。

下肢骨計測値

四肢骨のうち、資料数が比較的多い左の大腿骨と脛骨の計測値を比較するが、この中には性別が確実でない資料や右下肢骨計測値が2、3含まれている（第2表）。比較集団は、男性では広島県の福山市丁谷貝塚（池田、1993）と帝釈峡遺跡群寄倉岩陰遺跡（池田、1980）、山口県吉母浜遺跡（中橋・永井、1985）、神奈川県鎌倉材木座（香原、1956）の中世人、西日本（城、1938）と東日本（Yamaguchi、1986）の古墳人、津雲縄文人（池田、1988）、畿内現代人（平井・田幡、1928）の8集団、女性ではそのうち寄倉中世人を除く7集団である。なお、男性の脛骨計測値の比較には、鎌倉材木座中世人の代わりに極楽寺中世人（寺沢・佐倉、1961）を用いた。

中世日本人下肢骨の特徴として、大腿骨骨体上部の扁平性（香原、1956）と、大腿骨の柱状性と脛骨の扁平性が弱いこと（内藤・他、1979）が知られている。大腿骨の中央および骨体上部の横断示数が小さく、脛骨の中央および栄養孔部の横断示数が大きい吉母浜、材木座・極楽寺中世人の下肢骨はこの特徴をよく示している。

岡山工事区中世人の大腿骨中央横断示数は、女性では比較した中世人との間に大きな差はみられないが、男性の場合、中世人、古墳人のいずれよりも大きく、畿内現代人に近い。大腿骨骨体上部横断示数は、男女とも丁谷あるいは寄倉の中世人より大きく、西日本、東日本古墳人の数値に近い。脛骨の中央横断示数は、男女とも丁谷、寄倉など広島中世人に近く、吉母浜、極楽寺中世人や古墳人よりやや小さい。栄養孔部の横断示数では、男性は極楽寺中世人と一致

第2表(1)　男性下肢骨計測値の比較（左）

	中世						古墳		縄文	現代
	岡山工事区		広島		山口	神奈川	西日本	東日本	津雲	畿内
大腿骨	n	M	丁谷1号	寄倉	吉母浜	材木座				
6 中央矢状径	12	29.7	28	30	28.1	27.2	27.2	28.9	29.0	26.8
7 中央横径	12	27.7	27	29	27.7	26.8	26.8	28.4	26.0	25.6

8 中央周	11	90.8	88	94	87.8	86.0	85.9		87.4	83.1
9 '骨体上部最大径	9	31.9	32	34	32.1*	31.6*	32.9	32.5	31.7	30.0
10'骨体上部最小径	9	24.4	23	24	24.4*	23.9*	24.4	25.5	24.3	23.8
6／7 中央横断示数	12	107.6	103.7	103.4	101.3	102.5	101.8	102.2	111.8	106.4
10'／9 '骨体上部横断示数	9	76.9	71.9	70.6	76.1*	75.7*	74.7	78.9	76.7*	79.4
脛骨						極楽寺				
8 中央最大径	6	30.8	29	32	29.6	30.4	28.9	30.6	32.3	28.5
8 a 栄養孔部最大径	2	33.0	35	34	33.8	34.0	33.3		35.2	32.6
9 中央横径	6	21.0	20	22	21.6	22.1	21.4	22.6	20.4	21.0
9 a 栄養孔部横径	2	22.5	25	24	24.0	23.6	23.4		22.2	23.6
10骨体周	6	83.7	83	84	80.8	83.5	80.9		84.5	79.0
9／8 中央横断示数	6	69.1	69.0	68.8	73.0	73.0	74.3	73.8	63.3	73.7
9a／8a栄養孔部横断示数	2	68.4	71.4	70.6	71.0	69.8	70.4		63.0	72.4

＊9 骨体上横径　10骨体上矢状径　10／9 上骨体横断示数　＊＊10／9 上骨体横断示数　83.1

第２表(2)　女性下肢骨計測値の比較（左）

	中		世			古　墳		縄文	現代
	岡山工事区		広　島	山　口	神奈川	西日本	東日本	津雲	畿内
大腿骨	n	M	丁谷2号	吉母浜	材木座				
6 中央矢状径	5	24.4	25	23.3	22.9	24.5	24.4	25.2	23.8
7 中央横径	5	25.4	26	24.8	23.5	24.7	26.7	24.2	23.5
8 中央周	5	78.2	82	76.1	73.8	78.1		78.0	74.8
9 '骨体上部最大径	2	30.5	32	29.1*	28.0*	31.0	30.8	29.4	28.2
10'骨体上部最小径	2	22.0	21	20.9*	20.4*	22.4	22.0	22.2	20.9
6／7 中央横断示数	5	96.3	96.2	94.5	96.6	100.0	91.9	104.5	102.3
10'／9 '骨体上部横断示数	2	72.1	65.7	72.0*	73.0*	72.2	71.6	73.0*	74.5
脛骨									
8 中央最大径	5	24.6	27	26.1		26.9	26.9	27.3	24.4
8 a栄養孔部最大径	3	29.7	33	29.7		29.5		30.5	27.7
9 中央横径	5	18.4	20	18.3		19.0	20.0	17.9	18.5
9 a栄養孔部横径	3	21.3	23	20.0		21.1		19.4	21.0
10骨体周	6	68.8	77	70.3		73.1		73.4	68.1

9／8中央横断示数	5	74.8	74.1	70.4		70.8	74.7	65.8	77.0
9a／8a栄養孔部横断示数	3	71.7	69.7	67.4		71.9		63.6	75.4

＊9骨体上横径　10骨体上矢状径　10／9上骨体横断示数　＊＊10／9上骨体横断示数　78.2

し、それ以外の中世人、西日本古墳人より僅かに小さく、女性は丁谷、吉母浜中世人にやや劣り、西日本古墳人に近い。脛骨の扁平性および男性大腿骨の柱状性は中世人としてはやや強いが、津雲縄文人にくらべればはるかに弱い。

以上、岡山工事区出土の中世人の大腿骨は、骨体上部の扁平性を欠き、男性では柱状性が強いなど中世人の特徴を示さず、脛骨の扁平性も中世人としてはやや強いが、この点では広島の中世人に類似する。

参考文献

平井　隆・田幡丈夫　1928　現代日本人人骨の人類学的研究　第四部　下肢骨の研究　其一　大腿骨・膝蓋骨・脛骨及腓骨に就て．人類学雑誌、43、附録：1-82.

池田次郎　1980　帝釈寄倉岩陰遺跡出土の中世人骨について．「広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報　Ⅲ」pp.99-105. 広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室.

池田次郎　1982　香川県西村遺跡出土の中世人骨とその埋葬について．「西村遺跡Ⅲ」pp.95-98. 香川県教育委員会.

池田次郎　1988　吉備地方海岸部の縄文時代人骨－時代差と地域性の成立．「考古学と関連科学」pp.331-371. 鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会、岡山.

池田次郎　1993　福山市草戸千軒町遺跡（第42次調査）および丁谷貝塚出土の中世人骨．「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ－北部地域北半部の調査－」pp.255-274. 広島県教育委員会.

城　一郎　1938　古墳時代日本人人骨の人類学的研究　第三部　下肢骨．人類学輯報（京都帝国大学医学部病理学教室人類学業績）、1：245-324.

香原志勢　1956　四肢骨特に大腿骨の形質．日本人類学会編「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」pp.149-154. 岩波書店、東京.

内藤芳篤　1973　人骨．「尾窪－熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査」pp.62-78. 熊本県教育委員会.

内藤芳篤・松下孝幸・分部哲秋・田代和則　1979　九州の中世人骨について（会）．人類学雑誌、87：171.

中橋孝博・永井昌文　1985　山口県下関市吉母浜遺跡出土の弥生・中世人骨．「吉母浜遺跡」pp.154-225. 下関市教育委員会.

鈴木　尚・林　都志夫・田辺義一・佐倉　朔　1956　頭骨の形質．日本人類学会編「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」pp.75-148. 岩波書店、東京.

寺沢俊男・佐倉　朔　1961　極楽寺出土中世日本人の脛骨横断形（会）．日本人類学会・日本民族学会連合大会紀事、15：30-33.

Yamaguchi, B. 1986 Metric characters of the femora and tibiae from protohistoric sites in eastern Japan. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. D, 12：11-23.

付表１　頭蓋骨計測値

	男性	女性
	土筆山	中　屋
	1−2	E1−7
1　頭蓋最大長		(181)
11　両耳幅	131	
12　最大後頭幅	114	
46　中顔幅		(98)
47　顔高		(110)
48　上顔高		(65)
52　眼窩高(右)		34
55　鼻高		(49)
61　上顎歯槽幅		59
74　歯槽側面角		53
47／46　顔示数(V)		(112.2)
48／46　上顔示数(V)		(66.3)

付表２　下顎骨計測値

	男　性					女　性	
	土筆山			向原	角田	土筆山	中屋
	1−2	4a−1	5−31	Ⅰ−11	3c−2	1−5	E1−7
67　前下顎幅	48						46
68　下顎長							68
69　オトガイ高				34			32
69(1)　体高		34			28		28
69(2)　体高					26		25
69(3)　体厚	15		16	14	14	14	13
70　枝高							52
70(3)　下顎切痕高							13
71　枝幅	38					38	35
71(1)　下顎切痕幅							34
79　下顎角							123
71／70　下顎枝示数							67.3
70(3)／71(1)　下顎切痕示数							38.2

付表３　上肢骨計測値

	男　性			女　性		
	向原Ⅰ−1		角田3c−2	中屋E1−7		向原Ⅰ−3
鎖骨	右	左	右	右	左	左
4 中央矢状径				13		
5 中央垂直径				10		
6 中央周				38		
5／4 骨体横断示数				76.9		
上腕骨						
4 下端幅				54		
5 中央最大径		20	25	23	23	
6 中央最小径		18	18	16	16	15
7 最小周		63	65		62	56
7a中央周			73		68	

6／5骨体横断示数		90.0	72.0	69.6	69.6	
橈骨						
3最小周	46			42		
4骨体横径	18			15		
5骨体矢状径	11			11		
5／4骨体横断示数	61.1			73.3		
尺骨						
11骨体前後径	13			13	13	
12骨体横径	15			15	15	
11／12骨体横断示数	86.7			91.7	91.7	

付表4(1)　下肢骨計測値（男性）

	土筆山						丸田				中屋	野上田	向原						角田	
	1−2		4a−1	5−31		6−1	IE−1	III−2	IVA−3		H2−5	8−19	I−1		I−2	I−5	I−11		3c−2	
大腿骨	右	左	左	右	左	右	左	左	右	左	右	左	右	左	左	右	右	左	右	左
6中央矢状径	31	30	31	29	28	28	29	28	30	(30)			30	30	31	29	29	32	30	30
7中央横径	27	28	29	29	29	30	26	29	27	27			25	25	26	28	27	27	28	28
8中央周	93	93	94	90	88		91	90	83	87			90	90	92	92	89	92	93	93
9'骨体上部最大径	33	33		32	33		31	32	27	30		30			33		31	35	30	30
10'骨体上部最小径	24	25		23	23		25	24	22	22		27			25		24	24	25	25
6／7中央横断示数	114.8	107.0	106.9	100.0	96.6	93.3	111.5	96.6	111.1	111.1			120.0	120.0	119.2	103.6	107.4	118.5	107.0	107.0
10'／9'骨体上部横断示数	72.7	75.8		71.9	69.7		80.6	75.0	81.5	73.3		90.0			75.8		77.4	68.6	83.3	83.3
脛骨																				
8中央最大径		30		29	29	31			28	28	34						30	32	31	30
8a栄養孔部最大径		32															34	34		
9中央横径		23		22	23				20	20	24						19	17	21	19
9a栄養孔部横径		24															20	21		
10骨体周		87		82	82				78	77	93						80	82	86	81
10a骨体周		92															90	92		
10b最小周		76		77					67	65								72		70
9／8中央横断示数		76.7		75.9	79.3				71.4	71.4	70.6						63.3	53.1	67.7	63.3
9a／8a栄養孔部横断示数		75.0															58.8	61.8		

腓骨																		
2 中央最大径				14											15			18
3 中央最小径				10											12			11
4 中央周				43											45			51
3／2 中央横断示数				71.4											80.0			61.1

付表 4(2)　下肢骨計測値（女性）

	土　筆　山				丸田	中　屋			野上田	向　原	
	1－1		1－5	1A－7	Ⅲ－1	H2－4	E 1－7		8－19	Ⅰ－3	
大腿骨	右	左	左	左	左	右	右	左	左	右	左
6 中央矢状径	22	22	26			25	27	27		23	22
7 中央横径	24	25	25			26	28	29		23	22
8 中央周	74	73	79			80	87	88		72	71
9′骨体上部最大径	26	28					30	33			
10′骨体上部最小径	20	20					25	24			
6／7 中央横断示数	91.7	88.0	104.0			96.2	96.4	93.1		100.0	100.0
10′／9′骨体上部横断示数	76.9	71.4					83.3	72.7			
脛骨											
8 中央最大径			24	23			27	27	26	23	23
8a栄養孔部最大径							29	29	31	29	29
9 中央横径			16	18			20	21	19	18	18
9a栄養孔部横径							22	23	21	19	20
10骨体周			66	66	65		78	78	72	67	66
10a骨体周							85	87	85	79	78
10b最小周			62				71	71		63	63
9／8 中央横断示数			66.7	78.3			74.1	77.8	73.1	78.3	78.3
9a／8a栄養孔部横断示数							75.9	79.3	66.7	73.1	69.0
腓骨											
2 中央最大径							13	12		14	
3 中央最小径							11	11		8	
4 中央周							40	40		35	
4a最小周								32			
3／2 中央横断示数							84.6	91.7		57.1	

年測　第KN-92021号
平成4年8月28日

岡山県古代吉備文化財センター
横山　常實　殿

社団法人 日本アイソトープ協会
東京都文京区本駒込二丁目28番45号
電　話　東京　03（946）1111

年代測定結果報告書

平成4年7月20日に受取りましたC－14試料7個の測定結果がでましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C－14年代
N-6340	前池内Ⅲ－住居8	1980±85yB.P.(1930±80yB.P.)
N-6341	前池内Ⅲ－住居24	2090±85yB.P.(2030±80yB.P.)
N-6342	津寺・野上田7－盛土	1690±75yB.P.(1640±75yB.P.)
N-6343	津寺・野上田7－杭	1670±75yB.P.(1620±75yB.P.)
N-6344	津寺・丸田Ⅲ区火葬墓	600±70yB.P.(590±70yB.P.)
N-6345	津寺・丸田ⅣA区土壙－44	1240±75yB.P.(1210±70yB.P.)

年代は^{14}Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、^{14}C年代がこの範囲に含まれる確率は約70％です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95％となります。なお^{14}C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。（御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。）

この測定結果についてコメントがございましたならば、是非お聞かせ下さいますようお願い申し上げます。

津寺遺跡丸田調査区出土植物遺残

松谷　暁子

試料

津寺遺跡丸田調査区の土壙－44（丸田Ⅳ区；平安時代中期）から出土した植物遺残は二種類ある。

①篩で選別された種子は、18.5×12.5×６（cm）のプラスチック容器に保管されており、10783粒と記されている。

②石膏剝ぎ取り型は二点あり、大きな方をＡ試料とすると16×12.5（cm）、小さい方のＢ試料は、12.5×10.5（cm）の大きさの中に炭化物が認められる。また、二試料とも保護のため表面にバインダーが塗布されていた。

方法

①　種子　はじめに実体顕微鏡で観察を行ない、外形と大きさから分類を行ったあと、走査型電子顕微鏡（ＳＥＭ）での観察を行なった。また、ノギスを用いて粒の計測を行なった。

②　石膏剝ぎ取り型の炭化植物　①と同じく実体顕微鏡での観察を行い、その後茎状と粒状の一部分を取り出して、ＳＥＭ観察を試みた。

結果

①　オオムギ、コムギ、イネなどイネ科の穀類の穎果、豆類の子葉、エゴマの果実、サンショウの内果皮などが認められた。

量的に最も多いのはオオムギである（写真１－３）。コムギ（写真４－７）約450粒、イネ（写真８－９）56粒を数えたのに対し、オオムギ粒は約900粒までを数えた。保存の良くない粒も多いが、形態的には残りの大部分がオオムギと考えられる。

オオムギ、コムギ、イネの識別に際しては、これまでの報告（松谷1990a、1992）と基本的には同じ基準を用いた。すなわちムギ類は一方の面に上下に走る縦溝が存在し、その反対の面の下部中央に胚の跡が認められるのに対し、イネは縦溝がなく、平面に置いたとき胚の位置が中央ではなく、両面とも粒の表面に外穎や内穎の中肋部を反映して二本の線が認められる。また、オオムギとコムギの区別としては、オオムギでは上下の先端に向かって先細りの傾向があり、側面観は紡錘形をしていて、幅や厚さの最大部は中央付近にあるのに対し、コムギでは上

下の部分が先細りになることはなく、側面観は樽状に近い。また、幅や厚さの最大部は下方の胚に近い部分にあるなどで区別した。

なお、ムギ類やイネの粒は内穎や外穎に覆われているが、ムギ類では穎に包まれた状態のものは認められなかったのに対し、表面に特徴的な乳頭突起が存在することで識別されるイネ籾は２点検出された。

その内の１点は不完全であるが、もう１点の大きさ（㎜）は、次のようであった。

長さ7.6、幅3.5、厚さ1.9

表１にオオムギ粒、コムギ粒、イネ粒の計測値を示してある。

オオムギの長さは5.2−6.0㎜、幅が2.4−3.0㎜、厚さが1.9−2.7㎜であるが、長さが4.7−5.2㎜、幅が1.8−2.2㎜、厚さが1.2−1.8㎜で小粒の細長い粒が150粒位存在していた。

コムギは長さが3.1−4.8㎜、幅は2.2−3.6㎜、厚さは2.0−3.0㎜で、オオムギに比べて、長さは短く、幅や厚さの数値が大きい。

日本でのコムギの出土例は、イネやオオムギに比べるときわめて少ないといえる。これまでの筆者の経験したコムギ粒は、古墳時代の二遺跡である。茨城県武田遺跡（松谷1989）では、小粒の粒と幅広粒の二つに分けてみたが、それらの長さ、幅、厚さは

	長さ	幅	厚さ
小粒	2.4−2.8	1.8−2.0	1.6−1.8
幅広	2.7−3.0	2.5−2.6	2.2−2.5

であった。また、奈良県の和爾・森本遺跡から識別された二粒は、

	長さ	幅	厚さ
No 1	3.5	3.2	3.8
No 2	3.7	3.2	2.7

であった。津寺遺跡出土コムギは、和爾・森本遺跡のコムギと同じくらいの大きさ（厚さは津寺遺跡の方がやや少ないが）といえるが、武田遺跡のコムギより長さが大きい。

いずれにせよ、手元にある現生のパンコムギ粒の大きさ（長さ6.3−6.4㎜、幅2.7−3.2㎜、厚さ2.3−2.8㎜）に比べるとかなり長さが小さいことに気づく。

北海道や東北地方から出土したコムギについても粒の小さなことが注目されている（吉崎1992）。日本のどの地域でも小さいのか、またどの時代から大きくなって行くのかに注意したい。

最近ＳＥＭを利用して横細胞の観察による麦類の識別が試みられている（Körber-Grohne and Piening 1980）。筆者も前述の古墳時代の二遺跡のコムギについてＳＥＭ観察を試みてはいるが、いまの段階ではよくわからない。津寺遺跡のコムギについても粒の表面が剝がれている部分の観察を試みたが（写真２、７）、何かを言うにはまだ情報不足である。

日本の遺跡から出土した炭化米については、多数の炭化米を計測された佐藤敏也氏による型分類がある（佐藤1971）。津寺遺跡から出土したイネ粒の長さは4.2－4.8㎜、幅は2.2－3.0㎜、厚さは1.4－2.2㎜である。(注1)

津寺遺跡の炭化米をこれに適用すると、長さ3.7－5.3㎜のⅡ群にすべて入ってしまう。幅2.8－3.7がＡ、幅2.1－2.8がＢ、2.1㎜未満がＣなので、津寺遺跡出土炭化米は大部分がⅡＢに入り、ごく少量がⅡＡということになろう。

豆類の量はあまり多くはない。豆類の子葉は、二枚の子葉が合わさっているが、合着した状態のもの（７点）と、二個に分かれた状態のもの（６点）とが存在する。前者ではへその認められるもの（２点）と、不明のもの（５点）とがある。

へその明瞭な２粒について、粒およびへその大きさを計測すると、次のような値が得られた。(注2)

	粒の大きさ	へそ
イ（写真10－11）	長さ5.1㎜、厚さ3.6㎜	長さ2.2　幅1.4
ロ（写真12－13）	長さ6.9㎜、厚さ3.3㎜	長さ2.2、幅1.0

現生のアズキではへそはもっと長く、乾燥した状態で４㎜位の長さがあるので、アズキではないと考えられる。現生のダイズのへその長さは乾燥した状態で、3.7－3.3㎜くらい、幅1.5位で、形も似ており、ダイズの可能性は考えられるが、長さが現生のものより小さい。

ハ（写真14－15）　へそが不明であるが、粒形の保存が良いとみられる粒の長さ5.2㎜、厚さ3.2㎜くらいであり、外形はイと類似しており、同じ種類かもしれない。

二分し子葉の部分もＳＥＭ観察を行なったが（写真16）、いまの段階でははっきりしたことは言えない。

変形していてしかもへそが不明の4粒については、豆らしいと推定されるものの確実ではない。

エゴマ（写真17）　外形が球形に近く、表面に粗い網目があり、大きな円形のへそがある。長さ3.9㎜、幅2.8㎜で、現生エゴマ果実（長さ2.4－2.7㎜、幅2.2－2.3㎜）よりもやや大きい。

サンショウ（写真18）　外形が楕円形で、表面に小さな網目があり、細長く短いへそをもっている。

エゴマは２点、サンショウは１点が見いだされた。

②

試料Ａ　茎状と粒状の炭化物が観察された（写真19、20）。茎の太さは３－４㎜位で、粒とみなすことのできる炭化物は、外形が明瞭でないものもあり、また様々な方向を向いているので、およその大きさであるが、計測可能なものでは、次のような数値（㎜）が得られた。

長さ	4.5	4.3	4.5
幅	2.2	2.5	3.0

試料Ｂ　Ａと同じく茎状と粒状の炭化物が認められた（写真21、22）。茎の太さは、やはり３

－4㎜位である。計測可能な粒の大きさ（㎜）は次のようであった。

長さ	4.9	4.8
幅	2.5	2.9

これらの粒では中央に胚の跡があるので、イネではなく麦類と考えられる。篩で選別された粒と比較してみると、オオムギより小さくコムギよりは大きい傾向がある。端の方が細く見えるので、形態からはオオムギの可能性が高いと判断される。

次に茎状と粒状の部分の一部をとってＳＥＭ観察を試みた結果について記すと、茎状の部分（写真23）については、イネ科であることは確実と考えられるが、オオムギかどうかの識別が可能な特徴は観察できなかった。

粒を覆っている穎と考えられる部分（写真24）を観察したところ、表面が膜状のもので覆われていてあまり明瞭ではないが、波状をした長い細胞と円形の細胞の存在が認められる（写真25)。これらの細胞像は、真壁城跡（松谷1983）や岐阜城跡（松谷1990c）などで観察されたオオムギの穎に類似しており、オオムギの穎と考えられる。従って篩で選別された試料では穎が付着したオオムギが認められていないが、溝の中で残存していた時の状態は穎が付着していたと考えられる。穎は壊れやすいので、篩で選別されたときに除去された可能性がある。穂の状態で残存していたようには見えない。イネの穎は篩による試料でも見いだされている。コムギの穎はいままでのところ検出されていない。

文　献

松谷暁子　1983　真壁城跡出土の炭化物について。「真壁城跡」　真壁町教育委員会、39－48。

松谷暁子　1990a　岡山大学構内遺跡から出土した炭化種子と灰像について。岡山大学構内遺跡調査研究報告４、103－106。

松谷暁子　1990b　２粒の炭化麦。「綾羅木川下流域の地域開発史」　下関市教育委員会、66－67。

松谷暁子　1990c　穀物の同定。「千畳敷」　岐阜市教育委員会、221－223。

松谷暁子　1991　武田遺跡群出土の植物遺残の識別。「武田Ⅳ」　勝田市文化・スポーツ振興公社、109－113。

松谷暁子　1992　和爾・森本遺跡（４次）出土炭化麦粒および炭化茎状塊について。橿原考古学研究所紀要16、19－26。

佐藤敏也　1971　「日本の古代米」　雄山閣考古学選書１。

吉崎昌一　1992　青森県八幡遺跡12住居から検出された雑穀類とコメほかの植物種子。八戸市埋蔵文化財調査報告書47集、59－73。

Korber-Grohne, U. and U. Piening 1980 Microstructures of the surfaces of carbonized and non-carbonized grains of cereals as observed in scanning electron and light microscopes as an additional aid in determining prehistoric findings. Flora 170, 189-228.

（注1）　穀類を計測するとき、穀粒を平面に置いたときの最大幅を幅としているが、麦類や雑穀などでは胚が中央下に位置するのに対し、イネでは横に位置する。厚さは約90度回転させて計測するが、このとき麦類などでは胚が横に位置し、イネでは中央に位置するので、イネの幅と厚さは、麦類や雑穀類とは逆の方向になっている。従って比較のためには、イネも同じ方向にして計測した方が良いのではないか、いいかえれば幅と厚さの呼称を逆にした方がよいのではないかと考えているが、いまのところ慣例に従っておく。

（注2）　へそを中央にした時の幅を厚さとした。

表1　オオムギ、コムギ、イネ粒の計測値

オオムギ

長さ	5.8	5.8	5.6	5.3	5.3	5.4	5.2	5.2	5.8	5.5	5.5	5.7	5.9	6.0
幅	3.1	3.0	3.2	2.7	3.1	3.2	3.0	2.7	3.0	2.9	2.9	3.0	2.8	2.8
厚さ	2.5	2.7	2.3	2.2	2.4	2.3	2.0	2.0	2.1	2.4	2.0	2.6	2.0	2.4

小型の大麦粒もある。

長さ	4.9	4.8	4.8	5.2	4.7
幅	2.0	2.1	1.8	2.2	2.2
厚さ	1.2	1.3	1.6	1.6	1.8

コムギ

長さ	4.5	4.8	3.7	3.8	3.1	3.8	3.7	3.6	4.4	3.9	4.1	3.9	3.5	3.7
幅	3.3	3.4	2.6	2.7	2.4	3.1	3.6	2.5	2.9	2.9	2.6	2.2	3.5	3.2
厚さ	2.4	2.6	2.2	2.4	2.0	2.7	2.3	2.4	2.8	2.5	2.7	2.2	3.0	2.5

イネ粒

長さ	4.5	4.7	4.6	4.8	4.3	4.5	4.4	4.7	4.2	4.4	4.5
幅	2.7	3.0	2.6	2.5	2.2	2.5	2.6	2.5	2.5	2.5	2.5
厚さ	2.1	1.9	1.9	2.2	1.4	1.8	1.6	1.6	2.0	2.2	2.1

写真説明

図版Ⅰ　オオムギ、コムギ、イネなどの走査型電子顕微鏡写真

1　オオムギ粒縦溝側

2　写真1の上方部拡大

3　オオムギ粒側面側

4　コムギ粒縦溝側

5　コムギ粒胚側

6　コムギ粒側面側

7　写真6の上方部拡大

8　イネ粒

9　イネ粒

図版Ⅱ

10　へその残っているマメ子葉

11　表皮細胞拡大

12　変形しているがへその残っているマメ子葉

13　表皮細胞拡大

14　へその不明のマメ子葉

15　表面拡大

16　半分に割れたマメ子葉

17　エゴマ果実

18　サンショウ内果皮

図版Ⅲ

19　石膏剝ぎ取り型Aの炭化物（実体顕微鏡写真）

20　石膏剝ぎ取り型Aの炭化物（実体顕微鏡写真）

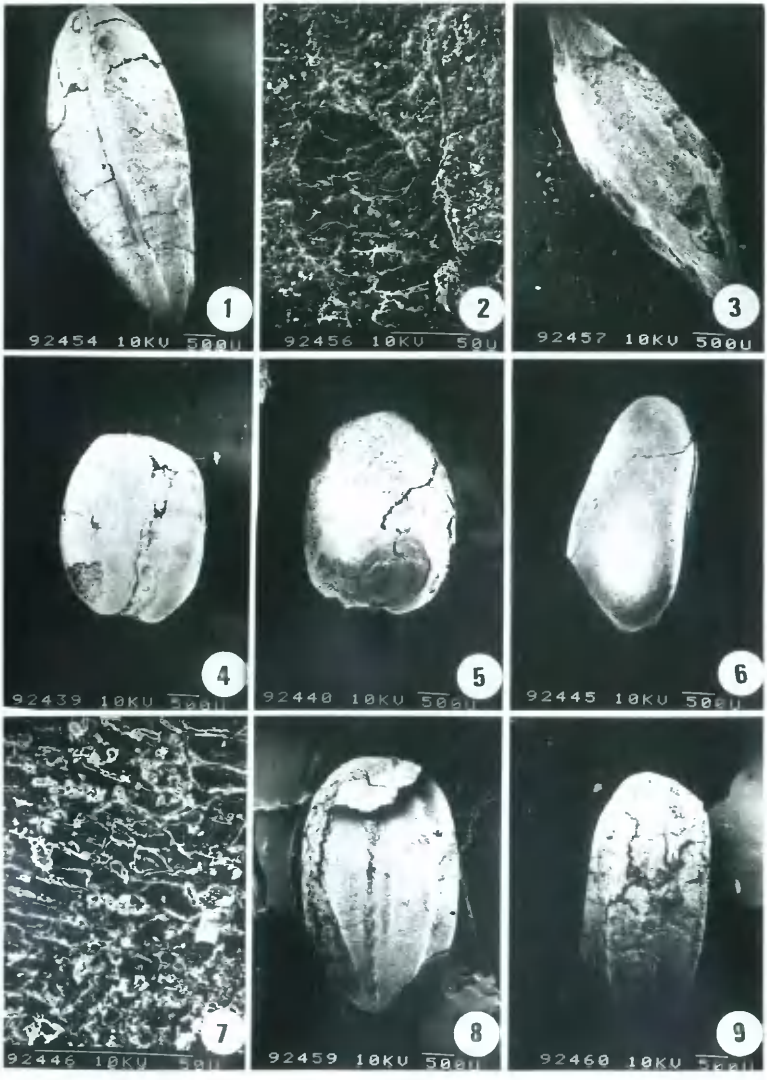
21　石膏剝ぎ取り型Bの炭化物（実体顕微鏡写真）

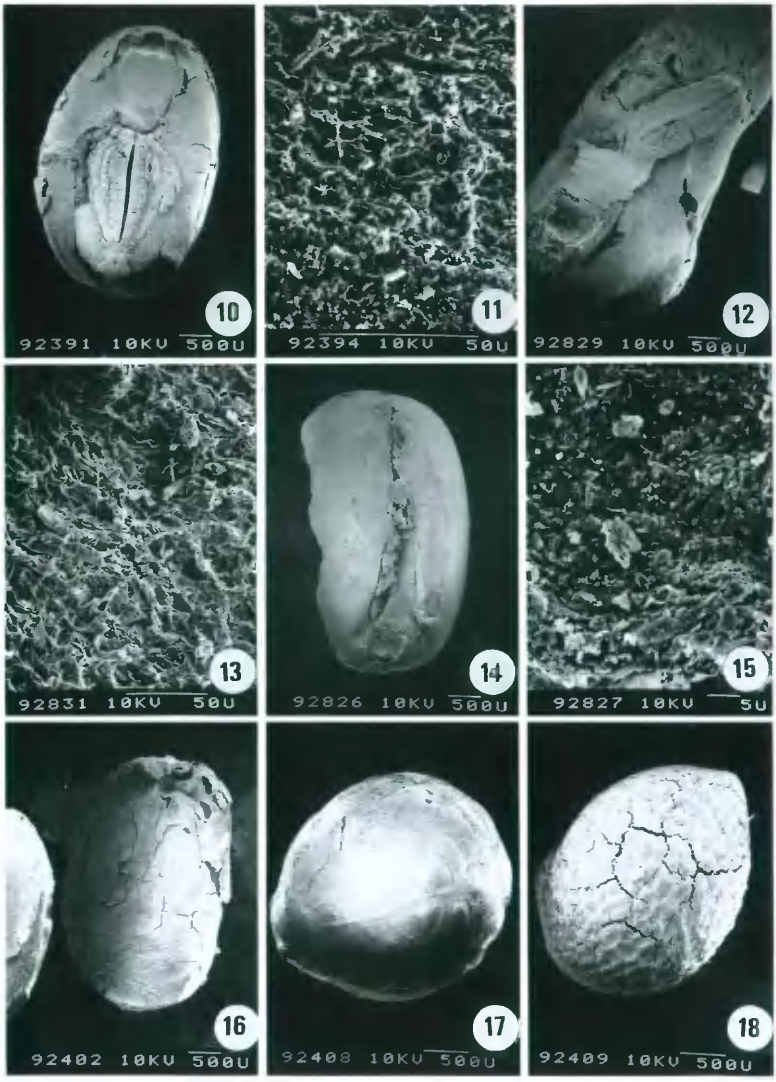
22　石膏剝ぎ取り型Bの炭化物（実体顕微鏡写真）

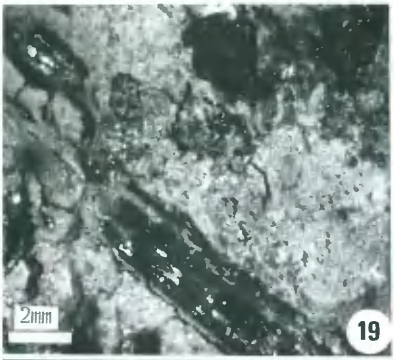
23　茎状部分で観察された細胞構造

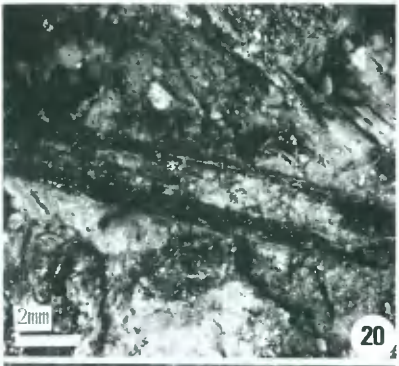
24　穎と考えられる部分

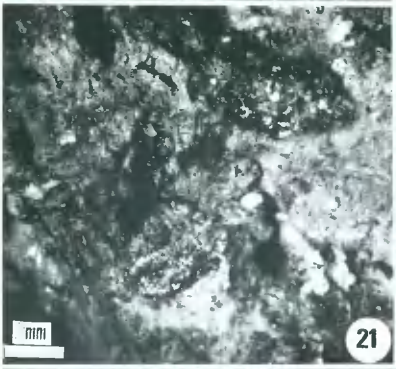
25　写真25の右上部拡大写真

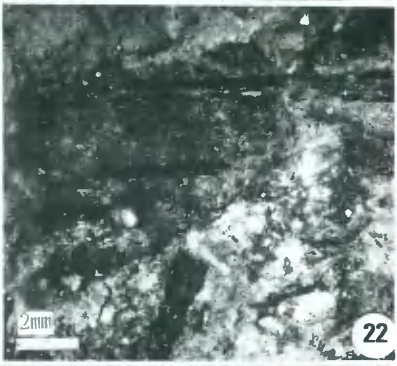

1
92454 10KV 500U
2
92456 10KV 50U
3
92457 10KV 500U
4
92439 10KV
5
92440 10KV 500U
6
92445 10KV 500U
7
92446 10KV 50U
8
92459 10KV 50U
9
92460 10KV 5KU

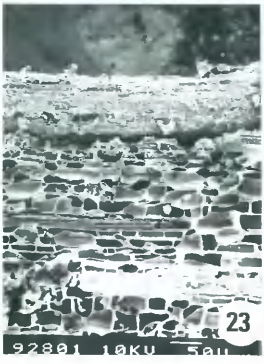

10
92391 10KV 500U
11
92394 10KV 50U
12
92829 10KV 500U
13
92831 10KV 50U
14
92826 10KV 500U
15
92827 10KV 5U
16
92402 10KV 500U
17
92408 10KV 500U
18
92409 10KV 500U


2mm
19


2mm
20


mm
21


2mm
22


23
92801 10KV 50U

24
92803 10KV 500U

25
92805 10KV 5U

岡山県津寺遺跡(土筆山・丸田調査区)出土の動物遺体

金子　浩昌

はじめに

本報告書は岡山県津寺遺跡における土筆山・丸田調査区の発掘調査において出土した動物遺体についての調査結果である。この地域における古代から近世にわたる主としてウシ、ウマなどの家畜類の状況をみるのに大変貴重な資料といえよう。ただ、資料の保存状態に好ましくない乾燥、破損によってかなり痛んだ標本があったのは残念であった。幾つかの標本は同定が不可能になった。これについては、貴重な資料のためにも早急に対策を考える必要があろう。

報告に当たって、種々ご教示をいただいたセンター職員の方々に対して御礼申し上げたい。

なお標本の記述は当センターにおいて作製された一覧表に基づいて配列する。

Ⅰ．動物遺体の種名表

脊椎動物門　Phylum VERTERRATA

魚　類　PISCES

硬骨漁綱　Class OSTEICHTHYES

スズキ目　Order Perciformes

タイ科　Famiry Sparidae

マダイ　*Pagrus major*

四足動物　TETRAPODA

哺乳綱　Class MAMMALIA

奇蹄目　Order Perissodactyla

ウマ　*Equus caballus*

偶蹄目　Order Artiodactyla

シカ科　Famiry Cervidae

ニホンジカ　*Cervus nippon*

ウシ科　Famiry Bovidae

ウシ　*Bos taurus*

Ⅱ．出土資料

1．土筆山調査区

3区、第2水田床土

ウシ：臼歯破片1。

3区、東半近世水田最下層

ウシ：臼歯破片1。

5区、土壙－112（土壙－29）

ニホンジカ角。破損し原型を留めないが、若い鹿の細い幹部と思われる。

5区、溝－20（土壙－7）

骨破片。ウシあるいはウマのような動物と思われる。

5区、溝－102西下層（溝－9）

ウシ：中足骨左側骨体部。既に破損し原型を留めない。

5区、溝－103、No6（溝－11）

ウシ：中手骨もしくは中足骨破片1。

5区、溝－103、No7（溝－11）

ウシ：中手骨もしくは中足骨破片1。

ニホンジカ：角破片。

5区、溝－103、No9（溝－11）

ウシ：中手骨もしくは中足骨破片1。

5区、溝－105、No1（溝－12）

ウシ、ウマ破片。

5区、溝－105、No2（溝－12）

ウシあるいはウマ破片1。

5区、溝－105、No4（溝－12）

ウシ：中足骨遠位骨端、ただし既に破損し原型を留めない。

5区、溝－105、No5（溝－12）

ウシ：中手骨右側（図版2－2）、ほぼ完存していたものと思われるが、現在は骨体中央で折れている。

5区、溝－105、No8（溝－12）

ウシあるいはウマ破片1。

5区、溝－108、No6（溝－19）

ウシ：中手骨もしくは中足骨片1。

５区、Ｃ－518

ウシ：中手骨もしくは中足骨遠位骨端破片１。

５区、溝No１

ウシ：中手骨もしくは中足骨？破片１。

５区、溝No３

骨破片。

５区、溝

ウシ：中手骨もしくは中足骨？破片１。

５区、遺構内

ウシもしくはウマ破片１。

５区、西半上層近世水田

マダイ第１腹椎骨（図版２－４)、焼けている。

５区、西半上層近世水田

ニホンジカ：角、分岐部１。

５区、造成土

ウシあるいはウマ破片１。

５区、上層

ウシ：下顎臼歯破片１。

５区、中層

ウマ臼歯破片１。

５区、北コーナー包含層。

マダイ：方骨、焼けている。

5a区、中層

ウシ：橈骨破片１。

5c区、中層

ウマ：焼けた獣骨片１。

5d区、土壙－39（土壙－48)

ウシ：下顎骨左側片１（$P_{2\sim4}$、$M_{1\sim3}$）(図版１－7a、7b)、上腕骨左側（図版２－１)。

５区、土壙－108（土壙－27)

ウシ：中手骨もしくは中足骨片１。

4a区、土壙墓－２（中世墓－８)

ウシ：肩甲骨関節窩の部分のみを残すものである。右側。

4a区、近世水田１

ウシ：上腕骨右側遠位骨端１、この骨はもとはかなり残されていたものである。

4a区、近世水田（下層）

ウマ：下顎臼歯$P^{3\cdot4}$、M^{1-3}。

4a区、西部、近世水田耕土（上層）

ウシ：下顎臼歯M_2、右側。

4a区、水田区側溝

ウマ：下顎臼歯P_2、破損。

4a区、No３

ウシ：肩甲骨破片１。骨の表面が剝離しているために詳細は不明である。

4b東区、土壙

ウシあるいはウマ四肢骨片１。

4b区、中世溝（上層）（溝－２）

ウシ：中足骨左側１（図版２－11)。

4b東区、中世溝、中～下層（溝－２）

ウシ：中足骨左側骨体部（図版２－12)。

ウマ：上腕骨左側骨体部（図版１－４)。

4b東区、東西溝（溝－１）

ウシ：下顎臼歯Ｍ１、破損。

4b東区、近世掘り込み

ウシ：脛骨左側破片。

4b東区、包含層

ウシ：大腿骨左側骨体部（図版２－３)、脛骨左側骨体部。

６区土壙－29（土壙－63)

ウシ：上顎歯と下顎骨が嚙み合った状態で出土している。頭蓋の部分は現存していないが、埋存時にはあったのかもしれない。この他にウシの断片的な骨が採取されている。顎骨の歯の萌出状態はM2までのものであるので２歳位の若い個体である。

７区

ウシ：脛骨近位骨端（図版２－８)、中足骨（図版２－６)、距骨（図版２－７)、踵骨（図版２－10）いずれも左側、基節骨（図版２－９）の各１。これらの骨は同一個体のものであって、おそらく埋存時には関節し合っていたものであろう。下肢の部分であるが片足が１本あったことになる。

９区、近世水田（東）

ウマ：上顎臼歯M^3、歯冠長×歯冠幅23.37×21.86。単独の遊離歯である。

９区、近世水田（南）

ウシ：下顎骨左側の破片である。M2・3が残っている。舌側が剝がれた状態。M3の咬耗は強い。

２．丸田調査区

ⅠE農区

魚類：椎体、断片的な資料のため種名不明、焼けている。

Ⅰ区

ウシ：右側上顎臼歯。

ⅠE区集石遺構－１

ウシ：中手骨もしくは中足骨破片、脛骨片、破片。

ⅠE区微高地

ウマ：上顎骨左右歯列部、左側（P^{3-4}・M^{1-3}）（図版１－1a、1b）、右側（$M^{2\cdot3}$）（図版１－2a、2b）。

Ⅱ区

ウマ：橈骨片、骨体の一部を残すもの。

Ⅳ区微高地

ウシ：下顎骨右側破片（図版１－６）、右下顎M3（図版１－5a、5b）のみ１点あり、咬耗は強い。

Ⅳ区Ｌ＝4.396ｍ

ウシ：脛骨右側骨体部（図版２－５）

Ⅳ区微高地北端

ウマ：下顎骨左右各１（破片）（図版１－3a、3b）

Ⅳ区Ｌ＝3.593ｍ

ウマ：橈骨右側近位骨端

Ⅲ．収束

津寺遺跡（土筆山、丸田地区）における動物遺体の概要を以上に述べたが、その種類はほとんどウマ、ウシに限られ、その他の動物は魚骨が２点あったのみである。この魚骨はタイではないかと思われ、火を受けていた。魚を焼いたというのではなく、調理の際に火中に落ちたも

のであろう。竈の灰の中に混じっていたものではないだろうか。このような遺物も僅かにはあったが、その他のウマ、ウシの遺体は直接人々の食生活と関連するものではなく、一例ウシの埋葬土壙を検出した他はこれら動物遺体の意図的な扱いを知りうる状況を確認することはできなかった。あるいはそうした遺構－例えば集石のような場所－もあったが、動物遺体の保存が良くなかったため、原状を復元することはできなかった。しかし、当時の貴重な家畜であったウマ、ウシの遺体が残されたことは幸いであった。以下に魚骨とウシ、ウマの遺骸の形質についての概要を述べておきたい。

計測値はmmを単位とし、計測部位は Angela von den Driesch (1976) による。

GL、全長、GLI（距骨)、最大長、Bp、近位骨端幅、Bd、遠位骨端幅、SD、骨体最小幅

1）魚骨について。

保存のよかったのは土筆山５区、西半上層近世水田で検出されたマダイの第一腹椎骨である。一部欠ける部分もあるが略形状を窺うことができる。椎体部の最大横径15.28あり、体長50cm近くなる個体のものであったろう。全体が焼け灰白色を呈している。

2）ウシの遺骸について。

検出された幾つかの遺骸のなかで計測できる資料を次にあげておく。

津寺土筆山、７区、中世

脛骨左側：Bd 54.81

距骨左側：GLI 58.03、Bd 37.11

中足骨左側：GL 199.05、Bp 40.19、SD 22.11、Bd 45.50

津寺土筆山、５区、溝－105、No５（溝－12)

中手骨右側：Bp 51.42

津寺土筆山、4b東区、包含層

大腿骨左側：SD 32.0

脛骨左側：SD 36.0±

津寺土筆山、4b東区、中世溝（上層）（溝－２）

中手骨左側：SD 21.6

津寺土筆山、4b東側区、中世溝、中～下層（溝－２）

中足骨左側：SD 26.0

以上の計測値はごく断片的なものであり、また例数も少ないが、一つの傾向をみることはできるであろう。これは現在の日本の在来牛といわれている幾つかの標本と比べてみると、中手骨の近位骨端幅51.42は口之島牛の雌の平均値54.5を下回っている。脛骨遠位骨端幅54.81は、口之島牛雌で58.3である。多分、津寺土筆山のウシは雌であるが、小さい個体であったようで

ある。

中足骨GL199.05も同じ大きさであるが、これまでに知られた各地の遺跡の資料もこれに近いもので、特に草戸千軒遺跡のなかにこれに近い大きさのものがある。ここではこれよりも大きな個体があるので雄と考えられる。

３）土壙－29（土壙－63）で検出されたウシ

このウシは頭蓋骨と四肢骨を含む一括出土のもので、おそらく埋葬されたものであろう。類例の少ないものとして注目される。

４）丸田調査区で検出されたウシ・ウマ

この調査区からもウシの遺骸が出土している。このウシもほぼ上記のものと同じ大きさであったと思われる。古代から中・近世に至る日本の諸遺跡で知られるウシの遺骸が、おおよそ在来牛である見島牛・口之島牛に似ていることは既に指摘されているが、中・近世においてこの辺りで飼われていたウシは比較的小型のウシであったようである。

５）ウマの遺骸について

ウシに比べるとウマの遺骸の出土は全く少ないものであった。上記の資料にもみるように確実なウマは土筆山地区で臼歯断片、上腕骨左側１点、丸田調査区で上顎骨、下顎骨各１点という数である。しかし上顎骨、下顎骨が出土しているので確かに飼育されていたのである。こうしたウマの大きさについては残された僅かな骨からであるが、次のように推定される。

四肢骨で残されているのは、中世の溝からの出土である上腕骨が１点であり、その骨体最小幅25.0は、現生在来馬のなかでもっとも小さいトカラ馬の雌の28.5よりも小さい。歯の一々についての計測は省略するが、やはり小さい。

参考文献

西中川　駿：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の起源、系統に関する研究―特に日本在来種との関係―、昭和63年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書、平成元年３月

西中川　駿：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究―、平成２年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書、平成３年３月

図版１

1abウマ左上顎歯　2abウマ右上顎歯　3abウマ右下顎骨　４ウマ・左上腕骨　5abウシ右M_3　６ウシ右下顎骨　7abウシ左下顎骨

図版２

１ウシ左上腕骨　２ウシ右中手骨　３ウシ左大腿骨　４マダイ第１腹椎骨　５ウシ脛骨右　６ウシ左中足骨　７ウシ左距骨　８ウシ左脛骨　９ウシ基節骨　10ウシ、左踵骨　11ウシ左中足骨　12ウシ、左中足骨

図版1　ウマとウシ遺骸

図版2　魚とウシ遺骸

津寺遺跡丸田Ⅳ区・土筆山３・５区出土製鉄関連遺物の金属学的調査

大澤　正己

概要

中世（13世紀後半～14世紀前半）に属する津寺遺跡の丸田Ⅳ区と土筆山３・５区より出土した製鉄関連遺物（鉄滓、鉄塊系遺物、鉄製品）を調査して次の事が明らかになった。

〈１〉　丸田Ⅳ区出土の鉄滓は、砂鉄系鉄素材を原料とした鉄器製作時の排出滓の鍛錬鍛冶滓であった。鍛冶作業は、高温鍛接時の折り返し時や、酸化防止に粘土汁を灌ぐ焼き入れ等の熱処理排出滓が想定できる。

〈２〉　土筆山３・５区からは鉱石系製錬滓や鉄塊系遺物、鍛錬鍛冶滓らと共に砂鉄由来のガラス質滓をはじめ、鉄塊系遺物や鉄製品までが確認できた。

〈３〉　鉄製品中には錆化鉄に覆われた中核部に鉄芯銅板巻き鉄製品があって、銅板は94％Cu－3.6％Sn系で鉄芯素材の非金属介在物（鉄の製錬過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混ざり物）は66.6％TiO_2－7.4％V_2O_3組成で砂鉄を始発原料とするものが含まれる。廃鉄再生原料となるものが放棄されたのであろうか。

〈４〉　津寺遺跡内では、近くの周辺製鉄産地より荒鉄（製錬生成鉄で、捲込みスラグや炉材粘土の不純物、表皮付着鉄滓らを含む原料鉄）が搬入されて大鍛冶的作業の精錬鍛冶から鉄器製作の鍛錬鍛冶がなされた地域と推定される。精錬鍛冶滓の検出はなかったが、鉄塊系遺物や精錬滓の存在から精錬鍛冶の操業も予測された。製鉄原料事情は、鉱石系のみにとどまらず砂鉄系の存在も伺われた事は注目される。

１．いきさつ

津寺遺跡は岡山市津寺に所在し、弥生時代から中世までの複合遺跡である。遺跡面積は18,324㎡と広範囲にわたるが、本報告は丸田Ⅳ区と土筆山３・５区が対象となる。

当遺跡は昭和63年に実施した山陽自動車道建設に伴う発掘調査で検出された。丸田Ⅳ区は微高地部分に中世集落址が存在し、鉄滓が各所で出土する。当該地での注目すべき点は、中世土

壙墓（土壙墓－6）からは鍛冶具（鎚、鉗、炭掻き棒、鏊など）一式が副葬されて鍛冶作業がシンボル化されると共に種々の鉄器（釘、かすがい、紡錘車、火打ち鎌など）が検出されている。鉄滓は鍛冶滓で当地の鍛冶操業を裏付ける。

土筆山3・5区は丸田Ⅰ区に隣接し、3区は土筆山地区の中央で、5区は南部に位置する。当区の中世各種遺構からは、鉄滓や鉄塊系遺物、鉄器らが出土した。

両地区のこれら製鉄関連遺物の専門調査依頼の要請が岡山県古代吉備文化財センターよりあったので、金属学的調査を行なった。それ等の報告と若干の考察を加えて提示した。

2．調査方法

2－1、供試材

Table. 1に示す。丸田Ⅳ区出土品は9点、土筆山3・5区は22点である。

2－2、調査項目

（1） 肉眼観察

（2） 顕微鏡組織

鉄滓、鉄塊系遺物、鉄器らは水道水で充分に洗滌、乾燥後、鉄滓は中核部をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の＃150、＃320、＃600、＃1000と順を追って研磨し、最後には被研面を3μのダイヤモンドで仕上げて顕微鏡組成の観察を行なった。なお、金属鉄の組織のうち、炭化物はピクラル（ピクリン酸飽和アルコール液）で、フェライト結晶粒はナイタル（5％硝酸アルコール液）で腐食（Etching）して組織の同定を行なっている。

（3） ビッカース断面硬度

金属鉄、鉄滓中の鉱物組成の同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行なった。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

（4） CMA（Computer Aided X-ray Micro Analyzer）調査

EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。旧式装置は別名X線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光器に画像化し、定性的な結果を得る。更に、標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。非金属介在物の組成は定量値が得られる。

（５）　化学組成

鉄滓の分析は次の方法で実施した。全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第１鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）：ICP法。ICP（Inductively Coupled Plasma Emisson Spectrometer）：誘導結合プラズマ発光分光分析。

３．調査結果と考察

３－１、丸田Ⅳ区出土品

（１）　ガラス質滓：TDR－３、４、OKA－７

①　肉眼観察：TDR－３、４は近似した外観をもつ。両者の表皮は灰黒色を呈し、軽質ガラス質滓で破砕を受けている。肌は気泡を発し、一部は流動状であった。OKA－７は小豆色の滑らか肌で、破面は黒色まだら色を呈するガラス質滓で、表裏に木炭痕を残す。

②　顕微鏡組成：Photo.１の①～⑧と、Photo.３の④⑤に示す。鉱物組成は暗黒色ガラス質スラグに微小多角形マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）を微量晶出するのが３者の共通傾向である。なお、局部的にはPhoto.１の①～③に示す様に球状化金属鉄やPhoto.１の⑥の淡灰色微小針状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）らが認められる。

当ガラス質滓は、赤熱鉄素材の酸化防止の目的で鉄肌に灌がれた粘土汁が高温を受けてガラス化したものである。鍛錬鍛冶作業での派生物とみなされよう。

③　化学組成：Table.２にTDR－３とOKA－７の分析結果を示す。両者は鉄分は少なく主成分はガラス質である。全鉄分（Total Fe）は6.73～14.3％、ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は78.7～88.1％を占める。粘土質成分であって酸化アルミニウム（Al_2O_3）は12.0～14.35で左程耐火度は高いものではない。

両者は酸化カルシウム（CaO）は1.45～2.98％、二酸化チタン（TiO_2）0.37～0.64％と差異があって、粘土の成分系を異するものであろう。

（２）　鍛錬鍛冶滓：OKA－１、２、３、４、５、６

①　肉眼観察：OKA－４と６は鍛冶炉の炉底に堆積形成した小型椀形滓で、他は小破片や小型球状滓らである。色調は黄褐色から灰黒色で気泡を露出し、木炭痕を残す。

②　顕微鏡組成：Photo.２から３の①～③に示す。鉱物組成はいずれも白色粒状の大きく成

長したヴスタイト（Wüstite：FeO）と淡灰色の木ずれ状から盤状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）、それに基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 2の②にファイヤライト、③と⑥にヴスタイトの硬度を測定した圧痕写真を示す。硬度値はファイヤライトで628～672Hvを表わし、文献値の600～700Hvの範囲に収まる。又、ヴスタイトは435～447Hvを呈して文献硬度値の450～500Hvの近傍にある。[1)] 二つの鉱物相は、硬度値からも同定できた。

④ 化学組成：Table. 2に示す。鉄分が多く、ガラス質成分の少ない鍛錬鍛冶滓の成分傾向を有する。全鉄分（Total Fe）は48.0～62.3%で、このうち金属鉄（Metallic Fe）が0.02～0.24%、酸化第1鉄（FeO）50.7～68.6%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）10.2～17.9%の割合である。OKA－4が鍛錬鍛冶の初期段階で鉄分は48.0%と低めであって、OKA－6は折り返し鍛接の最終段階で62.3%と高めとなる。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は16.9%～33.6%の範囲に収まる。ガラス質成分中の塩基性成分（CaO＋MgO）は、やはりOKA－4が高くて6.26%が含まれて、OKA－6が最低値の1.73%であった。

砂鉄特有元素の二酸化チタン（TiO_2）は0.23～0.82%、バナジウム（V）0.007～0.071%と低めであるが鍛冶原料の鉄素材は、砂鉄系であろう。酸化マンガン（MnO）が0.12～0.24%と多く、銅（Cu）が0.004～0.007%と少ないのが、これを裏付ける。

3－2、土筆山3・5区出土品

（1） 鉱石製錬滓：TDR－5、14、18B

① 肉眼観察：TDR－5：表皮は灰褐色を呈し、気泡を露出させた炉内流動滓の破片である。裏面は白色粘土を付着し、反応痕を残す。TDR－14：表裏共に灰黒色を呈し、緻密質の炉内滓破片である。裏面は青灰色粘土を付着し、破面は干渉色で小気泡を発す。TDR－18B：表面は灰黒色で局部に赤錆を発する炉内残留滓の破片である。破面は黒褐色で小気泡を発するが緻密質であった。

② 顕微鏡組成：Photo. 4の①～⑤、Photo. 8の④～⑥、Photo. 9の⑥に呈す。三者の鉱物組成は、いずれも淡灰色のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）を主体とし、これに微小のヴスタイト（Wüstite：FeO）を晶出する。鉱石製錬滓の晶癖を呈するものである。なお、TDR－5はヴスタイトの円形凝集部を有し、Photo. 4の①に示した5倍のマクロ組織から直径3㎜程度が測定された。

③ ビッカース断面硬度：TDR－5のヴスタイト凝集部の硬度測定結果である。硬度圧痕写真をPhoto. 4の⑤に示す。硬度値は436Hvであった。文献硬度値の450～500Hvより若干低めで

あるがヴスタイトと同定できる。

④ 化学組成：TDR－5と14は7g以下と小塊で分析試料は採れなかった。TDR－18Bで代表させた。Table. 2に示す。該品は鉄分が多く全鉄分（Total Fe）で51.88%、ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）が29.46%であった。二酸化チタン（$TiO_2$）が0.25%、バナジウム（V）0.006%らは少なく、銅（Cu）は0.040%を含む。又、酸化マンガン（MnO）は0.09%と低値であって、鉱石系成分傾向が強い。

（2） ガラス質滓：TDR－6A、6B、11、15、16

① 肉眼観察：4種のガラス質滓は、いずれも5～10gの小塊破片である。色調は灰黒色で比重は軽い。ただし、TDR－16は硬く異質。

② 顕微鏡組成：TDR－6A：Photo. 4の⑥に示す。主要鉱物は暗黒色ガラス質スラグであるが、局部的に組織写真にある如く、白色針状結晶のイルミナイト（Ilmenite：$FeO\cdot TiO_2$）と菱形微小結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO\cdot SiO_2$）が認められる。羽口先端溶融部の高温個所での粘土混入砂鉄からのイルミナイト晶出であろう。

TDR－6B：暗黒色ガラス質スラグ中に白色多角形状微小結晶のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）の晶出状況をPhoto. 4の⑦に示す。鍛冶系のガラス質滓であろう。

TDR－11：Photo. 7の⑤に示す。鉱物組成は暗黒色ガラス質スラグ中に、局部的に砂鉄粒子が半還元状態で懸だくする。該品は砂鉄系製錬滓の可能性をもつ。

TDR－15：Photo. 8の⑦に示す。暗黒色ガラス質中に金属鉄の極く微小粒が存在する。これも鍛冶系滓に分類される。

TDR－16：Photo.16に示す。暗黒色ガラス質基地は気泡が多発し、未溶融硅石を含有する中は極く微量の鉱石粒子を残す。鉱石系製錬滓であろう。

③ CMA調査：TDR－6Aの調査結果である。Photo.12のSE（2字電子像）に示したイルミナイト（Ilmenite：$FeO\cdot TiO_2$）の針状結晶と、灰色菱形微小結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO\cdot SiO_2$）、これに基地の暗黒色ガラス質スラグを調査対象とした。Table. 3に高速定性分析結果である。検出元素を強度順に並べると次の様になる。硅素（Si）、アルミニウム（Al）、鉄（Fe）、チタン（Ti）、マグネシウム（Mg）、カルシウム（Ca）、カリウム（K）、ナトリウム（Na）、マンガン（Mn）となる。イルミナイト中のチタン（Ti）の検出から砂鉄系とも受取られるが、局所検出で量が少ない事から羽口や炉壁粘土中の混入砂鉄の溶融晶出のあった組成とも考えられる。

Photo.22は高速定性分析結果を視覚化した特性X線像である。白色輝点の集中度によって存在元素を知る方法である。例えば分析元素のチタン（Ti）をみると、針状結晶のイルミナイトに重なって白色輝点が集中し、これに鉄（Fe）が弱く認められる。$FeO\cdot TiO_2$のイルミナイ

トが同定できる。基地の暗黒色ガラス質には、スラグ成分の硅素（Si）、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）、カリウム（K）らに白色輝点は集中している。

（3） 鍛錬鍛冶滓：TDR－7A、7B、12、13、20

① 肉眼観察：TDR－7A：表裏共に灰黒色を呈するが、これに灰色粘土を付着する。気泡を多発する肌をもち、局部に赤錆がみられる鍛冶滓の小破片である。

TDR－7B：灰黒色を呈する小型椀形滓の欠損品である。該品も灰色粘土に覆われる。表面側の一部に鉄錆からくる赤褐色を発している。破面は黒色で緻密質。

TDR－12：表裏不明で灰黒色を呈し、破面をもつ塊状滓である。木炭痕を有し、灰褐色粘土を付着する。

TDR－13：灰黒色を呈し、表面側凸部に赤錆を発する小型（9 g）塊状滓である。一部は打欠き面をもつ。裏面は赤褐色で木炭痕を有し、破面は気泡を多発する。

TDR－20：表側は灰黒色に一部赤錆を発し、青白色粘土に覆われた中型椀形滓の欠損品である。裏面は木炭痕と気泡を多発し、表面側と同じ粘土を付着する。

② 顕微鏡組織：それぞれをPhoto. 5 の①～⑥、Photo.12の⑥、Photo. 8 の①～③、Photo.20の⑤～⑦に示す。主要鉱物組成は、白色粒状結晶のヴスタイト（Wüstite：FeO）と淡灰色盤状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）である。ヴスタイトは大きく成長し、局部に凝集個所が認められた。なお、TDR－7Bの一部ではヴスタイト粒の周辺を針状ヘーシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）が晶出する様子が認められた。[2)]（Photo. 5 の⑥参照）。いずれも鍛錬鍛冶滓の晶癖である。鉄素材の折返し鍛接の為、高温加熱の操業で派生した組織である。なおPhoto. 8 の②にはヴスタイト粒内に斑点状微小析出物としてのヘーシナイトが認められる。

③ ビッカース断面硬度：TDR－7Aのヴスタイトの圧痕写真をPhoto. 5 の③に、TDR－13をPhoto. 8 の③に、TDR－20をPhoto.10の⑥⑦に示す。硬度値は387～473Hvの範囲でバラツキをもつ。ヴスタイトの文献硬度値は450～500Hvであって、一部これに外れる値も出ているが、ほぼヴスタイトに同定できよう。

④ CMA調査：TDR－7Bと13を調査した。TDR－7Bはヴスタイト（Wüstite：FeO）粒周辺に針状ヘーシナイト（Hercynite：FeO・Al）が晶出した個所の分析で、これに暗黒色ガラス質スラグが加わる。高速定性分析結果による検出元素を強度（Count）順に並べると次の如くである。鉄（Fe）、硅素（Si）、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）、カリウム（K）、マグネシウム（Mg）となる。これに微量のチタン（Ti）も加わる。鉱物組成に見合った検出元素であった。ヘーシナイトの存在は、鍛冶作業の高温折返し鍛接作業が想定できる。なお、この時の鍛冶に供した鉄素材は微量チタン（Ti）の含有から磁鉄鉱系と推定される。

高速定性分析結果にもとずく面分析がPhoto.13の特性Ｘ線像である。ヴスタイト粒周辺の針状組織に白色輝点が集中する元素は、鉄（Fe）とアルミニウム（Al）であってヘーシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）が同定される。

TDR－13はヴスタイトとその粒内微小析出物のヘーシナイト、淡灰色盤状結晶のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグの分析結果である。Table. 5 に高速定性分析結果を、Photo.14に特性Ｘ線像を示す。検出元素らは前述したTDR－7Bに準ずるものであった。又、特性Ｘ線像においてもヴスタイト粒内微小斑点析出物は鉄（Fe）とアルミニウム（Al）に白色輝点が集中し、ヘーシナイトと同定できた。

⑤　化学組成：鍛錬鍛冶滓は小塊が多く、分析試料が採れたのはTDR－12と20であった。TDR－12は鍛錬鍛冶も初期段階で全鉄分（Total Fe）は49.29％とやや低めでガラス質成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）は多くて34.06％を含有し、この中の塩基性成分（CaO＋MgO）も多くて3.73％が含まれる。随伴微量元素らも多くて二酸化チタン（TiO_2）0.21％、酸化マンガン（MnO）0.22％であった。

これに対してTDR－20は、鍛錬鍛冶も最終段階で、全鉄分（Total Fe）は64.5％と多く、ガラス質成分は12.49％と低減し、塩基性成分（CaO＋MgO）も1.33％どまりとなる。更に随伴微元素の二酸化チタン（TiO_2）は0.13％、酸化マンガン（MnO）0.16％と少ない。銅（Cu）はTDR－12で0.013％、TDR－20で0.009％が含まれて、二酸化チタン（TiO_2）の量と合せて勘案すれば、鍛冶に供した鉄素材は磁鉄鉱系の可能性をもつ。

（４）　羽口先端溶融：TDR－17

①　肉眼観察：灰褐色胎土の羽口で先端部は高温で溶融し、黒色ガラス化している。

②　顕微鏡組織：Photo. 9 の②に示す。鉱物組成は暗黒色ガラス質スラグに微小白色結晶のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）を晶出する。鍛冶用羽口と推定される。

（５）　鉄塊系遺物（白鋳鉄）TDR－８、10B

①　肉眼観察：TDR－８は表裏共に赤褐色の鉄錆に覆われた扁平状の小型鉄塊である。全面灰黄土色粘土を付着する。磁性弱。

TDR－10Bは赤褐色鉄錆を発したカマボコ型の断面をもつ小片である。肌は滑らかで鉄器の一部とも考えられる。強磁性を有し、金属鉄の残存が予測できた。

②　顕微鏡組織：Photo. 6 の①～③とPhoto. 7 の②～④に示す。TDR－８は錆化して金属鉄はなかったが、天然腐食で共晶組成の白鋳鉄を表わしている。黒色はパーライト（Pearlite：フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織）、白色部はセメンタイト（Cementite：Fe_3Cで表わされる鉄と炭素の化合物。固くてもろい結晶）、蜂の巣状はセメンタイトとオーステナイト（Austenite）の共晶のレデブライト（Ledebulite）である。白鋳鉄

(White cast iron) は別名白銑ともいい、破面が銀白色を呈することからこの様に呼ばれる。なお、共晶組成の白鋳鉄の炭素含有量は4.2%前後である。

TDR－10Bは金属鉄が残存し、ピクラル（ピクリン酸飽和アルコール液）腐食：Etchingで現われた組織である。これも前述したTDR－８と同じ共晶組成の白鋳鉄組織であった。

２点の白鋳鉄は、硬くてもろいので鍛造するには、鍛冶炉に入れて加熱脱炭（下げ）して錬鉄原料としなければならないであろう。鋳鉄は、又「なめかけ法」では加炭剤ともなりうるので鍛冶炉周辺で出土した場合は、それなりの注意が必要となる。

③ ビッカース断面硬度：TDR－10Bの白鋳鉄中のセメンタイト部の硬度圧痕写真をPhoto.７の④に示す。硬度値は455Hvであった。組織に見合った硬さであろう。

（６） 鉄塊系遺物（過共析鋼）：TDR－19

① 肉眼観察：1.2kgを有する鉄塊である。表裏共に赤褐色錆を発し、金属鉄の存在を表わす亀裂が認められた。該品も黄土色粘土に覆われている。磁性強。

② マクロ組織：顕微鏡埋込み試料全体を10倍に拡大したマクロ組織をPhoto.15に示す。全面パーライト組織を呈し、極く局部に加熱組織（Over heated Structure）を有する過共析鋼（Ｃ：0.77%以上）であって炭素含有量はバラツキが比較的少ない。

③ 顕微鏡組織：Photo.11の①～⑤に示す。①は鉄中の非金属介在物である。加工前の鉄塊であって、まだ鍛打されてなく、介在物は不定形ながら展伸傾向は認められない。暗黒色ガラス質中に片状灰褐色のチタン系介在物が存在する。組成はCMAの項で触れる。⑤は過熱組織で一部脱炭を受けた個所から内部へ向けてのパーライト析出状況を示した連続組織である。５倍のマクロ組織でみた様に鉄塊内の炭素含有量はバラツキの少ないものであった。②はフェライトとセメンタイトが層状をなし、セメンタイトが多少白く浮き上ってみえる個所の拡大組織を提示した。

④ ビッカース断面硬度：Photo.11の③は過熱組織の脱炭フェライト部の硬度圧痕、④は全面パーライト析出部の硬度圧痕を示す。硬度値は前者で146Hv、後者で213Hvであった。組織に見合った値である。硬度値からみて、過共析鋼でも下限クラスの炭素量であって、0.8%前後Ｃの鋼とみておきたい。

⑤ CMA調査：Table. ６にPhoto.16のSE（２次電子像）に示した地鉄と、鉄中非金属介在物の高速定性分析結果を示す。検出元素を強度（Count）順に並べると次の様になる。鉄（Fe）、硅素（Si）、チタン（Ti）、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）、カリウム（K）、ナトリウム（Na）、マンガン（Mn）となる。砂鉄特有元素のチタン（Ti）の強い検出から始発原料は砂鉄系に想定される。

Photo.16は高速定性分析結果を視覚化した特性Ｘ線像である。非金属介在物中の茶褐色板状

結晶は、チタン（Ti）に強く白色輝点が集中し、これからの鉄（Fe）の検出は微量である。Photo.16の下方に定量分析結果を示す。76.85％TiO_2－6.17％Al_2O_3－3.0％MgO－22％FeOとなる。介在物組成はチタン酸化物のルチル（Rutile）系といえよう。又、暗黒色ガラス質からは、硅素（Si）、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）、カリウム（K）らガラス質成分に白色輝点が集中する。定量分析値は6と番号を打込んだところで、43.5％SiO_2－34.3％Al_2O_3－9.9％TiO_2－8.6％CaO－2.0％MgO－1.38％MnO－1.2％FeOとなる。硅酸塩系であっても二酸化チタン（TiO_2）を9.9％も含有していた。該品は紛れもなく鉄を原料とした鉄塊といえる。

⑥　化学組成：Table.2に示す。該品は金属鉄の残存状態がよくてメタル定量ができた。炭素（C）含有量は、多くて1.24％あって過共析鋼であった。夾雑物は少なくて硅素（Si）0.05％、マンガン（Mn）0.02％、燐（P）0.016％、硫黄（S）0.007％、銅（Cu）は0.002％であった。非金属介在物のルチルの存在から砂鉄系に分類されるが、チタン（Ti）は0.002％、バナジウム（V）0.008％と両元素は低値であった。又、随伴微量元素にも特別特徴がなく、ニッケル（Ni）0.002％、クロム（Cr）0.005％、モリブデン（Mo）0.010％、砒素（As）0.001％、錫（Sn）0.001％である。

（7）　鉄塊系遺物（亜共析鋼錆化鉄）：TDR－9

①　肉眼観察：球状の小型鉄塊。色調は灰黒色で亀裂が走り全面ひび割状でその部分は赤褐色の鉄錆を滲ませる。又、部分的には灰色の粘土を付着させる。

②　顕微鏡組織：Photo.6の④－⑧に示す。該品は表皮側に鍛冶に際して赤熱鉄素材に鍛打を加えた時点で飛散した酸化被膜の鍛造剝片を付着する。厚さは大きいもので80μ、薄いものは20μ前後である。この鍛造剝片を④に示す。鍛造剝片は鍛造作業を証明する有力考古遺物である。当鉄塊は錆化が進行していて金属鉄は残留せず、ゲーサイト（Goethite：α－FeO・OH）となった錆化鉄に過熱組織（Over heated Structure）の痕跡が認められた。⑤⑥に示す茶褐色の針状はフェライトのウイッドマンステッテン組織である。炭素（C）量は0.3％前後であろう。又、該品はヴスタイト（Wüstite：FeO）を晶出する鍛冶滓を残存させ、鍛造剝片の付着と併せて鍛冶系鉄塊と推定させる。⑦⑧を参照。

（8）　鉄塊系遺物（極低炭素鋼錆化鉄）：TDR－10A

①　肉眼観察：灰褐色を呈する台形状の塊で肌は粟粒状の錆に覆われる。灰色粘土に包まれる。

②　顕微鏡組織：Photo.7の①に示す。金属鉄は錆化するが、淡灰白色のフェライト（Ferrite：α鉄または純鉄を金相学上この様に呼称する）地に黒く細い線がみられるのはフェライト粒界である。還元直後で鉄中には炭素がまだ浸炭しない時期の派生物である。

（9） 鉄塊系遺物（炭素量不明錆化鉄）：TDR－7C

① 肉眼観察：全面錆化した3 gの小鉄塊。表皮は赤・黒錆を発し、磁性を弱く残す。

② 顕微鏡組成：Photo. 5の⑦に示す。金属鉄は残存せず、更に錆化の進行が激しく炭化物の痕跡も認められなかった。該品は炭素含有量の推定もできない代物である。

(10) 鉄芯銅板巻き鉄製品：TDR－18A

① 肉眼観察：当初は灰褐色を呈する球状の鉄塊のつもりで扱っていたが断面検鏡、CMA調査の結果、鉄芯銅板巻き鉄製品と呼ぶことにした。球状鉄塊は、試料採取段階ではボール状の膨らみをもち、中は中空であった。表皮側は青白色の粘土に覆われ、局部的に赤錆を発する外観から鉄塊とみまちがっていた。

② マクロ組織：Photo.17の断面埋込み試料全体のマクロ組織を示す。緩く弧を描く白い青銅板の間は錆化した鉄があり、その両外側も錆化鉄である。鉄芯銅板巻き鉄製品と呼称したが、これが適切かどうか、又、器種が何か不明である。

③ 顕微鏡組成：Photo. 9の③～⑤に示す。③の白色線状は青銅でその上下は錆化鉄である。特に下方の黒色楕円の連なりは非金属介在物である。非金属介在物の拡大を④に示す。淡い灰褐色の板状結晶と暗黒色ガラス質スラグから構成される。介在物組成はCMAの項で述べる。

④ ビッカース断面硬度：Photo. 9⑤に白色線状金属の硬度測定の圧痕写真を示す。硬度値は127Hvであった。該品は当初鉄のつもりでピクラル、ナイタル腐食（Etching）を施したが変化なく、僅かに赤みを帯びていた為、銅（Cu）と考えなおした。しかし、純銅であれば硬度値は50Hv前後であって、此の様に固くなっておれば合金か錆化を考えるべきである。CMAにより該品は94％Cu－3.6％Snと判明した。

⑤ CMA調査：Photo.18の400倍のSE（２次電子像）に示す白色金属部の高速定性分析結果をTable. 7に示す。検出元素で最も強度（Count）の高い元素は銅（Cu）である。これに微量の鉄（Fe）、錫（Sn）、砒素（As）らが検出された。白色金属は青銅（Cu＋Sn合金）である。定量分析値はPhoto.18下表に示す様に94.1％Cu－3.6％Sn－1.5％Fe－0.7％Asであった。

次に青銅に挟まれた鉄芯中の非金属介在物の高速定性分析結果をTable. 8に示す。分析対象はPhoto.18の1500倍のSE（２次電子像）に示した暗黒色ガラス質スラグとその中に析出した淡茶褐色板状結晶である。検出元素を強度（Count）順に並べると次の様になる。鉄（Fe）、硅素（Si）、チタン（Ti）、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）、カリウム（K）、マグネシウム（Mg）、マンガン（Mn）、銅（Cu）となる。鉄素材の始発原料は、チタン（Ti）の検出から砂鉄系である。高速定性分析結果をもとに視覚化した特性X線像と定量分析結果をPhoto.18に示す。非金属介在物の淡茶褐色板状結晶は、ほぼチタン（Ti）にのみ白色輝点が集中する。チタン酸化物はルチル（Rutile：TiO_2）系となる。Photo.18のSE（２次電子像）中に１と番号

を打ち込んだ淡茶褐色板状結晶の定量分析値は、66.6％TiO_2－7.6％FeO－7.4％V_2O_3－3.0％MnO－2.7％Al_2O_3－2.5％MgOである。又、暗黒色ガラス質スラグ部分は、50.4％SiO_2－19.6％Al_2O_3－12.4％TiO_2－5.0％CaO－4.2％FeO－3.4％MnO－0.9％MgOとなり、硅酸塩系介在物となる。しかし、これにも12.4％TiO_2が含有されてチタン（Ti）が多く、砂鉄系由来の鉄と判定できる。

⑥　化学組成：Table. 2に示す。該品は当初一体品と思い込んでいたのでそのまま酸化物定量を行なった。全鉄分（Total Fe）は42.12％に対して金属鉄（Metallic Fe）0.23％、酸化第1鉄（FeO）6.07％、錆化鉄が大部分なので酸化第2鉄（Fe_2O_3）主体で53.18％であった。鉄分は錆化して汚染物質が多く、ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）が23.3％であった。銅版を抱えているので銅（Cu）は3:7％と高い。

一方、鉄素材はCMA調査で介在物にチタン（Ti）を含む砂鉄系であった様に、二酸化チタン（TiO_2）が0.19％、バナジウム（V）0.007％が含有されていた。また、該品は五酸化燐（P_2O_5）が1.015％と高いことを特徴とする。なお、鉄素材は錆化が進行していて炭化物の痕跡を組織から読み取ることが出来なかったが、炭素（C）量は0.45％と出ている。これは錆化鉄で有機物抱き込みがあって、実質はもう少し低めの亜共析鋼であろう。

(11)　棒状鉄製品：TDR－18C

①　肉眼観察：5㎜角の棒状鉄器で現存長さ90㎜である。実際は棒状鉄器は錆化鉄と粘土に覆われていた。

②　マクロ組織：Photo.19に示す。大型非金属介在物の少ない清浄な鋼である。非金属介在物による折返し鍛接面は明瞭でないが、パーライト含有量の高低縞による線状痕跡が認められる。炭素量の異なる2種の鋼の鍛接材であろうか。

③　顕微鏡組成：Photo.10の①～④に示す。①は非金属介在物である。ウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO・TiO_2）系と暗黒色ガラス質スラグ系が認められた。介在物は鍛打加工を受けているので伸びている。組成はCMAの項で述べる。②はフェライト結晶粒とパーライトの析出状況を示す。縞模様のパーライトの析出は、一種の折返し加工とみてよかろう。パーライト析出量から炭素含有量を推定すると0.1％以下の亜共析鋼で軟鋼である。鍛打加工後の歪取り焼鈍は十分に施されている。

④　ビッカース断面硬度：Photo.10の③と④にパーライト析出の多い個所の硬度圧痕を示す。硬度値は128～133Hvであった。パーライト析出量に見合った値であった。

⑤　CMA調査：非金属介在物の高速定性分析結果をTable. 9に示す。検出元素を強度（Count）順に並べると次の様になる。鉄（Fe）、硅素（Si）、アルミニウム（Al）、チタン（Ti）、カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）、カリウム（K）、バナジウム（V）、マンガン

(Mn) となる。鉄素材はチタン (Ti) とバナジウム (V) の砂鉄特有元素が検出された。

Photo.20は特性X線像と定量分析値である。SE (2次電子像) の3と番号を付した淡茶褐色多角形結晶は鉄 (Fe) とチタン (Ti) に強く白色輝点が集中して鉄 (Fe) ーチタン (Ti) 化合物系と判る。これを定量分析値でみると、48.5%FeO−20.5%V_2O_3−12.6% (TiO_2) −6.9%Al_2O_3−5.5%SiO_2−3.5%MgO−3.0MnOとなる。特性X線像でも判る様にこの介在物はバナジウム濃度の高いものであった。淡茶褐色介在物は一応、鉄 (Fe) ーチタン (Ti) 濃度が高くウルボスピネル系とみてよかろう。

暗褐色ガラス質の4と番号を付した個所の介在物は、38.4%SiO_2−19.6%Al_2O_3−8.3%CaO−2.8%MgOの硅酸塩系で、これに19.8%FeO−5.5%TiO_2が加わって砂鉄原料を濃厚に呈する組成を表わしている。

4. まとめ

津寺遺跡の中世に属する丸田Ⅳ区と土筆山3・5区の遺構から出土した製鉄関連遺物 (鉄滓、鉄塊系遺物、鉄製品) を調査したところ、鍛冶作業を裏付ける遺物であった。鍛冶に供された鉄素材の始発原料は、砂鉄系と鉱石系の両方が混在する事が確認できて、古墳時代の製鉄[3]が中世まで引継がれた可能性を裏付けるものとして注目される。

今後は古代の遺物の確認と、製鉄遺構側からの実証が必要となる。なお、津寺遺跡内では、他に、中屋区や隣接する高田区、高塚遺跡の出土品の調査も実施した。後日、それらを併せて総合的なまとめを行なう所存である。

注

1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968。

符号	硬度測定対象物	硬度実測値	文献硬度値※1
	Fayalite ($2FeO \cdot SiO_2$) ※2	560,588	600~700Hv
	磁鉄鉱 ※2	513,506	530~600Hv
	マルテンサイト ※2	641	633~653Hv
	Wüstite (FeO) ※3	481,471	450~500Hv
	Magnetite (Fe_3O_4) ※4	616,623	500~600Hv
	白鋳鉄 ※5	563,506	458~613Hv
	亜共析鋼 (C：0.4%) ※6	175	160~213Hv

※1 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968他。

※2 滋賀県草津市野路小野山遺跡出土遺物 7C末~8C初

※3 兵庫県川西市小戸遺跡出土鍛冶滓 4C後半

※4　新潟県豊栄市新五兵衛山遺跡出土砂鉄製錬滓　Ulvöspinel　平安時代

※5　大阪府東大阪市西之辻16次調査出土鋳造鉄斧　古墳時代前期

※6　埼玉県大宮市御蔵山中遺跡鉄鏃　5C中頃

2）ヴスタイト粒周辺に析出する針状ヘーシナイトは鍛冶滓で稀に認められる組織である。過去に2例の報告を行なったが、一部には針状結晶をファイヤライトと誤認したものもあった。ここで訂正させて頂く。

拙稿「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第13集）福岡県教育委員会　1991。

拙稿「白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査」『白井二位屋遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団報告　第　集）群馬県埋蔵文化財調査センター　1994　発行予定。

3）拙稿「矢部奥田遺跡・矢部古墳群A・矢部堀越遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82（山陽自動車道建設に伴う発掘調査6）　岡山県古代吉備文化財センター編集　岡山県教育委員会　1993。

Table. 1　津寺遺跡・丸田Ⅳ区・土筆山３・５区出土供試料の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	推定年代	計測値 大きさ(mm)	計測値 重量(g)	調査項目 顕微鏡組織	調査項目 ビッカース断面硬度	調査項目 CMA	調査項目 化学組成
TDR-3	ガラス質滓	丸田ⅣA区土壙－44	中世	52×45×35	44	○			○
4	〃	〃	〃	39×33×18	16	○			
OKA-1	鍛錬鍛冶滓	丸田ⅣA区微高地掘下げ	〃	40×40×20	40	○	○		○
2	〃	〃　水田状遺構上層洪水砂	〃	15×17×10	5	○			○
3	〃	〃　水田下層	〃	40×25×17	33	○	○		○
4	〃	〃　溝－22	〃	50×75×20	95	○			○
5	〃	丸田ⅣB区北半分上層	〃	25×25×15	20	○			○
6	〃	〃　L≒4.2~4.5cm掘下げ	〃	43×20×13	22	○			○
7	〃	〃　土壙－70	〃	40×35×25	40	○			○
TDR-5	鉱石製錬滓	土筆山３区第2K田床土	〃	24×20×9	4	○	○		
6A	ガラス質滓	〃　５区土壙－203	〃	35×20×13	7	○		○	
6B	〃	〃　〃	〃	29×19×13	6	○			
7A	鍛錬鍛冶滓	〃　溝－19－括	〃	22×21×18	12	○	○		
7B	〃	〃　〃	〃	28×18×10	9	○		○	
7C	鉄塊系遺物(錆化物)	〃　〃	〃	17×12×10 22×8×6 14×9×8	3 2 1	○ ○ ○			

符号	試料	出土位置	推定年代	計測値 大きさ(mm)	計測値 重量(g)	調査項目 顕微鏡組織	調査項目 ビッカース断面硬度	調査項目 CMA	調査項目 化学組成
8	鉄塊系遺物(白鋳鉄錆化)	土筆山５区溝－21	〃	28×25×7	6	○			
9	〃(錆化物)	〃　溝－105（西）	〃	22×21×19	9	○			
10A	〃(極低炭素鋼、錆化)	〃　北コーナー土器溜	〃	35×20×10	10	○			
10B	〃(白鋳鉄)	〃　〃	〃	18×15×5	5	○	○		
11	ガラス質滓(砂鉄混入)	〃　C-306	〃	37×25×25	14	○			
12	鍛錬鍛冶滓	〃　C-357	〃	44×28×20	39	○			○
13	〃	〃　C-991	〃	27×21×13	9	○	○	○	
14	鉱石製錬滓	〃　C-1275	〃	21×17×15	7	○			
15	ガラス質滓	〃　C-2460	〃	32×21×16	5	○			
16	〃	〃　5a区No４土壙	〃	32×25×22	10	○			
17	〃(羽口先熔融)	〃　5b区中層		55×63×30	89	○			
18A	鉄芯銅板巻き鉄製品	〃　5c区中層		55×60×50	135	○	○	○	○
18B	鉱石製錬滓	〃　〃		40×28×23	31	○			○
18C	棒状鉄製品	〃　〃		5×5×90	16	○	○	○	
19	鉄塊系遺物(過共析鋼)	〃　5d区土壙－31		120×85×50	1190	○	○	○	○
20	鍛錬鍛冶滓	〃　〃　溝－8		70×65×42	220	○	○		○

Table. 2　供試料の化学組成

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全鉄分(Total Fe) *	金属鉄(Metalic Fe) *	酸化第1鉄(FeO) *	酸化第2鉄(Fe_2O_3) *	二酸化珪素(SiO_2) *	酸化アルミニウム(Al_2O_3) *	酸化カルシウム(CaO) *	酸化マグネシウム(MgO) *	酸化カリウム(K_2O) *	酸化ナトリウム(Na_2O) *	酸化マンガン(MnO) *	二酸化チタン(TiO_2) *	酸化クロム(Cr_2O_3) *	硫黄(S) *	五酸化燐(P_2O_5) *	炭素(C) Σ*	バナジウム(V) Σ*	銅(Cu) Σ*	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
3	津寺	丸田ⅣA区土壙－44	ガラス質滓	中世	6.73	0.34	2.31	6.57	63.59	14.35	2.98	1.55	3.448	2.135	0.19	0.64	0.052	0.01	0.419	0.13	0.006	0.005	88.053	13.084	0.095	
OKA-1	〃	丸田ⅣA区微高地掘下げ	鍛錬鍛冶滓	〃	47.9	0.24	50.7	11.8	23.1	5.16	1.95	1.01	1.61	0.54	0.22	0.28	0.033	0.026	0.38	0.12	0.011	0.007	33.370	0.697	0.006	
2	〃	〃　水田状遺構上層	〃	〃	53.2	0.18	52.0	17.9	17.1	4.69	1.38	0.51	0.61	0.90	0.16	0.31	0.056	0.029	0.64	0.14	0.018	0.004	25.190	0.474	0.006	
3	〃	〃　水田下層	〃	〃	54.4	0.02	60.8	10.2	18.8	3.84	1.75	0.66	1.08	0.51	0.17	0.21	0.030	0.011	0.35	0.07	0.007	0.005	26.640	0.490	0.004	
4	〃	〃　溝－22	〃	〃	48.0	0.14	51.5	11.2	20.1	4.63	5.05	1.21	2.07	0.50	0.24	0.23	0.034	0.028	0.39	0.10	0.015	0.006	33.56	0.699	0.005	
5	〃	丸田ⅣB区北半部分上層	〃	〃	52.8	0.02	59.5	9.31	19.1	4.21	2.63	0.86	1.65	0.48	0.21	0.26	0.029	0.021	0.35	0.07	0.011	0.006	28.930	0.548	0.005	
6	〃	〃　L≒4.2~4.5m掘下げ	〃	〃	62.3	0.03	68.6	12.8	11.6	2.65	1.35	0.38	0.63	0.24	0.12	0.82	0.050	0.014	0.19	0.10	0.071	0.004	16.850	0.271	0.013	
7	〃	〃　土壙－70	〃	〃	14.3	0.03	11.4	7.74	60.3	12.0	1.45	0.57	3.80	0.61	0.06	0.37	0.033	0.009	0.15	0.07	0.006	0.002	78.730	5.506	0.026	
TDR-12	〃	土筆山５区C-357	〃	〃	49.29	0.26	55.71	8.19	23.61	4.85	2.82	0.91	1.271	0.599	0.22	0.21	0.041	0.01	0.366	0.02	0.003	0.013	34.060	0.691	0.004	
18A	〃	土筆山5c区中層	鉄芯銅板巻鉄製品		42.14	0.23	6.07	53.18	17.26	4.13	0.52	0.38	0.589	0.416	0.05	0.19	0.026	0.07	1.015	0.45	0.007	3.70	23.295	0.553	0.005	
18B	〃	〃	鉱石製錬滓		51.88	0.24	55.78	11.84	19.18	4.84	2.94	0.93	1.142	0.430	0.09	0.25	0.028	0.01	0.321	0.07	0.006	0.040	29.462	0.568	0.005	
19	〃	土筆山5d区土壙31	鉄塊系遺物		C 1.24	Si 0.05	Mn 0.02	P 0.016	S 0.007	Cu 0.002	Ni 0.002	Cr 0.005	Mo 0.010	As 0.001	Sn 0.001	Ti 0.002	V 0.008	—	—	—	—	—	—	—	—	
20	〃	〃　溝－8	鍛錬鍛冶滓		64.50	0.22	65.09	19.57	8.82	1.46	0.99	0.34	0.721	0.159	0.16	0.13	0.031	0.03	0.309	0.10	0.009	0.009	12.490	0.194	0.002	

COMMENT　: 1 6A
ACCEL. VOLT. (KV):　15
PROBE CURRENT : 4.999E-08 (A)
STAGE POS. :　X　40000　Y　40000　Z　11000

24-AUG-93

CH(1)　TAP

	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
	Y -l	6.45	120	************
	RE-m	6.73	246	**************
	SR-l	6.86	180	*************
	W -m	6.98	156	*************
◎	SI-k	7.13	13243	********************+++++
	TA-m	7.25	244	**************
	RB-l	7.32	115	************
	HF-m	7.54	86	************
	LU-m	7.84	77	***********
	YB-m	8.15	81	************
◎	AL-k	8.34	5816	*******************++++
	BR-l	8.37	2234	********************++
	ER-m	8.82	44	**********
	SE-l	8.99	46	**********
	HO-m	9.20	36	**********
	DY-m	9.59	40	**********
	AS-l	9.67	31	*********
○	MG-k	9.89	486	**************++++
	TB-m	10.00	47	**********
	GE-l	10.44	20	********
	GA-l	11.29	17	********
•	NA-k	11.91	49	*********+
	**	14.72	5	****
	F -k	18.32	4	***+

CH(2)　PET

	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
○	TI-k	2.75	675	*************++++++
	BA-l	2.78	73	***********
	CS-l	2.89	45	**********
	SC-k	3.03	31	*********
	I -l	3.15	31	*********
	TE-l	3.29	26	*********
•	CA-k	3.36	267	***********+++++
	SB-l	3.44	32	*********
	SN-l	3.60	23	********
•	K -k	3.74	132	**********++++
	IN-l	3.77	19	********
	U -m	3.91	9	*****
	CD-l	3.96	3	***
	TH-m	4.14	9	*****
	AG-l	4.15	11	*****+
	PD-l	4.37	7	*****
	RH-l	4.60	7	****+
	CL-k	4.73	6	****
	RU-l	4.85	4	****
	S -k	5.37	5	***+
	MO-l	5.41	2	**
	NB-l	5.72	3	**+
	ZR-l	6.07	3	**+
	P -k	6.16	8	***++

CH(3)　LIF

	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
	BI-l	1.14	41	**********
	PB-l	1.18	38	**********
	TL-l	1.21	33	*********
	HG-l	1.24	37	*********+
	AU-l	1.28	33	*********
	PT-l	1.31	36	**********
	IR-l	1.35	36	*********+
	OS-l	1.39	40	*********+
	ZN-k	1.44	32	*********
	CU-k	1.54	29	*********
	NI-k	1.66	26	********+
	TM-l	1.73	19	********
	CO-k	1.79	23	********
◎	FE-k	1.94	1032	**********+++++++++
	GD-l	2.05	10	*****
○	MN-k	2.10	32	*******++
	EU-l	2.12	10	*****
	SM-l	2.20	13	*****+
	CR-k	2.29	7	*****
	ND-l	2.37	8	*****
	PR-l	2.46	7	****+
	V -k	2.50	6	****
	CE-l	2.56	3	***
	LA-l	2.67	2	**

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
NA　MG　AL　SI　K　CA　TI　MN　FE　BR　←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
P　OS

Photo.12のSE（2次電子像）に示した白色針状結晶のイルミナイトと菱形灰色のファイヤライト基地の暗黒色ガラス質スラグの分析結果である。検出元素を強度順に並べると次の様になる。硅素（Si）13,243、アルミ（Al）5,816、鉄（Fe）1,032、チタン（Ti）675、マグネシウム（Mg）486、カルシウム（Ca）267、カリウム（K）132、ナトリウム（Na）49、マンガン（Mn）32となる。主要鉱物はガラス質で、これに少量のイルミナイト（FeO・TiO_2）とファイヤライト（2FeO・SiO_2）の晶出があるので鉱物組成に対応した検出元素である。少量のイルミナイトの検出は砂鉄系原料に由来する可能性もあるが、粘土中砂鉄の影響も無視できない。鉄滓出土の状況からみると後者とみるべきであろう。

Table. 3　土筆山5区出土ガラス質滓（TDR—6A）のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

COMMENT　: 7B
ACCEL. VOLT. (KV):　15
PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)
STAGE POS. :　X　40000　Y　40000　Z　11000

23-AUG-93

CH(1)　TAP

	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
	Y -l	6.45	215	**************
	RE-m	6.73	203	**************
	SR-l	6.86	167	*************
	W -m	6.98	148	*************
◎	SI-k	7.13	1366	*****************++++
	TA-m	7.25	135	*************
	RB-l	7.32	115	************
	HF-m	7.54	91	************
	LU-m	7.84	75	***********
	YB-m	8.15	57	***********
•	AL-k	8.34	368	**************++
	BR-l	8.37	196	**************+
	ER-m	8.82	46	**********
	SE-l	8.99	42	**********
	HO-m	9.20	36	**********
	DY-m	9.59	32	*********
	AS-l	9.67	31	*********
•	MG-k	9.89	55	**********++
	TB-m	10.00	24	*********
	GE-l	10.44	21	********
	GA-l	11.29	18	********
	NA-k	11.91	24	********+
	**	14.72	8	****+
	F -k	18.32	8	****+

CH(2)　PET

	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
	TI-k	2.75	128	************+
	BA-l	2.78	95	************
	CS-l	2.89	95	************
	SC-k	3.03	42	**********
	I -l	3.15	67	***********
	TE-l	3.29	50	**********
•	CA-k	3.36	236	************+++
	SB-l	3.44	48	**********
	SN-l	3.60	37	**********
•	K -k	3.74	64	**********++
	IN-l	3.77	34	*********
	U -m	3.91	14	******
	CD-l	3.96	18	*******+
	TH-m	4.14	20	********
	AG-l	4.15	30	********+
	PD-l	4.37	17	********
	RH-l	4.60	18	*******+
	CL-k	4.73	15	*******
	RU-l	4.85	10	*****
	S -k	5.37	10	****+
	MO-l	5.41	8	****+
	NB-l	5.72	7	*****
	ZR-l	6.07	4	****
	P -k	6.16	3	***

CH(3)　LIF

	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
	BI-l	1.14	71	***********
	PR-l	1.18	69	***********
	TL-l	1.21	70	***********
	HG-l	1.24	72	***********
	AU-l	1.28	69	***********
	PT-l	1.31	60	***********
	IR-l	1.35	63	***********
	OS-l	1.39	58	***********
	ZN-k	1.44	58	***********
	CU-k	1.54	54	*********+
	NI-k	1.66	36	**********
	TM-l	1.73	30	**********
	CO-k	1.79	51	**********
◎	FE-k	1.94	5819	****************++++++++
	GD-l	2.05	28	*********
	MN-k	2.10	20	********
	EU-l	2.12	23	********
	SM-l	2.20	20	********
	CR-k	2.29	13	******
	ND-l	2.37	9	*****
	PR-l	2.46	8	*****
	V -k	2.50	8	*****
	CE-l	2.56	9	*****
	LA-l	2.67	3	***

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
MG　AL　SI　K　CA　FE　←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
TI　AG

Photo.13のSE（2次電子像）に示したヴスタイト（Wüstite：FeO）とその粒周辺に析出した針状結晶及び暗黒色ガラス質スラグと淡灰色木ずれ状ファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）の分析結果である。検出元素を強度（Count）順に並べると次の様になる。鉄（Fe）5,819、硅素（Si）1,366、アルミ（Al）368、カルシウム（Ca）236、カリウム（K）64、マグネシウム（Mg）55となる。ヴスタイト粒周辺の針状結晶はヘーシナイト（Hercynite：FeO・Al_2O_3）であって、鍛冶作業は折返し鍛接の高温操業が想定できる。なお鉄素材はチタン（Ti）の微量検出で磁鉄鉱系が推定される。

Table. 4　土筆山5区出土鍛錬鍛冶滓（TDR—7B）のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

```
COMMENT    : 13
ACCEL. VOLT. (KV):   15
PROBE CURRENT : 4.991E-08 (A)                                                          23-AUG-93
STAGE POS. :  X  40000  Y  40000  Z  11000

             CH(1)   TAP                           CH(2)   PET                            CH(3)   LIF

EL    WL    COUNT     INTENSITY(LOG)     EL    WL   COUNT    INTENSITY(LOG)     EL    WL   COUNT    INTENSITY(LOG)

 Y -1  6.45   189 *************          TI-k  2.75   119 ************        BI-1  1.14    55 ***********
 RE-m  6.73   206 *************          BA-1  2.78    80 ***********         PB-1  1.18    64 ***********
 SR-1  6.86   178 ************           CS-1  2.89    75 ***********         TL-1  1.21    62 ***********
 W -m  6.98   168 ************           SC-k  3.03    22 *******             HG-1  1.24    64 ***********
@SI-k  7.13  4479 ****************++++++ I -1  3.15    53 **********          AU-1  1.28    48 **********
 TA-m  7.25   171 ************           TE-1  3.29    43 **********          PT-1  1.31    54 ***********
 RB-1  7.32   124 ************          *CA-k  3.36   145 **********+++       IR-1  1.35    62 ***********
 HF-m  7.54    84 ***********            SB-1  3.44    43 *********+          OS-1  1.39    59 **********+
 LU-m  7.84    74 **********             SN-1  3.60    31 *********           ZN-k  1.44    53 **********
 YB-m  8.15    66 **********            *K -k  3.74   159 **********+++       CU-k  1.54    49 **********
*AL-k  8.34   805 ************++++       IN-1  3.77    27 ********+           NI-k  1.66    36 **********
 BR-1  8.37   320 *************+         U -m  3.91    27 ********+           TM-1  1.73    31 *********
 ER-m  8.82    45 *********              CD-1  3.96    15 ******             CO-k  1.79    42 **********
 SE-1  8.99    49 *********              TH-m  4.14    18 *******            @FE-k  1.94  5609 ***************+++++++++
 HO-m  9.20    35 ********               AG-1  4.15    19 *******             GD-1  2.05    18 ********
 DY-m  9.59    36 *********              PD-1  4.37    13 ******              MN-k  2.10    22 ********
 AS-1  9.67    36 ********+              RH-1  4.60    10 *****               EU-1  2.12    20 ********
*MG-k  9.89   175 **********++           CL-k  4.73    10 *****               SM-1  2.20    12 ******
 TB-m 10.00    35 ********               RU-1  4.85     3 ***                 CR-k  2.29    12 *****+
 GE-1 10.44    21 *******                S -k  5.37     6 ****                ND-1  2.37    12 *****+
 GA-1 11.29    19 *******                MO-1  5.41     6 ****                PR-1  2.46    11 ******
 NA-k 11.91    26 *******+               NB-1  5.72     6 ****                V -k  2.50     6 *****
 **   14.72     5 ****                   ZR-1  6.07     3 ***                 CE-1  2.56     7 *****
 F -k 18.32     7 *****                  P -k  6.16     3 **+                 LA-1  2.67     5 ****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
  MG  AL  SI  K   CA  FE ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
  TI  CS  OS
```

Photo.14のSE（2次電子像）に示したヴスタイト（Wüstite：FeO）とその粒内析出物の微小ヘーシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$)、淡灰色盤状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）基地の暗黒色ガラス質スラグの分析結果である。検出元素を強度（Count）順に並べると次の様になる。鉄（Fe）5,609、硅素（Si）4,479、アルミ（Al）805、マグネシウム（Mg）175、カリウム（K）159、カルシウム（Ca）145であった。チタン（Ti）も微量（119）に含有される。鍛冶滓の高温折返し鍛接時の排出滓と考えられる。該品も鍛冶に供された鉄素材は磁鉄鉱系が想定される。

Table. 5　土筆山5区出土鍛錬鍛冶滓（TDR−13）のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

```
POS. NO.    4

COMMENT     : 19
ACCEL. VOLT. (KV):   15.
PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)                                                          24-AUG-93
STAGE POS. :  X  40000  Y  40000  Z  11000

             CH(1)   TAP                           CH(2)   PET                            CH(3)   LIF

EL    WL    COUNT     INTENSITY(LOG)     EL    WL   COUNT    INTENSITY(LOG)     EL    WL   COUNT    INTENSITY(LOG)

 Y -1  6.45   232 *************         @TI-k  2.75  2060 ****************++++++  BI-1  1.14    83 ***********+
 RE-m  6.73   270 *************+         BA-1  2.78   131 **************      PB-1  1.18    76 ***********
 SR-1  6.86   186 *************          CS-1  2.89    87 ************        TL-1  1.21    77 ***********
 W -m  6.98   176 ************           SC-k  3.03    38 **********          HG-1  1.24    75 ***********
@SI-k  7.13  3674 ***************++++++  I -1  3.15    65 **********+         AU-1  1.28    62 ***********
 TA-m  7.25   160 ************           TE-1  3.29    49 **********          PT-1  1.31    75 ***********
 RB-1  7.32   137 ************          *CA-k  3.36   341 ************++++    IR-1  1.35    63 ***********
 HF-m  7.54   117 ***********            SB-1  3.44    48 **********          OS-1  1.39    72 ***********
 LU-m  7.84    83 ***********            SN-1  3.60    30 *********           ZN-k  1.44    58 ***********
 YB-m  8.15    76 **********            *K -k  3.74   187 ***********++++     CU-k  1.54    48 **********
@AL-k  8.34  1852 ***************++++    IN-1  3.77    29 *********           NI-k  1.66    41 **********
 BR-1  8.37   654 ***************++      U -m  3.91    29 *********           TM-1  1.73    37 **********
 ER-m  8.82    52 *********              CD-1  3.96    10 *****               CO-k  1.79    43 **********
 SE-1  8.99    57 *********+             TH-m  4.14    20 ********           @FE-k  1.94  6238 ***************+++++++++
 HO-m  9.20    44 *********              AG-1  4.15    19 ********            GD-1  2.05    27 ********+
 DY-m  9.59    40 *********              PD-1  4.37    18 ********           *MN-k  2.10    39 ********++
 AS-1  9.67    40 *********              RH-1  4.60    17 *******+            EU-1  2.12    18 ********
*MG-k  9.89   202 **********+++          CL-k  4.73    12 *******             SM-1  2.20    16 ********
 TB-m 10.00    34 ********               RU-1  4.85     7 ****+               CR-k  2.29    17 ********
 GE-1 10.44    24 ********               S -k  5.37    13 *****++             ND-1  2.37    13 ******+
 GA-1 11.29    20 *******                MO-1  5.41     5 ****                PR-1  2.46    10 *****
*NA-k 11.91    49 ********+              NB-1  5.72     7 ****+               V -k  2.50    19 ********
 **   14.72    11 ****++                 ZR-1  6.07    11 *****+              CE-1  2.56    12 ****++
 F -k 18.32     7 *****                  P -k  6.16     4 **++                LA-1  2.67     7 *****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
  NA  MG  AL  SI  K   CA  TI  MN  FE ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
  S   I   CE
```

Photo.16のSE（2次電子像）に示した鉄中非金属介在物の分析結果である。分析対象は基地鉄と暗黒色ガラス質スラグとその中に析出した板状茶褐色介在物である。検出元素を強度（Count）順に並べると次の様になる。鉄（Fe）6,238、硅素（Si）、チタン（Ti）、アルミニウム（Al）1,852、カルシウム（Ca）341、マグネシウム（Mg）202、カリウム（K）187、ナトリウム（Na）49、マンガン（Mn）となる。チタン（Ti）の強い検出から始発原料は砂鉄系と想定できる。

Table. 6　土筆山5区出土鉄塊系遺物（TDR−19）の鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

POS. NO.　1

COMMENT　: CU
ACCEL. VOLT. (KV):　15
PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)
STAGE POS. :　X　40000　Y　40000　Z　11000

24-AUG-93

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	325	**************	TI-k	2.75	161	*************	BI-1	1.14	100	************
RE-m	6.73	269	**************	BA-1	2.78	176	*************	PB-1	1.18	137	*************
SR-1	6.86	224	**************	CS-1	2.89	128	************+	TL-1	1.21	106	************
W -m	6.98	215	**************	SC-k	3.03	55	***********	HG-1	1.24	102	************
SI-k	7.13	195	**************	I -1	3.15	84	************	AU-1	1.28	110	************
TA-m	7.25	184	**************	TE-1	3.29	76	***********	PT-1	1.31	111	************
RB-1	7.32	152	*************	CA-k	3.36	89	************	IR-1	1.35	110	************
HF-m	7.54	124	*************	SB-1	3.44	66	***********	OS-1	1.39	1823	*************++++++
LU-m	7.84	96	************	○ SN-1	3.60	396	*************++++	ZN-k	1.44	109	************
YB-m	8.15	75	***********	K -k	3.74	37	*********+	◎ CU-k	1.54	10455	*****************++++++++
AL-k	8.34	64	***********	IN-1	3.77	37	*********	NI-k	1.66	71	***********
BR-1	8.37	74	***********	U -m	3.91	38	********++	TM-1	1.73	60	***********
ER-m	8.82	51	**********	CD-1	3.96	18	********	CO-k	1.79	49	**********
SE-1	8.99	53	**********	TH-m	4.14	30	*********	○ FE-k	1.94	423	***********++++++
HO-m	9.20	49	**********	AG-1	4.15	34	*********	GD-1	2.05	32	*********
DY-m	9.59	48	**********	PD-1	4.37	26	********+	MN-k	2.10	27	*********
○ AS-1	9.67	82	***********++	RH-1	4.60	20	********	EU-1	2.12	31	*********
MG-k	9.89	32	*********	CL-k	4.73	18	********	SM-1	2.20	22	********
TB-m	10.00	34	*********	RU-1	4.85	10	*****	CR-k	2.29	21	********
GE-1	10.44	27	*********	S -k	5.37	7	*****	ND-1	2.37	19	********
GA-1	11.29	25	*********	MO-1	5.41	7	*****	PR-1	2.46	12	******
NA-k	11.91	21	********	NB-1	5.72	11	*****++	V -k	2.50	12	******
**	14.72	29	*********	ZR-1	6.07	8	*****	CE-1	2.56	13	*****+
F -k	18.32	8	****+	P -k	6.16	15	******	LA-1	2.67	11	*****+

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
FE　CU　AS　SN　←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
NB

Table.18の400倍のSE（２次電子像）に示す白色金属部の分析結果である。検出元素は銅（Cu）の強度（Count）が最も強く10,455と出し、他は強度はおちて鉄（Fe）が423、錫（Sn）396、砒素（As）82となる。白色金属は銅（Cu）であって、これに少量の鉄（Fe）や錫（Sn）を含む。青銅板といえる。

Table. 7　土筆山5c区出土鉄芯銅板巻き鉄製品（TDR－18A）銅部のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

COMMENT　: 18A
ACCEL. VOLT. (KV):　15
PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)
STAGE POS. :　X　40000　Y　40000　Z　11000

24-AUG-93

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	179	*************	◎ TI-k	2.75	1608	*****************+++++	BI-1	1.14	59	***********
RE-m	6.73	225	**************	BA-1	2.78	101	************	PB-1	1.18	76	***********
SR-1	6.86	176	*************	CS-1	2.89	73	***********	TL-1	1.21	60	***********
W -m	6.98	151	*************	SC-k	3.03	24	********+	HG-1	1.24	63	***********
◎ SI-k	7.13	4270	*******************++++++	I -1	3.15	50	**********	AU-1	1.28	57	***********
TA-m	7.25	139	*************	TE-1	3.29	45	**********	PT-1	1.31	60	***********
RB-1	7.32	116	************	• CA-k	3.36	241	************+++	IR-1	1.35	57	**********+
HF-m	7.54	115	************	SB-1	3.44	41	**********	OS-1	1.39	62	**********+
LU-m	7.84	82	***********+	SN-1	3.60	30	*********	ZN-k	1.44	49	**********
YB-m	8.15	73	***********	• K -k	3.74	182	************++++	• CU-k	1.54	70	**********++
◎ AL-k	8.34	1166	****************++++	IN-1	3.77	27	*********	NI-k	1.66	35	*********
BR-1	8.37	417	***************++	U -m	3.91	26	*********	TM-1	1.73	28	*********
ER-m	8.82	43	**********	CD-1	3.96	19	********	CO-k	1.79	36	*********+
SE-1	8.99	38	**********	TH-m	4.14	21	********	◎ FE-k	1.94	4883	**************+++++++++
HO-m	9.20	38	**********	AG-1	4.15	13	******	GD-1	2.05	15	******
DY-m	9.59	30	*********	PD-1	4.37	19	*******+	• MN-k	2.10	87	*******+++++
AS-1	9.67	37	*********+	RH-1	4.60	12	******	EU-1	2.12	18	********
• MG-k	9.89	122	**********+++	CL-k	4.73	15	******	SM-1	2.20	10	*****
TB-m	10.00	31	*********	RU-1	4.85	6	****	CR-k	2.29	11	******
GE-1	10.44	28	*******++	S -k	5.37	10	****+	ND-1	2.37	11	*****+
GA-1	11.29	20	*******	MO-1	5.41	5	****	PR-1	2.46	5	****
NA-k	11.91	33	********+	NB-1	5.72	5	****	V -k	2.50	56	**********+
**	14.72	8	*****	ZR-1	6.07	9	*****	CE-1	2.56	12	*****+
F -k	18.32	7	*****	P -k	6.16	3	**+	LA-1	2.67	5	***+

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
MG　AL　SI　K　CA　TI　MN　FE　CU　←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
NA　S　SC　OS　PB

Photo.18のSE（２次電子像）に示す鉄中の非金属介在物の分析結果である。介在物は暗黒色ガラス質スラグ中に析出する淡茶褐色板状結晶である。検出元素を強度（Count）順に並べると次の様になる。鉄（Fe）4,883、硅素（Si）4,270、チタン（Ti）1,608、アルミニウム（Al）1,166、カルシウム（Ca）241、カリウム（K）182、マグネシウム（Mg）122、マンガン（Mn）87、銅（Cu）70となる。該品の始発原料はチタン（Ti）の検出から砂鉄系となる。

Table. 8　土筆山5c区出土鉄芯銅板巻き鉄製品（TDR－18A）鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

COMMENT : 18C
ACCEL. VOLT. (KV): 15.
PROBE CURRENT : 5.020E-08 (A)
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

24-AUG-93

CH(1) TAP

EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -l	6.45	247	**************
RE-m	6.73	285	**************+
SR-l	6.86	197	**************
W -m	6.98	184	**************
●SI-k	7.13	2755	****************++++
TA-m	7.25	166	*************
RB-l	7.32	117	************
HF-m	7.54	113	************
LU-m	7.84	83	************
YB-m	8.15	69	***********
●AL-k	8.34	803	************+++++
BR-l	8.37	315	*************++
ER-m	8.82	48	*********
SE-l	8.99	43	*********
HO-m	9.20	48	*********
DY-m	9.59	39	*********
AS-l	9.67	37	********+
●MG-k	9.89	131	*********+++
TB-m	10.00	35	********
GE-l	10.44	23	*******
GA-l	11.29	25	********
NA-k	11.91	39	********+
**	14.72	11	******
F -k	18.32	10	*****

CH(2) PET

EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
●TI-k	2.75	327	************++
BA-l	2.78	103	***********
CS-l	2.89	96	***********
SC-k	3.03	39	********+
I -l	3.15	62	**********
TE-l	3.29	47	*********
●CA-k	3.36	275	**********++++
SB-l	3.44	35	********
SN-l	3.60	38	*********
●K -k	3.74	130	*********+++
IN-l	3.77	32	********
U -m	3.91	31	********
CD-l	3.96	20	*******
TH-m	4.14	26	*******+
AG-l	4.15	23	*******
PD-l	4.37	15	******
RH-l	4.60	12	******
CL-k	4.73	13	*****+
RU-l	4.85	8	*****
S -k	5.37	7	****+
MO-l	5.41	7	***++
NB-l	5.72	6	****
ZR-l	6.07	9	****+
P -k	6.16	3	***

CH(3) LIF

EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
BI-l	1.14	85	***********
PB-l	1.18	84	**********+
TL-l	1.21	84	***********
HG-l	1.24	85	***********+
AU-l	1.28	74	**********
PT-l	1.31	81	***********
IR-l	1.35	80	**********
OS-l	1.39	74	**********
ZN-k	1.44	86	**********+
CU-k	1.54	57	**********
NI-k	1.66	47	*********
TM-l	1.73	51	*********
CO-k	1.79	52	*********
●FE-k	1.94	9701	**************+++++++++
GD-l	2.05	28	********
●MN-k	2.10	40	*******++
EU-l	2.12	25	********
SM-l	2.20	17	*******
CR-k	2.29	27	*******+
ND-l	2.37	11	******
PR-l	2.46	-9	*****
●V -k	2.50	40	******+++
CE-l	2.56	14	******
LA-l	2.67	12	*****+

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
MG AL SI K CA TI V MN FE ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
CR ZN MO RE

Photo.20のSE（2次電子像）に示した非金属介在物の分析結果である。検出元素を強度（Count）順に並べると次の通りである。鉄（Fe）9,701、硅素（Si）2,755、アルミニウム（Al）803、チタン（Ti）327、カルシウム（Ca）275、マグネシウム（Mg）131、カリウム（K）130、バナジウム（V）40、マンガン（Mn）40となる。砂鉄特有元素のチタン（Ti）、バナジウム（V）両方の検出から鉄素材の始発原料は砂鉄系である。

Table. 9　土筆山5c区の出土棒状鉄製品（TDR−18C）鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

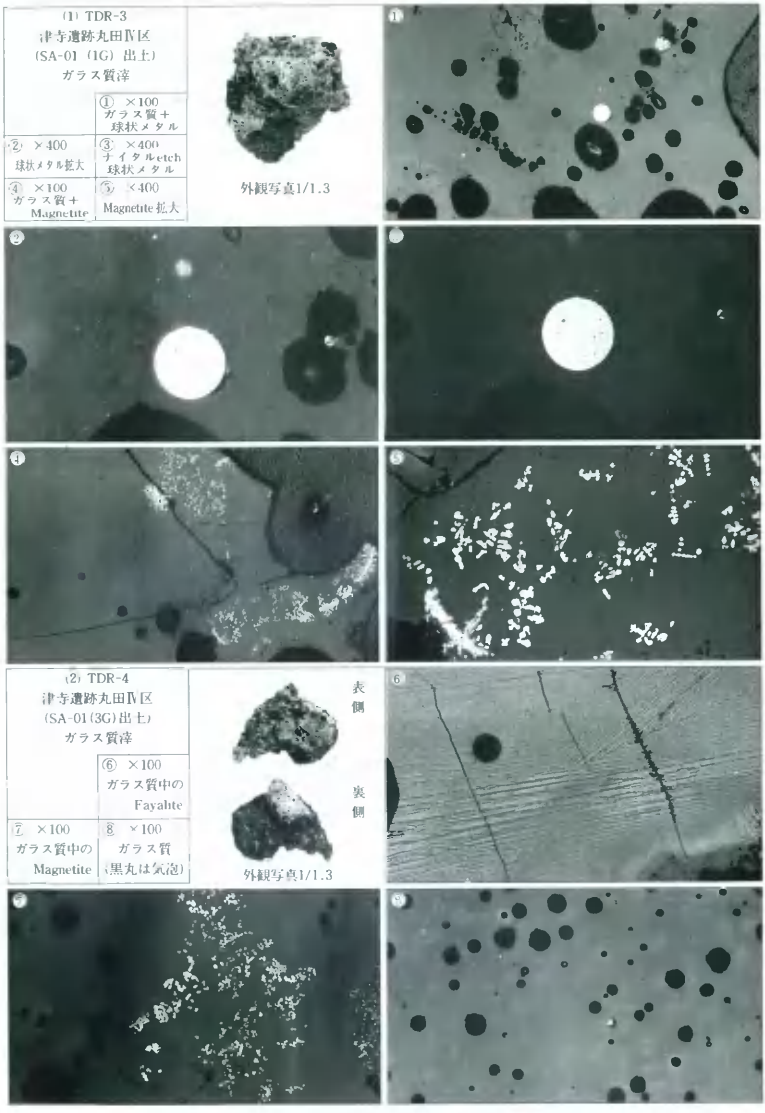


Photo. 1　ガラス質鉄滓の顕微鏡組織（縮小×0.8）

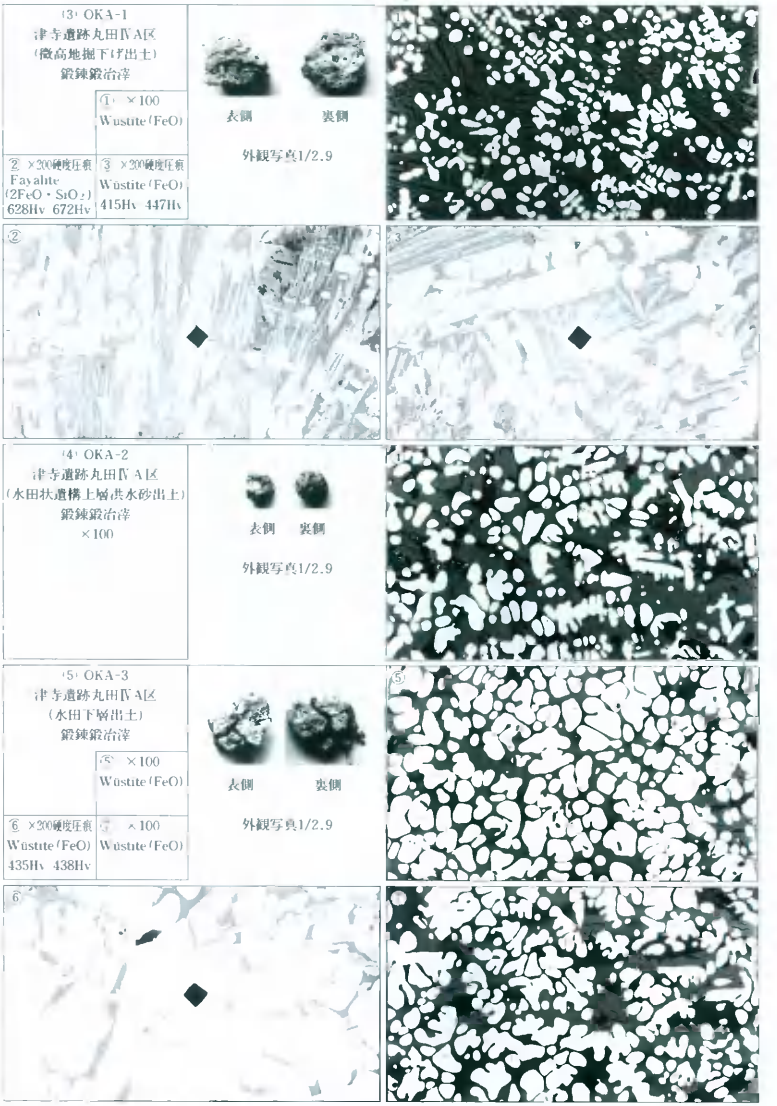


Photo. 2　鉄滓の顕微鏡組織（縮小×0.8）

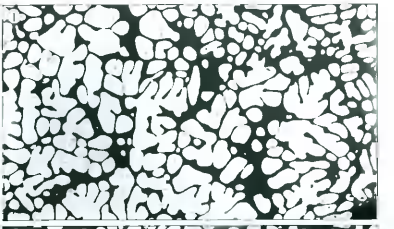
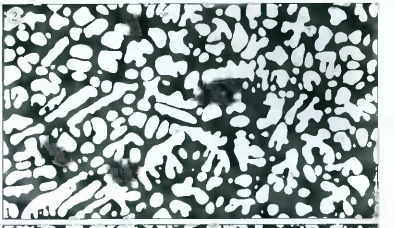
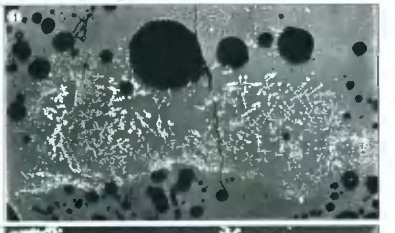
(4) OKA-4 津寺遺跡丸田Ⅳ A区 (SD408内出土) 鍛錬鍛冶滓×100	 表側　裏側 外観写真1/2.9	
(5) OKA-5 津寺遺跡丸田Ⅳ B区 北半部分上層 先行部分西端部出土 鍛錬鍛冶滓×100	 表側　裏側 外観写真1/2.9	
(6) OKA-6 津寺遺跡丸田Ⅳ B区 L≒4.2～4.5m掘下げ出土 鍛錬鍛冶滓×100	 表側　裏側 外観写真1/2.9	
(7) OKA-7 津寺遺跡丸田Ⅳ B区 (SK018内出土) 鍛錬鍛冶滓×100	 表側 外観写真1/2.9	
同　上 ×400	 裏側 外観写真1/2.9	

Photo. 3　鉄滓の顕微鏡組織（縮小×0.8）

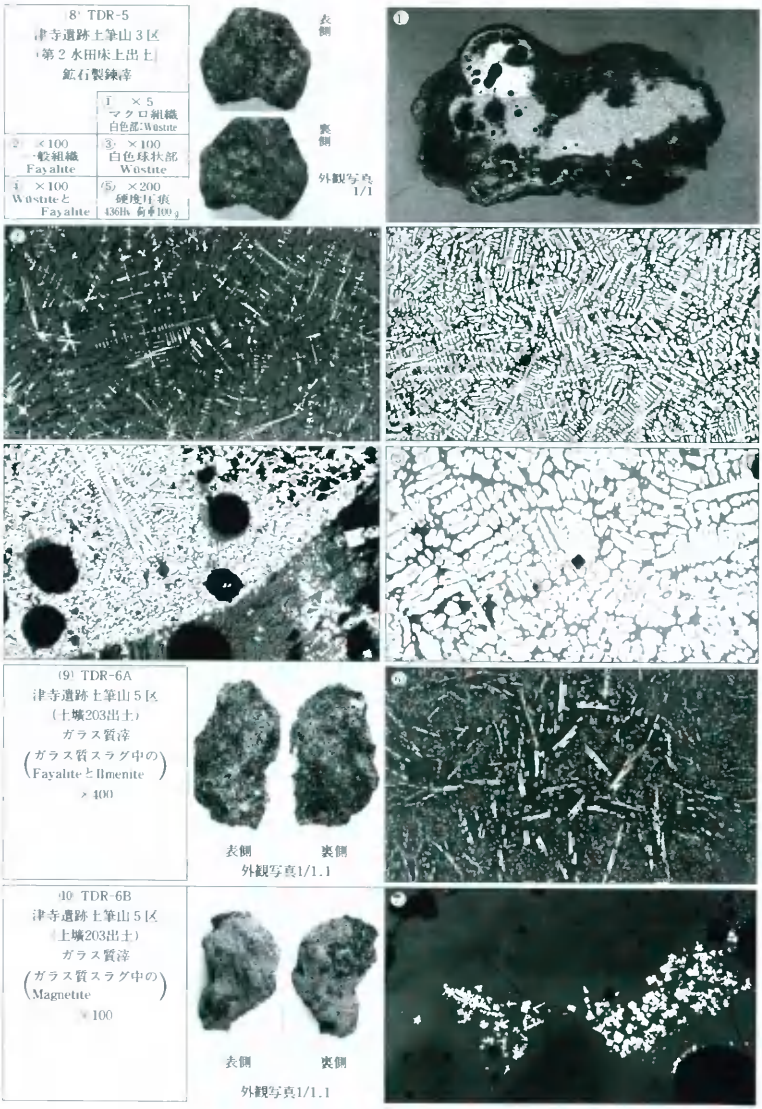


Photo. 4　鉄滓の顕微鏡組織（縮小×0.8）

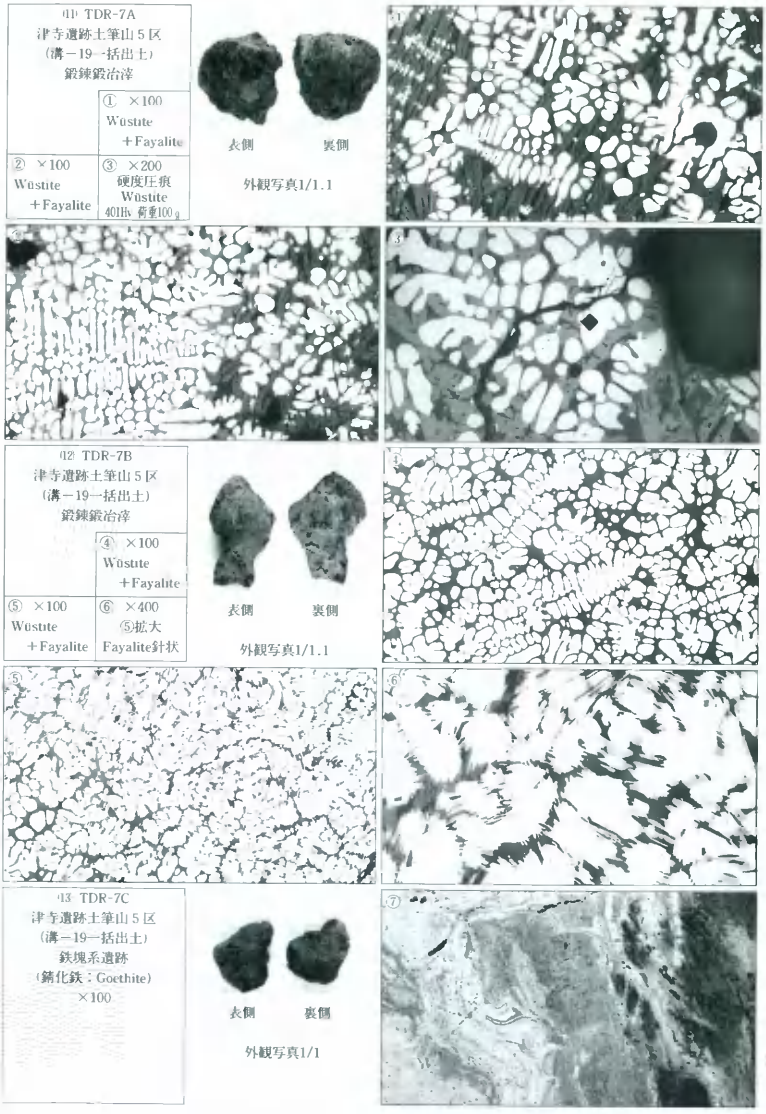


Photo. 5　鉄滓と鉄塊系遺物の顕微鏡組織（縮小×0.8）

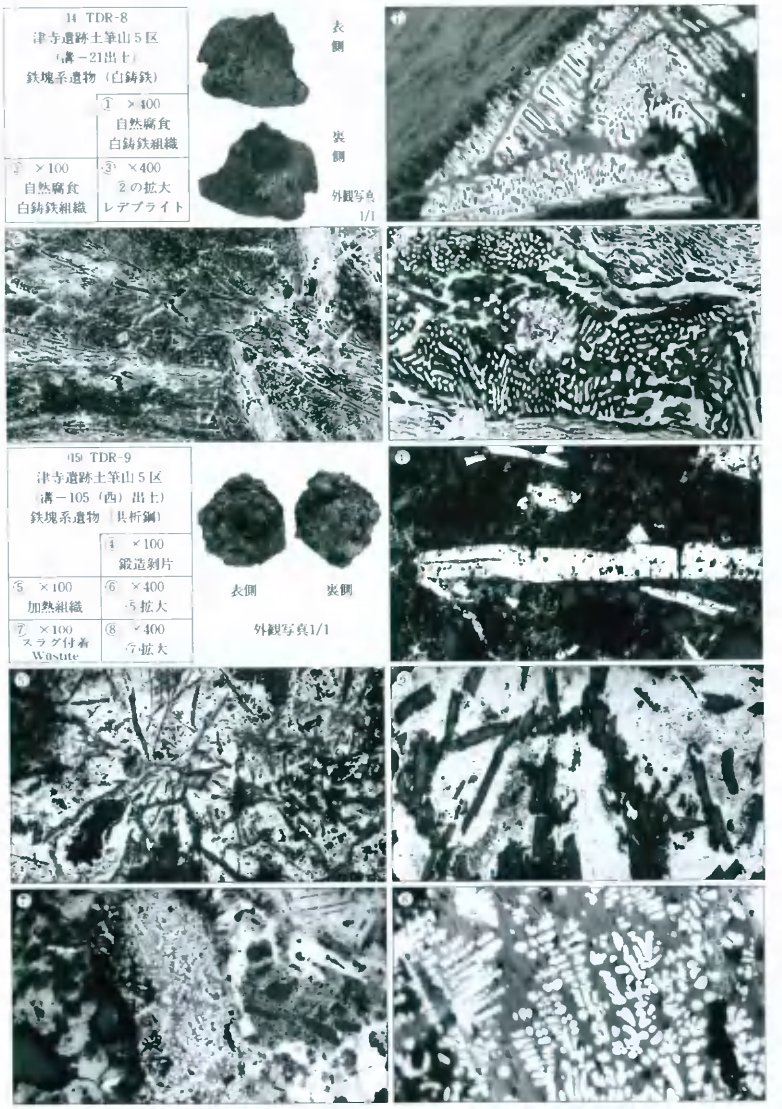
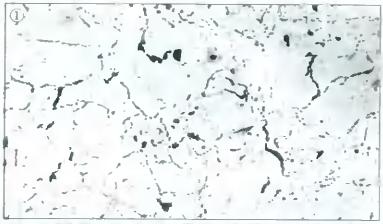


Photo. 6　鉄塊系遺物（銑鉄と鋼）の顕微鏡組織（縮小×0.8）

⑯ TDR-10A
津寺遺跡土筆山5区
(北コーナー土器溜出土)
鉄塊系遺物
(錆化鉄極低炭素鋼)
×400

外観写真1/1



⑰ TDR-10B
津寺遺跡土筆山5区
(北コーナー土器溜出土)
鉄塊系遺物

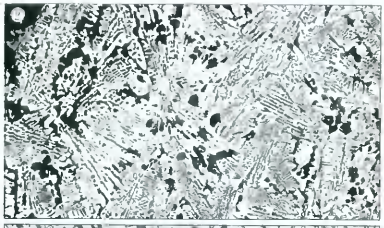
② ×50
ピクラルetch
白鋳鉄

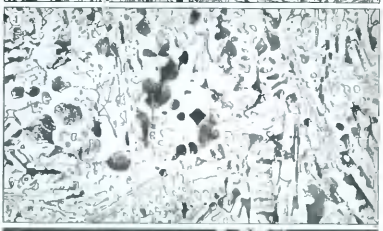
① ×400
ピクラルetch
白鋳鉄拡大

④ ×200
硬度圧痕
455Hv 荷重100g

表側　裏側

外観写真1/1

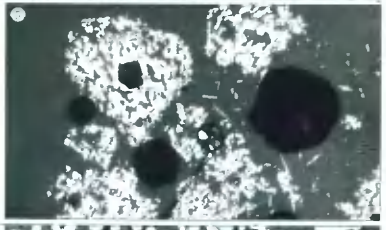




⑱ TDR-11
津寺遺跡土筆山5区
(C-306出土)
ガラス質滓
(ガラス質スラグ中の
混入砂鉄半還元粒子)
×400

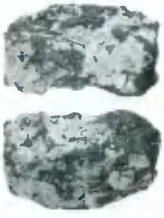
外観写真1/1.3

表側　裏側



⑲ TDR-12
津寺遺跡土筆山5区
(C-357出土)
鍛錬鍛冶滓
(Wüstite+Fayalite)
×100

外観写真1/1.3



表側　裏側

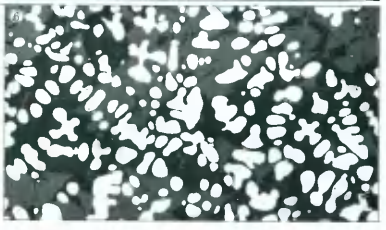


Photo. 7　鉄塊系遺物と鉄滓の顕微鏡組織（縮小×0.8）

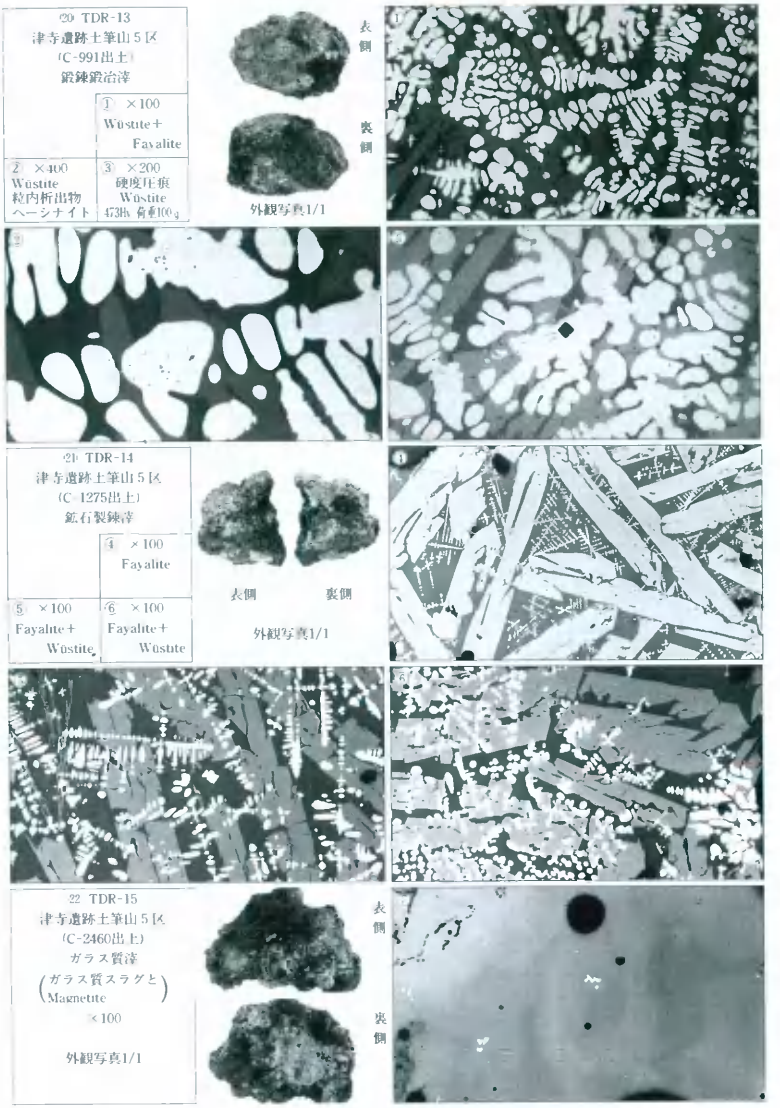


Photo. 8　鉄滓の顕微鏡組織（縮小×0.8）

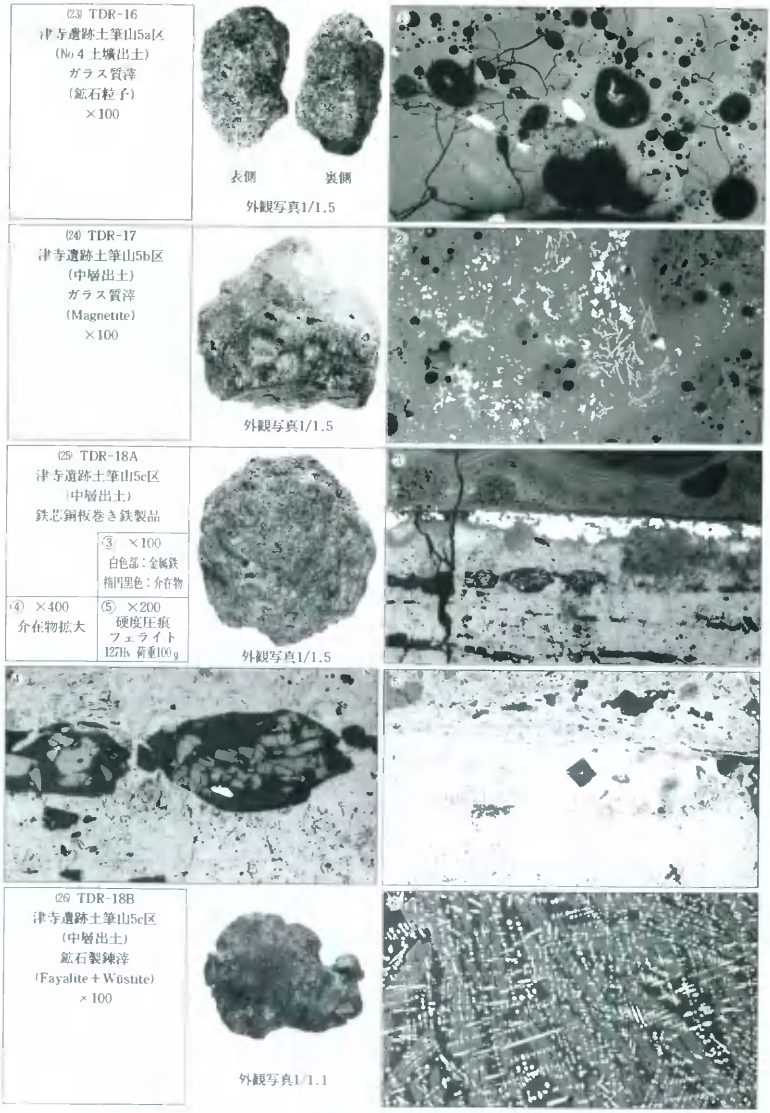


Photo. 9　鉄滓と鉄塊系遺物の顕微鏡組織（縮小×0.8）

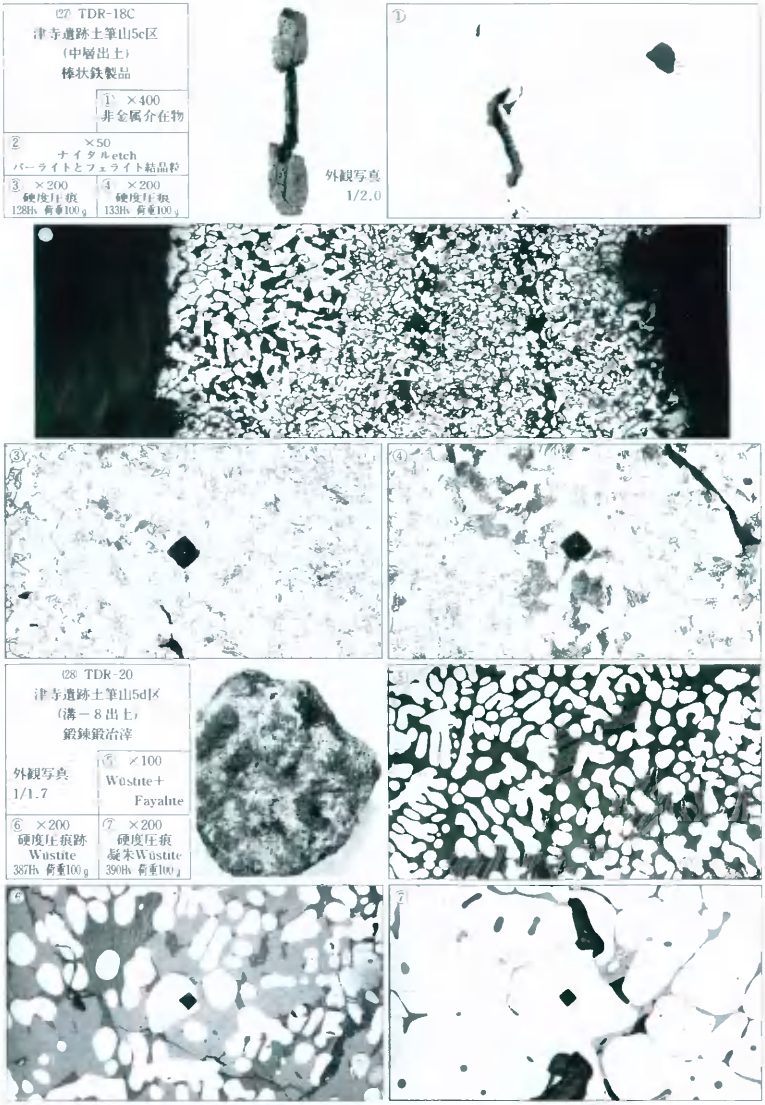


Photo. 10　棒状鉄製品と鉄滓の顕微鏡組織（縮小×0.8）

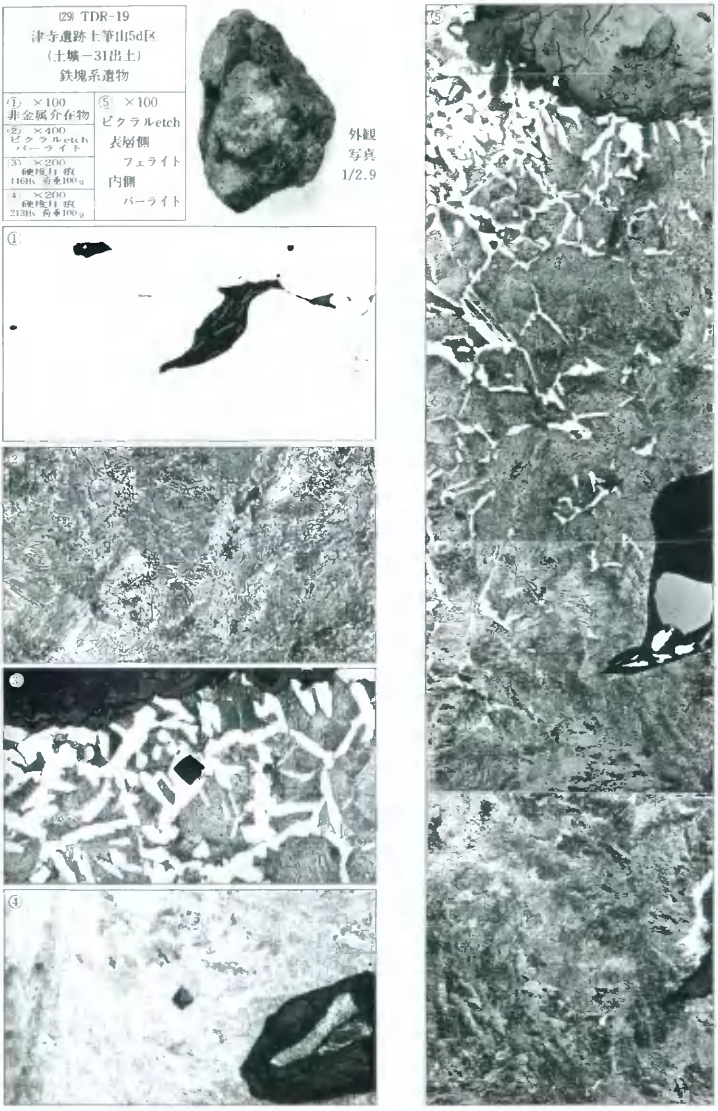


Photo. 11　鉄塊系遺物の顕微鏡組織（縮小×0.7）

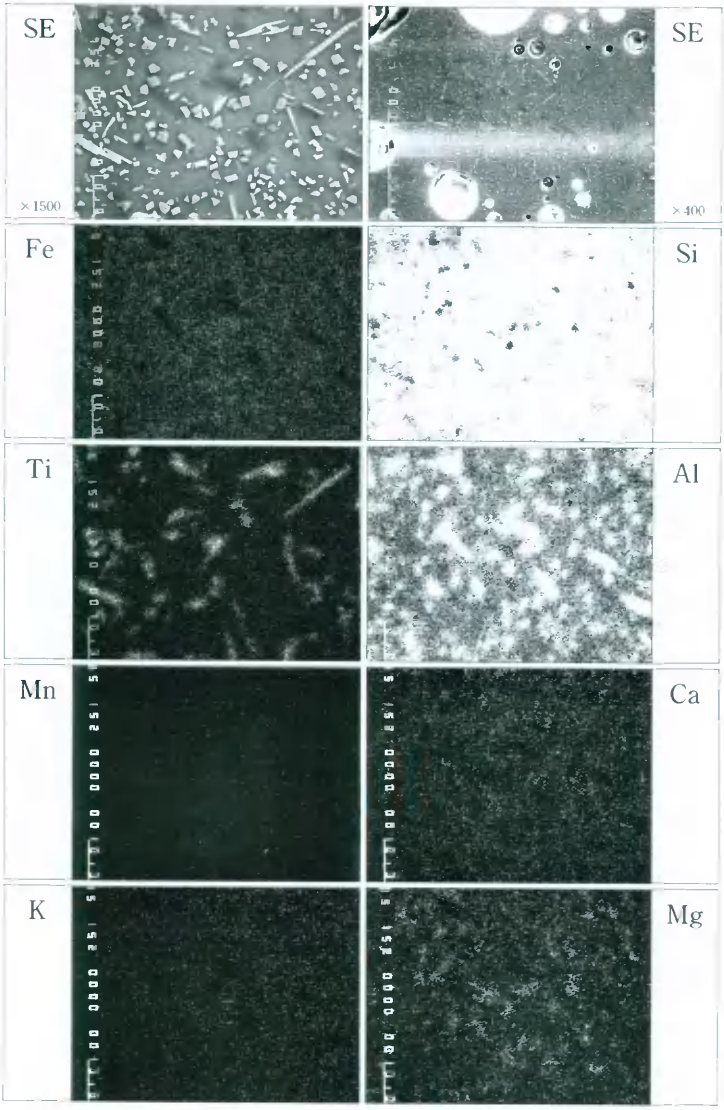


Photo. 12　土篦山５区出土ガラス質鉄滓（TDA-6A）の特性Ｘ線像（縮小×0.5）

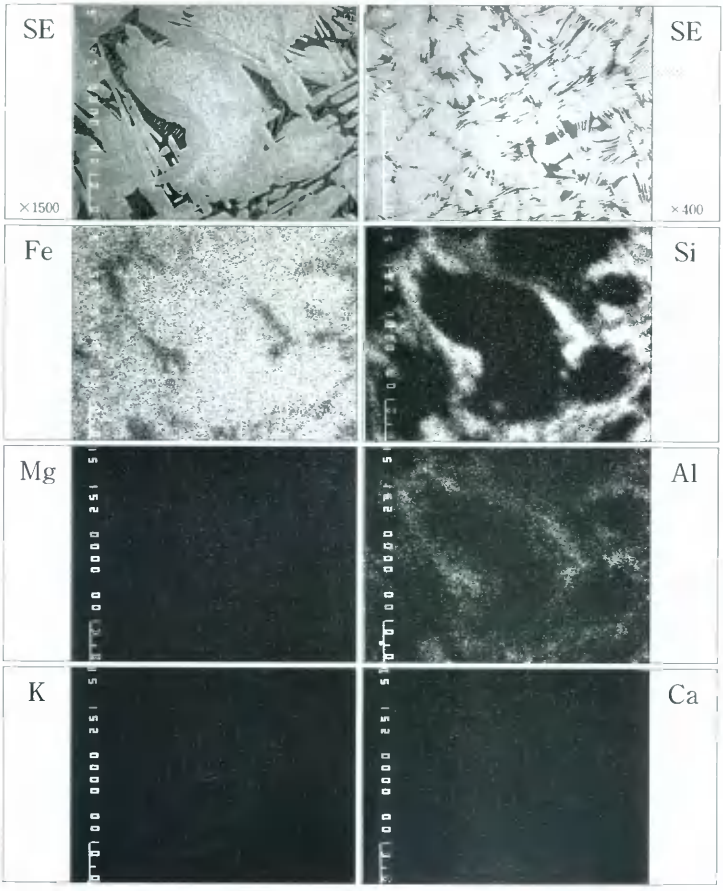


Photo. 13　土筆山5区出土鍛錬鍛冶滓（TDR-7B）の特性X線像（縮小×0.5）

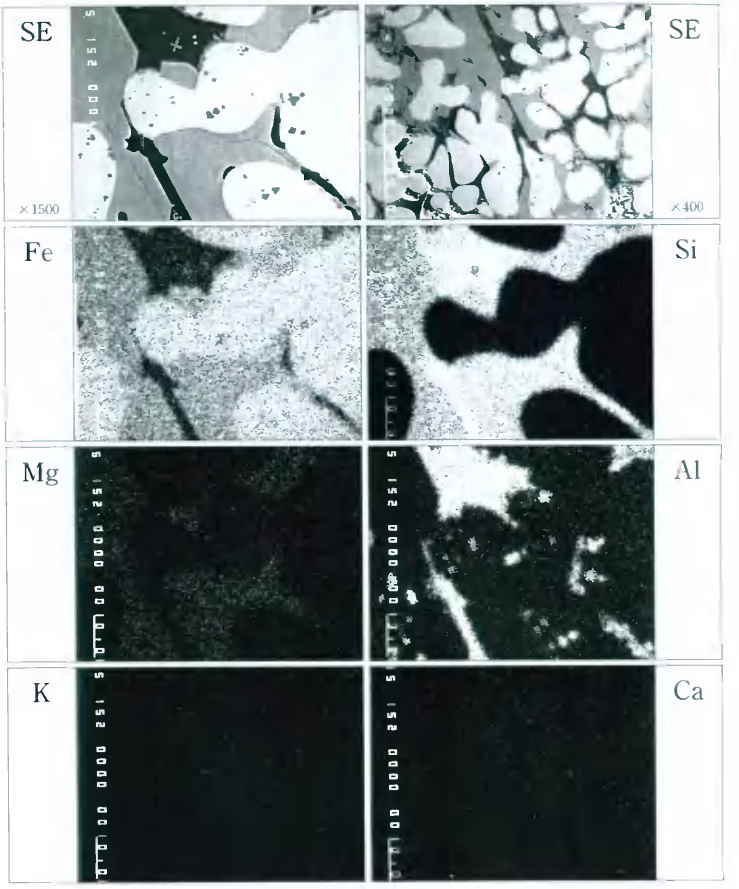
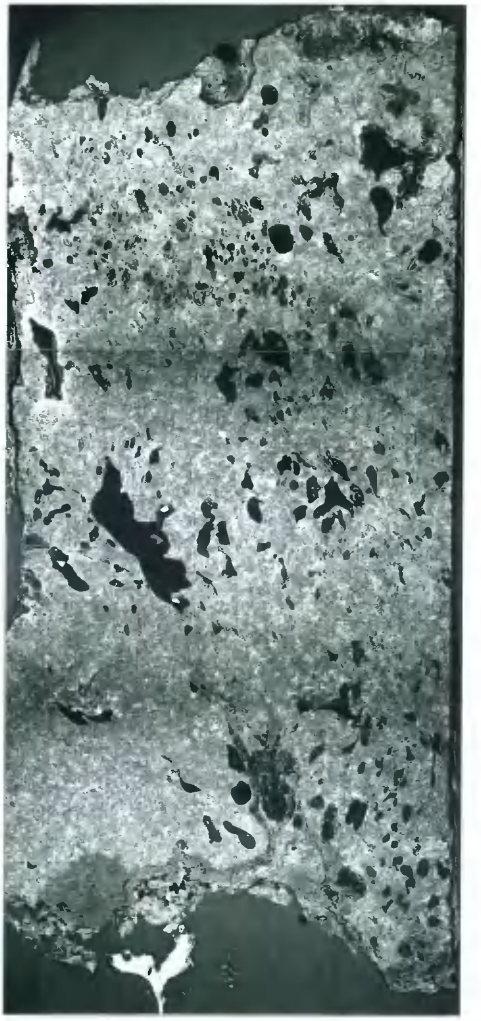
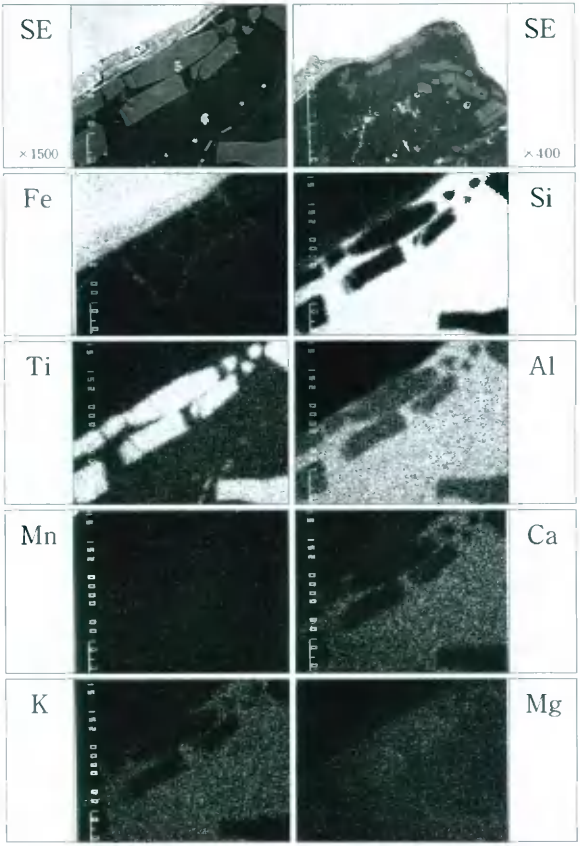


Photo. 14　土筆山５区出土鍛錬鍛冶滓（TDR-13）の特性Ｘ線像（縮小×0.5）



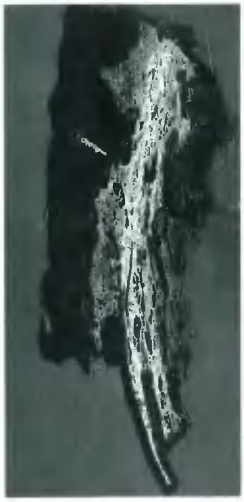
ナイタルetch

Photo. 15　土筆山5区出土鉄塊系遺物（TDR-19）のマクロ組織（×10）（縮小×0.7）



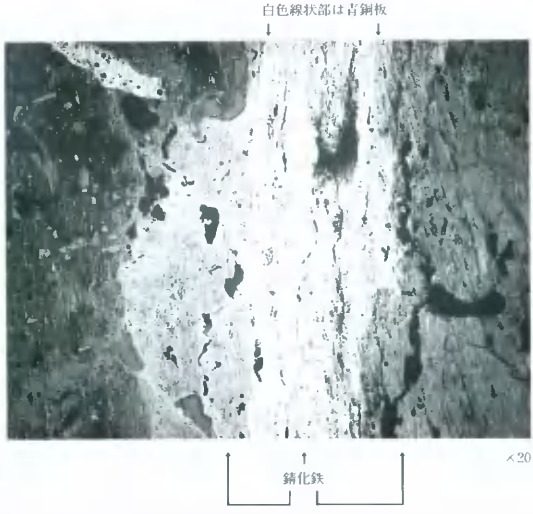
	MgO	Al_2O_3	SiO_3	ZrO_2	Nb_2O_5	S	CaO	TiO_2	La_2O_3	CeO_2	V_2O_3	MnO	FeO	TOTAL
5	3.003	6.174	0.021	0.761	0.000	0.000	0.087	76.852	0.000	0.000	0.619	0.773	2.208	90.498
6	2.020	34.272	43.520	0.674	0.000	0.000	8.576	9.899	0.426	0.359	0.000	1.379	1.214	102.337

Photo. 16　土篦山5C区出土鉄塊系遺物（TDR-19）の鉄中非金属介在物の特性X線像×1500（縮小×0.4）



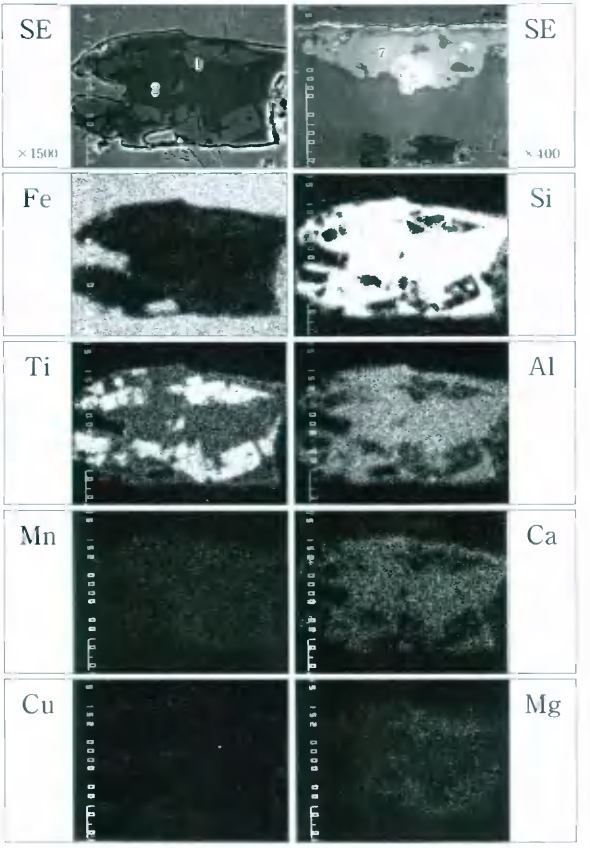
×5

×10



×20

Photo. 17　土筆山5区出土鉄芯銅板巻き鉄製品（TDR-18A）のマクロ組織（縮小×0.8）



	MgO	Al_2O_3	SiO_3	ZrO_2	Nb_2O_5	S	CaO	TiO_2	La_2O_3	CeO_2	V_2O_3	MnO	FeO	TOTAL
1	2.516	2.646	0.096	0.562	0.000	0.000	0.216	66.633	0.000	0.000	7.393	3.027	7.565	90.565
2	0.908	19.582	50.439	0.607	0.000	0.009	4.953	12.357	0.000	0.000	0.405	3.435	4.155	96.851

	Fe	Cu	Ni	Sn	P	As	S	TOTAL
7	1.502	94.090	0.001	3.558	0.000	0.736	0.004	99.892

Photo. 18　土筆山5C区出土鉄芯銅板巻き鉄製品（TDR-18A）鉄中非金属介在物の特性X線と定量分析値×1500（縮小×0.4）

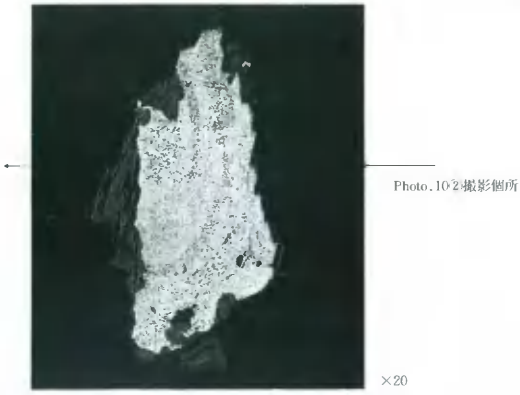
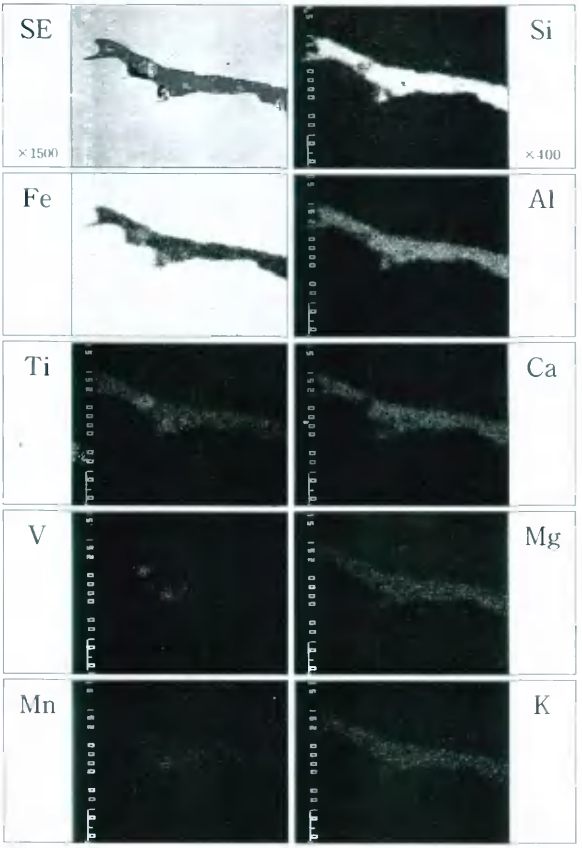


Photo.19　土筆山5C区出土棒状鉄製品（TDR-18C）断面のマクロ組織（縮小×1.0）



	MgO	Al_2O_3	SiO_3	ZrO_2	Nb_2O_5	S	CaO	TiO_2	La_2O_3	CeO_2	V_2O_3	MnO	FeO	TOTAL
3	3.508	6.926	5.449	0.089	0.000	0.028	0.174	12.643	0.241	0.000	20.544	2.968	48.535	101.105
4	2.776	19.611	38.361	0.685	0.000	0.008	8.245	5.448	0.088	0.198	0.185	1.691	19.822	97.120

Photo. 20　土篦山5C区出土棒状鉄製品（TDR-18C）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値×1500（縮小×0.4）

図版1

1．向原Ⅰ区弥生・古墳時代全景（北西から）

2．竪穴住居－1（南東から）

１．溝－２・３（北西から）

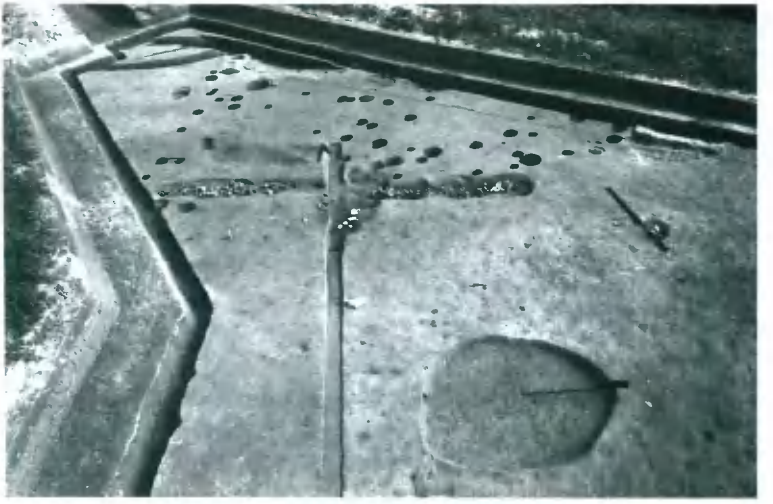
２．土器溜り（南から）

図版3

1．向原Ⅰ区中世全景（北から）

2．建物一2・3周辺（西から）

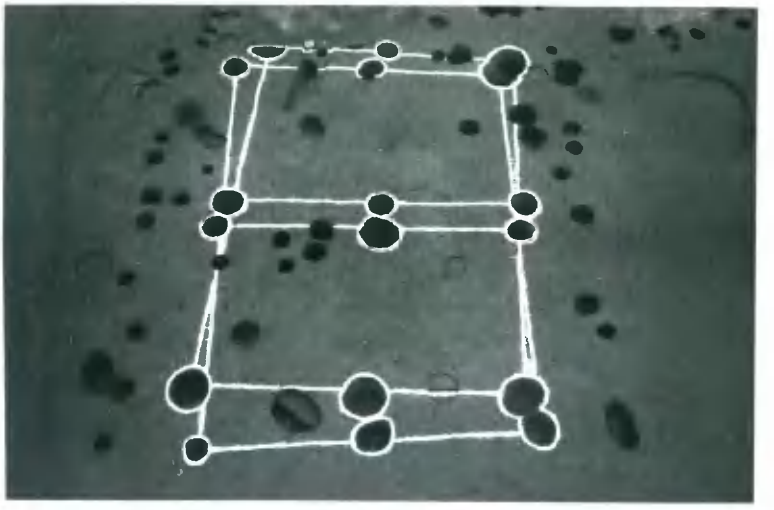
図版 4



1．溝－4周辺（北から）

2．建物－1（東から）

図版5



1．建物－2・3（西北西から）

2．土壙墓－1（北から）

1．土壙墓－3（西から）

2．土壙墓－4（東南東から）

図版７

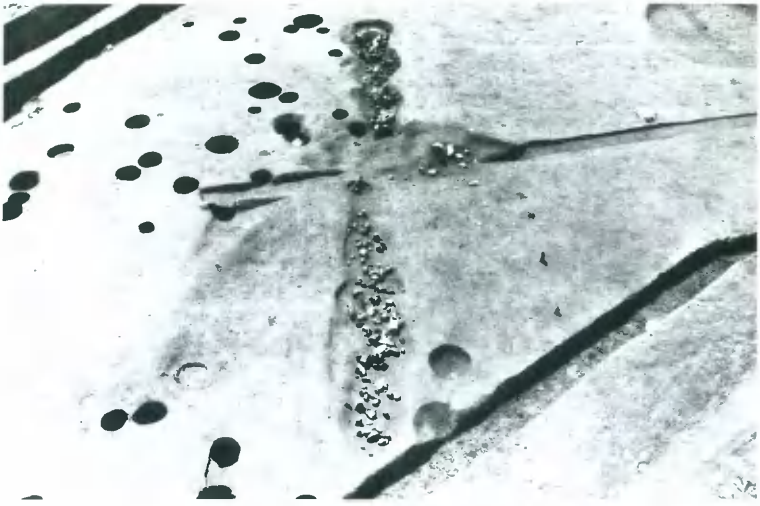
1．土壙墓－９（東から）

2．土壙墓－11（東から）

1．土壙－3（南から）

2．土壙－6（南から）

図版 9



1．溝－4遺物検出状況（西から）

2．礫群出土状況（南から）

17

25

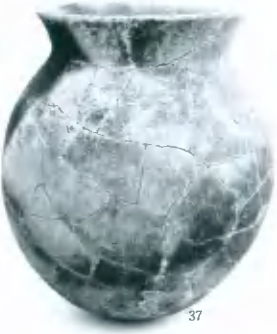
18

26

21

23

32


37

竪穴住居一１出土遺物

図版11

28

M1

M1

30

S1

31

32

竪穴住居－１・溝－１・土器溜り出土遺物

33

34

35

36

37

39

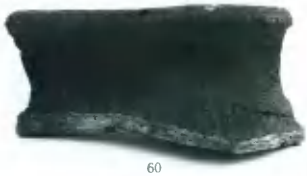
土器溜り出土遺物

図版13

42

43

44


60

47

48

49

51

54

55

56

57

土壙墓・土壙出土遺物

69

71

72

73

75

74

82

83

84

土壙・落ち込み出土遺物

図版15

87

88

89

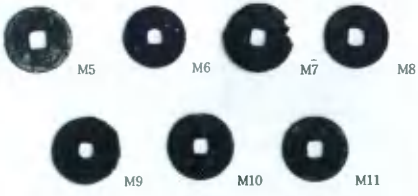
91

92

93

101

102



溝・包含層出土遺物

1．土壙・柱穴等完掘（北東から）

2．土壙　完掘（北々東から）

図版17

1．中世水田(1)

2．同上(2)

3．古代水田(1)

4．同上(2)

5．同上(3)および溝

6．同上(4)および溝

7．溝・土壙完掘（南東から）

8．粘質砂層中遺物出土状況（南東から）

1．粘質砂層中遺物出土状況（北東から）

2．同上（近影）（西から）

図版19

粘質砂層中出土遺物

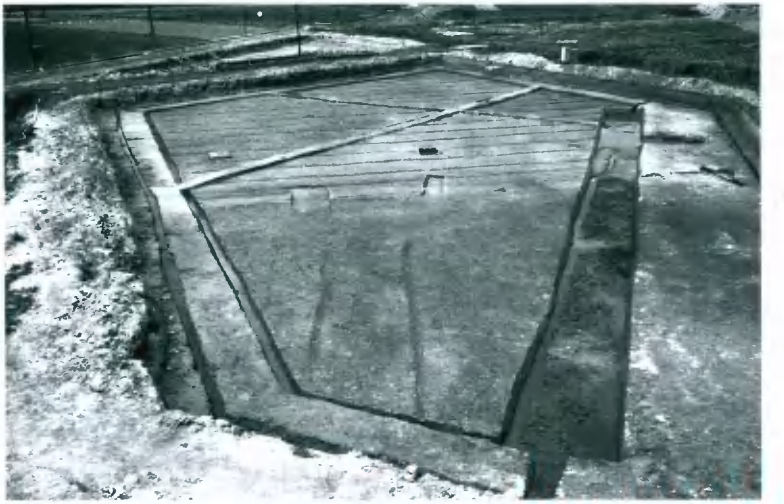
古代・近世水田・包含層出土遺物

図版21

1．向原Ⅲ－2区中世水田（西から）

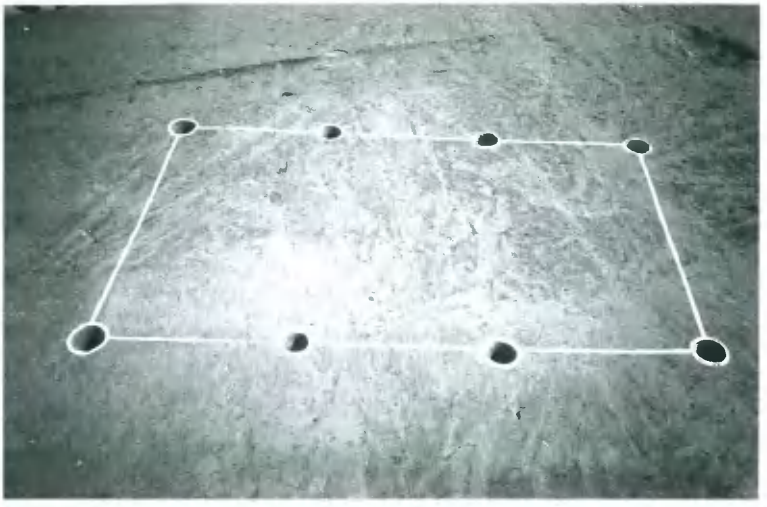
2．向原Ⅲ－5区中世水田（東から）

1．向原Ⅲ－2区溝－9（西から）

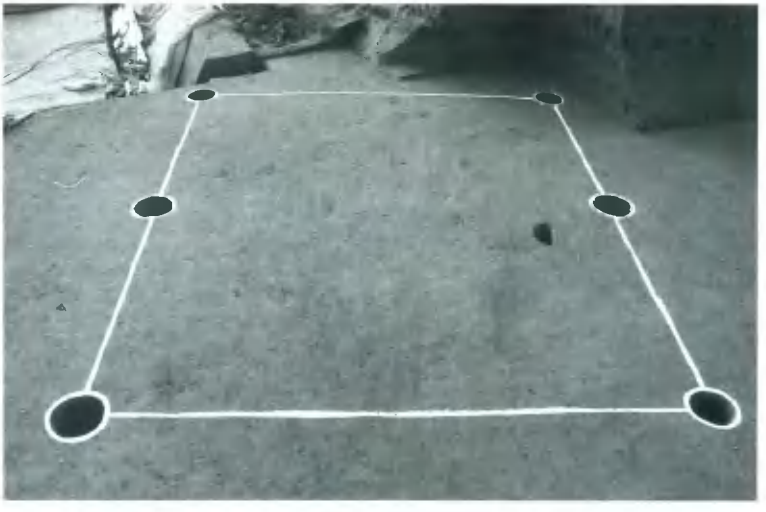


2．砂田区近世水田・畝状遺構（南東から）

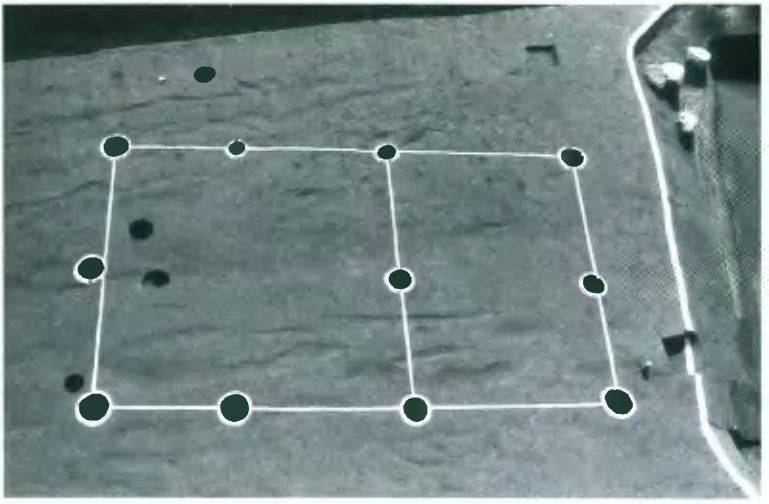
図版23



1．土筆山建物－4（東から）

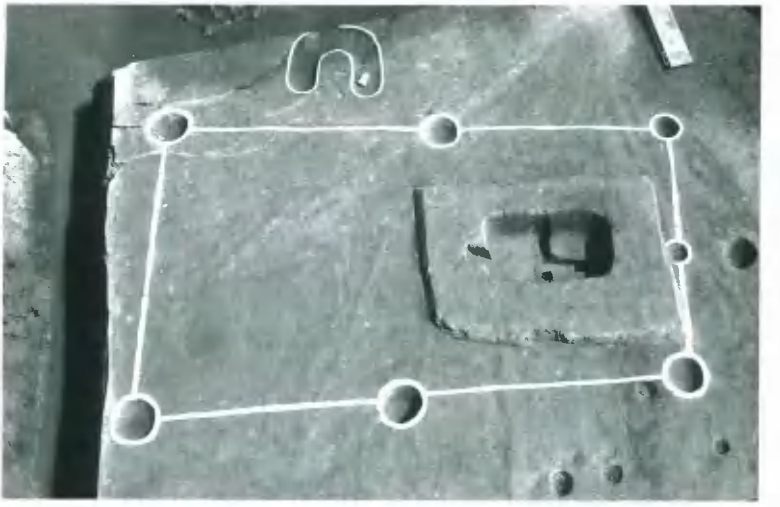


2．建物－1（西から）



1．建物ー5（北から）

2．4b東区全景（建物・構・土器溜り）（北から）



1．建物－7・炉跡－1（南から）

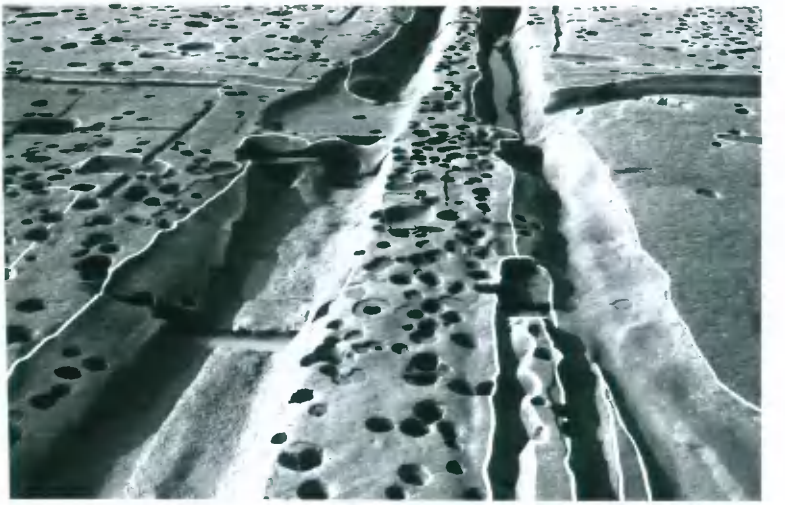
2．4b東区炉跡－1（南から）

1．5区東部全景（南から）

2．5区西部全景（南から）

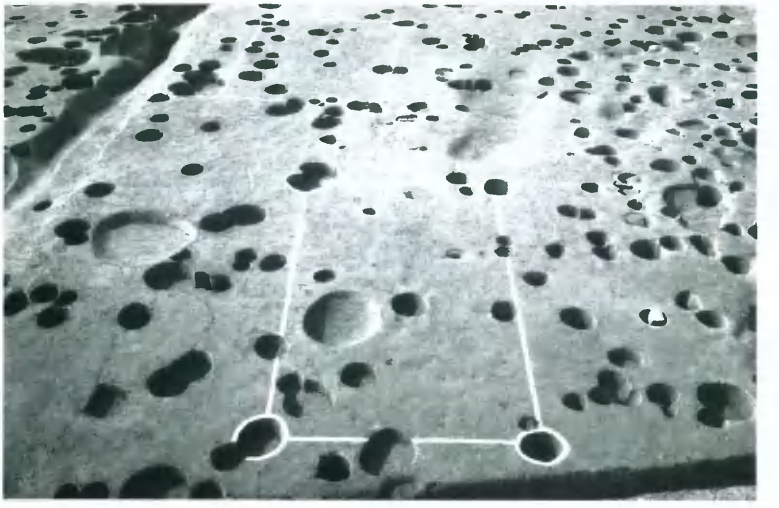
1．5区東部遺構全景（南東から）

2．5区東部遺構全景（北から）

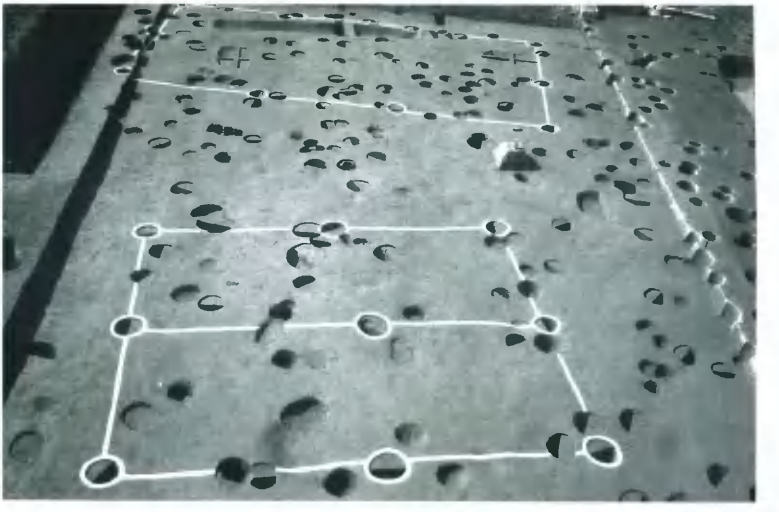


1．溝－9・11・12付近（北東から）

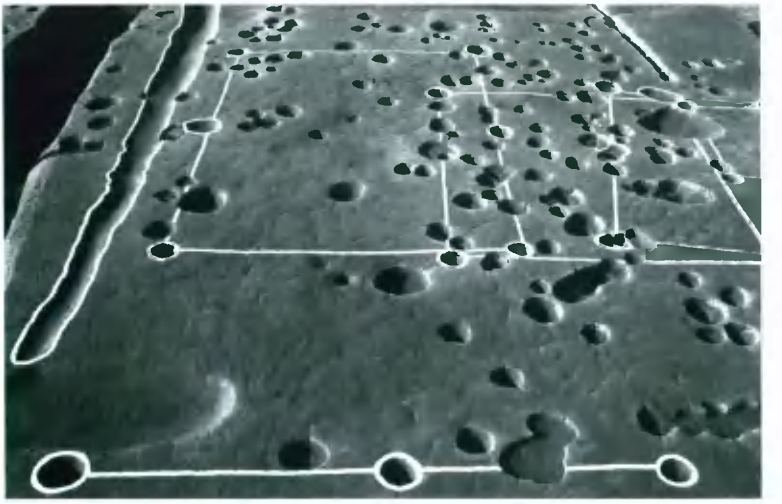
2．溝－9・11・12付近（北東から）



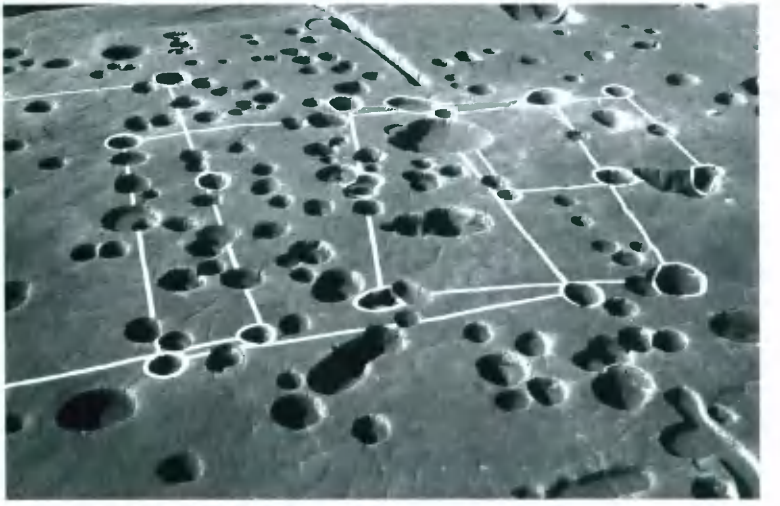
1．建物ー21(上)・20(下)（北東から）



2．建物ー23(上)・24(下)（北東から）

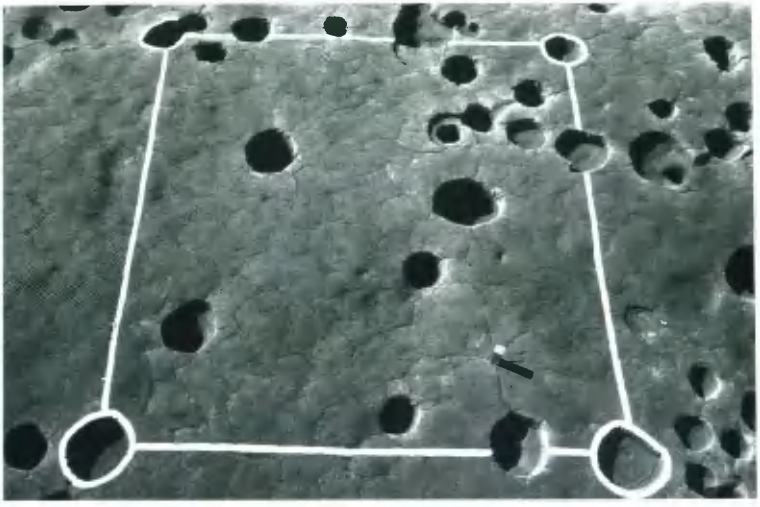


1．建物一9～12・欄1（北東から）

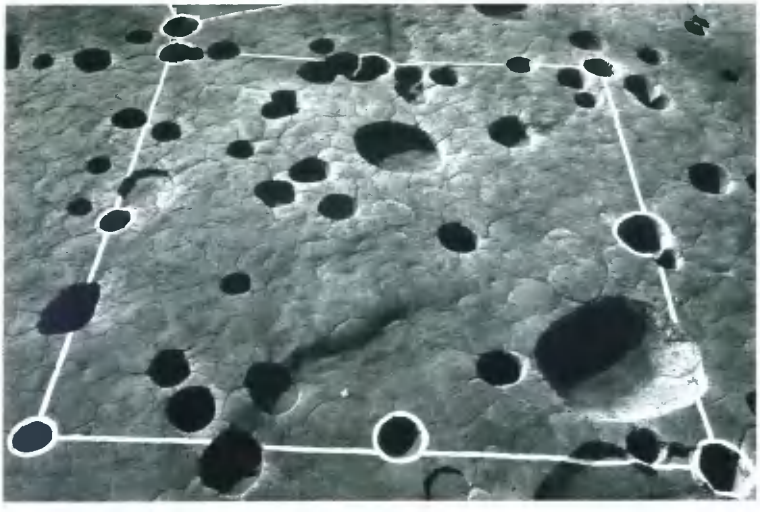


2．建物一10～12（北東から）

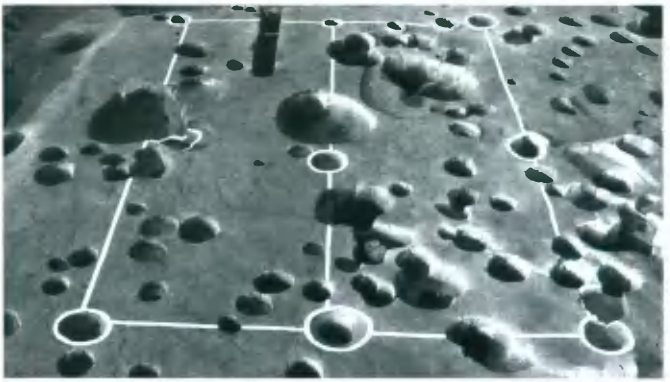
図版31



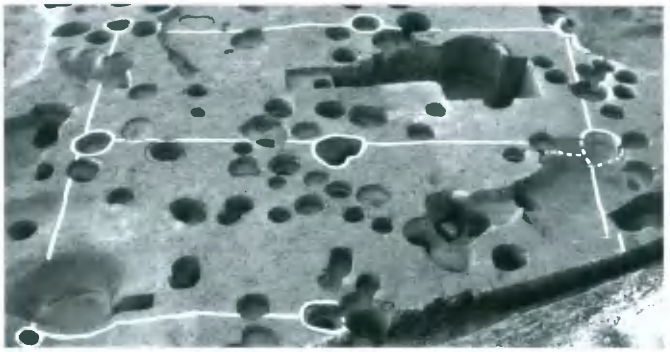
1．建物－15（南東から）



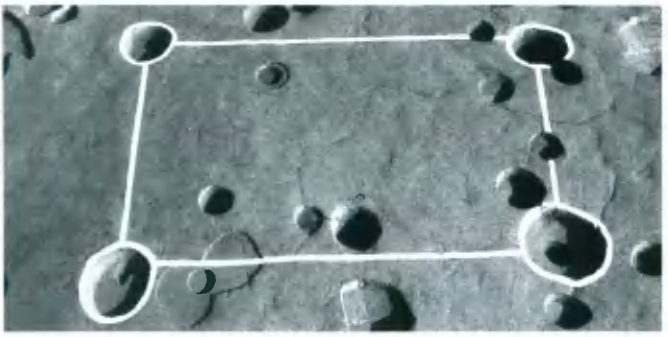
2．建物－18（東から）



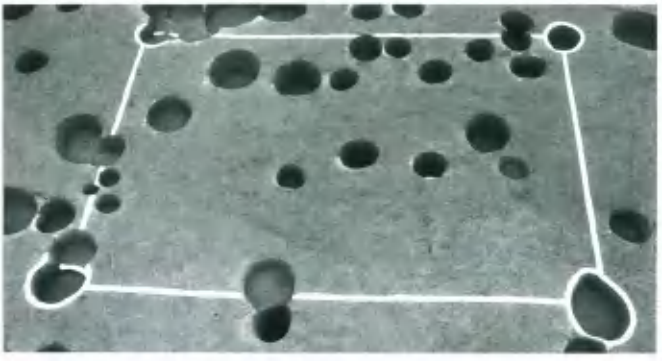
1．建物－6
（南から）



2．建物－8
（東から）



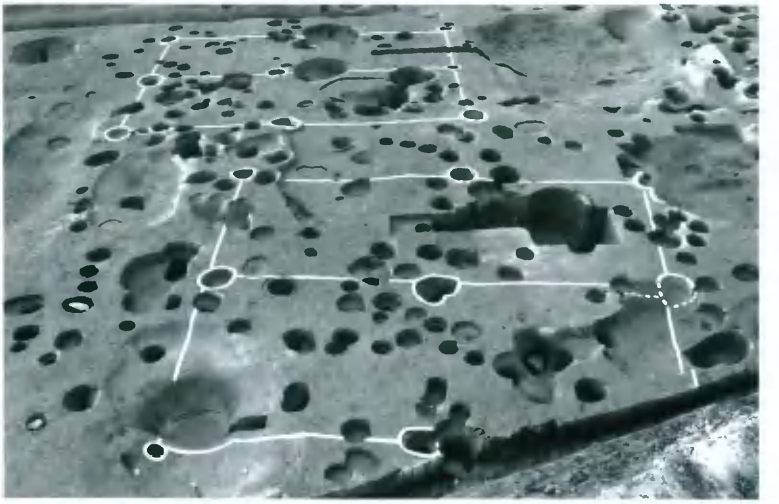
3．建物－14
（北東から）



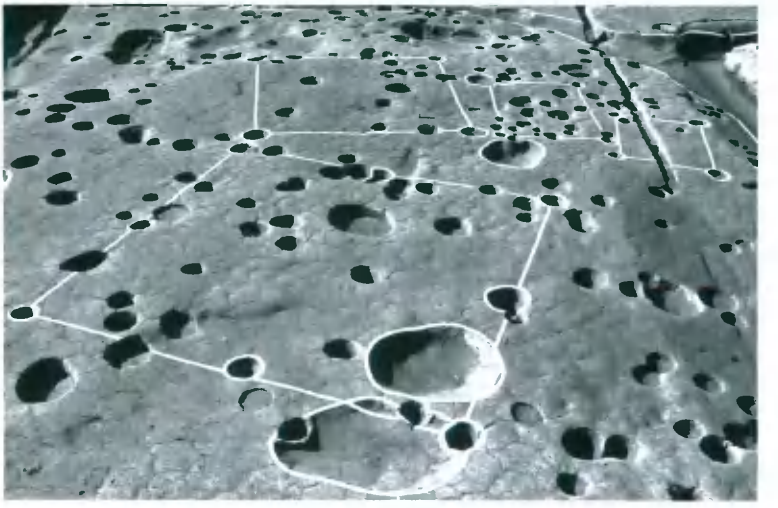
1．建物－21
（南から）

2．建物－24
（南東から）

3．建物－25
（南西から）

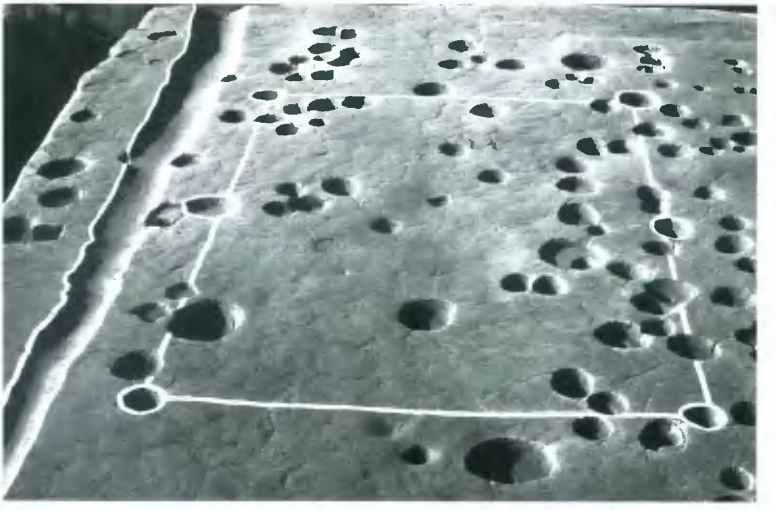


1．建物－6（上）・8（下）（東から）

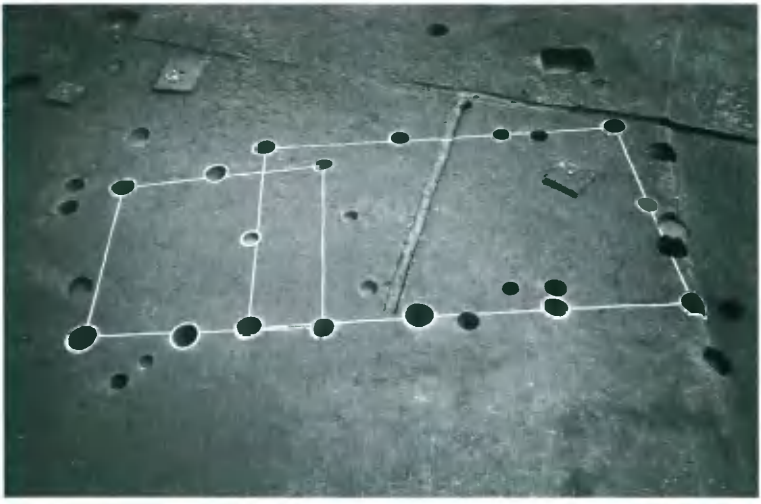


2．建物－15～18（北東から）

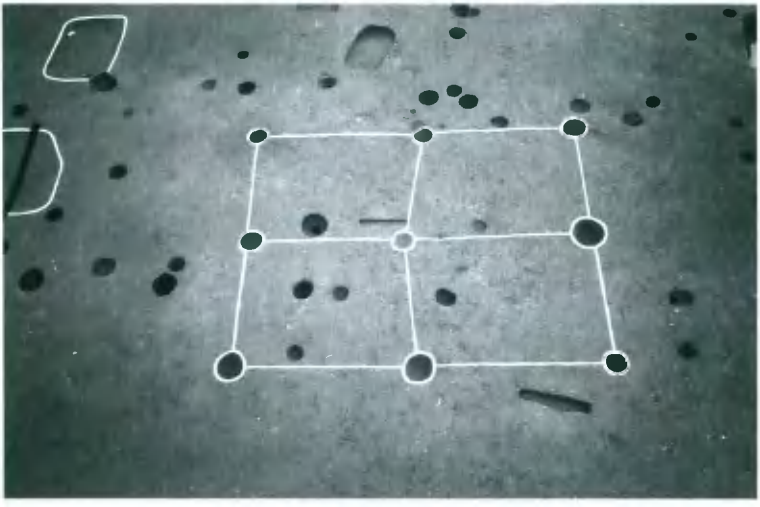
1．建物－6～8（東から）



2．建物－9（北東から）

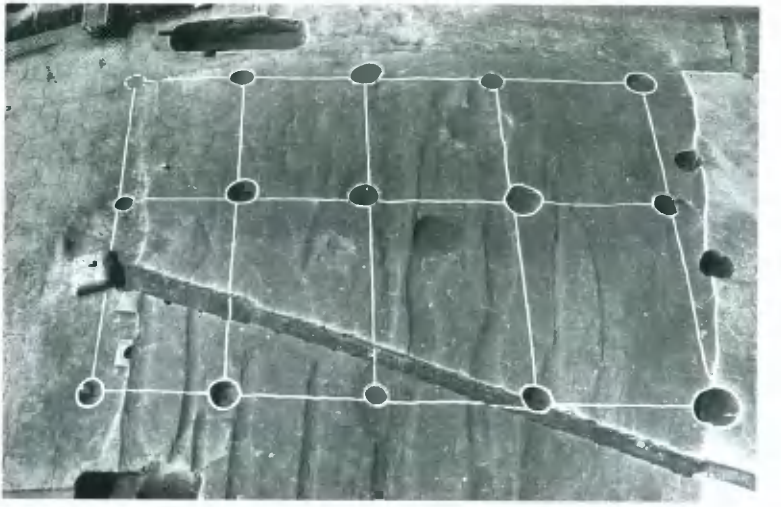


1．建物－29(左)・28(右)（北から）



2．建物－30（北から）

図版37



1．建物－27（南から）

2．建物－34(左)・35(右)，中世墓－19（北西から）

1．土壙－14（南から）

2．土壙－14（南東から）

図版39

1．土壙－15（南から）

2．土壙－18（東から）

3．土壙－27（東から）

1．土壙ー30（西から）

2．土壙ー30土層断面（東から）

図版41

1．土壙－32土層断面（西から）

2．同上掘り上げ後（西から）

1．土壙－43（南西から）

2．土壙－48（北西から）

1．土壙－53（北から）

2．井戸－1（南西から）

1．中世墓－1（北から）

2．中世墓－2（東から）

1．中世墓－3（北西から）

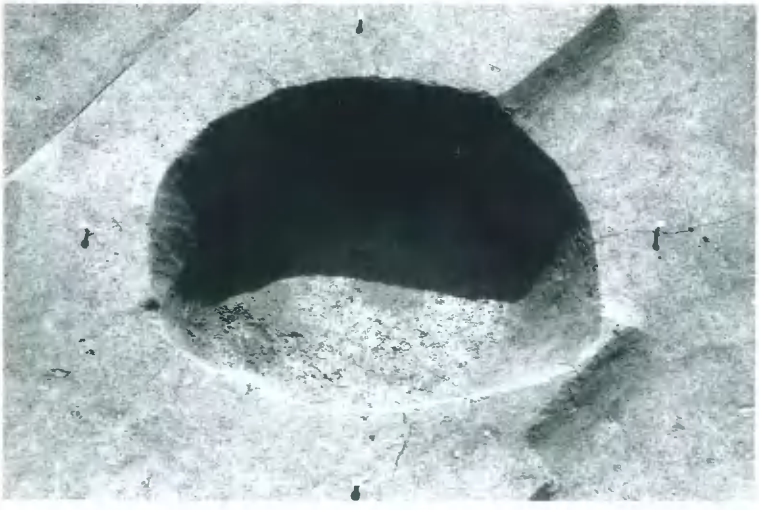
2．中世墓－4（南西から）

1．中世墓－5（南西から）

2．中世墓－6（南西から）

図版47

1．中世墓－7（北東から）



2．同完掘（北東から）

1．中世墓－8（北から）

2．土壙－7（中世墓？）（西から）

図版49

1．中世墓－11（南西から）

2．中世墓－12（北から）

1．中世墓－14（東から）

2．同上下部（東から）

図版51

1．中世墓－15（南東から）

2．中世墓－16（西から）

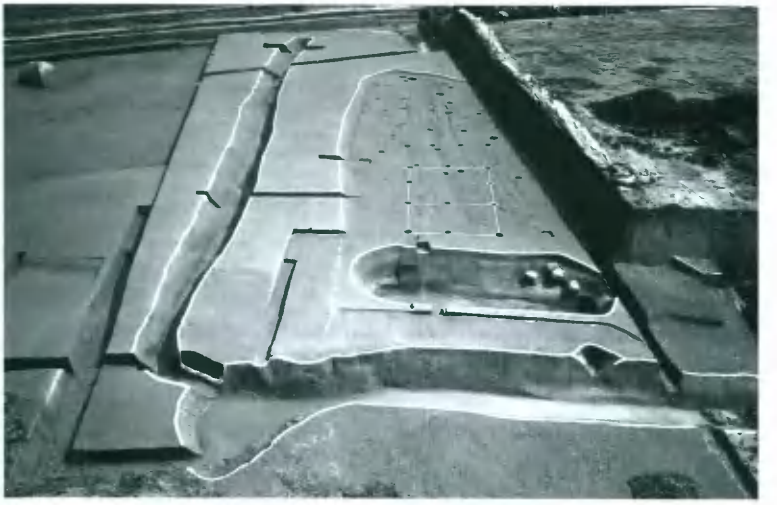
1．中世墓－17（北西から）

2．中世墓－18（南東から）

図版53

1．溝－2（北から）

2．同上断面（北から）



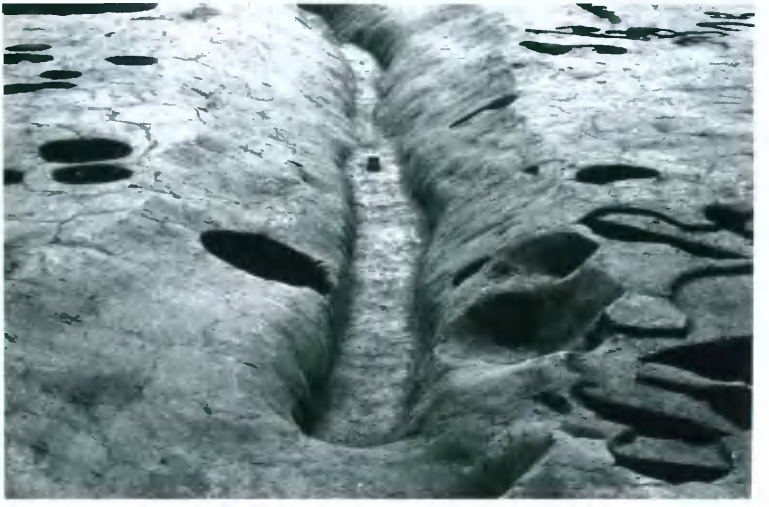
1．4a区南東部全景（西から）

2．4a区堀状遺構土層断面（南から）

1．溝－3（手前）・9（向こう側）（北から）

2．溝－3土層断面（南西から）

1．溝－11（北から）



2．溝－11（北東から）

図版57

1．溝－12（南から）

2．溝－9（南西から）

1．溝ー10（南西から）

2．溝ー3（南東から）

図版59

1．溝－9断面（南から）

2．溝－9断面（南から）

3．溝－9断面（東から）

4．溝－11断面（北から）

5．溝－11断面（西から）

6．溝－12断面（東から）

7．溝－12断面（東から）

8．溝－12断面（東から）

1．土器だまり－5（北東から）

2．土器だまり－5（南西から）

図版61

1．炉壁(？)出土状況（東から）

2．5区土層断面（南西から）

1．4a区古代～中世水田畦畔（北から）

2．4b東区古代～中世水田畦畔（西から）

図版63

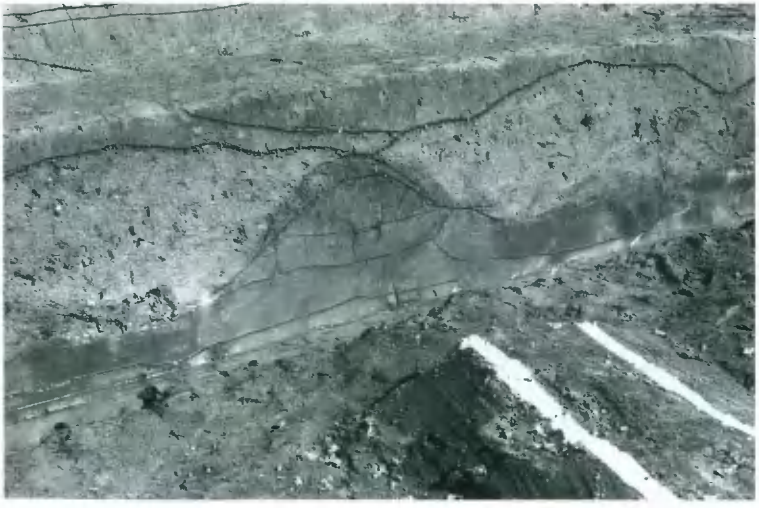
1．4a区古代水田畦畔（北から）

2．6・7区古代～中世水田畦畔（南から）

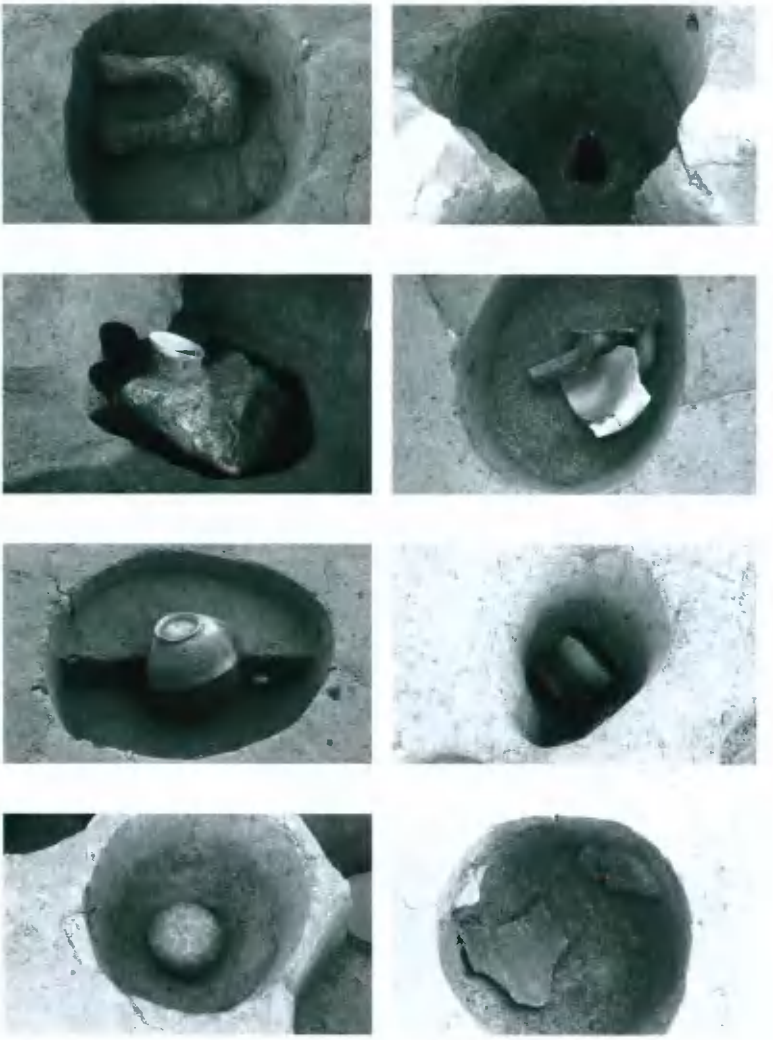
1．10区島状高まり（西から）

2．10区島状高まりから水田にかけての土層断面（東壁）（西から）

1．10区古代水田畦畔（南から）



2．10区同水田畦畔土層断面（東壁）（西から）



5区土壙、柱穴内遺物出土状況

中世墓－1（312）・5出土遺物

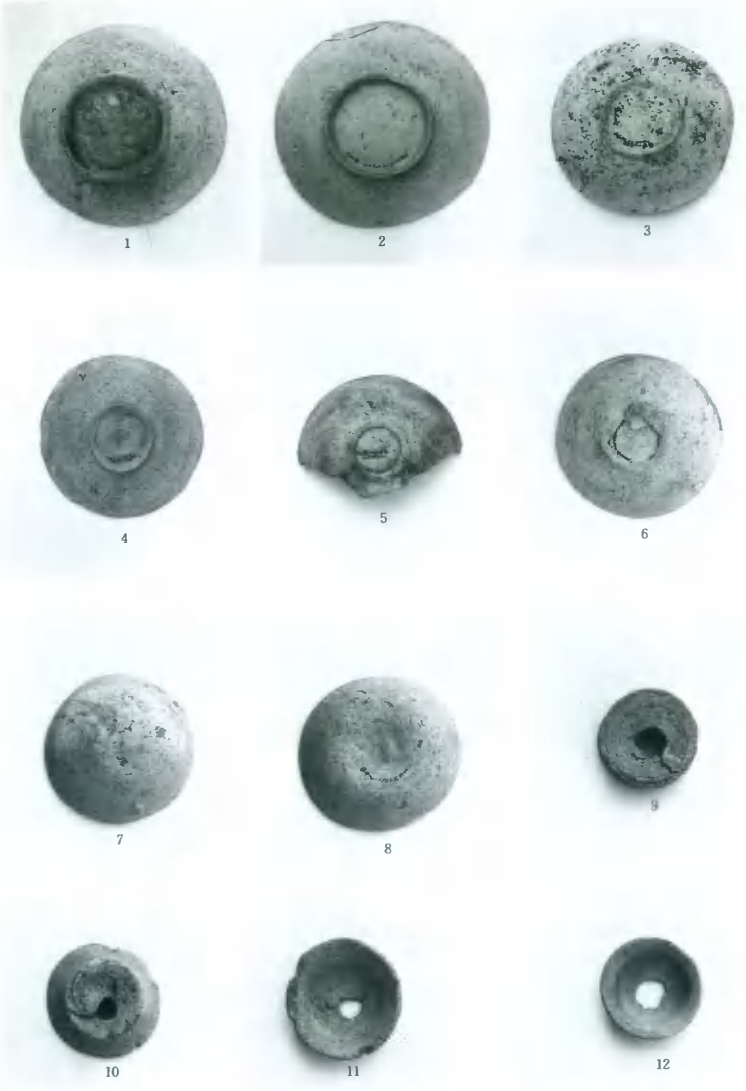
出土遺物(1)

図版69

出土遺物(2)

出土遺物(3)

図版71



5区出土遺物(1)

663

615

292

664

125

203

672

247

5区出土遺物(2)

図版73

M13

S45

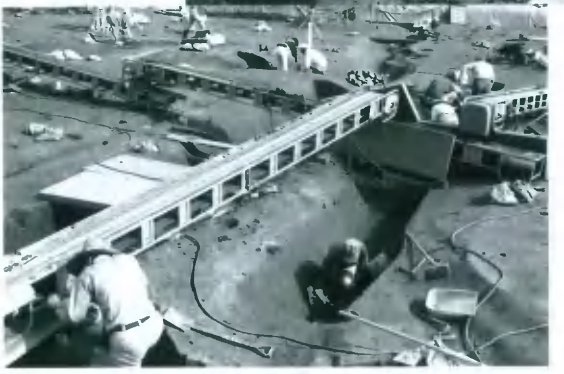
S41

S39

S 6

5 区出土遺物(3)（鉄製品、石製品）

図版74



土箪山調査区調査風景

図版75

1．丸田Ⅰ区全景（南から）

2．丸田Ⅰ区近世水田（南西から）

1．丸田Ⅰ区微高地部分（近世遺構群：北から）

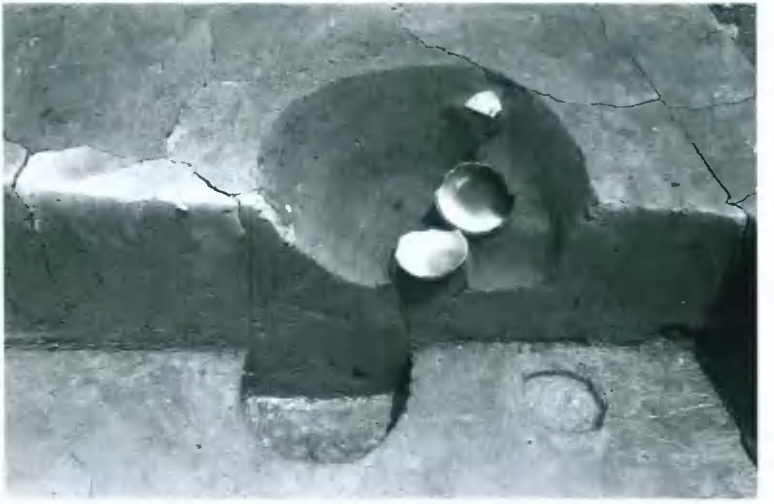
2．丸田Ⅰ区微高地上中世遺構検出状況（北から）

図版77

1．丸田Ⅰ区建物一1（南西から）

2．丸田Ⅰ区南壁土層断面（北から）

1．丸田Ⅰ区土壙－1（南から）



2．丸田Ⅰ区土壙－2（南から）

1．丸田Ⅰ区溝－1上面土器出土状態（西から）

2．丸田Ⅰ区溝－1（北西から）

1．丸田ＩＥ区全景（北から）

2．丸田ＩＥ区低位部近世水田（北から）

1．丸田ＩＥ区微高地上中世遺構群（北から）

2．丸田ＩＥ区建物－２、溝－４・６、土壙－５～８付近（東から）

1．丸田ＩＥ区溝－３・５（北から）

2．丸田ＩＥ区溝－２内硯出土状態（北から）

1．丸田ＩＥ区集石遺構－１（北西から）

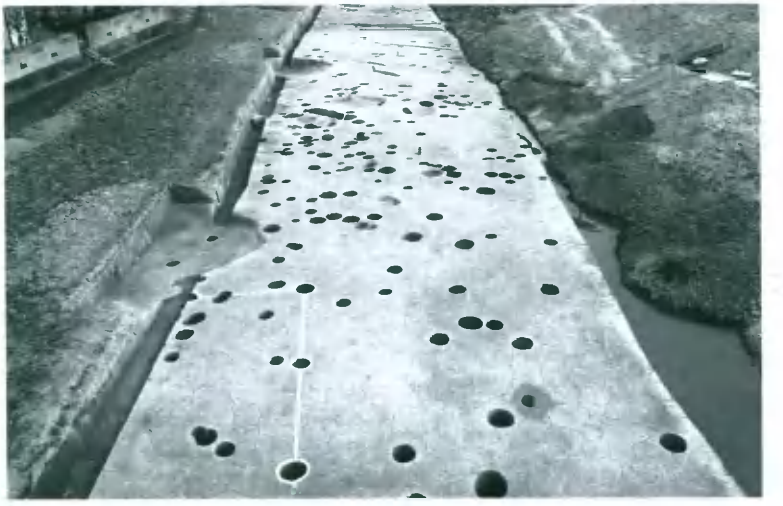
2．丸田ＩＥ区集石遺構－１遺物出土状況（西から）

1．丸田ＩE区土壙墓－1（北西から）

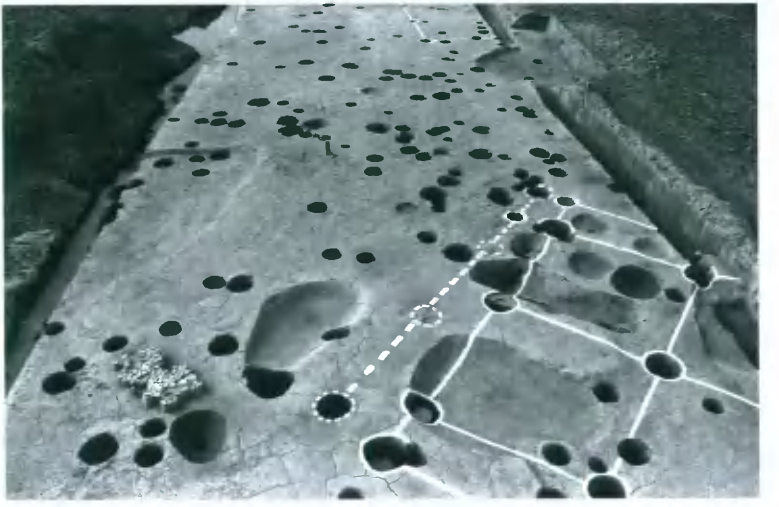
2．丸田ＩE区土壙－6（西から）

1．丸田ＩＥ区土壙墓－２（南から）

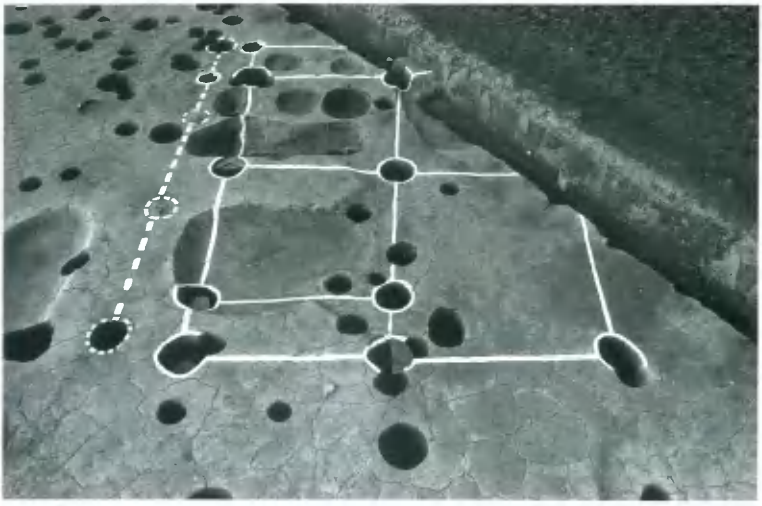
2．丸田ＩＥ区土壙墓－２頭部付近（東から）



1．丸田Ⅰ農区北半遺構群（北から）

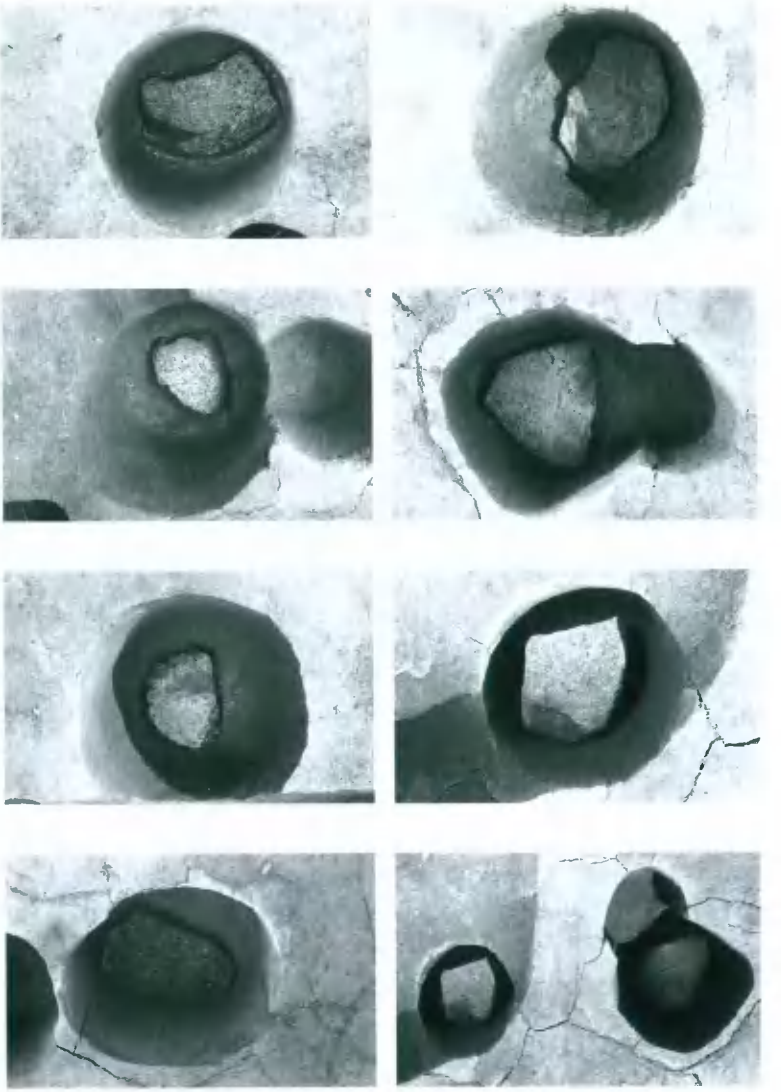


2．丸田Ⅰ農区建物－3、土壙－23など（南から）



1．丸田Ⅰ農区建物－3（南西から）

2．丸田Ⅰ農区建物－3柱穴土層断面（西から）



丸田Ⅰ農区建物－3柱穴

1．丸田Ⅰ農区土壙－12（南から）

2．丸田Ⅰ農区土壙－12完掘状況（西から）

1．丸田Ⅰ農区集石遺構－2（南から）

2．丸田Ⅰ農区柱穴内亀山焼捏鉢出土状態（西から）

1．丸田Ⅰ農区土壙－22（南から）

2．丸田Ⅰ農区土壙－16（南から）

1．丸田Ⅰ農区南半遺構群（北から）

2．丸田Ⅰ農区土壙－27（西から）

1．丸田Ⅰ農区土壙－29（南から）

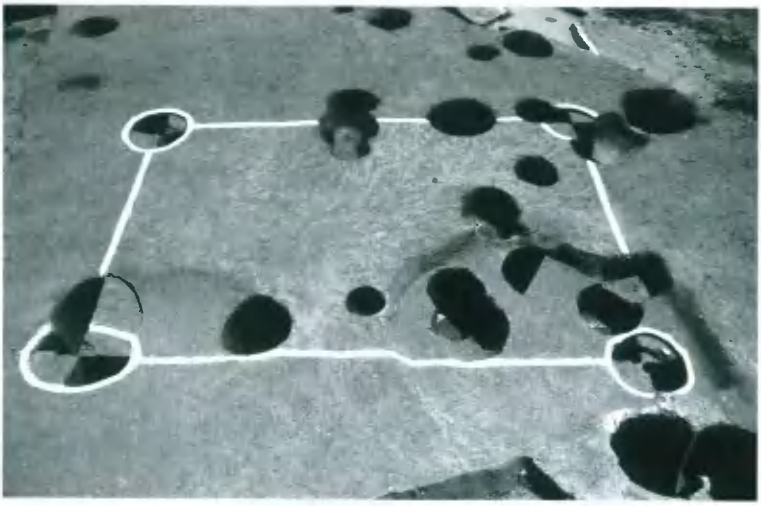
2．丸田Ⅰ農区土壙－30～32（東から）

1．丸田Ⅱ区全景（西から）

2．丸田Ⅱ区低位部近世水田（東から）

1．丸田Ⅱ区微高地建物－6・7全景（北から）

2．丸田Ⅱ区建物－6・7、土壙－40付近（北西から）



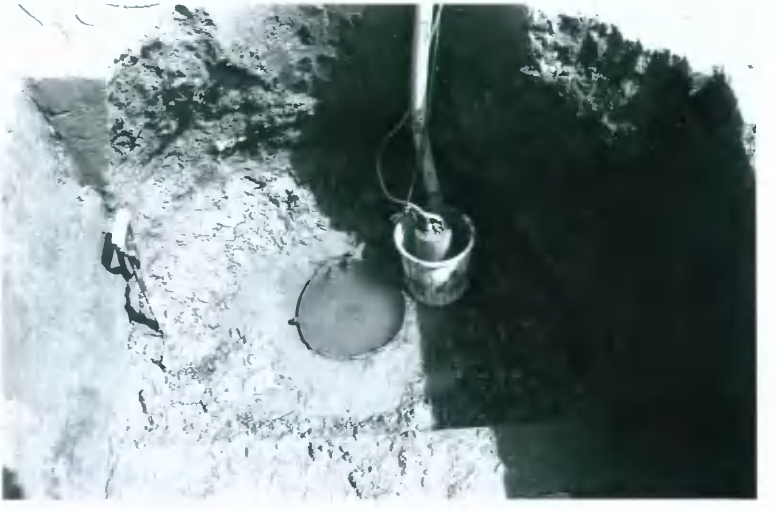
1．丸田Ⅱ区建物－8（北から）

2．丸田Ⅱ区建物－4、井戸－5付近（西から）

1．丸田Ⅱ区井戸－1断面（南西から）

2．丸田Ⅱ区井戸1－井底（南西から）

1．丸田Ⅱ区井戸－4断面（南から）



2．丸田Ⅱ区井戸－4井筒（南から）

1．丸田Ⅱ区井戸－4井筒据え付け状態（南から）

2．丸田Ⅱ区井戸－4井筒（曲物）

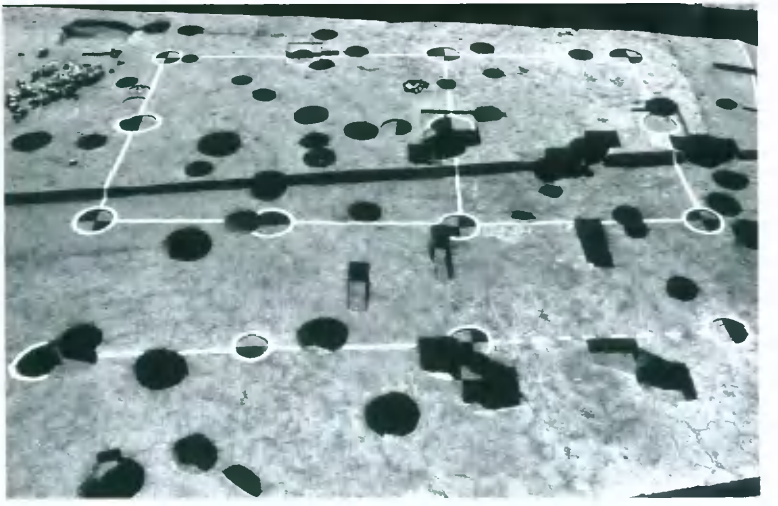
1．丸田Ⅱ区井戸－3断面（南から）

2．丸田Ⅱ区井戸－3完掘状態（南から）

図版101

1．丸田Ⅱ区土壙墓－3（西から）

2．丸田Ⅱ区土壙墓－3頭部付近遺物出土状態（東から）



1．丸田Ⅱ区建物－5、柱列付近（北から）

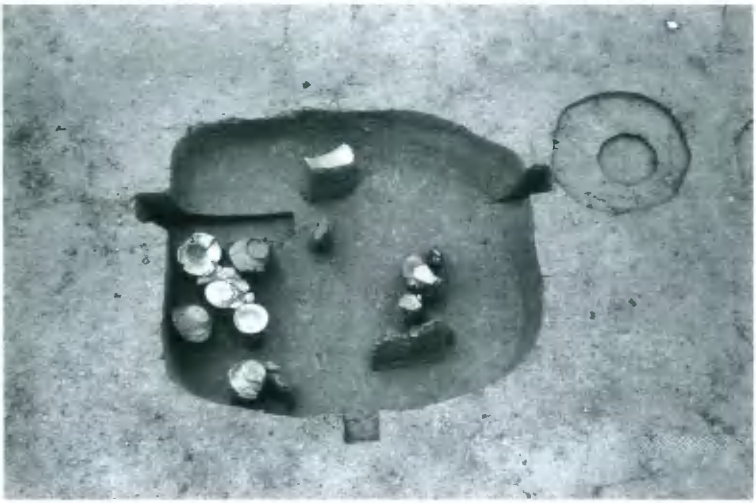
2．丸田Ⅱ区土壙－35（北から）

図版103

1．丸田Ⅱ区土壙－37、集石部分（西から）

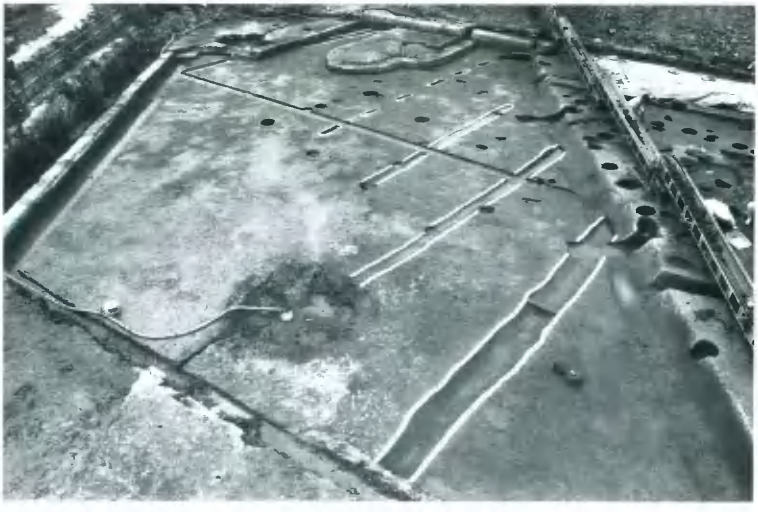
2．丸田Ⅱ区土壙－36（西から）

1．丸田Ⅱ区柱穴内（P934）鋤先出土状態（西から）



2．丸田Ⅱ区土壙－40（北から）

1．丸田Ⅱ区低位部と微高地境界部土層断面（南から）



2．丸田Ⅱ区低位部溝群（南から）

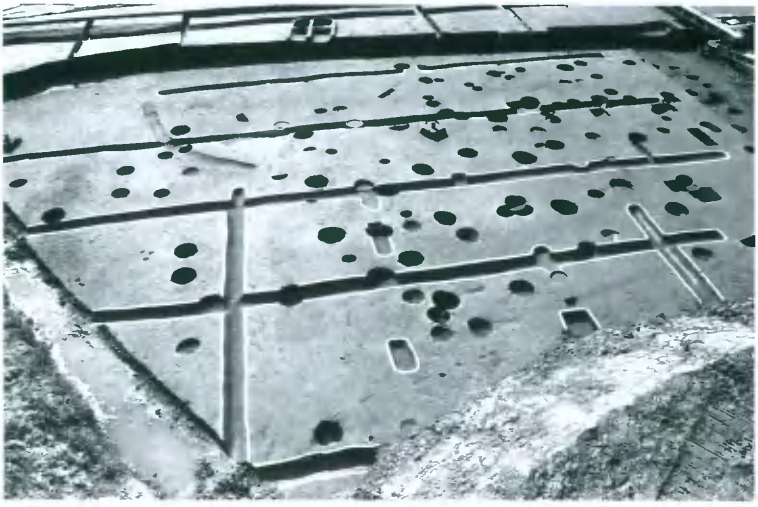
1．丸田Ⅱ区溝－1（北から）

2．丸田Ⅱ区北壁土層断面（南東から）

1．丸田Ⅱ区格子目状溝発掘風景（東から）

2．丸田Ⅱ区格子目状溝検出状態（北から）

1．丸田Ⅱ区格子目状溝断面（西から）

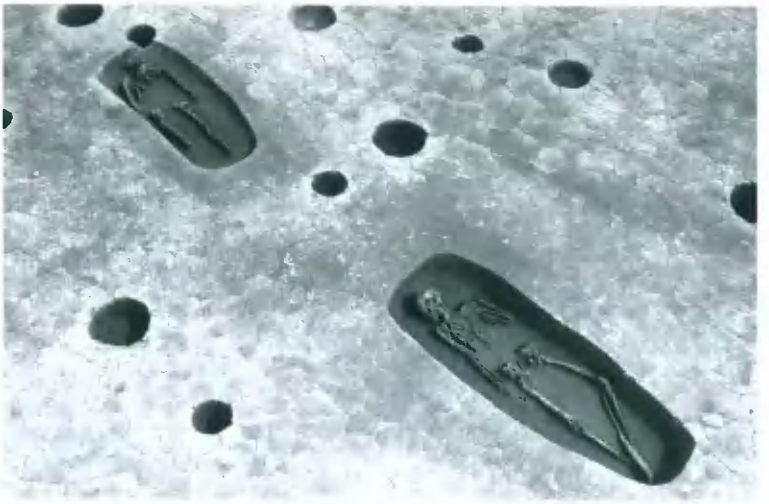


2．丸田Ⅱ区北半格子目状溝完掘状況（北から）

1．丸田Ⅲ区近世水田検出状況（北から）

2．丸田Ⅲ区中世建物群（北から）

図版110



1．丸田Ⅲ区土壙墓－3・4検出状況（北西から）

2．丸田Ⅲ区土壙墓－3（北から）

図版111

1．丸田Ⅲ区土壙墓－4（北から）

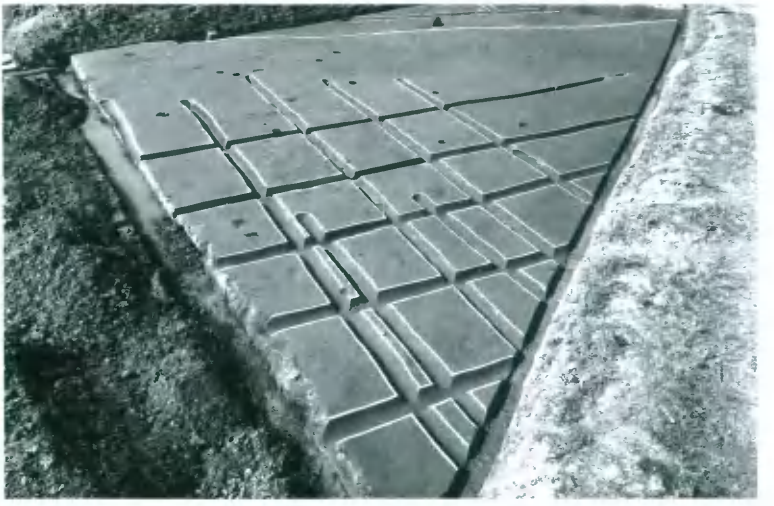
2．丸田Ⅲ区土壙墓－4刀子副葬状態（北から）

1．丸田Ⅲ区火葬墓（西から）

2．丸田Ⅲ区火葬墓人骨遺存状態（南東から）

1．丸田Ⅲ区土壙－41（集石土壙；北から）

2．丸田Ⅲ区低位部水田遺構（西から）



1．丸田Ⅲ区微高地上格子目状溝（東から）

2．丸田Ⅲ区微高地格子目状溝と低位部（北から）

図版115

1．丸田ⅣA区全景と近世水田（北から）

2．丸田ⅣA区南半中世遺構群（北から）

1．丸田ⅣA区南土層断面（南から）

2．丸田ⅣA区柱穴内遺物出土状態（備前焼壺；西から）

図版117

1．丸田ⅣA区南端低位部陶馬出土状況（南から）

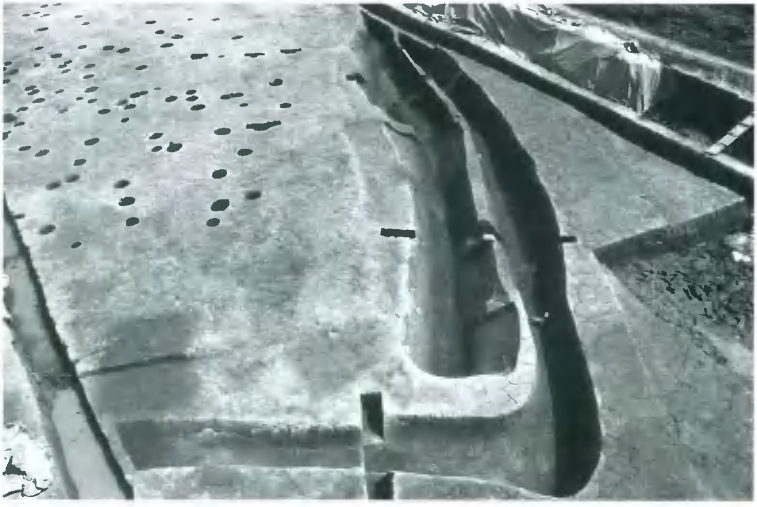
2．丸田ⅣA区陶馬（西から）

1．丸田ⅣA区西壁土層断面（北から）

2．丸田ⅣA区西壁土層断面（東から）

図版119

1．丸田ⅣA区溝ー19・20（東から）



2．丸田ⅣA区溝ー19・20（北から）

1．丸田ⅣA区溝－19・20共通断面（西から）

2．丸田ⅣA区溝－20断面（西から）

1．丸田ⅣA区土壙墓－6発掘状況（西から）

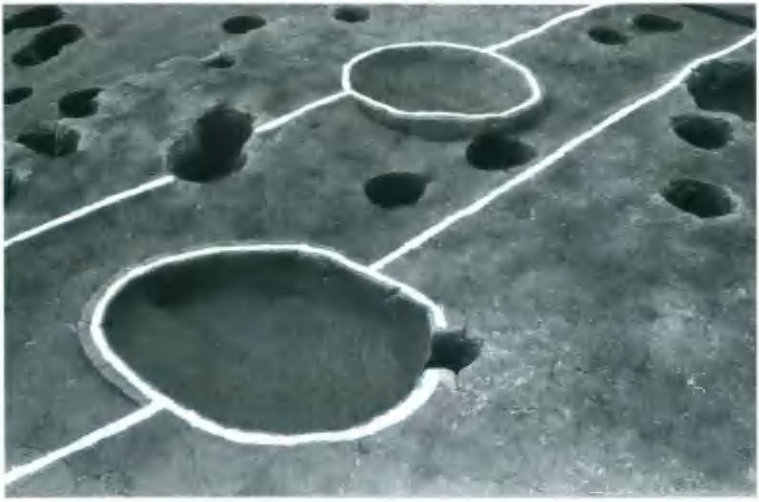
2．丸田ⅣA区土壙墓－6完掘状況（北西から）

1．丸田ⅣA区土壙墓－6頭骨遺存状態（北西から）

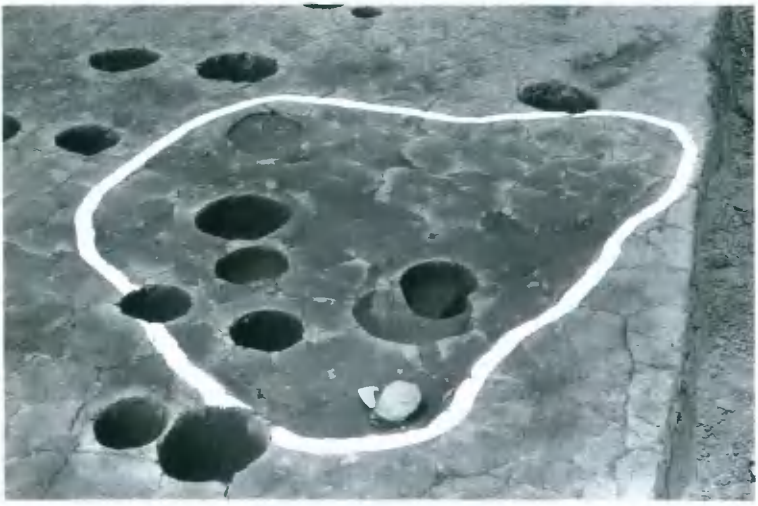
2．丸田ⅣA区土壙墓－6刀子出土状態（南東から）

1．丸田ⅣA区土壙墓－6副葬鍛冶道具一括出土状況（南東から）

2．丸田ⅣA区土壙墓－6副葬鍛冶道具（金鎚・鉄鉗など；南東から）



1．丸田ⅣA区土壙－47・48（西から）



2．丸田ⅣA区土壙－49（西から）

1．丸田ⅣA区土壙－51（西から）

2．丸田ⅣA区鍛冶炉－1（左）と集石遺構－4（西から）

1．丸田ⅣA区集石遺構－3（西から）

2．丸田ⅣA区集石遺構－3遺物出土状態（南から）

図版127

1．丸田ⅣA区土壙－44（南から）

2．丸田ⅣA区土壙－44遺物出土状態（黒色土器など；南西から）

1．丸田ⅣA区土壙－44遺物出土状態（北から）

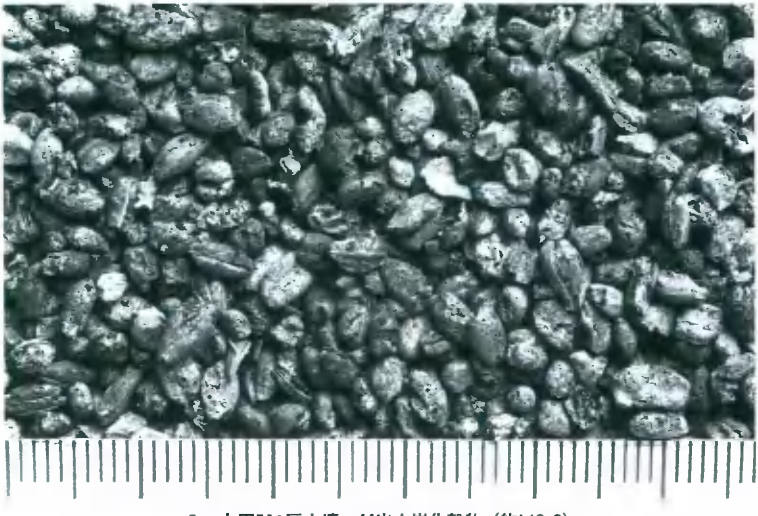
2．丸田ⅣA区土壙－44土師器皿一括出土状態（北西から）

図版129

1．丸田ⅣA区土壙－44全景と獣骨（矢印）（北から）

2．丸田ⅣA区土壙－44獣骨出土状態（ウマ；北から）

1．丸田ⅣA区土壙－44出土炭化穀物



2．丸田ⅣA区土壙－44出土炭化穀物（約×2.3）

図版131

1．丸田ⅣA区土壙一44出土炭化物

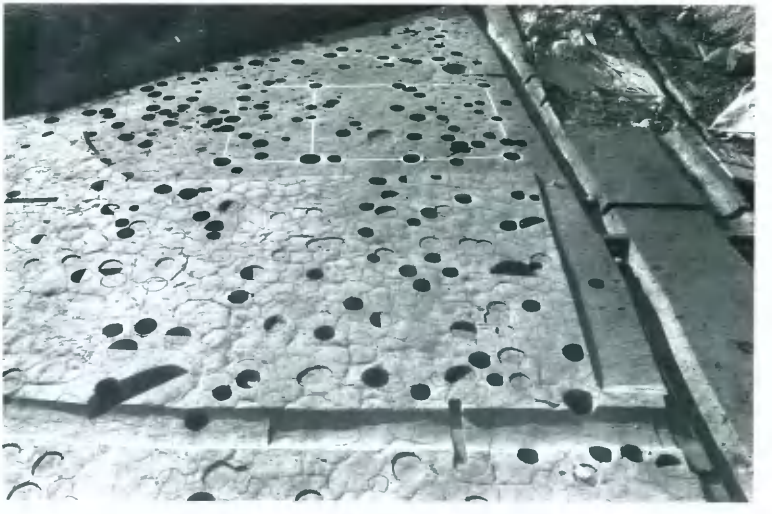
2．丸田ⅣA区土壙一44出土炭化物拡大（約×２）

1．丸田ⅣA区柱穴からの平瓦出土状態（南から）

2．丸田ⅣA区溝一28獣骨出土状態（ウマ；西から）

図版133

1．丸田ⅣB区全景（北から）



2．丸田ⅣB区建物ー20・23、溝ー26（東から）

1．丸田ⅣB区北西辺調査風景（南東から）

2．丸田ⅣB区建物ー20、土壙ー26周辺（東から）

図版135

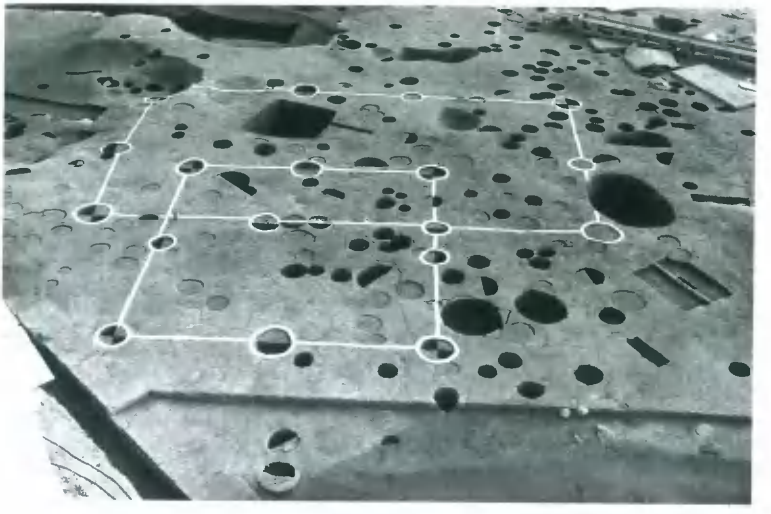
1．丸田ⅣB区溝－25（西から）

2．丸田ⅣB区溝－25（東から）

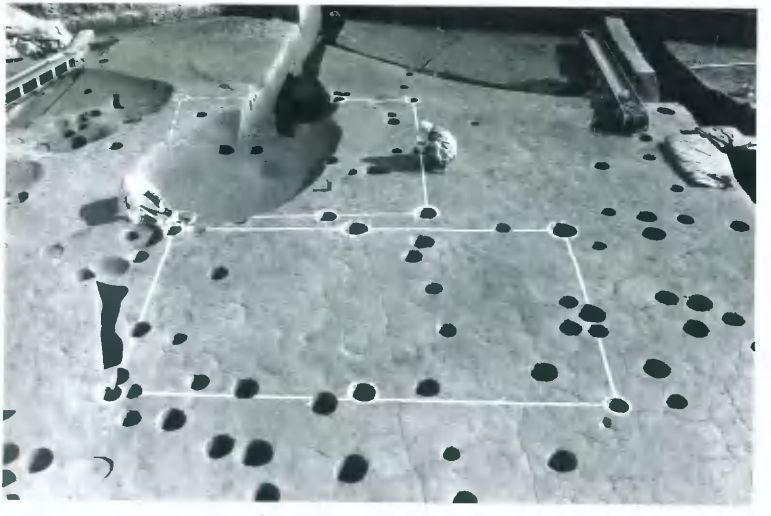
1．丸田ⅣB区溝一25土層断面（西から）

2．丸田ⅣB区南端低位部土層断面（西から）

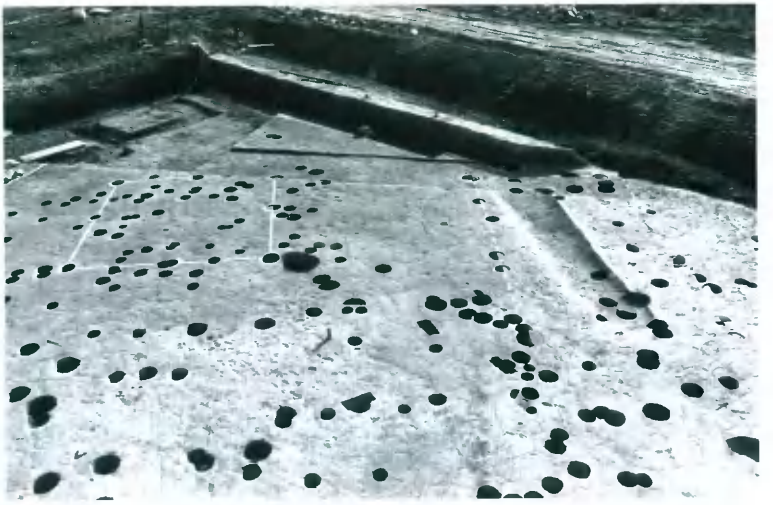
図版137



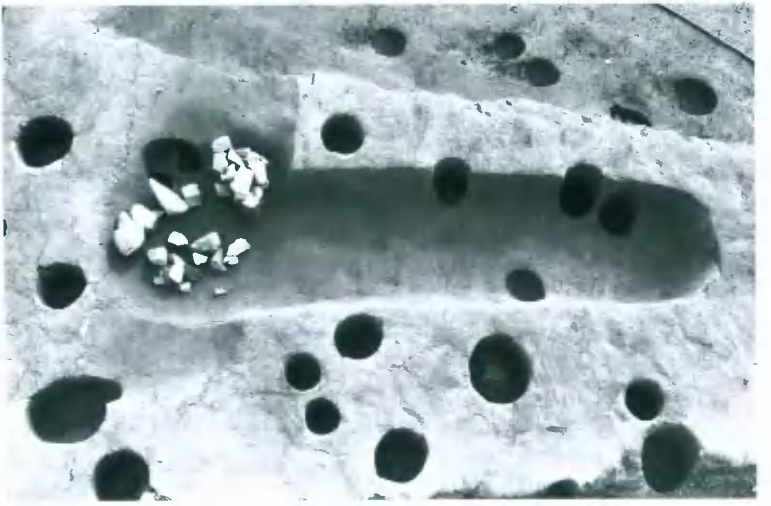
1．丸田ⅣB区建物一21・22（北から）



2．丸田ⅣB区建物一16・17（北から）

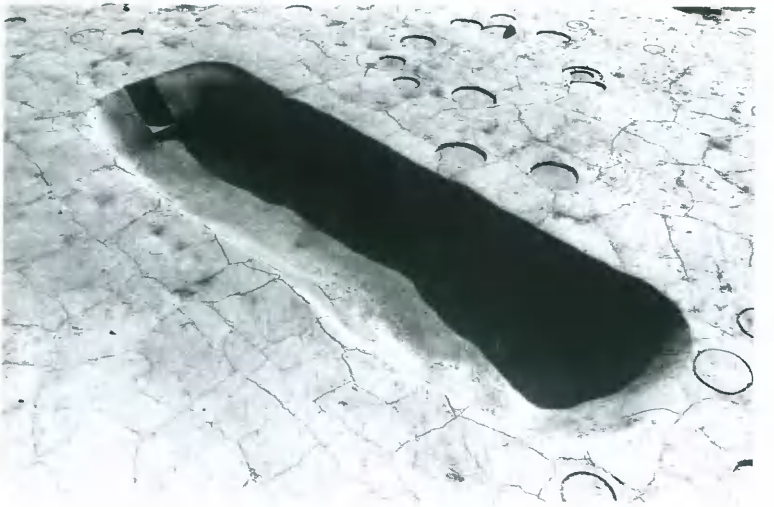


1．丸田ⅣB区建物一18・19、溝一27周辺（北から）



2．丸田ⅣB区土壙一88・89（北から）

図版139



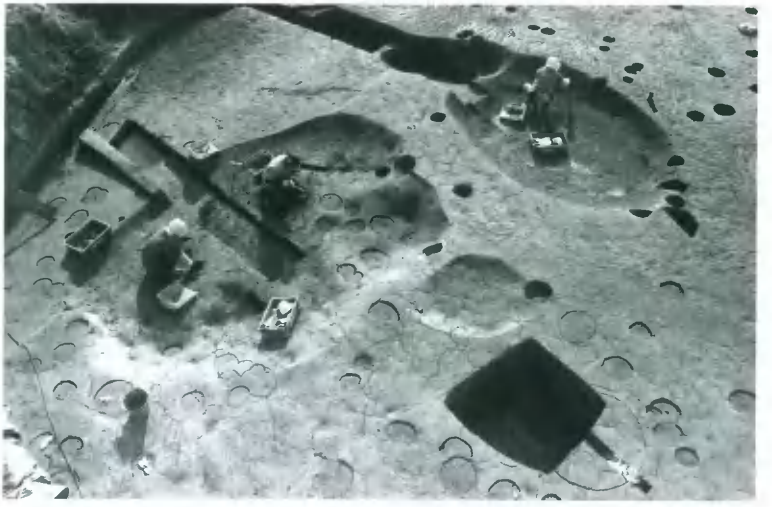
1．丸田ⅣB区土壙－60（西から）

2．丸田ⅣB区土壙－60土層断面（西から）

1．丸田ⅣB区集石遺構－4（西から）

2．丸田ⅣB区集石遺構－4内石臼出土状態（西から）

図版141



1．丸田ⅣB区土壙－68・70周辺（北東から）

2．丸田ⅣB区土壙－82（北から）

1．丸田ⅣB区土壙－96（東から）

2．丸田ⅣB区土壙－56（西から）

1．丸田ⅣB区溝－1上面遺物出土状態（西から）

2．丸田ⅣB区溝－1（西から）

1．丸田ⅣB区窪地状遺構（東から）

2．丸田ⅣB区窪地状遺構遺物出土状態（西から）

1．丸田ⅣB区微高地東斜面調査風景（南西から）

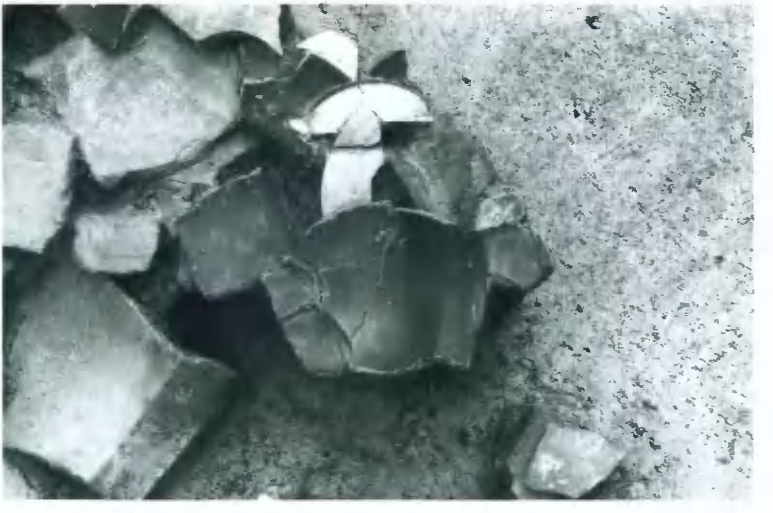
2．丸田ⅣB区微高地東斜面遺物出土状態（西から）

1．丸田ⅣB区東斜面堆積土層断面（南西から）

2．丸田ⅣB区東斜面堆積遺物出土状態（北から）

図版147

1．丸田ⅣB区東斜面堆積遺物集中部分（北から）

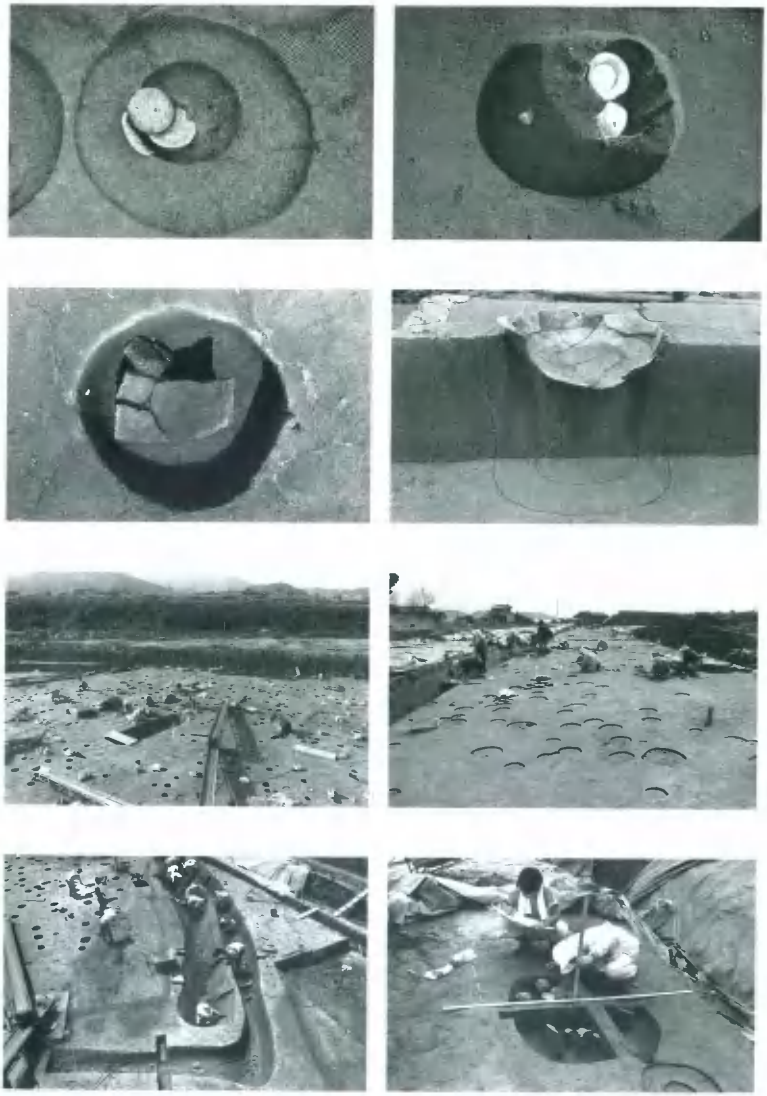


2．丸田ⅣB区東斜面土師器・黒色土器など（東から）

1．丸田ⅣB区染付皿出土状態（976～984）

2．丸田ⅣB区緡銭出土状態（M55）

図版149



丸田調査区柱穴内遺物出土状態・発掘風景

6

12

11

14

81

88

44

95

45

97

出土遺物(1)須恵器・土師器

図版151

108

134

150

151

152

153

154

155

174

185

185

186

219

187

出土遺物(2)土師器・陶器

226

232

256

233

255

出土遺物(3)土師器・黒色土器

図版153

262

262

263

264

271

268

272

279

270

307

308

275

309

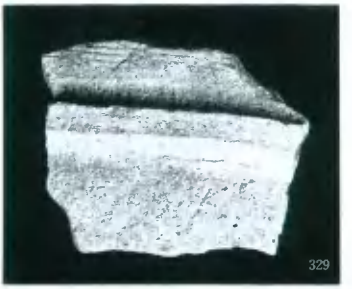
出土遺物(4)土師器・黒色土器

311

312

313

327


329

334

341

335

363

366

342

出土遺物(5)土師器・瓦器・円筒埴輪など

図版155

372

373

371

375

374

378

382

381

385

出土遺物(6)須恵器・土師器・墨書土器

出土遺物(7)須恵器・備前焼・土師器

図版157

448

481

504

505

出土遺物(8)陶馬・黒色土器・須恵器

507

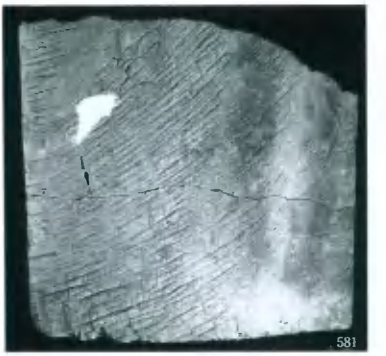
511

533・538・541・540

539

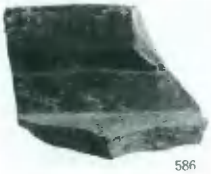
559～563

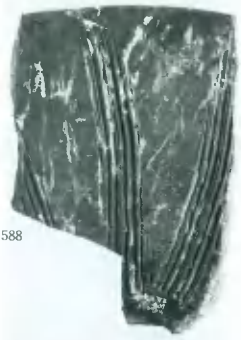
566～573

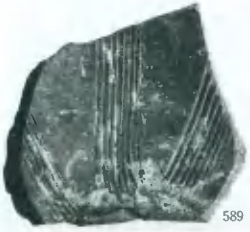

581

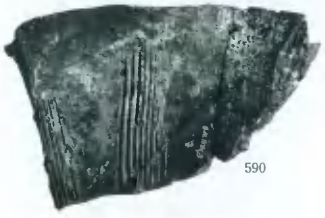
出土遺物(9)土師器・瓦

図版159


586


588


589


590

591

596

646

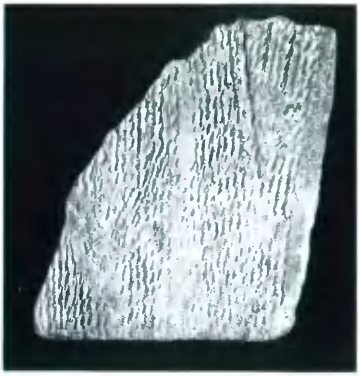
649

647

650

出土遺物(10)備前焼・黒色土器など

653


659

664

666

671

673

675

678

679

680

681

732

733

734

出土遺物(11)須恵器・土師器・黒色土器など

図版161

686

692

693

700

706

702

710

708

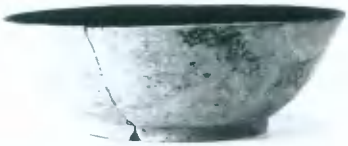
712

711

713

出土遺物(12)黒色土器

716

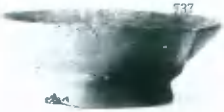


722

721

735

737



739

743

744

745

出土遺物(13)黒色土器・土師器

751

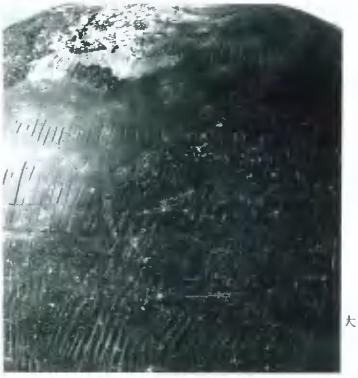
752

図版163

754

762

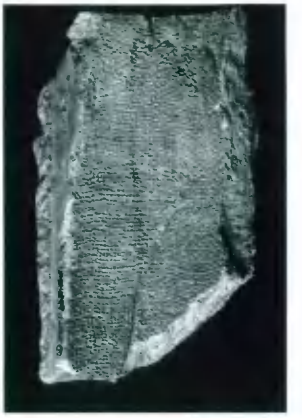
755


大

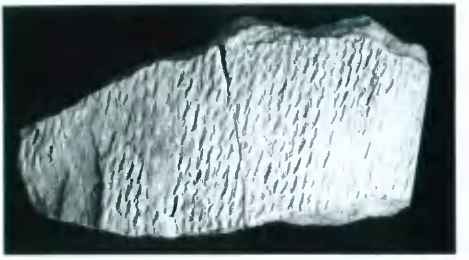
763

765

出土遺物(14)土師器・須恵器・転用硯



773



784

785

786

出土遺物(15)瓦

788

800

出土遺物(16)瓦・土師器・亀山焼

849

862

882

920

891

899

出土遺物17)土師器・墨書土器など

図版167

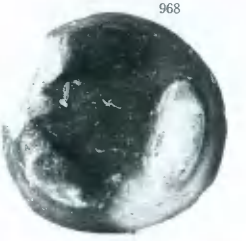
922

923

943

924

968



962

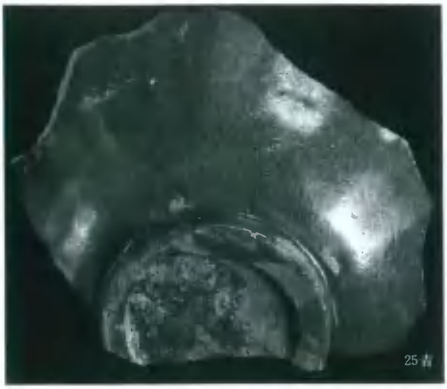
963

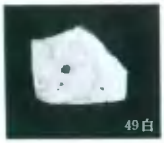
964

出土遺物(18)須恵器・土師器など

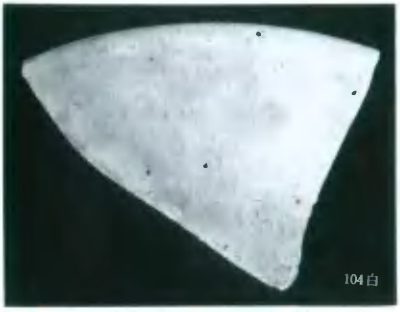
969

975

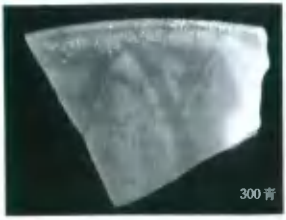

25青


49白

225緑


104白

235緑


300青

青…青磁
白…白磁
緑…緑釉陶器
灰…灰釉陶器

236緑

301青

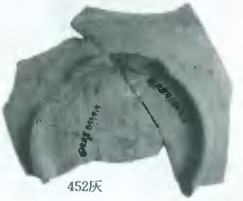
319白

出土遺物(19)陶磁器

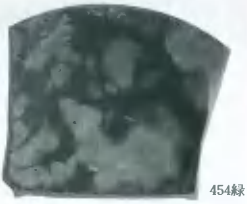
図版169

400白

449緑


452灰

451灰

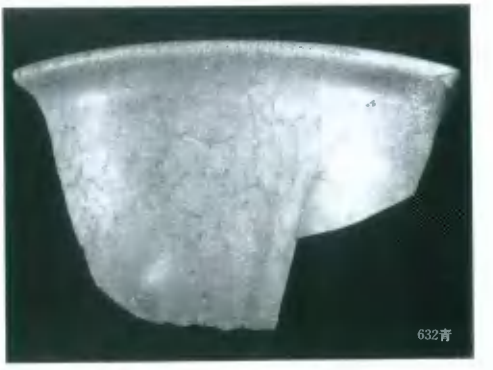

454緑

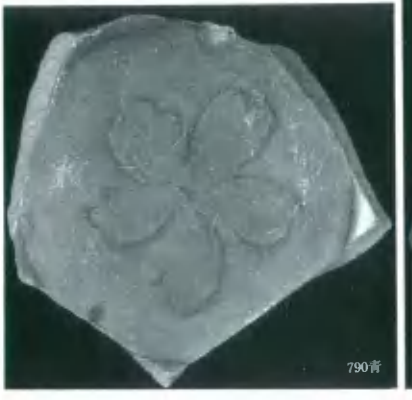
455緑

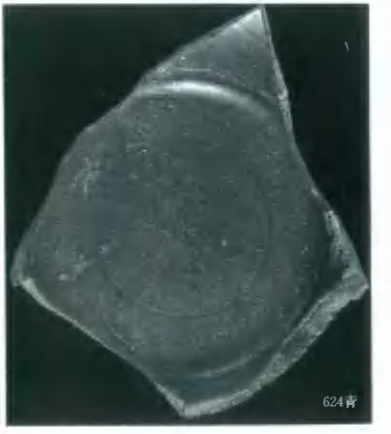
456緑

457灰

出土遺物(20)陶磁器







出土遺物(21)陶磁器

976～984（見込み）

976～984（外底部）

出土遺物(22)染付陶器（皿）

図版172

S2石錐

S1管玉

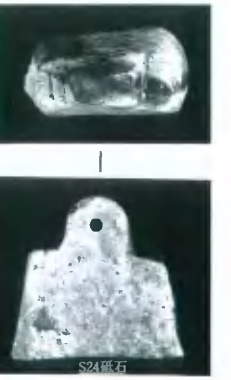
S12碁石

S5硯（表）

（裏）

S17砥石

S20砥石

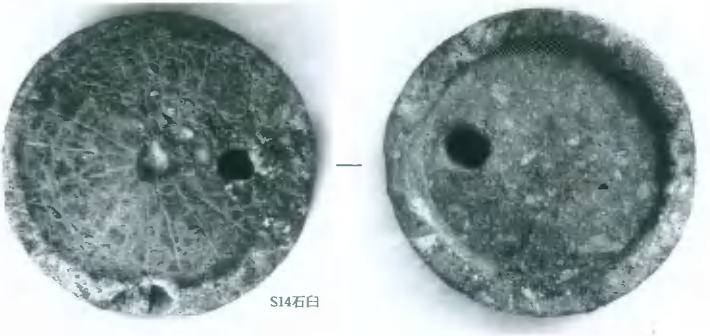


S24砥石

出土遺物(23)石製品

図版173

出土遺物(24)土壙墓－6出土鉄器



S14石臼

M14鋤先

M22鉈尾

M55緡銭

出土遺物(25)石製品・金属製品

図版175

1．野上田５区古代土手下部護岸施設（北から）

2．同断面（北から）

1．野上田５区護岸施設遺景（北から）

2．同杭としがらみ（南東から）

1．野上田5区古代河道と右岸土手（北から）

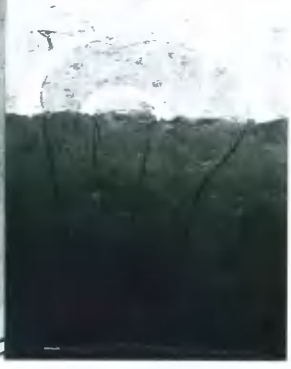
2．4区河道と土手（北から）

1．野上田６区河道斜面土器溜り（北から）

2．同近接（東から）

図版179

1．野上田５区建物－４（南から）



2．同柱穴（東から）

3．野上田５区南西部（南から）

4．同柱穴（南から）

1．野上田５区中世遺構（西から）

2．野上田６区溝－８（北から）

1．野上田5区土壙－3（西から）

2．土壙－4（西から）

3．土壙－5（東から）

1．野上田５区溝－４断面（西から）

2．５区溝－６断面（東から）

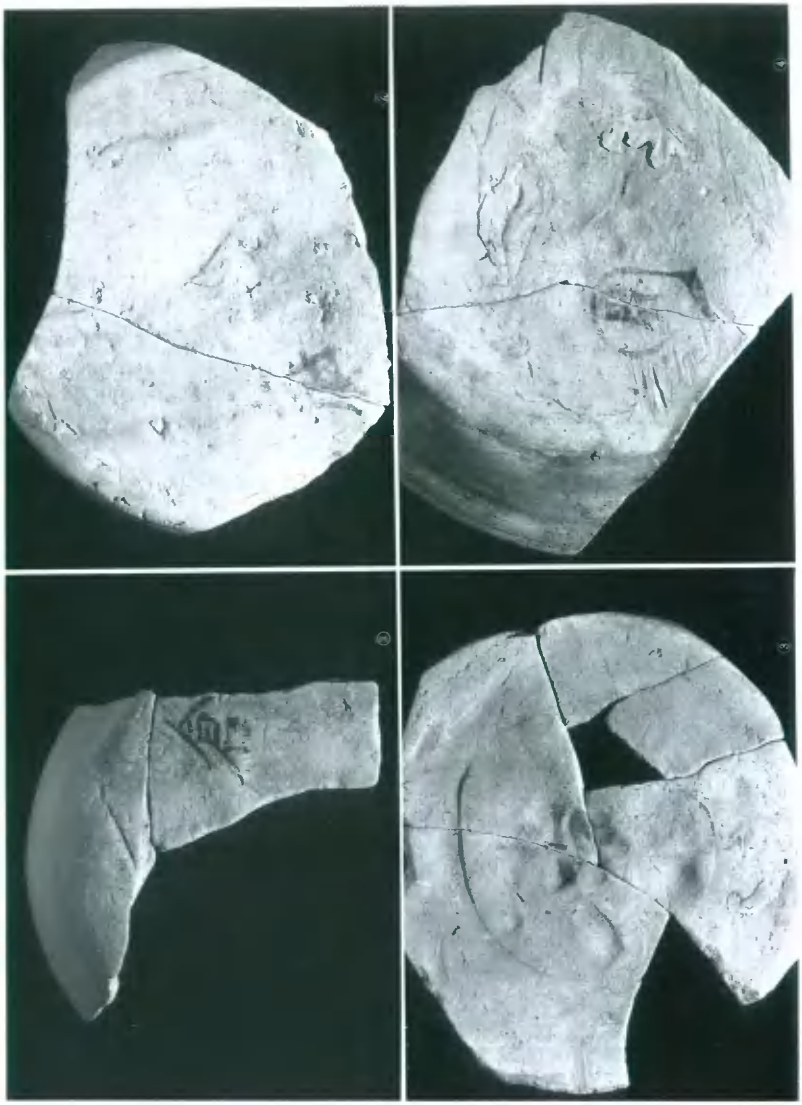
3．５区人骨出土状態

4．５区短刀出土状態

5．６区木舟出土状態

6．６区ひしゃく出土状態

野上田６区出土古代遺物（浄瓶．緑釉陶器・黒色土器・土師器）

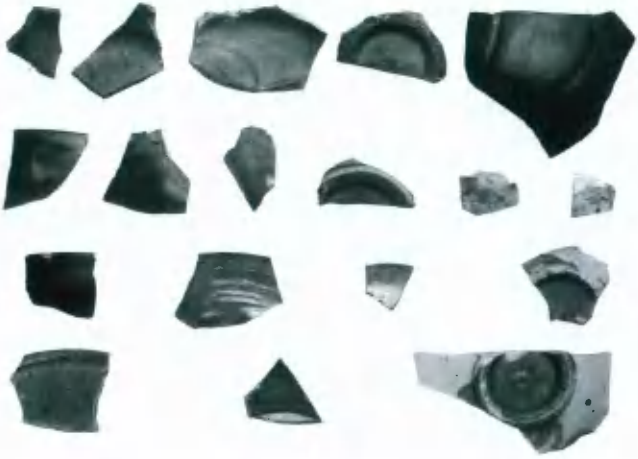


野上田6区土器溜り出土墨書土器　①倉②上厨③吉④不明

1．野上田6区出土墨書曲物

2．赤外線反射による撮影

1．野上田１～６区出土白磁



2．同青磁・国産陶磁器

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　90
山陽自動車道建設に伴う発掘調査
9
（付編・図版）
１９９４年３月20日 印 刷
１９９４年３月31日 発 行
編集　岡山県古代吉備文化財センター
発行　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
　　岡山県教育委員会
印刷　サンコー印刷株式会社